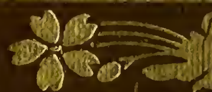
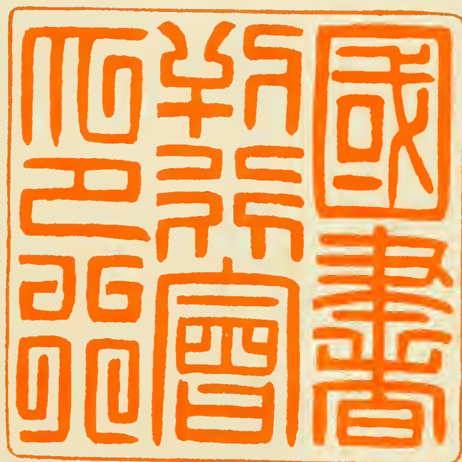


擬物語





近世文藝叢書第七



近世文藝叢書第七　擬物語

緒言

一、本編には、古物語、草子等に擬して戯作したるもの八種十九卷を收め、更に參考の料として、古物語の梗概を記したるもの四種廿二卷を補載せり。

一、仁勢物語二卷　伊勢物語に擬したる戯作にして、古來烏丸光廣作といへど確ならず。寛永正保頃の梓行なり。

一、伊勢物語ひら言葉四卷　一名を業平昔物語といひ、題名の如く伊勢物語を俗語に譯したるものにして延寶六年の梓行なり。譯者紀暫計は美濃大垣の人とのみにて、其傳詳かならず。

一、仁勢物語通補抄一卷　江戸風俗の雑事を、伊勢物語に擬して述べたるものにして、天明四年の梓行なり。著者志水燕十は江戸の

人、通稱を鈴木庄之助といひ、根津に住せしが、後罪を蒙り亡命して終る處を知らずといふ。

一、おさな源氏十巻　源氏物語の梗概を婦女子の爲に記せしものにして、野々口立圃の撰なり。立圃は雛屋庄左衛門と稱し、京都の人、俳諧及繪畫をよくす。延寶九年九月三十日歿す。歳七十一。此書巻末に初春松會開版とあるのみにして、刊行年代を記さゞれど、寛文年間の梓行たるや疑ひなし。

一、紅白源氏物語六巻　寶永四年江戸版、梅翁の撰なり。こも亦源氏物語紅葉の賀花の宴二帖の梗概を記したるものなれども、流石に浮世草紙全盛の際に出でしものなれば、よね大じんなどの流行詞を用ひ、其文章亦八文字屋の流を汲みたり。此書後增補して若草源氏と改題せり。

一、尤の雙紙二巻　寛永十一年版。枕草紙に擬したるものにして、擬

物語草子中最も古きものゝ一なり。著者詳かならざれども、足利時代の作なるべし。

一、おちくぼ物語二卷　一名を小おちくぼといふ。おちくぼ物語の梗概を記したるものにして、萬治二年の開版なり。

一、犬方丈記一卷　天和二年の梓行にして、延寶年間諸國飢饉の狀況を、方丈記に擬して述べたるもの。作者今長明とあれど、何人なりや詳かならず。

一、寬濶平家物語六卷　平家物語に擬したる浮世草紙にして、作者の署名なきも、江島其積の筆なるべし。寶永七年八文字屋の開版なり。

一、吉原つれ〳〵草五卷　江戶の花街及戲場其他の風俗をつれづれ草に擬して述べたるものにして、結城屋來示の戲作なりといふ。書中正德年間に述作せし證あり。

一、新つれ〴〵草一卷　こも亦江戸烟華場裏の風俗を、つれ〴〵草に擬して記したるものにして、平賀鳩溪作との傳說あれど、遽に信じ難し。されど寶曆明和の頃の作たること論なし。

一、茶人つれ〴〵草一卷　つれ〴〵草に擬して茶人の雅俗を述べたるものにして、作者並に刊年ともに詳ならざれども、想ふに化政度の作なるべし。

明治四十四年八月

校訂者識

近世文藝叢書第七　擬物語

目次

目次終

近世文藝叢書第七

擬物語

仁勢物語上

おかしおとこ、ほうかぶりして奈良の京かすがのさとへ、酒のみにいきたり、そのさとにいとなまぐさき魚、はらかといふありけり、此男かふてみにけり、おもほえずふるぎんちやくに、いとはしたせにもあらざりければ、心地まどひにけり、おとこのきたりける、かりきるものをぬぎて、魚のあたひにやる、その男しふぞめのきるものをなむきたりける、

　春日野のさかなにぬぎしかりぎもの
　　さけのみたればさむさしられず

となむ、またつぎてのみけり、酔ておもしろきことゞもやおもひけん、

　みちすがらしどろもぢずりあしもとは
　　みだれそめにしわれならざけに

といふ歌のこゝろばへなり、むかし人は、かくいらちたるのみやうをなんしける、

おかし男ありけり、ならの京ははなれ、この京はまだやどもさだまらざりけるときに、西の京にて女をもちけり、その女世人にはをとれりけり、その人かたちよりは心なんこはかりけり、人のやうにもあらざりけらし、それをかの男、うちものかたらひて、いかゞおもひけん、時は彌生の朔日雨しよふるによめる、

　おきもせずねもせでよるもまたひるも
　　めうな顔とてながめくらしつ

おかし男ありけり、ひざうしける女のもゝに、ひせんかさといふものをやみて、

　おじやるならむしろのうへにねもしなむ
　　ひせんかさにはふたをしつゝも

二でうのうすべりのまだいでこで、たゝみやにをきけるときの事なり、

おかし東の五でうに、あふぎやのかゝわづらふありけり、にしの洞院にくすし有けり、それはほん道にはあらで、はりにこゝろふかゝりけるゆへに、行とふら

ひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかとはれにけり、はれどころはきけど、人のみるべき所にもあらざりければ、なをうしとおもひつゝなむありける、またのとしの正月には、目とはなとの間に出てはれて、たちてみ、ゐてみ、みれどこぞにゝるべくもあらず、うちわらひてあばらぼねもいたきに、つらのゆがむまでわらひて、こぞをおもひ出でよめる、

つらやあらぬはなやむかしのはなゝらぬ
わが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほの〴〵とあくるに、なく〳〵おきにけり、

おかし男有けり、名人の碁打へ石なをされにいきけり、大身なる所なれば、たび〴〵もえうたで、わらつとなどにふみやり、朔日せつくにかよひけり、人より下手にもあらねど、まけたびかさなりければ、あるじその相手によごとに、上手をつけてうたせければ、うてどえかたで、手もなをらざりけり、さてよめる、

一二わが手なをらぬものならば
よひ〳〵ごをばうちもしなゝん

とよめりければ、いとやさしかりける、主じゆるしてけり、

おかし男ありけり、女の子にてうましかりけるを、こしをとらへていだきわたりけるを、からうじてうませて、いとくらきにあくたがみのやぶれなどしきて、草のうへにをきたりける、子をかれは男か女子かと、男にとひける、後のものをそく夜もふけにければ、鬼子ともしらで、かみさへいとゝいみじうくろく、あたまもいたうふりまはりければ、あばらなるくらがりに、女をばおくにをし入て、男湯をわかひてあびせをり、はや夜もあけぬに、この子おほきになりて、鬼子母を一くちにくひてけり、あいたやといひけれど、かねなるさはぎにえきかざりけり、やう〳〵夜もあけゆくにみれば、うみし女も子もなし、足ずりをしてなけどかひなし、

おのこ子かなにぞと人のとひしとき
鬼とこたへてきりなまし物を

これは二條のもどりばしのもとに、つかまきやにていたりけるを、かたなのつかいとめぬきなどぬすまれて、をふて出たりけるを、ほり川のほどにて太郎左衛門すみつぼといふ大工、まだくらきにいでけるに、

いみじうをふ人あるをみつけて、とゞめてとりかへしてけり、その夜鬼子をばうみけり、

おかし男ありけり、京にありわびてあづまにいきけるに、伊勢尾張に、あはび蛤の海づらにあるを、人のいとおほく賣けるを見て、

いとゞしくすきぬる貝のこひしきに
浦山しくもかへる人かな

となんよめりける、

おかし山伏あり、京やすみうかりけん、東のかたにゆきて、だんなもとむとて、かちにて行ければ、あせもながれけり、白髮なる頭のはちに、いげのたちければ、

しらがなるあたまのはちにたつけぶり
ふどうと人の見やはとがめぬ

おかし男有けり、その男身をゑうなき物におもひなして、京にはあらじ、東のかたにすむべきとてゆきけり、つれとする人ひとりふたり行けり、みち知れる人もなくてとふて行けり、三河國岡崎といふ所にいたりぬ、そこを岡崎とは、ちやうりあるによりてなむ岡崎とおもひける、そのやどの家にたちよりて旅籠めしくひけり、そのたなにかきつへたいとおほくありけり、それを見てつれ人、かきつへたといふ五もじをくのかみにすへて、たびの心をよめといひければ、よめる、

かちみちをきのふもけふもつれだちて
へめぐりまはるたびをしぞおもふ

とよめりければ、みな人わらひにけり、

ゆき／＼て駿河の國うつのやまに至りて、わがのぼらんとするみちはいとくらうたかきに、つたかへではしげり、もの心ぼそくひだるきめをみるごとくおもふに、すき行者あふたり、かゝるみちはいかでかゐまするといふをみれば、しる人なりけり、京にその人のもとにとてことづてす、

するがなるうつの山邊のたうだんご
せにがなければかはぬなりけり

富士の山をみれば、五月のつごもりに雪ありてめしににたり、

ときしらぬふじのねほどのいひもがな
かのこかたびらかへてくふべき

その山をものにたとへば、ひえめしをかさねあげた

らんやうにて、なりは擂鉢のやうになんありける、なをゆき〳〵て、武藏の國としもつふさの國とのなかにおほきなる川あり、それを隅田川といふ、その河のほりとにむれゐて、おもひやれば、かぎりなくひだるくもあるかなと、わびあへるに、わたしもりはやふねにのれ、日もくれぬといふ、さるおりしもしろき顔におびと小袖とあかき、舟の上にあそびていひをくふ、わたしもりにとへば、これなんみやこ人といふをきゝて、

なめしあらばいざちとくはんみやこ人
　　わがおもふほどはありやなしやと

とよめりければ、舟こぞりてわらひにけり、

おかし男、武藏の國までまどひありきけり、さてその國にある女をよばひけり、父はまた人にあはせんといひけるを、はゝなむ頭ものに心づけたりける、父はまた人にて母なんたてはらなりける、さてなん頭ものにとおもひける、このむこがねをかりて、をこせざりけり、すむところなん、いるまのこほりみよしのさとなりける、

みよし野のたのもねんぐをこはるゝに
　　きみがかりたるかねかへせかし

むこがねかへし、

わがかたにくるといふなるみよし野の
　　たのもしかねをつゐとりかへす

となん、人の國にても、なをしやくせんいやまさりけり、

おかし男、神なりのなりければ、ともだちどものみちにておちければ、よみける、

たゝくなよほどは雲井になるかみも
　　たいこのかはのうちやぶるまで

おかし男ありけり、きりしたんの御法度ありて、むさし野へつれて行ほどに、とが人なれば、町奉行にからめられにけり、女も男もくさむらのなかにをきて火つけんとす、女わびて、

むさし野はけふはなやきそ淺草や
　　つまもこころべり我もこころべり

とよみけるを聞て、夫婦ながらたすけてはなちけり、

おかしむさしといふ男、京なる女のもとに、きこゆればはづかし、聞ねばくるしとかきて、上がきに武藏坊べんけいとかきて、ほそ心ざしをこせてのち、音もせ

すなりにければ、京より女、
むさし坊さすがほどなる長刀を
ふらぬもつらしふるもうるさし
とあるを見て、はづかしき心ちしける、
ふればいふふらねばうらむ武藏坊
かゝるおりにや人はにぐらん
おかし男、かひの國へすゞろに行いたりにけり、そこなる女、江戸の人はめづらしくやおもひけん、せちにおもへる心ちなんありける、さてかの女、
なか〳〵とつれてこざらばてかけにも
なるべかりけり此月ばかり
歌さへぞ、ひなたくさかりける、さすがにおかしとやおもひけん、よびてねにけり、夜深く出して、
夜もあけばきつねたぬきと人やみむ
まだきおこして錢をやりつる
とよみて、この男えどへなんまかるとて、
くりのこのあたゝけもちのあるならば
みやげにこんどたんとやらましを
と、いへりければ、よだれこぼちて、うれしがりけらしとぞいひをりける、

おかし男、かひの國にて、なでうことなき人のめにかよひける、いやしふあかゞりなど有べきをんなどもあらずみえければ、
しのびづましりにあかゞりなくもがな
人の手足のうらも見るべく
女かぎりなくつめたしと思へど、さるきたなききびすなどを見せては、いかゞはせんとて、
おかしきのそう正の弟子有けり、都の内にてらもちてときあきけれど、後は世がはりときへりにければ、よのつねの坊主のこともあらず、人がらは心うつくしう味なき物を好て、こと人にもにず、うまき物をくひてもなをむかしよかりし時の味ながら、世のつねのこともしらず、としごろそだてたる弟子やう〳〵とこはなれて、つゐにぞくになりて、兄のさきだちて行たるところへゆくを、坊主まことゝにむづかしき經などこそをしへけれ、いまはと行をいとあはれとおもひけれど、まづしければやる物もなかりけり、おもひわびてねむごろにあいしらひける、旦那のもとにかう〳〵いまはとてまかるを、いたいけなるものも、えやらでつかはすとかきておくに、

ほねおりてそだてしことをかぞふれば
とをと五つと四つはへにけり
かの旦那これを見ていとあはれとおもひて、かたなわきざしまでをくりてよめる、
ときだにも十日二十日もへりけるを
いくたり君をせがみくふらん
かの弟子よびて、うをなどくはせたりければ、
けふやこの僧の衣をぬぎすてゝ
君が大小さしたてまつる
よろこびにたへで、又、
あきをやく鶴やまがもとおもふまで
すふはなますの汁にぞありける
としごろとりつけなる人の、酒のあたひとりに來りければ、みなすましけり、さてさかや、
すりきりと名にこそたてれさけくらひ
いつもまれなる錢も持けり
上戸かへし、
けふこずばあすはよそへぞやりなまし
やらずはありともさかなをかはまし
おかしなまなりをつけゝる女ありけり、男ちかうありけり、女歌よむ人なりければ、心みにとてきくの花のうつくしきをしきて、男のもとへやる、
なまなりのすしをばいづく白ぎくの
枝になりつゝふらめくとみゆ
男しらずよみによみける、
くさりつゝにほふがうへのなまなりは
くれける人のものゝかとみゆ
おかし男、都人なりける女のかたに、五十ばかりなりける人をあひしりたりける、ほどもなくかれにけり、おなじ所なれば女のめにはみゆるものから、男はわが物かとおもひたらず、女、
あま酒のあぢにも人のなり行か
きのふにけふはかはるものから
とよめりければ、男返し、
あま酒のあぢをのみしるふる人は
わがゐるやどのやまの神なり
とよめりけるは、まをとこある人となん、
おかし男、やまがにある女をみてむかひてあひにけり、さてほどへておやのさとへかへりけり、彌生ばかりにむぎ手の米おほうおひて、男のもとに米かせと

さとよりいひやりければ、男、

　君がためたばへる米は春ながら
　　かくこそ秋のもみぢしにけれ

とて、もみをなんやりたりければ、つきてなんくれてとて、女、

　いつのまにひけとてもみをくれぬらん
　　君がさとにはうすなかるらし

おかし男、いとかじけおとろへて、米錢もなかりけり、さるをいな事をならひて、いざなふものにつきて世中をすぎんとおもひて、出ておどらむと思ひて、かねなどをかふてくびにかけける、

　出てゆかば心かるしとわらはれむ
　　よの方さいを人のしらねば

とよみをきて、出で申けり、このおとこかねをたゝきおどれど、けしう米をくるべきともおぼえねば、なにによりてか、かゝらんと、いといたう申て、いづかたにもとめもらはんと門々に行て、とんづはねつおどれど、いづくもおなじごとくれざりければ、歸りいりて、

　おもふ米くれぬなりけり錢かねを
　　あだにつかひてわれやすりきる

といひてながめをり、

　人はいざわらひやすらむわれがつら
　　水ばかりのみいとゞやせつゝ

此女いとひだるくありて、ねんじわびてにやありけん、いひをたきたり、

　ひだるさをわするゝ米のめしをだに
　　一はらくひてへらせずもがな

返し、

　米のめしくふとだにきく物ならば
　　あまりのなくば汁もすはまし

また／＼ありしとていひくひて、男、

　おどらむとおもふこゝろのうた念佛
　　ありき／＼も申ぬるかな

返し、

　ながき日にたちはるすねのくたびれは
　　かふかひなくもなりにけるかね

とはいひけれど、おのがよくにてありければ、うとくになりにけり、

おかしはいなくてたえにけるもの、なをやわすれざ

りけん、うばのもとより、

うばながらあぢをばえしもわすれねば
かくうまき物なをぞくひたき

といへりければ、さればよといひて、男、

あひともに心ひとしきかのしゝの
みそのなければくはじとぞおもふ

とはいひけれど、その夜ににけり、いにしへくひけることどもなどいひて、

あがりこのわんをゝりへになずらへて
やたびくはばやあくときのあらむ

返し、

あがりこのわんをゝりへになせりとも
しるはのこりてみやはのこらん

いにしへよりあはれとなんくらひける、

おかしゐ中くだりしける人の子ども、猪をゆでゝくらひけるを、おとなになりにければ、おとこも女もはちたゝきの子なりけれど、男はこのわざいやと思ふ、女もこれをいやと思ひつゝ、親のをしふれどもならはでなんありける、さてこのとなりのおとこのもとよりかくなん、

つどいつゝいのしゝくひしまろひたひ
わりにけらしないひしるのわん

女返し、

くらひにしふるかけこきもかひわりぬ
きみならずしてたれかくるべき

などいひ〳〵て、終にほいのごとくよびにけり、

さてとしごろふるほどに、女おやなくてたよりなくなるまゝに、もろともにいひ米なくてあらんやはとて、交趾國たかさ國へわたりて、いきかよふたより出きにけり、さりけれどこのもとでおあしなど、おほくほどもなくて、たのしかりければ、男こと女ありていたうおもひくたびれて、ちとせの中もかれ〳〵にて、ふかうちなみぬるかほにて、みれば、此女いとしごとなどして、うちながめて、

風ふけばおきてしらなみしようまふの
ようじんきびしひとりなれども

きびしひとりなれどもとよみけるを聞て、かぎりなくかはゆく思ひて、手かけへもいかずなりにけり、まれまれかの手かけにいきて見れば、はじめこそ心にくくもつくろひけれ、いまは打とけて、手づからいひ

がまたきて、けうのかうの物をきりけるをみて、心うるさくていかずなりにけり、さりければかの女、男のかたを見やりて、

　きみがあだにみす〳〵ならんいかづちの
　　雲まにおちてあたまとるべく

といひておどすに、こはがりて、男こむといへり、よろこびてまつに、たび〳〵うそなりければ、

　君こむとなきて夜ごとにきつねども
　　たぬきとも身をなしつゝやねん

といひけれど、男すまぬかほなりけり、

おかし男、かたゐ中にすみけり、おとこ都へとてわらんぢのををしめてゆきけるまゝに、三月こざりければ、まちかねけるにいと仕事する人に、もちくはせんとちぎりたりけるに、この男もどりけり、此戸あけ給へとたゝきけれど、あけて歌をよみて、いだしたりける、

　あはひゑのことし見ごとにできたれば
　　もちをつくとて手のひまもなし

といひ出したりければ、

　あづきもちこちあはもちとしつくと
　　わがせになくばうるもえつかじ

といひていなむとしければ、女、

　あづきもちつけどつかねどそとよりも
　　くろゝはあとへあきにしものを

といひければ、男はらたてけり、女いとかなしくてしりからげしてちさうすれど、おゆものまで白水のあるところにすべりけり、そこなりけるもち、わんに大ゆひのつめびたしにもりてさしつけゝる、

　あはおもはでしかれる人にすゝめかね
　　わがくふもちはひえはてぬめる

とよみて、それははなびらになりにけり、

おかし男ありけり、じゆくしがきともいはざりけるかきの、さすがうまかりければ、女のもとにいひやりける、

　秋の夜にさはしゝかきのあぢよりも
　　あはせざるにも味まさりけり

かきごのみなる女かへし、

　せにもなき我をばすきとしらねばや
　　かひなでかきの味よくもくふ

おかし男、五十あまりなりける女をまうけゝるごと

く、わびける人のかへしに、

おもほえずひたひになみのさはぐかな
もろこしぶねのよりしばかりに

おかし男、をんなの許に一夜いきて、又もいかずなりにければ、女の物あらふ所にぬきかけをうちやりて、たらひに物の見えけるを、みづから、

我ばかり物あらふ人はまたもあらじと
おもへば水のしたにも有けり

とよむを、かのこざりけるおとこ、のぞきて、

水そこに物やみゆらん馬さへも
まめだらひをばのぞきてぞなく

おかしなすびこのみなりける女、ゆでゝくふて、

などてかくはやとしよりに成にけん
水なすびぞとむしりしものを

おかしやまでらのちごたちの、はなみにめし酒もなかりければ、

はらにあけるなめしはいつもくひしかど
けふの花見ににるこめもなし

おかし男、はづれなりける女のもとに、

あぶなきは目だまのうへのいもゝらひ
つぶしそんじてかくはなるらん

おかしみちのはたにて、ある子だちの鶏をすへてとをりけるに、何あみとかいひけん、よしやせつしやうなむさかみたといふあこ、

つみもなき人はうをかひわなをはり
おほくのさかなくふといふなり

といふを、うらやむばうずおほかり、

おかし物おひける女に、としごろありて、

いにしへのしちのふだをばうけ返し
むかしのかねをなすよしもがな

といへりけれど、なにともかまはずやありけん、

おかし男、ひぜんの國たかくのこほりしまばらの城へむかひける、女このたびは又はかへらじと思へるけしきなれば、男、

あし手より身うちのしはのいやましに
君にとしをもよらせますかな

返し、

こもりぬる大人数をばいかでかは
無勢に先をさせてみるべき

ゐ中人のことにては、よしやあしや、

おかし男、うをのほねをのどにたてゝ、
なまだいのせばねはむねにはさまりて
こゝろひとつになげくころかな
じゆなくていへるなるべし、
おかしごくにもたゝでたえたる人のもとに、
たまとのをあまのよりつゝぬすめれど
たつるをひきてくはんとぞ思ふ
おかし仕事せぬなめりと、いけんしける人のもとに、
たなせばみみちまでほせるたうゆみの
あそぶとさらにわが思はなくに
おかし男、錢えりける女にいへりけり、うしろめだくや思ひけん、
我ならでことせにゐるなかたなしや
ころかけとらぬはつとなりとも
返し、
札たちてきはめし錢をひとりして
あひよみはかりえらじとぞ思ふ
おかし紀の河にかりして、大なるふなを、こいといひければ、よめる、
きの河のおほきなふなを山がなる
人はこれをやこいといふらん
山家人かへし、
みしらねば山がのものはなまづをも
こいとはいふとおもふわれらも
おかしさいゐんのなにがしといふ侍有けり、其侍のわこたかいとすきにて、いつもかりしけり、そのわこよび給ふて、御れうりの夜、その家のとなりなりける男、御れうりにせんとて、大かに車ゐびをあひもちていでたりける、いと久しくこひて出したべまいらす、うちわびてかへりぬべかりける間に、あまの酒のいろのよきを、ひのきの小樽に入て客これも物くふに、このくるまゐびをひめくるみとみて、よりきてかぐになまくさき間、かの小樽の酒をとりて、くるまゐびをさかなにてのみたりけるを、くらがりなりける人、この小樽のともしくやみゆらん、ともしびけちなむとするに、のめる男のよめる、
のみあけばかぎりなるべみともしげに
たるのそこにてなる音をきけ
あまの酒のさけこのみの歌にては、なんぞ有ける、小樽はしぶ柿のおほきさなり、わこのほいなし、

おかしわかき男、げいにもならぬすまふを取けり、うれしかるおやにて、よくとると思ひて、此子を外にてとらせんとす、さこそいへいまだとらせず、ひとり子なればあまやかしければ、とるにいきほひなし、此子やみあがりなりければ、すまふのちからなし、さる間に、あひ手はいやまさりにまさる、俄におやこの子をつれてゆく、此子ちりめんのだんなをして、とゞろあしふみし出てとりぬ、この子なよ〳〵とよめる、

　出てとらばたれかわれにはかたざらん
　　ありしちからもけふはかなしも

とよみてなげられにけり、おやあはてにけり、よくとると思ひてこそとらせしか、いとかくもなげられしとおもふに、しんじつにたえいりにければ、かたやにてくわんたてけり、けふの入相ばかりにたえ入て、またの日のいぬのときばかりになん、やうじやうしていき出たりけり、むかしのあほうは、さるすまふをなんとりける、いまのをの〳〵まさに仕なんや、

おかし女はらみて、ふた子うみけり、一人はいやしきおとこのまづしき、一人はあてなる男の子なりけり、いやしき男、七夜の内にうぶぎぬをして、手づからもちてやりけり、心ざしはいだしけれど、さるやさしきことにもなれざりければ、うぶぎぬのかたにはりをのこしけり、きせんとてきせければ、たゞなきになきけり、これをあてなる男みていとおかしがりければ、いとけつこうなるれうらのうぶぎぬをじまんしてやるとて、

　むらさきのいろよききぬは今春の
　　のふのいしやうにまさりたりけり

むらさきのこそでなるべし、

おかし男、むまこのみにて、あらむまをあひもちけり、されどくせはたあらざりけり、しば〳〵せめけれど、なをいとうしろめたく、さりとていかじなどはえあるまじかりけり、なをはだかにてのりける事なりければ、ふつとかけ出て、えをひつかでかくなむ、

　出てにげしあとだに見えぬ河原毛を
　　たがいちもつといまはなるらむ

ものうきによめるなりけり、

おかしがきのめに水の見えぬといひならはしけり、そのわこぼくせきをほしがりていとたかうかねてかひ給ひけるを、なまめきゝにて有けるを、我のみとじ

まんに思ひけるを、また人きゝつけてふみやる、ほとゝぎすのかたをかきて、

ほとゝぎすなにぞと人のとひければ
なをひよどりと思ふぼくせき

といへり、このわこけしきあしくて、

ひよ鳥としでのたおさとけさぞなく
これをばにせとうとまれぬれば

時は、さ月になんありける、おとこ返し、

にせのおほきしでのたおさはなをたのむ
わがすむさとにすきしやたらずば

おかし男、ありまへ行人になまだいくはせんとて、よびてうときひとにしあらざりければ、家主にかひしやくしさゝせて、女のれうりくはせんとす、あるじのおとこ、歌よみて、みそこしにゆひつけさす、

たいのみをきみがためにともりつれば
われうは汁をすひぬべきかな

このたいは、あるがなかにあたらしければ、こゝろとどめてくはす、はらにあぢはひて、

おかしおとこ有けり、人の家をかりつゝ、いかでこのながき日に、物くはんと思ひけり、うちくはんことかたくや有けん、ものぐさくなりてしぬべき時に、かくといふ病者とおもひしかといひけるを、くすしさいさいくすりをのませ、養生しければ、よくなりて、つれ〴〵とこもりをりけり、時は六月のつごもりいとあつきころほひ、よひは、すゞみをりて、夜ふけてすずしきかぜふきけり、ほたでたかうしける、この男みふせりて、

あをほたで雲の上までしげるとも
なまなりすしにませられもせじ
くひがたき夏のひえめし思ひやれば
そのごとくなくはらぞひだるき

おかし男、いとうるはしきともありけり、かた時さらずあひ思ひける、播磨の國明石へいきけるを、いとあはれと思ひてわかれにけり、月日へてめばるに文そへてあさましく行、たいもくはで月日經にける、こと料理はし給ひにけんと、いたはしくおもひわびてなん侍る、世にある人の心には、目ばるなどはわすれ給ひぬべきものにこそあれと、いへりければ、よみてやる、

めはるをもをこしもえやはわすらるゝ

おあしなければおもかげにたい

おかしおとこ、ちんとりて、ひかんとおもふ田の草ありけり、されどこの男ぶしやうなりとき丶て、つれなくやとはざりつ丶いへる、

大勢のひくてあまたの草なれば
御身をえこそやとはざりけれ

返し、男、

おほせいとなにやとはざるなにがしも
つ丶とよるまでひかんずものを

おかしおとこありけり、むまのつめきらせんとて人をまちけるに、こざりければ、

いまぞしるくるしき物とひとまたん
つめをばしらずきるべかりけり

仁勢物語上 終

仁勢物語下

おかし男、いもうとのいとあかがほなりけるを見をりて、

つらあかみくさげにみゆるわか草を
人のわらはんことをしぞおもふ

ときこえける、返し、

はづかしやなどあてごとの言のはぞ
めんぼくなくもおもひけるかな

おかし男ありけり、うらむる人を恨て、

鳶の子をとらへて鷹につかふとも
おもはぬ人をおもふ物かは

といへりければ、

朝はらに五里も十里もありくべし
誰か此世をちやのみはつべき

又おとこ、

ふく汁にこそのなすびのかうの物
あなしほからし人のこ丶ろは

又女返し、

ゆぐせずに布へるよりも恥なるは

思はぬ人をおもふなりけり

又おとこ、

ひだるきと星のよばひと我せにと
いづれまでてふことをきくらん

たはごとかたみにしける、男女の仕事のなぐさみともなるべし、

おかし男、人の先約ある女をむかへて、

よびしうへは科なき時やさらざらん
はなさへそげめ目さへたゝれめ

おかし男有けり、人のもとより内裡粽をこせたる返しに、

ちまきかひ君は錢にぞまとひける
われは田にいでゝとるぞわびしき

とて、田にしをなんやりける、

おかし男、あひがたき入湯にあひて、あかゞりなどするほどに、鳥の鳴ければ、

いかでかは鳥のなくらんあかゞりを
ぞくふぞくひはまだ夜深きに

おかし男、つよかりけるおんたらし射て

むらぬかぬ弓をにぎれるたなうらは
あまたかずなるまめやおくらん

おかし男、思ひ懸たる女をよう見たくおもひて、

おもくさはありもすらめどことぎずの
おりふしごとに思はるゝ哉

おかし男、ふしてなでおきてなで、おもひあまりて、

わがあたまは夏のほたるにあらねども
くるれば月のひかりなりけり

おかし男、ぬかみそをおもひけり、つぼある人のもとに、

これわびぬあのぬかみそを入るてふ
しほからつぼもくだきつるかな

おかし心つきて酒ばかりこのみける男、長家にすみて居りけり、そこのとなりけるとのばらども、夜半ばかりに酒飲んとて、この男の所へきて、いみじのすき物のしわざとて、集めおきたるとくりどもをふりて見れども酒なければ、男にげておくに隠れにければ、

あれにけりあはれいくつのとくりにも
すみけん酒のをとだにもせぬ

といひて、このながやにあそびければ、男

ひきおひてあれたるつらのねむたきは

かりにもおにのすがたなりけり

とてなむ出したりける、この男ども、ほうひげ拔きてやらんとて、ぬきければ、

うちよりてわがほうひげをぬかませば
いたさにつらもゆがみしものを

おかし男、經をばいから習ひて、ひがんによまんとおもひ入て、

すみぞめの袖もかぎりと八卷をば
身にひつかけてよむふもんぼん

かくて物くさく讀みてねいりにければ、面に水そゝぎなどして目さめて、

わがかほに露ぞをくなるあかつきに
にをきしたなのかゆのしづくか

となんいひてくらひけり、

おかし女有けり、つくりいそがしく、米もまめもあらざりける程に、まめ米ある人につきてよめりしにけり、この男うしを賣にいきけるに、その宿の人の女にてなん有ける、この男にやどをかさじと、女あるじはらたちければ、そこに有けるたちばなをとりて、

さ月まつはらたちばなのかほ見れば
むかしの人のもの丶かぞする

といひけるにぞ、はづかしがりて納戸に入てぞ有ける、

おかし男、頭巾まであかうらをきて、すきにいきたりけるに、これは色このむすきしやと、すだれの内なる人のいひけるをきゝて、

染物をきたらん人のいかでかは
いろになるてふことのなからん

返し、

名にしおはばちやいろこそあれ赤うらの
づきんかたぎぬきるをいふ也

おかし年比つかひたりける女、心ひつちうにやありけん、ばかなる人のことに付きて、近江國なりける旅籠屋につかはれて、もとみし人のまへに出來て、めし喰はせなどしけり、夜さりこの有つる人たまへと、あるじにいひければおこせたりけり、われをばまた忘れたりやとて、

いにしへの口いづらんざくろばな
こけらくづともなりにけるかな

といふを、いと恥かしと思ひて、いきもせで居たる

を、などいきもせぬといへば、みづばなのたるに目もわろくものもいはれずといふ、

これやこのわれにあふみのかゞみ山
　とらへはすれどまじめなるかほ

といひて、たびぬぎてとらせけれど、すあしにてにげにけり、いづちいぬらんともしらず、

おかし男、すりきりはてゝ、いかでくちすぎあらんところへ行てしよなど思へども、たよりなさに、誠ならぬ道心をおこす、子三人をよびて語る、二人の子はなさけなくいひていぬ、三郎なりける子なむ、よき御計ひといふに、この坊主けしきいとよし、こと所はなさけなし、いかでこの西國中國にくだりてしがなと思ひて、乞食しありき下り、道々馬のくつひろひはきなどするを、あはれがりけり、扨こゝかしこほいたうしけれどもくれざりければ、ある家の門外に立て、

もらへども一つぶくれぬつゝお米
　人はかむらしおもかげにたつ

とて腹たつ氣色にて、いばらから竹のある家のかげに來て、つれ乞食のせし樣になげきてぬるとて、

ねむしろにころもをしきてこよひもや
　こひしきめしをくはでのみねん

とよみけるを哀と思ひて、つれ乞食ども、もらひあつめたる物をとらせけり、世がよの時はおもふをば食ひ、おもはぬをば食はぬものを、いまはおもふをもおもはぬをも、きらひめ見せぬ乞食になん成ける、

おかし男、女みさうを食ふわざもえせざりければ、くらまへまいりて祈てよめる、

ふくの神わが身にかねをたび給へ
　ひんもとみつゝあるべき物を

びしやもん返し、

むまれつかぬかねをば我もたまはらじ
　しはくなりなばひんもとむべし

おかし大けいせいやありけり、そこの女の乘ものゆるされたる有ける、町人に候ひけるはらはれなりける男、まだいと若かりけるを、この女ちいんしけり、かの男つゝけがひにして、常に女と向ひをりければ、女いとしやらなり、かねもいとうせなんかくなかふぞといひければ、

思ふには忍ぶることもわんざくれ
　をひにしかねはさもあらばあれ

といひて、かうしの内にをれば、れいの此格子の外には、人の見るをもしらでのさばれば、此女おもひわびて揚屋へゆく、さればよき事と思ひて、あとからいきければ、皆人みて笑ひけり、つどひてとのだちの御出なれば、くつは出ておくに誘ひ入れてのきぬ、かく片時も離れず有わたるに、いたづら者になりぬべければ、終に知音はなるべしとて、佛神にも申けれど、いやまさりのさまよせたまへと、この男いかにせん吾かてよせざりつゝ、なをわりなくいとすげなうあひしらひければ、御楊枝かるたなどつゝみかきつけて、もはやかはじといふ誓文をたてゝなむあひける、逢けるまゝに、いとゞ戀しき事かずまさりて、ありしよりげに戀しくおぼえければ

こひしやと見にこそきたれあげ錢の
　かねはもたずもなりにけるかな

といひてなむかひける、

この君さまは、かほ形よくおはしまして、佛のやうにをしへはいとよくてうたひ給ふ、男女いとうなづきあひけり、かゝる刻に、連立てすぐせかしとかたく約束して、走るになん極めける、かゝる程に長閙付て、此男をばつけとゞけしければ、此女をばたばかりてくらにこめてしばりければ、くらに籠りてなく、

あまのじやこおもきにたへしわれが身も
　音をこそなかめ人はうらみじ

と泣ければ、此男は人の國より、夜ごとにきつゝ尺八をいと面白く吹て、こゑはおかしうてあほうげにうたひける、かゝれば此女は藏に籠りながら、それにあなるとはきけど、逢みるべきにもあらでなん有ける、

ざれごとゝおもふらむこそかはゆけれ
　あるにもあらぬ身をしらずして

とおもひをり、男は女しあはねば、かくしありきつゝ、人の國にありきて、かくうたふ、

徒に行てはきぬるものぐさを
　見まくほしさにはきやぶりつゝ

尊氏の御時なるべし、大傾城屋は、染物屋のかゝなり、六條のかゝとも、

おかし男、つの國に知人有けるに、兄弟ともだち引連て浪華の寺に行けり、蓮池をみれば、鮒どものあるをみて、

なには寺講堂のまへの蓮池に

　これや近江のうみわたるふな
これをくひたがりて、人々かへりにけり、
おかし男、養性しに思ふ事かきて、和泉國へくすしよびにやりけり、あたまの鉢を見れば、くぼみ、はれ、みうづきやまず、あしたより痛て、ひるはれたり、うみいとしろうはれ物のさきに見えたり、それを見てかのくすし、只一つけになをしけり、
　きのふけふ頸のまはりの引つるは
　　はなのとをかのうしろなりけり
おかし男、和泉國へ行けり、住吉のこほりすみよしの里住吉の濱に行に、いとひだるければ、休つゝ行、有人住吉の濱とよめといふ、
　あゆみゆきて氣くたびれしにあもくふと
　　はらのへりたもすみよしのはま
とよめりければ、みな人尤といひけり、
おかし男有けり、其男伊勢國へばくちを打に行けるに、かの伊勢のばくちうち、つねの人よりはこの人上手なりければ、おやにもいふて、いとねんごろにあひしらひけり、かくてねんごろに馳走しけり、二日といふ夜、男忍びうたんといふ、伊勢の男もうたじともおもへらず、去れど人目しげゝれば、えうたず、宿せんといふ人あれば、人をしづめて、子の時よりかの宿に行て、戸のかたを見出してふせるに、月の朧なるに、小さきさいをあまた持ちて人立てり、男いと嬉くて、我がゐる所にいて入て、子ひとつより丑みつまで打に、まだかち負もあらず、打あかしけり、つとおきて油の代に、わが錢をやるべきにしあらねば、心もとなくて、しばしあるに、宿主のかたより、
　君がかちしひとやまけけむおもほえず
　　かちかまけたか下手か上手か
男、いたう忍びてよめる、
　うちあかすあぶらの錢にまどひにき
　　下手上手とはこよひさだめよ
とよみてやりて出ぬ、今夜は人をしづめて、いとゝく打んと思ふに、國の守さいの上手のばくち打ありと聞て、夜べにさがしければ、最早打こともえせで、明れば尾張國へ逃んとすれば、亭主かたよりいだすさかづきのさらに、歌をかきていだしけり、
　かちにげにもらへどくれぬ錢しあれば
とかきて、すゑはなし、その皿にたばこのはいして、

末をかきつゝ、
　このゝむさけの代はやらなむ
とてあくれば、尾張の國へこえにけり、さいうちは、
水尾の御時、これたかの御子のむまとり、
おかし男伊勢より歸て上りけるに、大淀の渡にて、伊勢のさい打のでつちに、いひかけゝる
　こひめうつかたやいづこぞさいなげて
　　われにをしへよゆきてうたなん
おかし男、伊勢の齋宮にみやづかへしける、かの宮の杉といひける女と、わたくしめおとにて、かみこぬはせてよめる、
　ぬひやぶるかみこはせばく成ぬべし
　　大みやぎぬのうらのひろさに
女、
　こはくともきてもみよかし紙子をば
　　風のとをせるものならなくに
おかし男、伊勢國にて、隣へ、すを貰ひに行ければ、女いみじうしかりけり、さて男、
　をんなごはいつがくもんもあらなくに
　　ろんごよまずのろんごよみかな
おかし、うへに有ける時、もらはれもせざる御なんどのかねをおもひける、
　目には見て手にはとられぬ月の中の
　　かづらのごときかねにぞ有ける
おかし男、女をいたううらみて
　よこねふみだうがさやみにあらねども
　　あはぬ日おほく戀わたる哉
おかし男、伊勢の國にて、しよたいしてあらむといひければ、女、
　大淀のはまに生てふみるなりと
　　こゝろのまゝにくひてあれかし
といひて、まして酒もなかりければ、男、
　袖ぬれてあまのかりほす青のりや
　　みるをさいにてやまんとやする
をんな、
　五月よりでくる麥めしあぢなくは
　　しほにつけたる貝も有なん
又男、
　涙にぞぬれつゝしぼるにごり酒の
　　からきこゝろははなをはぢくか

よに落ぶれたる女になん、

おかし男、二條通り御りやうの宮のうち神の祭見に行けり、近衛の町にて、大きな人々の土器まいり給ふつゐでに、御棧敷より給て、のみたてまつりける、

大はらやおつけのわんにけふこそは
ならもろはくをおもふまヽのむ

とて、心にも嬉しくや思ひけん、いかゞ思ひけんしらず、

おかし田村といふ能有けり、その時の太夫たかやすといふ、いまもありけり、それをよびて天王寺にて三日しけり、人々さけじき籠もてきたり、もてきあつめたるくひ物千々ばかりあり、そこばくのさげ重箱を、木の枝につけて、堂のまへにたてたれば、山もさらに堂の前にひかり出たる様になむ見えける、それを謠衆に有けるふぢいちの何ゆきとか申ゐたる、祝言のをはるほどに、歌よむ人々を招きあつめて、今日の御能を題にて、春の心ばへある歌たてまつらしめ給へといふ、右の馬の太夫なりける翁、目はたかりながらよみける、

山うばのをはりし後の狂言は
腹すぢきれてわらふなるべし

とよみけるを、今見ればよくもあらざりけり、そのかみは、これやまさりけん、おかしかりけり、

おかしたがぜうの娘おはしけり、嫁入して七ケ日のいはひ安穩にしけり、鵜師殿こふのなにがしその祝言に參りて、かへさに山崎のせむしの子のゐられける山崎の家に、瀧おとし水はしらせなどして、面白く作られたるに參りて、年比よそにては鵜つかへども、近くつかひて御目に懸ず、こよひ爰にて見せ申さんといふ、この子悦てよるの物などかりてけり、さるに、かの鵜師出てさげすみける樣、家見のはじめに、只何をかまいらすべき、三條の大路に、紀の國もめん有けり、いと面白きすぢたてませり、大雪の後かひたりしかば、いらで有ければ、みそにかへてかりけるを、島このみ給ふ人なり、この木綿奉らむと思ひて、みづし女して取に遣す、いくばくもなくてもてきぬ、此木綿開しよりは見るに勝れり、是をたゞ參らせんは、すくなともそゆべしとて、歌よむ人に讀せけり、右の鵜師の子なりける人のをなん、青ききざみたばこを包たる紙に、書付まいらす、

あかねともべにともかつて色みえぬ
　　こゝろざしてふよしのなければ

おかし、宇治の上林馬もちけり、馬屋より人々うち出けり、おほきなるあなへおちて死にければ、翁のよめる、

わがかどにちひろあるあなをほりつれば
　　よるひるたれかはまらざるべき

これは、酒かすに酔て人のちうやうとなんいひける、あにちうやうにてあらざらんや、

おかしおとろへたる家に、ふきのたう出たる有けり、師走の晦日に、其日雨そろ〳〵降るに、人の許へほりて奉らすとて、

ぬれつゝぞしゐてほりつるとしのうちに
　　春はふつきにならせられてよ

おかし左のきゝたるすりきりぶしゐられけり、かも河のほとりに、六條わたりに、家をいとわびて作りて住けり、神無月三十日かた、菊皿のうつくしきに、もみなますをもりて、殿達よびて一日酒のみし遊て、樽もあけもてゆく程に、この殿達おかしき歌よむ、そこに有けるかたきおきな、板おしきのはたにはひきて、人に皆よませはてゝ、よめる、

しほ物をいつかくひけん朝めしに
　　つきぬるよねにもみもあらなん

となん讀けるは、うす杵にてつきたりければ、あらなく白き米にもみ多かりけり、わが主殿六十四五石とり給へば、鹽物より外にさかななかりけり、さればなん、かの翁更に是を迷惑して、鹽物はいつかくひけんとよめりける、

おかし惟盛卿と中公卿おはしましけり、八島のあたりに、むれたかまつといふ所に船有けり、年比の侍與三兵衛いしどう丸を連て、伯父むねもりなりける人を常に恨みてぬけておはしましける、時代經て、久しく成にければ、其時の事は忘れにけり、かねはたんともたで、すねを引々つゝ、大和の方にかゝれりけり、今おはする高野の瀧口が寺、其院の上人ことに貴し、その寺のもとにをりゐて、髮をそりて、名をかへて、上中下みな歌よみけり、與三兵衛なりける人のよめる、

世のなかにたへて妻子のなかりせば
　　いまのこゝろはのどけからまし

又人の歌、
しねばこそいとゞ妻子はめでたけれ
うき世にたれがひひにいくべき
とて、其寺をば立て行に、ひだるく成ぬ、御供なる人もちを持て外よりいで來り、此もちをくひてんとて、よき所をもとめ行に、岩田川と云所に至りぬ、きみもむまがりて多くまいる、きみ宣ひける、高野を出て岩田川のほとりに至るといふを題にて、歌よみてもちは食へと宣ふければ、かの與三兵衛よみて奉りける、
かひぐひしたなざらしもちかたからん
岩田河原でわれはくひけり
きみ餅をかすぐ\くひ給て、かへしえし給はず、かの石童丸御供につかまつられり、それが返し、
一とせに殿のおともにきみませば
やどかす人はあらんとぞおもふ
歸りて風呂屋に入らせ給ひぬ、夜更るまで、ちやのみ物がたりして、ふるじのていよびて風呂へ入まいらす、十一日の月もかくれなんとすれば、かの兵衛よめる、
あかなきにまたきも風呂へ入ぬるか
山水さしていれずもあらなん
きみにかはりて奉りて石童、
をしなべてこれは平のこれもりと
髮のなければたれもしらじを
おかし信濃にかよひ給ひしこれもち將軍、例の狩しにおはします、供に馬のりなど大勢にて狩し給へり、一尾へて見るに、かりやうちけり、女おほうしてとくよばんとおもふに、大勢を止めて、ろくならん所までとて乘打をせざりけり、女この馬の口をとりければ、降りて、
まくらとて草引むすぶこともせで
たがつまとだにたのまれなくに
とよみける、時は九月三十日なりけり、將軍おほきに醉て、あかゝほし給ふてけり、かくしつゝまふつうたふつ飲けるを、思ひの外に、御烏帽子も落てける、無理に鬼どもくひ奉らんとて、大勢まうでよるに、八幡山の麓なる、河原あしいとはやしつよくて、戸隱にまいりて見奉るに、つぶ\とい びきかきておはしければ、やゝ久しくおこして、仰のことなど御はかし取出て消にけり、さてもさぶらひしかなと思へど、大鬼

小鬼ども有ければえためらはで、むりぎりに切て懸れば、鬼、

わるくして太刀はあらむと思ひきや
ゆみふみおればきみをくはんに

とてなむ、なく〳〵逃にける、

おかし男有けり、身はゐざりながら、母なむ神子なりける、その母ながをかといふ所にすみけり、子は京に乞食しければ、養ふとしけれど、一さいえ養はず、人も頼まねば召もせざりけり、さるに師走ばかりに、とちのみとてふんしたるかみあり、嬉しくあけ見れば歌あり、

おひぬれば枝のわかれの有といへば
おつるなみだはとちのみのごと

かの子、ゐざりながら泣きてよめる、

世中にえだの別のなくもがな
ちよもといのる人のどんぐり

おかし男有けり、童よりつかまへられける、てんぐねつてつのみ給ふてけり、六時には、必いき出にけり、大嶽の宮仕しければ、常にはゐまうでず、されどもとの心うしなはで、とんで廻りけるになん有ける、昔つかまへられし人、俗なる禪師なるあまた参りあつまりて、六時なれば、ことよしとて、大いきつき給ひけり、ゆりこぼすことふりて、火の雨止まず、皆人酔て雨に降りこめられたりと云を題にて、歌有けり、

思へども身をつめらねばしりもせず
雪のつもるぞわが心なる

とよめりければ、天狗いたう哀がり給て、御ぞぬぎて給へりけり、

おかしいとわるき男、わるき女を相いへりけり、をのをの親ありければ、包ていひさして止にけり、年比經て、女のもとに猶心ざしはらさんとや思ひけん、男歌よみてやれりける、

今までにわすれぬ人はよにもあらじ
をのがきみさまとしのへぬれば

とてやみにけり、男も相はなれぬ、宮仕へになむいでにける、

おかし男、つりかみ、いばら組、あしやがまふたとつての助など、知人にて有けり、昔の歌に、

あしやがまふたのとつては釘もなみ
つけつをくれつさゝできにけり

とよみける、此里をよみける、こゝをあしやのなだとは云ひける、此男なまかはもの也ければ、それを頼りにて、ゑびの助どもかゝみあつまり來にけり、此男のかみもゑびのすけなりけり、其家の前の海のほとりに遊びありきて、いさごの山の神のをると云、布見に登んといひて、登りて見るに、そのはた物より異なり、長さ二丈、ひろさ五尺ばかりなる、石の表に白ききぬに岩をつゝめらん樣になむ有ける、さる機のかみに、わらんじの大きさして差出たる、ぶら〳〵あり、それに走りかゝるにぶら〳〵は、てゝうち栗の大さにてこぼれおつ、そこなる人に、みなはたの歌よます、ゑびのすけ先よむ、

わが世をば今日もへめぐりまづふくり
　　をると此布いづれたかけん

あるじ次によむ、

ぬきたてては人こそうむらし白衣を
　　まなくもをるか袖のせばきに

とよめりければ、かたへの人笑ふ事にやありけん、この歌にめんじて止にけり、歸りくる道遠くて、うせにしくらひてのもちずきが家の前にくるに、日暮ぬ、宿の馬を見やれば、あまの飯たく火おほく見やるに、あるじ男よむ、

汁さいはほしなかぶらかほたてかも
　　わがすむかたのあまのたゝきか

とよみて家にかへりきぬ、その夜南の風ふきて、波いとたかし、つとめてそのいへのめのこどもいでゝ浮見る、くらげなどの、浪によせられたる、ひろひていへの内にもてきぬ、女がたよりそのみるくらげをたかつきに盛て、柏をおうひて、さし出したる柏にかけり、

わたつみのかざしにさすといはふもゝ
　　きみがためにはくらげなりけり

田舍人の歌にては、あまれりや足らずや、

おかし、いとわかくはあらぬ、これかれ百姓ども集りて、月を見てそれがなかに名主、

おほかたは月をもめでじみしんせじ
　　つもれば人のおひとなるもの

おかしいやしといふおとこ、われよりは勝りたる人をあひてにて、戀ひあひうちける、

人しれずわが小つゝみはあぢもなし

いづれの流にうちもなほさん

おかしくもれる鏡を、とがでと思ひわびければ、天晴とやほめけん、さらばあす研てといへりけるを、限りなく嬉しく、又うたがはしかりければ、大きなるざくろにつけて、

ざくろばなけふこそかくもにほふらめ
あのたのみがたあすの水がね

といふ鏡研もあるべし、

おかしつりひげを抜をさへなげく男、三月のつごもりかたに、

おしいかなはなのあたりのけぬきをば
ゆるしてたまへなむあみだ佛

おかしこひしさにきつゝ歸れど、女に少分をだにえくれでよめる、

あみ笠でたなゝし賣のほてかづき
行かへるらん知人もなみ

おかし男、身は重くて、いと高き木のうへゝ登りたりけり、少したてゝにや有けん、ふして思ひおきて思ひ、わびてよめる、

あぶな〳〵のぼりはすべし枝もなく
高き木のそらくるしかりけり、

昔もかゝる事は、くもまひのしけるにや有けん、

おかし男女ありけり、如何ありけん、その女、目つぶれにけり、後にやう生しけれど、ほし有眼なりければ、こまかにこそ見えねど、時々ものは見えけり、女かさかく人なりければ、かきをれる許なり、今の男、ほうそうすとて、一つの鼻落たりけり、彼の男、いとつらく、をのがきあひの事をば、今迄のたまはねば、僞と思ふらん、なでて見給べき物になん有けるとて、弄してよみてやりける、ときは春になん有ける、

淸盲は春日きつかとてりぬれば
かすみにきりやふりまさるらん

となんよめりける、女かへし、

ちく〳〵と木ずゑに春も成ぬれば
もがさではなもねからちりけり

おかし二條の北に、咳氣つかふまつる男有けり、女どもをあまた使ひて、常に見かはして、よばひわたりけり、いかで物語ばかりして、恐ろしく思ひつめたる、山の神の心はるかさんと思ひければ、女いと忍び給へ、しはぶきの聞ゆるにといひけれど、ものをとも

せず、女、
　ひこ七がかほをするとも咳氣ゆへ
　　かくれぬせきを今はやめてよ
このせきに迷惑して、いに丶けり、
おかし男ありけり、恩を高くいふこと月日へにけり、薪しもあらねば、心苦しとや思ひけん、漸う奉公に出にけり、その比みな月の土用餅つかせければ、男手にまめ一二出たり、時もいと暑し、少し秋風吹たちなんとき、必まいらんといへり、秋まつ比ほひに、こ丶かしこより、その人をかんずなりとて、公事ごといできにけり、さりけれど、男のもとの主仮にむかへこしけり、されば此男、かつほのた丶きをこしらへて、歌をかきつけて置たり、
　秋かけてしたるた丶きはからくとも
　　おくはふくる丶あぢにぞ有ける
とかき置きて、かしこより人おこせば、これを進ぜよとていぬ、さてやりて後、つゐにけふ迄しらず、よくてやあらん、悪くてや有らん、いにし所も知ず、かの男は、天野の酒手をおひてなん隠れ居なる、むたいけにて、人の丶らと思ふにやあらん、伯母のもとにあり、いまこそはいでめとぞいふなる、
おかしほりいだしにや有けん、大橋あたりに、家を買けり、四十兩が九十兩の家にぞ成にける、なか立しける翁、
　作事してちりまでひろふさら丶くに
　　ほねをおるとてまたたまふかね
おかし大もち好有けり、賴ける坊主なが月ばかりに、梅漬にきびもちそへてやるとて、
　わがたのむ旦那のためにつくもちは
　　ときひじわかぬちやのこなりけり
とよみてやりければ、いと嬉がりて、使に錢くれにけり、
おかしうどんのこ麥をほしける日、むかひにたてたりける車に、女の仕事したむなさうに見えければ、中間なりける男の、よみてやりける、
　ひきもせずつむがぬいとのしごとをば
　　あの麥のこにかへてひけかし
かへし、
　事をきてなにかこ麥を分てひかん
　　車のみこそしごとなりけれ

後はたんとつむぎけり、

おかし男、高麗陣にて、ちやうばに居たりければ、あるやれぎぬきたる人の、具足はたより綿の目をしらみとやいふとて、出しければ、見て、

わたの目の人をくふとは見しらねど
こはしらみなりまたもくらはん

おかし左兵衛のかくなりけるあり、こしのゆき女といふ有けり、其人の家に、よき酒賣ると聞て、うへにありけるさけ奉行を、ふぐ汁まながつほ、いか、なよし、まらうど、かうすとなんその日の料理にしたりける、興ある人にて、かめに酒を入たり、其酒の中に、甘酒、ぶどう酒など有けり、酒の入事三斗六升ばかりなん入ける、それを題にてよむに、よみはてがたに、明石のめばるなど、あるじし給ふと聞て、もて來りければ、しらべて飲せける、元より酒の事は、飲まざりければ、すまひけれど、強て飲せければ、かくなん、

酒がめのはたにならべる人をおほみ
ありのくま野へまいるなりかも

などかくしもよむといひければ、大酒のゑひてはくれるさかりにまかりて、ふじからげのさかばやしを、思ひてよめるといひければ、皆人げにもと思ひけり、

おかし男有けり、謡はうたはざりけれど、世の中の小歌を知たりけり、かぶきする若衆の座に有て、世中を思ひうむじて、京にもあらず、はるかなる田舎に住けり、姉なる女のもとの子そくなりける男、よみてやりける、

鷲破とて雲にはのらぬ舞なれど
よのうたよりはよくぞあるてふ

となんいひやりける、左門がおどりなり、

おかし男有けり、いとまめにこゝかしこありきけり、深草のあたりになん、じやうるりあやつりしたりけん、見に往ける、錢を取んといへり、さて、

ねずみどのせにをばゆるせまづひらに
いやといふともいりまいらする

となむよみて入けり、さる人のきたなげさよ、

おかし、ことなる事なくて、にげて上る人ありけり、太刀かたなはさしたれど、心やをくれたりけん、鴨の羽たゝきにおちたりけるを、男歌よみけり、

白ふりのあさのたゝれるかうの物
かまくらどののにちやのまるゝかな

これは、さいたうのなにがし、物がしらにて、ひがしにくだりけるが、みちより歸り上りけるとなん、

おかしおとこ、あたまは、はぐべしといひやりたりければ、げきやう、

しらくぼにはげははげなんはげずとて
やく代くるゝ人もあらじを

といへりければ、あたまはなめしに成と思ひて心うさは、いやまさりにけり、

おかし男、和子達の相伴にいで、からはらに酒を飲みて、

千はやぶる神代もきかず丹波ごき
からはら酒をみつのまんとは

おかし下手なる鍛冶ありけり、其男のもとの主なりける人を、ないせうに頼みけり、此かぢ藤原の何ゆきとやらんいひけり、されどまだ若ければ、物もおさおさからず、燒刄もつけしらず、況や銘はきらざりければ、かの主なる人、本をかきてきらせて、しちにをく、さて主の讀る、

つぶつぶとながめいきれるならかたな
てまのみとりてうるかしもなし

返し例のかぢ、

やすくともかぬはとるらめならかたな
身さへながるときかばうけなん

といへりければ、主いといたう譽て柄まで卷て、刀箱に入てやるとなん云ふなる、おとこふみをこせたり、質に置て後の事なりけり、あくめのいできぬべきに、みわづらひ侍る御身幸あらば、このあくめは出じといへりければ、例のかぢいろかはりて、よみて取かへしにやる、

たびたびにのごひのごはずさびがたな
身のこしらへにうんぞまされる

とよみてやれりければ、身も鞘もとりあへず、しとゝめそへて、戻しけり、

おかしとしより女の、人の心を恨みて、

風吹ばとはになみこすひたひにも
わがほうけだもかはくときなき

と、常のたはごとに云ひけるを、聞おぢける男、

よひごとにからすのあたま白きこそ
としつきまされ雪はふらねど

おかし男、友達の額をはらしけるがもとに、云ひやり

ける、

　はなよりもひたひぞたかく成にける
　　いつほうさきをこびんとはみし

おかし男、味噌つきにやとふ女有けり、それがもとより、こよひ夢になんみえ給ひつるといへりければ、男

　おもひあまりみそ玉ほしく有ならん
　　夜ふかくきつゝ玉ぬすみせよ

おかし鼠、やせたる猫のもとに、病みける事をとぶらふ様にて、いひやりける、

　いにしへは有もやしけん今はなし
　　ねずみのねこをかぶるものとは

返し、

　頸玉のしつかとせしもとけなくに
　　かぶるねずみは戀ずぞ有けり

又かへし、

　戀しとはさらにもいはじくび玉の
　　とけんとねこはえしもとらじな

おかし男、ねぶとを煩ける、女のちんばに成ければ、

　すそのあたりしほらしくもあるかあしをいたみ
　　おもはぬかたわ腰ひきにけり

おかし男、やみ目にてゐて、

　あかゝらぬ眼のうちにしむ物は
　　いかにあはせしくすりなるらん

おかし仁勢男、せりやきの料理しけるとき、いまはさる物はも無く思ひけれど、もとすきにける物なれば、大たかつきにたんともりて食はせけり、すりこぎにかきつけゝる、

　翁とて人なわらひそせりやきも
　　けふばかりとぞたんとくふなる

大さけのみ氣しきよかりけり、をのがすきを思ひけれども、好かぬ人は聞にくかりけりとや、

おかし耳のあか有て、男女つんぼになりける、男耳の穴ほらんといふ、この女いと悲しくて、馬のいきあひをだにのませんとて、おきゐて見やりければ、酒にて飲みてよめる、

　をきの火で身をやくよりもかなしきは
　　耳のあなほるいたさ也けり

おかし男、すゞきをみづ野の邊にてとらへにけり、京に思ふ人にをくりやる、

　波まにてつれるすゞきのはましほは

秋風ならぬきみにまいらす

おかし目くら、すゞみに上洛して、

わが見てもひさしく成ぬ杉吉が

きちんのはかまいくよへぬらん

をんづめは檢校に成て、

むつかしと平家もしらずしやみせんも

びはも小うたもいかで過てき

おかし男、久しく藥のまでおこる心もなし、まいりこむといひて

太刀かづきやい火あたまにすへぬれば

たえぬくすりにけんぺきもなし

おかし女はあざもつ、男はそうたもてり、はやく打捨たりけるをみて、

かちこそは今はあだなれ是なくば

そうたはよもにあらまし物を

おかし女のまたよへずとおぼえて、つれなき顏にて振舞するとて、

近江なるかたゞのふなをとくになん

つれなき人のなべのしりみむ

おかしおとこ、梅ぼしを雨に濡しける女を叱りて、

馬とりのはなねぢほどのぼうもかな

ぬらせる人をきせてはらゐむ

女返し、

馬とりのはなをねづてふぼうはいな

あすまでまてよほしてかへさむ

おかし男、ちぎれる事あやまれる人に、

山城のこまの靑ふり手ににぎり

ちぎりしかひもなき世なりけり

といひやれど、いらへもせず、

おかし男有けり、深草にて鼠を捕へて殺さんと思ひて、かゝる歌をよみける、

とらゆとも住こしあなへにげていなば

いとゞふか草野をやさがさむ

ねずみ返し、

野ねずみはうづらとなりてなくものを

かりにだにやはきみはころさむ

とよめりけるに、めでゝ、ころさんと思ふ心、無くなりにけり、

おかし男、いか程ひだるくおもひける折にかよめる、

おもふほどいひをばたんとくひぬべき

はらにひとしき人しなければ

おかし男、頗て心ちしぬべくおぼえければ、

つゐにゆくみちにはかねもいらじかと
きのふきやうよむ僧にくれしを

仁勢物語下 終

伊勢物語ひら言葉

業平昔物語　上之一

むかし有原の中將なりひらと申は、平城天皇第三の王子阿保親王の御子にて、五男にてましますにや、在五中將と申奉る、然るに業平仁明天皇の御宇に、いともかしこき勅をうけ、大内におゐて元服有、春日の祭の勅使として、すきひたいのかぶりをゆるされ、うゐかぶりし給ひ、こと更春日の里を領知として給りしが、あるときなりひら鷹狩と號し、彼里へおはしましけるに、そのさといとうつくしきをんな兄弟住給ふを、物荒れたるかきほのすき間よりほのかに見給ひ、かゝるふるさとに愛うるはしき女すみける事、あやしくも又あはれにもおぼへさせ給ひ、心ちまよはせ給ふが、めしたるかり衣のすそを切て歌を遊ばし、かかせ給ひてつかはされける、その衣はしのぶずりとなんいへる衣なりければ、御歌に、

春日野の若むらさきのすり衣
しのぶの亂れかぎりしられず

此歌の心は、先所の名によせて、春日野の若むらさきのすり衣といひ、さて又下の句、しのぶのみだれかぎりしられずといふ心は、しのぶずりの衣とて、其紋かぎりなくみだれたる物なり、そのごとくそなたをみてよりおもひそみ、忍ぶ心もみだれつゝかぎりしられぬとなり、女を若むらさきにたとへ、若むらさきのすり衣といへる序歌なり、ひとへにしのぶのみだれといはんため也、又しのぶずりと云事は、すゑ返歌にしるす、

かくよみてつかはされければ、御歌の心おもしろくやおぼしけん返歌を遊ばし、鷹がりのさき〴〵まであなたこなたたづねさせて、つかはされし御返歌に、

みちのくの忍ぶもぢずりたれゆへに
亂れそめしに我ならなくに

此心は、みちのくのしのぶのさとにもぢずりの石とて石有、その石に山あいとてあをき草あり、其くさをしぼりかけて、衣にすりつけそむるをしのぶのもぢずりといふなり、其衣のもんかぎりなくみだれてそまれる也、なりひらの御歌、そのしのぶずりのやうに、心のみだれそむるとよみ給ふは、たれゆへにみだれそめしぞ、我身ごときにては有まじとひけをし給ふ心也、

此歌は河原大臣源融の御詠歌なり、とほるのよませられし心は、みちのくのしのぶもぢずりのごとく、わが心の亂れそめしはたれゆへぞ、みな是そなた故ぞ、わが心は本來すなほにして、みだるるはづはなけれども、我ならで君ゆへ也とうらみてよませられしをひきかへ、歌の返歌にあはせたまふ事女の作意也、

一むかし延曆三年十一月に、奈良の京を山城國乙訓郡長岡に都をひらひてうつされしに、まだ東の京は人の家居も定まらざりければ、西の京にばかり官女たちしか〴〵住たまふ、それに中納言長良卿の御むすめ、いまだたゞ人にておはしますときなれば、御いとこの五條おほき齋のみや染殿の后に宮づかへのやうにしておはしけるが、御かたちよの人にすぐれ、なを御かたちよりは御心なんまさりける、なりひらつの比よりかはうち物かたらひたまひしかばかくおぼしけん、やよひの朔日雨の狀雨(そほふる)によみてやらせたまふ御歌に、

おきもせずねもせで夜はをあかしては
　春の物とてながめくらしつ
此歌の心は、おきもせずねもせで物をおもひ、夜半をあかし、春の物とてながめくらすとなり、ながめは長雨とかけり、春やよひのころはなが雨のふる物なり、ことに雨のそぼふるにつけて、おきもやらずねもせず夜をあかしては、そなたの空を春の物とてながめくらすとなり、

一むかしなりひらおもひをかけ給ふかの御もとへ、ひじき藻といふ物をやらせたまふとてよめる、
おもひあらばむぐらの宿にねもしなん
　ひじき物には袖をしつゝも
此心は、そなたにもおもひのあらば、かゝる玉のうてなも何にかはせん、いかなる陋巷あれにしあばらやのむぐらおひしげるやどにてもねぬべし、引敷ものには袖をしつゝもと也、鹿丸菜といふ海草にことよせて、袖をかたしきてもといふ心を、ひじき物には袖をしつゝもといへるかくし題なり、
二條の后のいまだ帝にもつかふまつり給はで、たゞ人にておはしける時の事なり、

一そのゝち東の京五條にしのたいに、おほき斎の宮染殿の后すみ給へば、その頃五條の后といひしが、かの長良卿の御むすめ高子諸共におはしけるを、本意にはあらはさねど御心にかゝりければ、色外にあらはれ五條の后ほのかに聞召、よのはゞかりをおぼし召、又の年の正月十日ばかりに、外へ家居をかへさせ給ひければ、なりひらかの有家は聞召せど、人の行かよふべき所にもあらざりければ、ゆきてたづねんよすがもなし、たゞさへかよふ事はかたきに、なをうしとおぼしめしけるを、さすがにおもひきりがたく、いにしへすみ給ひし五條の西のたいへおはしまし、梅の花のさかりなるに去年のことをおぼし召出させたまひ、たちて見居て見給へども、去年の春に似るべくもあらざれば、うちなげきて、あるじもなくすみあらしてあばらなる板敷に、月のかたぶくまでうちふさせたまひ、去年をおもひ出てよめる、
月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
　わがみひとつはもとの身にして
此心は、月花をながむれど、こぞの春とはことか

はり、さら〱おもしろくあらざれば、月もむかしの月にてはなきか、春もむかしの春ならぬか、我身ひとつはもとの身にして、みなこと〲く月もはなもむかしのとはかはりたるかとうたがはるゝとよみて、

夜のほの〲と明るまでながめさせ給ひ、なく〱歸らせ給ひける、

一そのゝちなりひら、彼家居をかへさせ給ふ二條の后のおはします所へ、又しのびてかよはせ給ひ、人めをはゞかりかくし〱忍び給へば、門よりはゐいらで、つゐぢのくづれたる所よりかよはせ給ふ、更に人目しげくもあらざれど、たびかさなれば五條の后にもれ聞へ、其かよひぢに夜ごとに人を付てまもらせらるれば、通はせ給へどもゐあはで、むなしくかへらせ給ふがかなしみのあまりよめる、

人しれぬ我かよひぢの關守は
宵々ごとにうちもねななん

此心は、さしてかくれたる心なし、人しれぬ我かよひ路のせき守は、よひ〱ごとにうちねよかしとなり、

と讀給ひ、いとゞいたく心なやみ給ひけるを、五條の后聞召、げにあはれにおぼし召御ゆるしありしかども、二條の后の御兄たち、堀川大臣もとつね公、大納言國經などの聞付、世のきこゑよろしからずとて、いよ〱きびしく守らせ給ひける、

一そのゝちなりひら、さすがにおもひすてがたくおぼしめし、高子を得難かりけるを年ごろかよひ給ひしが、終にしのび入、いのちからふじて高子をぬすみ出し、いとかろげにおひまひらせ、いとくらきにまぎれてにげたまひしが、芥川といふ河のほとりを行給ふに、草のはの露のきらめきしをたか子御らんじて、かれは何ぞととひ給へども、こたへもやらでにげ給ひしが、ゆくさき程へて夜もふけゝれば、と有所におろし參らせやすらひたまふ所に、御兄たちきこし召て、おつてをかけ給へば、やがておつ付高子をとりかへしゆきければ、なりひらいとかなしく面目なく、あしずりをしてなけども更に甲斐なし、あまりの事の悲しさに讀る、

白玉か何ぞと人のとひしとき
露とこたへてきゑなまし物を

此心は、くさばにをける露を、かれは何ぞととひしとき、しか〴〵こたへもせできたりしが、今おもへばくやしき也、しら玉か何ぞととはれしとき、きゑてはかなき露とこたへて、ともにきゑはてなんものを、とはれし白玉もわがみもはかなき露ぞとこたへてきゑなましかば、かくは物思はじと後悔の心いとふかし、

一さてなりひら、あながち左遷の罪にしづませ給ふにもあらざれど、人の嘲り世の聞ゑいとはづかしくおぼしめし、都にはすみうくやおぼしけん、ひとまづ田舎へゆきて住所もとめんとて、あづまの方へおはせしが、伊勢やおはりのあはひなる、其海づらにいとおもしろくたつ波を御らんじ、あとなつかしげに見かへり給ひて、

いとゞしく過ゆく方のこひしきに
　うら山しくもかへる波かな

此心は、いとゞさへすぎゆくあとの戀しきに、あのうみづらにたつ波の、よせてはかへるうらやましさよといへる心なり、

とかくうちながめさせ給ひてゆき給ふが、さして友とてあらざれば、ひとりふたりともなひて、物さびしきつれ〴〵に、しなのゝかたをうちながめたまへば、あさまのたけに立けぶりの、かすかにくゆるゆふげしきのかぎりなくおもしろさに、

しなのなるあさまのたけに立けぶり
　遠近人の見やはとがめぬ

此心は、なりひら物うきたびといひ、かくわびしき中にも、あさまのたけのゆふげしきはおもしろくおもふが、さぞなみやこにすみなれて、かゝる山のけしきを初て見るをちこち人は、たれとても見とがめぬものはあらじといふ心也、

とうちながめてゆかせたまふほどに、さだかに道しれる人もなかりしまゝ、まよひありきて三河の國八橋といふ所にいたり給ふ、そこを八橋といひけるは、水ゆく川の入ちがへ、くもでにながれけるまゝ、橋を八つわたせるにより八つ橋といひしとかや、その澤のほとりの木かげに立やすらひ、ほしいひなどきこし召、かなたこなたをうち詠めやすらはせ給ふに、其澤のかきつばたいとおもしろく咲みだれたるを、友とする人見たまひて、なりひらにうちむかひ、此杜若

といふ五文字を句の上に添へて、たびのこゝろを讀せ給へと有しかば、そのとき業ひらとりあへず、

から衣きつゝなれにしつましあれば
はる〳〵きぬるたびをしぞおもふ

此こゝろは、から衣たがひにきつゝなれにしつまをあとに殘しをきて、はる〳〵ときぬるたびの、いとゞ物うきことをしぞおもふといふこゝろ也、

是二條の后をおぼしめし、心をふくめ給へるなるべし、

と讀せ給へば、みな人御こゝろをかんじ泪をこぼし、餉いひの上にかゝりぬれば、ほとびぬると也、ゆき〳〵てするがの國うつの山にいたり給ひ、のぼらんとし給ふに、いとくらく道ほそうして、つたかつらおひしげり物心ぼそく、かゝるからきめを見る事とおぼす所に、すぎやうじやにあひたまふが、然もしる人にてや有けん、かゝる道いかで行給ふとおどろきたまふが、業平しか〳〵の物がたりなどして、京にゐます方へとて文かきて、かの修行者にことづてさせ給ふ御歌に、

するがなるうつの山邊のうつゝにも
夢にも人にあはぬなりけり

此心は、所の名によせするがなるうつの山邊といひしは、うつゝにもといはんまくらことばなり、夢にも人にあはぬなりと、よにうらめしくあはれもふかくよめる也、

さてなりひら、富士の山を見給へば、さつきの晦日なるに、ゆきいとしろくふりけるをうちながめたまひて、

時しらぬ山はふじのねいつとてか
鹿子まだらに雪のふるらん

此心は、山の名譽よいひ時しらぬ山はふじのねなるぞや、こなたはさつきの晦日成に、いつとてかおもひてふじの根には、小鹿のものまだらなるごとく、むら〳〵に雪のふるらんと也、

とうちながめ給ふに、山の高さ都にてたとへば、ひゑいさんを廿ばかりもかさね上たらん程にして、なかばしほをたるゝ砂をかき上たるがごとくにて、餘景かぎりなしとほめ給ひ、なをゆき〳〵て武藏の國と下總とのさかいに、いと大き成川有、それを隅田川と

いふ、其河のほとりに友どちむれゐて、ふりゆく跡を思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなと詫びしくおぼし召に、渡し守はや船に召せ、日もくれぬと云ひしかば、船にめして渡し給ふに、みな人物詫しくて、都にとれとても思ふ人なきにしもあらず、折しも白き鳥の觜と足の赤き鴫の大きさしたるが、水上に遊びて魚をくふを見給ひ、京には見へぬ鳥なれば、皆人見しらず、渡し守にとひければ、是なん都鳥といふ物ぞといふを聞給ひて、

名にしおはゞいざことゝはん都鳥
我おもふ人はありやなしやと

此心は、鳥をきけば都鳥といひしとかや、わが古郷の名とひとしければ、一しほなつかしく思へるぞや、都といへる名にしおはゞ、都の事をとふべし、我おもふ人は有やなしやといへるこゝろ也、

と讀給へば、みな人船こぞりして泪をながさぬはなし、さてそれよりむさしの國までまよひあるき給ひしが、その國にいつくしきむすめをもてる人有りしが、さすがに今とても色をすてがたく、又是に心をかけしのび給ふを親たちきゝ、父はつねしきの人もがな聟にとらんと思ひてせはしけるが、母は名高くすぐれたる人なれば、業ひらをと心懸しが、父はさもなき人なれども母は藤原氏なりけるまゝ、扨高家を望み給ふ、すみかはいるま郡みよしのゝ里なりけるが、彼なりひらをよき聟にすべききりやうなりとおぼしめして、かの母やがて歌をよみてつかはしける、そのすむさとはみよしのゝさとなりければ、

みよし野の田面のかりのひたぶるに
君が方にぞよるとなくなる

此心は、先所なればみよしのゝたのものかりにわがみをたとへ、君がかたによるとなくなるといひしは、わがつまはともいへかくもいへ、われはたのものかりとひとしく、ひたすら君が方に心のひかれよるといふ心なり、

なりひらいとうれしくて返歌に、

我方によるとなくなるみよしのゝ
田面のかりをいつかわすれん

この心は、さて／＼我方へこゝろのよるとの給ひしうれしさ、いつか忘んといふこゝろなり、

となん、人の國までもなをかゝる事なんやまざりけり、なりひらなをおくふかくあづまへ行けるに、友とする人にみちよりことづてゝ、かのむすめ方へよみておくらせ給ふ歌に、

忘なよ程はくもゐになりぬとも
空行月のめぐりあふまで

此心は、かくちぎりにしなさけをわするなよ、程はくもゐはるかにへだつとも、又めぐりあふまでと也、雲ゐはるかにへだつを、月のめぐりあふといへる面白し、

なりひら又立かへり通ひ給ふに、母はなをゆるしたまへど、父は更にゆるしたまはねば、なりひらかの女をかたらひ、ひそかにぬすみ出してむさし野へおひてにげ給ふが、父きゝつけてきびしく追手をかけしかば、草むらの中に立かくれ、ふたりひそかに忍びゐ給ふ處に、あとよりみちくるおつての者共のいへるは、此くさむらにや有らんに、いざ火をつけんといひしかば、女こらへず出てなくなくわびてよめる、

むさし野はけふはなやきそ若くさの
つまも籠れり我も籠れり

此心は、むさし野はけふはなやきそわかくさのつまもこもれり我も籠れりと也、古今には春の部に入て、春日野とかへて眺望の歌といふ、爰には草のつまなどいふにたとへていふなり、

とよみけるをきゝて、女を取返してともなひいにけり、そのゝちなりひら、京におはします高子の方へ、かゝる有さまの聞ゆれば恥かし、又我ゆくすゑの聞へねばくるしきよし文にかゝせたまひて、上書にむさしあぶみと遊ばしやらせ給ひけるが、そのゝち更におとづれもなかりければ京より、

むさしあぶみさすがにかけてたのむには
とはぬもつらしとふもうるさし

此心は、あぶみは兩方にかゝる物なり、そのごとく心のおほき人なれば、兩方へさすがにかけてたのむには、かくとひ給はぬもつらし、又とひ給ふもうるさしと也、

なり平のむさし鐙と書給ふは、さすがに心にかけてたのむの心、爰は二道にかくるの心なり、

と有をみて、なをたへがたき心ちして返歌に、

とへばいふとはねばうらむむさしあぶみ

かゝるおりにや人はしぬらん

この心は、かくとへば却てうるさしとの給ふ、又とはねばうらみ給ふ、かゝるおりにことかへば、しぬらめといふこゝろなり、

一なりひらむさしにも住うくやおぼしけん、心ならずみちのくまでゆきたまふが、爰にても人のつまなりし女なりひらを見まいらせ、さすがに都人はめづらかにやおぼゑけん、戀ひわびたへがたき心なん有けるにや、かの女の歌に、

中々に戀にしなずばくわ子にぞ

なるべかりける玉の緒ばかりず

此心は、中々にかゝる戀にしにもやらずば、くわ子になりたしとなり、此くわ子は糸わたなどするかい子の事なり、かいこは命一とせを過ざれども、ちぎりのふかき物なれば、そのごとく命は一とせを過さずとも、ふかくちぎりたくおもふと云心也、

かくよみておくりける、歌さへ田舍めひたるがさすがになりひらもあはれとやおぼしけん、一夜しのび給ふ、人めをつゝむ事なれば、まだ夜ぶかきにかへり給はんとしたまふに、女なごりやおしかりけん歌に、

夜もあけばきつにはめなでくだかけの

まだきに鳴てせなをやりつる

此心は、夜もあけなばきつにはとりをはますべし、まだよぶかきにつまをやりつるとなり、きつとは狐なり、くだかけとは家雞と書ていゑのには鳥也、かくにはとりをうらみし心いとふかし、

とよみければ、女の心あさからずおぼし召、京へかへらせ給に伴ひたくおぼしくてよめる、

くりはらのあねはの松の人ならば

都のつとにいざといはましを

此心は、本歌にをぐろざきみつの小島の人ならば、都のつとにいざといはましを、といふをとりてよみ給ふなり、心は、くりはらのあねはの松のごとくぬしなき人ならば、みやこへのみやげにいざといはまし物をといふ心なり、つととは土産と書也、

とよみ給へば、女もよろこびておもひける、一なりひらさもなき女とかろしめ給ふに、あやしう

さやうにもあらず見えければ、
しのぶ山忍びてかよふ道もがな
人の心のおくも見るべく
此心は、人の心はしれぬものかな、しのぶ山忍びてかよひ入べき道もがなあれかし、人の心のおくをもみんと也、
女かぎりなくめでたしとおもへど、さるさがなきゑびす心を見てはいかゞはせんとおもひける、
女なりひらにかぎりなくめづる心あれど、なりひらの人のつまなどに心をかけ給ふつよき心は、あづまゑびすの心のごとくなるをみては、いかゞせんとおもへるていなり、
一そのゝちなりひら京へ御かへり有てゐましゝ時、紀有常といふ人有き、此有常は三代の帝につかへ給ひ、ことに文德天皇の女御せいしと申は有常の御妹にて、皇子惟高親王をまうけ給へば、有常世にときめかせたまひしかども、皇子御くらゐあらそひにて、第二の皇子惟仁の御代をつがせ給ひ、清和天皇と御即位有しかば、いつしか有常の御いせい、あらたに殘る有明の日影に光りをうばはれ、かげのうすきがごとくなり給ふ、さすが又よのつねごときの人にもあらず、人がらはなを御心うつくしうけだかふして、きやしや風流をこのみ、今御いせいはおとろへぬれども、更にへつらふべくもなく、なをむかしよかりし時の心ながら、又おごらせ給ふ御事もなく、よのつねの事をもしらず送らせたまひしに、年ごろなれなじみたまふつまの、やう〳〵床はなれて終にあまになり、姉の先だちてはかなくなり給ひし所へ行たまふ、有常年來まことにむつまじき事もなかりければ、いまはと行給ふを愛あはれに思しめせど、貧しければするわざもなかりけり、いさゝかの物もがなくおもひわづらはせ給ひて、年來なりひらとむつまじく相かたらはせ給へば、なり平の方へ、かう〳〵の事にて今はとて別れにおよべ共、何事もいさゝくなる事もゑせでつかはすと文に書て、そのおくに、
手をおりてあひみし事をかぞふれば
十といひつゝ四つはへにけり
紀の有つね
此心は、手をおりて逢みし事をかぞへてみれば、十といひつゝ四つへたると也、十といひつゝ四

つへたるとは、四十年のかずをゆびおりてかぞゆふと云心也、かく四十年の内相なれたるに、今更わかるゝといひ、年來むつまじき心もなく、おもへばこそなれなじむ中を、かくつまふりすてゆくをおしはかり給へといふこゝろなり、

とよみてなりひらの方へおくらせ給へば、是を見給ひいとあはれとおぼし召、色々をとりそろへて、夜の物までおくらせ給ひ、よみそへ給ふ返歌に、

年だにもとをとて四つはへにけるを
いくたび君をたのみきぬらん

此心は、年だにも四十年が間そひなじみたまふ事なれば、そのうちいくたびか君をたのみに年をふり給ひつらん、今つまのわかれ給ふ心もさこそとおもひやらるれ、いかでそりやくにあらんと也、

とかくよみてやらせたまへば、有つねの返しに、

是やこのあまの羽衣むべしこそ
君がみけしとたてまつりけれ

此心は、是やこの天羽衣とは此衣なるべし、かゝるけつかうなる衣は、平人の衣にはあらじといひ、我心にはんじ、げにもこそなりひらの、天子のみけしなどを奉るやうにがなおもひて給はりつらめと也、むべしはげにもといふ心、宜と書也、みけしきは天子の衣なり、天子の御衣はみくしげといふを、爰にては衣裳とよめるなり、

悦びのあまり一首にて心たらぬ程に、又一首、

秋やくる露やまがふとおもふまで
あるは泪のふるにぞ有ける

此心は、あきは物かなしきときなれば、一しほうれへにたゆる心をふくめて秋やくるといひ、さてわが袖のぬるゝは、秋のきて袖をしぼるか、露の置て袖をぬらすかとおもへば、今我悦びにたゑずして、落る感涙にて有けるとなり、

一なりひら年比あひへだゝり、音信ざりける人の方へ、さくらさかりの頃見におはしければ、あるじなる女のよめる、

あだなりと名にこそたてれ櫻華
年にまれなる人も待けり

此心は、惣じて花はあだなる物と名にたてたれ共、まれ／＼來る人をもまちつけたるは、あだな

らぬ物をとなり、さてうらの心は、なりひらと相なれしころは、我をばあだ人と名を立たまへど、かくまで心もかはらでまれ人をもまち得たるは、花とひとしくあだならぬ物をとなり、

と讀みたまへば、なりひらの返歌に、

けふこずばあすは雪とぞふりなまし
きへずは有とも花とみましや

此心は、けふこずばあすはゝや心の花もうつりかはり、雪とふるべし、きゑずはありとても花とは見まじ、そのごとくけふきたればこそ花とも見れ、あすにもならば早君が心の花もうつりかはり、雪とちりて木かげの雪か花かきゑずはしれまじ、君が心の花のうつりかはらぬとき、きゑたればこそ花とはみれとなり、

一むかし色ふかき女、なりひらの家居ちかふ住居けるが、歌よくよむ女なりければ、なりひらの心ひきみんとて、白き菊のうす紅にうつろひたるをおりて、歌をよみそへつかはしける、

くれなゐに匂ふはいづらしら雪の
枝もとをゝにふるかともみゆ

此心は、此きくのくれなゐにいさゝかにほへど、花のうつろふといふはそれいづれぞや、たゞゑだのたはむ程に雪のふるかとみゆとなり、さてうらの心は、なりひらは紅の樣に色ふかき人といへるが、此白ぎくのごとく、くれなゐに匂ふかと見えて、更に色ふかくうつらず、雪のしろきがごとく、色なふしてこなたへ心のうつらぬと也、五色のうちにては紅は色ふかく、白きは本來の色にて物にうつらぬ色也、とをゝとはたはむ心也、

なりひらかく心をひきみる歌とはしろしめせど、しらぬよしにて返歌に、

くれなゐににほふが上のしら菊は
おりける人の袖かとも見ゆ

此心は、くれなゐににほふしらぎくの色は、たゞ花のうつろふにてはあらじ、おりける人の袖の香のうつろひなるべし、さては色ふかきくれなゐの袖にやあらんと也、

一むかしなりひら、染殿の后に宮づかへける女を相かたらひけるが、ほどもなく離々になりゆけど、おな

じ所なればたがひに見つ見られつすれども、更になりひら有かともおもひ給はねば、女の方より、

あま雲のよそにも人のなり行か
　さすがに目には見ゆる物から

此心は、君と我中いつしか遙にへだゝる天雲のよそにはなりゆけども、流石に目に見え給ふは、あま雲の目にはみてはるかにへだてたるがごとしとなり、惣じて天雲はへだつれば目に見ゆれど、うちそひて何もなし、能たとへなり、

とよめりければ、なりひら返し、

あま雲のよそにのみしてふる事は
　我ゐる山の風はやみなり

此心は、雨雲とわが身をたとへ、よそにのみしてふり心なるは、我がゐるべきそなたの山の風のはげしきゆへ也、そなたには主が有てそのあらしつよければ、我身の雨雲はよそにのみしてふるばかりなりといふこゝろ也、

一むかしなりひら、やまとに有女を忍びてあひたまひしが、程へて大内へ宮づかへのためかへらせ給ふに、道にてやよひばかりの事成しに、楓の紅葉のいとおもしろきをおりて、かの女のもとへ歌をそへておくらせ給ひける、

やよひごろに紅葉はなけれど、わくらばとてかいでの若葉の色、さながら紅葉するやうに色こきをいふなり、病葉と書り、

君がため手折れるゑだは春ながら
　かくこそ秋の紅葉しにけれ

此心は、君がため手折るゑだの、春ながら紅葉の色にうつりかはる事は、君が心にかくあきのきぬらんとなり、

とよみてやらせたまひ、返り事をなん今やと待たまへば、京へ來つきたまひてのちにもて來りける返歌に、

いつの間にうつろふ色のつきぬらん
　君が里には春なかるらし

此心は、まへの歌をうけてかく時にもなきかはる色の紅葉を給はるは、いつの間に君にかくうつろふ色のつきぬらん、君がさとには春のさかんなる花とおもへる心は、なべてはや君が心にあきの來て京へはかへり給ふかとなり、

一むかしなりひら、いとふかくおもひかはせし女、さしての事もなかりけるに、いかなる事かありけん、いさゝかなる事について、世の中をうしとおもひけるにや、出ていなんと思ひ、かゝる歌をよみて物にかきつけて置ける歌に、

出ていなば心かろしといひやせん
　世のありさまを人はしらねば

此心は、かく出てゆくならば、我が心をかろしと人はいひやせん、かゝるうらみ有てかんにんしがたき事を、人はしらねばとなり、

とよみをきて出ていにけり、なりひら此書をきたる歌を見て、あやしやさしてうらむべき事ともおぼへぬに、かく出て行は何によりてかゆきぬると、いとふかくなげきたまひ、いづかたにもとめゆかんと、門に出て左見右見けれど、いづこをはかりともおぼへざりければ、かへり入給ひてなく／＼よめる、

おもふかひなき世なりけり年月を
　あだにちぎりて我や住居し

此心は、思ふかひなきうき世ぞや、われはおろそかにおもはねど、かくわかれゆくは、この年月我あだにちぎりてや過しぬらんと、女は少もうらみ給はず、我身をうらみ給ふなり、惣じてなり平の心かくのごとし、さらにわが身にはしらねど、我あやまりや有らんとなり、

といひおりてたゞひとりながめさせ給ひて、又一首、

人はいさおもひやすらん玉かづら
　面かげにのみいとゞ見えつゝ

此心は、女はおもひやすらん、又思はぬやらん、われはわすれがたければ、面影にのみいとゞ見ゆるといふ心なり、玉かづらは女のかくる物なれば、女の面かげにたつといへる心によみつゞけたる歌おほし、

此女いとひさしく有て、又なりひらのかへれとのたまひやすらんとおもへ共、さもなければ程ふるにしたがひ、いとふかくくやみて又よみて越しぬる歌に、

今はとて忘るゝ草のたねをだに
　人の心にまかせずもがな

此心は、かくわかれて程をふるに、さらばとてうちすて給ふはわすれたまふか、せめてしのぶ草は生へずとも、わすれ草の種をばしまかせたま

ふなとなり、

とよみておこしければ、なりひら返へし、

わすれ草うふとだにきく物ならば
おもひけりとはしりもしなまし

此心は、わすれ草をうゆるとだにきゝなば、我おもふとはしりもすべし、更におもはぬ程ならば、わすれ草をうゆるまでもなし、思へばこそわするゝといふ事もあれとなり、そなたもわがおもふといふ事をしり給へばこそ、わすれ草の種をだにまかせずもがなとねがひ給へとなり、

又々ありしむかしより、げにふかくいひかはし給ひて、なりひら、

忘らんとおもふ心のうたがひに
有しよりげに物ぞかなしき

此心は、今又いとふかくかたらへども、わかれて物うき心をわすれ給ひて、又もや我をすていなんとし給はん事のうたがはしさに、有しむかしのちぎりよりなを物かなしきと也、

とよみ給へば、女返し、

半天に立ゐる雲の跡もなし
身のはかなくもなりにけるかな

此心は、女のわがはかなきを思てよめるなり、我心かろくしてさしもなき事に出しは、たゞ半天のくもりのごとく、むら／＼としたる心にてうか／＼と出しが、又くものあともなくねもなきやうに、又身のはかなき心にて立かへりたると也、

とはいひたれど、のちはをのが世々にわかれ、なをあひうとくなりにけり、

一むかしなりひら、はかなくてたへにける中なりしが、なをやわすれざりけん女の方より、

うきながら人をばゑしもわすれねば
かつうらみつゝなをぞ戀しき

此心は、一たびわかれうらめしさ物うきながらも、更に君をゑ忘れねば、かくうらみながらもなを戀しきものなり、

とよみければ、さればこそよといひて、なりひらの返歌に、

あひ見ては心ひとつをかはしまの
水のながれてたへじとぞ思ふ

此心は、あひみてよりかはらで、心ひとつにかはしまの、かりに中はへだつれども、するにて又もやながれあへば、ゑんはたへじとなり、

とはよみたまへども、そのよはそこにもゐ給はじ、御かへり有べしとて、いにしへゆくさきの事ども御物がたりなどし給ひて、なりひら、

秋の夜を千とせを一よになぞらへて◎マ、
百夜しねばやあく時のあらん

此心は只人にあくまじきといふこゝろをよめり、先秋夜はながき物なれど、千よを一夜になしてもゝよねたりとも、あく時のあらじといふこころ也、深く切なるをいはんためなり、

とよみたまへば、女返し、

秋の夜を千よを一夜になせりとも
こと葉殘て鳥や鳴らん

此心は、秋のながきよを千夜を一よになすとも、つもるむつごとはいかでかたりつくすべし、こと葉殘りてあけなん物をとなり、

とよみてきぬ〴〵になり給ふが、有しいにしへよりあはれになんかよひける、

一むかし紀有常、但馬讃岐の方へ田舍わたらひし給ひける比、有常の御娘いまだいとけなかりしが、なりひらもおさなくて、たがひに伴ひ遊びたまひしが、井筒のもとに立より、とも〴〵袖をうちかはし、たがひにかげを水かゞみの御面影にあひをなしたまひしに、やう〳〵諸たけなりしかども、いつの間にかはおとなしくなり給へば、なりひらも姫君もはぢかはしくて有しかども、下心にはなりひらも此姫をむかへめと思しめし、姫君もなりひらへとおぼしめせば、有常姫君をいづ方へかゑんをも結ばんと思しめせど、更に用ひ給はでおはせしに、なり平の方より、

つゝゐつの井筒にかけしまろがたけ
過にけらしないも見さすまに◎マ、

つゝゐつの井筒とは、かさねことばなり、つはやすめことばなり、つゝ井の井づゝなり、さて心は、井づゝに立よりてたがひに水かゞみにあひをなせしころは、わがたけもゐづゝと諸たけなりしが、妹見ざるまに井づゝのたけに過けるとなり、

とよみたまへば、返へし、

くらべこしふりわけがみもかた過ぬ
　君ならずして誰かあぐべき

此心は、もろこしのならひに、我がつまにせんとおもへるを、いとけなきころかみを結てたのみとする例あり、是を引てよめるなり、されども爰にての心は、くらべこしふりわけがみもはやかた過ぬが、女のゑんをむすばざらねばかんざしをせぬが、我がかみのいかほどもかた過に、君ならずしてたれにかあぐべきと也、

などゝいひ〳〵て、つゐに本意のごとくあひ給ひけり、さて年比ふる程に、又河内の國たかやすの里に、なりひら行かよはせたまふ所いできて、夜な〳〵かよはせ給へ共、更にうらみさせ給ふけしきもなかりしかば、なりひらいとあやしくおぼし召、よそ心有てかゝる體にや有らんとうたがはしくおぼし召、有ときいつも河内へかよはせたまふ體にもてなし、せんざいのかきほのほとりに立かくれて見給へば、さはなくていとうるはしく假粧などしたまひて、なり平のゐなせ給ふ道すがらを打案じたまひ、かわちのかたをながめやりてよめる、

風吹ば興津しらなみたつた山
　夜半にや君がひとりこゆらん

此心は、風吹ばとよみしは、おきつ白波といはんまくらことばなり、白波とは盗人の事なり、なりひらのかよひ給ふ河内への道、龍田ごへには夜うち強盗有て、ぶつさうなる所ときゝしが、夜はにや君がひとりこへ給ふかとなり、

とよみたまふを聞召、なりひらかぎりなくかなしくおぼし召、かゝる貞女をしらでうたがひし事のくやしさよ、今ははやたかやすへ二たび通はじとおぼし召、それよりおもひとゞまり給ひしが、又まれ〳〵にたかやすへゆきて見たまへば、初めこそ心にくゝもおはしましけれ、今はうちとけて手づからいゐかひとりて、家子のうつわものにもりなどして、賤の女のわざをし給ふを御らんじ、なを心うく見かぎり給ひて、いよ〳〵たへ〴〵になりければ、かの女やまとの方をゆかしげに見やりてよめる、

君があたり見つゝおくらん生駒山
　雲なかくしそ雨はふるとも

此心は、大和河内のさかひなるいこま山は、なり

平のおはします方の山也、去程に雨はふるとも
此山はくもなかくしそ、君があたりを見つゝお
くらんと也、
とよみて見わたしくるしみけるが、なり平又こんと
いひし言葉の有しをよろこび待に、日数かさなれど
もましまさねば、
君こんといひし夜ごとに過ぬれば
たのまぬ物の戀つゝぞぬる
此心は、いひし夜も幾よか過ぬれど、たのみなき
事ながら、又戀つゝぬるといふこゝろ也、
一むかしなり平かたゐ中にすみ給ひて、有女をかた
はらせ給ひしが、京へつとめにましまして、三とせの
程見えさせ給はねば、此女あまり待わびけるが、古語
にも其夫外番に沒落して、子あらば五年、子なくんば
三年にして嫁を改る事をゆるすとあれば、業平に別
れてよりやう〳〵三とせを待わびけれどもましまさ
ねば、又いと念比にいひける人有しまゝ、こよひあは
んと契りたりけるに、なり平折しもその夜來り給ひ
て、つま戸を音づれあけたまへと有しかば、女おどろ
きて戸を明て歌をなんよみて出しける、

あらたまの年の三とせを待わびて
たゞこよひこそ新枕すれ
此心は、三とせがほどなり平をまちわびて、こよ
ひ新ゐまくらするとも、定家卿の歌に、忘るなよ
三とせのゝちの新ゐ枕、定むばかりの月日なり
とも、
とよみてかくす所もなくいひければ、なりひら、
あづさ弓ま弓つき弓年をへて
我せしがごとうるはしみせよ
此心は、あづさ弓ま弓月ゆみ年をへてといへる
は、弓はひかれてよる物なれば、君に心ひかれて
三とせの年をへて、わがいひかはしたる言葉を
うるはしくせよといふ心也、あづさ弓ま弓月弓
三つかさねて年をへてとあれば、三つのくると
いふ心をのづからそなはり、三とせの心こもり
たるなり、され共先かさね言葉成べし、
とよみていなんとし給へば、女袖をひかへて、
あづさ弓ひけどひかねどむかしより
心は君によりにしものを
此心は、君が心はひくやらんひかざるやらん、ひ

くともひかずとも、むかしより我心君がかたへ
ひかれよるものをとなり、
とよみけれど、なりひらかへり給へば、女いとかなしくて、御後にたちておひゆけどゑおひつかで、清水の有所にひれふしてなきかなしみ、そこなる岩ほに小ゆびをくいきり、そのちをして書付ける歌に、

あひ思はでかれぬる人をとゞめかね
我身は今ぞ消はてぬめる

此心は、あひ思はでかれぬるは離の字也、おもはで離れぬる人をとゞめかね、我身は今ぞおもひにきゑはつると也、
とかきて、そこにいたづらになりにけり、
一むかしなりひら、小野小町の方へしづ心なくかよはせ給ふが、何とやらんなりひらにうらみ有にや、あふべしとも又あはじともせざりけるが、さすがきれはなれたるやうにも見えざりければ、小町の方へよみてやらせ給ひける、

秋の野にさゝわけし朝の袖よりも
あはでぬる夜ぞひぢまさりける

此心は、秋野のさゝの露ふかきをわけし朝の袖よりも、こよひあわでぬるよのなみだは、いとふかくぬれぬると也、
とよみ給へば、色このみなる女返し、

見るめなき我身をうらとしらねばや
かれなであまのあしたゆくくる

此心は、見るめなきうらとしらねば、たへず朝なあまの行きてうらめしとおもふが、そのごとくそなたもわがみを見るめなきうらみ有ことしらねば、ゆきかよふてはうらめしくおぼしめすとなり、
一むかしなりひら、二條の后にかよはせたまふとき、そめ殿の后あはれみせたまひしを、いと御なさけあさからず思し召、次におりふし五條の后御尋有しかば、かたじけなさのあまりに、

おもほへず袖に湊のさはぐかな
もろこし船のよりしばかりに

此心は、おぼへずこぼるゝなみだの海となり、袖にみなとのさはぐは、もろこしぶねのよりしばかりにとなり、うらの心は五條の后をもろこしぶねにたとへ、是にいにしへ二條の后へかよひ

しころ、いましめ有べきを我心をおしはかり、あはれみ給ふ御心ざし、あまつさへ御尋に預る事、一かたならぬ御なさけ有がたければ、なみだのおぼへずこぼれて海となり、もろこしぶねのよるばかりに、神のみなとのさはぐとなり、

一むかしなりひら、有女のもとへ一夜まし〳〵、又もいかずなりにければ、彼女いどゝ戀わびしが、有とき手あらふ所に、手盥にかけたる貫簀を取のけしかば、おとろへたる面かげの見えけるを、みづからなげきてかくなん、

貫簀とて、だいりにては手あらふに、前へ水をかけじとて、すをあみて手だらいの上にかくるなり、是をぬきすといふなり、

我ばかり物思ふ人は又もあらじと
おもへば水の下にも有けり

此心は、我ばかり物おもふ人は又もあらじとおもへば、水の下にもありけるぞや、かゝるおもかげの見ゆるとなり、

かく詠じければ、なりひら立ぎゝし給ひて、

水口に我や見ゆらん蛙さへ
水の下にてもろごゑになく

水口になくかはづの一つなけば、みな諸ごゑになくが、そのごとく我そなたをおもひてなげくゆへ、そなたもなげき給へ、わがおもはずばさも有まじ、思へば水の下にも有けりとよみ給ひしは、水口に我なげく面影や見ゆらん、かはづとひとしくなげき給ふはとなり、

一むかしなりひら、色好なる女にふかく契りたまひしが、いかゞうらめしき事や有けん出ていにければ、業平いとかなしみて讀る、

などてかく逢期かたみに成にけん
水もらさじとむすびし物を

此心は、などてかく逢期かたくは成にけんといひ、それをあふ籠といふ心にとりなして、かたみの心をふくめ、なにとてはかく逢ふ事のかたくはなりにけん、水もらさじとちぎりしに、籠に入たる水のごとく、もれてあとかたもなくあだになりて、籠ばかり殘るはかたみになりつるかとなり、

一むかし長良卿の御娘、たゞ人にておはしけるが、終

に清和天皇の御寵愛有て、貞觀十一年十二月二十六日に貞明親王を産せたまひ、翌る二月に親王を皇太子となし給ふにより、高子をも女御となし給ひ、春宮の御母義とあふぎ奉る、其比染殿の后花の賀の御祝ひおはしけるに、なりひらも此御賀に召くわへられしに、高子の女御ときめかせ給ふを御らんじて、有しむかしを思し召出し給ひ、うちなげきてよめる、

花にあかぬなげきはいつもせしかども
けふのこよひに似る時ぞなき

此心は、花にあかぬなげきいつもすれども、けふのこよひに似る時はなしと、たゞ花の賀になぞらへてよみたまへども、實意は高子の事なり、高子の花のすがたにあかぬなげきはいつもすれども、けふは一しほまして今宵のおもひに似たるときはなしと也、

一むかしなりひら、かわすばかりの手まくらのいささかなりし女のもとへ、よみてやらせ給ふ歌に、

あふことは玉の緒ばかりおもほえて
つらき心はながく見ゆらん

此心は、あふ事は玉の緒のいさゝかばかりにて、つらき心のながきおもひと成しとなり、

一むかしなりひら、大内にて有宮女たちのつぼねのまへを通らせたまひしに、なにのあだにか思ひけん、よしやくさはよならんさがみんといふ、なりひら聞召、いかなる事ぞとかんじたまへば、よしやくさはよといへるは、なりひらのさかりもよしやくさはのさかへるならんといふ心、さがみんとは惡の字をかけり、不詳なるをいへるすゑにて、惡しからん事をみんとの心なり、さればなりひらをそねみて、今若くさのさかりなるも、秋風の立てしほるゝ時あらん物をといふて、呪咀よとおぼしくてよめる、

つみもなきひとをうけへばわすれぐさ
をのが上にぞおふといふなる

此心は、とがなき人をのろへば、かへつて身おふと云が、かくのごとくわれをのろひ給へば、身におひ給ふべしと也、

○あしかれと人をばいはじ難波がた我身のとがのかへるしら波といへるにひとし、

かくいひかはすをいかさまゆへ有らんと、ねたましくおもふ女もありけるとなり、女のあさましき心の

ならひなるべし、

一むかしなりひら、いとふかくいひかはせし女に、年ごろへだゝりなつかしくやおぼしけん、歌よみて遣はしける、

いにしへのしづのをだまきくり返し
昔を今になすよしもがな

いにしへのしづのをだまきといふは、しづの女のいとなみに、苧をうみてまきたるをしづのをだまきといふ、さればくりかへしてまく物なれば、くりかへすといはんまくらことば也、歌の心はいにしへふかくかたらひしに、今たへ〴〵になれば、またしづのをだまきのやうに、いとながくくりかへし、むかしを今になしたきと也、

とよみてやらせ給へど、女何とも思はずや有けん、さして返歌もせざりけり、

一むかしなりひら、津の國むはらの郡領知なれば、かよひ給ひしに、此さとにしたしくなれし女有しが、なりひら此たびおはしけれ共、又かへらせ給ひなば、もはやおはせじと女のおもへるけしきなれば、なりひらさはなしと女をいさめてよめる、

蘆べよりみちくる潮のいやましに
君に心を思ひますかな

此心は、あしべよりみちくるしほぞ、さしてそれとは見えねどいやましにふかくなる物なり、そのごとく我心もさして上には見えねども、いやましにふかくおもひのましこそすれ、いかでこざる事のあらじといさめ給ふ心なり、

とよみたまへば、女返へし、

こもりえにおもふ心をいかでかは
舟さすさほのさしてしるべき

此こもり江といふ心は、くさなどおひしげり、木かげの落葉などにうづもれて、そこども見えずふかき江もあさくみゆる也、みちくるしほのいやましに、おもひのふかしとよみ給へども、こもり江のごとくふかき御心なからめど、去とてはあさく見ゆる、あはれ船さすさほのさして、ふかきかあさきかしるべきと也、

一むかしなりひら、有女に歌よみてやらせ給へど、つれなかりければ、面なくてよめる、（おもなくては面目なきこゝろ、）

いへばゑにいわねばむねにさはがれて

心ひとつになげく比かな

此心は、いはんとすれ共ゑいはず、又いはねばむねにみちてさはぐやう也、さる程にわが心ひとつになげくと也、かくよめる心は、是ほどに歌をよみ言葉をつくせども、更になびき給はねば、面目なくもはやゑもいわず、いわねばむねにさはがれて、我心一つになげくとなり、

一むかしなりひら、ちぎり給ひし女に、たゞ何となく心にもあらで、中たへ〴〵になりしかば、ゆかしさのあまりによめる、

玉の緒をあはをによりてむすべれば
　絶ての後もあはんとぞ思ふ

此玉のをはいのちの事、又はいさゝかばかりの事をいへど、爰にてはたゞ玉のをと心へ糸とおもふへし、あはをによりては、あはせたる緒をよりてむすべるは、わかれても又もとのごとくよれてむすぼふる物なり、そのごとくひきわかれて中たゑたりとも、あはせいとのむすぶが、わかれたるにひとしく、又むすびあはんといふこゝろなり、

一むかしなりひら、あさからぬ中なりしもとへ、中絶てとひ給はねば、打すてわすれ給へるかと、女心もとなくおもひてとひごとしければ、なりひらのよめる、

谷せばみ峯まではへる玉かづら
　たへんと人に我思はなくに

此心は、谷のせばきにはへたる玉かづらの、みねまでつゞきたるごとく、たへまじとの心也、もし谷もせばくあらずば、よそへも心をうつすべきが、谷せばなりとよみしは、よそへ心をかけず、いづくまでも中たへじとわが思はぬにと也、

一むかしなりひら、色ごのみなる女にあひ給ひしに、あまり色ふかくましませば、よそ心も有ぬべしとうしろめたくやおぼしけん、歌に、

我ならでしたひもとくな朝がほの
　ゆふかげ待ぬ花には有ども

此こゝろは、われならでしたひもとき給ふな、あさがほのゆふかげまたず、はやうつりかはる御こゝろなりともと也、

とよみたまへば、返歌に、

ふたりしてむすびしひぼをひとりして

逢みるまではとかじとぞ思ふ

此心は、ふたりしてむすびしひぼをひとりして、又あひみるまではとくまじ、いかにもかはらじとのこゝろ也、

一むかしなりひら、紀の有常のもとへおはしけるに、有常かりに行給ひておそく御かへり有ければ、そのほど待わびて御かへり有ければよめる、

君によりおもひならひぬよの中の
人は是をや戀といふらん

此心は、君をまちわびてけふ初てならひゐたり、よの中の人のかやうの事をや、こひといふらんと也、

とよみたまへば、有つね返し、

ならはねばよの人ごとに何をかも
戀とはいふとゝひし我しも

此心は、我も終に戀といふ事をならはねば、世の中の人ごとに何をか戀とはいふやらんとしらざりしが、今なりひらの我ゆへ戀といふ心をしり給へば、しらざりし我しも戀の師となれる也、なりひらのかゝる事を戀といふらんとの給ふにて、我もまたこひをしりたるとなり、應ㇾ有㆘春魂化爲ㇾ燕、年々飛入未央樓㆖といふがごとし、夕されば野邊のあきかせ身にしみて、うづら鳴なり深くさのさとゝ、俊成卿のよみ給ひしを、俊惠がたゞあきかせばかりにてをかで、身にしむといへるあしきとなんじたりしを、俊成きこし召、是を風の身にしむとおもひては曲なし、うづらとなりて吟ずれば、歌も身にしみてふかくおもふと申されたるなり面白し、

と女のよめるにめでゝ、なりひらあはれとやおぼしけん、またゆかんと思ふ心もなくとゞまりたまふとなり、

一むかしなりひら、いかなる事をおぼし召けるおりにか、讀給ひし歌に、

おもふ事いはでぞたゞにやみぬべき
我にひとしき人しなければ

此歌の一體は、先おもふ事いはでたゞやむべし、我に同じとき人のなければといふ心なり、論語陽貨篇にも、

子曰予欲ㇾ無ㇾ言、子貢曰子如不ㇾ言則小子何述焉、

子曰天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉、註曰、學者多以二言語一觀二聖人一、而不レ察二其天理流行之實有一レ不レ待レ言、而著者是以徒得二其言一、不レ得二其所二以言一、故夫子發レ此以警レ之と有に同じ、若かくのごとき心にやあらん、

此所の註に、闕疑抄にも御説に、此歌の義理をおほせられずして、たれも〳〵是を心にしめば、あやまりは有まじきとばかりしやくしたまふとあり、思ふ事などとふ人のなかるらん、あふげば空に月ぞさやけき、此歌もこの心よりよめるなり、

一むかし業ひらわづらはせたまひ、御心ちしなせたまふべくおぼへさせ給へば、

つゐに行道とは兼て聞しかど
きのふけふとは思はざりしを

此心は、つゐにゆくとはかねてきゝしかど、きのふよけふよと過うつる月日を、たゞなにとなくおもはざりしを、一切衆生にしらせたしといへる心なり、大和物語には、中將此歌をよみてなん扨果にけるとかけり、

此物がたりになりひらの始終をあぐるゆへ、元服の朝よりくわくりんのゆふべまでに書とゞめ、むかしと書出す事尤筆勢かぎりなし、去年は今年のむかしとさり、きのふはけふの昔とうつるを、終にゆく道とは兼て聞しかど、昨日けふとは思はざりしを、おどろかし給ふ實發心說法妙文ならずや、貴べし〳〵、

業平昔物語　上之二

むかし淳和天皇を西院の帝と申たてまつりしが、その御子崇子の親王と申は、うゐ無常は高位とてまぬかれたまはず、世をはやふうせさせたまひしが、其御はふむりの夜は、なりひらもことに御となり成しかば、御とぶらひにおはせしに、なり平女ぐるまにめして御出有しが、うちなげきておはします所へ、あめの下の色ごのみ源のいたるといふ人、是も御とぶらひを見に來けるに、此くるまを女ぐるまと見て、うちゆかしげに見しかども、いと闇ふして見へざりければ、折しも五月のころなれば、螢をとりあつめかの車へなげ入、そのひかりにてくるまのうちを見れば、女にはあらでなりひらのおはしてよめる、

出ていなばかぎりなるべきともしけち
年經ぬるかと泣こゑをきけ
此心は、今崇子の親王はふむり奉るが、野邊へ出給はゞ是がかぎりにてましますべし、ともしけちとは、かくともし火のきへたるやうにきゑ給ひしも、さらば年へ給ふ御身にもあらず、いとわかくして世をはやうさりたまへば、無常はかかる物ぞとみな人のなげくをきけと、いたるを耻しめ給ふ心なり、
とよみ給へば、いたる返歌に、
いとあはれなくぞ聞ゆるともしけち
きゆる物とも我はしらずな
此心は、なりひらのなくこゑをきけとよまれしをきゝうけて、寔にあはれになくこゑの聞ゆるが、淺ましや我は更にこし火のきへたるやうに、たへて寂滅するとはおもはず、一切衆生は體をはなるゝを死といひていとひなげくが、生るより四大をかりて死してもとの四大をかへさでかなはず、それ生るより死するといふはかねて定る事なり、今更おどろくべきにあらず、さる程に本來一物は常住不滅にしてきゆるといふ事なし、我はきゆるとはしらず、かくなげくはあはれなりと也、
あめの下の色ごのみの歌にてはなをぞ有ける、いたるは順子がおほぢなりみこのほいなし、
なをぞ直とも猶ともいふこゝろ有べし、歌の道理直にかなへど書の爲には本意なし、
一むかしなりひら、けすしうもあらぬ人のむすめをおもひしに、さかしらするおや有て、此むすめおとこにおもひ付てはいかゞとおもひて、外へやらんといひしかども、さもなかりしが、業平もさすが人の子なればとゞむべきいきおひもなし、むすめもまた若ければすまふちからもなし、たがひにおもひはいやまさりけるに、おや此むすめを終におひいなせける、業平ちのなみだをながしてなげき給へど、更にかひなく出てゐにければ、なりひらなく／＼よめる、
出ていなば誰かわかれのかたからん
有しにまさるけふはかなしも
此心は、女にたいして、出ていなば誰にかわかれかたからんといひ、有しにまさるけふはかなし

もとは、女のよそへいなば我も此よにあとをとどむまじければ、わかれのかたきといふ事も有まじきが、有しにまさりてけふはかなしきと也、とよみてたへ入給へば、親あはてけるが、なを我人のためおもひてこそいひしに、いとかくしもやせんとおもふに、眞實にたへ入給へば、あはてまどひて御かほに水などそゝぎ、神に祈り事などしければ、けふの入あひばかりに入て、翌るいぬの時ばかりに、やうやう御いのちからふじていき出たまひける、むかしの若人はさるすける物おもひをなんしける、今のおきなまさにしなんや、

一むかし一腹ふたり有ける女まし〱しが、ひとりはいやしき男のまづしき、ひとりは勝貴なる男もてりけり、いやしき男もてる女、師走の晦日に男のうわぎぬをあらひて、手づからはりけるに、心ざしはいだしけれど、さるいやしきわざもならはざりければ、うへのきぬの方をはりやりて、せんかたもなくてたゞなきになきゐたるを、是をかのあでなる男聞て、いと心くるしかりければ、いときよらなる緑衫うへの衣を見出してやり給ふとてよめる、

むらさきの色こきときはめもはるに
　野なる草木ぞ別れざりけり

此心は、むらさきを女にたとへ、むらさきの色こくめを出すときは、野べのくさ木までみなむらさきにうつろひて、どれをどれ共わかれぬが、そのごとくわれも女に色ふかければ、むらさきのゆかりまでもむつまじきとなり、

本歌にむらさきの一もとゆゑにむさし野の
　草はみながらあはれとぞみる

此むさし野の心をとりてよみたまひしなるべし、

一むかしなりひら、色ごのみとしる〱女にあひ給ふ有しが、されどもかねて色ふかきとしろしめせば、さしてにくゝもおぼしめさざりけれども、さすがうしろめたくおぼしめせば、ことにかよひ給ひてなをうしろめたく心をかせ給へども、さるにても流石すてがたき中なりければ、二日三日さはる事有てゑいかでかくなんよみてつかはしける、

出てこしあとだにいまだかはらじを
　誰通路と今は成らむ

此心は、わが出て來しあとだに、いまだかはるま

じきを、そなたは色好みなれば、早誰人の今はかよひぢとなるらんとなり、

なりひら物うたがはしさによめるなりけり、

一むかし桓武天皇第七の皇子賀陽親王と申御子まし〳〵しが、その御子ふかくあはれみて召仕はせたまふ女に、いとうるはしき有けるを、なりひらなまめきて我のみとおぼしける、かやうの御子御てうあひのやうに聞付て、かの女へ文やらせたまふとて、時鳥を繪に書て歌に、

ほとゝぎすながなく里のあまたあれば
猶うとまれぬおもふ物から

此心は、ほとゝぎすのなんぢが鳴さとのあまたあれば、うとまんとすれども、なをこゑなつかしくおもはるゝが、そのごとくそなたの心のよるかたあまた有ときけば、うとまんとおもへどもなをおもはるゝとなり、

とよみてやらせ給へば、女なり平のうたがはせ給ふけしきを取てよめる、なり平のきげんとるこゝろなり

名のみたつしでのたをさはけさぞ啼
いほりあまたとうとまれぬれば

此心は、名のみたてたまふほとゝぎす今始てなくなり、いほりあまたと君にうとまれぬれば、かなしさになくとなり、しでの田をさとはほとゝぎすを云也、

時しもさ月の比になん有けるに、なりひら又返し、

いほりおほきしでの田おさは猶たのむ
我すむさとに聲したへずば

此心は、いほりおほくほとゝぎすはなけども、わがすむさとにこゑたへずば猶おもふべし、そのごとくいほりおほく御心のよる方あまたなりとも、我にだにたへぬ御心ならばなをしたのむとなり、

一むかし紀有つねゐ中へおはしけるに、なりひらの御しうとにてましませば、馬のはなむけせんとて、御首途祝ひによばせ給ひ、御つまは有つねの御娘にてうとからぬ中なれば、首途の御盃を遊ばし、御餞別にとてから衣を遣せられしに、なりひら歌よみて、から衣の裳の腰にゆひ付させつかはされける歌に、

出てゆく君がためにとぬぎつれば
我さへもなく成ぬべきかな

此心は、出で行人のために、衣をぬぎてはなむけにすれば、われさへもがなくなりたると也、もとは喪の字わざはひとよむ也、衣の裳なきといふ心を、喪のわざはひなき心にとりなしてよめる也、

此哥は有が中におもしろければ、心とめてよます、はらにあぢはひて、

なりひらの歌の中にもおもしろき歌なれば、心とめはらにあぢはひてよみ給べしとなり、

一むかしなりひらに、人のむすめのいづきかしづく有しが、いかでかくなりひらにいひ出ん事もはづかしく、心にこめておもひけるが、物やみになりて終にしぬべきに望み、めのとやうの者をちかづけて、なりひらにかくこそ思ひしかど、今はおもひにたへかねはかなく成ぬるよといへば、親是を聞てなりひらにかくつげたりければ、なり平などひおはしませど、はやはかなくなりにければ、終に逢ひ給はねど心ざしのいとふかきをあはれに思しめし、御なげきのあまりに物忌に成給ひ、つれ〴〵と籠りたまふ、時は水無月晦日なれば、いとあつきころほひにて、宵はあそびをりて夜更がたにやゝすゞしき風ふきて、飛かふ螢もうちみだれていと高くとびあがるを、なりひらうちふしながめさせ給ひて、

ゆく螢雲の上までいぬべくば
　秋風ふくと鴈につげこせ

此心は、かく螢たかくとびて、雲の上までいぬべくば、かゝるあきかぜの吹てすゞしきと、かりにつげてもよほしこせといふこゝろ也、

くれがたき夏の日くらし詠れば
　其ことゝなく物ぞかなしき

此心は、日のながふしてくれがたきにくれぬるは、世にはかなきむじやうのおもはれて、物かなしきとなり、その事となくといひしは、みまかりし人にはなじみたる事なければ、さも有まじきに我をふかく戀てしゝたるふびんさのあまりもには入しかど、そのことゝなく物ぞかなしきとなり、

一むかしなりひら、いとむつまじく相かたらひし友だちのありけるが、かたどきさらず相おもひけるを、其友他國へつきければ、いとあはれと思しめし、わか

れたまひてそのゝち月日へてゆかしくやおぼしけん、友だちのかたよりおこせたる文に、

文 淺ましくゑ對面せで月日へにける事、忘れやし給ひけんといたく思ひわびてなん侍、世の中の人の心は、めかるれば忘れぬべきものにこそあめれといへりければ、よみてやる、

めかるれば、あさましくたいめんせで、めかるればなどふみのことばなり、

めかるともおもほへなくに忘らるゝ

時しなければ面影にたつ

此心は、こなたはめかるともおぼへず、わするゝときしなければ、常におもかげのはなるゝ事なしと云心也、

一むかしなりひら、念比にいかでとおぼしける女有、され共業平色好みなりければ、あだなりと聞てつれなさのみまさりつゝ、ふかくうらみてよめる、

大ぬさのひく手あまたに成ぬれば

おもへどゑこそ頼ざりけれ

大ぬさは祓の具幣串なり、あれ是あまた手をふるゝ物なり、其ごとくなりひらもあれこれに手をふれ引手あまたになり給へば、我はおもへどゑこそたのまれねと云心なり、

とよみて越しければ、なりひら返へし、

大幣と名にこそ立れながれても

終によるせは有といふ物を

此心は、ひく手あまたなる大ぬさなどゝ名にたて給へど、大ぬさはらへしてながせば、かならずよる瀬あり、そのごとく我も引てあまたなりとも、つゐによるせはそなたへなるべしと也、

一むかしなりひら、紀利貞といふ人阿波のすけといふ所へ行けると聞て、むまのはなむけせんとてよびにやらせたまひ待わび給ふに、利貞こゝかしこありきて夜ふくるまでましまさねば、まちわびてよめる、

今ぞしるくるしき物と人待たん

里をばかれずとふべかりけり

此心は、とし貞をまちうけて、人まつ事はくるしき物よと今ぞしりたり、人またんさとへは萬事をさしをき思ふべしと也、

一むかしなりひら、御妹いときよくなる御そだちなりしを、つくぐと御らんじおりてよめる、

うらわかみねよげにみゆる若くさを
　人の結ばん事おしぞ思ふ

此心は、御いもうとを若くさにたとへて、ねのよき若くさはいづくにうへてもかれまじと見ゆるが、うらわかみはいづくへゑんをむすびてもかれまじききりやうと見ゆるに、后女御ともなさではいかなる人にや結ばん、ゑんは定なければ、人の結ばんゆくすゑのおもはるゝとあはれみて、かくよみ給へる心なり、

とよみ給へば、御いもうとの返歌に、

初草のなどめづらしき言のはぞ
　うらなく物を思ひける哉

此心は、なり平の若くさとよみたまふ心をうけて、初ぐさといひ、珍しきことのはといはんために、初の字を置り、さて歌の心は、なり平の常はかゝる事を仰せらるゝ事もなきが、かくの給ふ初草のことのはゝ、いと珍しきおほせなり、うらなく物をおもふとは、心にてつして有がたく物思ふと也、

一むかしなりひら、有女をうらみたまひてよめる、

鳥の子を十をづゝとをはかさぬとも
　思はぬ人を思ふ物かは

此心は、卵はすべりてかさねがたき物なるが、十をづゝ十は百也、まして百かさぬる事はなをかたかるべし、よにあやうき事なり、さのごとく卵をかさねんとするとも、思はぬ人をおもふ物にてはなし、それよりも猶あやうきと也、惣じて世間のあやうき事を累卵と云、文選の注に說苑を引、晋平公が時に九層の臺をつくる、荀息が是をいさめんとて、臣はよく碁子を十二かさねて、其上に卵九つを重ぬる事をすると云、平公の云、それはあやうき事也、荀息が云、是あやうからず、公の九層臺を作て百姓をわづらはす、是はなはだあやうき也と云、平公の領解して臺を作る事止たり、歌は此故事をひきてよむにはあらねどよくかなへり、

とよみたまへば、女返へし、

朝露はきえ殘ても有ぬべし
　たれか此よをたのみはつべき

電光朝露はあだなる物なり、露は朝ばかりをき

て日かげに終きへて殘らぬものなるが、若しせんに朝露はきゑ殘る事も有もやすべきが、たれか此よに殘りとゞまるべきと、世のあだなるによそへてなり、平の心のあだなるは、たのまれぬといふこゝろよめり、

またなりひら、

吹風にこぞのさくらはちらず共
　あなたのみがた人のこゝろは

此心は、吹風にことしの花もちらずしては有まじきに、ましてこぞの櫻がなにとて殘るべきぞ、それよりもたのみがたなきは人のこゝろぞと、いふこゝろなり、　縱舊年花殘㆑梢待㆓後春㆒難㆑賴是人心、

亦女返へし、

ゆく水にかずかくよりもはかなきは
　思はぬ人をおもふ成けり

此心は、ながれてゆく水に繪をかくとも、かくうちよりながれてあとかたも有まじ、それよりもはかなきは、おもはぬ人をおもふなりと也、

又なりひら、

ゆく水と過るよはひとちる花と
　いづれまてゝふことを聞らん

此心は、ゆく水も過るよはひもちる花も、いづれもとゞめがたきものなり、いかにとむるとも、まてといふ事を聞物にあらずといふこゝろ也、論語曰子在㆓川上㆒曰逝者如㆑斯夫不㆑舍㆓晝夜㆒と孔子もの給ひし也、されば人のよはひの日をくらし、夜をあかしかたぶき過すは、ながるゝ水のごとくとゞめがたし、あとへかへらず、花も又落花二たびゑだにかへらずといへり、そのごとくあだなる人は、いふにかひなしといへり、

一むかしなりひら、有人の前栽に菊うへけるを見給ひて讀る、

植しうへは秋なきときや咲ざらん
　花こそちらめねさへかれずば

此心は、うへし上は秋のなきときはいさしらず、さかぬといふ事は有まじ、たとへさきて花こそちらめ、いかでねのかれめや、根さへかれずば幾秋も〳〵華はさくべし、惣じてきくはねさへあれば、いつまでもはゆる物なり、此幾秋もさかゆ

るによそへて、千秋萬歳をいわひてよめり、

一むかしなりひらの方へ、五月五日なればかざり粽を送りければ、その返へり事に、

大内には粽を五色にまく故にや、かざり粽と云り、

あやめかり君はぬまにぞまどひける
我は野に出でかるぞ詫しき

此心は、けふはあやめのいわひとて、ちまきを給りしが、定て君はぬまにまどひてあやめをかり、ちまきをして給はり、我は野に出でかりをしてきじをおくるといふこゝろ也、

とてきじをなんおくりける、

一むかしなりひら、あひがたき女にあひて、いとめつらしく思しめし、物がたりなどあそばしけるに、おもはず鳥の鳴ければ、名ごりおしげによめる、

いかでかは鳥の鳴らん人しれず
おもふこゝろはまだ夜ぶかきに

此心は、あひがたき人にあひて、一しほいとめつらしく、夜のふくるとも覺へぬに、いかでか鳥の鳴らん、人しれず夜ぞふけつらめ、わがおもふ心はまだ夜ぶかきに、はやあくるかとおどろくてい、尤かぎりなし、

一むかしなりひら、つれなかりける女によみてやらせたまふ歌に、

行やらぬ夢路をたどる袂にも
天津空なる露や置らん

此心は、ゆきやらぬ夢路をたどるといへるは、君のつれなきに夢にならではあはんたのみなきに、せめて見しゆめにだにあはずして、夢路をあなたこなたどるとみてたもとのぬれしぞや、夢なればまことには行やらぬが、ふしぎやゆきやらぬ夢路をたどる袖にさへ、天津空の露や置つるかと、我泪の袖にぬれしをうたがふ心、尤よせいふかし、

一むかしなりひら、思ひかけ給ひし女の、終に得難ふなりければ、よみてやらせたまふ歌に、

思はずは有もすらめどことのはの
おりふしごとに頼まるゝかな

此心は、そなたにはいひかはせしことのはをも、思はずはおはすらめど、われはこしかた先だちていひ置し言の葉の、おりふしごとにかく有つ

る物をと、おもひ出てたのまるゝとなり、
一むかしなりひら、ふして思ひおきておもひ、思ひあまりてよめる、

我袖はくさのいほりにあらねども
くるれば露のやどり成けり

此心は、ふして思ひおきておもひ、ゆふべの物さびしきをうちながめ、物思へばいつとなくおなじ露なれども、一しほゆふべをかなしむわが袖の露はふかし、草のいほりにあらねども、くるれば露のわが袖をやどり所とするか、草木の露よりもなをふかしとなり、
此心を、くれぬれば露もやどるや草の菴、
一むかしなりひら、人しれぬ物思ひのいやまし、つれなき人のもとへよみて遣はしける、

戀わびぬあまのかるもにやどるてふ
われから身をもくだきつる哉

此あまのかるもにやどるてふ、われから身をもくだくといへるは、海士のかるもにすむ虫をわれからといへり、此むしあまのもをかれば、そのもにはなれじと取つきて、われから身をすつるゆゑ我からといへり、そのごとく年ごろ君をこひ詫て、あまのかるもにはなれがたき虫のやうに、我からよしなきおもひに身をくだき心をつくせど、さらにかひなしとくゆる心なり、此戀にわびぬといへる五もじにて、戀にふかく思ひ入たる心いとふかく、尤此五もじ一つにての心肝要なり、
一むかしなりひら、色好に心をつくし給ひしが、長岡は御父阿保親王の住せ給ふ御あとなれば、此所に家居つくりておはしけるに、長岡はいにしへかりに立たる都なれば、今爰はひけて物さびけれど、まだ桓武帝の宮たち住給ふが、そのみやづかへの女ども、ゐ中の事なれば民の田をかるをみんとて、なりひらのすみ給ふ家居にきて、いみじき物ずきのしわざやとて、あつまりて入來れば、なりひらなにとかおぼしけん、にげておくにかくれ給へば、

あれにけりあはれいくよの宿なれや
住けん人をおとづれもせぬ

此心は、なりひらたちかくれ給ひておはしまさねば、あるじのなき事をとがめて、あれにけりと

いひて、あるじもなく人もなきは、あはれ幾よの宿にてや有やらん、住ける人のおとづれもなしとなり、

とよみければ、なりひら、

むぐら生て荒たる宿のうれたきに
かりにもをにのすだく成けり

此心は、前のうたにあれたるやどゝいへる心をうけて、むぐらおひたる宿のうれへしきに、かりにも鬼のきたると也、うらの心は、かくむぐら生てあさましき愁たる宿へは、かりにも女のきつるは更に本望にもおもはぬとなり、女を鬼といふなり、

とよみて出したまへば、此女どもいざ落ぼひろはんなどゝたはふれて出ければ、なりひら、

うちわびて落穂ひろふときかませば
我も田づらに行まし物を

此心は、かくうちわびて落ぼひろはんといひ給へば、我もともなひて田づらにゆくべき物をとなり、下心はかくおちんときかば、我も心を懸んとの心なるべし、

一むかしなりひら、京をいがゝ思しけん、ひんがし山にすまんとておもひ入てよめる、

住詫ぬ今はかぎりと山ざとに
身をかくすべき宿もとめてん

此心は、すみわびぬべき今はかぎりぞとおもひ、山ざとに身をかくさんとおもふ宿をもとむると也、

かくてなりひら山ふかくかくれゐ給へど、まことの隠遁ならねば、御心たいらかならざるにや、御物思ひのいやまし、物やみや成にけん、いたくわづらはせ給ひ、終にたへ入給ふ、御顔に水などそゝぎてやう〳〵人心ち出來させ給ふが、さすが常の御たしなみとて、

我うへに露ぞおくなる天の河
と渡る船のかいの雫か

此心は、わが顔に露のをきたるは、よのつねの露にてはあらじ、天の川のとわたる船のかいのしづくにてや有らんとなり、さすが平生の御たしなみとて、かくいきたへまし〳〵、御心つかせ給ふとひとしくよませ給ふ、きめうなり、

一むかしなりひら、宮づかへいそがはしく、朝家にい

ときまあらざる比、なりひらにしたしくたのみをかけてゐける女有けるに、有人の來ていひしは、なり平は朝家にいとまなふして、いゑにかへらせたまふ事もなし、さればかれ〴〵の御ちぎりなれば、まめやかなる事も有まじ、かゝるひとりずみのやうにたよりなくおはしまさんより、まめやかにおもふべき人の方へおはしませ、中だちせんといふにまかせて、やがてゆきけるに、有國の祇承の官人にめあはせける、此祇承の官人といふは、むかし國々に於て勅使などの御もてなしをする役にたて置しが、有とき業平宇佐へ勅使におはしましけるに、其國に旅宿有しに、祇承の官御もてなしに出しが、なりひらかの女此官人の女になりし事ほのきゝたまひければ、女のあるじにかはらけもたせよ、さらずは御酒まいるまじとおほせければ、勅使の儀なればいなみ難く、女を御しやくに出しける、なりひら御らんじ、さればこそと思し召、御さかななりけるたちばなを取給ひて、

五月まつ花たちばなの香をきけば
昔の人の袖の香ぞする

此歌は、古今第三に讀人しらずの歌とあり、なりひらのよみたまへるにはあらず、爰によくとりあひたるゆへ、かくいへるなり、みちのくの歌を春日野の返歌にせられしたぐひなり、爰にての心は、五月まつといひしは、何となくたゞたちばなはさ月の物なれば、さつきまつ花たちばなの香をきけば、昔あひなれし人の袖のうつり香のするといへり、よく取あひし作意奇妙也、古今には故事をもていへるなるべし、輿芳七尺之盧橘纔傳二左袖一、

とおほせければ、かの女むかしを思ひ出て、よしなき人のいひなしゆへ、かゝるゐ中におちぶれ、ことに然るべき所に有てもしられんははづかしがるべきに、いはんやかく祇承の官人などのいやしき者の妻になりて有事、よに面目なくや思ひけん、終にあまになりけると也、

一業平その時のことにや、つくしまでおはしたりけるに、何者にや有けん、是は色このむといふすきものと、すだれのうちよりいひけるを聞召て、

そめ川をわたらん人のいかでかは
色になるてふことのなからん

此心は、筑前にそめ川といふ河有、そのそめ川といふ河をわたりて來れば、色にそまらぬといふ事のなかるべきかとなり、
とよみたまへば、女返へし、
名にしおはゞあだにぞ有べきたはれ島
　　波のぬれぎぬきるといふ也
此心は、なりひらを色ごのみといへば、そめ川をわたりてきし程に、色にそみていかにも色ふかしとの給ふ、名にしおふ色好みならば、いかに色深し共色には出すまじきに、みづから色ふかしなどゝの給へば、名にしおふ色ごのみと名を立るは、さてはあだにてや有べき、肥後の風流島の白波をよそよりみれば、白絹のやうなりとて、ぬれ衣となを立るが、ちかくよりてみればつねのしらなみなり、それをなみのぬれぎぬきるといふが、そのごとくなり平を名におふ色ごのみとよそよりはみれど、今うちよりてみればさはなき物をとなり、
一むかしなりひら、年ごろをとづれ給ぬ女、心かしこくやあらざりけん、はかなき人のよこさまにいひなすをしらで、うちまかせてよそへ行て人につかはれてゐけるが、其方へもとあひし業平の來給ひしに、御まへに出てかの女給仕などいたしけるまゝ、此ありつる人を給はれとあるじにの給ひければ、あるじかの女をやがておこせたりけるに、なりひらかの女にむかひて、われをばしるやとてよめる、
いにしへの匂ひはいづらさくら花
　　こけるからとも成にけるかな
此心は、わがみはおとろへて、むかしの花なりし匂ひはいづくへか行つらん、むかしの花とみし所はなくて、さながらこきちらしたる櫻のからゐだのやうになりたれば、見わすれたるらめと也、
女我身のおとろへたる事をの給ふかと心へ、いとはづかしく思ひて、いらへもせでゐたるを、などいらへもせぬとの給へば、泪のこぼるゝに目も見へず、物もいわれずといへば、なり平又よめる、
是やこの我にあふみをのがれつゝ
　　年月ふれど增るかほなみ
此心は、我にあふ事をのがれて、年月をふれど

も、思ひなをす事もなきやらん、むかしにまさり
　ておもへるかほばせもなしと也、

とよみて、召たる御きぬをぬぎてとらせたまへど、はづかしくや思ひけん、とりもやらですて丶いづちともなく迯てゆきけるが、いづちいぬらんともしらず、

一むかし年比なりし女、いかで世心やつきぬらん、心なさけあらん男もがな、あひゑてしがなとおもへど、さすがはづかしくいひ出んたよりもなさに、まことならぬゆめ物がたりをして、三人の子をよびてかたりけり、ふたりの子はなさけなくいらへもせでやみぬ、三郎なりし子なんよき御男ぞ出こんとあわするに、この母けしきいとよげにしてよろこびけるが、此子おもひけるは、こと人はいとなさけなし、いかで此在五中將にあはせてしがなと思ふ心有しに、おりしもかりにありき給ひける所へゆきあひて、道にて召たる馬の口をとりて、かう／＼なんおもふといひければ、なり平あはれがりて行てあひ給ひけり、それよりあひなれたび／＼かよひ給ひしが、さてその丶ちなり平見へさせ給はねば、かの女たへかね、なりひらの家に行て、かきほのすきまよりうちゆかしげにのぞきけるを、なりひらほのかに見給ひて讀る、

　百とせにひとゝせたらぬつくもがみ
　　　我や戀らし面影にみゆ

此心は、百とせに一とせたらぬといへれば、九十九年のやうなれど、あながちそれにはあらず、ただ老たる女なればかくよめる、つくもがみとは、つくもとて澤邊などに生ゆる草なり、霜などあたればかぎりなく白く、しらがを亂せるがごとし、さるによつてしらがをつくもがみといへり、かゝる百とせにおよびそふなるつくもがみ、しろきいたゞきにてわれや戀らし、おもかげにみゆると也、

とよみて、出てみんとし給ふけしきを見て、耻かしくやおもひけん、むぐらからたちの中ともいわずにげかへりて、我家にきてうちふしけり、なりひらあとより忍びて行給ひ、かの女のせしやうに垣(ママ)のすきまよりのぞき見給へば、女ふししづみうちなげて讀る、

　さむしろに衣かたしきこよひもや
　　　戀しき人にあわでのみねん

此心はあきらかなり、さむしろに衣かたしきこ

よひもや、戀しき人にあわでのみねんと也、こよひもやといへるもや、こふ心にて、幾よもかよひしせんたちたり、古今第十四に、狹莚に衣かたしき今宵もや我を待らん宇治のはしひめ、又玉ひめ共と有を、下の句をかへてよめるなり、

とよみけるを、なりひらいとあはれに思し召、そのよはすぐにねたまひける、よの中の例として、思ふはおもひ思はぬをば思はぬは常のならひなり、ことにかく老たるをばうとみ、若きうるはしきを好むは戀のならひなるに、なりひらはおもはぬをも思ひおもふをばなを思ひ、かくおひたるをもすて給ぬは、御なさけふかき御こゝろならずや、此段におもふをおもひ思はぬをばおもはぬものを、

此人は思ふをも思はぬをもけぢめみせぬこゝろなん有けるとあり、けぢめみせぬ結目みせぬ也、驗の字のこゝろ也、

一むかしなりひら、あひなれし女のいかになりぬらん、ひそかにかたらふわざもせざりければ、いづくな◎マんけんあやしさによめる、　なりひら朝臣

ふくかせにわが身をなさば玉簾
　ひまもとめつゝ入べき物を

此心はかくれたる所なく、我身を吹かせになす物ならば、玉すだれのすきまをもとめて入、そなたの面かげを見ん物をとなり、風にもなられぬわがみなれば、ぜひなしといへる心、わが身をなさばのばの一字にこもれり、

とよみて送らせ給へば、女返し、

とりとめぬ風に有とも玉簾
　たがゆるさばか隙もとむべき

此心は、かせは手にとられぬものなり、たとへ手にとられぬ風なりとも、ふせげばすきまもとめ入事かたし、たれかゆるして玉すだれのひまもとめさせん、人のゆるさずばいかにかせになり給ふとも、なにとしてかたますだれのひまもとめ給ふべきとなり、

一なりひら、そのむかし名を立給ひし長良卿の御娘高子の女后は、清和天皇の御てふあいふかふして、今はゝや二條の后と號し、御色衣などゆるされ、おほみやす所とておはしける、御いとこの方にさぶらひけるが、今殿上にふかくかしづかれさぶらひけるに、有

原成けるなりひらまだいと若かりけるとき、后あひしり給ひけるに、なりひら女がた御ゆるし有て、后女御がたおはします所まで御のぼりありしに、又有しむかしを思召出給ひ、又もや后のましますところにきてむかひおはしければ、后物くるしくおぼしめし、一たびうき名をながし、又もやうき名たちぬべし、かつは后たる身のきずといひ、御身もほろびなん、かくなせさせ給ひそと仰ければ、なりひら、

思ふには忍ぶることぞまけにけり
あふにしうへはさもあらばあれ

此心は、おもふ思ひのつよきゆゑ、いかにしのべども、おもひのつよきにしのぶ事のまけて、しのびがたし、あひにしうへはさもあらばあれ、名もたたばたて、身もほろびばほろびよと、身をすててよみ給へば、

后物うく思召、つぼねへおり給へば、爰へはなを人の見るをもはばからずかよひ給ふ、后いとわびしく思召、又さとへおはしければ、なり平いよ〳〵なをもよきことゝおもひてかよひ給へば、みな人聞てわらひけり、

一去程になりひら人めをも更に耻給はず、有時は内裏へ御つとめ有しに、御とのゐをつとむるふせひにて、后のさとへかよはせ給ひ、夜のあくれば主殿司などの見るにもかまはず、御くつなどをなげ入て、夜もすがらつとめたる體にもてなしたまふが、なりひらつく〳〵とおぼし召は、かく后をおかしたまひ、后の御身もいたづらにほろびさせ給ふべきを、いとかなしく思し召せど、更に思ひやめがたく、いかにせんとおぼし召て、神にちかひ給へど、いやまさりにおぼへつゝ、なをわりなく戀しうのみおぼへさせ給へば、賀茂へ詣ふでゝ陰陽師かんなぎなどをよびて、こひせじとはらへなどして祈りたまへど、いとゞかなしき事數まさりて有しより、げに戀しくのみおぼへさせ給ひて、なりひら、

戀せじと御洗川にせしみそぎ
神はうけずやなりにける哉

此心はあきらかなり、かく后をおかしなば、后の御身もいたづらにせんもいとかなしさに、神にいのりてもこひまじきと、賀茂の御たらし川にみそぎせしかども、神はうけ給はぬやらん、い

とゞ有しよりげに戀しきとなり、此歌は古今第十一よみ人しらずの歌に、

戀せじと御洗川にせしみそぎ神はうけずもなりにけらしもと有、古今、あはざる戀に入たり、此下の句をなをせり、みそぎ御祓と書り、

とよみて家路にかへらせ給ひける、

一かくて后はつくぐ〳〵と此事を御なげき思し召、御心に籠させ給ふは、誠に此帝は御顔かたちよく、御なさけぶかふして、つねは佛の御名をのみ御心に入て、御こゝろはいとたうとく申させたまふを后聞召れ、いとふかくなげかせ給ふは、かゝる君につかふまつらで、よしなきなりひらにほだされ、むなしく里ずまゐする事よとなげき給ふ、かゝる程に帝聞召しつけて、げきりん以の外にして、なり平をさせんの罪にふせられながしつかはされける、后は御いとこ染殿の后よりおほせ有て、御父長良卿よりまかなけせ給ひて、ぬりくらにおしこめて置せ給へば、后くらに籠りゐ給ひて、なく〳〵よめる、

海士のかるもにすむ蟲の我からと
　ねをこそなかめ世をばうらみじ

此心は、まへにもあるごとく、あまのかるもに住むしの、かるもにはなれじと、我から身をくだくごとく、よしなきなりひらにはなれじと、我が身をくだきぬる、ねにはなくとも世をも人をもうらむまじ、よ人のなすわざにあらずといへる心也、此歌は古今には典侍直子と作者をかけり、

一かくてなりひらさすらへの罪にしづみ給へど、さして遠國にもあらねば、夜ごとに來つゝ笛をいとおもしろくふきて、こゑはおかしうぞあはれにうたひ給ふが、后はくらにこもりながら、それにぞおはすとは聞し召せど、あひ見る事のかなはねば、いと歎かしくおぼしくてよめる、二條の后

さりともと思ふらんこそ悲しけれ
　有にもあらぬ身をしらずして

此心は、なりひらのさり共あはんと思召ん事のおもはれてかなしきぞや、わがみは有にもあらぬ身となりしを、しろしめさでといふ心なり、

とよみて、かく思し召おり給ひける、なりひらは后にあひ給ふ事もならざりければ、かくしありきつゝかへらせ給ひ、ふるきうたを思ひ出してかく吟じたま

ひける、

いたづらに行てはきぬる物ゆゑに
見まくほしさにいざなはれつゝ

此心は、いたづらに行てはかへり歸ては行、君の見まくほしさにいざなはるゝとなり、此歌は古今第十三よみ人しらずの歌なり、

水の尾の御ときなるべし、おほみやすん所も染殿の后なり、五條の后とも、

水の尾とは清和天皇の御事なり、清和は水の尾に御隠遁おはしましけるゆゑ、水尾御門といへり、

一むかしなりひら津の國に領知有けるに、御兄弟たち友だちひきゐて、難波の方へおはしましけるに、なぎさの方に船どもの有を御らんじてよめる、

難波津を今朝こそみつのうらごとに
是や此世をうみ渡る船

此心は、難波津を今こそ見たれ、うらごとに船の行は、是やこのよを渡ることわざに、海わたる船なるべしとなり、

是をあはれがりて人々かへりにけり、

一むかしなりひら、河逍遙しにおもふどちかいつらなり、和泉國へきさらぎばかりに行給ふが、河内國伊駒山を見給へば、くもりみはれみ、たちゐる雲やまずして、朝よりかきくもり、やう／＼晝のころはれたり、雪いとしろう木ずゑにふりけり、それをみてかのゆく人の中に、ただひとりよめり、

昨日けふくものたちまひかくろふは
花のはやしをうしと成けり

此心は、きのふけふくものたちまひかくすは、かく木ずゑに雪のいと面白ふりて、さながら花のはやしとなるを、我人に見するはをしとおもへるにやと也、

一さてなりひらいづみの國へおはしまし、すみよしの郡住吉の里住吉の濱を行に、いと面白ければ、有人すみ吉の濱の面白景色をよみ給へと云ば、なり平、

此住吉の郡今は西生郡なり、そのむかしはさもいふつらめ、郡かはる事多し、

鳫啼と菊のはなさく秋はあれど
春の海邊にすみよしの濱

此心は、鳫啼菊のはな咲ておもしろき秋はあれど、此春の海邊に住吉の濱のけしきに、いかでま

さるべしとなり、

定家卿の歌に、けふぞみる春の海邊の名なりけり、住吉のさと住吉のはまと有、とよめりければ、みな人々よまずなりにけり、

みな人々も歌よむべしかど、此歌にはよもまさらじとて、よまざりけり、

業平昔物語　下之一

一むかし大内より狩の使と號して、國々へつかはさる事有、是は唐土にも巡狩とて、聖王みづから國々をめぐらせ給ひかりをなさしめ、其國の諸侯のみだりをたゞし民の愁をすくはせ給ふ、そのごとく本朝にもかりの使と號し、國々をめぐらせ國守のみだりをたゞし、たみの愁をすくはせ給はんはかりごとに、なりひらを伊勢尾張兩國へかりのつかひにつかはされしに、かの伊勢齋宮と申は、文徳天皇第六のひめ宮、怡子内親王齋宮にたゝせたまひておはしけるが、此姫宮は紀静子の御腹にて惟高親王と御一腹にて、清和天皇とは御腹がはりなれば、清和の御國母染殿には御繼子といひながら、實子のごとくにいたわり給へば、さいわいなりひら狩の使に伊勢へおはしませば、姫宮の方へ御文をそへられ、尋常勅使より此なりひらよくいたはり給へといひてやらせたまへば、御親の事なれば、姫宮いと念比にいたはりまし〳〵て、朝にはかりに出し立てやり、ゆふべに御かへりあればそこに宿らせたまひける、かくて念比にいたはり御もてなし有て、二日といふ夜に、なりひら宮にむかひ、わりなくあわせ給はゞ有がたかるべきとおほせければ、ひめ宮おさなきより齋宮にたゝせたまへば、かゝるかたらひをもしろしめさねば、はたあはじとも逢ふべしとも思し召さずおはしけるが、人目しげければあふこともかなひがたくてまし〳〵しが、勅使なればひめ宮御ねや近くやどらせられしに、姫宮人しづまり子ひとつばかりに、なりひらのやどらせたまふもとに來させ給ふ、なりひらはたねられざりければ、つま戸の方に月のおぼろにさし入をながめやりてふさせ給ふ所に、いとけなきわらはを先に立て人のたちぬるを、あやしたそやと見給へば、ひめみやにておはします、なりひらいとうれしくて、我ぬる所に入まいらせ、子ひとつより丑のみつまでおはし

ましけれ共、まだ何事をもかたらはせ給はで歸らせ給へば、なりひらいと悲しくて、ねるにも寢られずあかさせ給ひてつとにおき、此方より人をやるべきにしもあらねば、いと心もとなく、あなたよりいかゞ仰を給りやせんとまたせ給へば、夜も明はなれしばし有て、ひめみやのかたより御言葉はなくて歌に、

君やこし我や行けんおもほへず

夢かうつゝかねてか覺てか

此心は、なりひらのこなたへおはしけるやらん、又我行ぬらん更におぼへず、さてはゆめかうつつか、ねてかさめてかしらずといふ心也、莊子が百年の內蝶と成て花に遊ぶと夢みてさめてのち、我はてふになりたるか、蝶が莊子になりたるかといふにひとし、なりひらいと殘りおほさのまゝ、忙然としておはしけるが、御歌をくりかへし〳〵見て、いといたうなきてよめる、

かきくらす心のやみにまよひにき

夢うつゝとは今宵定よ

此心は、かきくらす心のやみにまよひて、われはなにのおぼへもなし、ゆめか現かこよひあひてさだめよとなり、

とよみ返事したまひ、又かりに出させ給ふが、野にあるかせ給へ共心は空にて、こよひいととく〳〵と逢はんとおぼし召けるに、おりしも國守なりし人、なりひらをもてなしに、その夜さゞへなどもちてきたりて、夜一よをもりければ、もはらあふこともならずして、既に夜もあけなばおはりの國へ立なんとし給ふに、なりひら御殘多、人しれぬちのなみだをながしたまへどかなはず、夜もやう〳〵明なんとする程に、ひめ宮御名殘の心にや、さかづきに歌をかきて出し給ふ、なりひらとりて見たまへば、

かち人のわたれどぬれぬゑにしあれば

是は歌の上の句ばかりなり、此心は、君と我ゑんはさて〳〵あさきゑん哉、かち人のわたれどぬれぬ程の江のごとく、あさきゑんなりといふこころなり、是則連歌おこりなり、

と書てすゑはなし、なりひらその盃にたいまつのゑさせるすみにて、歌のすゑを書つがせ給ふ、

またあふ坂の關はこゑなん

此心は、ゑんはあさくとも又あふべし、またあふ坂の關はこへなんとなり、なりひら歸京の道なればいへる也、又二たびあふ坂の關をこゑて、あふ事もあるべきとなり、

かくの給ひて、あくれば尾張の國へ越給ふ、齋宮は水尾の御とき、文德天皇の御むすめにて、これたかの御いもうとなり、

一かくてなりひら、尾張の國より又御かへり有けるに、大淀のわたりにやどらせ給ふが、齋のみやより御道むかへにやこしたまひけん、召つかひ給ふわらはべのわたりければ、なりひらのよめる、

みるめかるかたやいづこぞさほさして
我にをしへよあまのつりぶね

此心は、かのわらはべにむかひ、齋宮の御おもかげいま一どみるめの方はいづくぞと我に敎へよ、われならではしらじとなり、みるめかる方はいづくぞとしりたるは、あまのつりぶねにしくはなし、其ごとく姫宮の召つかひわらはなれば、君をみるめの方をしりたるはなんぢなるべし、物をとふもそれ〲にじゆくしたるものにとばされば、しれがたき事なり、我にさほさしてをしへよと云心なり、

なりひらわたくしならぬ大内より狩の使として、伊勢の國へまし〱、かりそめに我すき好む色にまかせての給ひけるを、ひめみやわたくしごとになんおぼしめせ共、さすが又もだし難ければ、姫宮の歌に、

ちはやぶる神のいがきもこへぬべし
大みや人の見まくほしさに

此心は、かく齋宮とならせ給へば、神の御いましめ有ゆへに、かく色にひかれ神のいがきをこゆる事、おもひもよらぬ事なれども、なりひらの見まくほしさに、神の御いましめもむかしよりのおきてをもやぶりて、ちはやぶる神のいがきもこゑぬべしとなり、

なりひらかへし、

戀しくばきてもみよかし千早振
神のいさむる道ならなくに

此心は、こひしくおぼしめさば、こなたへきても見給へかし、千はやぶる神の制給ふ道にてもなし、二柱の御神あまつうきはしの上にて、陰神陽

神みとのまぐはいいし、夫婦のかたらひなしそめ給へば、いかで神の御いましめ有べし、神の制むる道にあらずとなり、いさむるは制の字なり、

一なりひら、齋宮とたがひの色心はとけ給へども、新ゐまくらをもかはし給はず、尾張の國へおはしけるとていとふかう恨みたまへば、姫宮、

大淀の松はつらくもあらなくに
うらみてのみもかへる波かな

此心は、大淀の松はつらくもあらねど、波のうちよりてうらみてかへるが、其ごとく我はつらくもあらぬに、なにとて君はうらみてかへらせ給ふぞやと云心也、

一なりひら、齋宮のつゝがもなくおはしますとは聞召せど、御消息の一つもをとづれさせ給はねば、ひめ宮のあたりを思召て讀る、

目には見て手にはとられぬ月のうちの
かつらのごとき君にぞ有ける

此心は、君はたゞ月のうちのかつらのごとくにて、目にはみれど手にはとられぬ君なりといへる心也、

一なりひら、いつきのみやをいたう恨てよめる、

岩ねふみかさなる山にあらねども
あはぬ日おほく戀わたる哉

此心は、かく岩ねをふみ山々をかさねてたが事にもあらざれども、あはぬ日おほくこいわたるといふこゝろなり、

一なりひら、伊勢の國にひきこゑ有んとおほせければ、齋宮の御歌に、

大淀の濱におふてふ見るからに
心はなぎぬかたらはねども

此心は、大淀のはまにおふてふといへるは、見るからにといわんまくらことば也、はまにはみるといふくさのはゆるゆへ、所の名なれば大淀のはまにおふるみるからにといひつゞけたり、さて歌心は、君をおり〳〵見るからにこゝろはなぐさみぬ、さのみかたらはねどもといふ心也、

とよみてさしてつれなかりければ、なりひら、

袖ぬれてあまのかりほすわたつ海の
見るをあふにてやまんとやする

此心は、袖ぬれてあまも見るをたよりにかりほ

すが、そのごとくわが袖も泪にいたくぬれしを、たま〳〵見るをたよりにほす事も有しが、その見る斗をあふにしてやまんとや、われはいかで見るばかりにてはたゑがたしと也、わた津うみとは海の惣名なり、

とよみたまへば、ひめ宮、

岩間よりおふる見るめしつれなくば　しほひしほみちかひも有なん

惣じて見るめは岩間よりはゆるみどり也、その色へんせずかはらぬものなり、見るめのつれなくかはる物ならば、しほのみちひしてかはるたびごとにかはるべきに、潮のみちひしてかはるかはもなくみるめはかはらず、そのごとくわがこゝろも、つれなくへんじかはる物ならば、君のしほひしほみちするやうに、かはりたまふたびごとに替るべきが、そなたはしほのみちひのやうにかはるも、いかに見るめばかりのわが身なりとも、わがみるめはへんじかはるまじと也、

とよみたまへば、又なりひら、

なみだにぞぬれつゝしぼるよの人の　つらき心は袖のしづくか

此心は、わが袖はしほのみちひにもぬれず、そなたのつらき心が袖の雫となりたるにや、ぬるゝと也、

世にあふことかたき齋宮になん、

尤面白趣向なり、背聞に一たびあひ給ひしのち終につれなし、齋宮のすき心にあらざる事爰にて明なり、一夜の契りにて懐妊有しもさる宿縁にや、なりひらの名譽の事なり、今高階氏此齋宮の御腹也、

一むかし二條の后のまだ春宮の御息所と申ける時、御氏神にまふで給ひける、此御氏神は嘉祥三年に閑院の左大臣冬嗣公、大原にやしろを立、春日の神を勸請有、冬嗣の御娘五條の后順子、初て行啓有ける例にまかせ、藤原氏の后宮は御氏神と號しかならず詣ふで給ふ、二條の后も冬嗣公の御嫡子長良公の御娘なれば、其先例として大原のやしろに詣で給ひける、其比なりひらは近衞の司にておはしけるが、后の行啓には人々にろく給はる事有、その例として人々にろく給はる次でに、御車より給はりしかば、なりひらよ

みて奉らせ給ひける、
大原やをしほの山もけふこそは
　神代のこともおもひ出らめ
此心は前のごとく、大原の神は春日大明神を勧請したる社なれば、古へ伊勢天照太神と春日大明神ちぎり給ひし相殿のむかしを、をしほの山もけふは思ひ出すらめ、后のまふで給ふ程にといふこゝろ也、さて底意には、后もさぞなたゞ人にておはせしころ、我あひにしむかしをおぼしめし出させたまふらめと、神代のむかしになぞらへてよめる也、是風の歌なり、たけ有て優なる名歌なり、
后も御心にはかなしとやおぼしけん、外よりははかりがたし、
一むかし文徳天皇をたむらの帝と申奉りしが、其時の女御たかき子と申は、冬嗣公の三男西三條右大臣良相公の御むすめにて渡らせ給ふが、そのうせ給ひしかば、御法事の御わざ安祥寺にて取行ひける、人人御さゝげ物たてまつりて、あつめたる物千さゝげばかりも有て、そこはかのさゝげ物を木のゑだなどにつけ、堂の前にたてまつれば、山もさらに堂のまへにうごき出たるやうになん見へける、良相公の長男右大將藤原つねゆきと申は、女御の御兄にてわたらせ給へば、安祥寺に參らせ給ひしが、歌よむ人々をめしあつめ給ひ、此講のおはる程に、けふのみわざを題にて、春の心ばへ有歌奉らせ給ふに、なりひらも御さゝげ物の山のごとくなるを見給ふに、既に目もたがひながらよみ給ひて奉りたまふ、
　山のみなうつりてけふにあふことは
　　春のわかれをとふとなるべし
此心は、御さゝげ物の山のごとくなるを、目もたがひ山と見なし、かく山もみな此方へ移り、けふの御わざにあふことは、山も御わかれをおしみてとふかと也、
さてたかき子のなゝ七日の御わざすでに事おはりて、御兄にて渡らせ給ふ右大將藤原のつねゆき、御寺よりかへさに山しなのせんじに立よらせ給ふ、此山しなのせんじと申は、仁明天皇第三の皇子人康親王と申けるが、御出家ならせ給ひて山しなの禪師と申奉りける、つねゆき其山しなのみやに參らせ給ひ、

年ごろよそにはつかふまつれど、ちかくはいまだつかふまつらず、こよひこゝにさぶらひてとのゐ申さんと申させ給へば、禪師よろこばせ給ひてよるの御まうけさせ給ひ、御もてなしはなはだかぎりなければ、大將つく〴〵とはかり給ふやう、宮づかへの初めにたゝよしもなくて有べきにあらずと思し召、御庭を見給ふに、瀧をおとし水はしらせなどしていと面白つくらせ給へば、かゝる美景をすかせ給ひしまこのみなどし給ふ君也、我一とせ百花の亭を作り、居ながら花を見るやうにこしらへ、君をまうけの比、此行幸のために紀の國子千里の濱に有けるいと面白き石を取よするに、行幸の後に來りしゆへ、ある人の局のみそにすへたりしを、取寄せ參らすべしと思し召、御ずいじんにとねりなど相そへ、とりにつかはし給へば、いくほどもなくてもてきぬ、此石聞しよりは見るはまされり、是をたゞに奉らばすゞろなるべしとて、人々に歌よませ給ふが、又なりひらよみ給ふ歌をよくやおぼしけん、青きこけをきざみて、まきゑのかたなどのやうに、岩にこの歌を付させ奉り給ひける、

　あかねども岩にぞかふる色見へぬ
　　心を見せんよしのなければ

此心は、何をさゝげてもあかねども、わが心ばへを岩にかへて見せ奉る也、我おもふ心の外にみへぬを見せ參らせんよしのなければ、せめては岩にかへて見せ奉るべしとて、かゝる岩を奉るといふ心なり、

一むかしなりひらの御兄、有原中納言行平卿の御むすめ、清和の御てうあひ有て、わかみや一所産れさせ給ひしに、御産屋の御祝ひに人々歌よみ給ひけるに、なりひらも御祖父のかたの御伯父なれば、とりわけ悅びのあまりによみ給ふ歌に、

　我かとに千尋有かげをうへつれば
　　夏冬たれかかくれざるべき

此心は、我門にといへる五文字は、我一門といふ義也、千尋のかげをうゆるとは、千尋の竹の事也、されば仙家は千ひろの竹をあひし竹の森にすむとなり、竹は直にしてふしをそなへり、さるゆへに壽命長遠の相をかねたり、かく若宮の御壽命をいはひ、わが門には千ひろの竹をうへたれば、此かげにかくれて九夏三伏のあつさもな

く、げん冬そせつのさむさもなく、仙家のよはひをのづからそなへ給ふべしと、千秋萬歳のよろこびをのべし歌なり、

此御子は後に貞數の親王と申奉りしが、八歳のころ凌皇をまひたまふとなり、時の人、なりひらの御子といひしと也、清和第八の皇子にて渡らせ給ふなり、

一むかしなりひらおとろへたる家居に住わび、藤の花をうへたまひしが、やよひの晦日なりしに、雨のそぼふるに有人の方へ其藤をおりて送せ給ふとてよめる、

ぬれゝどもしゐておりつる年のうちに
春は幾日もあらじと思へば

此心は、雨をぬれつゝといひ、藤をしゐておりつるとばかりいへる、雨のふるに藤をおりそへ給ふ歌なれば、いふに及ばざるが、當代連歌などには藤を夏にとれども、歌には藤かきつばたを春にとる也、

されば年の内の春は幾日もあらじとあれば、年の内に春といふはけふばかりと、やよひの晦日なればいへる也、けふは春のなごりにぬれても、ふぢをおりておくるといふ心也、

一むかし左大臣源融と申おはしましけるが、かも川のながれのすゑ、六條わたりに家居をいとおもしろくつくりて、みちのくの千賀のしほがまを爰にうつし給ひすみ給ふにより、六條河原院と申ける、ころは無神月晦日かた、菊のはなうつろふ中にさかりなるも有て、色つく紅葉の千くさに見ゆる折からなりしに、御子たちおはしまして、夜一夜さけのみしあそび給ひ、夜もあけゆく程に、此院のおもしろきをほめて、歌よみ給ふ中に、なりひらひろゐんのはしにおはしけるが、みな人よみはてたまひて、はるかばつ座にゐてよめる歌に、

しほがまにいつかきにけんあさなぎに
つりする船は爰によらなん

此心は、まことのしほがまにおもはず來たる躰にとりなし、我はいつかこのしほがまにはきにけん、此あさなぎにつりする船も爰によれかしとなり、おもてにしほがまに似て面白などゝよまずして、まことのしほがまにわれはいつのまにきにけんとうたがへる心にて、さながらしほ

がまに似たる躰こもれり、

一むかし文徳天皇第一御子惟高親王と申は、山崎のあなたなる水無瀬といふ所に宮つくりておはしますが、年ごとに此所の櫻の花ざかりには、をの〳〵おはしまして見給ふに、なりひら常に此宮へまし〳〵て遊び給ふ、此院のさくら殊更おもしろく咲みだれたれば、をの〳〵おはしまして、そのもとにおりゐてゑだを手折などしてかざしにさし、みな歌をよみ給へば、なりひらもよみ給ふ歌に、

世の中にたへてさくらのなかりせば
　春の心はのどけからまし

此心は、先春くれば花のはやさかん事をまち、又咲ぬればそゞろにあくがれ、爰のはなかしこの花と心をよせ、漸うつろひちりかたになれば、雨風の吹に心をいたましめ、ちりはつればなごりをしたふ、是みなさくらの有ゆへなり、世の中にたへてさくらのなかりせば、春の心はのどかなるべしと也、

とよみ給へば、　紀有つね

ちればこそいとゞさくらはめでたけれ
　うきよになにか久しかるべき

此心は、なりひらのあまりはなに着したまふとおぼし召、ちればこそ櫻はいとゞめでたけれ、いつも常住なる物ならば、たれもめづるもの有まじ、何かうき世に久しくながらへるものや有、さかんなる者はかならずおどろふる習ひなり、かくあだにちりて盛者必衰のことはりをしめすは花なり、さくらがなくては何をもてか無常をしらんといふ義なり、

とてその木のもとにて、日終御あそび有てたちかへり給ふに、やう〳〵日ぐれになりぬ、御供なる人酒をもたせて野より出きたれば、此酒を聞し召さんとてよき所をもとめ行給ふに、あまの川といふ所に至りぬ、惟高親王へなりひら御酌をとりて御酒をすゝめ給ふに、み子のおほせ有けるは、かた野をかりて天の川のほとりにいたるを題にて、歌よみて盃させとの給ひければ、とりあへずよみて奉りける、

かりくらし七夕つめに宿からん
　天の河原に我は來にけり

此心は、かりくらして天の川といふ所に來たれ

ば、七夕に宿をからんと也、

親王歌をくりかへし吟じたまひ、御返歌おそなはり給へば、紀有常それがし讀奉るべきとて、

親王はさしもの御歌になれば、當意に遊ばすべけれど、歌をふかく吟じたまふ心なをふかし、

ひとゝせに一たびきます君まてば
宿かす人もあらじとぞおもふ

此心は、一とせに一たび來給ふつまを、七夕はまちてゐ給へば、いかでたれ人にも宿はかし給はじといふ心也、

とよみ給へば、かへり宮に入せ給ひぬ、夜ふくるまで酒のみ物語して、あるじのみ子ゑひ給ひて入らせ給はんとし給ふに、やよひ十一日の月もかくれなんとすれば、　有原の業ひら

あかなくにまだきも月のかくるゝか
山のはにげて入ずもあらなん

此心は、あかざるをはや月のかくれ給ふ、山のはにげて月を入ずもあれかしと讀て、み子を今しばしといさめ給ふ心をよめる、

み子にかはりたてまつりて、　きの有つね

をしなべて峯もたいらに成ぬらん
山の端なくば月も入らじを

此心は、なり平の歌に山のはにげてといへるをうけて、山のはにげてといわんもむつかしければ、をしなべて山もたいらになり平地になれかし、山のはのなくば月も入まじきと也、

むかし惟高の親王水無瀬へかりしにおはしますとて、なりひらをいつものごとくともなはせ給ふが、日ごろへて宮に歸りたまふに、なりひら送りとゞけ給ひて、とく御いとまたびなばいなんとおぼしめすに、親王なりひらに祿給はんとてかへさせ給はねば、業平み子のいつもより御なごりおしげに見へさせ給ふ御けしきなれば、なりひら心もとながりて、

枕とて草ひきむすぶ事もせじ
秋のよとだにたのまれなくに

此心は、今宵は枕とてくさひきむすぶ事もせまじ、既にこよひはやよひの晦日にて短夜なれば、秋のよなどのやうにながくあらざれば、はやあけてたのみなきに、春宵一刻價千金なれば、ねずして語りあかすべしとなり、うたゝねにくさひ

きむすぶこともをし、はかなの春のゆめのまくらよ、

とよみ給ふ、時はやよひの晦日なりけり、ことに短夜なれば、御しんならずしてかたりあかさせ給ひけり、

一なり平つねにむつまじくまうでつかふまつりけるを、思の外に親王御ぐしおろさせ給ひて、小原の小野にひき籠らせ給ひ閑居してまし〳〵ける、此君は文德第一の皇子なれば御位をつがせたまひ、かく御ぐしおろさせ給ふ事思ひの外なる御出家かなと、世の人袖をうるほさゞるはなしとかや、

一すでにその年もくれて明るむ月に、なりひら親王をおがみ奉らんとて、小野に參り給ふに、ひゑの山のふもとなれば、雪いとたかくふりつもり、いとゞさびしさいやまさり、物あはれなりしに、しゐて三室に詣ふでて玉顔をおがみ奉るに、つれ〴〵と物がなしくておはしましければ、みやもいとめづらしくおぼし召せばや、ひさしくさぶらひていにしへの事など思ひ出させ給ひ、しか〴〵の御物がたり有て、扨今しばしそのまゝさぶらひてなぐさめたく思し召せど、なりひらも淸和天皇に御宮づかへの事なれば、おほやけの事共有ければ、ゑあらずしてさすがなごりおしければ、ゆふぐれにおよびてかへるとてよめる、

忘れては夢かとぞおもふおもひきや
雪ふみわけて君をみんとは

此心は、わすれては夢かとおもひて、さらにうつつともわきまへず、御くらゐにつき一天の君とも仰がれ給ふべき君の、かく閑居幽栖の御すまゐ、雪ふみ分て見奉らんとは、いさゝか思はざりしと也、

かくなりひらよみ給へば、惟高の御返歌に、

夢かとも何かおもはんうきよには
そむかざりけん程やくやしき

されども伊勢物語に此歌はなし、なりひらの歌、別してあはれふかきゆへにてさしをくか、

一むかしなりひら、その身の淺官にておはしましけれども、御父は阿保親王、御母は桓武天皇第八の姫宮伊豆内親王にてわたらせ給ふ、御父には五男にあたらせ給へども、御母には一子にておはしける、御母長岡に住せ給へるに、なりひらは京にみやつかへておはしましければ、しば〴〵の御いとまもなふして、御

母への御つとめもたへ〴〵にありければ、御母はただひとりの御子にさへ、たへ〴〵にしてゐあひ給はねば、いとかなしうくらし給ひしが、師走ばかりの事なりしに、御ものやみにてや有けん、急の御事とて御ふみをつかはされしに、おどろき見給ふに御うたなり、

老ぬればさらぬわかれの有といへば
　いよ〳〵見まくほしき君かな

此心は、おひぬればさらぬわかれの有て、うゐむじやうのならひなれば、つゐにわかれではかなはぬといへば、いよ〳〵そなたを見まくほしきと也、

なりひらいたうかなしくうちなげき給ひて、

世の中にさらぬ別れのなくもがな
　千代もといのる人の子のため

此心は、世の中にさらぬわかれのなくてあれかし、親には千よもそひたくおもふ子のためによかるべしと、たゞ我身にとりあわす世中の人の子になぞらへよみたまへば、をのづから御身の上にこもれり、

一むかしなりひら、惟高親王いまだいとけなかりし時より、つかふまつり給ひしに、いつしか御ぐしおろさせ給ひ、山ふかく引籠らせたまへども、なりひら大内の宮づかへに御いとまなければ、常にはおはします事もおこたり給へど、さすがふかき御なじみなれば、もとの御心をうしなはで、年の始の御つとめにはかならず參り給ひけり、さて御子には年たちかへる朝とて、むかしつかふまつりし人々は、俗成も禪師なるもあまたまいりあつまりて、御ことぶきの大みきなど給ひけり、雪こぼすがごとくふりてひねもすにやまず、みな人ゑひて雪にふりこめられたりといふを題にて歌有けり、その中にもなりひらの歌に、

おもへども身をしわけねばめかれせぬ
　雪のつもるぞわが心なる

此心は、おもへども身のわけられぬ物なれば、こなたに心のとまれども、宮仕への身なればかへらではかなはず、身がな二つになれかしと、いとかなしくおもひしに、かくめもはなるゝまなく雪のふるは、我心の眞實なるが天に通じ、雪のみつもれるとなり、此おもへどもといふ五文字、ふ

かくおもへ共〳〵といふ心こもれり、源氏すゑつむ花に、おもへどもなをあかざりし夕顔の、露わすれ給はずといひ出せり、

一むかしなりひらいと若き比、わかき女をあひかたらひ給ひしが、をの〳〵おやのありければ、親のめを忍びてつゝみたまひて、いひさしてやみたまふが、年ごろへて女のもとに猶心ざしはたさんとやおぼしけん、なりひらよみておくり給ふ歌に、

今までは忘ぬ人は世にもあらじ　をのがさま〴〵年のへぬれば

此心は、いとわかきむかし、かりそめにいひたりしも、をのがさま〴〵年へぬれば、今まではわすれぬ人はよにもあるまじければ、わすれ給ふべしと也、

とよみて送り給へど、つゐにはやみて相はなれ、なりひらも女も宮づかへになん出給ひけるとなり、

一むかしなりひら、津の國むはらの郡あしやの里に領知ありておはしましてて住給ふが、そのむかしよみをかれたる歌に、

あしの屋のなだのしほやきいとまなみ　つげのをぐしもさゝずきに

此心は、あしのやのなだのしほやく海士の世に、いとまなきやらん、つげの小串をもさゝず、かみゆふ事もなく來にけりと、あはれみてよめる也、

とよみ給ふ、そこのさとをよみける、爰をあしやのなだとはいひける、

一此なりひら、宮づかへし給ふたよりにや、左衛門督右衛門のかみ兵衛佐などの衆あつまりて、かのもとへ來たり給ふが、なりひらの御兄行平も、其比は左衛門督にておはしましけるが、各伴ひおはしまして、前なる海のほとりにあそびありきなどして、いざ此山の上に有といふ布引の瀧見にのぼらんといひて、をの〳〵上りて見給ふに、其瀧ことにすぐれたり、長さ二十丈ひろさ五丈ばかりなる石のおもてに落れば、さながら岩をしらぎぬつゝめるやうになん有ける、其瀧のかみに圓座の大きさしてさし出たる石有、其石の上にはしりかゝる水は、せうかうしくりのおほきさにてこぼれ落、をの〳〵この瀧に歌よませ給ふが、行平先よめる、

我よをばけふかあすかとまつかひの
　なみだの瀧といづれたがへん
此心は、我よをばけふかあすかとまつとよみたまふは、かく有原氏たる身の時にあはずして、都にはあらで田舍わたらひなどするは、よに有にもあらず、わがよにあらんを、けふかあすかとまつまのなみだのたきといづれたがへんとなり、
とよみ給へば、あるじなるなりひらのよめる、
ぬきみだる人こそあるらし白玉の
　まなくもちるか袖のせばきに
此心は、瀧の玉ちりおつるは、さながら糸につらぬく水精の玉の、そのいとを引ぬきみだすがごとし、たれか玉をぬきみだす人の有らしと、わが袖にうけとめんとすれども、袖のせばきにまなくおつるとなり、
とよみ給へば、かたへの人此歌の面白きにめでゝ、此歌にはいかでまさじとて、をの／＼歌をもよまずやみにけり、
一さて御かへり有しに、道とをくしてやう／＼日もくれぬれば、やどりの方を見おくり給ふに、海士のいさりする火おほく見ゆるを見たまひて、
はるゝ夜のほしか河邊の螢かも
　我すむ方の海士のたく火か
此心は、はるゝ夜のほしか又河邊の螢か、わがすむ方のあまのたく火かとうたがはるゝと也、眞實あまのいさり火とはみれど、星か螢などのやうに見へて面白體をよめり、螢かものかも二字にて、あまのたく火とたしかにしりたる心をのづからそなはれり、又はるゝよの星といへるを、天津星などゝ五文字におくべきを、はるゝよといへる取わけ面白し、晴るゝよのほしは一しほ光いさぎよかるべし、螢も河邊にては別てひかりますべし、かゝるいさぎよき光は河邊のほたるかはるゝ夜のほしかも、さてはあまのいさり火かとなり、
とよみて御家居にかへり給ひぬ、其夜南の風吹て浪いと高うちよせ、うきみるの波にたゞよひいそべによるを召ぐし給ひける、御家のめの子共ひろひてもてきぬ、女方よりそのみるをさかづきにもりて、かしはをおほひていだしける、そのかしはにかきつけゝ

る歌に、
わた津海のかざしにさすといはふ藻も　　高士器
君が爲にはおしまざりけり
わたつみとは海の惣名、又海神ともいへり、爰にては海神なるべし、歌の心は海神のかざしにさせるひさうのもゝ、けふはまれ人にはおしまずや有けん、おりしもあれけふこのもをなみにうかめ、風にふきよせたるは君に參らせんためなるべしと也、
ゐ中人の歌にてはあまれりやたらずや、

一むかしいと若きにはあらぬ友どち、是かれあつまらせたまひて、月を見給ふに、それが中にひとりなりひらのよめる、
おほかたは月をもめでし是ぞ此
つもれば人のおひとなるもの
此心は、大かたは月をもめでし、貪着せまじきものなり、是ぞ此つもれば人の老となる物をと也、月をもといふもの字一字にて、花ももみぢも色にも香にも、めでじといふ心をのづからそなはれり、かく物ごとに着すれば、その五塵のおもしろきにひかれ、六根の清をけがし、無常をわすれてむなしく殘生を送り、終におひとなり一生をあだにくらすと也、白樂天が送囚詩に、
對二月明一莫レ思二往事一、滅二君年一損二君顏色一、
つもりそふ老となる共いかでかは
雲の上なる月をみざらん
大かたはといふ五文字、十をの物ならば七つ八まではといへる心也、いとわかきにもあらぬ友どちのあつまりての歌なれば、日々夜々にうつりかはるわが身の上はかへりみず、月のかたぶき花のちりはつるをもよそに見なし、たゞ香にめで色にふけり、終に老となりいたづらに日をくらす、寔に月花にも心もなくて、色香にばかり着せまじき物なりといさめ給ふ御心、もつとも有がたし、

一むかしなりひら、其身も賤からねど、我よりはまたまさりたる人をおもひかけ給ひて、年經給ひしが歌に、
人しれずわれ戀しなばあぢきなく
いづれの神になき名おほせん

此心は、人しれずおよびなきおもひゆへに、戀しずしなば人のしらずして、何たる神のたゝりにて死たるぞと、いづれの神にやなき名をやおふせん、さても〳〵そなたゆへに戀しぬれとうらみ給ふ心なり、

一むかしなりひら、心をつくし給ふ女のつれなかりけるが、いかでと思ひわづらはせ給ひしを、あはれとや思ひけん、さらば明日物ごしにてもといへりけるを、なりひらかぎりなくうれしく又うたがはしかりければ、いとおもしろきさくらのゑだに付てつかはされける歌に、

櫻ばなけふこそかくもにほふらめ
　　あなたのめがたあすの夜のこと

此心は、さくらの花のけふこそはかくもにほへ、あすはうつりかはりもやせんと、あなたのみがたしそなたもあすの夜あはんとの給へども、けふにあすはかはりもやせんといふ心也、

一むかしなりひらは、香にめで色にふけりたまふゆへ、けふは其人に逢はでくらしぬ、此月もむなしくたちぬと月日のゆくさへなげかせ給ふに、やう〳〵やよひの晦日がたになりしかば、春のなごりをいとおしみ給ひてよめる、

おしめども春のかぎりのけふの日の
　　夕ぐれにさへなりにけるかな

此心は、大かた過る月日さへあるべき、三春のきはまりけふにかぎり、最早夕ぐれにさへなりたるよと、いとなごりおしきといふこゝろなり、

一むかしなりひら戀しさのあまりに、ある女の方に來つゝかへらせ給へど、物をもゑいはでかへらせ給ふとてよめる、

消息と書り、文などを云ど爰は物をゑ云ぬ消息也、

あしべこぐたなゝし小船いくそたび
　　行かへるらんしる人もなみ

此心は、あしべこぐたなゝし小船のちいさければ、いくたび行かへれどさらにしる人もなきが、其ごとくわが思ふ人の方へ行かへり〳〵すれ共、君のしらざるはたなゝし小船かと、あひ給ぬをうらみ給ふ心也、

一むかしなりひら、我よりまされる人をおもひかけ給ひたりけるが、すこしたのみぬきさまにや有けん、

ふしておもひおきておもひ、おもひわびてよめる、

あふな〳〵おもひはすべしなぞへなく
高きいやしきくるしかりけり

此心は、あふな〳〵は念比にといふ心、ねんごろにおもひはすべし、戀路はたかきもいやしきもをしなべてくるしき物なれば、わがせつなるおもひをおしはかり、よも念比に思はぬ事あらじ、思ひはすべしといふこゝろ也、

一むかしなりひら、かたらひ給ふ女に何條の事有にや離別し給ひしかば、さて有べきに非らず、又有所へゑんをむすびける、されどもなりひらの御子ある中なりければ、こまやかにこそあらね、おり〳〵ものおこせなどして音信はし給ひけり、此女ゑかく人なりければ、なりひらの方よりゑかきにつかはされしかば、今の男の見るめも有べき事なりとて、ひと日二日おこせざりけり、なりひらいとつらく思召て、後はとて聞ゆる事なるを、今までをとづれざればことはりと思へど、なをうらみつべき所なりとて、よみて送らせ給ひける、時はおりしも秋なりければ、歌に、

秋の夜は春日わするゝ物なれや
かすみに霧や千重増らん

此心は、秋の夜はいとながふ月のおもしろきに、春の日のながく花の面白をもわするゝ物なり、春の霞にも秋の霧は千重まさるにや、當季に心のうつりぬと也、そのごとくそなたも今のつまの秋の夜の月のめづらしきに同じく、むかしは春の花ともおぼしゝわが身をもわすれ給ふもことはりなり、昔のわが身をおぼし召すうすがすみには、今のつまをおぼしめすは秋の霧のいとふかく千重もまさらんとなり、

となんよみ給へば、女かへし、

千々の秋ひとつの春にむかはめや
紅葉も花もともにこそちれ

此心は、秋を千々あはせても、一つの春には及まじ、今の秋よりはむかしの春のそなたこそおもはるれ、されどもむかしの春のそなたも、秋の今のつまもあだ也、春の花のそなたも早くうつりやすし、今のつまの秋紅葉もかはりやすくあだなるものにて、共にちるものをといふ、

一むかしなりひら、二條の后につかへる女に常に心

をつくし給ひしが、せめては物ごしに成ともあひて、かくたへがたく思ひつめたる事をも、すこしはらさせてたべとおほせければ、女いとあはれにやおもひけん、忍びて物ごしにあひにけり、しか〲の物がたりなどしてなりひらのよめる、

彦星の戀はまさりぬ天の河
へだつる關は今はやめてよ

此心は、たなばたは年にまれなるちぎりなれども、其よをたがへずあひ給ふ、我中は物ごしなれば彦星にまさりてかなしき也、七夕にははるかにおとれり、いまはへだつる關をやめて、あひ給はれかしとなり、

一むかしなりひら、有女にしづ心なくつくして月日を經給ひしが、さすが女も岩木ならねば心くるしとや思ひけん、やう〱あはれとおもひて、その比は水無月なるころなりけるが、女の方よりいひこしぬるは、あまり御心づよくの給ふもげにもと思ひ、御こゝろにしたがふべくは有しかど、今は身にかさひとつふたつ出來たりおりしもいとあつし、少秋風吹立なん時かならずあはんといひければ、業平うれしくひと日二日とまち給へば、やう〱秋立ころほひになりぬ、されども此女ふかくつゝめど色樣にや見へぬらん、爰かしこよりなりひらに心有とてくせつ出來にけり、去程に女の兄弟たち、かしこにをきては世のあざけりよろしからずとて、俄にむかひに來りければ、此女かゑでの初もみぢをひろはせて、歌をよみてかきつけ、なりひらの方へ遣はしける、

秋かけていひしながらもあらなくに
木の葉ふりしく江にこそ有けれ

此心は、秋かけてかならずといひし言のはのまもあらず、はや木の葉ふりしく江となりて、あさきゑんにこそあれといふ心也、

とかきをきてかしこより人をこせば、是をやれとていぬ、扨やりてのち終にけふまではしらず、よくてやあらんあしくてやあらん、いにし所もしらず、なりひらは海士のさかてをうちてのろひごとなどしておはせしが、おそろしき人の呪咀事は、おふ物にやあらんおはぬものにやあらん、今こそ見めといひ給ひける、

一むかし右大臣冬嗣公の御嫡子、長良公の御次男照宣公を、長良公の御舍弟白河太政大臣忠仁公の御養子として御代をゆづり給ひ、堀川太政大臣基綱公と申奉る、此大臣の四十賀の御祝ひを、九條の御家にして執行ひ給ひけるとき、業平も御よろこびに參らせ給ひ、御祝ひの歌に、

櫻ばなちりかひくもれ老樂の
こんといふなる道まがふがに

此心は、さくらばなちりかひくもれとは、四十の賀の御祝ひなれば、四十は老の初りなり、今老の來るべき道をいづくも見ぬやうに、花のちりてかきくもり道まよふやうにとなり、がにとゝめたる心、賀の心さながらこもれり、此歌古今第七賀の内に入たり、

一昔白河太政大臣忠仁公に、業ひらもとつかうまつり給ひしが、長月ばかりの事なるに、梅のつくりゑだに雉子を付て、業平より奉らせたまふとて、讀そへつかはされし歌に、

我たのむ君が爲にと折る花は
時しもわかぬ物にぞ有ける

此心は、今長月の比は梅の有時分にあらねど、君がためにと手折は、常盤に花もさくぞと忠仁公を祝る心なり、ときしもといふうちにきじの二字をかくし題によめり、

と讀て送らせ給へば、忠仁公おもしろく思し召、よろこばせたまひて、使の者にろくなど給はりける也、

一むかし右近の馬場のひおりの日、なりひらも見物におはしましけるが、むかひに立たりけるくるまに、女の顔の下すだれよりほのかに見へければ、業ひら御覽じて、やがて歌をよみつかはされける、

ひおりとは五月五日右近のまてつかひの日也、舍人かちを引おりてきるゆへひおりといふ也、

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくば
あやなくけふやながめくらさん

此心は、かくはつかに見たるばかりなれば、さして見ぬにもあらず、またしかと見もせぬ人の戀しくば、かひなくけふやながめくらさんとなり、あやなくはかひなくなり、又あやしむ心も有か、

とよみたまへば、女返し、

知るしらぬなにかあやなくわきていはん

思ひのみこそしるべなりけれ

此心は、しるともしらずとも何かあやなくわきていはん、たゞ戀はおもひのみこそしるべなれと也、大和物語には此返歌相違せり、

見も見ずもたれと知りてか戀らるゝおぼつかなみのけふのながめやとあり、

とたがひによみかはし給へば、此歌しるべとなり後にはあひたまふとなり、

一むかし業平、清涼殿のうしろ後涼殿のはざまをとをらせ給ふに、有やんごとなき人のつぼねより、わすれぐさをしのぶぐさとやいふとて出させ給へり、此心はなりひらの通ひしあたりをわすれ給はん、されどもなをしのぶよしにていつわりて答給はんと、御心をひき見んとてとひ給へば、業平、

忘れ草おふる野邊とは見るらめど
こは忍ぶ也後も頼まん

此心は、こなたをわすれ草おふる野べと見給ひて、わすれ草か忍ぶぐさかととひ給ふべけれど、我はかくこそしのぶ草なれ、のちもたのまんとなり、

しのぶ草軒におふる檜のはににたるをいふなり、又一つはが似たるをわすれ草といへり、され共歌には一草二名と見へたり、ありのみなしといふにひとし、忘るも忍ぶもおなじ古郷の軒ばの草の名こそつらけれとあり、されば一つ草をいふなるべし、

一むかし業平の御兄有原の行平は、其比左兵衛督にてわたらせ給ふが、その上首し給ふ左中辨藤原の良近は、太宰權帥正三位吉野四男なりしが、容義すぐれて政の道に達したる人なれば、政道を執行給ひしが、此良近を正客にてあるじまふけ給ふが、行平さすが情有人なれば、瓶に花をさし給ふ、花の中にあやしき藤の花をなんさゝれける、其はなのしなび三尺六寸ばかりなん有ける、をの〳〵めづらしくおぼし召、それを題にて歌よみ給ふに、なり平も御兄弟なればあるじし給ふと聞ておはしければ、とらへて歌よみたまへと有しかば辭退し給へど、しゐて讀せられければ、辭しがたくしてよめる、

咲花の下にかくるゝ人をおほみ
有しにまさる藤のかげかも

此心は、さく花の下にかくるゝ人おほみといへるは、藤原氏のさかへ給ひ、みなその下々にかくるゝ人おほく、有しにまさる藤原氏のかげかなと、藤の花の大きなるによそへてよめる也、をの〳〵歌を吟じて、などかくしもよみ給ふと有ければ、藤原太政大臣忠仁公の御榮花のさかりにてましませば、藤氏の殊にさかゆるを思へば、良近も藤氏なれば、かゝる藤氏に隨ふ人おほくして、有しにまさるふぢ氏のかげかなと思ひてよめるとの給へば、みな人そしらずなりにけり、

一昔なりひら、歌にはよみ給はねども、世の中の有爲無常をおもひしり給ひしが、勝貴なる女のあまになりて、世の中をおもひうらむで京にもおはしまさず、はるか山ざとに引籠給ひけり、なりひら舊親族なりければ、歌よみて遣されける、

そむくとて雲にはのらぬ物なれど

よのうきことぞよそになるてふ

此心は、よをそむくとて雲にのりて、うきよをはなれたる物にてもなけれども、よのうきことのよそになるなり、かくあまになり給ひ、よをのがれて世のうき事をよそになし給ふ、うらやましきと也、

となんよみてやらせ給ふ、是は齋宮の事なり、

一むかし業平、御心まことしやかにて、あだなる御心もなかりけり、ふかくさのみかどになんつかふまつりながら、御心あやまりや給ひけん、み子たちのつかひ給ひける女をあひかたらひ給ふが、有ときよみて遣し給ひける歌に、

深草のみかどは仁明天皇の御事なり、御廟山城のふかくさに有ゆへかく申奉る也、

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめば

いやはかなにも成まさる哉

此心は、ねぬる夜の夢ばかりなるはかなさを、ゆめにみてわすれがたければ、又ゆめにやみんとまどろめば、いよ〳〵はかなくなりまさるといふ心也、

となんよみてやりける、さがな歌のきたなさよ、是はいせ物がたりのことばのまゝなり、なり平の仰られし言ばなるべし、さがなは惡なか、きたなさよははなやかにもなき歌といへる心か、謙退比興

の心なるべし、

一むかしいつきのみや、さしての事なる事もなくて、あまにならせ給ひ、御かたちはやつし給ひけれど、物ゆかしくやおぼしけん、かもの祭見に出給ひたりけるを、なりひら見給ひて、讀せ給ひつかはされける歌に、

世をうみのあまとし人をみるからに
　めくばせよとも頼まるゝかな

此心は、いつきのみやのあまになり給ふを、海士人にとりなし、世をうみのあま人としも見るからに、海士のかるみるめのめくばせよ共たのむと也、

さてうらの心は、世をうしとてあまになれる人なれば、めくばせして心をあわせ給へといふこころなり、

是は齋宮のみやの物見給ひける車に、かくよみてやらせ給へば、御はづかしくやおぼしけん、見さしてかへらせ給ひけるとなん、

一むかしなりひら、かくてはおもひにたへでしぬべしといひ送りたまへば、女のかたより、

白露はけなばけなゝん消ずとて
　玉にぬくべき人もあらじを

此心は、しら露はきゑば消もせよ、たとへきへずしてさながら玉のやうなればとて、つらぬく人も有まじきものなり、其ごとくそなたも白露ときへ給はゞきへ給へ、たとへ今きへ給はずとも、露のさながら玉のやうにして、終にきへてつらぬかれざるがごとし、とてもきへ給はでかなはねば、誰つらぬきとむる人もあらじと也、

とよみければ、あまりにむげなる事とはおぼしけれど、心ざしはいやまさりてなを戀しく思しめしけり、

一むかし業ひら、み子たちの河逍遥し給ふ所に參給ひて、たつた川の邊にして、紅葉いとおもしろくながれけるを見たまひてよめる、

千早振神代もきかず龍田川
　からくれなゐに水くゝるとは

此心は、神代には神變きどくおほしときけど、からくれなゐに水のくゝるといふ事はきかず、此たつた川にもみぢのながれてくるは、さながらからくれなゐに水のくゞれるがごとし、かやう

の景は神代にだにもなきとかや、まして今はいづくにか有べしと也、

此歌は二條の后春宮の御息所と申ける頃なり、平御屏風にたつた川をかきけるを題にてよみ給ふと、古今第五の言葉書に書り、爰には御子たちの川逍遥し給ふになりひらも參給ひて、さてよみ給ふてい也、是は龍田川の全景いとおもしろきに、一しほ歌の即妙あらはるゝにや、川せうゑうのときよめるといへるか、

一むかし藤原の敏行といふ有けり、其身優にして能書なれば、一切經をも一筆に書寫したまひける人なりしが、なりひらの御妹をほのかに見給ひて、文玉づさを送られしに、なりひらの御妹いまだ若くおはしければ、御返事もおさ／＼しからず、ことばもいひしらせたまはず、歌はよませ給へどもさのみならざれば、なりひら此よしをほのきゝたまひ、敏行は聞ゆる能書なればとて、みづから御返事の案をつくりて御妹にかゝせ給ひつかはされければ、敏行の方よりよみてこされし歌に、

つれ／＼のながめにまさる涙川
袖のみひぢてあふよしもがな

此心は、つれ／＼とふるなが雨には、我なみだはまさるぞや、かく袖のみひぢてあふよしもがなといふ心也、

とよみこしければ、なりひら御いもうとに替て、

淺みこそ袖はひづらめなみだ川
身さへながるときかば頼まん

此心は、あさみなればこそ袖のみひぢてとよみ給へ、ふかく思しめして身もしづみながるゝなどゝきかば、せめてたのまんとなり、

とよみてつかはし給へば、敏行いとふかくめでゝ、今しばしながめしかど、卷て文箱に入てをかれしが、そのゝちはあひなれ給ひて、いとふかふかたらひ給ひしが、あるとき雨のふりぬべきになん見わづらひ侍るに、敏行の方より、身幸あらば此雨はふらじ、雨もふらずば今宵見へゑんといひつかはされしかば、例のなりひら御いもうとにかはりて、

數々に思ひ思はずとひがたみ
身をしる雨は降ぞまされる

此はかず／＼におぼし召すも、おぼし召ぬも御

心はやしれたり、雨のふりそふなればとひがたし、幸有て雨のふらずばとはんとの給ふ、かくのごとくあだなる御心ぞとしれば、身をしる雨のふりまさるとなり、身を知る雨といへれば、かかるあだ人をたのみて、わが身のゆくすゑをおもひてなげく泪いとふかき心ぞ、

一むかし有女、なりひらの御心をうらみてよめる、

風吹ばとはに波こす岩なれや
　我衣手のかはくときなき

此心は、風吹ばとはに波こす岩のごとく、わが袖のかはくときもなしと也、風吹ば常波にふかぬ間もなく、波のたゝぬ間もいふ心を、とはになみこすといふ心にこもれり、

と女のつねのことぐさにいひけるを、聞おひて業ひら、

夜ゐごとに蛙のあまた啼田には
　水こそ増れ雨はふらねど

此夜ゐごとは宵ごとにはあらず、夜ごと也、よなよなかはづの雨をこいてあまたなく田には、雨はふらねども水のまさるやうなるが、それはかはづの氣ざしより、水のまさるとみゆるが、其ごとくにこなたのふかきおもひの氣ざしにより、そなたの袖にも波のこすべし、それはそなたはさのみおぼしめさねども、思ひのふかきゆへなりと也、

又一説には、女の心おほくして、あまたの男をかよはすゆへ、そのあまたのおもふ心を、かはづのなくごとに雨をこひ、あまたなくにたとへ、雨はふらねど水のまさる樣に、そなたはあだにてあまたの思ひあるゆへ、そなたの袖もかはくまもなしと也、

一むかしなりひら、友だちの妻におくれたりしがもとへ、よみてやらせ給ふ歌に、

花よりも人こそあだになりにけれ
　いづれを先に戀んとか見し

此心は、花ほどあだなる物はなけれども、花よりも人はなをあだになりにけり、いづれをさきに戀んとか見し、思ひの外なる事なりと也、

一昔なりひら、ひそかにかよひ給ふ女のもとより、今宵ゆめになん見へ給ひつるといひてこしぬれば、業

人も有もやしつらん、我は今身に覺へてしりたり、そなたを終に見もせずしらねども、戀しきといふこゝろなり、

とよみてやらせ給へば、女返し、

下ひものしるしとするもとけなくに
　かたるがごとは戀ずぞ有べき

此心は、むかしより下ひものひとりとくるを、人に戀らるゝしるしとするが、いまだわが下ひものとけなくに、かたるがごとは戀給にはあらじ、僞りならめとなり、かたるがごとはかたることにはあらず、いひこし給ふがごとなるべし、

又なりひら、

戀しとはさらにもいはじ下ひもの
　とけんを人はそれとしるらん

此心は、そなたより人に戀らるゝときは、下ひものとくる物なるが、いまだとけねば戀ふるといふは僞ならんとのたまへば、今よりは戀しとはさらにいはじ、眞實わが心のふかければ、などかそなたの下ひものとけぬ事のあらじ、そなたの下ひもだにとけなば、我戀ふるといふ事、此方よ

平の歌に、

思ひあまり出にし玉の有ならん
　夜ぶかく見へば玉結びせよ

此心は、夢はこなたの魂がかよふゆへみゆる也、そなたをこひしくおもふわが魂いで行ぬらん、夜ぶかく見へば玉むすびして結びとめ給へとなり、たま結といふは、世に人の魂のとぶをみて、魂はみつ主はたれともしらねども、むすびぞとむる下かへのつまと云、此歌をとなへまじなひてとむるといふ事有、此事を魂むすびといへるが、畢竟はおもひあまりて、わが魂の出てそなたのゆめにや見へつらん、夜ぶかく見へば玉むすびして、責てそなたのつまにむすびとめ給へかしと也、

一むかしなりひら、やんごとなき女の夫におくれたりけるを、弔ふやうにもてなし、よみてやらせ給ふ歌に、

いにしへは有もやしけん今ぞしる
　まだ見ぬ人を戀ふる物とは

此心は、いにしへはまだ見ずしらぬ人を、戀ふる

りいわずともしり給はんとなり、

此歌は後撰集に、有原の元方と有、下紐の歌に讀人しらずと有、されどもかたるがごとはあらずもあるかなと少下句かはれり、元方はなりひらの孫なり、此伊せ物がたりの作者つくり入たるか、

一むかし業平、念比にいひ契り給ひし女のうつりかはる樣に見へければ、よみてやらせ給ふ歌に、

須磨の海士のしほやく煙風をいたみ
　思はぬ方にたなびきにけり

此心は、須磨のしほやくけぶりのすぐにたつべきに、あらぬ風のふきておもはぬ方になびくが、其ごとくそなたもかく念比にちぎり給ふやうなれば、いづかたへもなびき給ふまじきに、あらぬ風やさそふらん、おもはぬ方になびき給ふとなり、

一むかしなりひら、あなたこなたにすてられやもめにておはしける比よめる、

ながからぬ命のほどに忘るゝは
　いかに短きこゝろなるらん

此心は、あだなるよはひのながからぬ命のうちにわするゝは、いかに短心ならずやといふこゝろ也、一首の内にながからぬといひ、みじかきとは歌にありけれど、是はさにあらず吟ずべし、

一むかし仁和の御門、せり川に行幸なさせられし時、行平を召つれられしに、行平その比は六十九歳にして、七十に及び給へば、よはひかたぶき御供にげなく思し召けれども、仁明文德清和陽成まで民の費を痛はらせ給ひ、野狩の行幸やめさせ給ふゆへ、さだかにしれる人すくなし、行平はおほたか飼の堪能とて召つれられければ、勅意もだしがたくて御ともせられけるが、ゆきひらの御しやうぞゝ、摺狩衣に鶴を縫て付給ひける、行平七十に及びて若かりししやうぞくなれば、人のおもはん事をはかりてよませ給ひ、かり衣のたもとに書付給ふ歌に、

翁さび人なとがめそかり衣
　けふばかりとぞ田鶴も啼なる

此心は、かく翁の身として、かゝるかり衣の若きを着たるを人な咎そ、けふは又もあふまじきたまさかのみゆきなれば、かく出立もけふ斗ぞと田鶴もなくなりと也、

とよみ給ふを、帝ゑいらんましく〳〵て、御氣色あしかりけり、をのが老たるをおもひければかくよみしかど、不吉に聞ゆれば叡聞あしかりけり、若からぬ人はきゝ、寔に老けりといへり、

一むかしなりひら、みちのくにてある女をかたひら住せたまひしが、なりひら都へかへらんとの給へば、女いとかなしみて、むまのはなむけをだにせんとて、おきのゐみやこ島といふ所にて、御名殘おしみにや酒などすゝめてよめる、

おきのゐて身をやくよりもかなしきは
宮古島へのわかれ成けり

此心は、おきのゐてといへるは、火を身にすへてといふ心に取なし、今なりひらにわかるゝは、身に火を居てやくよりもかなしきと也、居字古今には物名の部に入ど、すみ消の歌に小野小町が歌と有、

一むかしなりひら、心ならずみちの國までまどひいきたまひて、京に思ふ人を殘したまへば、いひつかはされける歌に、

波間より見ゆる小島の濱びさし
久しく成ぬ君にあひ見で

此心はさしたる事なし、かくなみぢはるかにへだて、君にあひみてよりひさしくなりぬといふこゝろ也、小島のはまびさしといへるは、久しく成ぬといはん序歌なり、なりひらの御身の上、何事もなくみなよく成給ふとなん、云やらせ給ひけるとなり、馬上相逢無ニ紙筆一、頼レ君傳語報ニ平安一といへる心なり、

一むかし御門すみよしに行幸有しとき、なりひら、

我見ても久しく成ぬ住吉の
きしの姫松幾代へぬらん

此心はあきらかなり、我みても久しき松なりしが、幾代かへぬらんとなり、

とよみ給ひしかば、住吉の御神あらはれさせ給ひ、御詠歌に、

むつまじと君はしら波みづがきの
久しき世より祝ひそめてき

此心は、念比に君はしらずや、みづがきの久しき世より、當社はいわひ初てきと也、しら波はしら

ずやといふ心、みづがきとは久しきといはんまくらことばなり、惣じて神垣の久しきなるべし、

瑞籬とかけり、

一むかしなりひら、久しく音信もせでおはしける女、流石わするゝ事もなくて參りこんといへりければ、なりひら、

玉かづらはふ木あまたに成ぬれば
絶ぬ心のうれしげもなし

此心は、玉かづら女にたとへていへり、爰にては草の玉かづら成べし、玉かづらのあなたこなたの木にまとひ、はふ木あまたに成ごとくに、そなたもあなたこなたに心うつりければ、今絶ぬ心のありても、さのみうれしげもなしといふこゝろ也、

後撰には玉かづらをひかけを云と見へたり、

爰はたゞつるかづら成べし、

一むかしなりひら、あだなる女に形見とてをかせ給ひたる物どもを見て、うらめしくや思ひけん、歌に、

形見こそ今はあだなれこれなくば
わするゝ隙もあらまし物を

此心は、かたみこそ今はあだなれ、是なくばわするゝ事も有べきに、又もや思ひしてわすられぬは、かたみをみるたびにおもひ出すゆへなり、かへつてかたみはあだごとなりと也、

一むかしなりひら、ある女のまだよをへず、男のかたらひをもせざりしと思しめす女に、心かはす人おほく有よしきゝ給ひて、のちよみてやらせ給ふ歌に、

あふみなるつくまの祭とくせなん
つれなき人のなべの數見ん

此心は、あふみの國につくまの祭といふ有、この祭にはかならず女のおとこあまたにはだをふれたるものには、その男のかずほどなべをかづかすると也、さればかの女のいまだ夫をもしらぬとおぼしけるに、いつのまにかは心をかよはす人のおほく有つるぞや、つくまのまつりをとくせよかし、そなたのかずけるなべを見て、ちぎり給ふ人の數を見たしとなり、

一昔なりひら、梅壺より雨にぬれて人のまかり出給ふを見たまひて讀る、

鶯の花をぬふてふかさもがな

ぬれぬる人にきせてかへさん

此歌は、青柳をかた糸によりて、鶯の縫てふ笠は・梅の花笠といへる歌をとりてよめる、梅つぼより雨にぬれて出き給ふ人なれば、うぐひすの花をぬへるかさもがなあれかし、ぬれぬる人にきせてかへさんとなり、梅壺は凝花舎の御殿の名なり、

とよみたまへば、女返へし、

鶯の花をぬふてふ笠はいな
　思ひをつげよほしてかへさん

此心は、鶯の花をぬふてふかさはいや、そなたの志のふかきおもひをつげ給へかし、我も又その心ざしをほしてかへさんとはいへり、おもひを水に取なしておもひをつげよ、ほしてかへさんと也、おもひを火にもたせたる歌に、

雨ふれどふらねどぬるゝ我袖の
　かゝる思ひにかはかぬやなぞ

後撰に有

にくからぬ人のきせたるぬれぎぬは
　おもひにあへず今かはきなん

一むかしなりひら、ふかくちぎりし事もいたづらになりて、あやまれる人によみてやらせられし歌に、

山城の井手の玉水手にむすび
　たのみしかひもなきよ成けり

此心は、井手の左大臣の境地面白によつて、ゐでに新造をつくりて山吹などをうへ、此水を愛し給ふが、我一期の後にも我をおもひ出さば、此水へきて見よかげをうつすべしといひ遣されしかど、後に跡をしとふ人有て、かの玉水へゆきてみれど、その面影見ゆる事さら〳〵なしとかや、かならずといひしやくそくのたがふ事になん井での玉水といへり、そのごとくかならずたがへじとちぎりし中もいたづらになり、たのみしかひもなきよなりけりとうらみ給へる心也、

一むかしなりひら、深草にすみける女をやう〳〵あきがたにや思ひたまひてけん、かゝる歌をなんよみたまふ、

年をへてすみこし里を出ていなば
　いとゞ深草野とや成なん

此心は、年をへて過にしさとを出ていなば、いと

どくさぶかき野とやなりなんとなり、うらの心は、かく我がすてゝゆかば、女の物さびしく深思ひやすべしとあはれみ給ふ心也、

と讀みたまへば、女返へし、

野とならばうづらとなりて啼をらん
かりにだにやは君はこざらん

此心は、なりひらの歌に、ふかくさ野とやなりなんといへるをうけて、野とやなりなんとおほせ給へば、我は野とならばうづらとなりて啼をらん、深草のうづらとなりてなきをらば、かりにも君のき給ふべしと也、狩にも假にもといひかけ、さてうづらはあひふのなくこゑによる物なり、我うづらとなりて鳴をらば、かりそめにも君のうづらのあひふをよぶとひとしく、こざらんといふ事あらじと也、

跋

此業平むかし物語といへるは、さすがに和歌の秘する所の伊勢物がたりの面影を、かくいやしきことのはに述べやはらぐる事空おそろしき事に侍れど、全歌書にはあらず、たゞ兒女のもしほ草をひろひよみ覺て、むかし／＼かふあつたといへるむかしがたりにもならむかし、

名にしおはゞいざことゝはん都鳥の、我思ふ事は有やなしやととふ人もなければ、濁もいざやすみだ川の、深き流れのすゑひろき一滴をくみ得て、筆にそめ侍りぬ、

延る寶の六つの根も明て離(あきらか)な年
千々の花咲半の陽注レ之畢　濃陽縣生大垣

紀　哲　計　和　述

畫工　菱　河　吉　兵　衛

板本　柏屋與市郎開版

伊勢物語ひら言葉 終

仁勢物語通補抄自序

子曰は、昌平郷の裏店の壁より出現ましく、二十編の石部金吉を、左樣然者と言出せり、今御めもじにいるゝ所の似勢物語は、忝もあたじけなくも、柳原折輔卿が昬衾布の破れめよりあらはれしを、一布の一枚一枚に延し集て、攤曰、天德を我になせりとは、かゝることをや夕貌の、まきも割ます、飯も焚、勝手男のとりなりまで、在五中將に准て、いともやさしき伊勢太輔が口眞似を、むくつけおのこの鬚髭の髣髴たる筆豆と見てくんなんしと、すべたの馬を踏んで、貌ももみぢにしかいふ、

辨天明の持給ふ四すじに糸ゆふの春

清水えんしう題

集注叙

わたくし參勤交代の時分、殿樣御めがねもて、江都さアに相殘り、二合半の内を喰ひ延し、色事ノゥ稼、でつかちなく錢のヲ遣ひちらし、あんたることだと肝をでんぐり返し、そさまの異見に付申て草鞋のヲ日日に作り、紙衾一重をゑいやつとハア求たら、その破れたる所よりお出遣つたる反古のを、二朱太夫が似勢物語と書てありめすゆへ、鼠の聲色とやらはハア遣ひ申さねへが、注々をぶん出すこと左のごとし、

辰初春

むつみかりしお雜煮を喰ふ日

柳原四六意遊行兼大住守折輔書

仁勢物語通補抄

遊大門隠里女　二朱太夫　述
大部屋居候　柳原折輔　注

○茶代四十八段

ふらつき男、ぐいのみしてならちやをくひ、春日野水茶屋〔かすがの、みなさま御存の水茶屋なり、ちやがまがはらに神とゞまるとは、この茶屋のおほきことか〕にしつたりぶりしてかけゝり、その茶屋にいやみなる女〔いやみなる女、いやみからみこてらされて、あげくのはてにはつき出しの、なかずと遊びなよと、おんばどのゝことづて也〕ちやらくらとしてつまみける、つれてにげばやといゝもてければ、その女のまひだれの紐にすがり、かすがのゝ春(かす)といふ字は〔かすと言字、なあまへ〳〵なまへのかすくらひと言、盛衰記曰、平相國は平家のぬかかす也と〕春(はる)と詠えんあればとて、

歌字盡　春つばき夏はゑの木にあき凩の
　　もれ出る月に釜をぬきけり

〔釜をぬきけり、百人一首の中に、なげきつゝ月夜に釜をぬかれけり、あきれはてたる我しよたゐかなと詠り、是を本歌にて詠か〕

となん耳こすりしければ、女も下地は數奇なり、御意次第なりとて、

白石噺　みちのくのわたしやしら坂さかゐ村
　　その兄弟はしのぶみやぎの

〔しら坂さかゐ村、白石噺七つ目に委し〕

といふむだをこじつけたり、ふら人〔ふら人、ぶらてうちんのいみやう也、歌にぶらのとまやの秋の夕暮とよめり〕はかくいちはやきいやみをなんしける、

○一貫ニ付三十二段

ひんなる男ありけり、ひなしの五把を坪皿へ〔坪皿、銘曰、長とはれば半が出る、五をつければ二と出る、貫木の駒に鞭うてどもまにあはず、〕さいのめにきざみおはしましけり、とればとられ、心ざしよくふかゝりける、折ふしあたまも卯月八日〔卯月八日、おしやかさまの御たん生日ぢやにするの初也、〕ばかりのほどに、影をかくしてけり、〔影をかくし、しつぽんといふ、世にしつぽんとお月さまほどの違ひと云々〕さす

がひなしかし〔ひなしかし、一六五十なんぞ名を呼ぶ、すへはあづけめしにおよぶ、〕もあり所はきけど、人のいきかよふべき所にもあらざりければ、百貫のかたに〔百貫のかた、東百官に、日隼太といふは、足をはやたにしてにげること也、孔子も日々にはやたにして、また日々にはやたなりと云々、〕あみ笠とあきらめける、立てみさいそくしてみんにも、大の手こずりにて、おたふくなる女房の親里なりける店受のもとにとゞけるとて、

虫除歌合　棒にふる卯月八日は質日よ
神さけ虫のせいばゐぞする

○桂川三十二文

四十にたらぬ男ありけり、〔四十にたらぬ、帯屋長右衛門がこと也、〕小娘のいとさゐはじけたるを、〔さゐはじけ、本草盲目に曰、さゐかちに似てせつかちのごとし、一名まんがちと云、〕伊勢へ連れていにけり、もどり道にて、かたい石べのおまへをば、あじな心にしなのやとぞ言ける、それよりをんはらぽてれんとなり、袖にかくすも三月か四月、梅にみのいるさ月やみと呼びて、かの男も女房のおきぬにかくして〔おきぬ、長右衛門女房也、ねずきと見えておきぬと云、〕からうじてぬすみ出て、いとくらきにおんぶ〔おんぶ、おんぶ檀金の本尊を、本田よし光がおんぶしたる類か、〕させて行けり、かつら川といふ河をいで、草の上にをきたりける、その時すゞろに女かなしみにたへかね、アレ壬生寺のかねの数九つこゝに北南、東寺の塔や朱雀野と、くりごとして此川にどんぶりこと、〔どんぶり、馬鹿集の歌に、古池へ蛙どんぶり龜によつきり、すつぽん〳〵とうそのかわかな、〕龜の子〔龜の子、きやんさい圖會曰、占のかん板に似たりと、〕や體と相店〔相店、同じ住居のこと也、居候とはてゝちがひ也、〕かりに成とて、

ウレ
イ
うそでないほんにきのふやけふまでも
わたのけいこやてならひにゆく

これはおはんが、ホシニ女子は一生に夫と云は、たゞ一人〔夫といふは只ひとり、女今川三くだり半に曰、女はすいた男はもち次第の事、〕と馬鹿がたく覺へしよりのふれうけんなりと、あでなることばにも、私しやいやゐなアなんと云める、幼ときからおまへをしたひ、ものみ見物〔物見見物、下から讀でもおなじこ

となり、熊坂氏の物見の松は盗人の親玉、こゝにてはむすめの豆盗人、まめやあられと文を付たであらふ、推量〕にも飼犬の如く跡を追ひ、はだか人形役者繪や、十九文〔十九文、通土記云、そのかみ手ぬぐひ安賣三十八文、下駄の安賣十九文、さわぎうたの三下りより初る〕の花簪にて、終に身をはたすことになんなりぬ、嘸やゆびのわや、銀むねの櫛の紋所にも長の字を、鶴〔長の字鶴、鶴林玉露曰、今髪結所のしやうじもの語にみゆ〕にこじつけて附たらんと、えんに可愛らしき俤、豊前齋宮が一ふしに殘る、

○百ノワナ十八文ヌケ

居候の男ありけり、その男うき世を三分五厘と見かぎり、〔三分五厘、二一天作の古語なりと云〕京はなまじらけて〔なまじらけ、なま鮭のまへかたなるを、なまじらけと云、論語讀の論語知らずの曰、まんまはじらけをいとはず、なまずはおたふくをさがすと、下略〕面白くなし、お江戸サアへまかるべいと心がけ、もとより同行とする人一人二人していきける、道しれる人もなくてまどひあるきけるに、萬歲〔萬歲、安ひ扇の一名也、萬歲扇と云、萬載集はまた種類上品也〕のお出やる國の、やつはしと云所にいたりぬ、ここを八橋と云けるは、夜は何時ぞ四つばしを、わたらばてうど八橋のと、唄ひかなでけるゆへ、八橋と云める、人のいはく、かきつばたと〔かきつばた、岩井半四の曰、杜若ほうわうは鳥羽法皇の再來也、何のことかわからず〕いふ文字を、かみにすへて旅の心をよめと云ければ、

貧古金　かわ羽織きつねこん〳〵つら出せば
　　はる風寒くたぬき寐てゐる

〔狐、狸、きつね三疋尾は七つ、又云狸のきんたま四疊半、むかし八疊なりしが、今はふうがに四疊半に仕たりと云〕

とよめりければ、みなおかしがりて、なんのことだかきくがまやなりといゝける、行々てするがの國になりぬ、うつの山にいたりて、むかし文字太夫がかたりし、駒鳥戀の關札〔戀關札、むかしものゝすく淨瑠璃也、今豐前方には文句をあらたむ〕をおもひ出しゝ、

いかや文集　きよみがたうつの山べのうつゝにも
　　ふりかへりたる袖しィかうゥら合手

ふじの山を見上れば、とほうとてつもなくまつしろ

に高く見へけり、

雑巾集　てつぺんはくもをつきぬくお富士様

根は龍王のおつむりの上

〔てつぺん、郭公云てつぺんかけたかと八千八聲のおつしやべり也、龍王、飛車のなりたるなりびしやひらしいといへり〕

その山をこゝにたとへば、一やま四文まつかわたばこを、二三十ぷくかさねあげたらんほどして、なりは出つ尻〔出尻、おうばどのゝおいどに似て、てんぐさまのおはなつきをうらやむ、〕のやうになん見えたり、なを行々て武藏の國と、しもつふさの國とのわりなき中に、いとでつかちなき川あり、それを隅田川といふ、その河のほとりにゑり袖口のあかきもの著て、むれいつゝ、いとたけ〔いと竹、とよ竹竹木の類也、いとは本丁二丁目のはらからの商人が、近所のいとやのむすめの小いとがるいか〕をしらぶるものあり、ありや何あんといふものじやと、船頭〔船頭、せんどう、大日如來なり〕どのにうけ給り候へば、アレカヘ藝者〔藝者、種類多し、のみのてうなごんが藝者、ぢんこう記に委し〕といふ者なりと、うそけんどんにぶつかけ聲にこたへける、〔ぶつかけ、二八也、娘の年かつこうとは違ひあり〕

双子隅田川　名ぬしさまいざことゝはんみやこ鳥

むめわかさんはどこに御座るぞ

とぶんだしければ、舟こぞりてのつけにそりけり、

○施主六文

ふるもの買の男ありけり、西の在になまめきたる若後家のありけるに〔若後家、誹諧附言に、一分のび二分のび後家のみだれがみ〕うちかたらはんとおもへど、言よるべきたよりもなし、とかくお談義〔お談義、佛書曰、小言の一名、お袋神のおだんぎ也と云〕へ參るが上分別と、寺歩行して佛餉袋〔佛餉、ぶつてうづらのごとくはる也〕なんどの世話なん仕ければ、後家もかぎりなくきどくなる人と思ふ色のあらはれしときに、男のかたより、

秩父御詠歌　ありがたやひと卷ならぬ後家の鼻

さぞや亭主の死なぬいにしへ

この歌川施我鬼〔施我鬼、がきのものを、火むしがとるるいか〕の經木〔經木、しやくじ經木といへり、おたふくのたとへか〕のうらに書つけて、寺の小僧してを

くりければ、後家もうれしくやるかたなかりしにや、佛餉袋のうらに、

美濃谷汲御製 今まではおやとたのみしはりかたを
　　ぬいておさめんみすのはながみ

〔はりかた、はりかたぐ奉存候、且は嬉しいことなるべし〕

と云やりし、ちょんの間の中とぞなりける、

○穴堀百段

寺に飯焚男ありけり、そのおほん内に飛切〔飛切、あぶらひかず、無類三國一の御堂前か〕の若衆小性いまそかりける、このおとこ若衆にけさうせんとおもへども、和尙にぼんてんこく〔ぼんてんこく、日本繪圖曰、ぼんてんこくにずいとくじといふ寺あり、本尊はしりくらいくはん音也〕のおはらい箱をしよはせられんことをおそれて、云よるべきわざもなふ、うちわびてかの若衆にきけがしに、

○マ、千ス集 我もとめてわがけつせんとおもへども
　　なゑりやとゞかず立ばまがらず

かくきこへければ、若衆もいとふびんにおもひけん、お布施〔お布施、ふせない經とて、ぼんさまはきらい也〕を包しもめたる紙のうらに、

西國歌合第一等 ふたらくやきじはけん〳〵なくばかり
　　那智のお山になびくたきつせ

〔きじはけん〳〵、きじとはめりやすにあるきゞすのこと也〕

と云遣りければ、男すゞろにうれしがり、その夜本尊樣の影にて抹香臭もいとわず 此末かんじんかんもんの所、本文わり木缺文になる、嗚呼（本尊の影間なるか、）

○（◎原本題を缺く）

けんうん〔けんうん、ぶる〳〵もの丶一名、白うん黑うんの同じくか〕なる男ありけり、こゝを踏ばあそこが上り、空がさけたらどうしやう、地がやぶれたらわしやなんとせうと、とんだことが氣になり、色事なんどかせひでもするがひちめんどう〔ひちめんどう、百文四文の利足記云、八月めにながるゝといへり〕なりと思ひ切、わび住居してけり、鳥の高く雲井に羽をのすありさまをみて、ぶる〳〵ふるへながらかくなん詠けり、

易案抄 そらを飛とんびからすを見あぐれば
　　塔の九輪ではらぞあぶなき

〔とんび烏、いかのかうらより出現ある〕

○七兩二段

間男〔間おとこ、ゐんぐは經に曰、このるい地ごくのたのしみか、くらき所をよしとす〕ありけり、本亭ともろともに炬燵にあたり、つゝゐつゝの心持にて、かの女房と手にて、かたらひ〔かたらひ、おいらんの名にあらず、◎てうちんに此相印はない所〕ごとなんどしけるが、○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○、亭主はくはばら〳〵まんざいらくとて、何ごとかはとゝへば、地震〔地しん、丁内記云、ばん太郎の住所を地しんばんといふ〕になんあらんと答へぬる、女房はいけしやあ〳〵まじ〳〵と仕て、さてもおゝひなる陰陽〔陰陽、おんやうともいふが、身のうへしらずか〕のかたらひかな、首代ぐらゐがものはあるべしと、亭主の貌を見ければ、

鯰尾院御製〔鯰尾院、ひん王萬八代の聖主也〕

九はやまひ五七は雨に六つひでり
　四つ八つゆらばかねとしるべし

女かへし、

木九からに火三つの山に土ひとつ

七兩二分と御すいりやうあれ

〔七兩二分、無限のかねの銘云、三百兩には二百九十二兩二分ふそく也、是を笠の代金と云〕

○アゲ代十五匁

いろ男ありけり、ふかくけいせゐに〔傾城、誠があらばうんのつきる所か〕名馴をかさねて行かよひつゝ、しんだいのよき傾ゆへ、なにとぞはりおほせて、ひかばやと心にこめて、うぬかもん所〔もん所、三つもりのむめばちか、つる柏をつける、はしにはふじどもへ〕まではし箱や、枕につけさせるやうになりけり、みやうだいをとりても、小言さへいはずなんなりぬ、さりながらこの傾あたじけ〔あたじけ、かたじけなきうらはら也、あたしげなすびのじきやきか〕なきやつにて、わたしがどうともしやしやうなんと、言ことをいはざりければ、ひとりねのあんどう〔あんどう、かんざしをさしこむ穴おほくみゆ、あんどうのつるしぎり也〕に、かく書つけてかへりけり、

地震五代歌合　ゆるぐともよもやかざしのかなめ石
　あたじけないのあらんかぎりは

女この歌を見るとそのまゝかぶろ〔禿、もうせんをか

むろうと云」てふめのわらはべよびて、むかふの人〔むかふの人、いせやに入と呼、かうしにてしんぞうのじやらくらあり」に足はこばせつゝ、はんきり〔半切、六段めの切也、どふぞ〴〵とかくやつか」のう守やうなるかみとりよせて、れいのごとくいよ〳〵御きげんよくとうぬがはうのきげんのよしあしから先へかき、めでたくかしく〔かしく、をさ名なんどかく也、たれさま御もとへ、ゑんより」の末に

百人一首 千はやぶるかみくず買にたどんうり
からくりみせて水ぐきをやる

〇百三十二文日雇

ふだんの强氣土持〔土持、きやん代實錄、一荷三十二位、後天びん坊に入て、せんざゐしうを撰す」ぎみといふいまぞかりけり、日頃九ごんをたうべ、まき舌にてたとへよしんばよしやよしかしと、太平樂をなん言ける、其近きあたりに寄合辻番〔辻ばん、こたつの身がはりなり」の椽に來て、遊ぶおんば〔おんば、ねんねんころ〴〵ねんころの三番叟か」どのをみそめて、彼辻番なるこしぬけ親父〔親父、とんぼがへりをしてじやおと言」を十割〔十割、四割八分の上を行詞なりと」と積み、文にて見しらさんと、とほうとてつ〔とはうとてつ、そてつの親玉也、とほう大根の類」もなくかゝせ、すきがへしの紙もて封じけるおくに、

神田吉廣歌合 おみさまにせきこみせきそん大權現
早くねゝしてだいてんぐさま

〔せきこみ、大和詞に云、のぼ瀬の近所、むだのしほやなんど有り」

〔大てんぐ、くひんとも云、僧正房の曰、くひんとは五一のこと、ちよぼのるい」

かくきこえければ、女もいとにくからずやおもひけん、私も在所から此はる〔此はる、細見記に、むかし宗田やのきみたりと見ゆ」來ましたが、そふおもふてくれめす御しんのほど、ありがた茄子の苗、うつり胡瓜〔きうり、めうがもしらぬきうりと半兵衛に、嘉十郎がいけん狀にあり」の御こゝろなきやうに、御返事をさゝげ[illegible]、

嘘八百番歌合 ほとゝぎす初音ぶん出せきくべいぞ
てつぺんかけてのぼせ申に

〔ほとゝぎす、子で子にあらむとよくかくやつ也、第一口しやべりか」

男は返りを見るよりも、すゞろにうれしく、まき舌にてアノあまが斯言てよこしなやア、七里けんぺい、つきやがどろぼう〔どろぼう、どろ田を棒でぶつたやうなこと〕にあやあしめへし、うそはあるめへとよろこびざけにくらひ酔、まるね〔まるね、ひとりねのとかまるねやの字の外見えると古歌あり〕してけり、目ざめてはつくさめ〳〵、〔くさめ、くさめ〳〵何を見てはねる、十五夜お月さますつぽんの違ひ也〕ヱ、いめへましゐ畜生め、おれが噂をアノあまがするそうだとて、

このたびの風をひいたらそのかどに
みなふきかへせいせの風神

とはやり風の歌もてまじない〔まじない、御祈禱のるい、きとうばかに仕た〕ほどびにける、ねん〳〵ころころの女にぞありけるとなん、

〇三くだり半段

なうてんきなる男ありけり、かの手拭〔手ぬぐひ、本染の初、いてうつるにのりて、なでしこかさくらそうか、わからんことはしみづやにても、やなぎばしにてもきゝな〕と灰吹は、あたらしきうちがよいと云へることのはにならひ、女房を去こくらばやとおもひしより、三寶荒神樣の御はらだちつよく、夫婦〔夫婦、ちやあふうのぬけがら〕いさかゐのたえざりければ、女房もぶつてうづら〔ぶつてう面、このつらはよく出る也、まんがわるくなると、つらにつらがかさなる〕して仲人のもとへいにけり、

わが身ひとつにうまる子はなし
雑書男火女水歌　もろともにあふかこゝろはなけれども

この歌男みるよりふびん〔ふびん、萬寶へん書曰、どびんの口をきくの也〕とやおもひけん、招魂の歌となんきこえしを、かきつゞけやりける、

むすびとめたる下がいのつま
法樂三下り　こよひしのぶたそやたれぞとせかれても

〔下がい、みはゞはせまきをいとはず、羽をりはながきをいとはずと、孔子もいへり〕

〇髪結錢二十八段

うぬぼれ〔うぬぼれ、長ばをり大ふどころ也〕通のおとこありけり、にた山のべにいまそかりて、羽をりは前さがりもて、此をひきずり、ふところなん大きくしてかたのもん所、乳のあたりにみえつゝ、三枚のうら

つけはきて、二丁町（二丁町、さかゐふきやの兩丁、中村市村の戲場を云〕五町まちはみんなちかづきもやうに云もて行、じゆばん〔じゆばん、ちやばんのるい〕のえりで咽をしめながら、さくら田も、三立めの（虫喰）くはぐつとおもいれさ、なりたや〔成田屋、市川五代後胤花道つらね）もおもてむきはしうちがおとなしいが、がくやにいはくがありやす、ソレよしかへ、すとんた十五點だが〔十五點、人のことを惡く云ひたがるはいかいしのてんとり也、はい人はよく人をそしる〕えど丁〔江戸町、細見記くはし〕のあづまや〔令あづまや、にしきもみぢ〕と、こゝのえ〔令・こゝのえ、しけのしけじ〕がてのうらのこれもので、すれ〳〵だか、おもたか流〔おもだか流、委はてうちん紋づくしにあり〕のてうちんが、中の町〔中の町、中々の丁也、色の中の丁とも、春が春櫻、秋はとうろうのさかへ、あてやかなる地也〕にねへことはあるめへと、せけんを一吞にはなす、おのこなまめきたる女に、むかうからほれられやうとおもひ、あるけどもいけしやつゝらのにくひとのみ言女おほくて、ほの字の沙汰にもおよばざりければ、やげんぼりの不動尊にまうで、

かくなん、

守本尊 むませいしひつじとさるは大通よ
たのむ不動によびだ八まん

その時うしろより、口まめ〔口まめ、まめそく才ゐん命なり、人はわるかれわれよかれ、しんでも命のあるやうにといのる〕なる藝者やうの女、上田〔上田、はながみの名か、あんよは上手、ころぶは上田か〕のはながみの三つをりのかたおもてに、かいつけて、いづともしらでいにけり、かへしうたに、

同集 ねはせんじゆどらうちこそはふつうぞう
名はもんじゆにていやみふげんよ

〔どら、とらの子也、五百里程はしる〕

○無量無さん

ものかゝぬ男、となりなる女のはたち〔はたち、十九と二十一の眞中程也〕ばかりなるにけさうして、らうたけ〔らうたけ、けしからぬほれやうか、又きせるのらうたけか、不知〕しく戀わびければども、ふつとも〔ふつとも、尤ともいはず、そこでふつとも也〕返事せざりければ心うくおもひ、かの女十九はたちぐらゐなりければ、

風字集さうかうやはたちがかどに門立て
　　とうや東やらんやあらゝぎ
〔歌の心は蘭字也〕
ひとりつぶやきければ、女かしこくやあらざりけん、清書双紙〔清書双紙、師匠さまの御めがたをぬり廻す〕の裏なる反古一枚ひきさきて、このおとこのもとになげこみ〔なげこみ、百の旦那也〕ける、男いとくらう〔くらう、十郎が弟也、曾我ものがたりに見えたり〕して人に讀でもらいければ、
清書帖手ならひは坂に車をおすごとく
　　ゆだんをすれば跡へ戻るぞ
〔坂に車、船頭多くして山へ舟をのぼすが如し〕
此うたを聞て、おとこはづかし〔はづかし、斂ゑぼし に曰、はづかしながら此ぜうか云々〕とや思ひけん、いらへもせでゐたるを、など返事〔返事、桓武天皇の後胤清盛は、平家おつむりのでつかいのを、返事の大將と云〕せぬと女のいゝこしければ、
三下唄集文はやりたしかく手はもたず
　　たよりばかりがきかまほし
〔きかまほし、あまぼしに似て色あをしと云〕

女深く感じて、掃溜の隅にて忍び逢けるとなん、
○四の字九にする段
ものを氣にかける男、晦日の夜にかあ〳〵〔かあかあ、いろくろくして能くしやべる、くまのゝごわうに九十九ありと〕の鳴けるを氣にして、
家集やみの夜になかぬ烏の聲聞ば
　　流れぬさきの質ぞ戀しき
〔みやの夜、お先まつくらのるいか、はなをつまれぬもしれぬと云々〕
〔質、孔子も三兩の質、時なるかな〳〵と、利上げをせず〕
○九つ段
あさ寐〔あさ寐、ひるがほの花を朝がほとみるべし〕ぼう、宵まどひのおとこありけり、九つ〔九つ、御身替り質の利上げ、寶のせんぎなんど狂言のすじ書九つの鐘を相圖也〕のかねを相圖に朝食を喰ふとき、
いろは歌いかな日も人にすぐれて朝寐する
　　ろくなさいをもくわぬなりけり
〔さい、七五三二汁五菜のたぐひ、地理誌曰、ばん

丁はさいの目のごとしと、ざく〲汁に比したるや、〔豆腐のことゆへわからず〕

○五人張十五束

力のつよきおとこありけり、人々よりつどひて咄なんするにも、負ることとなんきらひなりき、その男のもとへなまめける〔なまめける、なまけは、やまけふこえてのかな違ひか〕女のかたより筆に紙をそへて、つよきますらお〔ますらお、枕をはづすことか〕の心のほどを歌にあらはして、言をこせとありければ、

いせ日待類書 おく山で熊とうでおしつかまつる
　　聲きくときぞ秋はかなしき

〔くま、金太郎小僧が手玉也、その力のつよきことにせ金時にあり〕

女かへし、

篁家集 筆に紙おのれは下につきにけり
　　みはみなはなれつちはみなつく

○一合二十段

下戸〔下戸、げこの立たる倉もなし、又しん川は上戸の立たくらばかり也と〕ならぬ男、酒〔酒、さけのさの字はさかやのさの字か〕やの下女を見そめて、たびたび酒たうべにまかりて、

道化百人首 あまが酒かんして見ればかすがなる
　　みかさのひとつとれもしやうかな

〔あまが酒、忠臣藏云、天川や儀兵衛はあまがさけの丁人成と〕

〔みかさ、やりかさとられがさ、ぐる〲〲ととられけるかな〕

○十の字の尻曲段

はなの下の長き男ありけり、十七八のあてやか〔あてやか、まめやのるいか、あてやかはあてがきの繪のるいともいふ〕なる娘をおもひ初て、起てはうつゝ、寐てはゆめ、たゞまぼろしと思ひあこがれ、人もて文をやりける、おくに、

雜言 宵はまち夜中は恨あかつきは
　　夢のかよひじ人めよぐらん

〔宵、よいしめてにならさんしよと〕

女は歌見ると、そのまゝいけ馬鹿々々〔馬鹿、擲平鐵砲の前置曰、ばかはしゝてもほはつまず〕しき、べけらかぼこうなりとおもへども、もちつとはなの下に童子格子〔とうじこうし、二本棒のおくの手に曰、は

なの下に出るときはたわけに近し、のろまの玉子也」に仕てやらんと、かへしに、

てんぽう歌合 袖とめてうれしや文の置所
　　子供ほしがるあまのかゝさま

かくきこえければ、男はのぼせ／＼てづゝう〔づゝう、大通のこうじたる也、不通の合の手、きやん下り、とつかの皮の破れたるのか」はちまきのみしけるが、これにてはたまのをもあやうしと、あさくさ〔淺草、どさくさに近し、深草は少將の住所也、物草は三の切あしや釜」てふ、ゐんぐは〔ゐんぐは、しんぐはのたかぶりたる也」ぢざうにまうで、わたしがゐんぐはでござりますと、むしやうにくるまをまはしければ、夜もいたくふけてかへるみちさへわからざりけるに、

觀音日はくれて野にはふすとも宿かるな
　　つみあさくさへまいるみなれば

〔野に伏、野にふすをのぶしと云、山にふすを山ぶしと云、あかいわしをなまりぶしと云」

夜ばひ〔夜這、盆踊唄曰、月か星か夜這ぼしか」あるきて、やうやくうちへなんかへりける、かゝるたわけなる〔たわけ、田を分けて歩行やつ也」おのこもありけり

○さんせん十二段

あつかましき〔あつかましき、つらの皮千枚、面の皮千枚ばり也」男ありけり、わうじ〔王子、東武北あすか山の先也、王子はすう人なりと史記の列傳に有り」となんいへるところにまかりて、よるのとのに〔夜殿、きつねのことか、雪こん／＼といふも白狐のことゝなん」つまゝれてけり、きつねみやびやかなる女のふりにばけて、〔ばけて、玉ものまへのいけとり也」かの男の袖をひかへて、あすかやまなる麓のちや屋〔ちや屋、伊太八が感懐に曰、茶や船やどのつけとゞけ、やり人かむろの仕著施まで、みんなそなたのくめんづくといへり」につれ行、ときならぬどでう〔どでう、をどりこの一名」のすいものなんどくはせ、ぼたもち〔ぼたもち、だなからをちたおはぎと、かねかけ松にみゆ」なんどたうべさせけり、その時女、あふぎのうらにかくかひつけてみせける、

嘘八百首 うらのみぞどじよやどじよ／＼どじよぬらり
　　ぬらりぶらりと山ざくらかな

とて、むまのふん〔むまのふん、四谷海道にさぞおほ

からん、まぐさの中にあやめ咲とは、つゆしらんといへり」や、みゝず〔みゝず、みゝずなく野べの若草と見ゆ」を、もちのそばのとなをつけてくはせけるまま、おとこも一のとみなんあたりで、ちうさん〔晝三、もうせんの上の高ひ顔色なり、晝三ばつかりけ十六と云々」をかひしこゝちして、女のひざによりかゝるとおもへば、ゑならぬひとつべ〔ひとつべ、本所立川通りにあり、五つべが五百らかん也」やうのにほひして、木の葉の中にわれのみふして、女はいづち行けんしれず、男もとはう〔とはう、十方世界と佛書に見へたり」にくれながら、くずのはのむかしを思ひわたして、

嘘八百首　今こんといゝしばかりのあだつきに
　　しのだがもりのうらみくずのは

〔あだつき、あさつきなますで、おさらば〳〵と云も此ことか」

これをなんきつねに馬〔狐に馬、こんひんと言きつねに馬の古事か」をのせたりとやおもほゆ、

○易代十二段

うたぐり〔うたぐり、おぐり殿の馬をほむるといふ古語より出たるなるべし」ぶかきおとこありけり、女のもとへ文をやるとき、四つ辻にたちて、くしもて袖の下にかくし行かふ人のことのはをもて、よしあしをしるよしして、

易案集　つぢよ辻四辻の袖に占問ば
　　うらまさしかれ辻うらのかみ

〔辻うら、夜たかのまち人をかくることか」

○一年三百六十四段

あそびくらす男、また來る春にもぶらつかばやと、書初〔書初、毎年かくむだを、みなさま御ひゐきあつく御覧下され、ありがた山吹の色は本やがせしめ、作者は卯の花一枚の戯言に、花の木にさかせることになりぬ、久しゐもの」の硯にむかひて、

萬歳千集　きみが世は千代にやちよにさゞれ石の
　　いはしのぬたでこけの呑まで

にせものがたりよみくせ

ぐいのみ〔ぐいとにごり酒に讀べし〕
ぢやらくら〔ぢやらとにごりていふを、ぢやうやしきと云〕
ぼてれん〔ぼてれんとやぶれ三味線のごとく讀〕
まかるべい〔べい〳〵言葉がやむべいなら、三百兩の金言也〕
でつかち〔でつかちせきゑもんと言がごとし〕
ぶんたし〔ふんどしとよみ違ふことなかれ、口傳ことなり〕
ぬいておさめん〔ぬいてぬいでのせいだく心のうちにあるべし、ぬいておさめるは、みのうちのほそき谷ぐみなるべし〕
とんび〔とんひつかり地もぐりと、なぞ〳〵のごとく讀〕
しやあ〳〵まじ〳〵〔どろぼうねこのごとし〕
おんば〔おうばどの丶ことのなれど、こ丶にては眞言秘密の法也、をんばしやら〳〵いろめくそはか、可レ秘々々穴賢〕
くれめす〔くれろの片言也〕

うぬぼれ〔ぼれたけなやう、相ぼれと長うたに見ゆ〕
どらうち〔どらは死して借金を殘す〕
くらうして〔くろうのかな繪の法也〕
はきだめ〔ためをにごる也、はき溜につるのをりたるがごとし〕
かあ〳〵〔かあ〳〵まじ〳〵也〕
朝寐ぼう〔ぼう〳〵まゆに、うすげしやうのごとく讀〕
あま〔あまやせみや茄のへたの古事也〕
よぐらん〔かくらんのおじさま也、人目よぐらん、本道の醫師か〕
ばか、〔むきみのこ丶ろ可レ成〕
へけらかほこう〔べらぼうの入詞也、へらとぼうが有れば、のりうりをする古語のごとし〕
づ丶う〔大通の借金まんと出來て、はちまきになる介六がごとく〕
夜ばい、〔星の名也〕
どじよぬらり〔どじよとは下女の妹也、そんじよそこと云々〕

ひとつべ〔本所の邊にあり〕

おもほゆ〔ほゆといふはわん〳〵のるいか、但とうぼへか〕

ぶらつか〔ひらつかの合の宿也、噓八百里〕

跋

似勢物語者、全不レ有ニ于二世一、而人見勢物語也矣、既客人有レ言焉、似勢三世先之世掛而矣、其歌樣夷曲不レ有、道化百人首不レ有、無ニ杜方登鐵一兮、見人之不レ盡者、于レ誠埒丁而如ニ路考乎居成一焉、嗚呼後人敵討之咄者、大概之一敵牛込之一言也、歌與贅與而雜炎、而分福茶釜尻尾生於焉、而踊子之鯰鯰者髭長、鼻之下者固道字、孔子曰、中人已上以可レ語レ穴矣、似勢物語成、千里必究、而穴面白哉與、授ニ御評判一兮、柳原之天道干見勢者有ニ御用捨一與爾言、

天明四年次甲辰初春

二朱太夫書

以南鐐八片
換半雛一人

仁勢物語通補抄 終

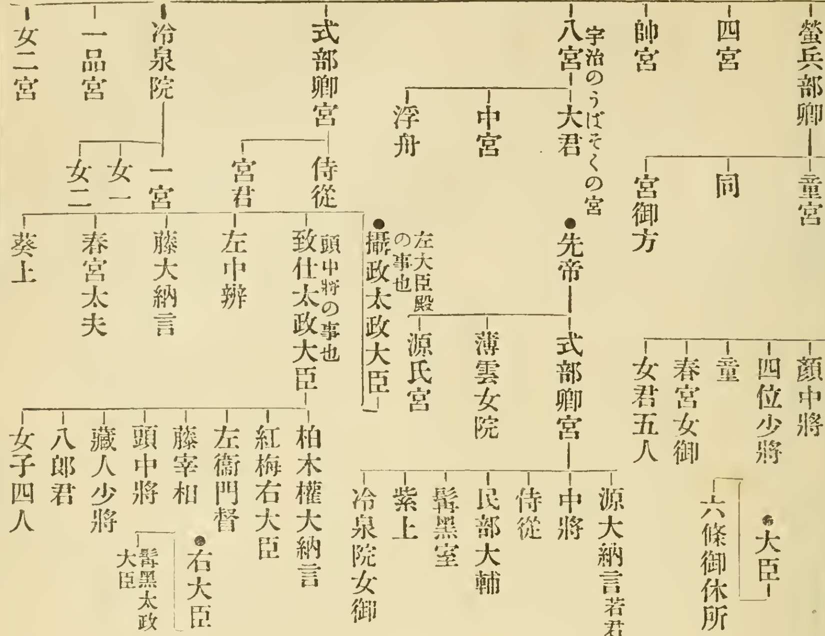
おさな源氏

ある女ばうの長々しきさうしをよみけるを、わらはべどものこぞりよりて聞ゐけるが、はやそらにおぼへて、くち〴〵にいひつゞくる、何ものゝわざにか、故もなき事共を書あつめたる物也、これをまことゝ思ひて、耳にふれ口になるゝは、あつたら事也と思ふ物から、此名だかき物語のすたら◎ヤを、かたのごとくつづめて書つゞく、古の歌人さゑ大事とつたへをかれたゐまき〳〵を、うはのそらに見わくべきならねば、かず〳〵のうそにかたことをとりまじへて、おさな源氏と名付たり、かのあだごとをよみおぼへんよりは、いろはのかた手にこれを見ならひ侍らば、よそめにはやさしくも思はれ、おとなに成てもまことのたよりにも成べき物にこそ、

立圃

源氏物語 巻之一二

- 太上天皇（きりつぼのみかど也）
  - 前坊 ― 秋好中宮（斎宮也母六條御休所也）
  - 桃園式部卿 ― 槿斎院
  - 三宮
  - 女五宮
  - 六條院（御母かうゐ ひかる源氏也）
    - 夕霧左大臣（御母あふひ上）
      - 右衛門督
      - 中納言
      - 右大辨
      - 侍従宰相
      - 源宰相中將
    - 薫大將（御母女三）
    - 明石中將
  - 朱雀院（御母こうきでん太后）
    - 今上
      - 春宮（御母あかしの中宮）
      - 式部卿（同）
      - 匂兵部卿（同）
      - 若君
      - 常陸宮
      - 中務宮（母明石）
      - 一品宮（同）
      - 女二宮
    - 女一
    - 女二（柏木の北ノかた）
    - 女三
    - 女四



前齋院
大臣―明石入道―明石上
按察大納言―雲林院律師
桐壺更衣
權中納言―左衛門佐小君
空蟬君

○きりつぼ

いづれの御時にか、女御かうゐあまたさぶらひ給ひける中に、きりつぼのかうゐとて、みめかたちすぐれたるあり、此かうゐを御てうあひあるによりて、世の人きりつぼのみかどゝ申たてまつるなり、あまたの女御更衣たちにくみそねみて、あさゆふの御みやづかへ、何かにつけてくるしげにもてなし、わづらはしむれば、日にそひて物奉らぬを、みかどいとゞあはれとおぼしめし、人のそしりをもはゞからせ給はで、御あそびのおり〳〵には、まづめさせ給へり、もろこしにもかゝる事のおこりにこそ世もみだれけれと、みな人なげきかなしめり、かうゐの父あぜちの大納言はなく成て、母一人はたのもしげなき身なりしかど、

このかしこき御かげをなぐさめにて年月を過せり、さきの世よりの御ちぎりやふかゝりけん、おのこみこうまれさせ給ふ、これなんひかる君と申也、源氏の君の事也、一の宮は右大臣の御むすめこうきでんの御女の御はらにて、まうけの君とかしづき奉れども、この二の宮の御かたちには中々ならび給ふべくもあらず、みかどいよ〱浅からぬ御ちぎりとおぼしめし、猶しげくめしよせ給へば、人々のにくみもいやまさり、かうゐのあさゆふかよひ給ふうちはしわたどのこゝかしこのみちみちに、ふじやうのわざをして、をくりむかへの人々のきぬのすそをけがし、又ある時はあとさき心をあはせて、らうかにたてこめ、人しれずわづらはせ給ふ事もあり、若みやみつにならせ給ふとし、かうゐわづらひ給ひて、里へ出給はんとあれど、みかどゆるさせ給はねば、かうゐの母さま〲に申なしさとにおろし給へり、みかどかなしくおぼしめし、こしかたゆくするの事までちぎりの給へば、かうゐのかた

　かぎりとてわかるゝ道のかなしさに
　　いかまほしきは命なりけり

手ぐるまをゆるさせ給ひており給ふ、みかどは御むねふたがり御心まどひ、何事もおぼしめしわかれぬに、夜なかすぐる程にたゞはて給ふを、たぎといふ所にてけぶりになし參らする、母君もおなじけぶりにとなきこがれ給へり、みかどは一の宮を見給ふにも、わか宮をこひしとおぼしめし、女房たちをつかはし給ふ、野わきの風ふき物さびしきゆふぐれに、ゆけいのみやうぶをうば君へつかはさる、御、

　みやぎのゝ露吹むすぶ風のおとに
　　小萩がもとを思ひこそやれ

みやうぶかうゐの母にあひて、

　すゞ虫のこゑのかぎりをつくしても
　　ながき夜あかずふる涙かな

うば君 いとゞしく虫のねしげき淺ぢふに
　　露をきそふる雲の上人

かうゐの殘しをき給へるしやうぞく、御くしあげのてうどなど參らせらる、みやうぶとりてかへり、わか宮の御事うば君の有さまそうして御返しをたてまつる、

　あらき風ふせぎしかげのかれしより
　　小萩がうへぞしづ心なき

をくり物どもを御らんじて、

尋ゆくまぼろしもがなつてにても
　玉の有かをそことしるべく

一の宮の御母は、久しくうへの御つぼねにも參り給はず、かうゐのうせ給へるをうれしとおぼして、月のおもしろき夜くはんげんなどしてあそび給ふ、きく人つらき事と思ひいふ也、みかどはうば君のもとをおぼしめして、

雲のうへも涙にくるゝ秋の月
　いかですむらんあさぢふの宿

月日をへてわか宮參り給ふ、あくる年一の宮とうぐうにさだまり給ふに、みかどは此二の宮をとおぼしめされけれども、世の人せういん有まじきとて、色にも出させ給はず、うば君其比うせ給ふにつけても、みかどあはれに過にし事まで おぼしめし出させ給ふ、わか宮七つになり給へば、文はじめし給ふ、御がくもんはさてをき、琴笛のねまでも雲井をひゞかし給へり、其比こまうどのさうにん參り、此わか宮のかしこくかたちのきよらなるにめでゝ、ひかる君とつけたてまつる、此若宮をば源氏のしやうをたびて、たゞ人になし給はんとおぼしめす、年月にそへてかうゐの事わすれ給はず、御心なぐさむかたもあらざるらしに、先帝の四の君のかたちすぐれ給へるを、ないしの介そうし參らせたり、此姫君は昔のかうゐによくにさせ給ひて、人のきはまさり給へば、御心うつりてしげくわたらせ給ふ、源氏の君は此姫君のおはします藤つぼへも打つれおはします、十二にならせ給へば、げんぶくし給ひ、左大臣どのゝ姫君十六になり給ふを、そひぶしにさだめさせ給ふ、此ひめ君あふひの上也

御　いときなきはつもとゆひにながきよを
　ちぎる心はむすびこめつや

左大臣　むすびつる心もふかきもとゆひに
　こき紫のいろしあせずば

源氏の君は其夜左大臣殿へおはします、此おとゞの御子藏人の少將には、二條の右大臣殿こうきでんの父也の四の君をあはせ給へり、源氏の君姫君には御心もつかず、藤つぼの御かたちをたぐひなしとおぼして、つねにしげくわたらせ給へば、おとなに成給へばみすのうちにもいれ給はず、琴笛のねに聞かよひ、もろ共に戀しうのみおぼされけり、

○はゝき木 源十六才の夏の事也、きりつぼと此まきのあひだ三年あり、其間に藤つぼに心をかはし給ふべし

ひかる君は藤つぼに御心ざしふかければ、内にのみおはしまして、左大臣殿の御かたへは時々おはします、長雨はれまなき比、内の御ものいみつゞきて、いとゞながゐし給ふ、左大臣殿の御子頭の中將藏人の少將事也、は、心やすくよろづの事かくしあへず、源氏の君の物いみにこもりおはします所へおはして、ともし火ちかくさしよせ、みづしの中なるいろ〳〵の文共をひらき見給ひて、その人の手か此人かととはるれど、それともあらはし給はず、そなたにこそ見所ある文どもはおほからめ、すこし見せ給へ、さあらば此づしも心よくひらくべきとゝの給ふ、此つゐでに女のしなじなをさだめ給へり、おやにあがめられたるむすめ、ふかきまどの内にこもりゐたり、其かたかどをきゝつたへ、心をうごかす事も有べし、又もとのしなたかくうまれぬれど、おとろへて位みじかきと、猶人のかんだちめまでなりのぼりて、家のうちふつきなるとは、いかゞはわくべきと定かね給ふに、むまのかみとう式部二人參りて、此しな〴〵をさだめあらそふ、まむのかみ云猶人のなりのぼりたるは、人の思ひなしかろ〴〵し、又もとはやんごとなきすぢなれど、おとろへたる人は事のたらざるにつけて、わろびたる事も出くる物なれば、いづれも中のしなといふなるべし、ずりやうのなかにもふつきにして、かしづけがむすめねざしいやしからぬも有べし、みやづかへに出て、思ひがけぬさいはひにあふもおほかるべし、人にしられずむぐらのやどにこもりゐたるもおかしかるべし、大かたなんなきも我ものと思ひさだめんは有がたき世なり、人はたゞしなにもよらじ、かたちをばさだかにもいはず、物まめやかにしづかなる心ざしだにあらば、つゐのたのみには思ひ定むべかりける、さてむまのかみ物がたりに、まだわらはべの時女ばうなどの昔物がたりをきゝて、あはれなる事かなとなみだをおとしゝも、今思へばかろ〴〵しき事也、心ざしふかき男のすこしつらき事有とて、家を出てにげかくれ、おとこの心を見んと思ふに、げにだうりなりと人にほめたてられて、あはれもすゝみぬれば尼になる也、これをおとこきゝてなみだをながせば、日ごろつかはれしふか女ばうなどきて、おとこの御心はあはれ

なる物を、あつたら御身をあまにならせ給ふ事よといへば、くやしき心いできて、佛のみちをもとりうしなふ也、たとひおとこの心はよそにうつろふ共、あひそめたる心ざしいとおしく思はゞ、かんにんしてうらむべき事などあらば、にくからぬやうにいひなし、心をとりたらんには、おとこの心もじねんとおさまるべし、なを〳〵むかしの事共かたり申さんとて、ちかくゐよれば、君もめをさまし、中將もつらづゑをつきてきゝゐ給へり、むまのかみ、それがしいまだ下らうの時、あはれと思ふ人有しが、かたちまほにもあらねば、そひとぐべしとも思はず、とかくまぎれ侍しに、此女しつとの心ふかきをうるさく思ひながら、物まめやかにうしろみとなり、我にたがふ事なきやうにとなびきて、心もげすしうもあらず、たゞ此しつとの心ひとつをおさめかねて、我ゆびひとつくひきりたり、これはいかなる事ぞ、かくかたわになりては、世のまじはりもなりがたし、けふこそかぎりなれといひて、

手を折てあひみし事をかぞふれば
是ひとつやは君がうきふし

女　うきふしを心一つにかぞへきて
こや君が手をわかるべきおり

此女はたつた姫（物をたちぬふ事、）たなばたの手にも（物をそむる事也、）をとるまじく、いとあはれにおもひたりとかたり申す、又おなじ比かよひし所あり、神無月の月おもしろき夜、内よりまかで侍るに、ある殿上人いふやう、こよひ我を待人ありとて、我車にあひのりて、かの女の家のあれたるくづれより入たり、是はつねに我かよひし所也、もとより心かはせるにや、すのこにしりかけてふゑをふけば、女は内よりわごんをかきあはせたり、

琴の音に月もゑならぬ宿ながら
つれなき人をひきやとめける

女　こがらしに吹あはすめる笛のねを
引とゞむべきことの葉ぞなき

すける女には心をかせ給へ、あやまちして見ん人のため、名をもたてつべきものなりといましむ、「とうの中將の物がたりに、しのびて見そめし人あり、おやもなく心ぼそげにて、我を打たのめるに、四の君（北のかた也、）よりうたてしき事をいひやる、さる事をも

我はしらで、久しく音信もせざるに、おさなきものひとりあるに、思ひわびてなでしこの花につけて、

女　山がつのかきほある共折々は
　　あはれをかけよなでしこの露

頭中将　さきまじる花はいづれとわかね共
　　猶とこなつにしくものぞなき

女　打はらふ袖に露けきとこなつに
　　あらし吹そふ秋もきにけり

此女は夕がほのこと也、むすめは玉かづら也、

其後はあともなくうせたり、いかにもして此なでしこを尋ねんと思へど、ゑこそ聞付侍らねとかたり給ふ、

「とうしきぶが物がたりに、あるはかせのもとに學問し侍るとてかよひし程に、はかせのむすめにいひよりて、物をもならひ侍しが、妻子とたのまんにはむたいにて、心のうちはづかしく、そひとげんとも思はれず、久しく參らで物のたよりに立よりたれば、物ごしにあひていふやう、月比はらのやまひをもきにより、ごくねちのさうやくをくひてくさし、このにほひうせなん時立より給へといふ、藤式部、

　　さゝがにのふるまひしるき夕ぐれに
　　ひるますぐせといふがあやなき

女　あふ事の夜をしへだてぬ中ならば
　　ひるまも何かまばゆからまし

君だちそら事とてわらひ給ふ、けふは日のけしきもなをれり、まかで給はんとあるに、内より左大臣殿へは長神ふたがりたり、いづかたへかゝたよへし給はんとて、いよのすけが子きのかみが家に、中川のわたりなるにおはしましたり、水の心ばへ柴かきすゞしく、螢とびまはり虫のこゑもしげし、人々はわた殿の下よりながれたる水にのぞみてさけのむ、源氏の君はにしおもてに女のこゑ聞ゆるを立ぎゝ給ふ、いよの介が女ばうのおとうと十二三ばかりなる有、此子にあねのこゑして、みなね給ひたるかとゝふも聞ゆ、君はうちとけてもねられ給はず、しやうじのかけがねをこゝろみに引あけ給へば、火のほのぐらくみだれがはしき物共のなかをわけ入給ふに、よくしづまりたり、人しれぬ思ひをかけてとの給へば、女おどろきたり、中將の君といふ女ばう參りて見付、こはあさましと思へど、なみ〳〵の人ならばこそひきもかな

ぐらめ、あまたの人のしりてはよからぬ事と思ふに、おくなるおましにいだきて入せ給へり、鳥もなき人もおきさはぐこゑしければ、

つれなきをうらみもはてぬしのゝめに
取あへぬまで驚かすらん

女は此ありさま、いよのすけ國にてゆめにや見んと、そらおそろしくて、

身のうさをなげくにあかで明る夜は
とり重てぞねもなかれぬる

左大臣殿へかへり給ひ、小君をめしよせ、あねの事をかたりて、文を此子につかはし給ふ、

見し夢をあふ夜ありやとなげくまに
めさへあはでぞ比もへにける

かゝる文はみるべき人もなしと申せとて、返事もなし、又物いみの比おはして、こよひあはんとおほせ共、中將といふ女房のつぼねにかくれゐたり、小君たづねあひてかくと申せば、なやましくてあたりに人おほく、こしを打たゝかせてと申せといひはなち、心の中にはいかに程しらぬやうにおぼすらんと思ふ、源君には此女の心のほどもはづかしく、うしとおぼして、

はゝきゞの心をしらでそのはらの
道にあやなくまどひぬるかな

女もさすがにまどろまれざりけり、

數ならぬふせやにおふる名のうさに
あるにもあらで消るはゝきゞ

○うつせみ

其後御せうそこもたへてなし、かくてもゑやむまじければ、いかならんおりにかと待おぼしめし、きのかみ國にくだり、夕やみのたど〳〵しげなるに、小君が車にあひのりて人しれずおはしましたり、すだれのはざまによりてのぞき給へば、きのかみがいもうとのにしのかたと碁をうちゐたり、もやの中ばしらに西ざまにそばめる人は、こきあやのひとへがさね、かしらつきほそやかにちいさし、今ひとりはひがしむきにて殘りなくみゆ、しろきうすものゝひとへがさね、ふたあひのこうちき、くれなゐのはかま、こしひきゆへるきはまで見へたり、人みなねて火のほのかなるに、きちやう引あげて入給へば、女はあさましと思ひて、すゞしのひとへ斗きてすべり出にけり、源はひとりふしたるを心やすくより給へるに、その人に

はあらずまゝむすめの西の御かた也、目さめてあきれたるけしき也、人たがへといはんも、つらき人のためあしかるべしとおぼし、たび〳〵の方たがへに事よせ侍しなどいひなし給ふ、此むすめはなま心なくあはれにて、なさけ〳〵しく契をかせ給ひ、（うつせみ）侍女のぬぎ置たるうす衣をとりてかへり給ふ、二條のゐんにおはして、打やすみ給へどねられ給はず、此きぬを見給ひてひとりごとに、

　うつせみの身をかへてけるこのもとに
　　なを人がらのなつかしきかな

うつせみの君もあさからぬ御けしきを、ありしながらのわが身ならばと、しのびがたければ、

　うつせみのはに置露のこがくれて
　　しのび〳〵にぬるゝ袖かな

○夕がほ

おなじ年の夏、六でうのみやす所へ忍びてかよひ給ふ中やどりに、源氏のめのとこれみつが母、いたくわづらひてあまに成たるをとひより給ふ、五條なる家のかたはらには、しとみあけわたし、簾すゞしげなるに、おかしきひたいつきのすきかげ見へたり、夕がほの花のさきかゝりたるを、一ふさおりて参れとあれば、ずいじん入ておる、内よりきなるすゞしのひとへばかまながくきなしたるわらは出て、白きあふぎのこがしたるに、花をゝきて参らせたり、君はこれみつが母のもとにおり給へば、兄のおじやり、むこの三河守、むすめなどもつどひゐてよろこびかしこまり、あま君もおきあがりよろこびてなくなり、さらぬわかれのなくもがなと、ねんごろにかたらひ給ふ、かへり出給ふとてしそくめして、ありつる扇を御らんずれば、歌あり、

　心あてにそれかとぞ見る白露の
　　ひかりそへたる夕がほの花

これみつに此にしなる家は何人のすむぞとゝひ給へば、やどもりのおのこをよびてとふ、おとこはゐなかにまかりて、わかき女なんありと申す、

源　よりてこそゝれか共みめたそがれに
　　ほの〴〵みつる花の夕がほ

「六條のみやす所は、よはひの程もにあはず、人のもりきかんもつらさに、時々わたり給ふ、朝とく出給ふに、女ばうたちの、中將のおもとをくりて出けるを見

かへり給ひて、かうらんにしばしひきすへて、源、
咲花にうつるてふ名はつゝめ共
おらで過うきけさの朝がほ
手をとらへ給へばいとなれて、中將、
朝霧のはれまもまたぬけしきにて
花に心をとめぬとぞみる
夕がほの宿は、頭の中將のあはれにわすれざりし人にやと思召、これみつにたばからせておはし、たがひにあやしう思ひながら、おひそめ給ひてより後、時々かよひ給ふ、八月十五夜の月、いたやのひまもりいるも、見ならひ給はぬさまなるに、あかつきがたとなりの家々のしづのおとこもめをさまし、物いひかはし、こほ〳〵とふむからすのをと、きぬたのをと、空とぶ鴈のこゑ、かべの中のきり〴〵すも、さまかはりておぼさる、みたけしやうじにや、南無たうらいたうじとおがむをきゝ給ひて、かれ聞給へ、此世とのみはおもはざりけりと、あはれがり給ひて、
うばそくがおこなふ道をしるべにて
こんよもふかき契りたがふな
女さきの世の契りしらるゝ身のうさに
行末かねてたのみがたさよ
いざ此あたりちかき所にて心やすくとて、右近といふ女ばうをめして、御車にのせ參らせ給へり、
源いにしへもかくやは人のまよひけん
我まだしらぬしのゝめのみち
夕がほ山のはの心もしらでゆく月は
うはのそらにてかげやたへなん
なにがしのゐんとかや、人めもなくうとましくあれはてゝ、草も木も見どころなく、池はみくさにうづもれ、みな秋の野らなる所へいざなひ給へり、
夕霧にひもとく花は玉ぼこの
たよりに見へしゑにこそ有けれ
夕がほ光ありと見し夕がほのうは露は
たそがれ時のそらめ成けり
いか成人ぞ名のり給へ、むくつけしとの給へど、打とけぬさま也、すだれをあげてそひふし給ふに、御まくらがみにおかしげなる女きて、此夕がほの上をかきおこさんとすと見給ふ、物におそはるゝ心ちしておどろき給へば、火もきへにけり、太刀を引ぬきて右近をおこし給ふに、是もおそろしと思ひて參よれり、し

そくさして參れとて手をたゝき給へば、山びこのこゑうとまし、女君わなゝきて我かのけしき也、しそくめしよせ見給へば、夢に見へつる女まくらがみにゐてきゑうせぬ、やゝとおどろかし給へど、ひゑ入ていきはたゑはてにけり、うこんはおそろしと思ふ心もさめはてゝなきまどふ、これみつをめしていかゞはせんとあれば、此ゐんもりに聞せんはひんなるべし、こゝをばまづ出させ給へとて、うはむしろにをしくくみて車にのせ、清水に昔しれるあまのとこへ出し奉る、源は二條院にかへり給ふか、もしいきがへりて我をつらくやおぼされんと、一たびなきがらをだに見んとて馬にておはしけり、手をとらへて、こゑをだにきかせ給へ、いかなる昔のちぎりにかとなきまどひ給ふ、右近をもおなじけぶりにとしたひしを、とかくすかして二條のゐんにかへしをき給ふ、源はむねふたがりて、馬にもはか〴〵しくのり給はず、つゝみのほとりにて馬よりすべりおちさせ給ひ、御心ちまどひ給へば、これみつ川の水にて手をあらひ、清水のくはんをんをねんじたてまつる、二條院にかへり給ひて、いか成人ぞと右近にとひ給へば、父は三位の中將なりしが、うせ給ひて頭中將殿にあひそめ給ひて、みとせばかりかよひ給ひ、ひめ君うまれ給ふが、こぞの秋右大臣殿よりおそろしき事の聞へしにをぢ給ひて、あやしきあばらやにかくれおはしゝなり、姫君は西の京のめのとのもとにあづけをき給ふ也と申す、

源 みし人の煙を雲とながむれば
　ゆふべのそらもむつまじき哉

「うつせみの君は源わするゝやとこゝろみて、
　とはぬをもなどかとゝはで程ふるに

源 うつせみの世はうき物としりにしを
　いかばかりかは思ひみだるゝ
　又ことのはにかゝるいのちよ

まゝむすめのかたへ、小君して、
　ほのかにも軒ばの荻をむすばずば
　露のかごとを何にかけまし

返し ほのめかす風につけても下荻の
　なかばは霜にむすぼゝれつゝ

夕がほのうへの四十九日、ひゑの山にてずきやうせさせ給ふ、ふせにつかはさるゝはかまに、
　なく〳〵もけふは我ゆふ下ひもを

いづれの世にかとけて見るべき

五でうの夕がほの宿にのこりゐたる人々、うへはいづかたにかとおもへどゑたづねず、うこんもひめ君の事をゑきかず、

「いよのすけは神無月にひたちへくだる、うつせみもくだらんにとて、くしあふぎぬさなど口こうちきもつかはさる、

あふまでのかたみばかりと見しほどに
ひたすら袖のくちにけるかな

うつせみ うつせみの羽もたちかへてけるなつごろも
かへすをみてもねはなかれけり

けふは冬たつ日なり、時雨の空をながめくらし給て、

過にしもけふわかるゝも二みちに
ゆくかたしらぬ秋のくれかな

○わかむらさき

源氏十七歳の春、わらはやみ(おこり也)にわづらひ給ひて、北山にひじりのある所におはしたり、御ふうをたてまつりかぢしけり、おこりの心まぎらはし給はんとて、立出てこゝかしこ見わたし給へば、そうばうおほき中に、小柴がきらうなどつゞけたる所は、なにがしそうづのこもり給ふ所と也、こゝに女こどもわかき人など見ゆるを、これみつ計御ともにてのぞき給へば、にしおもてに佛すへて、四十あまりのあま君、きよげなるおとな二人、わらはべいで入あそぶ中に、十ばかりにやあらん、しろきゝぬきてはしりきたり、すずめの子をいぬきといふわらはべのにがしたるなり、ふせにこめつるものをとて、かほあかくすりてたてり、藤つぼによくにたりとおぼしてかへり給ふ、此姫君のことをあま君、

おひたゝん有かもしらぬ若草を
をくらす露ぞきへん空なき

姫君のめのと少納言 はつ草のおひ行末もしらぬまに
いかでか露のきへんとすらん

此そうづのかたより、源氏の君へ御使ありて、やがておはしまし物がたりなどし給ふに、ひるのおさなきおもかげ心にかゝりて尋給へば、そうづのいもうとのあまのまご也、ちゝは兵部卿の宮也とかたり給ふ也、(此兵部卿は藤つぼの兄也、)夜ふけて此姫君のめのと少納言にあひ給ひて、

源 はつ草のわかばの上をみつるより

たびねの袖も露ぞかはかぬ
かくてあま君にかたりければ、あま君、
まくらゆふこよひ計の露けさを
み山のこけにくらべざらなん
おさなきほどの御うしろみと、ゆくすゑの事までちぎりの給ふ、暁がたせんほうのこゑ、山おろし瀧のをと、ひゞきあひてめづらしくきゝ給ふ、
源 ふきまよふみ山おろしに夢さめて
涙もよほす瀧のをとかな
そうづ さしぐみて袖ぬらしける山水に
すめるこゝろはさはぎやはする
源 宮人にゆきてかたらん山ざくら
風よりさきにきても見るべく
そうづ うどんげの花まちゑたる心ちして
み山櫻に目こそうつらね
ひじり 奥山の松のとぼそをまれにあけて
まだ見ぬ花のかほを見る哉
あま君の御かたへ、源より、
夕まぐれほのかに花の色をみて
けさはかすみのたちぞわづらふ
あま君 まことにや花のあたりは立うきと
かすむる空のけしきをも見ん
御むかへの人々、君だちもあまた参れり、岩がくれのこけのうへになみゐてかはらけ参る、頭中將笛ふきならし、辨の君うたひ給ふ、(此辨は頭中將の弟也、)そうづきんをもて出て、御手ひとつとあればかきならし、京へかへり給て、又の日、
源 おもかげは身をもはなれず山櫻
心のかぎりとめてこしかど
あらし吹おのへの櫻ちらぬまを
心とめけるほどのはかなさ
二三日ありてこれみつをつかはさる、
源 あさか山淺くも人を思はぬに
など山の井のかげはなるらん
くみそめてくやしときゝし山の井の
あさきながらやかげを見るべき
「三四月の比より藤つぼわづらひ給ふ、(くはいにんなり、)源と藤つぼの中だちは、わうみやうぶ也、
源 みても又あふ夜まれなる夢のうちに
やがてまぎるゝわがみともがな

藤つぼ 世がたりに人やつたへんたぐひなく
うき身をさめぬ夢になしても

「あま君京へかへり給へば、源時々おはしけり、

源 いはけなきたづの一こゑきゝしより
あしまになづむ舟ぞゑならぬ

同 手につみていつしかも見ん紫の
ねにかよひける野べのわか草

あま君九月二十日の程うせ給ふ、姫君と少納言は京にこもりおはせるを、源とぶらひ給ひて、

あしわかのうらにみるめはかたく共
こは立ながらかへるなみかは

めのと よる波の心もしらでわかのうらに
玉もなびかんほどぞうきたる

四十九日過ては、姫君はちゝ兵部卿の御かたへむかへ給はんと也、

「源しのび〳〵かよひ給ふ所を、すぎがてに門たゝかせ、ともの人にうたはせ給ふ、

朝ぼらけ霧たつそらのまよひにも
行過がたきいもがかどかな

内よりつかひを出して、此女は誰ともなし、

立とまり霧のまがきの過うくば
草のとざしにさはりしもせじ

「姫君父の御もとへむかへ給はぬさきに、とり給はんとて夜ふかくわたらせ給ひ、姫君をいだきおこし、御くるまにのせ給ふ、めのと少納言は夢の心ちしてのりたり、二條院にてわらはべども參らせて、ひめ君の御心をすかし給ふ、

源 ねはみねど哀とぞ思ふむさしの〻
露わけわぶる草のゆかりを

姫君 かこつべきゆへをしらねばおぼつかな
いかなる草のゆかりなるらん

○すゑつむ花

故ひたちの宮の御むすめ、心ぼそくてゐ給ふを、たゆふのみやうぶ源にかたりて、いざよひの月おかしき程におはしまさせて、ことのねをきゝ給ふに、かきのほとりにおとこゐたり、たれならんとおぼしたれば頭中將也、

頭中將 もろ共に大うち山は出つれど
入かたみせぬいざよひの月

源 里わかぬかげをば見れど行月の

いるさの山をたれかたづぬる

ひとつ車にのりて大とのにかへり給ふ、此姫君はあひ給ひても、ものをいひ給はねば、

源 いくそたび君がしゝまにまけぬらん
物ないひそといはぬ頼みに

姫君の御めのとこ侍従とてあり、さし出て、

かねつきてとぢめん事はさすがにて
こたへまうきぞかつはあやなき

源 いはぬをもいふにまさるとしりながら
をしこめたるはくるしかりけり

かへり給ひて、夕つかた御文つかはし給ふ、

夕霧のはるゝけしきもまだみぬに
いぶせさそふる宵の雨哉

御返しゑし給はねば、じゞうをしへきこゆる、

はれぬよの月待ほどを思ひやれ
おなじ心にながめせずとも

此姫はゐたけたかくをせながに、御はなはふげんぼさつのゝり物とおぼゆ、色白くひたひはれてしもがちに、はなのさきあかく、かみはうちきのすそに一尺ばかりひかれたり、ふるきのかはぎぬをき給へり、ただむゝとうちわらひて、口をもげなるもいとおしく、かゝる人を我ならではたれかは見しのばんとあはれにおぼさる、

朝日さす軒のたるひはとけながら
などかつらゝのむすぼゝるらん

山里めきてたち花の雪にうづもれたるを、ずいじんにはらはせ給ふ、御車出べき門をおきなのゑあけやらねば、むすめよりて引たすくる、

源 ふりにけるかしらの雪をみる人も
をとらずぬらすあさの袖かな

きぬあやわたなどつかはし給へば、

姫君 から衣君が心のつらければ
たもとはかくぞそぼちつゝのみ

あさましのくちつきやとおぼして、此文のはしに、

なつかしき色ともなしになにゝこの
すゑつむ花を袖にふれけん

みやうぶ くれなゐのひと花衣うすく共
ひたすらくたす名をしたてずば

又の日 源 あはぬよをへだつる中の衣でに
かさねていとゞ見もしみよとや

紫の上の御かたにて、ひいなあそびゐなどかきて、かみのながき女をかきて、はなにべにをつけて、

くれなゐの花ぞあやなくうとまるゝ
　　梅のたちゑはなつかしけれど

○もみぢの賀（源十七才 十八才）

しゆじやくゐんの行幸は、神無月十日あまり、まづしがくをせさせ給ふ、源氏の君と頭中將、せいかいはをまひ給ふに、みな人涙おとしけり、つぎの日源より藤つぼの御かたへ、

物思ふに立まふべくもあらぬ身の
　　袖うちふりし心しりきや

（藤つぼ）から人の袖ふる事はとをけれど
　　立ゐにつけてあはれとはみき

行幸の日は、とうぐうみこたち世に殘る人なし、がくの船をかざり、紅葉のかげに四十八のかいしろ、物のねふきたてたり、せいかいはかゞやき出たるに、かざしのもみぢちりて、菊をおりてさしかへ給ふ、藤つぼはくはいにんゆへ參らせ給はず、

「年あけてむらさきのうへをさしのぞき給へば、ひいなどもをしすへて、三尺のみづし、又ちいさきいへどもつくりあつめて、あそびゐ給へり、

藤つぼは二月十日あまりに、おとこみこうみ給ふ、（此み これいぜいゐん也、）此わか宮は源氏の君によく似給へば、人の思ひとがめんとむつかしげなるもことはり也、源はいまだわか宮を見給はで、

いかさまに昔むすべる契りにて
　　此世にかゝる中のへだてぞ

（みやうぶ）みても思ふみぬはたいかになげくらん
　　こやよの人のまどふてふ闇

此わか宮のうつくしきを源見給て、

よそへつゝみるに心はなぐさまで
　　露けさまさるなでしこの花

藤つぼにこれを見せたりければ、

袖ぬるゝ露のゆかりと思ふにも
　　猶うとまれぬやまとなでしこ

「源内侍のすけとて年五十七八なるが、あだめいたがあり、こゝろみんとてものすそを引給へば、あふぎをかざし見かへりたり、取かはしてみ給へば歌あり、

君しこばたなれのこまにかりかはん
　　さかり過たる下葉なりとも

源 さゝわけば人やとがめんいつとなく
こまなづくめり森のこがくれ

うんめいでんのわたりをすみありき給へば、けんないしびはを引ゐたり、源はあづまやをうたひてより給へば、

内侍 立ぬるゝ人しもあらじあづまやに
うたてもかゝるあまそゝぎかな

源 人づまはあなわづらはしあづまやの
まやのあまりもなれじとぞ思ふ

頭中將は見あらはさんとて、源氏のあとをしたひ入給へるに、源は人きたるとおぼして、屏風のうしろにかくれ給へば、頭中將屏風をこほ〳〵とたゝみよせて、太刀を引ぬき給へば、内侍かなしと思ひて手をすれば、打わらひ給ふ、源も出給ひて、さらばもろ共にとて、中將のおびをときてぬがせ給へり、

つゝむめる名やもりいでん引かはし
かくほころぶる中のころもに

源 かくれなき物としる〳〵なつ衣
きたるをうすき心とぞ見る

ないしあさましくて、おちとまりたるおびさしぬきなど、あしたにたてまつるとて、

内侍 恨てもいふかひぞなきたちかさね
引てかへりしなみのなごりに

源 あらだちし波に心はさはがねど
よせけんいそをいかゞうらみぬ

此なをしの袖を頭中將より源へ奉りければ、

源 中たへばかごとやをふとあやうさに
はなだの帶は取てだにみず

頭中將 君にかく引とられぬる帶なれば
かくてたへぬる中とかこたん

「みかどは藤つぼを御てうあひにて、此わか宮をとうぐうにたて給はんとおぼせ共、御うしろみすべき人もおはせねば、こうきでんの女御を引こして、藤つぼを中宮にたて給へば、

源 つきもせぬ心のやみにくるゝかな
雲ゐに人を見るにつけても

○花のゑん　源十九才

きさらぎ二十日あまり、なんでんの櫻のゑんせさせ給ふ、中宮春宮こうきでんの女御參り給ふ、源氏の君頭中將しゆんわうでんりうくはゑんまひ給ふ、源の

かたちに、
大かたに花のかたちを見ましかば
　露も心のをかれましやは
かんだちめきさき春宮かへらせ給ひ、月あかくさし出たるに、源氏は藤つぼのわたりしのびうかゞひ、こうきでんのほそどのに立より給へば、三の口あきたり、女御はうへの御つぼねにのぼり給て人すくな也、人はみなねたるに、いとわかくおかしげなる聲して、おぼろ月夜にゝる物ぞなきとずんじて、こなたざまにくる、ふと袖をとらへて、
　ふかき夜の哀をしるも入月の
　　おぼろげならぬ契りとぞ思ふ
名のりし給へ、いかでやみなんとの給へば、
女うき身世にやがてきえなば尋ても
　　草の原をばとはじとや思ふ
　いづれぞと露のやどりをわかんまに
　　こざゝが原に風もこそふけ
人々おきさはけば、扇ばかりをしるしにとりかはして出給ふ、彼扇は櫻の三重がさねにて、かすめる月をかきて水にうつしたる也、

源世にしらぬ心ちこそすれ有明の
　　月の行衛を空にまがへて
「三月二十日藤のゑんに、櫻二木をくれたるいとおもしろきに、源のおはしまさねば、
大との我宿の花しなべての色ならば
　　何かはさらに君をまたまし
「こうきでんの女一女三おはします、戸くちに源より給ひて、おぼろの手をとらへて、
　あづさ弓いるさの山にまどふかな
　　ほの見し月の影やみゆると
返し心入かたならませば弓はりの
　　月なき空にまよはましやは
　　〇あふひ 源二十一より二十二オ
きりつぼのみかどの御世、しゆじやくゐんにかはり、春宮の御うしろみは、源氏にきこゑつけ給ふ、かものいつきの宮の御はらへの日、かんだちめかずさだまりて、下がさねうへのはかま、馬くらまでみなとゝのへたり、源氏もちよくしにたち給ふ也、一條のおほぢよりさじきをうちて物見給ふ、大とのゝ君はなやましける、

とをき國々のあやしき山がつまでも、めこを引つれ見ける事をとて、にはかに日たけて出給へば、車共のひまもなく立わたり、あふひの上の御車のたて所はなし、さしのけさせんとする中に、あじろ車のふるくよしありげなるふたつ有、是はさいぐうの御母、六でうのみやす所のしのびて出給へるとて、口こはく手もふれさせず、あふひの上の人々、さないはせそとて、其車のまへに御車をたてつゞけたれば、人だまひのおくにをしやられて物も見へず、しちなどもをしおられて、人めわろく、なにしにきつらんとくやしくて、かへらんとし給へど、とをり出んみちもなくて、御休所、

影をのみ丶たらし川のつれなきに
　身のうき程ぞいとゞしらる丶

まつりの日は大との丶ひめ君は、もの見にもいでさせ給はず、あふひの上の事也、「むらさきの上の御ぐしきよらに見ゆるをかきなで、けふはよき日なりとて、御ぐしそぎ給ふ、

源 はかりなきちひろのそこのみるふさの
　おひ行末は我のみぞ見ん

紫の上 千尋ともいかでかしらん定めなき
　みちひるしほの丶とけからぬに

源は紫の上とひとつ車にてかものまつり見給ふ、かんだちめの車おほき中に、女車より扇をさし出てまねく、いかなるすきものぞと御車よせ給へれば、源内侍也、年五十七八の女ばう也

内侍 はかなしや人のかざせるあふひゆへ
　神のゆるしのけふを待ける

源 かざしける心ぞあだにおもほゆる
　やそうぢ人になべてあふひを

くやしくぞかざしけるかな名のみして
　人のためなる草葉ばかりを

あふひの上は御なやみなれど、心ぐるしうおぼして、御ず法おこなはせ給ふに、物のけいきりやうなどいふものさま〴〵名のりする中に、人にもうつらずかた時はなる丶おもとなきものひとつ有、此御なやみを見すてがたくてとて、源より六條のみやす所へ御文をつかはさるれば、返事に、

袖ぬる丶戀ぢとかつはしりながら
　おりたつたごのみづからぞうき

源あさみにや人はおりたつ我かたは
身もそぼつまで深き戀ぢを
物のけおこたらず、かぢの僧ほけきやうよむに、
なげきわび空にみだるゝわが玉を
むすびとゞめよ下かひのつま
是はたんりやうのよめる歌也、
すこししづまり給へば、大宮御ゆなど參らせ給ひ、かきおこされてうまれ給ふ、此御子夕霧也、みやす所れうとなり給へば、御ぞにけしの香しみかへり、あらへ共此香うせざれば、我ながらうとましうおぼさる、とのゝ内人すくなるに、にはかにむねせきあげて、程なくたゑ入給ふ、二日三日見給へど、かはり給ふ事どもあれば、鳥邊野にをくりたてまつる、源、
のぼりぬる煙はそれとわかね共
なべて雲井のあはれなるかな
にび色の御ぞたてまつるも夢の心ちして、源、
かぎりあればうすゞみ衣あさけれど
涙ぞ袖をふちとなしける
みやす所より源へ菊の花につけて、
ひとの世を哀と聞も露けきに
をくるゝ袖を思ひこそやれ
源とまる身も消しも同じ露のよに
心をくらんほどぞはかなき
頭中將雨となりしぐるゝ空のうき雲を
いづれのかたとわきてながめん
源見し人の雨と成にし雲井さへ
いとゞしぐれにかきくらすころ
わか君の事を大みやへ、源より、
草がれのまがきに殘るなでしこを
わかれし秋のかたみとぞ見る
大宮今も見て中々袖をくだすかな
かきほあれにしやまとなでしこ
源よりあさがほのさいゐんの御かたへ、
わきて此くれこそ袖は露けゝれ
物思ふ秋はあまたへぬれど
齋院秋霧に立をくれぬときゝしより
しぐるゝ空もいかゞとぞ思ふ
ふるきまくらふるきふすまたれと共にかと、源、
なき玉ぞいとゞかなしきねしとこの
あくがれがたき心ならひに

源　君なくてちりつもりぬるとこなつの
　　露打はらひいくよねぬらん

つれ〴〵なるまゝに、むらさきのすみ給ふにしのたいにて、碁うちへんつぎなどしつゝ日くらしたまふ、おとこ君はとくをき給ひて、女君をき給はぬあしたあり、御心ちれいならずおぼさるゝにやと人々なげくに、引むすびたる文あり、

源　あやなくもへだてけるかな夜をかさね
　　さすがになれしよるの衣を

そのよさりゐのこのもちゐ参らせたり、これみつを召て、此もちゐあすのくれに参らせよとの給ふ、少納言はあはれにもかたじけなくもまづうちなかれけり、としかへりて院内春宮に参り給ひ、それより大とのへ参り給へば、おとゞはあたらしき年ともおぼさず、源、

　あまた年けふあらためし色衣
　　きては涙のふる心ちする

おとゞ　あたらしき年ともいはずふる物は
　　ふりぬる人の涙なりけり

源氏物語 巻之三四

さか木　花ちる里
須磨　あかし
みをつくし　よもぎふ
せき屋　ゑあはせ
まつ風　うす雲
あさがほ　をとめ

- ●二條太政大臣
  - 藤大納言
  - 四位少將
  - 左中辨
  - 弘徽殿太后
  - 帥宮北方
  - 致仕大臣室
  - 五君
  - 朧月夜尚侍
- ●常陸宮
  - 阿闍梨
  - 蓬生君　末つむ花也
- ●三位中將　夕顔上
  - 宰相 ―― 宰相君
- ●伊與介
  - 紀伊守
  - 藏人右近將監
  - 藏人少將妻
- ●參議藤原惟光
  - 山阿闍梨
  - 少將命妻
  - 三河守妻
    - 典侍
    - 兵衛尉

齋宮は前坊の御むすめ也、御母は六條の御休所、あふひの巻に齋宮にたち、みをつくしにおりゐ

給ひ、繪合に入内、梅つぼと申也、乙女に中宮、御法に皇后宮、

○さか木 源二十二歳より二十四歳まで

さいぐうの御くだりちかづくまゝに、御母みやす所心ぼそく、おやそひてくだり給ふれいもなけれど、うき世をゆきはなれんとおぼすに、源氏の大將さすがにかけはなれ給ふもかなしくて、御せうそこたびかよふ、野の宮には九月七日ばかり人しれずまたせ給ふ、秋の花おとろへ、あさぢがはらもかれ〴〵なるむしのねに、松風すごく物のねもたへ〴〵に聞ゆ、物はかなげなる小柴垣くろぎのとりゐいとかりそめ也、火たきやかすかにひかりて人げすくなし、さか木をいさゝかおりてかはらぬいろをとあれば、御休所、

神がきはしるしの杉もなき物を
いかにまがへておれるさか木ぞ

源 乙女子があたりと思へば榊ばの
かをなつかしみとめてこそおれ

おぼしめしのこす事なき御かたらひに聞へかはし給ふ、

曉のわかれはいつも露けきを
こは世にしらぬ秋のそらかな

みやす所 大かたの秋の別れもかなしきに
なくねなそへそ野べのまつ虫

齋宮はわかき御心に、はゝみやす所の御くだり定まり給ふをうれしとおぼす、源、

やしまもるくにつみかみも心あらば
あかぬ別れの中をことはれ

さいぐうの御返しは、女別當かきてつかはす、

くにつ神そらにことはる中ならば
なをざりごとをまづやたゞさん

みやす所は十六歳にて宮に參り給ひ、はたちにてをくれ、三十にてけふ九重を見給ふ、

そのかみをけふはかけじとしのぶれど
心のうちに物ぞかなしき

さいぐうは十四にて御かたちいとうつくしければ、みかど御心うごき給へり、

ふりすてゝけふは行共すゞか川
やそせの波に袖はぬれじや

すゞか川八十瀬の波にぬれ／＼ず
　いせまでたれか思ひおこせん
行かたをながめもやらん此秋は
　あふ坂山を霧なへだてそ

「神無月に院（きりつぼのみかど）かくれさせ給ふ、兵部卿宮（源氏の御弟ほたか）參り給ひて、

かげひろみ頼みし松やかれにけん
　下葉ちりゆく年のくれかな

（藤つぼの中宮）さゑわたる池の鏡のさやけきに
　みなれしかげをみぬぞかなしき
年くれていはゐの水も氷とぢ
　見し人かげのあせも行かな

おぼろ月夜は二月にないしのかみになり給ふ、此かんの君へ源より御文たび／＼かよふ、なかだちは中納言の君にて、源をいれたてまつるあかつきがた、かんの君、

心からかた／＼袖をぬらすかな
　あくとをしふるこゑにつけても

（源）なげきつゝ我世はかくてすぐせとや
　むねのあくべき時ぞ共なく

藤つぼへ參り給ひて、源、

あふ事のかたきをけふにかぎらずば
　今いくよをかなげきつゝへん

（中宮）ながき世のうらみを人にのこしても
　かつは心をあだとしらなん

源はうんりん院にまうでゝ、ほうもんろんぎなどきこしめし、あぢきなき身をもてなやむかなとおぼしめすうちにも、紫の上の事心にかゝりて、

淺ぢふの露のやどりに君を置て
　よもの嵐ぞしづ心なき

（紫の上）風ふけばまづぞみだるゝ色かはる
　あさぢが露にかゝるさゝがに

かものさいゐんへもほどちかければ、

かけまくもかしこけれ共そのかみの
　秋をもほゆるゆふだすきかな

（齋院）そのかみやいかゞは有しゆふだすき
　心にかけてしのぶらんゆへ

中宮に參り給へば、中宮、

九重に霧やへだつる雲のうへの
　中をはるかに思ひやるかな

源 月影は見しよの秋にかはらぬを
へだつる霧のつらくも有かな
おぼろの御かたより こがらしの吹につけつゝ待しまに
おぼつかなさの比もへにけり
源返し あひみずて忍ぶる比の涙をも
なべての秋のしぐれとやみる
十一月ついたち比、きりつぼのみかどの御き日なり、雪いたうふりたり、源より中宮へ、
わかれにしけふはくれ共なき人に
行あふほどをいつとたのまん
藤つぼ ながらふる程はうけれど行めぐり
けふはそのよにあふ心ちして
十二月十日あまり、中宮の御八講也、まことの極樂思ひやらる、みこたちもさま〴〵のほうもちさゝげ給ふ、はての日はわが中宮御事をけちぐはんにて世を背給ふに、人々おどろけり、
源 月のすむ雲井をかけてしたふ共
此世のやみに猶やまどはん
中宮 大かたのうきにつけてはいとへ共
いつか此世をそむきはつべき

年かはりぬれば内わたり花やかなり、中宮は御堂のにしのたいすこしはなれたる所にわたり給て、御おこなひせさせ給ふ、源大將參り給ひて、
ながめかるあまのすみかとみるからに
まづしほたるゝ松がうら島
中宮 ありし世のなごりだになきうら島に
立よる波のめづらしきかな
夏の雨ふりつれ〴〵なる比、中將殿本どもあまたもたせて源へわたり給へり、はしのもとのさうびけしきばかり咲て、春秋の花よりもおかしげ也、中將の御子八九つばかりにて、笛をふき高砂うたへり、中將、
それもがとけさひらけたる初花に
をとらぬ君がにほひをぞみる
時ならでけさ咲花は夏の雨に
しほれにけらし匂ふほどなく
おぼろのないしのかんの君、わらはやみおこたり給ひて、久しう里におはします、源參り給ふに、折ふし神なりさはげば、右大臣殿もおはしまして、源の手ならひしをき給へるをみつけとりてかへり、大きさきにみせ給へり、こうきでん也、おぼろのあね、かんの君はしぬべくかな

しくおぼさる、源は御ちやうの内にかくれゐ給へり、
おぼろの内侍のかみは、朱雀院へ参らせんとおぼしめすを、花のゑんの夜源あひそめ給て、それより忍び〳〵かよひ給へる也、此ゆへすまへさすらへ給ふ也

○花ちる里源二十四才

きりつぼの女御れいけいでんは宮たちもおはせず、院かくれ給ひて後は、源にもてかくされておはします、此いもうとの三の君、花ちる里也、源かよひ給ふ、五月雨の空めづらしうはれたるにわたり給ふ、みちの程中川のわたり過給ふに、小家にあづまをしらべてかきならす、源みゝにとまりて、

をちかへりゑぞ忍ばれぬ時鳥

ほのかたらひし宿のかきねに

返し時鳥かたらふ聲はそれなれど

あなおぼつかな五月雨の空

此小家は源のあひ給ひし人と見へたれど、誰ともなし、

三の宮は物しづかにおはします、まづ女御の御かたにて昔物がたりなどし給ひ、二十日の月さし出るほどに、郭公ありつるかきねのにや、おなじこゑになく、

源たちばなの香をなつかしみ郭公

花ちる里をたづねてぞとふ

女御人めなくあれたる宿はたちばなの

花こそ軒のつまと成けれ

○すま源二十五才三月より次の年まで

源氏の大將は、藤つぼの中宮、おぼろの内侍のかみの事につけて、世中わづらはしけれど、いづくへもたちかくれんとおぼす、須磨は里はなれ物すごくて、あまの家だにまれ也と聞給へど、人しげき所よりは身のためやすからんとおぼす、むらさきの上の思ひなげき給へらんも心ぐるし、又引ぐしてゆかんも思ひのつまなるべし、夜にまぎれ大とのにわたらせ給ひて、若君をひざにすへてかなしと見給ふ、中納言の君を人しれず哀とおぼして、その夜はとまり給ふ、女ばうだち源の思人の物也、大みやの御かたへ、あふひのうへの事をおぼし出て、源、

とりべ山もゑし煙もまがふやと

あまのしほやくうらみにぞ行

大宮なき人の別やいとゞへだつらん

けぶりとなりし雲井ならでは

二條院にかへり給へば、むらさきの上はきやうだい

にむかひおはします、源もたちより給ひて、
身はかくてさすらへぬ共君があたり
さらぬ鏡のかげはゝなれじ
紫 別れてもかげだにとまる物ならば
かゞみをみてもなぐさめてまし
花ちる里 月影のやどれる袖はせばくとも
とめても見ばやあかぬ光を
源 行めぐりつゐにすむべき月影の
しばしくもらん空なゝがめそ
須磨へは文集など入たるはこ、琴ひとつもたせ給ふ、
ないしのかみのもとへ、源、
あふせなき涙の川にしづみしや
ながるゝみをのはじめなるらん
返しなみだ川うかぶみなはも消ぬべし
ながれて後の世をもまたなん
藤つぼの入道の宮に參り給へば、中宮、
見しはなくあるはかなしき世のはてを
そむきしかひもなく／＼ぞふる
源 別れしにかなしき事はつきにしを
又ぞこの世のうさはまされる

月まちて出給ふ、御とも七八人なり、馬にておはする、きのかみが弟うこんのぜう御馬の口をとりて、
引つれてあふひかざしゝそのかみを
思へばつらし神のみづがき
源 浮世をば今ぞわかるゝとゞまらん
名をばたゞすの神にまかせて
古院の御はかに參り給ひて、
なきかげやいかゞみるらんよそへつゝ
ながむる月も雲がくれぬる
とうぐうにも御せうそこきこゑ給ふ、
いつか又春のみやこの花をみん
時うしなへる山がつにして
御返しはわうみやうぶ、
咲てとくちるはうけれど行春は
花の都をたちかへりみよ
むらさきのうへゝ、源より、
いける世の別れをしらで契りつゝ
命を人にかぎりけるかな
紫の上 おしからぬ命にかへてめのまへに
別れをしばしとゞめてしがな

舟にのり給ひ、をひ風そひて彼うらにつき給ふ、源、

から國に名を殘しける人よりも
行衞しられぬ家ゐをやせん

同　古郷をみねの霞はへだつれど
ながむる空は同じ雲井か

行平の中なごんのもしほたれつゝわびたる家ゐちかきわたりなり、

京へ人出したて給ふとて、入道の宮へ、

松島のあまのとまやもいかならん
すまの浦人しほたるゝころ

ないしのかんの君の御もとに、

こりずまの浦のみるめの床しきを
しほやくあまやいかゞ思はん

入道の宮かへし　しほたるゝことをやくにて松島に
年ふるあまも歎きをぞつむ

かんの君　浦にたくあまだにつゝむ戀なれば
くゆる煙よゆくかたぞなき

むらさきのうへよりとのゐ物をくらせ給ふ、

うら人のしほくむ袖にくらべ見よ
なみぢへだつるよるの衣を

伊勢へ御使あれば、みやす所、

うきめかるいせをのあまを思ひやれ
もしほたるてふすまの浦にて

同　いせ島やしほひのかたにあさりても
いふかひなきは我身成けり

源返し　いせ人の波のうへこぐを舟にも
うきめはからでのらまし物を

同　あまがつむなげきの中にしほたれて
いつまですまの浦にながめん

花ちる里　あれまさる軒のしのぶをながめつゝ
しげくも露のかゝる袖かな

すまにはいとゞ心づくしの秋風に、海はすこしとをけれど、行平の中納言の、せき吹こゆるといひけんうらなみ、よる〳〵はきこゑて、又なくあはれなる物は、かゝる所の秋なりけり、琴をすこしかきならして、

戀わびてなくねにまがふうら波は
思ふかたより風やふくらん

からのあやなどに、さま〴〵のゑなどをかき給ふ、

源　はつかりは戀しき人のつらなれや

旅の空とぶ聲のかなしさ
義清 かきつらね昔のことぞおもほゆる
鴈はそのよの友ならね共
惟光 心からとこよをすてゝなく雁を
雲のよそにも思ひけるかな
右近のぜう とこ世出て旅のそらなるかりがねは
つらにをくれぬ程ぞ慰む
入道の宮の霧やへだつるとの給はせしをおぼし出て、
みる程ぞしばしなぐさむめぐりあはん
月の都はゝるかなれども
うしとのみひとへに物はおもほへて
ひだり右にもぬるゝ袖かな
其比つくしより大貳のぼりけるが、大將どのゝかくておはすると聞て、むすめの五せちの君は大將殿のきんの聲聞ゆるに、
琴の音に引とめらるゝつなで繩
たゆたふ心君しるらめや
源 心有て引てのつなのたゆたはゞ
打過ましやすまのうら波

けぶりのたちくるを、あまのしほやくならんとおぼすに、うしろの山に柴といふものふすぶるなりけり、
山がつの庵にたけるしば〳〵も
ことゝひこなんこふる里人
きんを引給ひてよし清にうたはせ、たゆふよこ笛ふきてあそび給ふに、月すごく見ゆれば、
源 いづかたの雲路に我もまよひなん
月のみるらん事もはづかし
同 友千鳥もろごゑになく曉は
ひとりねざめの床も頼もし
年かへりてわか木のさくらさきそめたるに、
いつとなく大宮人の戀しきに
櫻かざしてけふもきにけり
宰相殿(頭中將の事也)は物のおり〳〵戀しくおぼして、須磨へおはしたり、
源 古郷をいづれの春か行てみん
うら山しきはかへるかりがね
宰相 あかなくにかりのとこよを立別れ
花の都にみちやまどはん
御をくりにくろ馬たてまつり給ふ、

源雲ちかく飛かふたづも空にみよ
　我は春日のくもりなき身ぞ
宰相たづがなき雲井にひとりねをぞ鳴
　つばさならべし友をこひつゝ

かへるなごりかなしうながめくらし給ふ、やよひにはみの日のはらへし給はんとて海邊に出給ふ、をんやうしめして、船にこと〴〵しき人がたのせてなかすを見給ふ、

源しらざりし大海の原にながれきて
　ひとかたにやは物ぞかなしき
　やをよろづ神もあはれと思ふらん
　　をかせる罪のそれとなければ

との給ふに、俄に風ふきひぢかさ雨ふりて、あはたゞしければ、かへり給はんとするに、かさもとりあへず、海はふすまをはりたらんやうに、ひかる神なりひらめく、たどりかへりて經よみゐ給ふ、神すこしなりやみて風ぞよるもふく、いさゝかねいり給へば、御夢にそのさまともしれざる人きて、宮よりめし給へるに何とて參り給はぬぞといふ、さては龍王の見いれたるにこそとおぼされ、此すまゐなりがたしとおぼしめされぬ、

○あかし 源二十六才三月より二十七才の秋まで

なを雨風やまず、神なりしづまらで日ごろになりぬ、京のかたもおぼつかなくおぼしめせど、かしらさへさし出人々もあらず、二條院よりあやしきすがたにて人參りたり、むらさきのうへの御文に、

浦風やいかにふくらん思ひやる
　袖うちぬらしなみまなきころ

京にもふしぎの事とて仁王會おこなひ給ふ、かやうにて世はつくるにやと思ひさはぐに、又の日のあかつきより、風つよく吹てしほみちきて、いはほも山ものこるまじきけしき也、住吉の神におほくのぐはんをたて給ふ、いよ〳〵かみなりしづまらで、らうかのうへにおちて、ほのほもえあがりらうはやけたり、うしろの家に上下となくこぞりゐてなきどよむ、そらはすみをすりたるやうにて日もくれたり、やう〳〵風なをり雨すこしやみて、ほしのひかり月もさし出て、波のなごりあらかりしに、柴の戸をしあけてながめおはします、

海にます神のたすけにかゝらずば

はるかにも思ひやるかなしらざりし
うらよりをちに浦づたひして
入道は年六十ばかりなるが、むすめ一人をもてわづらひたるよし、時々かたり申す、
あはとみるあはぢの島の哀さへ
のこるくまなくすめるよの月
久しく手もふれ給はぬきんをとり出て、かきならし給ふ、入道もびはを引たり、さうの琴を参らせたれば、君すこしひき給ひて、これは女の引たるにこそとの給へば、入道うちゑみて、
ひとりねは君も知ぬやつれ〴〵と
思ひあかしの浦さびしさを
源旅衣うらかなしさにあかしかね
草のまくらは夢もむすばず
おかべの宿に御文をつかはさる、
遠近のしらぬ雲井にながめわび
かすめし宿のこずゑをぞとふ
むすめははづかしげにて、心ちあしとてふしたり、入道いひわびて、
ながむらん同じ雲井をながむるは

鹽のやをあひにさすらへなまし
古院夢に見へ給ひて、住吉の神のみちびき給ふに、はやく舟出して此うらを立のき給へと、御手をとらへて引たて給ふ、御夢さめてあたりを見めぐらし給へば、人もなく月のみきら〳〵として、あかつきがたに成にけり、なぎさにちいさき舟よせて、人二三人参るは、あかしのうらより、さきのはりまのかみしんぼち御むかへに参れる也、過にしついたちの夢にも、つげしらする事ありしかど、しんじがたき事と思ひしに、又三日の夢にあらたなりければ、舟をよそひて参りたりと申す、君おぼしめしまはすに、夢うつゝさまざましづかならず、神のたすけにもあらんをそむく物ならば、又いかなるうきめをやみんとて、此舟にめされ明石につき給ひけり、此入道のすまゐりやうじたる海山ひろく、いかめしき堂をたてゝ、朝夕おこなひすまし、高鹽にをぢてむすめは岡部の宿にすませたり、君の御けしきを見て、老もわすれてよはひのぶる心ちして、よろこびさかゑたり、京より参りたる使をめして、身あまる物共おほくたびてかへし給ふ、むらさきのうへゝの御返しには、

思ひもおなじ思ひなるらん

源いぶせくも心に物をなやむかな
やよやいかにととふ人をなみ

思ふらん心の程ややよいかに
まだみぬ人のきゝかなやまん

三月十三日神なり雨風さはがしき夜、みかどの御夢に、古院御けしきあしくて、にらみ給ふと見へ給ふより、御目をわづらはせ給ふ、今は源氏の君をもとの位になし給はんと、たび〳〵おぼしめしの給ふ、源氏の君は彼物のねきかばや、さらずばかひなくなどのたまへば、入道よろこびてあたら夜のときこへたり、十三日の月はなやかにさし出たるに、御馬にて出たまふが、都のかたおぼしめし出て、

秋の夜の月げの駒よ我こふる
雲井にかけれ時の間もみん

むすめをすませたるかたは、ことにみがきて月入たる戸口すこしをしあけたり、うちやすらひなにかとの給ひけれど、うちとけぬさまなれば、さしも有まじき人だに心づよふもあらぬに、今はかくやつれたる身なれば、あなづるにやとおぼしなやめり、ちかき木丁のかたはらに、さうの琴しどけなくかきまさぐりをけるを、さへやなどいひよりて、源、

むつごとをかたりあはせん人もがな
うき世の夢もなかばさむやと

明石あけぬよにやがてまどへる心には
いづれを夢とわきてかたらん

むらさきのうへの此事をもりきゝ給はんも、心のへだて有けるとおぼして、御文に、

しほ〳〵とまづぞなかるゝかりそめの
みるめはあまのすさびなれ共

紫の上返しうらなくも思ひけるかな契りしを
松より波はこゑじ物ぞと

みかど御目のなやみをもらせ給ふ、物心ぼそければ、七月二十日あまり、京へかへらせ給ふべきよしせんじくだる、つゐの事とはおぼしゝかど、又此うらを思ひはなれん事をなげき給へり、あかしの上六月よりくはいにんし給ふ、源、

此たびは立わかる共もしほやく
煙はおなじそらになびかん

あかしの上かきつめて海士のたくもの思ひにも

今はかひなき恨だにせじ

きんは又あふまでのかたみとの給ふ、あかしの上、

なをざりに賴め置ける一ことを
つきせぬねにやかけて恐ばん

源 逢までのかたみに契る中のをの
しらべはことにかはらざらなん

同 打すてゝたつもかなしき浦波に
なごりいかにと思ひやるかな

あかしの上 年へつるとまやもあれてうき波の
かへるかたにや身をたぐへまし

入道 よる波にたちかさねたる旅衣
しほどけしとや人のいとはん

源 かたみにぞかふべかりけるあふことの
日數へだてん中のころもを

入道 世をうみにこゝらしほしむ身と成て
猶此きしをゑこそはなれね

源 都出し春のなげきにをとらめや
年ふる浦をわかれぬる秋

君はなにはのはらへし給ひて、二條院につき給ふ、ほどなくもとの位にあらたまり、權大納言に成給ふ、内に參り給ひて御物語に夜もふけぬ、

御 わたつみにしづみうらぶれひるの子の
足たゝざりし年はへにけり

御 宮柱めぐりあひける時しあれば
わかれし春のうらみ殘すな

あかしへ御文つかはさる、源、

なげきつゝ明石のうらに朝霧の
たつやと人を思ひやるかな

つくしの五せちおもひさめぬる心地して、

すまのうらに心をよせし舟人も
やがてくたせる袖をみせばや

源 かへりてはかごとやせましよせたりし
なごりに袖のひがたかりしを

○みをつくし 源二十七八才

二月に御國ゆづり給ふ、冷泉院十一才、春宮には承兵殿のみこ立給ふ、朱雀院の御子也、源は内大臣にならせ給ふ、左大臣殿攝政し給ふ、太政大臣也、御子の宰相頭中將の事也、は權中納言也、此むすめ十二にて内に參り給ひ、こうきでんと申也、明石には三月十六日姫君うまれ給ふ、彼うらにははる〴〵しきめのとも有まじと、京よりくだし給ふ、此

めのとわかやかなれば、源たはふれ給て、
　乗てよりへだてぬ中とならはねど
　　別れはおしき物にぞ有ける
打つけの別れを惜むかごとにて
　　思はんかたにしたひやはせぬ
此めのとの事をあかしへ、源、
　いつしかも袖うちかけんをとめ子が
　　世をへてなでん岩のおひさき
あかしの上かへし 獨りしてなづるは袖の程なきに
　　おほふ計のかげをしぞまつ
むらさきの上に此事かたり給へば、紫の上、
　思ふどちなびくかたにはあらずして
　　我ぞ煙にさきだちなまし
源 誰により世をうみ山に行めぐり
　　たへぬ涙にうきしづむ身ぞ
五月五日は姫君の五十日にあたるらんとおぼし、明石へ御使有、
　うみ松や時ぞ共なきかげにゐて
　　何のあやめもいかにわくらん
あかしの上 数ならぬ三島がくれに鳴たづは
　　けふもいかにとゝふ人ぞなき
五月雨つれ〴〵なる比、花ちる里へわたり給へば、
　くゐなだにおどろかさずばいかでかは
　　あれたる宿に月はいれまし
源 をしなべてたゝくゝゐなにおどろかば
　　うはの空なる月もこそいれ
源は願はたしに住よしへまうで給ふ、かんだちめでん上人あまた、わか君も御とも也、夕霧の事也、松ばらの中に花もみぢこきちらしたるとみゆ、
惟光 住吉の松こそ物はかなしけれ
　　神代の事をかけて思へば
源 あらかりし波のまがひに住吉の
　　神をばかけて思ひわするゝ
其時あかしの上は船にてまうで給へり、これみつすずりをたてまつれば、源よりあかしの上へ、
　身をつくし戀るしるしにこゝまでも
　　めぐりあひけるゑこそふかしな
明石の上 数ならでなにはの事もかひなきに
　　などみをつくし思ひそめけん
露けさの昔にゝたるたび衣

　　頼みみしまの名にはかくれず
あそびの女共參るを、かんだちめ、わかやかにこのましげなるは、めとゞめ給へり、
「今は齋宮もかはり給へば、みやす所ものぼり給ふ、俄にをもくわづらひ給ひてあまに成、つゐにうせ給ひにけり、齋宮は何事も覺へ給はねば、源氏渡らせ給て、有べき事共人々に仰付させ給ふ、雪みぞれかきたれたる日、源より齋宮へ、
　ふりみだれ隙なき空になき人の
　　あまかけるらん宿ぞかなしき
齋宮 きゑがてにふるぞかなしきかきくらし
　　我身それともおもほへぬ世に
此齋宮を朱雀院御けしきあれど、引たがへて今のみかど（冷泉）へ參らせんと、みかどの御母入道の宮（藤つぼの事也）にかくとの給ふ、

○よもぎふ（源二十五より二十八才まで）

ひたちの宮の姫君すゑつむ花は、源をまち給ふ、宮の内いよ〳〵あれまさり、人すくなになりて、きつねこ玉などかたちをあらはし物すごし、此ふるき宮にわびしくておはしまさんよりも、うりはなち給へかしとのぞむ人有けれど、父宮の御あとをかろ〴〵しき人にはわたすまじとて、御てうど共も明暮かたみとながめ給へり、兄のぜんじの君まれに山より出給へど、しげき草よもぎをはらはん物共し給はず、春夏になれば馬うしはなちかふ所となれり、野わきあらかりし年、らうはくづれはてゝわづかにほねばかりのこりたり、ぬす人もかゝる所には目をもかけず、此姫君の母のはらからは、ずりやうのきたのかたにて、ゐなかにくだるが、姫君をつれてくだり、我むすめのつかひものにせんといへど、さらにうごくべうもあらねば、にくげなる事をいひて、めのとのこ侍從をつれてくだる、いひとゞめんやうもなくて、御ぐしのおちたまりたるをあつめて、かづらにし給へるが、九尺あまりにてきよらなるを、じゝうにとらせ給ふとて、
　　思ひのほかにかけはなれぬる
　たゆまじき筋と頼みし玉かづら
侍從 玉かづらたへてもやまじ行道に
　　たむけの神もかけてちかはん
年かはりて卯月ばかりに、源は花ちる里へおはすとて此ふる宮をおぼし出て、これみつを入給ふ、姫君は

古宮の夢に見へ給ふなごりかなしうて、
なき人をこふるたもとの蹤なきを
あれたる軒の雫さへそふ
源　尋ても我こそとはめ道もなく
ふかきよもぎがもとの心を
同　藤なみの打過がたく見へつるは
松こそやどのしるしなりけれ
末つむ　年をへてまつしるしなき我宿を
花のたよりに過ぬばかりか
後にはひがしの院にわたし給ふ、侍従が今しばし見とゞけざる心の、あさくはづかしう思へり、

○せき屋

須磨よりかへり給て、又のとし九月つごもり、石山に参り給ふ、其日いよのすけひたちよりのぼる、うち出のはまくる程に、源氏の君はあはた山こゑ給ふときゝて、杉の下に車共おろして過し奉る、昔の小君今はゑもんのすけなるを召て、けふのせきむかへはゑ思ひすて給はじと宣ひければ、
うつせみ　ゆくとくとせきとめがたき涙をや
たへぬしみづと人は見るらん

石山よりかへらせ給ひて後、御せうそこあり、源、
わくらはに行あふ道を頼みしも
猶かひなしやしほならぬうみ
うつせみ　あふ坂のせきやいかなる關なれば
しげきなげきの中をわくらん
いよのすけは、老のつもりにやなやましくなりて、つゐにうせぬ、きのかみ昔よりすき心ありて、あさましき心の見へければ、うつせみはあまになりにけり、

○ゑあはせ　源三十才

齋宮の入内の事、入道の宮藤つぼの女院御心に入てもよほしきこゑ給ふ、院朱は御心にかゝりて口おしとおぼせど、御くしの箱、うちみだりのはこ、かうこのはこ、御たき物などつかはさるゝとて、伊勢へおはせし時をおぼし出て、
御　別れぢにそへしをぐしをかごとにて
はるけき中と神やいさめし
齋宮　わかるとてはるかにいひし一ことも
かへりてものは今ぞかなしき
うへ冷は繪をこのませ給ひて、てん上人わかき人々も、ゑに心よせけるは、御心とゞめさせ給ひけり、此

齋宮の女御みやす所のむすめ也よくゑをかき給へば、みかど御心うつりてしげくわたらせ給ふ、權大納言我人にをとらんやとて、上手共めしよせ物がたり、月なみのゑにことばをかきつゞけて、むすめのこうきでんへ參らせらる、源氏の君すまの浦にてかゝせ給へるを、紫の上今まで見せ給はざりけるとうらみて、

獨りゐてながめしよりはあまのすむ
かたをかきてぞ見るべかりける

源 うきめみしその折よりもけふは又
過にしかたにかへるなみだか

權中納言心をつくしぢくへうつし、ひものかざりいよ〳〵とゝのへ給へり、三月十日の程左右にわかたせ、左は梅つぼ也、齋宮右はこうきでん、中納言の御むすめ也、左より平內侍のすけ、侍從のないし、少將の命婦三人出たり、右よりは大貳のないしの介、中將の命婦、兵衞のみやうぶ三人出て、心々にあらそひけり、まづ竹とりのおきなにうつぼのとしかげを合て、伊勢物語に正三位を合せて、平の內侍のすけ、

いせの海のふかき心をたどらずば
ふりにしあとゝなみやけつべき

大貳 雲の上に思ひのぼれる心には
ちひろのそこもはるかにぞ見る

中宮 みるめこそうらぶれぬらめ年へにし
いせおのあまの名をやしづめん

院より梅壺へ御ゑ共遣はされける中に、齋宮のいせへくだり給し日のぎしきをきんもちに書せて、御、

身こそかくしめの外なれそのかみの
心のうちをわすれしもせず

齋宮返し しめのうちは昔にあらぬ心ちして
神代の事も今ぞ戀しき

かんの君大宮より梅つぼへも、こうきでんへも御繪共參らせらる、判者は兵部卿宮也、源氏の御弟、さだめかねて夜に入ぬ、彼すまのゑ出たるに、人々なみだをおとし、左梅つぼの御かたかちに成にけり、二十日の月さし出て、御琴めし出て、わごん權中納言、兵部卿の宮さうのこと、源はきん、びはゝ少將のみやうぶ、明はてゝろく共は中宮より給はれり此中宮は冷泉院の御母、藤つぼ入道の宮の御事也、

〇松風 源三十才

東の院つくりたてゝ、西のたいに花ちる里うつろはし給ふ、東のたいにはあかしの御かたをわたし給は

んとおぼしけり、北はひろくつくらせ、ゆくすゑたのめし人々のつどひすむべきやうにして、へだて〳〵して、しんでんは源の御やすみ所にし給へり、あかしへのぼらせ給へとあれば、年へつる浦をはなれん事入道の心ぼそく、ひとり残りとゞまり給ふもかなしく、入道もひめ君のうつくしげなるを見たてまつらでは、いかですごさんとおぼす、入道、

行さきをはるかに祈るわかれぢに
　　たゑぬはおひの涙なりけり

尼君もろ共に都はいでき此たびや
　　ひとり野中の道にまどはん

御かた いきて又あひみん事をいつとてか
　　かぎりもしらぬ世をばたのまん

尼君かのきしに心よりにしあま舟の
　　そむきしかたにこぎかへるかな

御かた いくかへり行かふ秋を過しつゝ
　　うきゝにのりて我かへるらん

大井のわたり、中務の宮のふるき跡にすみ給ふ、年比へつる海づらに似たれば、所かへたるやうにもおぼされず、御かた琴をかきならし給へば、

尼君身をかへて獨りかへれる山里に
　　きゝしにゝたる松風ぞふく

御かた 古郷に見しよの友をこひわびて
　　さへづることを誰かわくらん

おとゞわたり給ひ姫君を見給ふも、いかゞあさくはおぼされん、あま君は昔中務の宮の住給ひし事を、

住なれし人はかへりてたどれ共
　　清水ぞやどのあるじがほなる

源 いさら井ははやくのこともわすれじを
　　もとのあるじやおもかはりせる

源はさがの御寺にわたらせ給ひ、十四日十五日つごもりの日は、おこなはるべき事定めをかせ給ふ、源、

契りしにかはらぬことのしらべにて
　　たへぬ心のほどはしりきや

御かた かはらじと契りしことを頼みにて
　　松のひゞきにねをそへしかな

源出給ふほどに、頭中將兵衛督參る、かる〳〵しきかくれ所見あらはされけるとて、にはかに鵜がひ共めす、きのふ野にとゞまりぬる君たちも、小鳥つけさせたる萩のゑだなどつとにして參れり、

月さし出るほどにみき參りて、びはわごん笛ども川
風にあはせておもしろし、夜ふけてでん上人四五人
參れり、ちよくしには藏人の辨、

御 月のすむ川のをちなる里なれば
かつらのかげはのどけかるらん

源御返し 久かたの光にちかき名のみして
あさゆふ霧もはれぬ山里

源 めぐりきて手にとる斗さやけきや
淡路の島のあはと見し月

頭中將 浮雲にしばしまがひし月影の
すみはつる夜ぞのどけからまし

左大辨 雲の上のすみかをすてゝ夜半の月
いづれの谷にかげかくしけん

むらさきの上はちごをあいし給ふ御心なれば、あかしの姫君をいだきかしづかばやとおぼさる、

○うす雲 源三十より三十一才まで

明石の上は冬になり行まゝに、川づらのすまゐも心ぼそし、みぎはの氷など見やり涙をはらひて、

雪ふかみみ山のうちははれず共
猶ふみかよへ跡たへずして

めのと 雪まなき吉野の山を尋ても
心のかよふあとたへめやは

雪すこしとけて、姫君をむかへに源わたり給ふ、姫君は何心なく御車にのらんといそぎ給ふ、かたことの聲はうつくしうて、袖をとらへ母君ものり給へとなり、あかしの上、

するとをき二葉の松に引わかれ
いづこかたかきかげを見るべき

源 おひそめしねもふかければたけくまの
松に小松のかげをならべん

めのとの少將、御はかしあまがつとりて車にのる、姫君は道のほどにてねいりたまへり、姫君はこなたにて御くだ物など參り、あたりを見めぐらして、母君の見へたまはねば打ひそみたまふ、めのとめし出てなぐさめまぎらはしたまへり、むらさきの上おかしき御こゝろざまなれば、よくすかしてつきむつびたまへり、年かへりて源大井にわたりたまふ、姫君御さしぬきのすそにとりつきて したひたまへば、たちとゞまりて、あすかへりこんとて出たまふ、むらさきの上、

舟とむるをちかた人のなくばこそ
あすかへりこんせなと待見め

源 行てみてあすもさねこん中々に
をちかた人はこゝろをくとも

其比おほきおとゞうせ給ふ、あふひの上のちゝ也、その年世中さはがしくて、雲のたゝずまひ月日ほしのひかり、れいにかはり皆おどろきあへり、入道きさいの宮春のはじめよりなやみ給ひて、三月にうせ給ふ、三十七才、うす雲の女院と申也、

源 入日さすみねにたなびくうす雲は
物思ふ袖に色やまがへる

御いのりの師の僧都、年七十ばかりなるが、此入道の宮の有つる昔を、事のつゐでにさゝやき申さるれば、みかど冷泉めづらかにきこしめし、おそろしうもかなしうも御心みだれさせ給へり、さらにしり給はで後の世までとがめあるべき事也、源おとゞのたゞ人にて世につかへ給ふも、あはれにかたじけなくおぼしなやみ、秋のつかさめしに太政大臣に成ふ給べき事さだめ給ふ、つゐでに即位の事もらしきこへ給ふ、おとゞさらに有まじきよし申返し給ふ、桃園の式部卿の宮斎院の父也もうせ給ひぬる由奏するに、いよ〳〵さはがし、世のうしろみには、あふひの上の兄大納言になり右大将かけ給へるを、今一きざみあがり給て、何事もゆづりてその後ともかくもとぞおぼしける、秋の比二條院に斎宮まかで給へり、源おとゞ木丁へだてゝ御物がたり聞へ給ふ、春の花の林秋の野のさかり、昔よりとり〴〵にあらそひ侍る、もろこしには春の花のにしきにしく物なしといへり、やまとは秋のあはれをとりたてゝ思へる、源、

君もさはあはれをかはせ人しれず
我身にしむる秋の夕風

源 大井へわたり給へば、あかしの上、

いさりせしかげわすられぬかゞり火は
身のうき舟やしたひきにけん

源 淺からぬ下の思ひをしらねばや
猶かゞり火のかげはさはげる

〇あさがほ 源三十一才

あさがほの斎院は、父の御ぶくにておりゐ給ふ、源大臣はおぼしそめたるくせにて、をとづれしげかれど、斎院はとけて御返事もし給はず、長月にもゝそのゝ

宮にさいゐんわたり給ふを、源聞給ひて、女五の宮の御見まひに事よせて おはしたり、もゝぞの丶式部卿は女五宮の兄也、しんでんのにしひがしにすみ給ふ、齋院のおまへをみやり給へば、せんざいのけしきのどやかなるもゆかしくて、おとゞわたり給ふ、にび色のみすかけわたし、くろき木丁のすきかげなまめかし、せんじたいめんして申つたゆる、

源 人しれず神のゆるしをまちしまに
　　こゝらつれなき世をすぐす哉

齋院 なべて世の哀ばかりをとふからに
　　ちかひし事と神やいさめん

二條院へかへり給ひて、あさがほの色もにほひもかはれるをおり給ひて、さいゐんへつかはさる、

見し折の露わすられぬあさがほの
　　花のさかりは過やしぬらん

齋院 秋はてゝ露のまがきにむすぼゝれ
　　有かなきかにうつるあさがほ

冬の比女五の宮へおとゞわたり給へば、にしなる門あけさせ給ふに、ぢやうのさびつきてあかざるを、おきなのさむげなるすがたにて、こぼ〳〵とひきわぶるを、あはれときこしめして、

源 いつのまによもぎがもとゝむすぼゝれ
　　雪ふる里とあれしかきねぞ

御物語し給ふに、女五の宮は御みゝもきこへず、ねぶたげにあくびし、いびきのをとすれば、おとゞ出給はんとするに、ふるめかしき人出てなのる、げんないしあまになりて、此宮の御てしにてあり、今もあだめきたるこはつきにて、もみぢのがの巻に、源あひ給ひたる年より也

年ふれど此契りこそわすられね
　　親のおやとかいひし一こと

源 身をかへて後も待見よ此世にて
　　親をわするゝためし有やと

さいゐんへ參り給へば、こよひも人づてにてたいめんもあらざれば、源、

つれなさを昔にこりぬ心こそ
　　人のつらさにそへてつらけれ

あらためて何かは見へん人のうへに
　　かゝりときゝし心ばかりを

雪のふりつもりたる夕ぐれ、紫の上西のたいにわたり給ふ、月はくまなきに、わらはべどもに雪まろばしせさ

せたまふ、しどけなきとのゐすがた、扇などもおとして打とけがほおかしげ也、夜ふくるまゝに月いよいよおもしろし、紫の上、

氷とぢ岩まの水はゆきかへり
　そらすむ月の影ぞながるゝ

むらさきのうへのかたち、こひしき人藤つぼ也のおもかげによく似給ひて、いさゝかわけたる御心もなし、をしの鳴ければ、源、

かきつめて昔戀しき雪もよに
　あはれをそふるをしのうきねは

入給ひてうす雲の御事おぼしめして、おほとのごもりに夢におそはれ給へば、むらさきの上こはいかにとおどろかし給ふに、なみだながれてけり、源、

とけてねぬね覺さびしき秋のよに
　むすぼゝれつる夢のさびしさ

とくおき給ひて所々に御ずきやうし給ふ、

なき人をしたふ心にまかせても
　かげみぬ水のせにやまどはん

○をとめ 源三十二 三四まで

かものまつりの比、せんさいゐんへ、源より、

かけきやは川瀬の波も立かへり
　君がみそぎのふちのやつれを

返し藤衣きしはきのふと思ふまに
　けふはみそぎのせにかはる世を

あふひの上の若君、夕霧也、御げんぶく三條の殿にてし給ふ、四位になしてんと人みな思へるを、あさぎにてかへり給ふを、うば君大みやはあさましとおぼしたり、六位也、たかき家の子とうまれては、つかさくらゐ心にかなひ、世におごりぬれば、がくもんなどに身をくるしめん事はとをく、たはぶれあそびをのみこのめり、世にあるときは人みなついせうししたふ也、時うつりおとろふるすゑには、人にあなづらるゝに、かゝり所なくなり行也、此若君をば大がくのみちにならはさんとて、はかせをめしよせ給ふ、四五月のうちに史記などいふ文よみ給へり、

大將は内大臣になり給ふ、御子たちあまたおはします、御むすめはこうきでんの女御と今一ところあり、此姫君はくはしやの君夕霧とひとつ所にて、大みやのそだて給ふ、おさな心に思ふ事なきにもあらず、十にあまり給へば、けとをくもてなされ、かきかはしたる

文どものおちつるを、人々見かくしつゝ、過行に、内のおとゞきゝつけ給ひて、したしき中のゐんは、したじたのものだによからぬ事なるに、大みやの見ゆるし給ふ事とはらだち給ふ、くはざの君これをきゝて、さては今より後は文のかよひもなりがたかるべしと、打なげきね給ひぬれど、心そらにて中のしやうじをひけどをともせず、ひめ君もめざまして、雲井の鴈もわがごとくやとひとりごとし給ふ、（夕霧の詞）小侍従やさぶらふ、こゝをあけ給へとあれどをともせず、夕霧、

さよなかに友よびわたる雁がねも
　うたて吹そふおぎのうは風

「内のおとゞの御むすめこうきでんは、梅つぼにをされ給ひ、くるしとのみおぼさる、（梅つぼはみやす所のむすめ、斎宮の事也）夕霧のめのと姫君にちかづきて、父おとゞのことやうにおぼしめすとも、思ひなびかせ給ふなとさゝめく、又姫君のめのとは夕霧の心かよはし給ふをつらく思ひて、物のはじめの六位すぐせとつぶやくを、おとこ君きゝ給ひて、

くれなゐの涙にふかき袖の色
　あさみどりとやいひしぼるべき

色々に身のうきほどのしらるゝは
　いかにそめける中のころもぞ

（夕霧）霜こほりうたてむすべる明くれの
　空かきくらしふるなみだかな

「大とのよりことし五せちたてまつり給ふ、まひ姫はこれみつがむすめ、よしきよがむすめ也、これみつがむすめのさまは、雲井の雁のほどゝ見へて、やうたいまさりて見へければ、夕霧たちよりきぬのすそを引うごかして、

あめにますとよわか姫の宮人も
　我こゝろざすしめをわするな

大殿はむかしのをとめおぼし出て、文をつかはさる、

をとめ子も神さびぬらし天津袖
　ふるきよの友よはひへぬれば

（つくしの五せち返し）かけていへばけふの事とぞおもほゆる
　日影の霜の袖にとけしも

今一人のまひ姫はよしきよがむすめ、これみつがむすめはないしのすけになし給ふ、此ないしがせうとのわらはして、夕霧文をつかはさる、

日影にもしるかりけめやをとめ子が

天のはそでにかけし心は

兄弟これを見けるを、これみつ見つけて母にもみせて、此君のかくおぼしめさば、參らせんといふ、

「二月二十日あまりしゆじやくゐんに行幸あり、源おほきおとゞも參り給ふ、天子もおとゞもおなじあかいろをき給へば、ひとつものとかゞやきて見へ給ふ、かしこきがくしやう七人めして、題を給はり文つくらせらる、夕霧もつくり給へり、

源 鶯のさへづるこゑはむかしにて
むつれし花のかげぞかはれる

院 九重をかすみへだつるすみかにも
春とつげくるうぐひすのこゑ

兵部卿宮 いにしへを吹つたへたる笛竹に
さへづる鳥のねさへかはらぬ

冷御 鶯の昔をこひてさへづるは
こづたふ花の色やあせたる

夕霧はその日文うつくしうつくり給ひて、秋のつかさめしに侍従になり給ふ、

「大とのゝすまゐ、六でうのみやす所のふるき宮のほとりを、四町をしめてつくらせ、八月にわたり給ふ、ひつじさるのまちは、秋このむ中宮の古みやなれば、やがておはしますべし、梅つぼの事也、たつみはおとゞのおはしますまち也、うしとらはむらさきの上、いぬゐはあかしの御かたなり、

むらさきの上の庭には、まやたかく池ひろく、五ゑう、こうばい、さくら、やまぶき、いはつゝじ、秋の草ほのかにうへたり、中宮の庭には、もとの山に紅葉いろ〳〵、いづみの水とをく、岩をたて瀧おとし、秋の野はるかにつくれり、その比にあひてさきみだれたり、北のひがしは夏の御かた、花ちる里也、すゞしげにいづみをながし、くれ竹卯の花こだかき木どもをうへて、たちばな、なでしこ、さうび、くたになどやうの草々うへたり、東おもてにむまばのおとゞをつくり、にしは御藏也、へだてのかきにから竹松しげく、雪をもてあそばんたよりあり、菊のまがきはゝそのはら、名もしらぬみ山木をうへたり、まづ花ちる里そひてうつらせ給ふ、さてむらさきのうへ車十五侍従の君そひてわたり給ふ、五六日過て中宮わたり給ふ、中宮のおまへの紅葉おもしろし、箱のふたに花紅葉こきませて、むらさきの上の御かたへ、

こゝろから春まつそのはわがやどの
　もみぢを風のつとにても見よ

御返しは、此ふたにこけをしきて、いはほのこゝろばゑして、五ゑうのゑだに、

　風にちるもみぢはかろし春の色を
　　いはねの松にかけてこそ見め

あかしの上は神無月にわたり給ふ、

源氏物語 巻之五六

玉かづら　はつね
こてふ　ほたる
とこなつ　かゞり火
野わき　みゆき
ふぢばかま　まきばしら
むめがゑ　藤のうら葉

○致仕太政大臣 — 男子七人
- 玉鬘典侍　母夕顔上
- 冷泉院弘徽殿女御
- 夕霧大臣室　雲井の鴈
- 近江君

○髭黒太政大臣
- 藤中納言
- 次郎君
- 右兵衛督
- 右大辨
- 頭中將
- 眞木柱上
- 冷の女御
- 今上の尚侍　中の君とあり

○太宰少貳 — 豐後介
- 次郎
- 三郎
- 揚名介妻
- 姉御許
- 兵部君

○玉かづら源三十五オ
とし月へだゝりぬれど、夕がほの上の事源わすれ給はず、うこんをかたみとおぼして、たいの御かたにさぶらはせ給へり、西の京にゐ給ひし姫君玉かづら四才の時、めのとのおとこ少貳になりて、つくしへつれていきけり、船の中にてめのとむすめ二人、
舟人も誰をこふとかおほ島の
うらかなしげにこゑの聞ゆる
こしかたも行衛もしらぬおきに出て
哀いづくに君をこふらん
つくしひせんにくだりても、夕がほのうへはいづくにかおはします、ゆめに見へたまひてもこゝちあしければ、世になくならせたまふやとおもふ、少貳にはおのこ三人ありしが、この姫君は京へぐしてかへり、人にもしらせたてまつれといひて、姫君十ばかりのころ、少貳はうせぬ、京へのぼらんとすれど、中あしきくにの人おほくて、をぢはゞかりてのぼることもならで、とし月をすごす、この姫君のかたちよきことをゐなか人きゝて、むかへむといふものおほけれども共、かたわにおはしませば、尼になしまゐらするといつはりいへり、少貳が子供おのこもむすめも、ところにたより出きて、京のかたはとをざかるほどに、姫君二十ばかりに成りたまふ、そのころひごの國に大ゆふのげんとて、年三十ばかりにていきほひおそろしげなるつはものあり、この玉かづらのことをきゝて、たとひかたわにおはしますとも、いたゞきにさゝげて、わたくしの君とおもはんとねんごろにいひて、このくにに來りぬ、少貳がむすこ二郎と三郎は、身の行すゑのたよりにもたのもしからんとおもふ、ぶんごのすけといふは、おやのゆいごんにまかせ、京へのぼせたてまつらんといふ、このげんがありさまのおそろしきに、心をやぶらじとて、めのと出てげんにあひたり、監はゐなかものとてあなづらんにとて、うたをよみたり、
君にもし心たがはゞまつらなる
かゞみの神をかけてちかはん
めのとはこゝろをもちひかへてよみけれど、監はきゝしらず、うれしとおもふなり、
年をへていのる心のたがひなば
かゞみの神をつらしとや見ん

卯月二十日の程、むかへにまからんといひて、監はひごの國へかへりけり、此姫君を京へぐしてのぼらん事を年ごろいのる也、もしたがひたらば、かゞみの神をつらしと思はんの心なるを、監は聞しらぬなり、ぶんごのすけと、兵部の君といふむすめ心を合て、姫君をつれ參らせ、夜にまぎれはや舟にてにげてのぼる、兵部の君、

うきしまをこぎはなれても行かたや
いづくとまりとしらずも有哉

玉かづら 行さきも見へぬ波路に舟出して
風にまかする身こそうきたれ

うき事にむねのみさはぐひゞきには
ひゞきのなだもさはらざりけり

九條に昔しれる人あるをたづねてゐけり、彼國にても願をたてつれば、八幡にまうで又はつせへ參る、四日といふにつばいちといふ所につきたり、此宿に又よそのおとこ女、馬などひかせてつきたり、是は昔夕がほの上につかはれし右近也、ぶんごのすけ姫君の參り物手づからとりまかなへるを、右近ものごしにのぞき見れば、見たるやうなるかほつき也、三でうと云女の有をよく〳〵みれば、是も見しやうにて、右近もかほをさし出せば、三條は右近を見しりて、あらうれしや、さては夕がほの上はおはしますやといふいふなく、右近は姫君はとゝふ、めのとに此よしいひて、みな夢の心ちして昔をかたりあひ、むせかへりなきくらす、うこんはひめ君をうつくしと見奉り、三日ごもり此なる君の御ためとて、御あかしゝたゝめおがみ參らせて、

二もとの杉のたちどを尋ねずば
ふる川のへに君を見ましや

玉かづら はつせ川はやくの事はしらね共
けふのあふせに身さへながるゝ

京にかへりて君源に此よし申たれば、父おとゞにはなしらせそ、我は子もすくなければ、しらぬかたより我子をたづね出たりといはんとの給ふ、

源より玉かづらへ しらず共尋てしらんみしま江に
おふるみくりのすぢはたえじを

玉 數ならぬみくりや何のすぢなれば
うきにしもかくねをとゞめけん

右近が里の五條に、まづしのびてすませ給ふ、花ちる里にも紫の上にも、此玉かづらの母夕がほの事かた

り、我子のやうにいひなし給ふ、玉かづら源にたいめんし給て、おやのかほはゆかしき物也、さもおぼさぬかとて木丁ををしやり給へば、はづかしげにてそばみ給へり、母上によく似給へば、

戀わたる身はそれならで玉かづら
いか成すぢをたづねきつらん

年の暮には人々のしやうぞくをくばらせ給へり、こうばいのいともんうきたるゑびぞめのこうちき、今やう色のすぐれたるをば紫の上、櫻のほそながに、つやゝかなるかいねりそへてあかしのひめ君、あさはなだのかいふのをり物、こきかいねりそへて花ちる里、山ぶきのほそなが玉かづら、柳のをり物にから草をれるをすゑつむ、てふ鳥ちがひたる白きこうちきに、こきつやゝかなるかさねてあかしの御かた、うつせみのあま君に、あをにびのをりもの、くちなしの御ぞゆるし色そへ給ふ、すゑつむはひがしの院におはして、

きてみればうらみられけりから衣
かへしやりてん袖をぬらして

御使にやまぶきのうちき、袖口すゝけたるをかづけ給へり、

○初音 源三十六才、元日の事也、

六條院の内、見所おほきかた〴〵の中に、春のおまへ紫の上とりわきて、梅のかもみすの内のにほひにまがひやすらか也、めしつかへの人々もわかやかにすぐれたるは、明石の姫君の御かたにゑらせ給ひ、おとなびたるはよし〳〵しくしやうぞくして、はがためのいはゐもちゐかゞみにむかひ、千とせのかげにしかきいはひ事して、そぼれあへるに、おとゞ源さしのぞき給へば、ふところ手引なをし、人々たはぶれ事いひて夕つかた、源、

うす氷とけぬる池のかゞみには
世にたぐひなきかけぞならべる

紫の上 くもりなき池の鏡に萬代を
すむべき影ぞしるく見へける

けふは子日也、姫君かたへわたらせ給へば、わらはしもづかへなど、御前の山の小松をひきあそぶ、あかしのうへは、ひげこわりご、五ゑうのゑだにうぐひすをつくりて、

年月を松にひかれてふる人に

けふ鶯のはつねきかせよ

引わかれ年はふれども鶯の
すだちし松のねをわすれめや

夏の御かたには、むつまじきいもせの契りばかりをいひかはし給て、玉かづらへわたり給へり、明石の御かたにわたり給へば、硯さうし共取ちらし、姫君の小松の返歌を見ゐ給ひて、

めづらしや花のねぐらにこづたひて
たにのふるすをとづる鶯

こよひはこなたにとまり給ふ、あけぼのゝ程におき出給ひて、紫の上へ渡らせ給ふ、東の院へは日比へてわたり給ひ、すゑつむのお前のこうばい、見はやす人もなければ、

ふる里の春のこずゑにたづねきて
よのつねならぬ花を見るかな

おとこたうかあり、正月十四の節會也、

○こてふ

やよひ二十日あまり、春のおまへ紫の上の花の色鳥のこゑ、山のこだち、中島のわたりいとめづらし、からめいたる舟つくらせ、歌づかさの人めして、船のがくもよほさせ給ふ、秋このむ中宮は、かろ〴〵しくこなたにわたらせ給ふべきならねば、女ばうたちをのせてりやうとうげきしゆをかざり、みづらゆひたるわらはべにかぢとりさほさゝせ、南の池にとをしごらんぜさせ給ふ、女ばうたち、

風ふけば波の花さへ色見へて
こやなにたてるやまぶきのさき

春の池やゐでの川瀬にかよふらん
きしの山ぶきそこもにほへる

かめの上の山もたづねじ舟のうちに
おひせぬ名をもこゝにのこさん

春の日のうらゝにさして行舟は
さほのしづくも花ぞちりける

舞人に手のかぎりつくさせ給ふ、夜にいればかゞり火ともして、みはしのもとのこけの上にがくにんめして、かんだちめみこたちみなひき物ふきものとりどり也、玉かづらの事をきゝて、心がけ給ふ人おほかり、

兵部卿 紫のゆへに心をしめたれば
ふちに身なげん名やはおしけき

ふちに身をなげつべしやと此春は
　花のあたりを立さらで見よ
けふは秋このむ中宮の御どきやうのはじめ也、春のお前より花たてまつり給ふ、てふ鳥にかざりわけたるわらはべ八人、しろかねの花がめに櫻をさし、こがねのかめに山ぶきをさして、南の山ぎはより舟をささせて、御せうそこは殿の中將して、(夕霧の事也、)むらさきのうへより、
花ぞのゝこてふをさへやした草に
　秋まつむしはうとく見るらん
こぞのもみぢの御返しなりと、中宮うちわらいて御らんず、御返し、
こてふにもさそはれなまし心ありて
　やへ山ぶきをへだてざりせば
大とのゝ中將は、玉かづらをいもうと共しり給はで、
思ふ共君はしらじなわきかへり
　岩もる水にいろし見へねば
おとゞ右近をめして、此返しどもは人えりしてせさせよとの給ふ、おとゞも時々けしきあることばをよませ給へ共、玉かづらはきゝしらぬさまなり、

源 ませの内にねぶかくうへし竹の子の
　をのがよゝにやおひわかるべき
玉 今さらにいかならんよか若竹の
　おひはじめけんねをば尋ねん
源 たちばなのかほりし袖によそふれば
　かはれる身共おもほへぬかな
玉 袖のかをよそふるからにたちばなの
　身さへはかなく成もこそすれ
むづかしと思ひて、ふつぶし給へるさまなつかしう、はだつきのこまやかにうつくしげなるに、けふ思ふ事しらせ給ふさかしらなる御おや心なり、御ぞもよくまぎらはし給ひて、ちかやかにふし給ふ、又の日御文に、
打とけてねもみぬ物を若草の
　事ありがほにむすぼゝるらん

○ほたる　五月

玉かづらはおとゞ源の思ひの外なる御けしきを、心ぐるしくおぼす、しげくわたらせ給ひて、人どをきおりはけしきばみたまふ、兵部卿の宮しんじちにせめ聞へ給へば、御返事などし給ふ、ある夜しのびやかに

おはしたるに、おとゞは木丁へたてゝかくれおはしまし、きちやうのかたびらに螢をおほくつゝみて、にはかにしそくをさし出たるかとあさましきに、玉かづらの扇をかざし給へる、かたはらめのうつくしきを宮御らんありて、まことの御むすめならば、かやうにはもてなし給はじとおぼす、

兵部卿の宮 なく聲も聞へぬ蟲の思ひだに
　人のけつにはきゆるものかは

聲はせで身をのみこがす螢こそ
　いふよりまさる思ひなるらめ

此事ゆへに此宮をほたる兵部卿といふ也、

五日にはむまばのおとゞに出給ふ、つゐでに玉かづらへ源わたり給へり、兵部卿の宮より玉かづらへ、

けふさへや引人もなきみがくれに
　おふるあやめのねのみなかれん

玉かづら あらはれていとゞあさくもみゆるかな
　あやめもわかずなかれけるねの

ところ／＼よりおとゞへくすだまゝいる、むまばのおとゞは、こなたのらうより見とをす程遠からず、おとゞは花ちるさとにおほとのごもる、今はおましなどもこと事なければ、花ちる里、

そのこまもすさめぬ草と名にたてる
　みぎはのあやめけふや引つる

源 にほどりに影をならぶる若ごまは
　いつかあやめにひきわかるべき

おとゞより玉かづらへ、

思ひあまり昔のあとをたづぬれど
　親にそむける子ぞたぐひなき

玉かづら ふるき跡を尋れどげになかりけり
　此世にかゝるおやのこゝろは

内のおとゞは御子たちおほかる中に、彼なでしこのゆくゑいかにとおぼしめし、玉かづらは源のまことの御むすめとおぼして、御子たちにもしさやうのなのりする人あらば、みゝとゞめ給へとの給ふ、

○とこなつ　同六月

いとあつき日、六でうのゐんの東のつりどのに出て涼み給ふ、夕霧殿上人もあまた參り給て、西川よりあゆかも川のいしぶし奉るを、お前にてゝうじ參らす、大とのゝきんだちも參給ひ、御物語のついでに、内のおとゞのおりはらのむすめ尋出給へるは、まことか

と思ひ給ふ、あふみの君の事也、おとゞはにしのたい玉へわたり給ひて、いにしへ父おとゞの、なでしことかたりたまひしをおぼしめし出て、

なでしこのとこなつかしき色を見ば
もとのかきねを人や尋ん

玉かづら山がつのかきほにおひしなでしこの
もとのねざしを誰かたづねん

内のおとゞは、今姫君をいかにせん、かへしをくらんも物くるをし、女御に参らせてよろづいひをしへ給へと也、此あふみの君は五節の君とすぐ六をぞ打ける、女御の里におはします時は、参て人のさまをも見ならひ給へと、父おとゞ仰らるれば、うれしき事かな、いつか参らんとて、まづ文を参らす、

草わかみひたちの海のいかゞさき
いかであひみんたごのうら波

女御此文を御らんじて、此返しは中納言の君にかき給へとゆづり給ふ、御文のやうにて、

ひたちなるするがの海のすまの浦に
波たち出よはこざきの松

○かゞり火　同秋

秋のはつ風すゞしき五日六日の夕月夜、西のたい玉かづらへおとゞ源わたり給て、わごんをしへ給ふ、かゞり火ともさせ、御琴をまくらにて、もろ共にそひぶし給へり、源、

かゞり火にたちそふ戀の煙こそ
よにはたへせぬほのを成けれ

玉かづら行衛なき空にけちてよかゞり火の
たよりにたぐふ煙とならば

○野分　同秋

中宮のおまへに秋の花をうへさせ、くろきあかきのませをゆひませ給へり、れいの年よりも野分あらあらしく吹たり、おとゞは姫君のかたにおはしますほどに、夕霧は東のわた殿よりつまどのあきたるを何心なく見いれ給へるに、ひさしにゐ給へる人まぎるべくもあらずけだかくきよら也、紫の上也春のあけぼのゝ霞のまより、かば櫻の咲みだれたる心地す、みすを吹あぐれば、人々におさへさせうちわらひ給へるかほ、あいぎやうにほひこぼるゝ計也、おとゞのつねにけどをくもてなし給へるもことはりにて立さり給ふに、おとゞ西のかたよりわたり給へり、夕霧はたゞ今

參たるやうにこはづくりしてあゆみ出給へば、おとど彼つま戸のあきたるは、夕霧や見給ふらんととがめ給ふ、夕霧は大宮の風におぢさせ給はんとて出給ふ、大宮（うば君）まちよろこびわなゝき給へり、大きなる木の枝もおれ、かはらさへ吹ちらし、はなれたる屋共はたふれたり、東の町（花ちる）は人すくなにておどろき給はんと、人召て所々つくろはすべきよしいひをき給ふ、ひくれば中宮のお前には、わらはべ四五人むしの籠どもに露かはせ給ふ、おとゞは中宮へわたり給ひ、それよりあかしの御かたへおはして、風のさはぎ計をとひてつれなく立かへり給へば、あかしの上、

大かたにおぎのは過る風の音も
うき身一つにしむ心ちして

西のたいには、おそろしと思ひあかし給へるなごりに、ねすぐして今ぞ鏡見給ふ、おとゞ入給ひて、れいのすぢにむづかしうきこゑたり、玉かづらはうたてと思ひながら打ゑみ給ふ、夕霧はいかで玉かづらのかたちみてしがなと、木丁引あげ給へばよくみゆ、おとゞと玉かづらはおや子と聞へながら、かくふところはなれ給はぬをあやしと見給ふ、すこしそばみ給へるを引よせ給へるに、御ぐしのなみよりてはらはらとこぼれかゝりたるは、いとむづかしきけしきながら、さすがなごやかなるさまして、なれ〳〵しくより給へる御けはひ、きのふ見し人（むらさきの上）にはをとりたれど、みるにゑまるゝさまは立ならぶべくおぼゆ、八重ぶきの咲みだれたるさかりに、露かゝれる夕ばゑなり、玉かづら、

咲みだる風のけしきにをみなへし
しほれしぬべき心ちこそすれ

源 下露になびかましかば女郎花
あらき風にはしほれざらまし

姫君の御かたへ夕霧參り給て、かみすゞりこひて、雲井の雁へ御文つかはし給ふ、

風さはぎ村雲まよふゆふべにも
わするゝまなくわすられぬ君

○みゆき（源三十 六七オ）

しはすに大原野の行幸とて、世にのこる人なく見さはぐ、六條院の人々も見給ふ、しゆじやかより五條のおほぢを西ざまにおれ給ふ、かつら川のもとまで物見のくるまひまなし、雪いさゝかちりて道の空ゑん

也、みこだちかんだちめは鷹をすへさせ給ふ、玉かづらはみかどの麗しき御かたちをなずらへなく見給ふ、ひげくろの大將やなぐゐおひて色くろくひげがちなるを、心づきなく見給へり、おとゞ源は御ともにはあらで御みきくだ物など奉り給ふ、みかどよりの御使は藏人のさゑもんのぜう、きじ一ゑだ、

御　雪ふかき小鹽の山にたつきじの
　　ふるきあとをもけふはたづねよ

源御返し　をしほ山みゆきつもれる松原に
　　けふ計なるあとやなからん

おとゞより玉かづらへ、きのふうへは見奉らせ給ふや、みやづかへに出給ふべきやとの御文なり、御返しに、

うちきらし朝ぐもりせし行幸には
　　さやかにそらの光やは見し

源　あかねさす光は雲にくもらぬを
　　などて行幸にめをきらしけん

玉かづらの事あらはしてんとおぼして、大宮へおとど渡り給ふ、あふひの上の御母也、あふひの君の事大宮かたり出給へり、内のおとゞも君たちも參り給て、かはらけたび／＼ながれ、玉かづらのことかたり出給へば、内のおとゞめづらかにてまづ打なき給ふ、御ともの人人何事ともしらず、つもきは二月十六日とさだめ給ふ、御こしゆひは父おとゞをとおぼす、大宮より玉かづらへ御使あり、御文には、

ふたかたにいひもてゆけば玉くしげ
　　我身はなれぬかけご成けり

秋このむ中宮よりも、からぎぬ御くしあげのしやうぞく、つぼにからのたき物入て奉り給ふ、末つむより青にほひのほそなが一かさね、おちぐりのはかま、むらさきのしらぎり見ゆるあられぢのこうちぎころもはこに入て、御文には、

我身こそうらみられけれから衣
　　君がたもとになれずと思へば

おとゞれいのとおかしくて、

から衣又からごろもから衣
　　かへす／＼もからごろもなる

内のおとゞは、玉かづらの御こしゆひのほどしのびがたく御けしきなり、御かはらけまいりて、

うらめしやおきつ玉もをかつぐまで

いそがくれけるあまの心よ

おとゞ玉かづらにかはりて、

よるべなみか丶るなぎさに打よせて

あまも尋ぬるもくづとぞ見し

此事をあふみの君き丶て、女御のおまへにかしは木中將少將さぶらひ給ふにす丶み出て、殿内大臣殿は御むすめまうけさせ給へる、かれもをとりはら也、ないしのかみにて宮づかへにいそぎ給ふときくとて、女御をうらみければ、中將うちわらひて、ないしのかみにはなにがしをこそと思ふに、ひだうにもおぼしかけたるとの給へば、を〳〵はらたて丶、中將殿こそつらけれ、せう〳〵の人はたてるまじき御うちかなとてゐざり入たり、ないしのかみには我を申なし給へと女御をせめたり、父おとゞは此のぞみをき丶給ひて打わらひ、申文をつくりなが歌などをよみて、あけたらばすてさせ給はじとの給へば、あふみの君の詞やまとうたはあしくもつゞけ侍らん、むね〳〵しき事は殿より申させ給へとて、手をしすりてゐたり、かたはらにてき丶ける女ばうは、おかしきに中々しぬべくおぼゆ、

〇藤ばかま源三十七オ八九月

大宮は三月廿日の比うせ給ふ、玉かづらにび色にやつれ、夕霧中將もおなじ色の姿にて、ないしのかみの事の御使に、玉かづらへおはしたり、彼野分の御あさがほ心にか丶りて、人にきかすまじき事の御使に參りたりとて、人々をしりぞけて、木丁のうしろにそばみゐて、つくりごとをなが〴〵しく云へば、玉かづらはいらへ給はんやうもなし、此つゐでにらにの花を、みすのつまよりさしいれとらせ給へる御袖うごかして、夕霧、

おなじの丶露にやつる丶藤ばかま

あはれはかけよかごとばかりも

玉かづら尋るにはるけきのべの露ならば

うす紫やかごとならまし

今すこし思ふ事をもらさまほしけれど、なやましとて玉かづらは入給へり、頭中將父おとゞよりの使に參て、

いもせ山ふかき道をばたづねずて

をだえの橋にふみまどひける

玉かづら まどひける道をばしらでいもせ山

たど〳〵しくぞたれもふみ見し

ひげくろの大將は、かしは木中將をつねによびて、父おとゞにも申いれ、大との源のいかにおぼす共、まことの親の御心だに違はずばと、辨のおもとをせめて、

大將 数ならばいとひもせましなが月に
いのちをかくる程ぞはかなき

螢兵部卿 朝日さす光をみても玉ざゝの
はわけの霜をけたずもあらなん

紫の兄兵衛督 わすれなんと思ふも物の戀しきに
いかさまにしていかさまにせん

兵部卿返し 心もてひかげにむかふあふひだに
朝をく霜をのれやはけつ

○まきばしら

ひげくろの大將は、玉かづらの事父おとゞのゆるしそめ給へば、大との源の心ゆかぬけしきをみせんもいとおしく、大將は玉かづらを我かたにわたし給はん事をいそぎ給へど、もとの北の方のよくも思ひ給ふまじと、心のどかなるやうにもてなし給ふ、大將のおはせぬひるつかた、おとゞ源玉かづらへ渡り給へば、なやましげにおもやせ給へるを、よそに見はなつよと口おしうてくわいに人也、

折たちてくみはみねどもわたり川
人のせとはた契らざりしを

玉かつら みつせ川わたらぬさきにいかでなを
涙のみをのあはときえなん

大將の北のかたは、おぼえ世にかろからず、かたちもよくおはしけるを、しうねき物のけに年ごろわづらひ給て、うつし心なくて程へ給けれど、大將の御心はうつるかたもあらざりしに、玉かづらにうつりそめ給へるを、北の方の父式部卿の宮きこしめして、いまめかしき人をわたしをきてかしづかれん、かたすみに人めわろくてあらんより、我かたへよびかへし給はんとあれば、北のかたは親のあたりといひながら、今さら立かへらんも人ぎゝあしかるべしと、さまざまに思ひみだれなやましく成てふし給へり、紫の上のあれ也、大將殿ひるは北のかたと一ところにおはしまして、くるれば玉かづらのかたへ出給はんとおぼすに、雪かきたれふる、いかにせんとはしちかうながめゐ給ひて、ちいさき火とり袖にひき入てたきしめ給へり、北のかた此けしきを見てにはかにおきあがり、

大なるひとりを取て、うしろによりて大將殿になげかけ給ふ、こまかなるはい大將殿の目はなに入て、物もおぼへ給はず、御ぞもやけとをりたれば、けふは玉かづらへ御文つかはし給ふ、

心さへ空にみだれし雪もよに
ひとりさゑつるかたしきの袖

もくの君といふ女ばうたち、

ひとりゐてこがるゝむねのくるしきに
思ひあまれるほのほとぞ見し

（大將殿）うきことを思ひさはげばさま〴〵に
くゆる煙ぞいとゞたちそふ

北のかたの御はらには女君ひとり、（十二三年、）おとこ君二人おはしける、父宮より中將、侍從、民部大輔など御むかへに參れり、（北の方の兄弟也、）おとこ君たちは殘しをき、姫君はつれて出給ふが、つねによりゐ給ふひがしおもてのはしらを、よその人にゆづる事のかなしければ、ひはだ色のかみに歌をかきて、はしらのわれたる所に、かうがいのさきにてをしいれ給ふ、

今はとて宿かれぬ共なれきつる
まきの柱は我をわするな

なれきとは思ひいづ共何により
立とまるべきまきの柱ぞ

（中將のおもと）あさけれどいしまの水はすみはてゝ
宿もる君やかげはなるべき

ともかくも岩間の水のむすぼゝれ
かげとむべくもおもほへぬ世を

螢兵部卿の宮より玉かづらへ、

み山木に羽うちかはしゐる鳥の
またなくねたき春にもあるかな

年かへりておとこたうかあり、（正月十四日せちゑ也、）玉かづらの内侍ははい賀に參り給へば、うへわたらせ給ひて、おぼしめす事のたがひたるをうらみの給はせて、御、

などてかくはひあひがたき紫を
心にふかくおもひそめけん

いかならん色ともしらぬ紫を
心してこそ人はそめけれ

大將玉かづらを我かたにむかへんとて、車よせたれば、御、

九重にかすみへだてば梅の花
たゞかばかりもにほひこじとや

玉かづらかばかりは風にもつてよ花のゑに
　　立ならぶべき匂なくとも
右近は玉かづらにつきて大將殿へ參る、二月雨ふりつれ〴〵なるに、おとゞ思召いでゝ右近がもとへ文つかはさる、
　　かきたれてのどけき比の春雨に
　　　ふるさといかに人を忍ぶや
玉かづらながめする軒のしづくに袖ぬれて
　　うたかた人をしのばざらめや
おとゞやまぶきのおもしろきを見給ふにつけても、
　思はずに井手の中道へだつとも
　　いはでぞこふるやまぶきの花
かものおほかるを見給ひて、源、
　おなじすにかへりしかりの見へぬかな
　　いか成人か手にゝぎるらん
大將見給ひて、御返しはかはりて、
　すがくれて數にもあらぬかりの子を
　　いづ方にかはとりかくすべき
十一月に若宮うみ給ふ、父おとゞは思ふやうなる御すぐせとよろこびかしづき給ふ、いか成おりにかあらん、殿上人あまた、夕霧も女御の御かたにものゝねしらべてあそび給ふに、あふみの君人々の中をおしわけて出ゐたり、あなうたてと引いるれば、さがなげにゝらみて、こゑいとさはやかにて、ゆふぎりをさして、あふみの君
　おきつ舟よるべ波ぢにたゞよはゞ
　　さほさしよらんとまりをしへよ
雲井の雁を戀給ふに、かなはずば我さしよらんとの心也、夕霧、
　よるべ波風のさはがす舟人も
　　思はぬかたにいそぢたひせず
　　○梅がえ源三十九才
しゆじやく院のみこ十三才にて、二月御かうぶりの事有べし、あかしの姫君十二才、入内ちかづきければ、二條院の御くらあけさせ、御よういどもいそぐ、香どもは昔今の取ならべ、御かた〴〵にくばり、たき物二くさづゝ合させ給ふ、おとゞは里方じゃう合せ給ふ、せんさいゐんよりるりのつぼに入て、松梅を引むすび、御文そへて參らせらる、
　花の香はちりにし枝にとまらねど

うつらん袖に淺くしまめや

源 花のゑにいとゞ心をしむるかな

人のとがめん香をばつゝめど

おとゞの二くさは、西のわた殿の下より出る、みぎはちかううづませ給へり、兵部卿はんじやにてよしあしをさだめ給ふ、さいゐんの里方、おとゞの侍從、むらさきのたいの上の梅花をまさる匂ひなしとめで給ふ、夏の上御かた花ちるかゑう、冬の御かたぐあかしのゑかう、百ぶのほう合させ給へり、姫君の御もぎのうちならしに、御こと共のしやうぞくしけるをとゞめさせ、兵部卿のみやびは、おとゞさうのこと、頭中將わごん、夕霧よこぶゑ、辨の少將ひやうしとりて、梅がゑうたひ給へり、

兵部卿 鶯のこゑにやいとゞあくがれん

心しめつる花のあたりに

源 色もかもうつるばかりに此春は

花さく宿をかれずもあらなん

頭中將 鶯のねぐらの枝もなびくまで

猶ふきとをせよはの笛竹

夕霧 心ありて風のよくめる花の木に

取あへぬまで吹やよるべき

辨少將 霞だに月と花とをへだてずば

ねぐらの鳥もほころびなまし

兵部卿宮かへり給ふに、御なをしたき物二つぼ奉らせ給ふ、宮、

花の香をゑならぬ袖にうつしても

ことあやまりといもやとがめん

源 めづらしとふるさと人も待ぞみん

花のにしきをきてかへる君

御もぎには秋このむ中宮の御かたに、おとゞわたり給ふ、紫の上も此ついでに中宮に御たいめんありて、ねの時に御もてまつれり、御母あかしの上は、かゝるおりにも見たてまつらぬを、いみじと思ひ給へり、春宮の御元服は二十日あまりになん、梅がゑの左大臣の三の君四月に參り給ふ、れいけいでんと聞ゆ、姫君の御でうどゞもさうしどもゝゑらせ給ふとて、さいしやう中將、兵衛のかみ、頭中將などにあらで、歌ゑをかゝせ給ふ、おとゞも御心のゆくかぎり、女ばう二三人にすみすらせて、女てをいみじくかきつくし給ふ、けうそくの上にさうし共をきて、筆のしりくは

へて思ひめぐらし給へるさま、あくよなくめでたし、内のおとゞは雲井の鴈の君さかりにとゝのをり、つれ〴〵としめりゐ給へば、人のねんごろなる時になびかまし物をと、くやしくおぼす、夕霧はおとゞのかくたはみ給へる御けしきを聞給へど、あまりにつらかりし御心をしづめてとおぼす、御文はたへずかよはし給へり、夕霧、

つれなさはうきよのつねに成行を
　わすれぬ人や人にことなる

かぎりとてわすれがたきをわするゝも
　こや世になびく心なるらん

○藤のうら葉（源三十九才）

やよひ二十日は大宮の御き日にて、内のおとゞふか草のごくらくじ（極楽寺）にまうで給ふ、夕霧は此おとゞのつらかりつるに見へ給はんも、心づかひせられてしづまりゐ給へば、内のおとゞ袖を引よせて、我冬年ものこりなきに、何とて心へだて給へるぞ、けふのみのりのゑをもたづね給はゞ、つみゆるし給へとうらみ給へば、夕霧は御けしきにはゞかりてといひなし給ふ、卯月ついたち比、庭の藤さきみだれたるに、おとどより夕霧へ、

我宿の藤の色こきたそがれに
　尋やはこぬ春のなごりを

（夕霧）中々に折やまどはん藤の花
　たそがれ時のたど〴〵しくば

夕霧わたり給へば、あるじの君たち七八人むかへに出て、いれたてまつれり、おとゞたいめんし給ひ、春の花みなうちすてゝちりぬるがうらめしき比、此花のひとり夏にさきかゝるほど、色もはたなつかしきゆかりしつべしとて打わらひ給ひ、みき参り、御あそびなどし給ふ、おとゞそらゑひして、藤のうら葉と打ずんじ給へば、頭中将一ふさおりて御さかつきにくはへ給ふ、内大臣、

紫にかごとはかけん藤の花
　まつより過てうれたけれ共

（夕霧）いくかへり露けき春を過しきて
　花のひもとくおりにあふらん

（頭中将）たをやめの袖にまがへる藤の花
　みる人からや色もまさらん

夜ふけ行程に、宰相の君（夕霧）そらなやみし給へば、御や

すみ所もとめよとて入給ふ、夕霧夢かとおぼへて、
女あさき名をいひながしける川口は
　いかゞもらしゝせきのあらがき
もりにけるくきたの關を川口の
　あさきにのみはおほせざらなん
ねくたれがみの御朝がほ見るかひあり、夕霧の御文
には、
とがむなよ忍びにしぼる手もたゆみ
　けふあらはるゝ袖の雫を
賀茂のみあれの御使はとうないしのすけなり、此出
立を夕霧はとひ給ひて、
何とかやけふのかざしよかつみつゝ
　おぼめくまでに成にけるかな
藤内侍 かざしてもかつたどらるゝ草のなは
　かつらを折し人やしるらん
入内には紫の上そひて參り給ひ、三日過してまうで
給ふ、今は明石の上たちかはりて參り給ふに、紫の
上とたいめんし給ひて、うと／＼しきへだてものこ
らずなつかしげに物がたりなどし給ふ、其秋おとゞ
は太上天皇になずらふ御位ゐ給ふ、内のおとゞは太
政大臣、夕霧は中納言也、雲井の雁のめのと、夕霧を
六位すぐせとつぶやきし事をおぼし出て、菊を給は
せて、夕霧、
あさみどり若ばの菊を露にても
　こき紫の色とかけきや
めのと 二葉より名だゝるその、菊なれば
　あさき色わく露もなかりき
夕霧は三條の殿のあれたるをしゆりしてわたり給へ
り、むかしのうば君をおぼしめし出て、
なれこそは岩もるあるじ見し人の
　行衛はしるや宿のましみづ
女君 なき人のかげだに見へずつれなくて
　心をやれるいさら井の水
父おとゞもおはしまして、ありつる手ならひどもの
ちりたるを御らんじて、
そのかみの老木はむべもくちぬらん
　うへし小松も苔おひにけり
夕霧のめのと いづれをもかげとぞ頼む二葉より
　ねさじかはせる松の末々
神無月二十日あまりに六條院に行幸あり、院もおは

しまして、馬ばのおとゞに左右のつかさの御馬ひきならべて、五月のせちにあやめわかれず、ひがしの院に舟どもうけて、うかひのおさめしならべておろさせ給へり、西のお前のもみぢ心ことなるを、中のかべをくづして中門をひらき、御らんぜさせ給ふ、暮かゝるほどにでん上のわらはべ舞つかうまつる、源、

色まさるまがきの菊もおり〳〵に
袖打かけし秋をこふらし

太政大臣 紫の雲にまがへる菊のはな
にごりなきよのほしかとぞ見る

院 秋をへてしぐれふりぬる里人も
かゝる紅葉の秋をこそ見ね

よのつねの紅葉とや見るいにしへの
ためしにひける庭のにしきを

源氏物語 巻之七八

わかな上　同下
かしは木　よこぶゑ
すゞむし　夕ぎり
みのり　まぼろし
にほふみや　こうばい
たけ川

螢兵部卿（源氏の御弟）─童宮
　　　　　　　　　　└同
　　　　　　　　　　└宮御方 母眞木柱の上也

紅梅大納言─大藏卿
　　　　　└修理大夫
　　　　　└今上 藤壺女御
　　　　　└女子

○わかな上 源三十九歳より四十一歳まで、

院のみかどは、御はゝきさきかくれさせ給ひて後、なや

みわたらせ給ひ、おこなひの道にとおぼしめす、宮だちは春宮女宮だち四どころの中に、女三の宮をたれにかあづけ給はんとあんじおぼしめし、御たから物てうどゝもをも皆此みやに參らせ給ふ、にし山に御堂つくらせ給はんの御いそぎ也、院は朱雀院の御事也、御母はこうきでんの大后也御なやみおもく成まさらせ給ひ、中納言の君夕霧參り給へば、よろこびおぼし召、此もてわづらひ給ふ姫宮を、此人にあはせ給はんかとさまぐ\おぼしめさるるに、螢兵部卿はをきかた後れたり、衛門のかみかしはぎはまだ年わかくてかろぐ\しけれとおぼす、たゞ六條院におやざまにゆづりをき給はんと御けしきあれば、源は院の御おこなひの後は、我も年の程をくれ奉らぬに、その御うしろみをば何とてうけ取侍らん、中中世をさらん時心ぐるしく、ほだしにならせ給ふべきとの給へば、院もさすがにことはりと思召うちゑみ給ひ、さらば内冷泉に奉らんとおぼす、年も暮にけり、此宮の御もぎのこしゆひには、おほきおとゞ源、大臣、だちかんだちめ、みこたち、内春宮いかめしきひゞき也、秋このむ中宮より御さうぞく、御ぐしあげのぐたてまつらせ給ふ、

さしながら昔を今につたふれば
　玉のをぐしぞかみさびにける

院　さしつぎに見る物にもが萬代を
　つげのをぐしもかみさぶるまで

三日過して御ぐしおろし給ふ、おぼろのかんの君、思ひしみ給へるわかれのたへがたくも有かなとて、御心みだれ給へり、山の座主あざり三人、ほうぶくなど奉る、女宮たち女御かうゐおとこ女なき悲しむ、六條院源も參給ふに、此内親王女三の御事をあづけ奉らばやと宣へば、我も行さきみじかくて、いかならんとはおぼしながら、あづかり給ふべき由の給ふ、源四十に成給へば、御賀の事正月二十三日ねのひなるに、大將の北の方玉かづらよりわかな參らせ給ふ、おさなき君たち二人つれて參らせ給へり、屛風、かべしろ、御ちしき、四十まいしとね、けうそく、みづし二よろひ、御ころも箱四つ、夏冬のさうぞく、かうご、藥のはこ、御すゞりゆづる、つきかゝげのはこきよらをつくし給へり、

玉かづら　わかばさすのべの小松を引つれて
　もとのいはねをいのるけふかな

源 小松原すゑのよはひにひかれてや
　野べの若菜も年をつむべき
かんだちめあまた、紫の上の父式部卿宮、ひげくろの大將、わかなのあつ物まいる、こものよそゑだおりびつ物よそち、おまへにはぢんのかけばん四御つき、院の御なやみによりかく人はめさず、笛はおほきおとゞ、わごんゑもんのかみ、きんは兵部卿、おまへひかせ給ふ、御をくり物有、二月十日女三宮六條院へ渡り給ふ、
紫の上 めにちかくうつればかはる世の中を
　行末とをくたのみけるかな
源 命こそたゆ共たへめさだめなき
　よのつねならぬ中のちぎりを
源は夜ごとに女三へおはします、中務中將などいふ女ばうだち、あまりなる御思ひやりかなとて、源のあかつきかへらせたまひ、かうしたゝき給へど、そらねしてあけやらず、やゝまたせ奉りてあけたり、
女三へ源 中道をへだつる程はなけれ共
　心みだるゝけさのあは雪
女三のめのと はかなくてうはの空にぞきへぬべき
　風にたゞよふ春のあは雪
二月に院のみかどさがの御寺にうつろひ給ふ、院より紫の上へ、
そむきにし此世にのこる心こそ
　入山みちのほだしなりけれ
紫の上 そむく世のうしろめたくばさりがたき
　ほだしをしゐてかけなはなれそ
おぼろのかんの君は二條の宮にすみ給ふ、おとゞひそかにおはして、
年月を中にへだてゝあふ坂の
　さもせきがたくおつる涙か
涙のみせきとめがたき淸水にて
　行あふ道ははやくたへにき
日さしいづるほどに出給ふとて、源、
しづみしもわすれぬ物をこりずまに
　身をなげつべき宿の藤なみ
身をなげんふちもまことの淵ならで
　かけしやさらにこりずまのなみ
夏のころより、あかしの姫君たゞならずなやみ給ふ、明石の上今は御身にそひて出入給ふ、紫の上もひめ

君へわたり給ふ、つゐでに女三の宮にはたいめんし給ふ、たいの上手ならひに、

身にちかく秋やきぬらんみるまゝに
青ばの山もうつろひにけり

源 水鳥の青ばゝ色もかはらぬを
萩のしたこそけしきことなれ

姫君は中の戸あけて女三にもたいめんし給ふ、女三の御母と紫上の父式部卿は兄弟なり、

あかしのあま君 おひの波かひある浦に立出て
しほたるゝあまを誰かとがめん

姫君 しほたるゝあまを波路のしるべにて
尋も見ばやうらのとまやを

あかしの上 世をすてゝあかしの浦にすむ人も
心のやみははるけしもせじ

三月十日の程おとこ君生れ給ふ、紫の上わか君をいだき給ひて、あかしの上は御ゆどのゝあつかひなどをつかうまつり給ふ、七日には内より御うぶやしなひみこだち、大臣われも/\ときよらをつくし給へり、紫の上手づからあまがつをつくり給ふ、あかしの入道つたへきゝて、今は此世のさかひをゆきはなれんと、家をば寺になし、此國のおくに入のかよはぬ山あるをとくこしらへをき、此月の十四日に入給ふ也、あかしの上へは文を參らせ給へり、其文にはわか宮のよろこびと、昔姫のうまれたまはんとしの二月の夢のさま也、われは此思ひかなひぬれば、九ぼんのうへのゝぞみもうたがひなし、

ひかり出る曉ちかく成にけり
今ぞ見しよの夢がたりする

我をばへんげのものとおぼしすてゝ、くどくの事をなし給へとて、ぐはん文どもはぢんのはこにふうじこめて奉れり、三月の空うらゝなる日、六條院に兵部卿の宮ゑもんのかみ參り、御物がたりし給ふ、大將夕はうしとらの町に人々あまたまりもてあそびてときこしめし、こなたにとあればきんだちみな來れり、しんでんの東おもてにて、頭の辨、兵衛のすけ、大夫の君、大將、かしは木のゑもんおり給ひて、花のかげにさまよひ給ふに、ゑもんのかみのあしもとにならぶ人なかりけり、大將は花の雪のやうにふりければ、見あげてゑだをすこし折て、みはしの中のしなにゐ給ふ、女三のおまへのみすのつま/\すきかげみゆ

るに、からねこのちいさきを、大きなるねこのをひつづきてはしりいづ、つなゝがくてみすのそばあらはに引あげられたるに、うちぎすがたにて立給へる人女三也、こうばいにやこきうすきあまたかさなり、御ぐしのすそふさやかに、七八寸ばかりぞあまり給へる、ねこのいたくなけば見かへりたまへるかほ、わかくうつくしの人やと見へたり、かんの君ねこをまねきよせてかきいだきたれば、かうばしくてらうたげになくもなつかし、

大将夕霧とかんの君かしは木ひとつ車にて物がたりし給ふ、

かしは木いかなれば花にこづたふ鶯の
　　櫻をわきてねぐらとはせぬ

夕霧み山木にねぐらさだむるはこ鳥も
　　いかでか花の色にあくべき

かんの君むねいたければ、小侍従へ文やり給ふ、

　よそにみておらぬ歎きはしげゝれど
　　なごり戀しき花の夕かげ

これを女三に見せければ、みすのつまおぼしあはせらる、御返事は小侍従、

　今さらに色にないでそ山櫻
　　をよばぬゑだに心かけきと

○わかな下　源四十一オより四十七まで、

でん上のゝりゆみ六條院に有べしとて、左右の大将すけだち殿上人參り給ふ、ゑもんのかみはおとゞを見奉るにおそろしく成て、彼ねこをだにゑてしがな、心のなぐさめにもなづけんと思ふに物ぐるおし、ゑもんのかみとうぐうに參り、ことをゝしへ奉るとて、六條の院のねここそおかしけれと申さるゝ、春宮はねこをらうたくし給へば、女三より參らせらる、ゑもんのかみ此ねこを見つけ、是はしばしあづかり申さんとて取てかへり、よるひるかきなでゝ、

　戀わぶる人のかたみとたならせば
　　なれよ何とて鳴ね成らん

冷泉院御くらゐにつかせ給ひて、十八年にならせ給ふ、日ごろをくなやませ給ふ事ありて、俄におりゐさせ給へり、ひげくろの左大將右大臣に成給ふ、あかしの御はらの一のみやとうぐふに立給ふ、源四十六オ、春宮の女御の御いのりのため、住吉へまうで給ふ、女御殿たいの上ひとつ車也、次のにはあかしの上、尼君、かんだちめ、まひ人、御馬、ずい人、ことねり、又なき見も

の也、源、

たれか又心をしりて住吉の
　神よをへたるまつにことゝふ

あまの君　すみのゑをいけるかひある渚とは
　年ふるあまもけふやしるらん

あかしの上　昔こそまづわすられね住吉の
　神のしるしを見るにつけても

紫の上　すみの江の松に夜ぶかくをく霜は
　神のかけたるゆふかづらかも

女御殿　神人のてに取もたるさか木ばに
　ゆふかげそふるふかき夜の霜

たいの上の中つかさ　はふりこがゆふうちまがひ置霜は
　げにいちじるき神のしるしか

春宮の御さしつきの女一の宮を、たいの上とりわきてかしづき給ふ、夏の御かた花ちるは御まごあつかひをうらやみて、大将のないしはゝの君をむかへてかしづき給ふ、

「入道のみかど五十にたり給ふ年、二月十日あまり、源よりわかな奉り給ふ、まづ御こゝろみに女三の宮のしんでんにみなわたし給へり、たいの上、女御殿、あかしの上、女三の御かたにもわらはべつくろはせ給ふ、あかしの上びは、紫の上わごん、女御殿さうのこと、女三はきん、大将ひやうし取てしやうがし給へば、源も時々扇うちならし給ふ、女三のかたを大将のぞき給へば、ちいさくうつくしげにて、きさらぎ中の十日ばかりの、青柳のしだりはじめたるらん心ちして、鶯の羽風にもみだるべき御かたち也、廿四才、女御の君は藤の花の夏にかゝりて、ならぶ花なき朝ぼらけの心ちす、なやましくて御琴をばをしやりて、けうそくにかゝり給へり、むらさきの上は、櫻にたとへてもなをすぐれたるけはひ也、三十七才、あかしの上は、五月まつ花たちばなの、花もみもぐしてをしおれるかほりおぼゆ、源は其夜は女三へわたらせ給へり、あかつきがたより紫の上むねをなやみたまひ、くるしげにてはかなきくだ物をだに參らず、おきあがり給ふ事なくて日ごろへぬ、こゝろみに所をかへ給はんとて、二條院にわたし給ひ、御すほうなどさま〴〵也、たのみすくなくよはり給へば、いかさまにせんとまどひて、源は女三の御かたへもわたり給はず、人々はみな二條院につどひ參りて、六條院は火をけ

ちたるやう也、其比かしは木のゑもんのかみは中納言になり、女三の宮のあねの二の宮をゑたれど心にもつかず、小侍従といふかたらひ人は、女三のめのとのむすめ也、其うへめのとのあねは、かしは木のめのとなれば、小侍従をよびてかたり給へり、日々にせめられてさるべきおりをうかゞひあはせて、かしは木忍びておはしたり、卯月十日あまりにて、人々はあずのみそぎ見んとて物ぬひけさうし、おまへのかたはしめやか也、女三は何心なくおほとのごもり給へるに、かしは木をいれたれば、女三は源のおはしたるとおぼすにあらぬ人也、あさましくあせもながれていだきおろし、よろづかたらふに、思ひしづむる心もうせはてゝ、いづくへもつれ行かくして、わが身よになきものになし給へと迄思しみだれ給へり、夜もあけゆけば、よべ入し戸口はあきながら、有物をいはんとし給へど、わなゝかれてわか〱し、かしは木、

おきてゆく雲もしられぬ明くれに
いづくの露のかゝる袖なり

女三明くれの空にうき身はきゑなゝん
夢なりけりと見てもやむべく

玉しゐは身をはなれてとまりゐる心ちす、祭の日は物みんとて君だちそゝのかし給へど、なやましとて出給はず、かしは木、

くやしくもつみをかしけるあふひ草
神のゆるせるかざしならぬに

女二のみやもなまめかしけれど、女三にはをよばざりけるよとおぼへて、

もろかづらおちばを何にひろひけん
名はむつまじきかざしなれども

おとゞ女三のなやましけると聞ておはしたるに、紫の上たへ入給ふとて人参りたればかへり給ひ、いみじきぐはんども立て、けんじやの僧をめしていのりかぢし給へり、月ごろあらはれざる物のけ、ちいさきわらはにうつりてのゝしる、六條のみやす所のをんりやう也、源はあさましくおぼして、此わらはの手をとらへひきすへて、まことにその人か狐などのたはぶれたるかとあれば、わらは、

我身こそあらぬさまなれそれながら
そらおぼれする君は君也

此ひまに紫の上はことかたにわたし給ふ、紫の上御

ぐしおろし給はんとて、いたゞきかはりはさみて、五かいをうけさせ給ひ、日ごとにほけきやう一ぶづゝくやうし給ふ、五月ははれ〴〵しからぬそらのけしきにさはやぎ給はで、六月に時々御ぐしもたげ給ふ、女三はやがてれいのさまにもおはせず、なやましくあをみそこなはれ給ふ、くわいにん也、

きゑとまる程やはふべきたまさかに
蓮の露のかゝるばかりを

源 ちぎりをかん此世ならでも蓮ばに
玉ちる露の心へだつな

おとゞ女三へわたり給へり、女三は見へ給へるもはづかしくて、御いらへも聞へ給はず、おとゞあやしく見給ひ、おとなびたる人めして、御なやみのさまとひ給ふ、れいならぬさまにわづらひ給ふよし申せば、年頃へぬる人々にだにさる事のなきに、ふしぎの事とおぼす、二日三日おはします、ゑもんのかみきゝておぼつかなさに文おこせたり、しのびて女三にみせ奉る、おとゞ入給へばよくもかくし給はで、しとねのしたにはさみをき給へり、ひるのおましにうちふして、夕さり二條院へかへり給はんときこゑ給ふに、ひぐらしのなきければ、女三、

夕露に袖ぬらせとや日ぐらしの
鳴をきく〳〵おきてゆくらん

源 まつ里もいかゞ聞らんかた〴〵に
心さはがす日ぐらしのこゑ

おぼしやすらひとまり給ひて、朝すゞみの程にわたり給はんとて、よべの扇をおとしておましのあたりたづね給ふに、しとねのすこしまよひたるより、あさみどりのうすやうの文見ゆるを、とりて御らんずるに、おとこの手也、二かさねにこま〴〵とかきたるは、まぎるゝ事なくゑもんのかみの手なりと見給ふ、日をへだてゝ女三の宮のくはいにんを思ひはなれ給はでおとゞわたり給ひても、彼文見給ひたり共の給はず、

そのころおぼろのかんの君、あまにならせ給ふときゝて、おとゞより、

あまのよをよそにきかめやすまの浦に
もしほたれしも誰ならなくに

あま舟にいかゞは思ひをくれけん
あかしの浦にあさりせし君

山のみかどの御賀、十一月には女三の宮なやみ給へば、女二のみや參り給ふ、十二月十日餘り、女三よりあるべしとて、舞のうちならしに、紫の上も六條院へかへらせ給ふ、女御は里におはします、おとこみこうみ給ふ、匂宮也、右大臣殿の北のかた玉かづら也、わたり給ふ、ゑもんのかみはわづらふよし申されければ、父おとゞなどか參り給はぬぞといさめ給ふに、くるしと思ふ思ふ參れり、れいのごとくみすの内にいれ給ひ、大將ともろともにわらはべの舞のよういくはへ給へと、なつかしげに源の給へば、うれしとは思ひながら、ことずくなにて立給へり、ひげくろの四郎君、夕霧の三郎君、兵部卿の宮の君たち、二人はまんざいらく、夕霧のないしのすけ、はらの二郎君、式部卿の宮の兵衞のかみの御子わうしやう、右のおほひ殿の三郎君れうわう、大將殿の太郎君らくそんたいへいらくきしゆんらくまひ給ふ、ゑもんのかみはさかづきのめぐりくるもかしらいたく覺ゆれば、けしきばかりにまぎらはすを、源見とがめ給ひて、たびたびしゐ給へば、心ちかきみだれてかへり給ふ、氣のぼりぬるにやいたくわらひ給ふ、おとゞの母北のかたさはぎてこなたにわたし給へり、

○かしは木 源四十八才春より秋まで

ゑもんのかみなやみおこたらで年もかへりぬ、父おとゞ北のかたおぼしなげく、すこしやまひのひまありとて、人々立のき給へるに、女三へ文參らせらる、

今はとてもへん煙もむすぼゝれ
たへぬ思ひのなをやのこらん

かづらき山よりおこなひ人めして、あらゝかにだらによむをきゝて、つみふかき身にや、だらにのこゑのたかきはおそろしうて、いよいよしぬべく覺ゆるとて、立のきて侍從とかたらひゐ給ふ、此事をおとゞにしらせ奉りて、世にながらへん事もまばゆく、玉しゐは身にもかへらずとないつわらひつかたり給ふ、女三もけふかあすかの心ちして、返事をもし給はぬを、侍從御すゝりなどゝりまかなひせめければ、しぶしぶにかき給ふ、

立そひてきへやしなましうきことを
思ひみだるゝけぶりくらべに

行衞なき空の煙となりぬとも
思ふあたりを立はゝなれじ

女三はその夜はなやみて、日さしあがる程におとこ君生れ給ふ、かほる也、ならはぬ事のおそろしうおぼされ、御ゆなども參らず、ゑいきとまるまじき心ちし侍るを、あまになりて、もしいきとまる共又なくなるとも、つみをうしなふ事にもやと、つねの御けしきよりおとなびての給ふ、いのりにさぶらふ中に、たうとき僧をめしいれて、御ぐしおろさせ給ふ、後夜のかぢにものゝけ出ていふやう、ひとり紫の事をばとりかへしつるとおぼされしが、ねたくてこゝにさぶらひつる、今はかへらんとて打わらふ、ゑもんのかみはあまに成給ふと聞て、いとどきゑいるやうにたのむかたなくなれば、内にもきこし召、にはかに權大納言になさせ給ふ、大將は心のへだてなければ、かゝる今はのきざみ何をかかくしはてん、六條院にいさゝかのあやまりありて、おそろしく心ぼそく成てやまひつきたり、我なからんあとに、一條の宮には事にふれて立より給へば、いはまほしき事はおほかるべけれど、心地せんかたなく見へて、あはのきゆるやうにてうせ給ふ、やよひの程女三の宮におとゞわたり給ひて、わか君をいだきて、

たが世にか種はまきしと人とはば
　いかゞいはねの松はこたへん

一條の宮は人げすくなくつれ〴〵なるに、夕霧おはしてみやす所たいめんし給ふ、女二の宮御母也、女二はかしは木の後家也、

大將 時しあればかはらぬ色に匂ひけり
　かたゑに枯しやどのさくらも

みやす所 此春は柳のめにぞ玉はぬく
　さきちる花の行衛しらねば

それよりちじの大とのに參り給へば、かしは木の父おとゞ

木の下のしづくにぬれてさかさまに
　かすみの衣きたる春かな

夕大將 なき人も思はざりけん打すてゝ
　夕べのかすみ君きたれとは

かしは木弟 うらめしや霞の衣たれきよと
　春よりさきに花のちりけん

卯月ばかりに大將一條の宮へわたり給ひて、

ことならばならしの枝にならざらん
　はもりの神のゆるし有きと

みすのへだてあるこそうらめしけれとて、なげしにゐ給へり、

女二の宮かしは木にはもりの神はまさず共
人ならすべき宿のこずゑか
〇よこぶゑ　源四十九才、かほる二才
山のみかど朱より女三へたかうなどころなど參る、
朱世をわかれ入なん道はをくるとも
おなじ所を君もたづねよ
女三うき世にはあらぬところの床しくて
そむく山路に思ひこそいれ
若君はうつくしくしろくそびやかに、柳をけづりたらんやう也、かみは露草にて色どりたるやうにて、口つきまみのびらかに彼人のかたちよく思ひ出、こかはのおひ出たるにくひあてんとて、たかうなをにぎりてくひかなぐり給ふ、
うきふしも忘れずながらくれ竹の
子はすてがたき物にぞ有ける
秋の夕べの物あはれなるに、大將一條の宮女二へおはしたり、かしは木の常に引給ひし琴をすこし引給ひて、みすの許に押寄給へど、女二は引給はず、大將、
ことに出ていはぬをいふにまさるとは
人にはぢたるけしきをぞみる

女二ふかき夜のあはれ計はきゝわけど
ことより外はゑやはいひける
御をくり物に笛をそへて奉るとの給へば、あはれおほくてふきさして出給ふ、御休所、
露しげきむぐらの宿に古への
秋にかはらぬ蟲のこゑかな
よこ笛のしらべはことにかはらぬを
むなしく成しねこそつきせね
女二の宮に大將心がけ給ふを雲井の雁きゝて、夜ふかし給ふもにくゝて、かへり入給ふも聞ながらねたるやうにて物し給ふ、大將少ねいり給へる夢に、ゑもんのかみ彼笛をとりて、
笛竹に吹よる風のことならば
すゑの代ながきねにつたへなん
此ことはりとはんと思ふに、若君ねをびれてなき給ふ、めのとおきさはぎちをあまし給へるに、母上あぶら火よせて打まきちらしなどし給ふが、大將殿のいまめかしき月めでに夜をふかし、かうしをもあげ置給へば、物のけ入來りとかこち給へば、大將うちわらひて、我かうしをあげずば、道なくて物のけは入こざ

らましとの給ふ、大將殿六條院へ參り給へば、にほふ宮三の宮大將にいだかれ女御へおはします、二の宮あそびゐ給ひて、まろも大將にいだかれんとの給ふ、にほふ宮あが大將なりとてひかへ給へり、

〇すゞむし　源五十才、夕霧三十才

夏比はちすの花盛りに、入道の姫宮女三御じぶつくやうし給ふ、おとゞの御こゝろざしにて、にしきのはたほつけのまんだらかけて、しろがねの花がめ、あみだぶつぼさつをの〳〵びやくだんして作り給へり、あみだ經はおとゞかゝせ給ふ、

源はちす葉を同じうてなと契り置て
露の別るゝけふぞかなしき

女三へだてなくはちすの宿を契りても
君が心やすまじとすらん

八月十五夜の月おかしき夕暮に、おとゞわたり給ひ、むしのねを問給ふやうにて、猶思ひはなれぬさまに宣へば、入道の宮は佛の前にねんずし給ふが、すゞ蟲のなきければ、女三、

大かたの秋をばうしとしりにしを
ふりすてがたきすゞ蟲のこゑ

源心もて草のやどりをいとへ共
猶すゞむしのこゑぞふりせぬ

きんの御ことひき給ふ、宮女三は御すゞひきおこたりて、御琴に心いれてかきならし給へり、螢兵部卿大將殿上人も參給て、御かはらけ參る程に、冷泉院より御使あり、

御雲の上をかけはなれたるすみかにも
物わすれせぬ秋のよの月

源月影はおなじ雲ゐに見へながら
我やどからの秋ぞかはれる

〇夕霧　源五十才

夕霧の大將は、一條の宮女二を人めには昔をわすれぬけしきにみせて、ねんごろにとぶらひ給ふ、みやす所小野にやま里もち給へるにわたり給へば、大將殿より御車御ともの人々など參らせ給へり、八月十日計の程、律師にかたるべき事有、其ついでに小野の御休所わづらひ給ふをも、とひ給はんとて出給ふ、

夕霧山里のあはれをそふる夕霧に
立いでん空もなき心ちして

女二山がつのまがきをこめてたつ霧も

心そらなる人はとゞめず

又かゝる事は有がたからんとおぼして、こよひはとまり給へり、つねにはあだめきたるけしきも見へ給はぬに、うたてもあるかなと女二はおぼせども、大將殿人のかげにつきてまぎれ入給へり、いとむくつけくてゐざり出給ふを引とゞめ、思ふ事をきこゑ給ふ、宮あはれけき(ママ)なき給ひて、

我のみやうき世をしれるためしにて
ぬれそふ袖の名をくたすべき

夕霧大かたは我ぬれ衣をきせず共
くちにし袖の名やはかくるゝ

大との（かしは木の事也）のきゝ給はん事よ、院朱のいかに聞召おぼされん、みやす所のしり給はぬもわびしければ、あかさで出給へとやらひ給ふ、

夕霧おぎはらや軒ばの露にそぼちつゝ
八重たつ霧をわけて行べき

女二わけゆかん草ばの露をかごとにて
猶ぬれぎぬをかけんとや思ふ

六條院東のおとゞ（花ちる里）にかへり給ふ、夏冬ときよらにしをかせ給へるにぬぎかへ給ふ、小野へ御ふみ奉れ給へど、女二はみやす所の事もありがほにおぼしめされんとて、御らんじもいれねば、人々ひろげて見せたてまつる、夕霧、

玉しゐをつれなき袖にとどめ置て
わが心からまどはるゝかな

みやす所の御ものゝけのかぢし給ふ、りつし參て、此大將殿はいつよりかよひ給ふぞ、ほんさいつよくものし給へば、女二のゐをし給はじと、かしらをふりていへり、みやす所少將の君（女ばうたち）をよびてとひ給へば、有のまゝにかたる、みやす所女二をよびて、其文の返事し給へ、いかに心きよくおぼす共、人はさは思ふまじ、心うつくしくいひかはし給へといひ給ふに、又大將殿より御文參る、

せくからにあさくぞ見へん山川の
ながれての名をつゝみはてずば

みやす所より大將殿への御返事に、女二はなやましければとかき給ひて、

をみなへししほるゝ野べをいづくとて
一夜ばかりの宿をかりけん

大將殿は三條殿におはします、よひ過る程に小野よ

り御返事參る、雲井のかり見つけ給ひてうしろよりとり給ふ、こはいかにし給ふぞ、六條の東の院（花ちる）の御文なり、けさ風おこりてなやみ給ふをとひ參らせたる返事也といつはり給へど、かへし給はず、大將殿は此文のうちたしかに見給はねば、かへし給へ、けふは我もなやましければ、又文を參らせんにとこひ給へど、とかくまぎらはし給ふに、日も暮にけり、おましのおくにさしはさみ給へるを見つけ給ひて、御返事に、夕霧、

秋の野の草のしげみを分しかど
かりねの枕むすびやはせし

小野には此御返事のをそきに、いか成御心ぞとあさましう心もくだけて又いたくなやみ給ふ、女二はおぼへぬ人にうちとけたりし有さまを見にし事、口おしうおぼす、かくさま〴〵なきまどひ給ふに、大將殿より又御文參りけるを、御休所きゝ給ひて、扨はこよひもおはすまじき故なりと心うく、なにゝことばをつくしけんとおぼしなげく程に、やがてたへ入給ふ、宮はをくれじとなげきふし給へり、六條院ちじの大との山のみかどより御文あり、大將殿わたり給ひて、おいのやまとのかみのこりの事共したゝめつかうまつる、女二はたいめんし給はで大將殿かへらせ給ふ、日々にかきつくし給へど、女二はとりても御らんせず、大將殿の北の方は、女二の宮との御中をおぼしわけがたくて、

哀をもいかにとひてかなぐさめん
あるや戀しきなきやかなしき

九月十日あまりに小野へわたり給て、少將を召て物語し給ふ、

里とをみ小野のしの原分きても
我も鹿こそ聲もおしまね

少將 藤衣露しげき秋の山人は
鹿の鳴ねにねをぞそへつる

けふもたいめんし給はでかへり給ふ、みちすがら一條の宮を見給へば、人げなく月のみすみたり、

見し人のかげすみはてぬ池水に
ひとりやどもる秋の夜の月

三條殿へかへり給ひて、小野へふみやり給ふ、

いつとかはおどろかすべき明ぬよの
夢さめてとかいひし一こと

朝夕になくねをたつるをの山は
たへぬ涙やをとなしの瀧

女二の手ならひにかき給ふを、少將がふみにまきこめてかへし奉る、女二は世をのがれ小野にすみはてんとおぼす、一條の草しげうあれたるを、やまとのかみめしてみがきたるやうにしつらひなし給ふ、かべしろ屛風きちやうまで大將殿より奉らせ給へり、わたり給ふ日は大將殿おはしまして、小野へ御車奉れ給ふ、女二はのり給はじとあれど、さ五少將御ぞ共奉りかへたり、

女二のぼりにしみねの煙に立まじり
思はぬかたになびかずもがな

人々いそぎ立て、くしのはこ、手箱、からびつ、ふくろやうのものまでさきに立てはこびければ、ひとりとまり給はんやうもなくて、なく／＼のり給ふ、御はかしに經ばこそへたるに、女二、

戀しさのなぐさめがたきかたみにて
涙にくもる玉のはこかな

一條の宮の東のたいの南おもてを、夕霧の御かたにしつらひてすみつきがほにおはす、宮はぬりごめにおましゝかせ、内よりさしておほとのごもる、つらしと思ひあかして、夕霧、

うらみわびむねあきがたき冬のよに
又さしまさるせきの岩かど

なく／＼出て六條院におはしたり、女君めも見あはせ給はず、御ぞ引やり給へば、女君つねに我を鬼と宣へばなりはてんとの給ふに、此思こそおそろしくもあらねとたはぶれ給へば、

女君詞 何事ぞしに給へ我もしなん、見ればにくしきけはあひさうなし、見捨てしなんはうしろめたしといひ給ふ、おかしきさまもまさりてかくなぐさめ給ふ、

雲井雁 なるゝ身をうらむるよりは松島の
あまの衣にたちやかへまし

夕霧 松島のあまのぬれ衣なれぬとて
ぬぎかへつてふ名をたゝめやは

女二へわたり給へど、又其夜もたいめんし給はず、たばかりてぬりごめの北の口よりいれ奉る、女はあさましう心づきなしとおぼしたり、三條の君は大とのへわたり給ひ、れいのやうにもかへり給はず、大將殿おどろきたび／＼せうそこあれど御返もなし、又お

とゞきゝ給ひて、女二へ御使たて給ふ、
契りあれや君を心にとゞめ置て
哀と思ひうらめしときく
女二宮 何ゆへか世に數ならぬ身一つを
うしとも思ひつらしともきく
藤ないしのすけこれをきゝて、我を雲井の鴈のゆるさぬものに思へるに、かくあなづりにくき事出きけるとうれしくて、雲井の鴈へ文をたてまつる、
數ならば身にしられまし世のうさを
人のためにもぬらす袖かな
雲井 人の世のうきを哀と見しか共
身にかへんとはおもはざりしを
○みのり 源五十一才
むらさきの上わづらひ給ひし後、ほいあるさまになりて、おこなひをまぎれなくとの給へど、おとゞ源ゆるし給はず、年ごろの御願にてかゝせ給ふ法花經千部、二條院にて供養し給ふ、花ちる里あかしの上などもわたり給へり、やよひ十日也、
紫の上 惜からぬ此身ながらもかぎりにて
たきゞつきなんことのかなしき
たきゞこる思ひはけふを始にて
此世にねがふ法ぞはるけき
むらさきのうへより花ちる里へ、
たへぬべきみのりながらぞ頼まるゝ
世々にとむすぶ中の契りを
花ちる むすびをく契りはたへじ大かたの
殘りすくなきみのりなりとも
夏になりては、あつさにきゑ入給ふべきおりもおほかり、にほふ宮をすへ奉りて、人のきかぬまに、我紫なく成たらば思ひ出給はんやとの給へば、匂の詞 うへよりも宮御母よりも母こそいとおしく覺ゆれとて、目をすりてまぎらはし給ふ、母とは紫の上の事をいへる也、おとなになり給ひては、こゝにすませ給ひて、こうばいと櫻とは、花のおり〳〵は佛にも奉給へと紫の上 仰ければ、にほふ 打うなづきて御かほをまぼりゐ給ふ、秋になりてむらさきの上、
置とみる程ぞはかなきともすれば
風にみだるゝ萩のうは露
源 やゝもせばきゑをあらそふ露の世に
をくれさきだつ程へずもがな

中宮 秋風にしばしとまらぬ露の世を
　　誰か草ばのうへとのみ見ん

宮中宮は御手をとらへてなく〳〵見奉り給ふに、きゑ行心ちなれば物のけとうたがひ、夜ひとよさま〴〵の事をつくし給へど、かひもなくあけはつる程に、きゑはて給ふ、とのゝ内さらに物おぼへたるはなし、院源はましておぼししづめんかたもなし、大将も涙にくれて目も見へ給はず、かぎりある事なればけぶりにのぼり給へるも、あへなくそらをあゆむ心ちして、

大將、
いにしへの秋の夕べの戀しきに
　　今はと見へしあけくれの夢

ちじのおとゞ いにしへの秋さへ今の心ちして
　　ぬれにし袖に露ぞをきそふ

源 露けさは昔今ともおもほへず
　　大かたあきの世こそつらけれ

秋このむ かれはつる野べをうしとやなき人の
　　秋に心をとゞめざりけん

源返し のぼりにし雲ゐながらもかへりみよ
　　わが秋はてぬつねならぬ世に

○まぼろし 源五十二オ

春のひかりを見給ふにつけても、くれまどひたるやうにて、人々參り給へど、心ちなやましとてみすの内にのみおはします、兵部卿わたり給へし、

源 我やどは花もてはやす人もなし
　　なにゝか春のたづねきぬらん

宮 香をとめてきつるかひなく大かたの
　　花のたよりといひやなすべき

おもひ人だちのかたへもわたり給はず、源、
うき世にはゆきゝへなんと思ひつゝ
　　思ひの外になをぞほどふる

三の宮ははゝのの給ひしとて、こうばいをとりわきうしろみ給ふ、源、
うへて見し花のあるじもなき宿に
　　しらずがほにてきぬるうぐひす

わか宮、まろが櫻はさきたり、木のめぐりに帳をたてたらば、風吹よらじと、かしこうの給ふかほいとうつくし、

源 今はとてあらしやはてんなき人の
　　心とゞめしはるのかきねを

あかしの御かたにわたり給ひ、むかし物がたりし給ひて、よふけてかへり給ふ、御文に、

なく／＼もかへりにしかなかりの世は
いづくもつゐのとこよならぬに

あかしの上 鴈がゐしなはしろ水のたへしより
うつりし花のかげをだに見ず

花ちる 夏衣たちかへてけるけふ計
ふるき思ひもすゞみやはせぬ

源 羽衣のうすきにかはるけふよりは
うつせみの世といとゞかなしき

まつりの日、中將の君、

さもこそはよるべの水にみくさゐめ
けふのかざしよ名さへわするゝ

源 大かたは思ひすてゝし世なれども
あふひはなをやつみをかすべき

なき人をしのぶるよひの村雨に
ぬれてやきつる山ほとゝぎす

大將 時鳥君につてなんふる里の
花たちばなは今ぞさかりと

日ぐらしのなきければ、源、

つれ／＼と我なきくらす夏の日を
かごとがましきむしのこゑかな

よるをしる螢をみても戀しきに
時ぞともなき思ひ成けり

七夕のあふせは雲のよそにみて
わかれの庭に露ぞをきそふ

はての法事八月ついたち比、中將の君、

君こふる涙はきはもなき物を
けふをば何のはてといふらん

源 人こふる我身もすゑに成ゆけば
のこりおほかる涙なりけり

九月九日 もろ共におきゐし菊の朝露も
ひとり袂にかゝる秋かな

雁のなきわたりければ、

大空にかよふまぼろし夢にだに
見へこぬ玉の行衛たづねよ

五せちなどいひていまめかしきに、

宮人はとよのあかりにいそぐけふ
日かげもしらでくらしつるかな

むらさきの上の御手なる文共を見給ひて、

しでの山こゑにし人をしたふとて
　あとを見つゝも猶まどふかな
かきつめてみるもかひなしもしほ草
　おなじ雲ゐの煙とをなれ
春までの命もしらず雪のうちに
　色づく梅をけふかざしてん
御佛名の導師、
ちよの春みるべき花といのりをきて
　我身ぞ雪と共にふりぬる
源物思ふと過る月日もしらぬ間に
　年も我世もけふやつきぬる
○にほふ宮（かほる十四才より十九二十才まで、まぼろしと此巻の間九年、）
源かくれ給ひて後、にほふ宮かほる二どころなん、きよらなる名をとり給へり、花ちる里は二條院にすみ給ふ、女三の宮は三條の宮におはします、六條院うしとら町に一條の女二の宮をわたし、夕霧は三條殿と十五日づゝかよひすみ給ふ、かほる十四歳にて侍従になり、其秋中將にならせ給ふ、のちかしは木の事ほの聞給ひて、おぼつかなくおぼして、
おぼつかな誰にとはましいかにして
　はじめも果もしらぬ我身は
此かほる中將は御身のかうばしさ、をひ風は百ぶの外もかほるべきこゝちしける、兵部卿の宮うらやみ給ひて、春は梅秋はをみなへし、萩菊ふぢばかま、われもかうなどわざとめきてこのましうし給ふ
○こうばい（かほる二十才）
紅梅の大納言には姫君二人あり、北のかたうせ給ひて、姉君は春宮に參給ふ、螢兵部卿に姫君一人有、兵部卿うせ給ひて後、此北のかたへ大納言かよひ給て、わか君出き給へり、此子三人を一所にそだてをき給へるが、ある時に大納言こうばいのゑだをわか君にもたせて、にほふ宮へ奉り給ふは、中君を參らせんのこゝろ也、
心ありて風のにほはすその、梅に
　まづ鶯のとはずや有べき
匂宮返し　花のかにさそはれぬべき身なりせば
　風の便をすぐさましやは
中宮よりも宮の君のかたちよき聞へあれば、しのびやかに宮の君に奉れとの給ふ、
大納言　もとつかのにほへる君が袖ふれば

花もゑならぬ名をやちらさん
匂宮花のかをにほはす宿にとめゆかば
色にめづとや人のとがめん
大納言はいもうとの君を参らせばやのこゝろなり、

○たけ川

玉かづらのないしのかみの御はらに、おとこ二三人女二人おはしける、ひげくろうせ給ひて後、心がけ給ふ人おほかりける、夕霧の子藏人の少將ねんごろに聞へて、御母雲井の鴈より文を参らせらる、其比かほるは十四五ばかりなるを、むこにと玉かづらはおぼしたり、此姫君を冷泉院よりのたまはする、かほるの御かたちにゝる人もなくおはしければ、御母玉かづらも女ばうたちも、姫君にあはせ奉らばやと思ふに、かほる参り給てみすのまへにゐ給へば、さいしやうの君、

折て見ばいとゞ匂ひもまさるやと
すこし色めけ梅のはつ花

よそにてはもぎ木なりとや定むらん
下に匂へる梅のはつ花

二十日あまりの此梅の花さかりなるに、かほるおはしたり、ないしすがたなる人中門にたてりゐたり、藏人の少將也、引つれ入給ひて、かほるわごんかきならし給へり、少將さきくさうたひ、あるじの侍從(玉かづらの子也)竹川うたふ、少將はみな人かほるに心よせけると思ひて、

人はみな花に心をうつすらん
ひとりぞまどふ春の夜のやみ

(女ばう衆)折からや哀もしらん梅のはな
たゞ香ばかりにうつりしもせじ

あしたにかほる侍從より藤侍從のもとへ、

竹川のはしうち出し一ふしに
ふかき心のそこはしりきや

たけ川に夜をふかさじといそぎしも
いか成ふしを思ひをかまし

姫君たち櫻をかけ物にて碁をうち給へり、藏人の少將侍從の御ざうしにきて、らうの戸よりのぞく、姫君、

櫻ゆへ風に心のさはぐかな
おもひくまなき花とみる〱

御かたのさいしやうの君、

咲とみてかつはちりぬる花なれば
まくるをふかきうらみともせず

中の君 風にちる事はよのつね枝ながら
うつろふ花をたゞにしもみじ

大夫の君 心ありて池のみぎはにおつる花
あはと成ても我かたによれ

大ぞらの風にちれ共櫻花
をのが物とぞかきつめて見る

櫻花にほひあまたにちらさじと
おほふばかりの袖は有きや

少將はあね君をと思へど、院に參り給へば、御母玉かづらは中君ならばとおぼす、

つれなくて過る月日をかぞへつゝ
物うらめしきくれの春かな

少將はらたちて中將のおもとにあひて、

いでやなぞ數ならぬ身にかなはぬは
人にまけじの心なりけり

わりなしやつよきによらんかちまけは
心ひとつにいかゞまかする

哀とて手をゆるせかしいき死を
君にまかする我身とならば

少將 花をみて春はくらしつけふよりや
しげきなげきの下にまどはん

玉かづら けふぞしる空をながむるけしきにて
花に心をうつしけりとも

九日に院へ參り給ふ、少將の文を姫君に見せければ、姫君、

哀てふつねならぬ世の一ことも
いか成人にかくるものぞは

少將 いける世のしには心にまかせねば
きかでやゝまん君が一こと

かほる侍從藤侍從とつれて、彼おまへの五ゑうにふぢのさきかゝりたるを見て、

手にかくる物にしあらば藤の花
松よりまさる色を見ましや

紫の色はかよへどふぢの花
心にゑこそまかせざりけれ

源氏物語 巻之九十　宇治十帖

はしひめ　しゐがもと
あげまき　さわらび
やどり木　あづま屋
うきふね　かげろふ
手ならひ　夢のうきはし
以上

うばそくの宮は きりつぼの みかどの 第八の宮也、母は左大臣のむすめ也、冷泉院は第十の宮なり、春宮にまし〳〵し時、大后の御孫冷泉院に引こされ給へる春宮を曲なくおぼしめして、此八の宮をとりたて給へるに、六條院にをされ給ひて、八の宮と御中あしく成て、京の家さへやけゝれば、宇治へ引こもり給へるなり、

○はし姫（かほる十九才より二十一才まで、）

八の宮には御むすめ二人おはします、北の方は大臣のむすめにてましますが、かうぜ給ひければ、宮は世をもすて給はんとおぼせど、此おさなき人々をゆづる人なくて年月を過し給ふに、宮の内物さびしく、めしつかへの人々もちり〴〵になりて、めのとも見すて奉れば、父宮はぐゝみ給ひ、御ねんじゆのひま〳〵には、姫君だちに琴をゝしへ、碁うちへんつぎなどして、心ばせを見奉り給ふ、

池の水鳥を見給ひて、

打すてゝつがひさりにし水鳥の　かりの此世にたちをくれけん

姫君　いかでかくす立けるぞと思ふにも　うき水鳥のちぎりをぞしる

なく〳〵も羽うちきする君なくば　我ぞすもりになるべかりける

姫君はびは、いもうとの君琴、宮は經をもたせ給ひて、しやうがし給ふ、此宮やけたりけるに、宇治に山里の有けるにうつろひ給ふに、御すみがたづね參る人もなく、今は山がつばかり參りつかうまつる、此山里にあじやりのすみけるに、ほうもんをよみならひ給へり、此あざり冷泉院にも參りて、八の宮のかしこくおはしまし、出家の心ざしは有ながら、姫君たちを

思ひすて給はで、ぞくながらおこなひの御心ふかきよしかたり申給ふ、かほる中將御前にさぶらひて、我もあじやりに物ならひ給ふべきよしかたらひ給ふ、みかどあはれに思召て、八の宮へ、

世をいとふ心は山にかよへども
　八重だつ雲を君やへだつる

八の宮　跡たへて心すむとはなけれ共
　世をうぢ山に宿をこそかれ

かほる中將たびたびおはしまして、ほうもんきゝ給ふみちの程にて、かほる、

山おろしにたへぬ木葉の露よりも
　あやなくもろき我涙かな

ちかくなる程にびはのねさうのことたへだへ聞ゆ、八の宮はあじやりの寺にて、七日の程おこなひ給ふ御留すにて、とのゐ人にあひ給ひて、垣のひまより見給へば、月おかしきほどにすだれすこしまきあげ、ひとりははしらに居かくれて、びはをまへにおきて、雲がくれたりつる月のいとあかくさし出たれば、扇ならでこれしても月はまねきつべかりけりとて、ばちをあげさしのぞきたるかほいみじくらうたげ也、今ひとりはことのうへにいり日をかへす事こそ有けれ、さまことにも思ひ及び給ふ心かなとて、打わらひたるけはひ、今すこしをもりかによしづきたり、かほるはみすのまへにゐ給ひ、うちつけにあさき心にては、かやうにたづね參るまじとまめやかに仰ければ、辨の君出て（年よりたる女也、）世の中にすみ給ふ數にもあらぬを、かくねんごろなる御心さじのほどは思ひ給ふれど、わかき御心に聞へにくきにやといふ、此辨はかしは木のめのとのむすめにて、昔の物がたりども申たり、かほるはあやしきとはずがたりもきかまほしけれど、人めしげし、此のこりは又こそとてたち給ふ、かほる、

朝ぼらけ家ぢも見へずたづねこし
　まきのお山は霧こめてけり

姫君　雲のゐるみねのかけぢを秋霧の
　いとゞへだつる比にもあるかな

かほる　橋姫の心をくみてたかせさす
　さほのしづくに袖ぞぬれぬる

姫君　さしかへるうぢの川おさ朝夕の
　しづくや袖をくだしはつらん

京より御むかへ參れば、霧にぬれたる御ぞどもは、とのゐ人にとらせてかへり給ふ、又の日ひわりごやうの物、山の僧にはきぬわたけさ衣などつかはさる、かほるにほふ宮へおはして、宇治の事共かたり給ふ、十月五六日の比かほるうぢへ參り給ふ、八の宮まちよろこび、あざりもしやうじてきなどいはせ給ふ、其夜は辨をめしてかしは木の事とひ給ふ、ちいさくをしまきたるほうぐ共の、かびくさきをふくろに入てたてまつる、かへり給て此ふくろを見給へば、かの御名のふうつきたり、あくるもおそろしけれど見給ふ、彼御手にて五六枚に鳥のあとのやうにゝて、かしは木、

目の前に此世をそむく君よりも
よそに別るゝ玉ぞかなしき

命あらばそれ共見まし人しれぬ
岩ねにとめし松のおひすゑ

○しゐがもと かほる二十二才二十三才、

きさらぎ二十日の程に、にほふ宮初瀬にまうで給ふ、かんだちめでん上人つかうまつり給ふ、かほる御むかへに參給ひて、宇治のわたりにてまうけさせ給ふ、宮はこゝにやすらひ給はんの御心にてあそび給へり、かほるはかゝるたよりに八の宮へ參らんとおぼせど、ひとりこぎ出ん舟わたりもかろらかなりとおぼすに、八の宮より、

山風に霞ふきとくこゑはあれど
へだてゝみゆるをちの白波

御返し我せんとて、にほふ宮、

をちこちのみぎはに波はへだつ共
猶ふきかよへうぢの川風

にほふもかほるも參り給ふ、舟さしやり給ふ程、かんすいらくあそびてらうにさしよせ人々おり給ふ、姫君たちをおもひやり、櫻の枝をうへわらはしてつかはすとて、にほふ宮、

山櫻にほふあたりに尋きて
おなじかざしを折てけるかな

返し中君 かざしおる花のたよりに山がつの
かきねを過ぬ春のたび人

にほふの御むかへに、おほせ事にて藤大納言參り給へり、大君二十五才中君二十三才八の宮はをもくつゝしみたまふべき年にて物心ぼそし、七月にかほるわたり給へば、八宮の詞此君たちを我なからんのち見すて給ふなど聞

へ給へば、かほる詞かはらぬこゝろざしをしらせ給はんと
の給ふ、宮、
我なくて草の庵はあれぬとも
此一ことはかれじとぞ思ふ
いかならん世にかゝれせんながき世の
ちぎりむすべる草の庵は
八の宮はしづかなる所にて念佛せんとて山へ入給
ふ、姫君たち心ぼそくなひつわらひつ過し給ふ、けふ
は三昧もはてぬらんと待給ふに、人參りてけさより
八の宮はわづらはせ給ふと也、御ぞども綿あつくし
ていそぎ參らせらる、二日三日おり給はず、そなたの
しとみあげて見ゐ給へるに、人參りて此夜なかばか
りにうせ給ひぬるとなく〳〵申す、あさましく涙も
いづちいにけん、たゞうつぶし給へり、なき人に成給
ふかたちをだに、今一たび見奉らぬをなげき給ふ、か
ほる中納言聞給ひて、御とぶらひこまやか也、九月の
比匂宮より、
をじかなく秋の山里いかならん
小萩が露のかゝるゆふぐれ
大君 涙のみ霧ふたがれる山里は
まがきに鹿ぞもろごゑに鳴
にほふ 朝霧に友まどはせる鹿のねを
大かたにやは哀ともきく
御いみはてゝかほるわたり給ひ、辨をめして人づて
にはことばもつゞき侍らずとあれば、大君すこしゐ
ざり出給へり、
かほる 色かはるあさぢをみても墨染に
やつるゝ袖を思ひこそやれ
大君 色かはる袖をば露のやどりにて
我身ぞさらにをき所なき
秋霧のはれぬ雲井にいとゞしく
此世をかりといひしらすらん
年のくれには、あじやりのむろよりすみたてまつれ
給へば、わたぬきなどやり給ふ、
大君 君なくて岩のかけ道たへしより
松の雪をも何とかは見る
中君 奥山の松ばにつもる雪とだに
きゝにし人を思はましかば
かほるおはして、匂宮の御返事はいづかたにかとと
ひ給へば、

大君雪ふかき山のかけ橋君ならで
又ふみかよふあとを見ぬかな
かほるつらゝとぢ駒ふみしだく山川を
しるべしがてらまづやわたらん
宮のおはせしかたあけさせ給へば、佛のかざりみゆる、
かほる立よらんかげと頼みししゐがもと
むなしきとこに成にけるかな
年かへりて、ひじりの坊よりせりわらびなど奉れり、
君がおる嶺のわらびと見ましかば
しられやせまし春のしるしも
雪ふかきみぎはのこせりたが爲に
つみかはやさん親なしにして
かほる匂宮よりおり過さずとぶらひ聞へ給ふ、匂、
つてに見し宿の櫻を此春は
かすみへだてずおりてかざゝん
中君いづことか尋ておらん墨染に
かすみこめたるやどのさくらを
かくつれなきけしきのみ見ゆれば、にほふ宮はかほるをせめ給へり、そのとしつねよりもあつさをわぶるに、川づらゆかしくてかほるわたり給ふ、

○あげまき かほる二十三才、

姫君たち物かなしく、宮の御はての事つとめ給はんとて、かほるもあざりも參り給ふ、みやうかうの糸引みだり、むすびあげたるを見給ひて、かほる、
あげまきにながき契りをむすびこめ
おなじ所によりもあはなん
大君ぬきもあへずもろき涙の玉の緒に
ながきちぎりをいかゞむすばん
かほる我身は扨をき、匂宮の事をまめやかにの給ふ、大君は中君をくち木になしはてぬやうにとおぼしめす、辨をめし出てかほる此事をかたらひ給ふ、かほるの御心の有がたうあはれなれば、かけはなれがたくて、大君たいめんし給ひ、佛のおはする中の戸あけて、しめ〴〵とかたり給ふが、心ちなやましければ、あかつき又きこへんとて入給ふを、屛風をしあけて入給ひ、かたはらなる木丁を佛の御かたにへだてゝ、かりそめにそひふし給へり、つねなき世の御物がたりに、時々いらへ給へるさま見所おほくめやすし、あけがたになれば、しやうじあけてもろ共に見給ふ、

かほる山里のあはれしらるゝこゑ〴〵に
取あつめたる朝ぼらけかな

女君鳥のねも聞へぬ山と思ひしを
よのうき事はたづねきにけり

大君は中君を人なみに見なしたらんこそうれしからめとおぼす、九月の比かほる又おはしたり、れいのやうにもたいめんし給はず、辨をしてせめ給へば、大君詞かほるのさしもうらみふかくば中君をし出ん、見そめ給ひてはあさくはおもひ給はじとて、中君にかくといさめ給へば、中君の詞かゝる心細きなぐさめには、朝夕大君を見奉るより、いかなるにかとあれば、げにといとおしくていひさし給ふ、大君詞かほるの昔を思ひ給ふ心ざしふかくば、中君を同じ事に思ひ給へかしとの給はすれば、かほる今さらゑ思ひあらたむまじ、匂宮のうらみもまさりなん、中君をばにほふにあはせ給はんと也、すべてこと葉おほければ、にくゝ心づきなしとて、大君中君つねのやうにおほとのごもれり、辨にたばからせ、よひ過る程にかほる入給ふ、大君聞付ておきて出給ふ、中君は何心なくね入給ふに、かほるはこれをもゑ思ひはなつまじき心ちして、なつかしきさまにかたらひて、大君のつらきにならひたまふなと、のちせをちぎりて出給ふ、かほるの文には、

おなじゑにわきてそめける山姫に
いづれかふかき色とゝはゞや

大君山姫のそむる心はわかねども
うつろふかたやふかきなるらん

にほふ宮かほるをうらみて、

女郎花さけるおほ野をふせぎつゝ
心せばくやしめをゆふらん

かほる霧ふかきあしたの原の女郎花
心をよせて見る人ぞなき

かほるはおやかたになりて、中君の事をまめやかにかたり、二十六日に宇治へさそひおはして、ちかきみさうの家に匂宮をおろし奉り、かほるばかりおはしたり、大君はかほるの中君にしみ給へりとうれしくて、かたり給へり、辨をめして夕さり中君のかたへみちびけとたばかり給ふ、まことにはにほふ君をいれんとたくみおぼさるゝ也、大君には一ことといふべき事有とて、しやうじのなかより御袖をとらへてうら

み給へば、いとうたて、何に聞いれつらんとつらければ、かほるはいはんかたなくて、さらばかくへだてながらもかたらはんと、山鳥の心ちしてあかしかね給へり、かほる、

しるべせし我やかへりてまどふべき
　心もゆかぬあけくれの道

かた〴〵にくらす心を思ひやれ
　人やりならぬ道にまどはゞ

にほふ宮はかほるのをしへのまゝに、戸口によりて扇をならし給へば、辨参りてみちびき入奉る、六條院へかへり給ひて御文には、にほふ、

よのつねに思ひやすらん露ふかき
　道のさゝ原行てきつるも

あね君にみせ給へば、此御返し中君にかゝせて、使にほそなが一かさね三重かさねのはかまたびたり、三日にあたる夜もちゐ参る、中納言殿かほるよりみそびつきぬあやなど取そへて、

さよ衣きてなれきとはいはず共
　かごとばかりはかけずしもあらじ

大君へだてなき心ばかりはかよふ共
　なれし袖とはかけじとぞ思ふ

にほふ宮の御ありきを、御母中宮あかしのせいし給へば、かほるにかたりあはせて、かほるは内へ参りにほふはうちへおはしけり、夜ふけておはしたるは、いかゞおろそかにおぼへ給はんとうちなびき給へり、にほふは中宮のせいし給ふ事などかたらせ給ひ、思ひながらとだゑあらん、いか成にかとおぼすな、やがて京へわたしたてまつらんとの給ふ、にほふ、

中たへん物ならなくに橋姫の
　かたしく袖やよはにぬらさん

中君たへせじの我頼みにやうぢ橋の
　はるけき中を待わたるべき

朝氣のすがた御うつり香なども、人しれず物あはれなり、九月十日の程ににほふかほるひとつ車にて宇治へおはす、大君うれしとおぼせど、かほるは其夜は遠山鳥にてあかせり、十月ついたち比あじろもおかしき程ならん、紅葉も御らんぜんとて、殿上人あまた宰相中將など御供にて、にほふ宮わたらせ給へり、まうけの物かほるより奉れり、船にて文つくり紅葉をかざし、かいせいらくなどあそび給ふに、中宮の仰事に

てゑもんのかみ御使に參れり、かやうの御ありきはかろ〴〵しとて、又でん上人あまた參るに、物のけうもなくなりて、姫君へは御文をつかはさる、さいしやうの中將は何心なく、古宮の紅葉をよそながらみて、

いつぞやの花の盛に一め見し
　木のもとさへや秋はさびしき

かほる 櫻こそ思ひしらすれ咲にほふ
　花も紅葉もつねならぬ世を

ゑもん いづこより秋はゆきけん山里の
　もみぢのかげは過うきものを

宮大夫 見し人もなき山里の岩かげに
　心ながくもはへるくずかな

秋はてゝさびしさまさる木のもとを
　吹な過しそみねの松風

かしこには心まうけしつる人々口おしと思へり、にほふ宮のかろ〴〵しき御ありきなりとて、右のおほいどのゝ六の君をむかへ給はんと也、かほるは大君の中君をとりもち給ひしに、あまりことやうにもてなし、くやしくもあるか、などいづれをも我ものに見たてまつらんに、とがむる人も有まじと思ひみだれ給ふ、

「にほふ宮いもうとの女一の宮へ參り給ひて、御繪などかき、在五が物がたりのいもうとにきんをしへたるところ、いかゞおぼすらんとて、

わか草のねみん物とは思はねど
　むすぼゝれたる心ちこそすれ

にほふ宮より宇治へ御文あり、

ながむるはおなじ雲井をいかなれば
　おぼつかなさをそふる時雨は

あられふるみ山の里はあさ夕に
　ながむる空もかきくらしつゝ

大君をもくなやみ給ふをきゝて、かほるおはしたり、しるしある僧たちあまたしやうじて、御すほうはじめ給ふ、大君の手をとらへて、などか聲をだにきかせ給はぬとあれば、ものいふがくるしきとて、いきの下によはりゆき給ふ、

霜さゆるみぎはの千鳥打わびて
　なくねかなしき朝ぼらけかな

中君 あかつきの霜うちはらひ鳴ちどり
　物思ふ人の心をやしる

かほるはかくこもりゐ給ふに、とよのあかりはけふぞかしと思ひやりて、

かきくもり日影もみへぬおく山に
心をくらす比にもあるかな

かくておはするをたのみにみな思ひたり、いよ〳〵あはれに、かいなゝどもほそうよはげなる物からしろううつくし、中君の事をかほるのたまへば、御袖を引なをして、此中君をおなじ事とおぼして立より給へ、是のみうらめしとの給ふ、あじやりめしいれさまざまにかぢ奉らせ給ふ、たゞものゝかれ行やうにてきゑはて給ふ、中君をくれじとまどへるさまことはりにあはれ也、ともし火ちかくて見給ふに、たゞね給へるやうにてうつくしげにふし給へり、とかくれいのさほうどもするぞあさましかりける、人々の色くろうきかへたるを見て、かほる、

くれなゐにおつる涙もかひなきは
かたみの色をそめぬなりけり

同

をくれじと空行月をしたふかな
つゐにすむべき此世ならねば

かほるは大君のいひしやうにて、中君を見るべきものをとくやしくおぼす、

戀わびてしぬる藥のゆかしきに
雪の山にや跡をけなまし

にほふ宮のとだゑを、中君はつらしとおぼすに、わたり給へり、物ごしにて日ごろのおこたり聞へ給ふ、中君、

きしかたを思ひ出るもはかなきを
行末かけてなにたのむらん

行末をみじかき物と思ひなば
めのまへにだにそむかざらなん

〇さわらび　かほる二十四才

中君は春のひかりを見給ふにもたゞ夢のやうなり、あじやりのもとよりわらびつく〳〵したてまつるとて、

君にとてあまたの春をつみしかば
つねをわすれぬはつわらび也

此春は誰にか見せんなき人の
かたみにつめるみねのさわらび

かほる中納言はにほふ兵部卿へ參り給へば、宮はさうのことをかきならし、梅をめでおはする、

見る人の心にかよふ花なれや
　色には出ずしたににほへる
かほる 見る人にかごとよせける花のゑに
　心してこそおるべかりけれ
中君を京へむかへんとかたり給ふ、御ぶくもかぎりあれば、ぬぎかへ給ふとて、中君、
　はかなしや霞の衣たちしまに
　花のひもとくおりもきにけり
京へわたり給はんとてのあした、かほる宇治へおはしたり、我こそは人よりさきにと思ひしに、我あやまちなりとくやしく思ひつゞけ給ふ、
中君 見る人もあらしにまよふ山里に
　昔おぼゆる花のかぞする
袖ふれし梅はかはらぬにほひにて
　ねごめうつろふ宿やことなる
又かやうにきこゆるべきなどいひて立給ひぬ、
辨 さきにたつ涙の川に身をなげば
　人にをくれぬ命ならまし
かほる 身をなげん涙の川にしづみても
　戀しきせゞにわすれしもせじ

辨は宇治にのこりゐる也、
辨 人はみないそぎたつめる袖のうらに
　ひとりもしほをたるゝあまかな
中君 しほたるゝあまの衣にことなれや
　うきたるなみにぬるゝわがそで
大夫の君 有ふればうれしきせにもあひけるを
　身をうぢ川になげてましかば
そひとり 過にしが戀しき事もわすれねど
　けふはたまづもゆく心かな
中君 ながむれば山より出て行月も
　世にすみわびて山にこそいれ
よひ過ておはしつきたり、めもかゞやくとのづくりのみつばよつばなる中に引いれて、宮は御くるまのもとによらせ給ひておろしたてまつり給ふ、
しなるてやにほの水うみこぐ舟の
　まほならねどもあひ見しものを
○やどり木 かほる二十三才より二十五才まで、
明石の中宮には宮たちあまたおり、故左大臣殿の御むすめ藤つぼの女御には、女二の宮一ところおはします、此ひと宮十四のとしの夏の比、御母女御うせ給

ふ、みかど藤つぼにて御碁うたせ給ひて、かほる中納言を召て花をかけ物にてまけさせ給ふ、一ゑだゆるさせ給ふは、女二を參らせんの御心也、かほる、

よのつねのかきねに匂ふ花ならば
心のまゝにおりて見ましを

御 霜にあへずかれにしその〻菊なれど
のこりの色はあせずもあるかな

かほるは中宮の御はらの女一の宮ならばとおぼす、そのとしもくれぬ、

夕霧右大臣の六の君を、八月の比にほふ宮に參らせんのいそぎ也、二十三才、二條のたいの御かた中君の事也、聞給ひて、今さら山里にかへらんも人わらはれなるべし、かたちをかへなんとさま〴〵におぼす、五月ばかりよりくはいにん也、かほる聞給ひて中君をいとおしとおぼす、御なやみとひ給はん、けふは内に參るべければ、日たけぬさきにとて、あさがほをもたまひて出給ふ、にほふ宮はよべより内に參り給ふ、かほる、

けさのまの色にやめでんをく露の
きへぬにかゝる花と見る〳〵

中君のなやみ給へるかたちゆかしくて、かほる、

よそへてぞみるべかりける白露の
契りをきにしあさがほの花

中君 きへぬ間にかれぬる花のはかなさよ
をくるゝ露は猶ぞまされる

右の大いどのより頭中將してにほふ宮へ、

大そらに月だにやどる我宿に
まづよひ過て見へぬ君かな

にほふ宮の出給ふを、中君うらめしと見給ひて、

山里の松のかげにもかくばかり
身にしむ秋の風はなかりき

にほふ宮は右の大いどの夕霧よりかへらせ給ひて、文奉り給ふ、たいの御かたに入給ふに、こまやかなる事はゑいひ出給はず、よし我身になして思ひめぐらし給へ、身を心のまゝにも成がたし、もし春宮にたち給はゞ、人にまさりたる心ざしのほどしらせたてまつるべきなどの給ふ所に、六の君より御返事參る、まゝ母の宮女二の宮の御手なり、

をみなへししほれぞまさる朝露の
いかにをきけるなごりなるらん

中君は日ぐらしのこゑに山里こひしくて、

大かたにきかまし物を日ぐらしの
こゑうらめしき秋のくれかな

こよひはまだふけぬに、にほふは六の君へ出給ふ、三日のいはゐにてかほるもおはします、左衛門督宰相頭中將さかづきさゝげて、二たび三たび參り給ふ、かほるはおせちの君のつぼねにおかし給ふ、

打わたし世にゆるしなきせき川を
みなれそめけん名こそおしけれ

ふかゝらずうへはみゆれどせき川の
したのかよひはたゆるものかは

にほふ宮今は二條院に心やすくもわたり給はず、六條院に年ごろ有しやうにおはしまして、くるれば六の君へわたり給ふ、中君をちどをに思ひあまりてかほるへ御文奉給ふ、又の日かほるわたり給ふ、あやしかりし世の事共かたり給ふつゐでに、かほる過にしかたのくやしさをわするゝおりなくなどほのめかし、やう〳〵くらく成ゆけば、中君心ちなやましきに、又こそとて入給ふすだれの下より御袖をとらへ給ふ、女はうしと思ふに物もいはれず引入給へば、それにつきてそひふし給へり、ちかくさぶらふ女ばう二人ばかりあれど、うとからず聞へかはし給ふ御中なれば、しりぞきゐたり、あかつきかへり給ひて御文あり、

いたづらにわけつる道の露しげみ
むかしおぼゆる秋のそらかな

中君をにほふ宮のすてさせ給はゞ、我を頼もし人にし給ふべきなど思ひめぐらし、けふは宮の中君へわたり給ふときくもむねつぶれ給へり、にほふ宮かほるのうつり香のしみ給へるをとゞめ給ふに、もてはなれぬ事なればくるしとおぼすけしきをみて、さればよと御心さはぎけり、にほふ宮、

又人になれぬるか袖のうつりがを
我身にしめてうらみつるかな

見なれぬる中の衣と頼みしを
かばかりにてやかけはなれなん

かほるは中君のめしつかへの人々のけはひ、なへばみたるを思ひやりて、女のしやうぞくあまた、みづからの御れうにも、くれなゐのうちめしろさあや、はかまのこしひきむすびくはへて、

むすびける契りことなる下ひもを
たゞ一すぢにうらみやはする

かやうに誰かはうしろみ給はんと、人々よろこびいふなり、

しめやかなるゆふつかた、かほる中君へおはしたり、なやましとて人して聞へ給ふ、いみじくつらくてなやませ給ふおりは、しらぬ僧くすしなどもちかく參りよるに、かやうに人づてにの給ふは、かひなしとうらみ給へば、すこしゐざり出てたいめんし給ふ、すだれの下より木丁をすこしをしいれて、ちかづきより給ふがいとくるしけれど、少將といひし女ばうをよびてむねをおさへよとの給ふ、かほるは彼山里に寺などはなく共、昔のかたみに人がたをつくり、繪にもかきとめておこなひ侍らんとの給へば、あはれなる御ねがひかな、いつぞやこゝへきたりし人はあづまやの君の事也、うきふねも同じ人也、昔の人によく似たり、これをなり共御らんぜんやときこゑ給へば、かほるよろこびてはやくいひつたへ給へとせめ給ふ、九月二十日比辨の尼をめして昔をかたり、彼人がたの事もかたり出給へば、それは故北のかたうせ給ひし比、中將の君とて上らうの有しに、八の宮しのびて物の給ひしが、女子をうみたるに、宮はおぼしめしこりてひじりにならせ給ひたり、其後中將はじゆりやうのつまになりて、とをきゐ中にすみて、此春のぼり中君へたづね參りたりときく、中將の君は北のかたの御めいにておはしませば、御はかに參りたきよしいひこされし、さやうのついでにとひきゝ侍らんとかたる、かほる、

やどり木と思ひ出ずば木のもとの
　たびねもいかでさびしからまし

辨の君 あれはつるくち木のもとをやどり木と
　思ひをきけるほどのかなしき

中君のかたにほふ宮おはして、

ほに出ぬ物思ふらししのすゝき
　まねくたもとの露しげくして

中君 秋はつる野べのけしきもしの薄
　ほのめく風につけてこそしれ

二月ついたち比權大納言になり、右大將かけ給ふ、其あかつき中君おとこ君うみ給ふ、大將殿よりうぶやしなひどんじき五十具、碁手のせにわうばんついがさね三十、ちごの御ぞ五かさね、むつき宮のおまへにもせんかうのおしき、たかつきにてふずくまいらせ給へり、七日の夜は中宮より內より、九日には大と

のよりまいる也、四月には女二をかほるにわたし給ふ、あすとての日藤つぼにみかどわたらせ給ひ、藤のゑんせさせ給ふ、

（かほる）すべらぎのかざしにおるとふぢのはな
　　をよばぬゑだに袖かけてけり

よろづよをかけてにほはんはななれば
　　けふをもわかぬいろとこそ見れ

（誰共なし）君がためおれるかざしはむらさきの
　　雲におとらぬ花のけしきか

よのつねの色ともみへず雲井まで
　　たちのぼりたる藤なみのはな

かものまつり過て、かほる宇治へおはしたり、くち木のもとを見給ひおはするに、女ぐるまひとつあらきおとこ物あまたをひてはしよりわたりくる、ゐなかびたるものかなと見給ふに、此宮をさしてくる也、こゑゆがみたるもの、ひたちのせんじ殿の姫君（あづまやの事）はつせにまうでゝたゞ今もどり給ふなりとて車よりおろし入たり、かしらつきやうだいほそやかに、よくむかしの人ににたり、屏風のかみよりのぞきてかほる見給ふ、辨をよびてうれしくもきゝあひたり、いひしらせ給へとの給へり、母君はさはる事ありて、姫君（あづまや）ひとり參り給へば、かさねていひ參らせんといふ、かほる、

かほどりのこゑもきゝにしかよふやと
　　しげみをわけてけふぞたづぬる

○あづま屋

ひたちのかみの子ども、もとはら此はら五六人ある中に、此姫君をおもひへだつるをつらしとおぼして、母君はいかでおもたゞしくと明暮思へり、左近の少將といひし人ねんごろにいひわたり、八月ばかりに參らせんとちぎりをきしを、ひたちのかみがまゝむすめときゝて、中だちをよびて思ふにたがひたるといへり、中だちもまことのむすめと思ひてこそ申つれとて、ひたちに此よしいへば、ひたちよろこびてさらばまことのむすめを參らすべし、たから物もつくして參らせんといふ、少將きゝてひなびたる事をいふよとは思ひながら、ちぎりしくれにおはしそめたり、北の方は人しれず此よういせしに、あやしくたがひたれば、物もいはれずめのとゝ二人なげきて、此姫君を中君へあづけをけり、かほるも中君へおはしま

して、れいのなつかしげにて、
かほる見し人のかたしろならば身にそへて
戀しき人のなで物にせん
姫君にかはりて中君返し、
みそぎ川せゞに出さんなで物を
身にそふかげと誰か頼まん
何事もかたらひをきてかへり給ふ、にほふ宮は中宮よりかへり給ひて、君たちと碁うちゐんふたぎなどしてあそび給ふ、夕つかた女君はかみをあらひおはす程に、西のかたにわらはの見へたるをのぞき給へば、姫君あやしとおぼして、あふぎをさしかくし給ふ、にほふ宮とらへ給てたにかとの給ふ、大夫がむすめの右近參りて、くらきにさぐりより、こゝにおとこのそひふし給へるといふ、にほふ宮心しづかにかたらひ出給ふ、女はおそろしき夢のさめたる心して、あせにひたしてふし給へり、めのとひたち殿へかへりて、母北の方に此よしかたれば、むねつぶれて夕つかた參りて、こゝには心やすくとてこそあづけ置しに、よからぬ事出きなん、又も參らせ侍らんとてつれてかへり、三でうあたりにちいさき家まうけて、しのびておはせよ、ともかくもつかうまつらんといひをきて、みづからはかへり給ふ、彼ひたちがむこのせうしやうはせんざいをながめ、むすめはまだ何心なくそひふしたり、北のかた、
しめゆひし小萩がうへもまよはぬに
いか成露にうつる下葉ぞ
少將 みやぎ野の小萩がもとゝしらませば
露も心をわかずもあらまし
三條の姫君より母のかたへ、
ひたぶるにうれしからまし世の中に
あらぬ所とおもはましかば
北の方 うきよにはあらぬ所をもとめても
君がさかりをみるよしもがな
大將秋のころ宇治の御だうつくりたてたるときゝておはしたり、かほる、
たへはてぬ淸水になどかなき人の
おもかげをだにとゞめざりけん
辨のあまのかたに立より物語し給ふつゐでに、姫君の事とひ給ふ、此ごろ物いみとて、三條の小家にかくしをき給へりときゝたりとかたれり、さあらばあま

君京に行て、こゝにつれてきたれとのたまふ、辨三條へいきてこのよしいひければ、姫君もめのともめでたしと見をきし人の御さまなれば、うれしくおぼす、よひ過る程に宇治より人參れりとて門をたゝく、あけさせたればかほるわたらせ給へり、月ごろ思ひあまることもいひ聞へさせんとての給ふ、めのとは母君に聞へさせんといふ、みなみのひさしにおましつくろいて入奉る、雨ふりくれば、

かほる さしとむるむぐらやしげきあづまやの
　　あまり程ふる雨そゝぎかな

程もなうあけぬる心ちして、おほどれたるこゑして、きゝもしらぬなのりしてゆくもきこゆる、物いたゞきたるはおにのやうなりと見給ふもおかし、くるまふたつつまどによせさせ、かきのせ給ふ、あま君侍從は一つ車に乘たり、又宇治へ、

かたみぞとみるに付ても朝露の
　　所せきまでぬるゝ袖かな

母君の思給はん事もなげかしけれと、あはれにかたらひ給ふに、なぐさめており給ふ、女ははづかしくてしろき扇をまさぐりそひふしたり、辨、

やどり木は色かはりぬる秋なれど
　　昔おぼへてすめる月かな

かほる 里の名も昔ながらに見し人の
　　おもがはりせるねやの月影

○うきふね かほる二十六才、正月三月

にほふ宮は彼ほのかなりし夕べをわすれ給はず、中君のたれとしらせ給はぬもことはりながら、つらくていかにしてかたづね出さんとおぼす、かほるはうぢの人のまちどをならんもいとおしく、人しれず京にわたしてすませばやと、三條ちかき所に家つくらせ給へり、む月のついたちごろ、匂宮はわか君をもてあそび給ふ、ひるつかたちいさきわらは、みどりのうすやうなる文にひげごを小松につけ、又たて文とりそへて參れり、にほふ宮見給ひて、いづくよりぞととひ給ふ、中君、是は宇治に大夫が昔しれる人のむすめのかたよりといつはりての給へば、匂宮とりて見給ふに、みやづかへ人の文とは見へぬかきやうなり、又うづちつれ〴〵なる人のしはざなりとふしんにおぼしめされぬ、またふり山たちばなをつくりて、

まだふりぬ物にはあれど君が爲

ふかき心にまつとしるらん

匂宮心におぼしめすは、かほるのうちへかよひ給ひて、よるもとまり給ふと也、彼人をかくし置たるなるべしと、大内記とてかほるへしたしきたよりあるをめしてとひ給ふ、（大内記詞）宇治にはたれとはしらず、かほるのすゑをき給ふ女ありと申す、その人は我見そめし人なるを、かほるにたづねとられにけり、それかあらぬかたばかりて見さだめんと、よる過る程に宇治へおはしたり、とのゐ人のあるかたにはよらで、あし垣のくづれより入て、かうしのひまよりのぞき給へば、火ともして物ぬふ人三四人、わらは糸をよる、右近といひしわかうども有、姫君はかひなを枕にておはします、ゆふべもおきあかしてねぶたしとて、しさしたる物どもはきちやうにうちかけてみなふしたり、姫君は右近をあとにふさせ給へり、宮匂はせんかたなくてかうしをたゝき給へば、右近きゝつけて出たり、かほるのこゑにゝせて入せ給ひ、道にておそろしき事の有て、見ぐるしきすがたになりたり、火をくらうせよとて入給ふ、うこんはかほるなりと思ふに、御ぞぬぎて打ふし給へれば、女君あらぬ人なりとおどろかるれど、こゑをだにし給はず、夜あけて御ともの人こはづくれど、けふはかくてありなんとの給ふ、母君よりけふは御むかへ參るべし、いかにとか申さんといへば、けふは物いみなりといへかしと姫君の給ふ、日たかくなるほどに、母君より御むかへの人來り、いし山にまうでさせんとて、車ふたつ馬など參る、右近返事かく、ゆふべよりけがれさせ給ひておぼしなげく、こよひ夢見もさはがしくなどかきて、むかへの人々に物などくはせてかへしたり、あま君にもけふは物いみにてわたり給はぬといはせたり、女君れいはくらしがたくながめわび給ふに、けふはくれゆくもかなしとおぼす、

（にほふ）ながき世を頼めても猶かなしきは
　　たゞあすしらぬ命なりけり

（女君）心をばなげかざらまし命のみ
　　さだめなき世と思はましかば

京より時方參りて、御ありきかる〳〵しきと、きさいの宮（御母）大との（夕霧）もおぼしの給はすると申す、いかならんとおぼしやるに所せき身也、かる〳〵しき殿上人にてもあらばや、人にしられ給はぬ所につれゆき給

はんものをとおぼす、にほふ宮、
　世にしらずまどふべきかなさきにたつ
　　涙に道をかきくらしつゝ
女君涙をも程なき袖にせきかねて
　　いかにわかれをとゞむべき身ぞ
む月もたちてすこしのどやかなる比、大將殿かほる宇治へおはしたり、三條の家つくりたてゝ、此春のほどにわたしたてまつらんとのたまふ、かほる、
　うぢ橋のながき契りはくちせじを
　　あやぶむかたに心さはぐな
女君たへまのみ世にはあやうきうぢ橋を
　　くちせぬ物と猶たのめとや
あかつきかへり給ふ、
二月十日の程にほふ宮おはしたり、右近は侍従をかたらひ、此事もてかくし給へといひていれたてまつる、よるの程にて立かへらんも心うし、こゝは人めもつゝましきに、川よりをちなる家につれ給はんとて、右近は殘しをき、侍従を舟にのせて時方にさほさゝせて出給ふ、橋の小島と申す、
　年ふともかはらんものか橋の
　　こじまのさきにちぎるこゝろは
女橋のこじまの色はかはらじを
　　此うきふねぞ行衛しられぬ
きしにさしつきており給ふ、是より此君をうき舟の君といふ也、女君はしろきかぎり五つばかり、袖口すその程までなまめかし、侍従も色めかしきわかうどにて、時方をおかしと思ひて、物がたりしてくらしける、雪ふりつもり、山はかゞみをかけたるやうに、きら〳〵と夕日にかゞやきたるに、ゆふべ分こし道のほどをかたり給ひて、にほふ宮、
　嶺の雪みぎはの氷ふみ分て
　　君にぞまどふ道はまどはず
浮舟ふりみだれみぎはにこほる雪よりも
　　なか空にてぞ我はけぬべき
けふはみだれたるかみけづらせて、こうばいのをり物きかへ給へり、よろづかたらひあかして夜ふかくかへり給ふ、雨ふる比、匂宮、
　ながめやるそなたの雲も見へぬまに
　　空さへくるゝ比のわびしさ
おりしもかほる大將殿より御使あり、

水まさるをちの里人いかならん
はれぬながめにかきくらすころ

にほふへの返し 里の名を我みにしれば山しろの
うぢのわたりぞいとゞすみうき

同 かきくらしはれせぬ峯のあま雲に
うきて世をふる身共なさばや

かほるへの返し つれ〴〵と身をしる雨のをやまねば
袖さへいとゞみかさまさりて

三條の家つくりてわたし給はん事、内記がしうとの大くらの大夫にの給ひ付たりければ、にほふ宮きゝつたへ給へり、御めのとのじゆりやう三月つごもりの比、ゐなかへくだるべければ、其家にわたさんとおぼしかまへて、宇治へいひやり給ふ、うきふねはいかにしなすべきとうきたる心ちしてふし給へり、母君宇治へおはしまして、などかくあをみやせ給へるとおどろき、辨のあまをよびて昔物がたりなどし給ひける、それをうき舟きゝてよろづ思ひつゞくるに、此水のをとのをそろしくひゞくにつけても、我身行衛もしらずなりなば、しばしこそあへなく思ひ給はめ、人わらべにうきこともあらんとおぼす、にほふ宮よりかほるよりけふも御使きあひたり、かほるの使見とがめて、何しにこゝへはたび〴〵參るぞとゝふ、わたくしによう有て參る也といふ、物なかくしそとてあとより人を付て見させたれば、時方が家に入たり、かほる此けしきしらまほしくて、文をつかはさる、

波こゆる比共しらず末の松
まつらんとのみおもひけるかな

うきふねの君はむねふたがりて、此御文はもとのやうにして、所たがへにやとて返し給へり、うき舟は侍從右近が思ふらんもはづかしく、うきすぐせかなと思ひ入ておはす、右近はこのけしきをみていふ、我あねもふたりのおとこに見へたり、うへもしたもかゝるすぢはみだれ給ふはあしき事也、一かたにおぼしさだめよ、あまりに物なげかせ給ひそ、やせおとろへ給ふも益なしといへり、かほるよりうとねりといふものゝ一るいに仰てまもらせらる、さればこそ物のけしき見給ひたるよとおぼして、むづかしきほうぐ共みなやきすて給ふ、にほふ宮よりおはしてもあひ給はんやうもなければ、時かた入て侍從にあひて、いざやもろ共にきこへさせんとてさそひ出たり、宮は

馬にてとをく立おはするを、いぬのの丶しる聲に、かたり給ふべきやうだもあらで、山がつの垣のもとにあふりをしきておろしたてまつる、侍従くはしく有さまをかたりて、御むかへの日をよくたばかり給へ、我も身をすて丶出し參らせんといふ、にほふ、

いづくにか身をばすてんと白雲の
か丶らぬ山もなく〱ぞゆく

侍従入てありつるやうだいかたれど、いらへをだにし給はずふし給へり、うきふね、

なげきわびみをばすつ共なきかげに
うき名ながさん事をこそ思へ

おやもこひしく、つねには思ひ出ぬはらからも戀しく、たゞ人に見つけられず、出て行べきかたを思ひめぐらしねられ給はず、うきふね、

からをだにうき世の中にとゞめずば
いづこをはかと君もうらみん

母君より夢見あしとて御文あり、うきふね、

後に又あひみん事を思はなん
此世の夢に心まどはで

かねのをとのたゆるひゞきにねをそへて
わがよつきぬと君につたへよ

○かげろふ かほる二十六才、

宇治にはうきふねの君行かたなくうせ給へば、こ丶かしこと求めさはげどかひなし、母君もおはして、鬼やくひつらん狐やとりもていぬらん、目の前になくなしたらんは、よのつねの事也とあはてまどひ給へり、右近は匂宮のかよひ給ひし事をかたれば、扨は此川にながれうせけるよとなきかなしめり、にほふ宮より時かた參りて此由申す、大將殿もき丶てなみだにおほられ、うかりける所かな、鬼などやすむらんとむねいたくくやしくおぼさる、母君は此水の音を聞にまろびぬべくかなしくて歸り給ふ、卯月になりてかほるよりにほふ宮へ、

忍ねや君もなくらんかひもなき
しでのたおさに心かよはゞ

にほふ 橘のかほるあたりはほと丶ぎす
心してこそなくべかりけれ

かほる宇治へおはしまして、

我も又うきふる里をかれはてば
たれやどり木のかげを忍ばん

あじやりめして、七日々々に經佛くやうすべきよし宣ふ、にほふ宮より右近がもとにつぼにこがね入て給へり、中君も七僧のまへの事し給ふ、かほるのしのびてかたらひ給ふ一品の宮の小さいしやうは、うき舟の事をかほるの思ひなげき給ふを見しりて、

哀しる心は人におくれねど
數ならぬ身にきへつゝぞふる

かほる 常なしとこゝら世をふるうき身だに
人のしるまで歎きやはする

源 故六條院の御ため、あかしの中宮御八講し給ふ、紫の上など思しわけつゝ、御經佛くやうせさせ給ふ、大將殿つりどのゝかたにおはしたれば、かりそめのつぼねあり、小宰相やあると見給へば、おとな三人わらはなどゐて、氷を物のふたに置てわる也、しろきうす物き給へる人、ひをもちながらゑみ給へるかほ、いはんかたなくうつくし、御ぐしこちたくなびかし、ひかれたる程たとへん物なし、女一のみや也、小宰相もひをあつかひかねて、わらひたるまみあいぎやうづきたり、かしらに置むねにあてなどする人も有、おまへに參らせたれば、いなもたらし、しづくむづかしとの給ふこゑきくもかぎりなくうれし、下らう女ばうのいそぎ參れば、大將殿たちかくれ給へり、

かほる朝とく起給へるに、女二のかたちもいとおしげながら、女一はまさり給ふべきや、思ひなしかおりからかとおぼして、けふはいとあつし、うすき御ぞ奉れとて、手づからきせ奉り、御はかまもきのふのやうなるくれなゐなり、氷をめして人々にわらせて、取てたてまつり給ふ心のうちおかし、又のあしたかほるは大宮に參り給ふ、にほふ宮も繪をもたせてわたらせ給ふ、大將ちかくよりて、繪共つゐでに女一の宮の女二の宮をうとくしなさせ給ふ、かやうの御あそびのおりは、なにがしがもてまからんなどきこへ給へば、中宮の詞 などてすて給はん、とだゑそめ給へるにこそとの給ふ、其後一品の宮より二の宮に御せうそこありて、大將殿うれしくゑどもおほく參らせ給ふ、せり川の大將の十君の女、一の宮おもひかけたるゑをおもひよせてたてまるとて、

おぎのはに露吹むすぶ秋風も
ゆふべぞわきて身にはしみける

とかきそへまほしくおぼす、

「彼宇治には人々ちりて、めのと右近侍従ばかりぞゐける、今はをそろしく心ぼそしとて、侍従は京に出たりけるを、にほふ宮たづね出給ひ、中宮につかへゐけり、

「此春うせ給ひし式部卿の宮の御むすめ、此比大宮にむかへ給ひてさぶらひ給ふ、此姫宮は春宮にたてまつらんとおぼせしに、世のおとろへを見るには、水のそこに身をしづめても、もどかしからぬわざにこそと、いたはりて心よせ聞へ給へり、

「かほる大宮に参り給て、人々あまたゐたるに、ことかはし給ひて、かほる、

女郎花みだるゝ野べにまじる共
露のあだなを我にかけめや

女房たち 花といへば名こそあだなれ女郎花
なべての露にみだれやはする

辨のおもと たびねして猶こゝろみよ女郎花
さかりの花にうつりうつらず

宿からば一夜はねなん大かたの
花にうつらぬ心なりとも

大宮女一の宮も月を見給ふ、此西のたいに式部卿の姫宮のおはしますに、かほる立より給ひて、此姫宮を見給ふにつけても、八の宮の大君の事おぼし出られて、

ありとみて手にはとられずみれば又
行衛もしらずきえしかげろふ

○手ならひ かほる二十六才七才、

其比よ川にそうづあり、八十あまりの母、五十ばかりのいもうとのあま有、此あま君たち初瀬にまうで給へるに、あじやりをそへてなら坂こえける程に、母のあまわづらひ給ひて、宇治にとゞめてやすめ奉り、横川へこのよしいへり、そうづおどろきておはします、此家のあるじむづかしといへば、宇治のゐんといふ所にわたしかゆるとて、あじやりは下らう法師に火をともさせ、うしろのかたにいきたり、森と見ゆる木のしたにしろきものゝひろごりたるあり、何ぞとみれば物のゐたるすがた也、きつねのばけたるにや、にくしあらはさんとてよりて見れば、かみはながくつや〳〵としてなくなり、此よしそうづにかたれば、きつねのへんげするときけど、いまだ見たる事なしとて、四五人つれて見ければ、是は人也、しゝたる人をすてたるが、よみがへりたりとおぼゆる也、なのれ

なのれときぬを引ど、猶かほを引いれてなく也、何にてもあれ、其命たゑぬをすてんいみじき事也、かくて置たらば雨にぬれて死はつべし、ゆをのませたすけんとて、いだき入させ給ふ、あま君の心ちしづまり、有つる人はいかにととふ、いもうとのあまきゝて、我初瀬にて夢のつげ有とていそぎみれば、わかくうつくしき女の、しろきあやくれなゐのはかまきたる也、我むすめのなくなりしがいきがへりたるなりとて、なく〳〵いだき入、いかなる人ぞといへど、物もおぼへぬさまなり、手づからゆをくみ入、此人かぢし給へとて、母のあまよりも此人をいけて見まほしとそひゐ給へり、物の給へといへば、人に見せず此川におとし入給へとばかりいふ也、二日ばかりゐて二人の人をいのり、車ふたつにて道すがらゆをのませ、小野にかへり給ふ、つや〳〵としておきあがるよもなく、つゐにいくまじき人にやと思ひながら、打すてんもいとおしくて四五月も過ぬ、僧夜一よかぢし、人にかりうつして何ものぞととへば、物のけてうせられていふやう、昔おこなひせし法師、世にうらみをとゞめてたゞよひしに、よき女のすみ給ふ所にゐて、ひとり（大君の事也）はうしなひしに、此人は觀音のはぐゝみ給ひ、此僧都にまけ奉りぬ、今はかへりなんといふ、うき舟心ちさはやぎてあたりを見まはし給へば、ひとりも見しりたる人なし、たゞしらぬ國にきたる心ちして、かなしくいづくにきにけるにかと、（うきふねの心）よくよく思ひ出れば、物を思ひなげきて、みな人ねたるまにつま戸をはなちて出たり、風はげしく川波もあらく、ひとりものをそろしかりしかば、すのこのはしにあしをおろしながら、いくべきかたもまどはれて、かへりいらんもなかぞらにて、心づよくうせなんと思ひ、鬼も何もくへかしと、つく〴〵とゐたりしを、きよげなるおとこきていだく心ちのせしを、宮と思ひしより心まどひ、しらぬ所にすてをきて、此男きゑうせぬ、其後の事は覺へず、今人のいふをきけば、おほくの日數へにけり、しらぬ人にあつかはれ、見へつらんとはづかしく、いきがへりぬるかと思ふもくちおしくて、しづみゐ給へり、日ごろは物參る事も有つるに、今は露ばかりのゆをだに參らず、あま君そひゐて、いかなればたのもしげなくおはするぞと、なくなくあつかひたまふ、あまになさせ給へ、さあらばいく

る事も有べきとの給ふ、いとおしげなるさまを、いかでかあまにはなし參らせんとて、いたゞきばかりをそぎて、五かいをうけさせて、そうづはかへらせ給ふ、此あま君はかんだちめの北の方なりしが、其人なく成てむすめひとりをかしづき、よき君たちをむこにして、思ひ〳〵あつかひけるに、其むすめなく成ければ、かたちをかへてかゝる山里におはす也、秋になれば門田のいねかりとて、女どもに歌うたひひだひきならすもおかしげ也、うき舟の君手ならひに、

身をなげし涙の川のはやきせを
　　しがらみかけてたれかとゞめし

我かくてうき世の中にめぐるとも
　　たれかはしらん月のみやこに

母君めのと右近なども、おり〳〵思ひ出らる、此うき舟の君を手ならひの君共云也、此あまの昔のむこは中將にて、弟のせんじの君とひ給へるついでに、小野におはしたり、あま君たいめんして過にし事共かたり給ふ、少將のあまをよびて、すだれひまよりうちたれがみの見へつるは、誰にやと思ひ給ふ、少將の尼詞あまうへおぼへぬ人をゑ給ひて、明くれかしづき給ふといふ也、又の日山よりかへり給ふとて、中將又きたりて、此ひめ君はいかなるゆへに世をうらみ給ふにか、なぐさめばやといひて、

中將、

あだし野の風になびくな女郎花
　　われしめゆはん道とをくとも

うきふねはきゝいれ給はねば、あま君、

うつしうへて思ひみだれぬ女郎花
　　うき世をそむく草のいほりに

八月十日あまりに小鷹がりのついでにおはして、中將、

松虫のこゑをたづねてきつれ共
　　又萩原のつゆにまどひぬ

御返しし給はねば、あま君、

秋の野の露わけきたるかり衣
　　むぐらしげれる宿にかこつな

中將笛吹ならし、鹿のなくねになどひとりごつ、

あま君ふかき夜の月を哀と見ぬ人や
　　山のはちかき宿にとまらぬ

中將山のはに入まで月をながめみん
　　ねやの板まもしるしありやと

中将 わすられぬ昔の事を笛竹の
つらきふしにもねぞなかれける
あま君 笛のねに昔の事もしのばれて
かへりしほども袖ぞぬれにし

あま君はつせに參らる、うきふねをもつれ給はんとあれど、心ちあしとて參り給はず、手習、

はかなくて世にふる川のうき世には
尋もゆかじふたもとの杉
あま君 古川の杉のもとだちしらね共
過にし人によそへてぞ見る

みなはつせに參りて人ずくな也、せうしやうのあまと碁をうち給へり、夕暮の風の音あはれなるに、

心には秋のゆふべをわかね共
ながむる袖に露ぞみだるゝ

中将おはしましてうらみて、

山里の秋の夜ぶかき哀をも
物思ふ人はおもひこそしれ
手ならひ うき物と思ひもしらで過す身を
物思ふ人と人はしりけり

一品の宮御物のけになやませ給ひ、かぢのため僧都おりさせ給ふ、つゐでに立より給へるに、手習の君たいめんして、あまにならん事をいそがせ給ふ、はつせよりあま上かへらせ給ひなば、かならずさまたげ給はんに、うれしき折なりとて、ひたいはそうづそがせ給ひて、あまだちよくなをさせ給へとなり、むねあきたる心ちして、

なぎものに身をも人をも思ひつゝ
すてゝし世をぞさらに捨つる
手習 かぎりぞと思ひなりにし世中を
かへす〴〵もそむきぬるかな
中将きゝて 岸とをくこぎはなるらんあま舟に
のりをくれじといそがるゝかな
手習 心こそうき世のきしをはなるれど
行衛もしらぬあまのうき木を

はつせよりあま君かへり給ひて、ゆくすゑの事まで佛にいのりにし、いかでかくあまにはなり給へるとなげきふしまろび給へり、

一品の宮の御なやみおこたらせ給ひ、中宮僧都にたいめんし給ひて、初瀬の道にてうき舟を見つけたりし事かたり給ふ、中宮 其比をおぼしあはするに、その人

にやあらん、大將にきかせばやとおぼしけり、
小野へ中將おはしたり、あま君、
　こがらしの吹にし山のふもとには
　　立かくすべきかげだにもなき
中將　まづ人もあらじと思ふ山里の
　　こずゑを見つゝなをぞ過うき
同　大かたの世をそむきける君なれど
　　いとふによせて身こそつらけれ
手習の君は經よみ法文おほくよみ給ひて年もくれぬ、
手習　かきくらす野山の雪をながめても
　　ふりにし事ぞけふもかなしき
あま君　山里の雪まのわかなつみはやし
　　なをおひさきのたのまるゝかな
手習　雪ふかき野べのわかなも今よりは
　　君がためにぞ年もつむべき
同　袖ふれし人こそ見へね花の香の
　　それかとにほふ春のあけぼの
大あま君の孫きのかみきたりて、かほる大將の供にて宇治へまかりて、（かほるの）なげき給へりし事をかたる、水をのぞきうへにのぼりて、はしらにかきつけ給へる歌、
　見し人はかげもとまらぬ水の上に
　　おちそふ涙いとゞせきあへず
これをきゝて手ならひの君、
　あま衣かはれる身にやありし世の
　　かたみの袖をかけてしのばん
雨ふりしめやかなる比、かほる大將殿中宮に參り給へり、（中宮の詞）宇治にはをそろしき物やすむらん、いかやうにて彼人はなく成にしとゝひ給ふ、小宰相僧都のいへりし事をかたる、かほる聞て、其人は今もあらんやとの給へば、あまになしたるよしそうづのいへるとかたり申す、

○夢のうきはし

かほる山におはして、又の日横川におはす、僧都おどろき御物語し給ふに、（かほるの詞）小野にて御弟子になりてあまと成し人は、親ある人にて我をうらみけるとかたり出給ふ、（僧都）さればよたゞ人と見へざりしと、はじめよりの事くはしくかたり給ふ、さあらば御文を給はりて此わらはにつかはさん、たゞたづねきたる人

あるとばかりかへせ給へと也、此小君を道よりやらんとおぼせど、人めおほくて又の日つかはさる、此小君はうき舟のおとうと也、あま君おどろきて手習の君に文を見せ給へば、おもてあかめていらへんかたなくてゐ給ふ、あまの詞此小君はたれにかおはしますらんとせめられて見給へば、手習詞此子はいまはと世を思ひし時、母のつれて宇治へも参れりし也と思ふに、まづほろ〳〵と涙はおちぬ、小君を内に入れんといへば、手習の詞あやしきさまにかはりてみへんもはづかしく、母君ばかりには人しれずたいめんせまほしく思ひ侍る、ひが事といひなしかくし給へと也、あま君の詞後にかくれはあらじ物をと、小君を内によびよせ給ふ、小君は御返事給はりてまいらんといそぐ、あま君御文をひきときて見せ給へば、有しながらの御手にて、かほる、

のりのしとたづぬるみちをしるべにて
おもはぬ山にふみまどふかな

心ちかきみだり、むかしの事思ひ出れど、おぼゆる事もなし、夢かとのみ心もゑず、まづ此文はもてかへり給へ、所たがへにもあらんに、かたはらいたかるべしとさし出給へば、おさな心にあはてたるさまにて、わざとたてまつらせたまふに、なに事をかしるしにきこゑさせん、たゞ一ことにてもの給はせよといへど、ものものたまはねば、心ゆかずながらかへり参りぬ、かほるはすさまじく中々なりとおぼす事さま〴〵にて、人のかくしすへたるにやとおぼす、

初春日 松會開板

おさな源氏終

紅白源氏物語

よし野山の花を雲と見給ひ、立田川の紅葉を錦と見しは萬葉の古風、市女笠着てつぼほり出立の世もありしとかや、爰に梅翁が花濃宴もみぢの賀の兩卷を全六册となして、紅白源氏物語と名付しは、時移事去て愚癡なるものずきもすたり、幅廣のむすびさげ、虹染の抱帶、かゝ笠にくけ紐、白むく紅むくの色めきたる當風のよねの端手なる仕出に、よく移といふ事にや、見る人心を付ば、勸善懲惡の助と成て、其益すくなからじといふ事しかり、

于時寶永六年和春　洛陽散人容膝軒

紅白源氏物語卷一　紅葉の賀

美しすぎて新神垣　舞ぶりもこゝろ〳〵の見やう　嫉妬よりおこるまゝ子にくみ

朱雀院の行幸は、神無月の十日すぎとさだめられて、よのつねのみゆきにかはりて、おもしろき舞樂、ことを盡しての御したく、大裏のよね達は、見給ふ事のならぬを口惜く、とりわけ藤壺の御けんぶつなきを、御門もほひなくおぼしめして、こゝろみのために、其日あるほどのげひづくし、禁中にてせさせ給ふ、光君は青海波と云がくをまひ給ふ、あひてには御こじうとの頭中將、きゐたふうなる男ぶり、しやうぞくつきのうつくしさ、からくれなひに水くゝるとよみし人のわかざかりも、かくやとおもはれ、ほかの公家衆にくらべては、かくべつなるものなれども、光君に立ならびては、花のかたはらのみやま木のやうにぞ見えける、暮かゝるほどに入日さやかにさして、樂のこゑごゑ吹たてたる物の音のおもしろさ、おなじ舞のあしづかひ、かほけしきのうつくしさ、又とせかひにあるべき事ともおもはれず、詠曲うたひ給へるは、これ

や佛のかれうびんがの御こゑもかくやとおもしろくあはれなるに、御門御なみだをぬぐはせ給へば、親王達も公卿殿上人もなみだおとさぬはなし、詠曲はてゝまひの袖うちかへし給へるを、待とりたる樂のにぎはゝしきに、御かほのすこし色づきて、つねよりもいとゞひかる君とみへ給ふ、春宮の御母女御殿は、光君のあまりなるまでうつくしき御かたち、なに事に付ても不足なるところもなく、せかひの人のめをおどろかし給ふありさまを見給ふにつけても、にくゝねたましくて、むまれつきの諸人にすぐれてうつくしく、げいのうにきようなるものをば、山の神や龍神がほしがりて、とりてゆくときゝつたへたるに、ひかるぎみもあまりにうつくしすぎぬれば、いつぞのほどには、龍宮へむこ入して、おとにきこへしおと姫とちぎりをこめ給ふべし、かへす〴〵もあやうきこととの給ふ、御そばにありける女中衆、みな詞にはいださねども、情なくおそろしき御こゝろのほうかいりんきやと、中にもわかひ女中の光君へ心かけたるは、とりわけ耳にとゞめけり、ふじつぼの女御は、ひかる君とふづくりの不義のふるまひなかりせば、心の鬼の空おそろしきゑんりよもなく、いかばかりおもしろくもうつくしくも、見まいらせんとおぼしめすにつけても、ありし夜の事おもひいだされて、ゆめのこゝちし給ふ、そのよはすぐにふじつぼ御とのゐなりければ、御門御床の内にて、けふの舞樂は青海波大あたり、ほかの舞にはめもうつらざりし、そもじはいかが見給ひしぞとのたまへば、藤つぼは心のおにゝおそろしくて、御口もとずるやうなれば、まことにおもしろく候ひしとばかりの給ふにも上氣して、かほのいろやかはるらんとおぼゑ給ふ、あいての頭中將もわるうはなかりし、まひぶりどこやらが、地下のものとはかくべつにて、世間にその名たかきまひの上手といへども、大やうになまめいたるさまは、なか〳〵堂上におよばず、天のゆるせる位といふもの、いやといはれぬことなり、こゝろみのあしぞろへに、かくしよげいをつくしぬれば、かんようのもみぢ見の日は、おもしろさもおとりなんとはおもへども、そもじに見せんばかりに、けふの舞樂はもよほせし、おろかならぬちんがこゝろをくみわけ給へと、これを御たはぶれのはじめにて、一しほそのよはおもしろき御詰

びらきなるべし、あくる日はまだほのくらきに、ひかる君より、ふじつぼの御かたへ御文つかはさる、きのふはいかゞ御らんじけん、おもひみだれたる心のうちは、まだよにしる人もなき事ながら、

光君物おもふにたちまふべくもあらぬ身の

袖うちふりしこゝろしりきや

ふじつぼの御事を心にかけて物おもひのたへぬ身には、まいなどのきげんはなけれども、このたびはふじつぼに見せたてまつらんとの御事ゆへに、せいをいだしてまひたりし、心ざしはしり給ふやとなり、

あなかしことあり、日ごろは御返事もし給はざりしが、なさけにひかるゝ色の道、きのふの光ぎみのうつくしさ、どうもいはれぬ御しなし、こればかりは神もほとけもゆるさせ給へとて、

唐人のそでふることはとをけれど

たちゐにつけてあはれとはみき

がくはいづれももろこしよりはじまりたり、こまもろこしのがくを、ひだりみぎにわけてまふなり、青海波はもろこしのがくにてひだりなり、うたの心は、もろこしの人の袖ふるは、とをきことなればしらず、きのふのひかるぎみのまひぶり、たちゐにつけておもしろかりしとなり、

大かたならぬおもしろさにと、さらりとしたる御返事を、光君はかぎりなくめづらしく、うれしさやら、かたじけなきやら、おしいたゞきて見給ふ、まづはすみつぎのうつくしさ、ことにきのふの青海波といふがくは、もろこしのがくなれば、とをき國のことまでもよくしつて、よませ給へる御歌のこゝろばへ、つゐには后にたゝせ給はん御きりやうぞと、ひとりゑみしてうちおかず、持經のやうに兩手に引ひろげて見ゐ給へり、さて行幸の日は、親王大臣はいふにおよばず、世にあるほどの人はのこらずまいりつどひ給ふ、春宮もおはします、ひろき池のおもてにうかび出たるがくの舟ども、こまもろこしとこぎわけて、つゞみのをとひゞきわたりて、そのおもしろさ、かの心見の日、光君の青海波まひ給ひし御ありさま、ひかりかゞやきて、まことにこのよの人ともおもはれず、うつくしきとも見ごとゝもいはんやうもなかりしを、あまりおそろしきほどにおぼしめして、御門より諸寺諸山にて、御きたうせさせ給ふを、世間の人もゝつともなる御ことぞや、よそに見たてまつりてさへ、神などのかくし給ふこともやと、あやうくおもはるゝに、まして父御門の御心には、さこそおぼしめすらん、ことはりなりといはぬものもなかりしに、春宮の御はゝ

こうき殿のにようごは、よの中にむかしから、見めのわろきを神やほとけにいのりたるためしはあれど、うつくしすぎてあやうきとて、きたうをするといふことはきゝもおよばぬこと、あまりにあながちなる御門の御こゝろとにくみ給ふ、これをおもふに、上らうもした〴〵も、まゝ子にくむと恪氣するとはかはらぬやく人まで、殿上人地下のも、いまのよにこれはと人のさたするばかりをすぐりて、宰相ふたり、左衛門のかみ、右衛門のかみ、ひだり右とわかれて樂の奉行、そのころは舞の上手のおちぶれて、裏やせどにかくれゐたるをたづねいだして、をの〳〵われましにまひどもならひたまへば、きのふまで手なべさげて、すゝばなたらせしおやぢ、俄に時をゑて高位のまじはり、びんのそゝげをさねかづらのしづくにひからせ、ゑぼしきてありくもおかし、四十人の垣代、舞臺のめぐりをとりまきて、ふきたてたる笙ひちりき笛の音、御庭のつき山のまつかせにひゞきあひ、まことのみ山おろしのやうに吹まよひて、木のはのいろいろちりかふ中より、青海波まひ給ひて、光君のかゞやき出させ給ふ御ありさま、おもしろきといふも見事なりといふもたいていなること、これはたゞぞつとしておそろしきほどなり、かざしのもみぢちりすぎて、御かほのうつくしさにけをされたる心ちすれば、御庭前まがきのうちより、菊のはなをおりて、左大將さしかへさせ給ふ、日もやう〳〵くれかゝるほどに、けしきばかりうちしぐれて、空のけしきさへ心ありがほなるに、光君のうつくしき御かほに、菊のいろ〳〵うつろひて、ゑならぬをかざして、けふは一しほ入あやの手をつくしまひ給ふさま、そゞろさむく、ちりげもとからぞつとして、このよのことゝもおもはれず、生ながら佛の御國にむまれたるかとうたがはるゝ、なに見しるまじき八瀬や小原のたきゞうり、御庭掃にめされて、遠きうへごみの中にかゞみゐたるものどもまで、しぜんとなみだおとして、のりのこはき布子のそでをぬらしぬ、此つぎには承香殿の女御の御腹の四の宮、まだおさなくて秋風樂といふ樂をまひ給へるぞ、せいがいはにさしつゞきてのけんぶつなり、これらにおもしろさのつきぬれば、ほかのまひにはめもうつらず、けつくことさましなりけ

る、その夜、光君正三位、頭中將正四位下にならせられ、そのほかの公家衆まで、それ〴〵にくらゐをまし給ふも、みなこの光君にひかれてよろこびし給へば、なにゝつけても人のめをおどろかし心をもよろこばせ給ふ光君のさきの世ゆかしく、もしや前生には、上京に内藏の百もつくりならべて、金銀は湯水のごとくつかひすてゝもへることのなき大臣、しかも慈悲ふかく色里のあそびにも、せつくまへにせはしくせがまるゝ女郎には、借錢をすましてやり、またはれきれきの窂人のむすめ、せんぞは頼光の與しう貴の時、ひるひもなきてがらをして、おぼへのある刀、ぬりした地の見ゆるほどはげたる朱ざやのこじりがつまりて、せひなくうられてくるわのつとめ、死なれぬ命のつれなきをなげくたぐひは、きゝとゞけて身うけしてやり、引ふね、大こ、やりて、揚やはいふにおよばず、にはばたらきの久三、めしたきの杉までに、うれしがるものをたんととらせ、この大じんのちのよには、見るほどのよねにかはゆがられ、しゆ人あひきやうあれと、朱雀のみちに袖ごひする乞食まで、信心をこらしていのりける人のむまれがはりにやと、三世相見とをしのはかせもがな、こればかりはたづねたし、さてその比、藤つぼは御里へさがらせられ、ゆるりと御休足のていなれば、光君はよきしゆびもやと、人めのせきのひまをうかゞひありき給ふほどに、あふひのうへの御方へはたへまがちにて、さびしきよるの御とぎに、つぎ〳〵の女中あつまりて、くち〴〵に光君の御うはさ、このごろはとりわけ性わるにならせられ、二條院へたがむすめともしれぬよねをむかへとりてしのび給へど、ことのほかなる御てうあひ、御内のものにもしらせじと、かくす事はもれやすきよのなかにて、さるかたよりうけ給はり候とかたるにぞ、葵の上きかぬかほにはもてなし給へど、御心の中にはまことにつらき人心、たのむまじきは世の中ぞやとおぼしめしたるけしき、口にいだしては宣はねども、ひかる君もさすがにすいなれば、そこらは一めにがつてんなれども、むらさきの君はいとけなく、またまゝ事のたはぶれにも、いろめかしきわけならぬを、あふひのうへはしり給はず、うらめしとおもはるゝはことはりながら、よのつねのよねのやうに、口にいだしてにくからずうらみ給はゞ、わが身も心

うちとけて、むらさきのうへはいとけなく、ひゐなのとのをつくりすへ、はねつくてまりいしな玉、まだそのわけの道とては、ゆめにもしらぬあどなさの、色をはなれしたはぶれぞよ、かならずきづかひし給ふなよと、ありのまゝにうちあけて、うらなくかたりなぐさめんに、うはべにはうつくしく、心のそこにくよくよと、おもはぬすじにとりなして、うらみ給がうるさくて、我惡性のほか心もいづるぞかし、すじめといひきりやうといひ、どこひとつなんをいはんきずもなく、ほかのよねとはかくべつにて、おさなゝじみのいとしさは、またならぶべきかたもなき、わが心をもしり給はぬほどこそあれ、つゐには見なをし給ふおりもあらん、うはきにあらぬよねなれば、かる〳〵しくうつりぎの、ほかのおとこになびきつゝ、よもやおきざりにはしたまはじと、こればかりはすゑたのもしく思ひ給ふ、かの二條院におはしますむらさきの君は、見なるゝほどうつくしく、心ざまのあいらしさ、何ごゝろもなくひかる君になれむつれ給ふさまかはゆらし、しばしはみうちの人にもしらせじと思しめせば、はなれざしきをかつこうにしつらひ、われもとも〳〵入まじりて、あけくれあそびたはぶれ、てならひ歌よみことひかせ、なにやかやとをしへ立給へば、たゞほかにてむまれたるむすめを、引とりてやしなひたつる心ちし給ふ、家老用人下ばたらきのおとこまで、こなたのは人わけして、何ごとにも不足なくもてなさせ給ふ、惟光より外のものは、たしかにその人としらず、父みやさまさへ、光君の引とり給ふとは、ゆめにもしり給はざりけり、むらさきの君はとき〳〵あま君をおもひいだして、戀しがり給ふ事はあれど、それも光君のうちにおはしますおりには、まぎれあそび給へども、よるなどはとき〳〵こそとまり給へ、あふひのうへ、六條の御やす所、こゝかしこの御しのびありきにひまもなく、くるれば出給ふを、したひ給ふおり〳〵はいとおしく、二三日大裏にさぶらひ給ひ、あふひのうへの御方に御滯留の御留守には、ことのほかさびしきに、たいくつし給ふよし聞たまひては、ひかる君心ぐるしく、はゝのなき子をもちたる心ちして、ありき給ふもしづ心なし、くらまの僧都も、紫の君はひかる君のかたへ引とらせ給ふと聞給ひて、あやしやいまなどおとこ心のあるべき年

にもあらぬを、とはおもひながら心やすくうれしくおもひ給ふ、僧都の御寺にて尼君の法事し給ふにも、光君よりさま〴〵御心をつけさせられ、ねんごろにとぶらひ給ふも、むらさきのゆかりまであはれとおぼしめすなるべし、ふぢつぼはいまだ三條の御里におはしませば、もしや人めのひまもやとゆかしくてまいり給へば、命婦、中なごんの君、中づかさなどゝいふ御そばさらずの女中をいだして、あつやさむやとあるべきかゝりに、さらりとしたるあいさつせさせ給ふ、これはあまりにうと〳〵しき御もてなしとはおぼしめせども、色に出すべき事ならねば、そこそこにあいさつしてゐ給ふ、おりふしむらさきの君の御父兵部卿の宮參り給へり、ふじつぼの御兄なれば、御さとずみのほどはいよ〳〵御心やすく、朝夕の御見まい也けり、光君のおはしますよしきかせられ、やがて御たいめんあるに、兵部卿宮の御ありさまなまめきて、よねにして見ばあつぱれうつくしきものならん、またおんなの身になりて、このみやのやうにうつくしきおとこともものがたりせば、いかばかりうれしくもおもしろくもあらんと、いろめきたる御心のうちには、かた〴〵なつかしきさまにかたらひ給へば、兵部卿の宮もつね〴〵よりもうちとけて、わが御むこなどゝはおもひもより給はず、むらさきの君の御ことを引とり給ふとは、ゆめにもしり給はぬことなれば、光君のうつくしさ、よねになりて見ばうれしからんと、これもおとらぬ色ごのみにて、たがひに御心のうちにおもひかはして、しみ〴〵とかたり給ふほどに、日もくれぬれば兵部卿のみやは、ふじつぼのおはしませしみすの內へいらせ給ふ、光君はうらやましく、とびたつばかりにおもへども、人めを中の關守にて、すご〳〵とゝどまり給ふ、おさなきほどは御門の御もてなしにて、藤つぼのみやへもちかくまゐりなれ、御物語などせしものを、したの心はかよへども人めの關のわりなさに、うと〳〵しくもてなし給ふもうらめしく、すこしはせかゝるも、わが身ながらぐちぞかしとおもひしづめて、女中を御とりつぎにてしげ〳〵御見まひ申さんなれども、さしたる御用もあらざるには、おのづからおこたり候を、にあはしきことも候はゞ、御こゝろをきなくおほせつけられば、いかほどかありがたからん、よきほどにとりな

して申あげさせ給へとて出給ふ、御中立せし命婦も、いまはふづくりすべきてだてもなく、又ふじつぼの御心には、光君とのわけのこと、もしよの中にもれやせんと、ありしにまさるうきふしに、おもひしづませ給ひて、御心もとけぬけしきなれば、ちよつとてくだの御はなしをいひ出さんも、どこやらがはづかしういとおしければ、むなしくてすぎゆく月日、はかなきちぎりやと、たがひに御心のうちにはおもひみだれ給ふことゞもつきせずとぞ、

紅白源氏物語巻二　もみじの賀

習はねど知妹脊の道（せちがしこくなりて彌生三日切　むかしは元日から大晦日まで雛遊）

むらさきの上の御めのと少納言は、おもひもよらぬけつかうなるめにあふことかな、これもひとへに過させたまひし尼君のあさゆふのつとめにも、むらさきの上の御ことを神佛にいのらせたまひししるしありて、むすぶの神の御ひきあはせとありがたく、わが身につもるとし月のこともわすれて、一日もはやくおとなしくならせたまへかし、いまさへ光君の御心ざしあさからぬに、ましてやなさけのみちをしり色をみがゝせたまひなば、いま一しほの御もてなしもふかゝらん、しかしながらあふひのうへはおさななじみ、何ごとにつけても不足なくきつとひかへておはします、その外こゝかしこの後家娘の色あるをば、心にかけてかよはせたまふところあまたあれば、むらさきの上のおとなしくならせられ物の心をしり給はゞ、むづかしきことどもやいできなん、さりながらとりわけて御こゝろざしあさからぬはものごと

にしるければ、末たのもしくおもはれける、あま君はすぎし九月はかなくならせ給へば、母かたの御服は三月にて師走がはてなれば、大晦日はさいわい一とせのおはり千歳の春をまつよひなれば、色ある御こ袖にめしかへさせ給ふ、母上にははやくはなれて乳母やしなひにてそだち給へば、恩のほどもかくべつとて、遠山あけぼの虹ぞめなどのだて摸樣はゑんりよして、くれなひ山吹むらさきのむじのおり物の御小袖にあらたまりたる御姿、どうもいはれぬとりなりなり、一夜あくればかけごひのさわぎもやみて、いつしか長閑なる春の曙、おめでたいの聲家なみの禮者の雪駄のおともしづかなるに、光君は神武天皇よりはじまりし朝拜にさんだいし給ふとて、紫のおはしますかたへさし覗き給ひて、今日よりはあらたまる春の始、とし一つ重ね給ひておとなしくなり給ふやとて、につこりとゑみを含ませ給ふ御かほつき、あひきやうもこぼるゝ程なり、紫の君はとくをきていつしかひゐな遊びをはじめて三尺の御厨子へかざり、その外ちいさき家どもつくりならべてまいらせられしをとりひろげてゐたまひしが、あけてめでたき春の御挨拶もなしに、もうし夜部おにやらひをするとて、いぬきめが雛の家を打こはしたるぞはやくつくろはせばやと、しよゐんのひとつもうちこはしたるやうに大事とおぼえて、まづうつたへ給ふもあどなくてあいらしければ、誠に心なしのいぬきがしはざかないまつくろはせてまいらせん、今日は年のはじめなればこといみして泣給ひそとていで給ふ、御ありさまかゝやくばかりなるを、女中のこらずいでゝすだれのひまよりのぞきて見奉る、紫の上も見おくり給ひてやがてひゐなのうちにとりわきうつくしきを光源氏の君となづけ、つくろひたてゝ參内なさるゝ眞似をしてあそび給ふもおかしく、ことしよりすこしおとなしく成せ給へ、十にあまるおなごは洗ひ粉にてみがきたて、おしろいぬるやら口紅さすやら人もをしへぬ色をふくみて、ひゐな遊びはせぬものを、ことさら君は光君とて世間の人のうらやましがるおとこをもたせ給ひて、ひゐなあそびをし給ふものか、あるべかしくしつとりとおとなしくてまみえ給へ御ぐしけづる程だに物うき事にせさせ給ふちとたしなまんせと、あそびにばかり心いれ給ふを

はづかしとおもはせまいらせんとて、少納言わざと笑ひもせずにいへば、紫の上、さてはわれはおとこもふけたり、少納言やその外のものどもがおとことてをり／＼逢にくるをみれば、色黒く年よりて見苦しきに、われは若くて美しくかはゆらしきおとこをもちたるぞと今といふ今しり給ひける、是ぞまことに天性の色のみち、御年ひとつがさね給ひしるしなるべし、かくおさなきけしき事にふれてしるければ、み内の人々もあやしく心得ぬことゝはおもへど、これほどにおさなくて物心しり給はぬ御そひぶしとは思ひもよらざりけり、光君は大裏よりすぐに御しうとの大殿へいらせ給、あふひのうへはいつとてもうちとけぬ御有様にて、にこやかなるけしきもなければ、今年よりだにあらためて情らしき一言ものたまはゞ如何ばかりうれしからんとて、御そばへ寄そひ給へども、二條院へ色よきよねを置給ひておろかならぬ御もてなしと聞及び給ひしかば、いとゞ心おかれてうとゝはづかしく思召御けしき、光君もすいなればそこらはさつし給へども、今更いひわけもせうこがなければたちがたし、とやかくとその事にとりあいてはあしかりなんと見しらぬふりにてぬれかゝり、如何程かたきあいさつなりともやはらげてたはひもなくしてやるが日比のすいのはたらきぞと、何となしにこなたからとけてみだれてたはぶれ給へば、あふひの上もさすがにこゝろ強からで、にくからず御あいさつなどし給ふ樣、またとあるまひよねぞかし、光君は今年二八にならせ給、あふひの上は二十二さいよつぼどのとしまさり、色も香もとゝのひて今こそはなのさかりなる、このよねにどこひとつ不足なる所もなし、わが心からしやうわるなかなたこなたへかゝづらひ恨みらるゝもわれからと思ひしられ給、御父はおなじ大臣と一口にいへども、外のとはかく別に世間の人もやんごとなくあがめ奉り、殊に御母も宮樣にてたゞひとりもたせ給ひし御娘、御兩親の御いつくしみ限りなく、何事につけても御心にかなわぬ事なくありたきまゝにおはしませし御心おごりに、光君の性わるにてかなたこなたへ移り氣の、たゞ一すじによがれもなくかよひ給はぬうらめしさに、むつとげなる御あいさつなるべし、こなたはまた女はおとこにまかする身、上は后よりしもは靑

菜賣の女房まで同じおきてなり、とゝが青菜賣てかへれば洗足の湯をわかしにばなのちやをのませ、毎日の事ぢやのに今日はことさらみちがわるふて一しほくたびれさんしてあらふとて、腰をさすつてやりきをとるが女のならひ、大臣のむすめ宮様ばらなればとて女にかはりはなし、殊更われも帝王のいつき息子、なにおとりて女房のきをとらんと、互にいどみ心にてしつくりとせぬ御中らひなりけり、御嬪の大臣も光君のかくたのもしげなき御しなしをつらしとは思ひ給へど、あひ見給ふ時には恨もわすれはてゝかしづきもてなし給ふ事限なし、その夜はあふひの上の御かたにとゞまらせられ、ひめはじめなにやかやと、あくればそう／＼からいで給ふ所へ、御しうとの大臣殿さしのぞき給ひて、光君の御裝束し給ひて名だかき玉のおびをてづからもちておはして、御小袖のゑもん引つくろひ、とやかくと御はきものをとらぬばかりにし給ふも、御むすめ子のいとしきあまりなるべしとあはれなり、光君、是は禁中にて内宴などの晴なる御くはいにむすび候はんとのたまへば、大臣、それはまださまさるも侍り、これはたゞめづらしきもようなればとてしゐてむすばせ給ふ、たまさかにもかゝるきりやうのよきおとこを、婿どのとて出入させて見るにまされる事あらじとおもひ給ふなるべし、光君は年禮にもあるかせ給ふところもなし、たゞ禁裏、仙洞、春宮の御所、さてはかのふじつぼのおはします三條のみやへまいり給ふに、女中あまた集りて見奉る、今日はけしからぬほどうつくしく御年かさねさせ給ひて、いよ／＼さかりにけだかくかはゆらしくどうもいはれぬ殿ぶりぞやと口々にそそめきいへば、藤つぼは御几帳のほころびよりほのかにのぞき見給ふにつけても、御心のうちには樣々おもひみだれ給ふ事おほかりけり、御産のこと師走もさたなしにすぎて、正月はさう／＼からとりあげばゞも御そばをはなれず、御うぶゆ金銀のなべにて毎日わかし、女中のこらずうか／＼していまや／＼とまちかけすがた、禁中にても御誕生の御したくおびたゞしく御心もふけどもあるに、つれなく正月もたちてきさらぎははつむままいりのみやげとて、錫やつぼ／＼かざぐるま若宮様への御みやにと心ざしのあてがちがふて、これほど御さんのてまどるはい

づれふしぎなる事かな、御ものゝけのみいれもあるにやと様々にそゝやくを、ふじつぼの女御はきのどくにてむなざんようの心覺もたしかに、光君と枕かはせしは卯月のみじかよなにかたるまもなきに、せはしくなきし鳥が音につらきわかれのきぬ〴〵より、どうやら御中がむづかしくつゐかくものにはなりしぞかし、日數のつもるにしたがひて世間の人もふしんをたて、口さがなきおなごどもが悪ずいしてとやかくととりさたせば、御かども御心づきてうたがはせ給ひなば、終にはこの事かくれなくうきなやたゝんと、御心ひとつにくよ〳〵とあけくれなげかせ給ふほどに、御心のさはやかなる時もなし、光君はまして思ひあたり給ふ事どもありて、御心のうちにはもや〳〵すれども色にいだすべき事ならねば、その事とは沙汰なしに諸寺諸山に御祈どもせさせ給ふ、ふじ壺は世の中の定めなきにつけても、かくはかなくてややみぬべきととりあつめなげき給ふに、日數へて二月十餘日に味噌しるもわきあへぬほど安々と御平産、ことに玉のやうなる男御子むまれ給へば、御門の御よろこび斜ならず、あんじふくれし御内の女中に至る迄千よよろづ世のことぶきよろこぶ事限なし、藤つぼは命ながらへて物を思はんより、このつゐでにともかくもならばやとは思ひ給へど、こうきでんの御かたにておそろしきのろきごと、神木に釘をうち人がたをつくりてはりをさし、このたび御産たいらかならず母子ともにむなしくなさせ給へと呪咀し給ふと、内證よりつげしらせたる人ありければ、これを聞給ひて、いのちにのぞみはあらざれども、この度空しく成ならば、こうきでんの御方にてそりやこそ見たかとわらはれんも口惜しく、がをいだしてすこしづゝ物などまいり、やう〳〵日數へてさはやかになり給ひける、御門いつしかとゆかしく思しめすことかぎりなし、光君はまして人しらぬ御心のうちには限なく心もとなく、人すくなる折を見あはせ御こしもとを使にて、御門のおぼつかながらせ給へば、若宮を見まいらせて御有様をも奏聞もうしたくさふらふと申入給へども、未むつぎのうちにつゝまれてきたなげに候へばとて見せ給はず、ことはりや光君の御かほにその儘のいきうつしなれば愈まがふ所もなく、ふじ壺の御心にははづかしく人やとが

めん油斷のならぬ世の中、さまでなき事をさへとやかくといひたて丶毛を吹疵をもとむるに、終にはうき名のもれいで丶ためしなき名をやながさんと思ひつゞくるにも、人やりならぬわが身ひとつのみおそろしくおもひ給ふ、光君は命婦(みやうぶ)にたまさかにも逢給へば色々ふづくり給へども、いかなことふじつぼの御心、ありしあやまちをさへとりかへさるものならばと、くやしく思ひ給ふ御氣しきなれば存もよらず、いかほどくどかせ給ひてもなにのかひなし、せめて若宮を一目見奉りたきぞとの給へば、命婦、などかくあながちにゆかしがらせ給ぞや、やがてさんだいなされてから御心のまゝにだいつか丶へつもし給へかしとはいひながら、命婦も心のうちにはおぼえのある事なればいとおしく、光君もさすがに命婦が心やすきとて、若宮はたしかにわが子だねにてむまれさせ給ふとはしらぐ〱しくもえいはれず、互に心のうちにのみもやくやわや〱としてかなしければ、いかならんよにかふじ壺にあひまいらせて、人づてならぬ一ことをもきかせまいらせんぞとてなき給ふさま、見る目もくるし、

さきのよにふじつぼと光君といかやうにむすびしちぎりぞと也

光君いかさまにむかしむすべる契にて
　　このよにかゝる中のへだてぞ

あひ見給ふ事もなりがたきぞと也

さきの世にはふかきちぎりのあればこそかく若宮もむまれ給ふらんを、見ることさへなりがたきは、如何なるいんぐわのむくひにや心得がたきちぎりかなとのたまへば、命婦も藤つぼのこの若宮の御事をきのどくがらせ給て、折々思ひみだれ人やとがめんとおぼしめす御けしきを見奉るにつけても、いらざる御せわぞや若宮は御かどの御子にて おはしますぞと、もぎだうにつきはなしたる御あいさつもせず、

ふじつぼの御事なりわかみやをみ給ふにつけても物おもひのおはしますにと也

命婦見てもおもふ見ぬはたいかになげくらん

ひかるきみのことなり見給はぬがいよ〱なげかしからんと也

　　こやよの人のまどふてうやみ

こゆへのやみにまどふとなり

あはれに御心のやすむまもなき御事共かなと人や聞つけんと、こ聲になりてのあいさつ、光君はてれんすべきてだてもなくむなしくかへり給ふ、さて藤つぼは人のものいひさがなき世をはゞかり給ひて、命婦

をもむかしの樣にうちとけてもめしつかはれず、ただあまたあるこしもとなみにしてとりわけ御心やすきやうにし給はぬは、若しや光君の中だちをせし故にわけてしたしくおぼしめすぞと、人の氣のつかぬ樣にとおもひ給ふなりけり、命婦はその御した心をしらねば、どこやらかまへかたの樣にもめしつかはれぬを、思の外なる心ちしてきのどくに思ひけり、四月になりてふじつぼ若宮御ふた所ながら大裏へいらせ給ふ、三月になり給ふに、おもひの外おほきにてひとりでにおきがへりなどし給ふ、光君によくにさせ給ひてまぎるゝ所もなきかほつきを、てれんのありし事ぞとは御門ゆめにもしらせたまはず、同じ御兄弟の中にもとりわき美くしき生れつきは、よくにかよふものなりけりとおぼしめして、うつくしみ給ふ事限りなし、光君をわけていとおしくおぼしめすに、御母方のおもからねば、世の人の思ひつきかろ〴〵しくやとおぼしめして、春宮にもなし給はざりしを今とても口おしう、たゞの人にして置はあつたら御かたちありさまかなとおしき事に思しめすに、此度の若宮はいとやんごとなき御腹にて、光君にとりちがへるはどうつくしくてむまれ給へば、きずもなき玉の心ちしてかぎりなく御てうあひなさるゝを、ふじつぼはないしやうのちゝくりごとをおもひ給へば、何とやらきみあしくむねのあくひまもなき御ものおもひなりけり、いつとてもおくむきの御遊には光君をめして、みすのそとにて御琴笛の御あい手になさるればこなたへとてめして、御門若宮をいだき出させ給ひて、御子たちあまたある中にもその方ばかり、この若宮のやうにいとけなかりし時よりあけくれそばにてそだてしが、その方のおさなだちによくも〳〵にたるかな、ちいさき時にはいづれの子もかくあいらしき物にやあるらんとて、てうち〳〵かぶり〳〵と餘念もなくうつくしみ給ふを見給ふにつけても、上氣して御かほの色もあかく成こゝち、そらおそろしくまたかたじけなくもうれしくもあはれにもさま〴〵おもひみだれて涙もおつるばかりなり、若宮の物がたりなどしてわらひ給へるがうつくしきに、わが身ながらこれに似たらばかはゆらしからんと思ひ給ふぞあまりなるや、ふじつぼはみすのうちにて御かどの仰を聞給ふにつけても、わりなくかた

はら痛きに、覺ずわきの下からあせをながしておはしましけり、若宮を見るにつけ御門のおほせをきくにつけ心もかき亂るゝ樣なれば、御前をまかり立て二條院へ歸せ給ひ、うちふしてむねのやるかたなきほどをすこししづめてから、あふひの上の御方へ御出あらんとおぼしめすは、とかくなじみだけの心やすきがかたじけなきとおもはるゝ、御庭のけしき折しりがほにあをみわたれる中に、なでしこの今をさかりにさき出たる花をおらせ給ひて、命婦がもとへつかはさる、御文はかさたかくかきつくし給ふ事もあるべし、

わかみやによそへて見るに心はなぐさまでけつくこひしさに
なみだのみまさるとなり
子によせて

光君よそへつゝ見るに心はなぐさまで
つゆけさまさるなでしこのはな

とかきたる御文を命婦藤つぼの御まへに持參したるに、おりふし御近所に人もなければ、よき折柄とうれしくて御目にかけ、たゞこのなでしこの花びらに一筆なりとも御かへりごとをそゝのかしまいらすれば、ふじつぼも御心のうちにはさすがにあはれにおもひしり給ふことなれば、

このなでしこは袖ぬるゝつゆのゆかりとおもふに
いよ／＼うとみがたきとなり

ふじつぼ袖ぬるゝ露のゆかりとおもふにも
なをうとまれぬやまとなでしこ

とかきさしたるやうにあそばしたるを命婦はうれしくて、わがふみのうちへふうじいれて光君へまいらせしに、いつもの事なればなにのかひなき命婦がへんじならんとおもひよはりて、いそぎひらきても見給はず、ふじつぼの御かへりごとならば取手もおそしと拜しまいらせ、御げんのこゝちせんものを、みやうぶが返事なればら／＼のやりばなし、まゝと思へどさすがにすてゝもおかずしてふうじめをきりて見給へば、かの御手にて歌あり、これはと思ひがけぬにむなさはぎしてうれしきにも涙おちぬ、てにもちながらどうしたいんぐわなるんじややら、こひしゆかしといふ事もよひほどがあるものぞと、我身ながらつく／＼と思ひねにねて見れどねられもせず、やるかたなきこゝちすれば、れいのなぐさめには西の臺のむらさきの御かたへまいり給ふ、帶しどけなくひきむすび、そゝけたるびんつきざれたるうちぎすがたにて、笛をなつかしう吹すさびてのぞきたまへば、

紫はありしなでしこの花のつゆにぬれたるありさまにて、たれにみよとかたまくらのねかけすがたのうつくしさ、あいきやうはこぼれかゝるほどうつくしくて、光君のつねはほかよりかへり給ふとそのまゝ御いであるに、今日はふじ壺の御ふみ御かへり見給ふとや、かくひまどりておそなはりたるがなまうらめしかりければ、いつもはまちかけてよろこび給ふに、なにとやらむつどけなるけしきにてそむきゐたまへるもかはゆらしく、光君ははしぢかきゑんがわにゐ給ひてこちやとの給へども見むきもせず、入ぬるいそのとくちずさびて、さすがにはづかしもようのくちおほひし給ふしなしの、どうもいはれねば、光君、にくやかゝる事いつのまに口なれ給ひけるぞ、たがひに守りあひて見るめにあくはよからぬ事ぞやとて、御そばへよりそひて御琴とりよせてひかせ奉り給ふ、箏のことは十三絃あるなかに、とりわけほそききんの緒は調子のあがるほどたへがたきおとのするもうるさしとて、平調に柱をおしさげ引しらべてむらさきのうへゑさしやり給へば、さすがにうらみもはてずかはゆらしく引給ふ御てつきの しほらしさ、光君ふゑふきあはせておしへ給ふに、殊更かしこくてむづかしき調子どもを、たゞひとわたりにならひとり給ふ、何事につけてもとりまはしりはつに、さりとてはにくぶりならぬ御ありさまなれば、思ひしことのかなふぞと光君はひとり笑なるべし、保曾呂倶世利といふ樂はなこそにくけれどおもしろきてのあるを、ふきすまし給ふ笛にあはせて御琴はまだわかけれど、拍子たがはず引とりた給ふもあいらしく、やう〳〵日もくれぬれば火ともして繪など見給ふに、こよひも光君は出させ給はんとありつれば、御供のしたくよしとて人々たちさはぎ、あめふりそふなる空のけしきなるぞ、あま具の用意せよといふ、紫の君は光君の御留守には、さびしきにくたびれて繪をも見さしてうつぶしておはしませば、いとおしくて御ぐしのつや〳〵としてこぼれかゝりたるをかきなでて、留守のまはこひしくやあるとのたまへば、うなづき給ふ、我も一日も見ねばはつかもあひみぬこゝち、さはありながらおさなきほどは諸事心やすく、先さしあたりてくね〳〵しくうらむるよねの心やぶらじと思ひて、しばしかくもありくぞかし、おとなしくみ

なしては外へとてはさら〳〵いでまじ、人のうらみをおはじと思ふも、このよにながうながらへてそもじにあく程見みゑんとおもふ事ぞかしなど、こまごまとかたらひ給へば、さすがにはづかしくてともかくもあいさつはし給はず、やがて御ひざによりかゝりてねいらせ給へば、そろりとかたづけて外へゆかんもいとおしければ、御供の人々に、こよひはいでぬとおほせいだされれば、おの〳〵やど〳〵へかへりてやすみぬ、やしよくなどこなたにてまいる、紫をもおこし給ひて、さめ〳〵こよひは外へは行ぬぞとの給へば、うれしげになぐさみておき給ふ、もろともにものまゐるもはかなげにはしせゝりして、さらばねたまへかしと御心かはりて、また外へやいで給はんとあやうげにおもひ給へるも、あどなくいとおしらし、かゝる人をみすてゝはたとへ極樂よりむかひがきたりとも、ふり捨てはおもむきがたくおぼしめす、かやうによんどころなくとゞめられ給ふおり〳〵あれば、もれきく人の口さがなくて、あふひのうへの御かたへつげたるに、そのよねはいかなるおんなにや、たれ人の御むすめたれどのゝ御いもとゝいふきこえもなし、そのやうに光君の御出をもつれかゝりていやらしくとめまいらするはしれた事、あてやかに心ふかき上らうにてはあらじ、大裏わたりに御奉公せし上賀茂村の百姓の娘か、さてははく人おどり子のたぐひなるべし、ちよつと見そめ給てはでなる所が御氣にいり、外にてはかる〴〵しく御いであひもなりがたく人のおもはくもあれば、御やしきのうちへ引とりて隱しおき給ふなるべし、聞けばいまだおさなきよねともいふ、いづれにしてもよろしからぬふんばりならんと、いづかたもある事、あふひの上はともかくもの給はぬに、つぎ〳〵の女中衆がほうかいりんきを口々にのどはらすじを引ぱりていひあへるも、さりとはいらざる世話、おゐてもらひたいとぞ、

紅白源氏物語巻三上　もみぢの賀

夕立の名残りぬれかゝる袖　戀しき人を引とめしは琵琶の音

好事門をいでず、悪事千里をはしるとはふるけれども、光君の二條院へ、よねひきとりてかくしおき給ふこと、世にかくれなく、あなたこなたにてさゝやくことのどこともなく、大裏にてもこれざたなれば、御門の御耳にもいりてひかる君をめして、あふひの上の父おとゞ、きのどくがらるゝも、もつともなる事ぞかし、そのほうがまだいとけなき、はつもとゆひのそのよから、おとゞのかたへひきとりて、ねんごろに心をつけ、あさゆふのめんどうを見て、いとなみかしづくも、ひとへにむすめがかはゆさのあまりぞかし、ことさらあふひのうへは、きりやうよし、なにごとがふそくありて、ほかのよねをばかひとりしぞ、それほどのことくみわけぬ野夫にてもなし、いかなればあふひのうへを、おろかにはもてなすぞと、わりをつけての御いけん、光君は申わけもなりがたく、たゞおそれいりたるていにて、とかくの御返答も申あげ給はず、御かどすいにてましませば、さてはあふひのうへ、どこぞ心にそまぬ所のあるならむ、いかにおやとこのあいさつなればとて、きにいらぬ女房を、むりやりにかわゆがれとはいはれぬことぞかしと、いとおしく思しめす、わが子ながらひごろ好色にもあらず、これほどおほき女くはんのうちには、うつくしきもあまたあれど、なましたゝるきかほつきしたるを見たこともなし、そのほか公家衆のむすめには、かたちよきときこへたるもあまたありて、あなたからもちかけすがたなるもあれど、いかな事見むきもせぬかたひおとこと思ひしに、ゆだんのならぬは色の道、いつのまにかはかくれあるきて、かく人々にうらみをうくるならむと、ひとりごとにの給ふ、御かど御としのほどより好色におはしませば、后、にようごはいふにおよばず、うねめ、女藏人などゝて、御膳のやくをつとむる女中まで、しぶかはのむけたるをば、たゞにはおかせ給はねば、うぢなくて玉のこし、もしのりすますこともやと、われおとらじとみがきたて、いろをあらそふ女中あまたあれば、光君の御心をかけさせ給はんに、いやといふは、けがにもあらじとおもへど、あ

さゆふ見なれて、めづらしくおぼしめさぬにや、たはぶれにも、すきがましきことをの給はねば、中にもうはきなる女中いひあはせて、こなたからたはぶれごとをいひかゝりて見るおりもあれど、なさけなからぬほどにあいさつし給ひて、まことにはみだれ給はねば、しんじつにのこりおふく、あの御きりやうにて、御としもわかざかり、すき給はぬはことのかけたることかなと、おもふ女中もあまたありけり、そのなかに源内侍のすけとて、としは五十七八にて、おやもともれき〳〵、人がらもあてやかにて、ことに上らうなれば、女中なかまにてもおもくもちゐられながら、すぐれておすきなれば、色のみちにはおもからず、としにもにあはぬうはき、そこ心のいぶかしくて、ある時ひかるぎみ、こゝろみにたはぶれごとなどいひかけてみ給ふに、孫にもすべきひかる君のわかくうつくしく、さかりなる御かたちにもはぢず、いかな事、にあはざるあいさつとは、みぢんもおもはぬけしきにて、しなだれかゝるありさま、あさましくうるさきこゝろいれとは思ひながら、かうしたことも珍しく、のち〳〵のはなしのたねにもある事ぞと、あたりを見れば人げもなし、よきおりからと、なんなくことすまして立わかれ給ひしのちは、人のきかんもふるめかしきこひなれば、はづかしくおぼしめすに、ともすれば、おもはくらしきめつきをするもきのどくにて、つれなくけもなひかほをし給へば、ないしはつらき御こゝろと、うらみかゝるもうるさくおもひ給ふに、あるひ、かの内侍のすけ御かどの御ぐしけづりにあがりて、御ぐしはてぬれば、御うちぎの人めして、御小袖めしかへて出御あるに、御あとには人もなくて、かのないしばかり御ぐしのはことりしまひてゐたり、おりふし光君まいりあひ給ひて、みすのひまよりのぞきて見給ふに、内侍はいつ〳〵よりもうるはしく、やうだいらしきかみのかゝりなまめきて、はなやかなる装束つき、うしろから見れば、このましげなるこしづき、よひとしをして、とりなりつくるもにくけれど、このまゝたちのかんもいかゞにて、うはぎのすそをちよつと引給へば、かわほり（あふぎの事なり）の、ゑもいはずうつくしく、繪をかきたるをさしかざして、見かへりたるさま、しろきかほに、としよりたれば、めのはたはくぼみいりて、すこしくろみあり、さしかざし

たるあふぎのはづれより、こぼれかゝりたるかみつき、わかひよねならねば、いきりすのあぶら、さねかづらのしづくにても、もちかぬるにや、すこしはそゝげてみゆ、としにもにあはざるあふぎのさまかなとおもはるれば、わがもち給へるあふぎにとりかへて見給ふに、あかき地がみのうつるばかりに色ふかきに、木だかきもりをごくざいしきにして、きんでいにて、こずへにかすみをぬりかくしたるもやう、かたはしに、手のふうはあしからねど、ふるめかしくひねて、森のした草おひぬればとかきつけたるは、古今集に、あふあらきのもりのしたくさおひぬればこまもすさめずかるひともなし、といふ心なるべし、古歌もおほきに、老ぬればかる人もなしとの心ばへ、百になりてもすてがたきは色のみちとおかしくて、ひまもなくしげりにけりなあふあらきの、森こそなつのかげはしるけれと、口すさび給ひて、おひぬれば人もとはぬとはの給へども、中々さうしたことならじ、いまをさかりのものゝした草、かる人しげきときゝおよびしなどゝ、さま〴〵口なぶりにの給ふをも、人や見つけてわらはんときのどくなれば、すはともせすればにげあしになりてゐ給ふに、内侍はにあはざる事ともおもはぬけしきにて、

源内侍 光君の來給はゞ 君しこば手なれの駒にかりかはん
さかりすぎたるしたばなりとも

とよみかけたるさま、鼻息もあらく、こゑをふるへてわれをわすれたるけしきの、中々うるさくて、

光君がへし さしわけば人やとがめんいつとなく 源内じにかよふ男のとがめんとなり あまたの人をなづくると也
こまなづくめるもりの木がくれ

ひく手あまたにて、せく人もありて、とがめられんもめいわくなりと、よきてをつくりて立給へば、内侍そでにすがりて、こはなさけなし、このとしになるまでかゝるものおもひはしませぬぞ、さりとてはどうよくな、あまりつれなき御しなしと、すゝりあげてなけば、光君もあきれ給ひて、いまは人めもつゝましければ、のちほどしゆびよくは、くされいつはりならずとて、内侍がひかゑたる袖を引はなちてにげ給へば、はなさじとすだれのそとまでおよびかゝりて、はしばしらうらみかくるは、つのくにのながらのはしのはしばしらおいぬる身こそかなしかりけれ、といふ歌

の心ばへにや、いよ〳〵うるさくて、あとをも見ずしてにげたまふ、御門は御しやうぞくめして、人おとのするをあやしく、しやうじのはざまより、そろりとのぞかせ給へば、光君と源内侍のすけ、なくやらわらふやら、わけもなきたはぶれ、見給ふにおかしく、にやはしからぬとしのほどかなとおぼしめして、源ないしが、なにくわぬかほにて、御まへまかりいでられたるに、御門もそしらぬ御ふりにて、ひかる君はわが子ながら、わかひおとこのやうにもあらず、色のみちにははづかしきほどにおとなしく、いかほどうつくしきよねにも、したゝるきめつきもせず、どうしたかたひむまれつきぞと、つね〴〵心もとなくきにかゝりしが、ゆだんのならぬよの中ぞかし、人の見ぬ所にては、おやのおやにもすべきよしのまのよねも、たはぶれごとしけるぞやとて、わらはせ給へば、内侍はづかしげに、かほはあかめながら、にくからぬ人ゆへならば、あまのぬれぎぬもきまほしく、なのたつはけつくうれしきたぐひなれば、さのみきつふもあらがはず、わかひよねたちあまたあれども、ひかる君のたはぶれごとさへのたまはぬに、わが身はとしふけても、すてがたき所のあればこそと、すこしはじまんがほなるもにくゝ、これをきゝ侍る女中衆、さてもおもひのほかなることかなと、とり〴〵くち〴〵にさたしてわらへば、頭中將きゝつけて、いたらぬくまもなき、すきまかぞへの好しよくなれど、この内侍が事はいまゝでおもひつけずして、ひかる君にせんをこされたがむねんさよ、そのうへないしがとしにもはぢず、六十におよびていろめくは、よく〳〵のおすきなればこそとゆかしくて、とかくいひよりてつゐものになりにけり、内侍が心には、頭中將もひかる君の御きりやうほどにこそなけれ、ほかにはまたにる人もなきおとこぶり、光君のつれなきに、せめては心もなぐさむやと、かたらひつきけれども、こひしきを見まほしさは、なをいやまさりがほなるも、としににやわぬおすきやとうたてくおかし、頭中將もこの事をずいぶんかくしけるほどに、ひかる君はゆめにもしり給はざりけり、ないしは光君を見まいらすればまづとりつきて、あまりとはどうよくにつれなき御しんと、うらみかくるもうるさけれど、としふけてこれほどにこひしたふも、さすがにいとおしければ、いつぞひ

まを見あはせて、しつぽりと一よなぐさめんと心がけ給へども、まさるかたあまたあれば、それほどことのかけたるひまびもなくて、むなしくうちすぎ給ひしに、あるゆふぐれに夕だちひと丶をりして、あとのなごりのすゞしきよひのまぎれに、温明殿とてむかしは内侍どころのましませし所とかや、その御殿のあたりを、すゞみがてらにた丶ずみありき給へば、かの内侍、びわをおもしろうひきゐたり、禁裏にて、おとこがたの御遊にも、めしいだされてひくほどの上手、いまのよにならぶかたなき名人どものうらめしきおりから、心をすまして引たるは、あはれにおもしろし、△山城のこまのわたりのふりつ丶り、なよや、いかにせん〳〵、はれいかにせん、なりやしなまし（さいばらのうたひものなり、）とはやりうたをのせて、こゑよくうたふもおもしろく、いかにせんいかにせんといふ、せうがはきのつきやうがわるひやら、おかしくおもはるる、むかしもろこしの白樂天といふおとこ、鄂州の鸚鵡洲といふ所にとまりけるに、おりふし秋の水すさまじく、月すみてものあはれなるに、となりのふねにて、うたうたふこゑのきこへて、そのおもしろさあはれさ、これはときくうちに、うたひやみてなくこゑのきこゑければ、樂天小ぶねにとりのりて、こゑをしたひて、そのふねにのりうつりて見れば、十七八のどうもいはれぬうつくしきよね、たゞひとり帆ばしらによりかゝりて、なきゐたるありさま、たとへて

紅白源氏物語卷三下　もみぢの賀

いはん樣もなければ、樂天しとやかにそばへより、そもじはたれ人のお內義ぞ、何事のかなしくて歌にもあはれにかなしきせうがをうたひ、其上かくはなげき給ふぞと我身もなみだをながして、もらひなきになきながら樣々にとひけれども、つゐになのらざりし昔のよねも、としのわかひとおひたるとのかはりめこそあれ、おりからのあはれさはかくやありけんと耳をとゞめてきゝ給ふに、しばし引すましてびわをさしおきて、ものゝゆかしさゝびしさに一人やねんと思ひみだれたるけしきなれば、光君よき折柄とおぼしめして、△あづまやのまやのあまりの（さいばらのうた）雨そゝぎ、われたちぬれぬその戸ひらかせといふ小歌を小聲にうたひ給へば、ないしは、かの君の御聲ときくよりはやく、△かすがいもさしもあらばこそその戸われさゝめ、（さいばらのうたひもの）おしひらいてきませとかの小歌のすへをうたひかけたる心入、をしひらひてきさんせとは、よのつねのよねのあいさつとかはりて、いかひ御好物とおかし、

源內侍　立ぬるゝ人しもあらじあづまやに（上の句は卑下の心なり）
うたてもかゝる雨そゝぎかな（うたゝといふ心なりいさゝかいよ〳〵といふ心にも用ゐるか）

かこちなげきたるさまいや風なり、われ一人を守りてゐる身にもあらず、しのびおとこあまたありてまことにおとこめづらしうもあるまひのに、よひとしをしてうとましや、戀のやつこになりはてゝ何事を思ひなげくらんとおもはるれば、

光君　人妻はあなわづらはしあづまやの（人のつまと物いふはわづらはしとなり）
まやのあまりもなれじとぞおもふ（本やのことあまりとはいひさしの事なりひさしにも立なれしとなり）

とてにげてかへりたき心ちすれど、あまりなさけなくあはれもしらぬやうにや思はんと、おもひかへして身をまかすれば、こなたの帶をよねのかたから引ほどき、いだきつくやらなくやら笑ふやらわけもなきまでとりみだしたるさま、これもまためづらしき心ちし給、頭中將はつね〴〵光君のじつていに見せかけてうわきらしきはなしをもゝどき給ふがにくさに、忍び給ふ所あまたあるときゝ及びて、いつぞは見

あらはさんとなひ〳〵心がけたるに、折しもこよひ源内侍がもとへ忍ばせ給ひたるを、たしかに見とゞけたる心のうちのうれしさかぎりなし、かゝる折にちとおどしをくれて、光君をどうてんさせまいらせて、これにもこりずかさねてもじつていなる顔をし給はんかといひおりにせんとおもへば、いきをもつめぬき足をして戸口に立そひよきじぶんをうかゞへば、かぜひやゝかにふきてやう〳〵よも更ゆくに、どさくさの音もたへて、互にくたびれつきて少しまどろむけしきなれば、やがて戸をおしひらきてうちに入れば、光君は何とやらおちつかぬ心ちしてうちとけてもねたはねば、足音のするを聞つけ給ひて、頭中將とは夢にも思ひよらず、日比きゝおきし源内侍がふかま、修理のかみならん、なむさんぼう、おとなしげにとしたけたる男にかゝるしやうわるを見附られんことのはづかしく、されどもかくれしのばんやうもなく、きをおちつけてわざときけがしに、あなわづらはしいでなんよ、蛛のふるまひはよひからしれたることとならんに、これは一ぱいはまりつるぞとて、なをしばかりをてにかゝへて、屏風のうしろにはひ入給ふ、頭中將はしぬるほどおかしきをこらへて、かくれ給ひたる屏風のもとへつかつかとたちよりて屏風をおしたゝみ、ことゞ〳〵しくせきたるふぜいを見せかけ、ものをばいはずたゞ市河だん十郎があらごとのみぶりをするに、内侍は年こそふけたれうはきにて色を好めるよねなれば、通ふ人あまた有てまへまへもかうしたためにであひてものなれたれども、光君をいかやうにかしなし奉らんとこれに氣をうばはれて、頭中將に取つきはなさじとひかへたり、光君はなにとぞしてわれとしられじと、とかくに物をばいわずしてたゞ怒れるけしきにもてなして、太刀をすらりと引ぬけば、内侍はあきれてとりつきたる袖をはなしてまへえまはり立ふさがりて、吾君わが君と手をする有樣おかしさどうもたまられず、つねに色よくつくり立たる時にこそわかやぎてふうぞくにおもひつく所もあるに、五十七八になるよねがよひのはたらきに、のびつちゞみつすりまはし、かほのけさうもとゝろはげ、ねみだれがみのとり亂したる有樣、夜鷹のあさがへりによき小袖きせたるが如くにて、世にたぐひなき色男、光君や頭中將のはたちにたら

ぬそのなかにたちならびて物おぢしたる風情、おかしきとも笑止ともいはんかたなく、頭中將いよ〳〵あられぬ身ぶりをして、おそろしげに見せかくれど、朝夕見なれし人のすがたはくらがりにてもしるきものなれば、それぞと氣がつきてから思へば、よひのうちからつけまはして、よき時分をうかゞひてね耳へ水の入たるが如く、我をおどして見るぞとたしかに見さだめてから、おかしさどうもたまられず、太刀もちたる手をしたゝかにつめり給へば、頭中將も南無三てれんがあらはれしはむねんながら、こらへかねてともに大わらひ、さて光君まことはほん氣のさたにてなし、こわざれなるしかたぞや、いざこの直衣きんとの給へば、中將なをしをしつかとゝらへてはなさず、さあらばもろともにそのほうもぬぎ給へとて、中將のきたりけるなをしのをびを引とき給へば、とかせじとたがひにひきあふほどに、なをしの袖のほころびよりほろ〳〵とひきとれたり、

頭中將　つゝむめる名やもりいでんひきかはし
かくほころぶる中のころもに
うたの心きこえたり

そでもなきなをしをうへにき給はゞ、人も見とがめてかうした性わるのねけもあらはれんといへば、

光君　かくれなきものとしるしる夏衣
頭中將とはかくれなきにたれとしられじとたくみたるはあさき心ぞと也
きたるをうすき心とぞ見る
うすきのゑん也
あさき心といふに同じ

とよみかはして互にうらみもなく、とりみだしたる姿になりて、をの〳〵の御休息所にかへり給、光君は頭中將に見つけられし事かへす〴〵口惜く思しめす、内侍はこひにこがれし光君の、おもひがけずとまらせられしうれしさ千夜を一よになしてもなをあきたらず、日ごろのおもひをはらさんと思ひこみたるかひもなく、頭中將にじやまなされ、思ひよらざる大さはぎに、氣をとりのぼせあさましきにねられもせず、頭中將のおとしおきし帶をも、光君のとりおとし給ひし御裝束と思ひて、なにやかやひとつにおしつつみて、まだあけがたに御休息所につかはすとて、

源内侍　うらみてもいふかひぞなきたちかさね
波のゑん也
引てかへりし波のなごりに
頭中將光君と引つれてかへり給ひしことなり

わかれての後ぞかなしきなみだ川、底もあらはになりぬとおもへばとよみしも、今宵のやうなることに

てゝれんがあらはれたるにやと、昔のことまで思ひやられ〳〵かしことかきたるを見給ひて、ようもようもめんぼくなくいひおこせしぞ、さりとはあつかわなる女めとこづらもにくけれど、頭中將にさまたげられしを、わりなくのこりおほくおもひしけ

・しきもさすがにあはれにて、

光君　あらだちしなみに心はさはがねど（頭の中將はさはぎしにこなたの心はさはがず）

　　よせけんいそをいかゞうらみぬ（頭の中將なよせたるなばうらみんとなり）

さら〳〵とかきてつかはさる、さてかの御裝束を見給へば、帶は頭中將のと見えて色こく見ゆ、こなたの御裝束もかた袖引きれてなし、あやしやとりみだしたる事ども哉、たま〳〵忍びたる所にとまりてさへかゝる事もあるに、まして何の遠慮もなくうちみだれて、所さだめずまどひありく好色のおとこども、樣樣なんぎなるめにあふならんと思ひやり給ふにつけても、いよ〳〵みだしなみせられ給ふ、頭中將はとのゐ所よりよべ引とりし光君の御裝束のかた袖をおしつゝみて、このそではやくとぢつけさせ給へとておこせたり、光君はあやしく如何にしてかこのかた袖はとられつらん心得ぬことゞもかな、さてこのかはりには、內侍がもとより遣しける頭中將の帶をやるべし、もしこの帶なくば返報すべきやうもなく口おしかるべしとうれしくおぼしめす、その帶の色は濃あさぎなりければ、おなじ樣なる色奉書に、

光君　中たえばかごとやおふとあやうさに（源內侍と頭中將の中たえばと也）

　　はなだのをびはとりてだに見ず（おびゆへにかごといはれんかとおもへばとりても見ずと也）

（さいばらうた也）△石川のこまうどに　おびを　とられてからきくひする、いかなるおびぞはなだのおびの中はたへたる、といふその比のはやり歌をおもひよせて、かきてつかはさる、頭中將よりのかへりには、

頭中將　君にかく引とられぬるおびなれば（內侍とわが中は光君のおびな引とり給ひしよりたえたるとなり）

　　かくてたへぬる中とかこたん（光君ゆへとかこたんとなり）

このいひわけはえし給はじと書たり、その日は光君も頭中將も殿上へ參り給、互になにくはぬかほつき、實めになりておもの遠きふりに見せかけ給ふも、頭中將は心のうちにおかしけれども、其日は宣旨をうけ給はりて申下し、また御門へ申上ることゞもおほければもつたいらしき顏つき、夕べの團十郎が身ぶ

りとは各別なるを見るもたがひにおかし、頭中將人の見ぬまに光君の御そばへより小聲になりて、物かくしはこり給ひつらん性わるさまといへば、光君なにしにこりん、立ながらすもどりせし人こそいとおしけれ、それとてもまことはよしや世の中よとて、（此詞諸抄に引歌なし古今集に）△ながれてはいもせの山の中におつる、よしの丶川のよしや世の中、いひあはせて床の山なるいさや川、いざとこたへて我名もらすな、と互に口がためし給ふ、それよりのちはともすればこの事をこうにしてせんをとらる丶も、ひたすらかのいや風のよねゆへとうるさきに、よねはいよ〳〵しなだれて、さりとはつれなき御しんぞぬと恨みかくれば、あひ見ることもむつとして、大方はかくれありき給ふもおかし、頭中將は妹のあふひの上にもこの事ははなし給はず、まして外の人にはけもない事、只我心のうちに大切におさめ置て、自然のときには光君をおどしまいらするよきたねなりと思ひけり、御兄弟の親王達さへ光君をば御かどのとりわけてもてなさせ給へば、もの事に遠慮してきつとしたる御あいさつなるに、この頭中將は更にゑしやくもなく、何事につけても負じおとらじといどみ給ふ、兄弟あまたある中にも、頭中將はあふひの上と一腹なれば、光君も御門の御子と云までの事、我身も同じ大臣の子といへども、天下の政を身にまかせ百官にかしづかれ、殊に御門の御妹の腹にむまれていとおしがらる丶男なれば、光君となに程のおとりまさりかあるべきとおもひこめたるけしきなり、この二人の御中のいどみあひには樣々の事あれども、ことおほければうるさくて書もらしつ、其年の七月、ふじつぼ中宮に立給ふ、御門御位をおりさせ給はんの御下心にて、藤つぼの御はらの若宮を後には春宮にたてさせ給はんとおぼしめすに、御後見し給ふべき人なく、御母方はこれみな親王にておはしませば、臣下にて大臣の位にものぼり、肩を入て御うしろみし給ふべき人一人もあらざれば、せめてふじつぼの宮を中宮のうごきなき位にそなへ置て、すへ〴〵のわか宮の御ちからにとおぼしめすなりけり、春宮の御母こうきでんの女御は、常々しつとぶかくふじつぼと御なかよからぬに、われより後にまいり給ひて、引こして中宮になり給へば、いとゞむねんさ口惜さ是ばかりはことはりなり

けり、されども御門の御心には、春宮の御在位ちかき内の事なれば、その時にはいやおふなくに后に立給ふ事うたがひなし、その内はしばしの事ぞかしこらへてまち給へとぞ仰ありけり、げには春宮の御はゝにて、二十年餘り禁中におはしましゝこうきでんをさしおきて、ふじつぼ后に立給ふはめづらしくためしすくなき事なりと、例のよの中の人の口には戸がたてられず、天子の御事をさへとやかくといひあへり、さてふじつぼは吉日をえらびて御入内あり、そのよの御供には光君も參り給ふ、同じきさきといふ中にも、光かゞやく玉の若宮さへおはしませば、御門の御いとおしみたぐひなければ、世の人のおもひつきはましてかく別なることなりけり、光君は人しらぬわけある御中なれば、御こしの中も思ひやられて、いよ／＼今はあひ見んこともおよびなき心ちし給ふ、かの在原のやさおとこが、二條の后のとうぐうの御息所と申せし時、氏神へさんけいし給ひける御供にまいりて、大原やをしほの山もけふこそはとよみしも、今わが身にしられて、心ばかりは御こしのうちへとびたつばかりなり、

光君　つきせぬ心のやみにくるゝかな（わかみやをおもひ給ふ心なり）
雲井に人を見るにつけても（ふじつぼ后に立給へばくもゐはるかにおもはるゝとの心也）

とひとりごとにつぶやきて涙ぐみ給ふ、若宮は成長し給ふほど光君にそのまゝ、かたちの大きなるとちいさきとのかはりこそあれ、御顔は見わけのならぬ程にさせ給ふを、ふじつぼの后はかのふづくりのありしことあらはれやせんと、あやうく思ひ給へども、夢にもきのつく人もなし、まことに光君のうつくしさまたと世界にあるまじきとおもひしに、この若宮すこしもかはらぬ御かたち、いかやうにつくらせ給ひてかくまではにさせ給ふぞや、光君とわか宮とはさながら月と日のひかりににたりと、世の中の人は思ひけるとぞ、

紅白源氏物語卷四　はなのゑん

あひて有戸口へ覗が分別の場　須磨明石の月見もむこりはちよつとした細殿

京は通天の紅葉見、東福寺の開山記が大かた幕のうちおさめ、いかにみやこなればとて雪見に幕うつ人もなし、あたごやひえの山おろしに冬ごもりするたのしみは、寒菊水仙のなげいれ、池田炭のにほひに釜もたぎりて年わすれの茶のゆ、一夜あくれば人のきものどかになりて、のきばの梅のつぼみから花見のまくをうちはじめ、四季おり／＼のながめ、いづれみやこの風俗ぞかし、二月(きさらぎ)ははつむままいりねはん記もすぎて、そのとしはとりわけのどかに、二十日すぎより東山の花もそろ／＼ほころびて、禁中の紫宸殿のまへなるさくらは、思ひなしにや色もにほひも外のとは雲ゐはるかにちがひめのあるは、花もすぐせのあさからぬなるべし、天氣あひもうちつゞきてのどかなる空のけしきなれば、大裏にて花のゑんせさせたまふ、このたびもまた舞樂の御もよほしあれば、藤つぼの后も春宮も御つぼねを、御門のひだり右にしつらひて御見物あるに、こうきでんの女御は藤つぼのきさきの並ぶかたなき御位にておはしますを、折節ごとにねたましくおぼしめして、つね／＼ふじつぼのまゐり給ふ折には、いかなことにも御出合あらざれども、物見花見はゆかしきにえこらへかねてまゐり給ふ、日いとよくはれて空のけしき鳥の聲も心よげなるに、玉のいさごをしきたる御庭のまん中に文臺をすへて、其の上に詩の題韵字を置て、親王をはじめ公卿殿上人はいふに及ばず、地下の學者まで韵字をさぐりて皆詩をつくらせたまふ、ひとりびとりあゆみいでゝ文臺の前にひざまづき、韵字をとりて何のなにがしなにと云もじをたまはりたりと、たからかに名のるは、まことにはれがましき事共なり、光君は春といふもじをとり給ひたるも、花見の席にはさいわいなり、たからかになのり給ひし御こゑさへうつくしく、外のとはかくべつなるしなしぞかし、次に頭中將光君に見くらべてこそおとりたれ、しつぽりと物なれてこわつがひもの／＼しく、よの人にはにたもなし、さて外の人々は、みなおしてつくりつけの人形を見るごとく、よこめもふりえずはなのさ

きに、玉のやうなるゐせかきてひかげにうつろひて、しろ〴〵みゆるかほつきどもおかし、ましてや地下の學者は、御門春宮の御學文にかしこくおはしませば、いづれも公家衆學文に心がけざるもなく、その内にはすぐれて詩文の上手あまたあればはづかしくて、はる〴〵とくもりなき玉のいさごをしきならべたる御庭のまん中へひとりづゝ歩み出るに、いづれかゝとは地につかず、思へばやすき事なれども、苦しげなり、としよりて功の入たる儒者共は、白髪まじりのびんつきはそゝけてひたいになみをよせたる、うち見はおかしけれども、かやうなる晴の御會にたび〴〵なれぬれば、やすらかに立ゐふるまひなにのくもなく見ゆ、これをおもへばひごろなにの道にも稽古をつむが第一なり、舞樂はばんかず多くえもいはずしくませ給ひたるに、さすがに永き春の日も入かたになりて、春の鶯囀といふ樂、中にもおもしろかりけるに、光君去年の紅葉の賀のおりから青海波を舞給ひしを、今にわすられずおぼしめしいだされて、春宮よりかざしの花を下されて達て御所望なりければのがれがたくて、光君たつて袖をひるがへす所を一きりけしきばかりまひ給ふに、地下のまひ人のとはかく別、おもしろさどうもいはれず、御舅の左大臣あふひのうへとむつまじからぬはにくけれども、舞ぶり諸事のしなしを見給ひては、うらめしさもわすれて感にたへで泪おとし給ふ、頭中將へも御所望おそし〴〵とせめさせ給へば、柳花苑と云舞をもし御所望もやと內々心がけけるにや、なが〴〵とまはれたりしそのおもしろさ、御かど御感あさからず御衣をくだされければ、めづらしきためしなりと人々うらやみおもはれける、公家衆大方はのこらず御所望にて舞樂ありしかども、よに入てはおとりまさりも見えわかず、舞がくはてぬれば、御門よりはじめて作らせ給へる詩どもを披講するに、先かの御庭前におきたる文臺を御前になをして、紫宸殿の御階の下に文人どもまいりて、段々に詩をよみあぐる、光君のつくらせ給へる詩をば講師もえよみやらず一句々々におもしろく、老儒詩人もみな感涙をながしける、かやうに古文眞寶のかたひことにもすぐれたる詩を作りいだし、またやはらかに糸竹の御遊の折節は、琴笛の音をくもゐにひゞかせ、舞ぶりの見事さは水木辰の

介もはだし、何事につけても光君をそのころの立物、公家なかまの一枚簡板にし給へば、爭か御門もおろかにおぼしめさん、御いとをしみのふかきもことはりぞかし、藤壺の中宮光君とは譯ある御中、人めをつつみ給へばこそうはべにはうと／＼しくもてなし給へども、御心のうちにはわすられず、ましてや今日の舞樂の立すがた、三途川のおばゞに見せてもこしをなやすべきに、春宮の御はゝこうきでんの女御の、光君をしんそこから悋み給ふもあやしく、われまたかくまでおもひまいらするも、どうしたことの縁じややらと身ながらも心うく、またよく／＼おもへばこうきでんのそねみにくみ給ふも、わがかくいとおしく思ふとは、うらはらなる世の人心やと思はるゝ、

大かたに花のすがたを見ましかば（光君のすがたをなり）
つゆも心のおかれましやは（すこしも心にかゝる事はあるまじきにとなり）

古今引歌　露ならぬ心を花におきそめて
かぜふくごとにおもひもぞつく

人に心をおきつしらなみなどゝいふも心をかくることなり、大方のせけんなみの様にひかる君をおもはゞ、心にかゝることもあるまじきにあまりふかくおもふゆへに、こうきでんの光君をにくみ給ふも心にかゝるとなり、

御心のうちにおもひつゞけさせ給ひしことのいかでかもれ出けん、とかくかくすことはあらはるゝ世の中ぞとおそろし、其日は舞樂もおほく詩もあまたなるを講ずるほどに夜更て、やう／＼ことすみぬれば人々もまかり出、后春宮もかへらせ給へば、あとは物しづかになりぬるに、月いとあかうさしいでゝおもしろき夜のけしきなれば、光君はゑひ心ちにうかれいで、この月見すてゝねられもせじ、みな人々は一日のけんぶつにくたびれてよくねたる樣なれば、かやうなる折にこそ思ひがけぬほりだしはあれと、藤づぼあたりをわりなく忍びてうかゞひありけど、中立する王命婦がつぼねの戸も堅くさして人おともせねば、是非なくてなげきながら立かへらんとし給ひしが、どうやらこのまゝにころりとこけて丸ねせんもすげなき心ちすれば、もしやとこうき殿のほそどのにたちよりて見給へば、ほそどのへいづるところに、三つある戸の第二にあたりたる戸ぐちあきて、こよひはこうき殿は御とのゐにのぼらせられ人ずくななる樣子にて、おくのかたのくるゝ戸もあきて人音もせず、かやうなることにてよの中のあやまちはす

るぞかし、こゝが分別どころぞとおもへど、とかくゆかしければ、やがて戸の内へいりて奥の方をのぞきて見給ふに、あるほどの女中はみなよくねたるけしきなるに、わかひよねのこゑなみ〳〵の女中とは聞へぬものごしにて、おぼろ月夜ににるものもなし（このことばよりおぼろ月夜といふ名をつけたり、）と云ながら、こなたへあゆみくるは天のあたへとうれしくて、かくれ居給ふ戸のかげよりふと出て、かのよねのてをとらへ給へば、よねは思ひがけずおそろしとおもへるさまにて、こはたれやらんとふるへ〳〵いへど、光君なにかうとましきとて、

ふかき夜のあはれをしるもいる月の
　　おぼろげならぬちぎりとぞおもふ

おぼろ月と吟じ給ひしはふかきよのあはれをしり給ひたり、われも又おもひがけずあふはおぼろげならぬちぎりにてはなきかとなり、
いる月のごとく大方には思はぬとなり、

とて、やがてほそどのゝかたへいだきおろしてあと戸をおしたて給へば、よねはあさましきにあきれたるさまなつかしうかはゆらし、ふるふ〳〵こしもとをよべば、もし聞つけてくることもやとときのどくなれば、光君日比の粋の智慧をいだして、われはみな世間の人にゆるされたれば、たとへ何人よびよせたりとても何とも思ふ事にあらず、只しのびてこそ互のためもよからめ、いかほど高聲たてゝ人あつめし給ふとも、却つてそもじのためあしからんとの給ふこゑに、さては光君なりけりと聞さだめてぶりしやりする氣も少しやはらぎて、まだ物なれねばどこやらこわゐやうなれども、情なくもぎどうにはしなさじとおもへり、光君は一日の御酒宴にあなたこなたのお盃のかずつもりてよびきげん、さなきだに血氣のつよきわか盛り、ゑひまぎれにこのまゝはなしやらんは口おしく、女もいまだわかたけの、たゞよは〳〵としてつよき心もえしらぬなるべし、あゝつんとわるひことばかりあゝしんきやと云ふ内に、なんなく事すみてさて引おこし見たまへば、おもひなしにや今一しほの色まして美しさもいとおしさもかぎりなきに、はやよもあけゆけば心あはたゞしく、女はましてはづかしやらうれしひやらさま〳〵に思ひ亂たるけしきなれば、光君名をなのり給へ、いかにしてふみをも通はすべきぞ、このまゝにてやみなんとはさり

とはおもひ給はじとの給へば、

朧月夜　うき身よにやがてきえなばたづねても

　　草のはらをばとはじとやおもふ

朧月夜の歌なり、もしこのまゝにてはかなくなりたらば、なきがらをおくりたる草のはらまで、たづね給はんこそふかき御心ざしなるべきに、なのらずばたれともしらぬとてうちすてとひ給ふまじきや、たとへいかほど心をくだきてなりともあひ給はんこそふかき御心ざしなるべけれと、かこちたる歌なり

とかこちたる樣、うらめしさうなるしりめづかひ、命をすてゝもあきたらぬほどかわゆらしきしなしに、光君いよ〳〵なづみ給ひて、まことに聞たがへ給もことはりぞかし、なのらずばたづねまじきといふしんていにてはゆめ〳〵なし、こなたのいひなしのあやまりぞやとて、

光君　いづれぞとつゆのやどりをわかんまに

五の君か六の君かのあひだたしかにしれねば

　　小ざゝが原にかぜもこそふけ

こうきでん方の人にてましませば、ひごろこうきでんがたと光君とは御中よからねば、もしさはがしきことやいできなん、それなきのどくにおもふゆへにまがはぬやうになのり給へ、たしかにその人と名をだにしらねば、文をかよはすべきやうもなしといふ心なり、

そもじさへ遠慮におぼしめさずば、たとへこの方のためいか程難儀なるめにあふとてもなにかくるしからん、もしまたことばじちをとりて、これをかこつけにすいごかしにして、名もしらせずに此まゝやみなんと思ひ給ふかと、はやことにいひもあへず、人々おきさはぎ、うへの御つぼねへ御むかひにまいりちがふけしきにて、女中あまた立さはげば、せんかたもなくあふぎばかりを互にとりかはしていでゝ、人に見つけられじとあしばやにかへり給ふとぞ、

紅白源氏物語巻五　はなのえん

藤の花にまとひ付ても尋度ひとの行衞

よひかげんにあ、さつするはした心しらぬぐはち
なげかしき身ぶりはふかきおもひ入あるよれ

光君御休息所へかへらせ給へば、きのふの花のゑんの舞樂見物に御里よりまいりたる人々あまた、こゝかしこにやすみいたるが、いまだいびきがちなるもあり、やう〳〵めをさましたるもありて、きのふは早朝から夜ふくるまでの御つとめ、御くたびれにて、たはひもあるまひことゝおもひしにさはなくて、夜ひとよいづかたへか御忍びあるき、すきもあらぬ性わるさまかなとそゝやきて、わざとそらねをしているもあり、光君は人々のめをさますもきのどくにて、そろりと御床のうちへいらせ給ひてやすませ給へどもねられもせず、さて〳〵こよひはおもひがけぬほりだしをせしことかな、かわゆらしきよねなりしぞ、てさぐりにもめしつかひとは見えず、いかさまこうきでんのさいもとたちの内ならん、まだゑんづきし給はぬは五六の姫君ならん、その外の御いもとたちはみなゑんづきて、帥の宮の北の方さては頭中將の御内義、きにいらぬふりはすれども、きりやうよしとせけんのとりざた、こよひあいしはまだ人の手にかゝらぬと見えてうゐ〳〵しかりしぞ、いつその事かの北のかたゝちならば、いよ〳〵おもしろかりつらん物をと思ひ給ふぞれいの性わるなりけり、六の君をばなひ〳〵春宮へたてまつらんと、父右大臣どのゝこゝろざし給へるを、おもはずながらこよひすとんとらちあけつれば、そのあとをとう宮へゆづり奉らんもおそれおほく、春宮の御心にも、どうやらがてんせぬことぞと氷くさく思しめさんは、女のためもいとおしかるべきぞや、五六の間いづれとたしかにきゝさだめぬほどは、たづねまはらんもわづらはしかるべし、かのよねもよほどならずわれにきたふりにて、かさねてあはじとは思はぬけしきなりつるに、どうしたしんていにて、ふみかよはすべき手びきをもおしへざりしぞ心えぬことかなと、くよ〳〵おもひ給ふも御心のとまるなるべし、しかしながらかのよね、あまりかる〴〵しきしかたなりしぞ、女はよる

ちよつとあるくにも、ともしびをもたせて人をつれねばあるかぬがおさだまりのおきてなり、かやうなることにつけても、まづかのあふひの上はきつとした所ありてうはきならねば、つぎ〳〵の女中までかる〴〵しく、よにいりてひとりなどありくこともせず、つね〴〵りちぎすぎてなぐさみにはならぬとふそくに思ひしは、いかゐりやうけんちがひぞかし、〔頭注〕この所あふひの上の事なりといふせつあり、又ふじつぼの御ことをほめての給ふといふせつもあり、妻室と頼んには、あふひの上にまさる事あらじ、いたづらなる女にはゆだんのならぬ世の中、大かたは半分わけにせらるゝぞかし、またふじつぼの中宮へも、さま〴〵と心がけ、つけつまはしつ心をくだきてうかゞへども、ふじつぼの御身もちかるがるしからぬゆへぞかしと、かなたこなたおもひくらべられ給ふ、その日は後宴の事にて御前にての御遊、光君はさうの琴をひかせ給ふ、きのふの舞楽とはかはり、しつぽりとしておもしろさ、かんにたへたる事どもなり、あかつきがたにやう〳〵御遊もはてぬれば、ふじつぼはすぐに御とのゐにのぼらせ給ふ、けふは後宴もすぎぬれば、かのよねさ・とへやかへりぬらんと心もこゝろならで、粋のこつてうよし清惟光兩人にとくといひふくめて、うかゞはせ給ひしに、光君は御遊すぎて御休息所へかへらせ給ふ所に、かの兩人のものども立かへりて申やう、よひより玄輝門のかたに立かくれてうかゞひ候へば、たゞいま女車ども引いだして、こうきでんの御里の人々かへらせ給、中に四位の少將、左中辨などいそぎゐはてゝおくらせ給ふ御くるまあり、かうきでんの御さとおりにやとおもふほどのけしきにて、なみ〳〵の女車とは見えず、車三つばかり引つづけて出侍りしと申あぐるに、光君はまづむねもつぶれて、いかにしてそれぞとたしかにきゝさだめん、五の君にもせよ六のきみにもせよ、父右大臣どのこの事をしり給はゞ、日比がせひばりたる人なれば、ことごとしく聟どのとてもてなされんきのどくなるべし、さりとては、このまゝしらでうちすぎんも口おしかるべし、いかにせましとおもひわづらひてつくづくとながめふし給へり、むらさきの君いかにさびしからん、留守のまもよほどになれば、さびしきにたいくつしてやあるらんとおもひやり給ふ、かのおぼろ月よとゝりかへ給ひしあふぎは、檜扇のさくらの三

重かさねにて、こきむらさきの雲やりに、かすめる月をかきて水にうつせる心ばへ、もようはふるけれどもちなしからにやなつかしう、草のはらをばとはじとやおもふとて、うちわびたりしおもかげの、心にとまりてわすられねば、

光君世にしらぬこゝちこそすれ有あけの
　月のゆくゑをそらにまがへて

細流說　此歌源氏物がたりの中の秀逸なり、五もじことさら妙なりと云々、
花鳥說　吉水僧正この歌をとりて、有明の月の行衛をたづねてぞ野寺の鐘はきくべかりけるとよみ給へるなり、源氏をば歌をも詞をもとりてよむべきなり、俊成卿も源氏見ざらむ歌よみは無念のことなりといへり、また花のゑんの巻は殊にすぐれて艶なる共云給へり、

と書つけて、またあふまでのかたみぞと大せつにしておき給ふ、あふひの上の御方へも、このほどはおとづれ給はねばいかゞとおぼしめせども、むらさきのうへも心もとなくて、けふは一日むらさきのうへをなぐさめて、暮がたよりあふひのうへの御方へとおぼしめして、まづ二條院へおはします、むらさきのうへは、見るたびごとにうつくしさもまさりてあいきやうつきあいらしき心ばへ、いやらしきところすこしもなし、わが御心いつぱひにをしへたてんとおもひ給ふに、よくかなひてうれしくおぼしめす、しかしながらおとこのをしへなれば、ちとしやれすぎていたづらなることやまじらんと、心もとなくおもはるる、光君は花のえんのおもしろかりしこと、なにやかやと御物がたりし給ひ御琴などをしへ給ひて、くれかゝればいで給ふを、むらさきの上は、いつもの事ながら口おしう思ひ給へど、いまははやまへ／＼のやうにもなく御留守になれ給ひて、わりなくも慕ひ給はず、あふひの上の御かたへおはしましたるに、れいのごとくそのまゝいでゝ御たいめんもなければ、ひとりつく／＼とよろづにおもひめぐらしてあまりのことに、さうの御琴かきならして、さいばらぬき川のせゞの、やはら手枕、やはらかに、ぬるよはなくてと、はやりうたをうたひ給ふも御したごゝろおかし、御しうとの左大臣どの、光君の御出ときかせ給ひていそぎ出給ひて、一昨日の花のえんのおもしろかりしこと、この年までながらへてめい王の御代四代を見侍りしが、このたびのやうに詩文もすぐれておもしろく、舞樂物の音までよくとゝのひて、見きくにつけてよは

ひののぶるやうなる事はあらざりき、その道々の物の上手どもおほく、とりわけそこもとの、諸事こうしやにて、舞樂までよくしくませ給ひしゆへに、一しほおもしろかりしぞかし、あまり感にたへかねて此翁もほとんど舞いでぬべき心ちし侍りしとの給へば、光君もすこしはじまん心にて、いやさほどかはりたるしくみもし侍らざりし、むかしもいまも一げいにすぐれたるものはかだましく、そげものゝわがまゝにて、おほやけにもいでゝつかへず、こゝかしこに引こみて、かくれいたるをたづねいだして舞などしくませたるばかりにて侍りし、ほかの事よりも頭中將のまひ給ひし柳花苑大あたり、のち〳〵のてほんにまなるべきほどに見え侍りし、ましてやそこもとの、立いでゝ舞せ給はゞ、いまのよのめんぼくをほどこし後代までのかたりつたへになり侍らんものをとつばなかし給ふほどに、辨の君中將とて、これもあふひの上とははらがはりの御兄弟なるがまいりあはせ給ひて、ゑんがわのかうらんによりかゝりて、いづれも笙ひちりき、よこぶえなどふきあはせてあそび給ふは、いよ〳〵おもしろし、かのおぼろ月よは、はかなかりしゆめのやうに光君にあひ給ひしことおもひいでゝ、心のうちにはゆかしきやらなつかしきやら、くよ〳〵と物なげかしうながめがちにくらし給ふ、春宮へは卯月にまいり給ふはづなればもはやまもなく、いかにもしていま一たび御げんなしたき物かなとおもふに、かひなく日かずもすぎゆけば、春宮へまいり給ひて後は、あひ見ることもいよ〳〵おもひきりたることとならんと、わりなくおもひみだれ給ふ、光君もたづね給はんにあとかたなき事にはあらねど、かうきでん方の人なれば、よねの心に如在はあらざれども、ひごろかうきでんのわれをにくませ給へば、そのあたりにかゝりあひ、もしつゝもたせにしかけられ、うき名をとらんもきのどくとおもひわづらひ給、比しもやよひの廿日過に、こうきでんの御父右大臣どのゝ御方にて、弓の氣(け)ちとて踏歌(たうか)の後宴のふるまひありて、親王(みこ)達はいふにおよばず公卿殿上人のこらずまいりあつまり給ひて、すぐに藤の花のえんせさせ給ふ、世間のはなざかりはすぎたるに、ほかのちりなんのちにさけとやあつらへ給ひけん、右大臣どのゝ御庭前のさくらごほん、いまをさかりと咲み

だれておもしろきに、御殿はあたらしくつくり給ひて、御孫の女宮がたの御裳着の日の晴にみがきしつらはれたれば、かゞはゆきまできれいなり、惣じてこの右大臣どのは、なに事にもいかめしう、はな〳〵としてはでなる事をこのみ、ぜひばりたる御氣質也けり、光君にも一日大裏にて御參會のおりから、直に御やくそくありしかども御出なければ、公家中間のたて物がかけて、どうやら物のはへなきやうなれば、御子の四位の少將を御つかひにて、御ふみをつかはさる、

右大臣 わがやどの花しなべてのいろならば
　　なにかはさらにきみをまたまし

上の句わがやどの花をほめたるやうによまれたり歌などよむものゝ心あるべきことゝなり

をりふし光君は大裏におはしませば、少將大裏までたづねまいりてこの御ふみをまいらせたるに、ひかる君直に此よし御かどへそうもん申させ給へば、御門此うたを叡覽ありて、わがやどの花をなべてならずとほめたるは、したりがほなる歌のさまかなとうちわらはせ給ひて、わざとつかひをつかはされしに、さう〳〵まいられよ、そのほうが姉妹の女宮方は、右大臣の孫なればあなたにてそだち給ところなれば、ほかのやうにうと〳〵しくすべき筋ならず、たがひに中よくしたしきがよかるべしと、常々右大臣どのと光君御中よからぬを、御門も粹にてよくしろしめしたれば、御いけんのやうにおほせらるれば、光君はかしこまりて、やがて御裝束引つくろひすこしきをもたせて、くれかゝる比に、いやま〳〵とまたるゝほど見合て御出有けり、櫻の唐の二重織ものゝ御なをし、むらさきのうすきやうなるゑび染の御下着、裾をながく引なして、みな人々はよのつねのきつとしたる裝束なるに、しどけなき大君すがた、どうもいはれぬとのぶりにていつかれいり給ふは、またたぐひなきありさま、御亭主の御じまんの花のいろかも光君にけしきおされて、かへつてことざましにぞありける、御遊のおもしろさはいふにおよばず、御酒もりによもすこしふけゆけば、光君はゑひたるふりにもてなして座敷をそろりと立て、おくのかたの御殿に、こうきでんの御腹の女一のみや女二のみやのおはします東のかたのつま戸口によりてゐ給ふ、御兩所ながら光君の御兄弟なれば、御心やすぶりなるべし、ふ

じの花は、こなたの軒のつまよりはい出て、さきみだれたるはなを見給ふとて、御かうしもあげ渡し〆中あまたいたり、すだれの下より見せかけすがたゐ袖口どもあまた見えて、あまりはなやかなるありさま、大裏にて踏歌のせちえなどにこそ、いだしぎぬとてかやうなる事はあれ共、所がらにやにやはしからず、藤つぼの中宮などはそこらはよくのみこみ給ひて、かやうなることはし給はず、なに事につけてもきのついたるしやれものぞやと、まづおもひ出られ給、何とぞしてこのおりから、かのおぼろ月よをたしかにそれとしらばやとおもひ給ふ御した心なれば、なまゐひのふりにもてなして、ことのほかしゐられてくるしきに、りよぐはいながら御兄弟のよしみに、かげにもかくして下されなんやとてすだれを引揚て、身を半ぶんほどさしいれ給へば、女中肝をつぶして、こはせうしよからぬものこそ、よひしゆによしみあるをば、かこちよるものなるにといふけしきを見るに、おしなべてのみやづかへする女中とは見えず、さしてをも〳〵しくあらねど、どこやらがれき〳〵と見えたり、そらだき物のにほひは、はなももげるほどにふすぼりて、立ゐふるまひもしやん〳〵としてしつぽりとおくゆかしきけしきはみぢんもなく、只當世風のはでなるしだし、はなやかなるを好まるゝと見えたり、女宮方さてはこうきでんの御いもとたち、花見給ふとてこゝにゐ給ふなりけり、あねやいもとのみやがたのおはしますまへにて、色めきたることはいかにしても不遠慮なることゝはおもへど、とかくおぼろ月夜の心にかゝれば、もしあいさつにてしるゝこともやと思ひ給ひて、さいばら石川のこもうどに、帶をとられて、からき悔するといふはやりうたをわざといひたがへて、あふぎをとられてからき悔すると、おどけたるこわいろにての給へば、帶をとられたらば後悔もあるべきはづの事、あふぎをとられたばかりには、それほどこうくはいもあるまいはづの事じやのに、あやしうもふりをかへたるこもうどかなと、きいたふうにあいさつするは、なにのした心もしらぬぐはちなるよねなるべし、あいさつはせで只時々、あゝ、せうし〳〵ときのどくがるけしきのよねにきがつきて、さてはこれなるべしとはやのみこんで、そのよねのそばへよりて、木丁ごしに手をにぎり

て、
光君あづさゆみいるさの山にまどふかな
　　ほの見し月のかげや見ゆると

けふは弓のけちなれば尤ゆみにえんあり、もしおぼろ月よのみえ給ふかとおもひてなり、

くるはたれゆへそさまゆへと、おしつけにの給へば、おぼろ月よも、さては光君われぞとたしかにしらせ給ひけるぞとおもへば、心のうちのうれしさえこらへられぬほどにて、

朧月よ 心いるかたならませば弓はりの
　　月なき空にまよはましやは

光君のしん實におもひ給はゞ、月なき空にもまよひ給はじ、まよふといふはしんせつになきゆへぞと、源氏の歌の中の五もじにかゝりてうらみたるなるべし、おぼろ月よは天性歌よみなり、これよりすへ〴〵の巻にて、心をつけて見るべし、

といふこゑたしかにかのよねなれば、光君の御こころの内うれしきともかたじけなひともどう共かふともとぞ、

二條太政大臣共
右大臣殿
朱雀院の御母方の祖父はしめは右大臣明石の巻に太政大臣にてうせ給ひしよし見えたり

- 藤大納言　朱雀院御位の麗景殿の女御の父
- 四位少將　藤の花の宴の時父大臣のつかひにまいられし人
- 左中辨　おぼろ月よの大裏より出給ふ時御おくりせし人
  - 四位の少將左中辨いそぎ出ておくりし給とあり
- 弘徽殿女御　大后とも又は悪后ともいふ朱雀院の御母なり此巻に春宮とあるは朱雀院の御事なりあふひの巻に皇太后宮に成給ひわかなの巻のうへにてうせ給ひたるよし見えたり御心入よからぬゆへに悪后といふ悪の字を付給へりすへ〴〵まで行跡の善あし見る人心をつけ給へ
- 帥の宮北方
- 頭中將室　四のきみなり
- 五の君
- 朧月夜尚侍　此巻に朧月夜とあるこの人の事なり

禁中にて花のゑんの夜、光君に逢そめ給ひ、ふじの花のゑんの夜、父左大臣どのにてたしかにこのおばろ夜のことを見さだめ給ひて、それよりのちはたび〳〵しのびてかよはせ給ひしが、

春宮へまいりて後もしのびかよひ給ふ事たびかさなりてつゐにはあらはれ、光君須磨の浦へながされさせ給ひしなり、この卷の本文に、おくのくるゝ戸もあきて人のおともせず、かやうにてよの中のあやまちはするぞかしとおもひてと有所、須磨のうらへながされさせ給ひし起り也、一念のおこる所にて善惡をよくわきまへざれば、すこしのことつのりてのちには大きなるあやまちとなる事、見る人よく〳〵心をつけ給ふべし、

紅白源氏物語終

尤の雙紙

よろこびながきとしのころかとよ、これかれあつまりて、かの清少納言がまくらさうしを、まねびてかきたる物あり、その名を犬枕といへるなり、此二枕は、あしびきのやまとうたのむつのたねをあらはし、すゑの世の人のためしとなるべき事をねがひ、言葉すなほにしなたくみ有てこゝろ妙也、右のまき〳〵にかきもらしぬる、ことそぎてかたはらいたき事どもをとりあつめ、此狂言となせる物ならし、しかるに今はたしきたへの、まくらといふ名をかたどらん事は、神慮もおそろし、さはありといへ共、おもかげのいさゝかかよふなるをとて、枕とよむもじの一方を殘して、尤のさうしと名付侍りぬ、

尤の雙紙目錄

上

下

尤の雙紙上

一　ながき物のしな〴〵

一、それ漢朝のいにしへ、長き事のためしには、堯舜之御代七百年、周之御代八百年、前漢後漢四百年、我朝にては、神代のむかし、すべて八十三萬六千八百餘歳とかや、今人王の御代と成ても、みもすそ河の流ながく、百王萬歳の御代ぞかし、をとに聞ても長き物は、かの天竺の石の橋、日本に宇治橋、勢田の橋、回廊の長きはいつく島、三十三間、鎌倉之建長寺廊下、通天橋、天橋立、みほがさき、海士のたく繩、高なはや、青鷺のくび、鶴のあし、山鳥の尾に鴫のはし、ゑんかうが手にざうのはな、うさぎのみゝにうしのした、神馬の尾かみ、神子の袖、上﨟のかもじ、七なんがそゝの毛、むくつき男のひげ、ゑぞがはな毛、文字あまりの歌、催馬樂歌、長歌、短歌、源氏若なの上下、公家の酒盛、連歌席、上手のうつ碁、下手の談義、しんどくの盤若六百卷、正木のかづら、青つゞら、青柳の糸、藤の花ぶさ、永日をよめる歌に、

さくらさくとを山どりのしだりおの
　なが〱し日もあかぬ色かな
又秋の夜のながきをよめる、
あしびきの山鳥のおのしだりおの
　なが〱し夜をひとりかもねん
又すまのなが雨、それよりながきは五月の雨、
五月雨のふる屋の軒のつれ〲と
　いつをかぎりのながめなるらん
北州千年今此御代
長生殿裏春秋富、　不老門前日月遲

二、みじかき物のしな〲

一、すそのまくつぎ、袖ぶくりん、かはぼりはをり、よの袴、戸田の小太刀に長柄のみ、しやう〲のうたひ、さる舞、上手の談義、いとまの狀、土籠の四そく、ねこのつら、ましこのはしにうづらのお、つくりのとつて、ちやぼのあし、夏の夜、冬の日、ふゆうのいのち、電光、朝露、石火、人間五十年はゆめまぼろし、

三、たかきもの丶しな〲

一、ぼんてん、たうり天、下界にゐてはふじのだけ、淺まのたけにたつけぶり、高間のみねのしら雪、忝なくも御門の御位、もろこしにては、秦始皇のかんやうきう、しんのしやうわうのつくられし九層臺、日本にては、雲ゐにかゝやく高き屋、されば延喜御製にも、
たかき屋にのぼりてみればけぶり立
　民のかまどはにぎはひにけり
東寺塔の九りんより、ひえの山やあたご山、杉の梢の天狗のはな、しなこそかはれ高き物は、虛堂のぼくせき、大灯や貫之が歌書、定家色紙、頓阿、堯幸、つねよりのたんざくを今もてはやす、扨あらがねの土の物、まつぼ、分林かたつきに、丸つぼ、なすび、しりぶくら、又花いれはかぶらなし、鶴の一こゑ、せいしどう、扨わきざしやたちかたな、吉光、正宗、國俊や、かの行平にしくはなし、後藤のめぬき、しら猪のうつぼ、ひでりの年のこめのねと、いんずもたかき金なり、山伏のふくほらの貝、かれうびんがのこゑたて丶わらべのうたひ、ばんしき、鸞鏡、上無調、扨ははなげのあぐるけいせい、

四、ひくき物の品々

一、なぎなたぼこ、一寸ぼうし、五位六位のくらゐ、ひびかぬざしきおちえん、くつぬぎ、谷の下庵、おんみ

つのだんがう、いちこつのぢごゑ、しのびねのむつごと、

犬がみのとこの山なるいざや川
　いざとこたへて我名もらすな
熊野なるおとなし川にわたさばや
　さゝやきのはししのび〳〵に

五、ひろき物のしな〴〵

一、大海、大空、むさし野、千帖敷、孝謙天皇の〇〇、大君の御心、郝隆が胸、あはうのはな、はんにやのめんの口、大海の茶入口、のとがまの口、鵜ののど、くまのまたぐら、かり衣の袖、大舞の衣、はびろがしはにばせをのは、三重韻には支脂之韻、下平に陽唐、庚耕清、大唐は四百餘州とかや、日本にも奥州は五十四郡也、釋尊御せつぽうの時、大衆八萬四千の會座、みな人毎のこと草にいふ、おふぢのづきん孫のきて、おやのくつはくいたいけさよ、

六、せばき物のしな〴〵

すはりのしり（付うゐあな）　かぎのあな
しやくはちの穴（付火吹竹のあな）　竹の筒にて天をのぞく
井のうちの蛙　蚊やりたくいゑ
たゝぬ風呂　一疊半のすきや
手島むしろ　とふのすがごも
たびのひぼ　たゝみのへり
屛風のへり　かけをの風躰一文字
庭のやり水（付みぞ川）　ねずみど（付ろぢ口のくゞり）
はりのみゝず　とをいのやのはね
くすりつゝみがみ（付はくかみ）　かたぎぬをよるの物
しはき人の心中　のりあひのふね
ひとつばし　山田のあぜ
をのゝほそみち　けふの細布（糸のほそきにはあらずはばせばき事也）

にし木々はたてながらこそくちにけれ
　けふのほそぬのむねあはじとや

七、きれいなる物の品々

一、路地に水うちたる　あを竹のぬれえん
上手のいろりのうち（付ふろ）　なまかべ
青ひばのかり屋　あたらしきたゝみ
風呂あがり　庭に青石しきたる
筧の山水　ぬぐひいた
若衆のはの白き　おんなの身のしろき
大はくざら（付びいどろ）　いくつきても白小袖

うるしくさきわん　木具かはらけ
れうりなます　こほりざたう
水栗すいせん　ほしいひ
もしあらばむよくの人　けんじんのこゝろ
池のはちす
はちす葉のにごりにしまぬ心もて
などかは露を玉とあざむく

八、むさき物のしな〳〵

一、掃除せぬ庭、ふるだゝみ、はたごやのめし、はげたるわんおしき、しるかけいひのわけ、くひこぼしたるあがりぜん、かさでのきうじ、わか衆のはがすみ、かたびらのしみもの、はなくそ、目くそ、つまくそ、まづしうしてへつらふ人、何よりもきたなきはこひの道、
戀といふそのみなかみをたづぬれば
ばりくそあなのふたつなりけり

九、うるはしき物のしな〳〵

一、わか衆の右筆、俗人の文字有、連歌の宗匠、詩歌の達者、おなごのうたよみ、はしがきじんじやうにしたる文、君達に家後のうしろみ、女のそばのびくに、兒のそばの出家、口上のよき使者、太刀折紙儀式、よめ入の夜の請取わたし、すいしやうのじゆず、かゞりのまり、屋かたへ入に鷹のかひこゝろ、付馬のゆあらひする、心すなほにことばたゞしき人、心うちつけてあいきやうづけるわかしゆおんな、

十、うるさき物のしな〳〵

一、すいきやう人、年寄女房、あふひの卷に源内侍といへる女、賀茂のまつりのかへさに、車のうちよりあふぎを、げんじの君へ奉りけり、ひらいて御らんじければ、あふぎのつまに、
はかなしや人のかざせるあふひゆゑ
神のしるしのけふをまちける
五十にあまる女なれども、うたよくよみてことをひきけるにや、源氏の御心まどひて、かりそめにちぎり給ひしを、けさうじてたわぶれけり、げんじ心うるさくおぼして、八十氏人のさかへしありけるを、はづかしくやおもひけん、へびづかひ、犬のつるみたる、てんかん、くつち、くさり物のにほひ、ふるきさかなのれうり、こすいかたぎの人、ものこひづかひ、いか物ぐひする人、ねぢけ人、
ならざかやこの手がしはのふたおもて

とにもかくにもねぢけ人哉

むかしむさしなるおとこ、京なる女のもとへきこゆればはづかし、きこえねばくるしとかきて、上がきにむさしあぶみとかきておこせてのち、をともせずなりにければ、京より女、

むさしあぶみさすがにかけてたのむには
とはぬもつらしとふもうるさし

十一、うれしき物の品々

一、おやのあはするつま、女のさいわいありてきに入はうれし、ときゆかりに、まれにあふはうれし、人のきて子をほむるは嬉し、いくたびも、おのこ子むまれたるは嬉し、うゐ孫、やす〳〵とむまれたるは嬉し、我ひとりに、かぞう給は別てうれし、まんさくなるとしの知行はうれし、ふりよにほりいだしたるはうれし、かねをひろひたるはうれし、くじに取かちたるはうれし、たのもしのふだ、つきあてたるはうれし、諸勝負にかちたるはうれし、諸藝しすましたるはうれし、鷹をはじめてとりかひたるは嬉し、宿願のかへりまうしはうれし、うへ木の花、はじめてさきたるは嬉し、よろづねらひ物に、あたりたるは嬉し、絕しふるさとのつてきゝて嬉し、學匠に文字不審、付師匠に大事を問て嬉し、待えてあふ夜はうれし、

うれしさをむかしは袖につゝみけり
こよひは身にもあまりぬる哉

十二、かなしき物のしな〳〵

一、まつ夜のさはり有はかなし、夜ふかく別てかなし、

感レ時花濺レ涙、恨レ別鳥驚レ心

あり明のつれなくみえしわかれより
あかつきばかりうき物はなし

何となく秋のゆふべはかなし、

さびしさにやどをたち出てながむれば
いづこもおなじ秋のゆふぐれ

しかのね、むしのねきけばかなし、

おく山にもみぢふみ分なく鹿の
こゑきくときぞ秋はかなしき

きり〴〵す夜さむに秋の成まゝに
よはるかこゑの遠ざかりゆく

司のめしにもれぬるはかなし、

契りをきしさせもが露をいのちにて
あはれことしの秋もいぬめり

親にをくれ、子を先達てかなし、

すゑの露もとのしづくや世の中の
をくれさきだつためし成らん

何よりもつたなきは、すりきりてかなし、

貧家親知少、賤身古人外、

又古き連歌に、

こゝろのほかの身をいかにせん
ゆかりにもおちぶれぬればうとまれて

俄の客の有に肴のなきはかなし、さむきもかなし、あつきもかなし、ひもじなるは猶かなし、蘇父が十九年の間一足をきられておちぼをひろひしかなしさ、又法性寺の修行俊寛僧都、鬼界島に一人殘されし悲しさ、王昭君が胡國へうつされし悲しさ、又昭陽人が十六にてうち參りして、楊貴妃にねたまれ、六十に成まで玄宗にもえあはで、昭陽宮にこめられしかなしさ、かたみぞ見るたびに悲し、

かたみこそ今はあだなれ是なくば
わするゝ隙もあらまし物を

光源氏おぼろげならぬ御契りゆゑ、御年三十五の秋つかた、おもはずも津の國すまのうらへうつろひ給ひしかなしさ、又玉かづらの君、肥後監におそはれて、しのびて都へのぼり給ひしを、はやぶねにのせ奉り、ひゞきのなだもなだらかに過ぬ、海賊の船にやあらん、ちいさき舟のとぶやうにてくるなどいふ物あり、海賊のひたふるよりも、ものおそろしき人のをひくるやと思ふかなしさ、女院心づくしよりかへりまし〳〵て、大原のやまざとにおはしましゝ悲しさ、又一宮の御息所松浦が船にとらはれて、浪にたゞよひ船にうきて、あはのむしまに年月を送り給ひし悲しさ、いづれをいづれといへばさらなり、

十三、みだれたる物のしな〴〵

一、呉越のみだれは三年三月、秦のみだれは四十年、我朝にては源家平治のみだれ、又平家壽永のみだれ、

みだるゝもみだすも人のとがならず
ときいたりぬとみゆるよの中

天ぐのなげざん、かさがしら、佛の御いましめをやぶらば、飲酒のみだれ、笛太鼓のおもしろきは猩々のみだれ、さはらばおちぬべき萩の露のみだれ、ひろはゞきえなんとする玉ざゝのあられのみだれ、春風にもまるゝは柳の糸の亂、秋風にもまるゝは萩すゝきの

みだれ、殿にもまゐるゝは女のねくたれがみのみだれ、みちのくのしのぶのみだれ限しられず、

十四、しづかなる物のしな〲

一、元日の朝、歌の會、連歌の席、定家のはやし、亂拍子ふむ間、ごとうのひかりすご〲として、みや人のしはぶくこゑ、夜學の灯、

たづねくる友もうらめしひとりゐて

ちぎりさはらずたのむゆふべを

さむき夜に霜を聞て心をすます、九年面壁座禪の床、弘法大師入定にて、二尊三會の曉をまつて、しん〱とあるおくのゐん、あかつきあか水をむすぶをこなひ、下樋の水のをと苔に聞えて閑也、名ばかりは義經のおもひ人しづかとかや、

江南野水碧ㇾ於ㇾ天、中有二白鷗一閑似ㇾ我、

十五、はやき物の品々

一、だんじに三千世界をめぐるいだてん、弁捷疾鬼、神なりののるといふ龍のこま、周のぼくわうの八ひつの駒、項羽のめされしばううんすい、ひまゆく駒、ひつじのあゆみ、

けふもはや午のかひこそ吹つなれ　赤染衞門

ひつじのあゆみちかづきにけり

みつばのそや、ほかけ船、曲水のさかづき、石ばしる水、くだりざか、下り船、のべ足のまり、兵法人のさそく、鼠にねこ、したどに物いふ人、光陰矢のごとし、よめがしうとになるぞほどなき、

十六、をそき物のしな〲

一、日待の夜のあくる、二十三夜の月待、申まちのはつ鷄のこゑ、人をまつまのひとりね、

なげきつゝひとりぬる夜の明る間は

いかに久しき物とかはしる

春の日の暮る、秋の夜の明る、老のあゆみ、上りざか、のぼりぶね、牛の地道、ひきがへるの一さん、みろくの出世、御所の御成はすは〱半とき、能因法師が旅行、

都をば霞と共にたちしかど

秋風ぞ吹しら川の關

十七、しづめる物のしな〲

一、おどりのおんど、しゃまのかね、ひやし異見、警固の下知、大事の談合、逸起のたいち、海底にしづめるはまんこが玉、又難波堀江の玉がしは、

難波江の藻にうづもるゝ玉がしは
　あらはれてだに人をこひばや
西海、四海に身をしづめしは、小宰相の局、又いかりをかづきてしづむもあり、弓と弓とをとり合て二人つれてしづむもあり、中にも哀をとゞめしは、八歳にておはします安德天皇を、二位の尼いだき奉りて、船ばたにのぞみ給へば、扨は心得たりとて、びやうの柳のいとけなき御手を合て、御十念かうしやうにとなへおはしまし、是をかぎりの御製にて、
　いまぞしるみもすそ川のながれには
　　なみの底にも都ありとは
とよみ給ひて、千尋のそこにしづみ給ふ、いと哀ふかき事共也、又津の國いく田のさとに女ありけり、おなじ國にさゝだおとことといふあり、又和泉の國にちぬのますらといふ男ありけり、この女を二人してわがものにせんとあらそふ、女心をさだめがたくて、あの川にうきたりける水鳥をい給へ、あたりたらんかたへしたがふべしといふ、さらばとていけるに、二人の矢つぼ同じさまにひとつかもにあたりけり、女せんかたなくて、
　玉くしげ二人が中に身はひとつ
　　むすぶおもひをいかゞさだめむ
と、一首のうたをよみて、此いく田川に身をなげむなしくなる、二人のおとこもつゞいて身をなげけり、三人しづめるしがひをとりあげて、ひとつ土中につきこめたり、もとめ塚とて、いく田川の小野に今にありけるとぞ、
　いふならくならくのそこに入ぬれば
　　せつりもしゆだも替らざりけり
十八、うかぶものゝしなぐ
名にしおふうき草、水に瓜、名に瓢、
　如ニ水上瓠芦子一一着即飜、
つみあさき人、
　一子出家九族生レ天、
詩歌に作有人の句はやきこゝろ、大水にとちのから、朝しほにつりぶね、雨の後のうろくづ、水鳥、俄なる大名の一類、うれしきにもうかぶはなみだ、川ながれの死人、
　ものゝふのやたけごゝろのひとすぢに
　　身を捨てこそうかぶ瀬もあれ

十九、おもき物のしなぐ〵

君子　君子不レ重則非レ威と云々、

仁の道　仁はをもしと也、金、石、しうのおん、

めぐみある主をおがみてのちの事

神もほとけも第二第三

尤おもきは父母のおん、ためしのかぶとぐそく、鍍(かざり)袴、古布子、年貢俵、商人のかひ道荷、下手謠、上手のくすし、しめり茶うすに鮨のをし、おつぼねののり物、ぶせう物のたちゐ、笠の雪、

笠重呉天雪、

二十、かろきもの丶しなぐ〵

一、麻がら、灯心、つみわた、かみぎぬ、ぬかだはら、くもまひ、蝶とんぼうのとぶ、さしばのひばりをせむる、はづむ駒、女の下知、まめなる物のたちゐ、上手謠、下戸のうけたるさかづき、ほだしなき桑門、名さへかる石、から船のあし、ひようたん、

瓢箪屡空、草滋二顔淵之巷一、

二十一、ふかき物の品じな

一、物いはぬ人、分別有人、碩學の老僧、千尋海、夏山、沼田、くれなゐの色、雪道、

三越路の雪のしるしにさほさして
ふかき契りぞするはみじかき

くつろがぬあら鷹、古みの刀、歌物語、詩聯句の沙汰、觀世太夫が女面、ふかき契りには、

楊貴妃歸唐帝思、李夫人去漢皇情、

ひよくれんりのかたらひ、反魂香をたくけぶり、又在原の業平はいとむつまじき女にたはぶれて、

秋の夜の千よを一夜になぞらへて
八千夜しねばやあく時のおらん

返し、

秋の夜の千夜を一よになせりとも
ことば殘りて鳥やなきなん

又光源氏、まだ中將にものし侍りける比、六條わたりの御忍びありきの誰がれに、ほのぐ〵みへし花の夕がほの草枕、小家がちなるとなりに、みたまさうしのけはひして、南無たうらいたうしみろく佛と唱ける、遠山ぶしのこゑを聞て、

うばそくがをこなふみちをしるべにて
こん世もふかき契りたえじな

二十二、淺きもの丶しなじな

一、猿の智惠、狩場のきじの草がくれ、女のこゝろ、
いでゝ行ば心かろしといひやせむ
世のありさまを人はしらねば
分別なき人、かた事いふ人、ことば多き人、無學の僧、
あらみの刀、水ざうすい、すいせん鉢、ちやつ、くりば
ち、一夜づまの香の物、からなし、冬枯の野山、ひでり
の川瀨、山の井、
あさか山かげさへみゆる山の井の
あさくは人をおもふものかは

二十三、大切成物のしなじ〵

一、なさけふかき主君、命をかろんずる臣下、しよき
やう、ていゑいがためし、師弟、親子兄弟、夫婦の中、
女子あまたの中に一人の男子、智惠若衆、普代の家
人、外様にても勇者、名物の道具、どうおちのかたな、
手にあふたるむま、手にあふたる弓、鶴取の鷹、鷺取
の鵜、白茶、ぶだう酒、早咲の椿、けんふの梨、かたみ
の文、師匠の印可、古今傳授の人、知音ならぬとも物
の名人は、誰も大切におもふべき也、

二十四、稀成物のしなじな

一、むかし淸見原の天皇と申奉りしは、天武の御事
也、大伴の王子におそはれ給ひて、吉野山へまどひお
ちおはしまして、しばらくひなの皇居にうつろひ給
ぬ、八月十五夜くまなき月に琴を引給へば、五人の天
乙女あまくだりて、舞をまひけると也、是豊のあかり
の五節の舞の初とかや、その時御門の御製に、
をとめ子が乙女さびすもから玉の
玉手にまきてをとめさびすも
又むかしするがの國三保の松原のうちに、宇土濱と
いふ所あり、天人下りて舞かなでし事あり、あづまあ
そびのするが舞のはじめ也、
又昔からはしの中將とて、古來不双の美男の公家あ
り、あまさへ笛の上手たり、天道につうじてぼんてん
のあるじ、むこにとり給はんとの勅使あまくだりぬ、
今の京五條てんしの宮これ也、節分の日あまねくま
うずる宮なり、
いづれも天人のあまくだる事稀なるためしぞかし、
君が代はあまの羽ごろも稀にきて
なつともつきぬ岩ほならなん
猶も稀なるは、もろこしある山寺に、講經する僧あ
り、一人の叟來て聽聞す、僧のいはく、汝いづくのも

のぞと問、叟答て申さく、我はこれ此山下の澤にすむ龍神なり、今年ひでりなりければ、隙を得て貴き御法を聴聞するといふ、僧のいはく、さらば雨をふらして民のこゝろをやすめてたべといふ、やすき程の事なれ共、江湖を上帝より封じて、水をもちゆる事心のまゝにならずといふ、僧のいはく、此硯をもちいても、その行術成てんやと問、叟則硯の水をのみて歸去、其夕雷電おびたゞしくて、あかつきにをよび大雨しきり也、夜明てみれば雨のふる跡ことぐゝく墨の色也、又稀なる事には、荀令君至二人家一三日坐席香し、薫大將に同じ、又稀成は西王母がその桃とかや、

　三千年にあるてふ桃のことしより
　　花さく春にあふぞうれしき

前代未聞ふしぎなる事は、聖武天皇の后光明皇后、崩御の御跡を帝ふかくかなしみおはしまして、ぼんでんにきせいし奉り給へば、ゑむまわうあはれみて、二たび娑婆へ送りかへしゝためし有と也、又笙の岩屋の日藏上人頓死して、焔魔王宮へゆき、地獄をみて延喜帝にあひ奉り、これも二たび蘇生しけるとぞ、人生七十古來稀也といへ共、八十九十百年に餘も、七夕の契りは年に一夜の夢のたゞちとかや、それよりもまれなる契りは、玄宗又秦始皇の后は三千人とかや、凡一年の日數は三百六十日なれば、一夜づゝの契りにても、まれなる契りぞかし、

　あだなりと名にこそたてれさくら花
　　年にまれなる人もまちけり

しはきものゝ人を振舞もまれなるべし、

　二十五、たのもしき物の品じな

一、越王勾踐呉國へとらはれ給ひけるを、種々のちりやくをめぐらし、終に呉王をほろぼし、會稽のはぢを雪がせ奉る范蠡、主の御前にてかげごとのなき人、りちぎなる知音、勇者の臣下、名物の道具人に不レ知持たる、上手のくすし、代つぎの子のきようなる、鎌倉右大臣實朝卿の時、門の柱によみ人しらず、

　山はさけ海はあせなん世なりとも
　　君に二ごゝろわれあらめやは

かさぎの城にて楠が勅答、佛神の奇瑞、されば觀世音の御歌に、

　たゞたのめしめぢがはらのさしも草
　　われ世の中にあらんかぎりは

二十六、にくき物のしな〴〵

一、かたき筋の者、後妻、まゝ子、ぬすびと、鷹につく鳥、物をかぶる鼠、花をちらす鳥、さいえんをついやすきり虫、書物をさすしみ、主の前を通にこしをかゞめぬりよくわいもの、口答する家人、すねごといふ座當、見物のまへにせいの高き人、いそぐにさはがぬわたし守、付馬追、周のかくい、たうのろく山、野間のうつみの長田、讒者の梶原、さし出者、役者付に違亂云藝者、名人がほして物をしらざる人、はい、

蒼蠅々々嗟ニ爾之爲レ生、古文眞寶

二十七、おしきものゝしな〴〵

一、金銀、命をおしむはめづらしからず、盛の花を風のちらすはおし、誰もおしむは三月の盡、

三月正當三十日、風光別レ我苦ニ吟身一、
共レ君今夜不レ須レ眠、未レ到ニ曉鐘一猶是春、

おしめ共愛のかぎりのけふの日の
ゆふぐれにさへ成にけるかな

秋は又名高月にめでゝ、

明は又秋のなかばもすぎぬべし
こよひの月のおしきのみかは

物の上手、名人の老はつるもおし、あかぬ別の名殘はおし、

あひみての後のこゝろにくらぶれば
むかしは物をおもはざりけり

火にやけ、水におぼれて名物のうするもおし、うつくしきちご喝食の落髪はおし、ゆや松風のうたひをへたのはやすはおし、かずけふまりのぐれすぐるはおし、

二十八、あきはつる物の品々

一、老女のしたふ、さた過たる女の在五中將にまどひきて、けさうじて侍りければ、

百とせに一とせたらぬつくもがみ
われやこふらし面影にみゆ

南にたかやぶ、殿どなり、さい〳〵用をいふちゐん、殿のわかうのわたくし御用、借錢のさいそく使、ひでりの年にさへ三日とふれば雨、ねずみのあるゝ、蚊、はい、とまりきやくじん、ふだんさうかう汁、たかのの御供、はね馬、へたのひようほゐ、夜づめの奉公、おそきれんがの執筆、楊弓の矢とり、冬田の僧都、

山田もるそうづの身こそかなしけれ

あきはてぬればとふ人もなし
かれる田におふるひづちのほに出ぬは
世をいまさらにあきはてぬるか

二十九、あをき物のしなぐ

一、まづ青陽のあしたには、門々にかざる松竹や、子日の松にひきそふる、七草つみて、彌生には誰見ぬ島のよもぎもち、あやめにいはふかざり粽、三伏の夏も過行ば、けふ七夕の祭とて、かぢの葉にかくやまとうた、水かげ草や蓮の葉に、ぼんには鯖をつゝみいひ、八朔の日は禮義とて、青侍のより合て、なをる座敷の青だゝみ、青竹をかくぬれえんに、せいひもうせん敷ひろげ、ならびゐぬれば振舞に、いだす膳部はなになにぞ、ろくせうのゑのあしうちに、せいしつのわん、あさぎごき、せいじのさらにあゆなます、藍よりあをきたてずをかけ、青まめせうがもりこぼし、青鷺の汁にあをひばり、青じとゝまでやきそへて、青鯖のすいり、ぬきな汁、あをな、青のり、青なしや、色々のくわしを取出て、長非が青茶むく〳〵と、たてゝいだすをのみながら、あかしくらせば程もなく、重陽の日は菊酒に、さゝの葉色の新酒をませ、のめばかんろもかくやらむと、うたひまふこそ目出度けれ、

三十、きなる物の品じな

一、紀貫之のながれとや、きの黄門はわうだんの病に氣がおとろへ、粟のぐごさへすゝまねば、き僧正のすゑかとよ、黄袈裟きごろもちやくしつゝ、きたうは樣樣有けれども、さらにげんきにあらざれば、木下の喜齋といへるくすしをよび、黄耆、黄連、黄芩、大黄、地黄、ほりう、うわう、黄栢、じわう、牛黄圓、色々樣々あたふれども、其しるしだにさらになく、終にきなるいづみへおもむきけるこそいたはしけれ、

三十一、あかき物のしなぐ

一、まうそ〳〵赤事申そ、むらさきのゝきもんがくに、妙覺寺の二王門、百萬遍の御影堂、天滿のかねのを、赤づらの明王、天火、いなづま、朱すりぼう、いなり殿の狐火、祇園殿の犬子、山王の鳥居、猿がしりは眞赤な、早川圭馬のふんどし、すわうか紅梅か、ひざや、ひじゆす、ひぢりめんにひどんす、肥後殿のひつしき、渡邊殿のきんちやく、彈正殿のもちやり、小野木殿のかわらばな、あい殿の御門、ゆふけいのこしざし、朱ざや、朱具足、からのかしら、猩々皮、高雄のも

みぢにだんの山の岩つゝじ、けしの花にけいとうげ、御所柹にざくろのみ、はりの木のきりかぶ、鹽引のきり口、鰆のさしみ、いりゑび、赤がひ、赤がに、赤にしにかざみのあしをかうにもり、佛じやうぼうの口びる、お宗永のほうさき、朱屋のかゝの口べに、茶屋のかゝの前だれ、よしやすのづきん、とうきのまくら、べにざら、朱わん、朱おしき、ちやつか、づすか、朱つぼ、朱がらかさ、王のはなか、しゆぜんじ、扨はそゝのまんなか、ゑいやまん中、（これは一とせ、じゆらくの城の時分、京はらはべの小うた也、）

三十二、しろき物のしな〴〵

一、春はまづさく梅さくら、しら玉椿しらふぢに、夏は卯花、夕がほのはなのさかりや、こひめ瓜、秋は月影、しら萩や、大はくの菊、露の玉、冬は初雪、夕霜や、椎の落葉にしらふの鷹、

雪しろやましろうけかい爪じろに
　あをしろほしろ舌もしろ鷹

しら〴〵ししらげたる夜の月影に
　ゆきふみわけて梅のはなおる

深田の鷺や、谷の兎、綾の小袖にねりかづき、法印はかま、わたぼうし、加賀の奉書、たかのうち、いせおしろいや、きらゝ、石灰、或誹諧の發句に、

雪や今朝山をいれたるしろ袋

三十三、くろき物のしなじな

一、黑澤九郎兵衞といふ人、くらままうでの、初とらの一てんは、まだやみの夜に、からす丸通をたち出る、黑毛の駒にくろくらをかせ、らつこのかわのくらおほひ、くまのかわのあをりに、ちやのしりがひ、こくひのきつつけ、力がわ、ろふ色ぬりのあぶみをかけさせて、かちんの手づなよりかけて、其身の出立もくすみたり、はだにはらんや、ごろ〳〵に、しゆちん、くろけん、ちやう、せてん、むりやうの小袖かさねきて、らしやのはをりに、ちやまるのはかま、しゆすのきやはんにこんのたび、黑ざやまきの太刀をはき、行ば程なくくらま寺、黑龍院におちつきて、比沙門堂へぞ參りける、護摩堂をみればすゝけつゝ、不動のかほはくろ坊が、にらみけるよとうたがはれ、下向道におもむけば、八瀨や小原のくろ木うり、所につきたるくらまずみ、道もなきほど出ければ、若黨郎從のきぬ小袖、なべずみのやうによごれつゝ、はう〳〵京へぞか

へりける、

三十四、むらさきの物のしな〴〵

一、春日野のわかむらさき、三河の澤のかきつばた、田籠の浦藤、つぼすみれ、むらさきつゝじ、もくれんげ、夏にもなれば楝さく、紫竹わか竹よの間にも、はや秋風の音信て、小野のむら萩起臥に、誰ぬぎかけしふぢばかま、位山の菊のはな、ふるき詠のことばにも、

さきまさるくらゐの山のきくのはな
こきむらさきに色ぞうつろふ

紫の雲の林にきてみれば、紫衣きた僧の、紫檀の机によりかゝり、紫硯のふたをあけ、すみすりすましかゝれたる、掛字のひようぐは何々ぞ、紫綾のそうのへり、紫地の錦の一文字、紫糸のたくぼく也、扨床わきをみてあれば、童一人ありけるが、紫がのこの小袖きて、うす紫のくしおび、紫たびをはきにけり、紫のふくさに茶わんのせ、御茶を細々はこばるゝ、其名をいかにと問ければ、何となりとも鰯とこそは申されたり、これもむらさきのうらなるべきか、

三十五、まつものゝ品々

一、はつ春よりまつ物は、花、鶯、

あらたまの年たちかへるあしたより
またるゝ物はうぐひすのこゑ

春きてもつれなき花の冬ごもり
またじとおもへば峯のしら雲

ほとゝぎすを待、

いかにせん來ぬ夜あまたの郭公
またじと思へばむら雨の空

人を待、

まつよひに更行かねのこゑきけば
あかぬわかれの鳥は物かは

日待、月待、申待、十七夜は立待、十八夜は居待、十九はふし待、二十日ねまち、夏はすゞしき風をまつ、秋はいなばもそよとのかりしほをまつ、冬はまだきより、門々に松を立て春をまつ、ますら男は、笛を吹て鹿のよるをまつ、ふるさと人は、旅よりかへるをまつ、

山上有レ山歸不レ得、湘江暮雨鷓鴣飛、
蘼蕪亦是王孫草、莫下送二春香一入中客衣上、

はたごやには、飯を燒て往來の旅人を待、鷹をうつ人

は、秋の山にとやをきりてあみをはり、ゐたかをふりうはの空とぶ鷹をまつ、氷室守は、三冬の雪を太谷(みたに)にあつめて夏をまつ、八瀬大原のすみやきは、竈をふすべて冬をまつ、谷の杣木は雨をまつ、曲水になみゐる歌人は、ながれにうがふ盃をまつ、東山西山の花もみぢの比は、都人をまつ、

小倉山みねのもみぢ葉こゝろあらば
　いまひとたびの行幸またなん

ねずみ戸には、太鼓をたゝいて見物の人をまつ、よめ入には、待上﨟をば置てこしの入を待つ、昔河内の國高安の里に女ありけり、大和人を待て、

君があたりみつゝおゝらん伊駒山
　雲なかくしそ雨はふるとも

三十六、のぶる物の品々

一、とをきまりは、のべて蹴る、汁の味噌のこきは、ゆにてのぶる、そくいひは水にてのぶる、大事の病も、くすりを以ていのちをのぶる、わかなをつみては、賀のいはひをして年をのぶる、子日の松を引ては、千とせをのぶる、わか水をくみては、老のしはをのぶる、小袖をぬいでは、はりめのしはをひのしを以てのぶる、きぬのいとゝいへば、わたをのぶる、もめんをおるには、くるまを以てきわたをのぶる、雨のふるには、たびだつ事をのぶるなり、松風の卷に、源氏大井の里へおもむき給ひし時、むらさきのうへ、又斧のえやくたし給ひけんと仰られしは、いつもかつらのゐんより御かへり、のび〳〵なりとおぼし侍る成べし、

世間甲子須臾事、逢二着仙人一莫レ看レ棊、

志賀寺の上人、御手ばかりといふ事は、むかし京極のみやす所を、上人こひ給ひけるに、御車のうちより御手を出させ給ひければ、上人御手をとりて、

はつ春の初音のけふの玉はゝ木
　手にとるからにゆらぐ玉のを

文字のつよき人は、もんごんを色々にかきのぶる、へたのうたひは、拍子にはづれてのぶるものなり、のふを見ては、おもしろさに氣をのぶる、さけをしゐては、きやくの歸る事をのぶる也、へをさしてとぢかわをひかへて、鷹のはをのぶる也、

片しきにむすぼらるともへをさゝん
　こゝろもしらぬつみのわかだか

かけあしの馬には、手綱をのぶる、風をうけては、と

をいのやをのぶる、利錢をしては、かねをのぶる、利そくをなしては、しやくせんのもとをのぶる、百姓の未進をしては、年貢をのぶる、田畠にさほをあてヽ、けんちをしては知行の高を延る、くすねをねりては、弓づるにのぶる、よきもちをはしにさせば、五寸のぶると也、尺くわくの身を縮めるも、のびんがため也、謠のおんぎよくにも、かろくよせてうたはゞ、其次はのべてうたはんと心得べし、閏の有年は、三十日をのぶる也、高座のうへにては、だんきのぶる、花の木のもとには、酒のむしろをのぶる也、ねがへりしては、あしをのぶる成べし、

三十七、ふとき物の品々

一、大こく柱、門柱、尾張大根、八幡牛房、花筒の竹、ゆげいのほうわう、鯨のたけり、馬の物、爲朝の弓、辨慶が棒、石引の綱や疊糸、わろき地頭の納ます、武士の心、天王寺の石鳥居、ほていの腹や、こいずねに、あきうどのこヽろは、大佛のはしらよりもふとしいへり、

三十八、ほそき物のしなぐ

一、人まつねやのともし火、さしもかためぬつまどの口、三ヶ月の影、から糸や、青柳糸、はすの糸、さヽがにの糸、ありのこしや、がきのくび、わじまそうめん、しゆろのひげ、下手の笛のね、霜がれのむしのね、一休のかな、つらゆきが歌書、はたごやのます、津田のほそ江のみほづくし、

五月雨はつたのほそ江の身を盡し

みえぬもふかきしるし成けり

三十九、とをる物のしなぐ

一、何にてもすける道、名作の鑓、りり荷の商人、むら時雨、すきまの風、せこをやぶりて通は猪、祭にとをるは子獅、田樂、ねんりき岩をとをす、

とらと見ているやの石に立なれば

けぶりは上へとをり、水は下へとをる、辨慶はくわんじん帳を讀て、とがしがたちをとをる、あだめく物は前渡りしてとをる、かりがねは峯を越てとをる、たうばりはきぬ小袖をとをす、きりはふくろをとをす、大橋長藏は三十三間堂を二千八百四十七矢をとをす、

四十、かへるものヽ品々

一、年立歸る朝には、十代の松をいはひ、水口まへりてを田かへす、ころしもかりはきたにかへる、なごりをしたひてよむうたに、

春霞たつを見すてゝゆくかりは

はななきさとにすみやならへる

花はねに、鳥はふるすにかへる、山がらは籠の内にてもかへる、とかへる鷹にもしなぐ〳〵あり、かたがへり、もろ歸り、もろがたがへり、山がへり、こ山歸りの

さほひめや、たがへる鷹のおもがへり、

はし鷹のとかへるみねのしゐしばの

うらじろなるは霜やをくらん

引に歸るは荒木の弓、ぼんなうの犬は門に歸る、虎は子をおもひて千里を歸る、すばり若衆はねざめに歸る、思ふ人を宿に置ては心いられに立歸る、

たちわかれいなばの山の峯におふる

松としきけばいまかへりこむ

昔男あづまへ行けるに、伊勢やおはりの海づらに、立浪を見て、

いとゞしく過にしかたのこひしきに

うらやましくもかへる浪かな

又あだ人のよめる、

おもふそのあたりはみまくほしければ、

ゆきてはかへり歸りてはゆく

朱買臣は錦をきて故鄕に歸る、秦を去て山にかくれしは、東園公、綺里季、夏黃公、角里先生、此四老人も二たび帝都に歸る、行平中納言はすま、又源氏は三とせ立ぬれば、明石より歸り給ふ、有人さすらへて、文月十四日に配所にてよめる、

中々になき玉ならばふるさとに

かへらむ物をけふの夕暮

とよみければ、あはれにおぼしめして、御ゆるされをかうぶりて故鄕へ歸けるとぞ、

尤の雙紙　下

一、ひく物のしなじな

一、小うたにのせてはさみせんをひく、平家に合てびわを引、歌をずしては琴を引、

きりの木の琴になるべきためしには
すゝきの山をひきわたるかな

都の牛は車をひく、なげづきんにてお茶を引、瞎をだしてはさいしんをひく、ひきざいにひく、鹽引や酒も過れば引出物、ひろぶたにのせて小袖を引、客より庭には馬を引、あたご參りに袖を引、神のまへにはしめをひく、佛のまへには施行を引、珠數ひく、木地ひく、ろくろ引、木を引、石ひく、ふねをひく、めを引、弓ひく、腰を引、くびびき、つなびき、なるこ引、釣するあまは糸をひく、かた田のうらには綱をひく、

こゝろひくかひこそなけれあふ事は
かたゞのうらのあみのうけなは

又仲哀天皇異國たいぢの御ために、ゑちぜんの國つるがの津より御ふねにめされける時、御酒宴ありしに、殿上人かんだちめ小うたをうたひ、御酒をすゝめけるとぞ、

春の野のこまかけちらす中にも
ゑいさらゑいとあみをひく

此小うたの事、氣比宮の緣起にみへたり、則氣比大明神は仲哀天皇にておはします也、杣山人は板を引、のこぎりにてはくしをひく、かさをはりては油をひく、物見の場にはまくをひく、みすのうちには几帳をひく、春は子日の松をひく、夏はのきふくあやめを引、秋は牛ひく、ほしあひの空、冬はさむさに風を引、鷹のゝともには犬をひく、老たる人はてをぞひく、むかしの事はれいにひくのみ、

二、さす物のしな〴〵

一、出入日影は山にさす、月のでじほはうらにさす、わたし守はふねにさほさす、ゑさしは小鳥をさす、ますらをはともしさす、ものゝふはのぼりさす、かたなわきざしはこしにさす、舞のあふぎは左右へさす、さればしやうがのうたに、

さすやうでさゝぬは人まつよひのからきゝ
さゝぬやうでさすは又おもふが中のさかづき

腫物、しやくじゆははりをさす、血をとる馬にもはりをさす、賤のめはたびをさす、わら屋をふくにも針をさす、やねのもりをばいたでさす、雨のふるにはかさをさす、梅花をおりてはかうべにさす、さくらをおりては花びんにさす、ともし火のほそきにはあぶらをさす、魚鳥のしるへはさかしほをさす、竹のくしにはでんがくをさす、目のかすむにはくすりをさす、うたひのほんにはしやしをさす、執筆のやくにはさしあひをさす、柳のえだはつゝみにさす、かみにはつげのをぐしをさす、

　蘆の屋のなだのしほやきいとまなみ
　　つげのをぐしはさゝずきにけり

三、物のかしらの品々

一、天神七代の頭は國とこだつの尊也、地神五代之頭は天照太神、人王の頭は神武天皇、男女夫婦の初は伊奘諾尊、人間の頭は大王、女の頭はきさき、公家頭は太政大臣、武家の頭は將軍、儒者頭は老子孔子、佛法頭は釋迦如來、歌の頭は素盞烏尊、出雲の國にいまして稻田姫と御ちぎりましく〳〵て、（

　八雲たついづもやへがきつまごめに
　　やへがきつくるそのやへがきを

此うたより三十一字のことの葉とはなれりけり、又連歌の初は伊奘諾伊奘册尊、はじめてみとのまぐはいありし時、伊奘諾尊、

　あなうれしにへやうましをとめにあひぬ

といひかけ給に、伊奘册尊

　あなうれしにへやうましをとこにあひぬ

と付給ふを、女神男神のつぎうたとて、連歌の初にとる也、天台の頭は梶井殿靑蓮院、眞言の頭は御室御所妙法院、山伏の頭は聖護院若王寺、馬の頭は觀音、牛の頭は牛頭天皇、くすしの頭はてんやくのかみ、氏の頭は源平藤橘、兵法の頭は張良、一年の頭は元三、花の頭は梅、月の頭は八月十五日、座當の頭は檢校、舞の頭は則大頭、ゑちぜんのかうわか、猿樂の頭はくわん世、こんぱる、こんがう、ほうしやう、皷の頭は色々あり、本の頭は上略中略下略、七つ頭、八つ頭、二つ頭、三つ頭、此外頭の數つくしがたし、ゑぼしの頭、あか頭、くろ頭、地謠頭、くみ頭、日用頭、龍頭、魚の中にもかながしら、小鳥の中にもかしらだか、いわしの頭、いもがしら、ちゃみがしら、かさがしら、さいづち

がしら、げほうがしら、くゐの頭、すみがしら、十二與干頭は甲子、鱗羽裸毛甲の頭の事、鱗の頭は龍、羽の頭鳳凰、裸の頭は人、毛の頭は麒麟、甲の頭は龜、或時一休和尚の狂歌に、

人は武士はしらはひの木うをは鯛
小袖はこうばい花はみよし野

四、もちいらるゝ物の品々

一、主上關白將軍、これはあがめてもなをあきたらず、御朱印、所司代、庄屋、出頭人、勇者のほまれ有人、ゆうそくの人、上手のくすし、何にても一藝達者、夏は扇に秋は月、奈良諸白に宇治のしろ茶、沈香の中には伽羅、藥の中には人參、肴の中には鷹の鳥、鳥なき里のかはほり、大名のひとり子、まだも御座有よ天滿の門跡、

五、めぐるものゝしなぐ

一、二六時中天路をめぐるは日月、北辰は其所にゐて、しうせいはめぐる、日にむかふてめぐるはあふひの花、雲につれてめぐるはむら時雨、ひとりめぐるは水車、或連歌のまへ句に、

あぢきなやたゞまはしてもみん
付句戀ゆへに我身はやせてみへの帶

又 みどり子のなきかかたみの風車

田づらをめぐるは會家僧、國をめぐるは山水、三界をめぐるは六十六部、大慈大悲の觀音堂に、三十三番の札を打にめぐるは順禮、するがの二郎清重がもつてめぐる廻文、連歌にめぐるは一順、座敷をめぐるははちひら盃、町をめぐるは番太郞、門々をめぐるは千少、山めぐりするは山うば、まき、大名をめぐるは千少、山めぐりするは山うば、まはせばめぐるりんざう、くむたびにめぐるはろくろつるべ、たゝけばめぐるぶせうごま、賤の女のまわせばめぐる糸のわく車、三千世界を一旦にめぐるは伊達天、六十二年にゆるりとめぐるは暦、ほどなくめぐるはおやの周忌、或發句に、

めぐりきぬ世のうき秋の七車

六、まふ物の品々

一、くもまひ、しゝまひ、神子の舞、幸若、猿樂、白拍子、てくゞつ、でこのぼ、猿廻、すみにかゞむは鼠舞、雲ゐにまふは鵙、すだか、又は千年の鶴も舞、畠にまふはなすびの木、かきほにまふはかたつぶり、花前に蝶まふふんぷんたり、出家の舞は大衆舞、孝行にまふ

は老萊子、酒盛にまふはじゆんのまひ、ひだるきとき
は目もまひぬ、
ひだるさにかしらづゝみのうちぬれば
人もはやさぬめこそまひけれ

七、すぐなる物の品々

一、廊の中のよもぎは、ためざるにすぐなり、
人も唯ともによるべき事ぞかし
あさの中なるよもぎ見るにも
なをすぐなる物は、杉の立木、扨は靑竹、
色かへずたゞすぐなるをこゝろにて
竹はまがれる枝だにもなし
是を世のすがたともがなくれ竹の
すぐなる物の色もかはらず
正直の二字、みどり子の心、聖人心、治れる世の掟、
其身直影不レ曲、　其政正民不レ邪、
板倉の山田につめるいねをみて
おさまれる世の程をしる哉
ひだのたくみがうつすみなは、むよく代官、所司代の
ひはん、さいとりざほ、やりのえ、つくりみち、橋のゆ
きげた、

八、まがれる物のしなぐ

一、三ケ月の影、虹のかけはし、馬のくらぼね、牛のは
なづら、ゑびのいり物、ざうのはな、大工のかねや、く
らのかぎ、ひ物屋の仕事、なべのつる、おたがじやく
しに、つむのほ、城のをりへい、千鳥がけ、九折の道、
しやうがのゆび、むかし天下の政道たゞしからざる
に、一條の辻に七つの宗を札に書て、立たるらくがき
あり、此心は、上よこしまなるによりて、下又ゆがめ
りといふ義、老人のこし、
としふればわがくろかみもしら川の
みつわぐむまで老にけるかな

九、やはらかなる物の品々

一、むくへの小袖、わた子、公家の參會、びくにの出
立、やんごとなきわかしゆの心、同女の心付はだ、老
人の交、けな物のはなし、むしの茶、ゆたてめし、あこ
だ瓜、かうらいだうふ、鬼神の心をやはらぐるは歌の
道也、

十、こはき物のしなぐ

一、たふの手ぬぐひ、なまみもなるかみぎぬ、のりの
つきすぎたるせんだく物、狂人のきたる座敷、理非を

しらぬ人、たゝりますといふ神のまへ、神なり、地しん、山伏のいのり、くちなは、虵のすむといふふち、いためがわ、なまにへなるいりこ、ゆですぎたるたこ、名さへこはいひ、虎、狼、讒者、古歌に

世の中はとらおふかみも何ならず
人のくちこそなをさがなけれ

十一、まことなる物の品々

一、君子の一言、神は正直のかうべにやどり給ふ、

こゝろだにまことの道にかなひなば
いのらずとても神やまもらむ

もゝをつき、ゆびをきり、つめをはがし、なみだにせきあへぬは、しんじちの戀慕なるべし、こよみにあらはす日そく、月そく、四季てんぺん、

いつはりのなき世なりけり神無月
たがまことよりしぐれそめけむ

生者必滅の世の有様、除君季札といふ二人の人あり、あさからぬちゐん也けり、或時季札が劔を所望しけるに、やくそくして他國へ使にゆき、ほどへて歸りけり、さて除君をとへば死たりといふ、季札やがて除君の塚のもとへゆき、右之やくそくしけるけんを三つにおりて手向けると也、これみなまことのみちなるべし、此心を或詩に作れり、

請君早解腰間劔、莫レ掛二秋風墓樹寒一、

十二、いつはる物のしな〴〵

一、むかしよりいひならはせるなかう人のそら事、はぐらうのさた、ばくちうち、物うるにすあひといふ物、あまのぬれぎぬ、此いわれは、むかしちくぜんの國に、或人むすめ一人もちけるが、けいぼの中のたくみには、あまのぬれぎぬをかりとりて、むすめのあしたたちたりける、ふしどにこれをぬぎきせてをく、あま人きたりて我衣をとらせ給ひて侍るといふ、さもあらげなきあま衣の、ひとへになき名をいひ付たり、ちゝ是を聞、則盗人の事なれば世の聞へ、みぐるしとて、むすめをやがてころしけり、其後かのちゝがゆめにみへつゝ、なく〳〵一首のうたを讀けり、

ぬきゝするそのたばかりのぬれごろも
ながきなみだのならひなりけり

又僞のあらはれてはづかしからんは、かぐや姫に送りし玉のえだ、又もろこしに、趙璧といふ玉は卞和が夜光の玉也、此玉を秦始皇より趙王へ、城十五にかへ

んといつはりて此玉をとれり、趙王の臣下に藺相如といへる者、僞りて又此玉をとりかへす、相如始王へ行て、かの玉にきずあり其所ををしへ申さんといふ、則玉を取出して相如に見せ給へば、玉をとりて始王の御そばへちか〲とより、始王取すくめて我國へ送り給へといかりければ、せんかたなくて玉共にをくりかへされけるとぞ、又使の人の僞りしは、かの土佐正尊がそら起請、又つくしあしやの里人そせうありて、在京十ヶ年にあまりぬ、ふる里ゆかしくて文をこま〲と書てやる、其ふみの中にいろ〲のきぬ小袖をやるよしかきて、其物はえとゝのへずして文ばかりやりけり、妻女めづらしくうちながめてみるに、かきたてたる物は一色もなかりけるに、はらをばたてずして一首のうたをよみけり、

こゝろざしあるかたよりのいつわりは
よのまことよりうれしかりけり

鳥の名にもうそ、刀にさへそらざや、誹諧發句に、

あきなひかたかきそらねの郭公

佐々木四郎高綱、頼朝よりいけずきを給りしを、梶原とがめしに僞りて無事にとをりし事、又宇治川の先陣にも佐々木僞りし事、平家物語にみへたり、

十三、わらふ物のしな〲

一、左縄、みゝづくに小鳥、物狂に子共のあつまり、狂言、上手のはなし、なまじゐの事をとりかゝりてえしとゞけざる事、天狗がくさびらにゑひたる、名にめでてわらひせうの面、とりはづしてのおなら、北野の二童子、よろこび遊のざしき、祭にわたる壹つ物、光源氏より衣をくばり給へるに、すゑつむ花よりの歌のたび毎に、から衣といへる五もじばかり讀給へば、源氏君わらひ給ひて、

から衣又からごろもからごろも
かへす〲もから衣かな

晋惠遠法師、廬山へ引籠り侍るける時、こけいの橋をわたりて、二たび此橋を出まじきとの禁足の願を立侍りける、惠遠法師のしたしき友に、とうゑんめい、りくしゆせいといへる二人の友、酒をもたせてかのろざんへ尋ゆきけり、めづらしくや有けん、日終かたりなぐさみて、たがひにしゐつしゐられつさけをくみすぐして、扨二人友かへりければ、名殘をおしみ侍りて送り出て、かの禁足の願をばうち忘れて、はるか

に橋をこし過しけるに、二人の人さて禁足はといへば、おんほつし手をうちてわらひ侍りければ、二人の人もふしまろびてわらひけり、これを三笑のともとぞいひつたへ侍りける、

十四、くすみたる物のしなぐ

一、不動のかほ、おやこの中の物がたり、下戸のざしき、としより衆の參會、しんの茶の手前、ちやの小袖、かちんのかみしも、うれへのざしき、しぶがきくふたる口もと、仁王の狂言、ひようたんから駒はいでねども、身をまんじてくすむ人もあり、

十五、ものいはぬ物の品々

一、ふかきちゐんも、すこしのふしに物いはぬ事、世のならひ也、ひとつはちすのえんとならんと、二世をかねたるいもとせの中も、ねたむ心をゝしこめて、ひたやごもる時も有、詩の言葉にも、たうり物いはず春幾暮ると有、又いかなれば漢皇は、李夫人のすがたを甘泉殿のかべに、似繪にうつして明暮むかひおはしまして、ものいはずわらはず人をしうさつすと、かなしみ給ひしためし有、又僧正遍昭、いまだ良峯の宗貞にて好色ならびなかりければ、是を帝心みんとにや、后のまねをして山吹色の御衣を引かづきて、御簾のうちにわたらせ給を、宗貞是をけさうじ奉る、あへて御かへり事なし、其時、

山吹のはないろ衣ぬしやたれ
とへどこたへずくちなしにして

物いはぬはまだいはけなき新枕、又光源氏中だちのしるべに任て、よもぎふのみやへよるのみかよひ給ひて、御ちぎり淺からず、むつまじく物をいひかけ給へども、御いらへましまさねば、

こゝろにはしたゆく水のわきかへり
いはでおもふぞいふにまされる

いくそたびきみがしゞまにまけぬらん
物ないひそといはぬたのみに

いはぬをもいふにまさるとしりながら
をしこめたるはくるしかりけり

又夕霧の卷にかきたりける無言太子の事、佛說に曰、天竺に大王ましくき、其太子十三年物いひ給はず、父帝かなしみ給て羅漢にたづね給へば、羅漢曰、或經に、飢たる鳥蛤をくはへて食せんとするにかなはず、童子是をみて曰、石のうへにおとし侍らば、やぶるべ

き物をとをしへける、からすをしへのごとくたかく飛あがり、石上におとしてうちはりこれをあさる、其むくひにより悪道におちてのち太子に生れ給ふ、無言太子是也、又都粟田口に、三しんだうといへる宮あり、中尊はいは猿とて口をふたぎて有、わきだちはみ猿きか猿也、傳教大師の御作なり、されば歌にも

何事もみざるいはざるきかざるは
たゞほとけにはまさるなりけり

公事ざたにかゝづらふもの、此お猿をむかへて我いゑにをき、對決の場へ出ければ、かならず其公事かちに成よしいひつたへ侍りぬ、

十六、なのる物の品々

一、三番のから相撲、合戰の軍兵、新參の事は申に及ばず、年頭八朔以下の禮義にも、太刀折紙の奏者を以て名のるはつねのならひ也、むかし天智天皇、筑前國かるかやの御所は、ばうしきらずさいてんけづらで、丸木を以てたてまつる皇居なればとて、木丸殿と申奉る、秋の田の露にしほれ、かやが軒ばの月を御覽じけるころなれば、御用心まし〳〵て新關をかまへ、往還の人をなのらせてとをし給ひける、御門の御製に

も、

あさくらや木の丸どのに我をれば
名のりをしつゝ行はたが子ぞ

又毛利千句に、

つらきわかれと引とめし袖　昌叱
名のらずば誰かは又もとがめまし　同
みちのゆく衞はあすかゐのやど　紹巴

此句は花のえんのまきに、御遊びすぎて光源氏月にうかれて、こうき殿の三の戸口に何となくたゝずみおはしけるに、おぼろ月夜にしく物はなしと、うちずして出給ふを、源氏の君やをら立よりて、御袖をひかへ名のりし給へ、いかでかきこゆべき、かくてはおもひやみなんとはおぼされじと、引とめ給ひて御ちぎりあさからず、あふぎをとりかはしてわかれ給ひし面影也、又みちの行ゑの句は、さ衣の大將あすかゐの君、うづまさにこもり給へるに、仁和寺のいぎしといへる法師、めのとゝ心あはせてぬすみ行を、大將二條へんにてみつけ給ひてとがめ給へるを、君をば車に置てにげけるを御らんじて、いづかたへゆく人ぞ名のり給へ、をくりとゞけんとの給へば、二條ほりかわ

蚊遣燒へんへとありし也、さて其まゝ契り給ひて御懷姙ありしを、又めのとつくしに任にくだる、大將殿の家禮道成といひ合てつくしへ下るを、虫明の迫門にて船より身をなげ給へるに、長門守歸京の船中へおちしをつれて都へのぼり、ときはの里にて御たんじやうありけり、さ衣の御むすめ、あすか井にやどりはのことばより、あすか井の君とは申とかや、

郭公の名乘とよみたる歌、　藤原爲忠

まちかねてくらぶの山のたそがれに
ほのかに名のるほとゝぎす哉

元方

たちかへりたがとへばかもほとゝぎす
をのが名をのみなのるなるらむ

光俊朝臣

山風のふはのせきもりとはねども
こゝろと名のるほとゝぎすかな

前參議親澄卿

朝くらやとはぬに名のる子規
木の丸どのゝ名にたてしとや

ある發句に、

郭公名のるはふじのたかね哉

十七、かしましき物の品々

一、女のあつまりてちや物がたり、手をうちすぎたるつゞみたいこ、かぢ屋のとなり、やくわんや、あぶらしめぎのをと、からうすのをと、石うすひくをと、車のとゞろくをと、かみなりのをと、百姓の屋ねふく、まつりの場、谷川、あらいそ、てつぽうのまと、いぬのほふるこゑ、あふ夜の鳥、わかれのかね、轡虫、

をとにきくくらまの山のくつわむし
しばしひかへて法のこゑきけ

十七、しゆしやう成物の品々

一、御八講の儀式、老僧の談義、稱名のこゑ、

坐歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前、

となふれば佛もわれもなかりけり
南無阿彌陀佛のこゑばかりして

高野山つねのともし火、しきみのたく香、ごまだうのけぶり、紫雲たなびき花のふる空、うたの講師、行幸の管絃、むかし安養の尼、伊勢へまうでゝ神前をふしおがみてよめる、

何事のおはしますとはしらねども

かたじけなさになみだこぼるゝ

十九、めづらしき物の品々

一、いくとし越ても元三の儀式、鶯の初音、子規一聲、

きくたびにめづらしければ郭公
いつも初音のこゝちこそすれ

今ひとこゑのきかまほしさに
ゆきやらで山路くらしつほとゝぎす

宇治よりくばるかぎちや、すだか、あがけ、とやお、しろふがはり、十三尾、いちにてしかへたる駒、いこく人、いつみてもわかしゆのふみ、新枕、うゐ子、まれのゆかりにあふ、きゝをよびたるげいのふ、時ならぬ雪、

ときしらぬ山はふじのねいつとてか
かのこまだらに雪のふるらむ

玄宗皇帝、楊貴妃寵愛のあまりに、内裏のそのに瓜をつくらせ、二月の比もちいられしもめづらしきためし也、

内園分ニ得温湯水一、二月中旬已進レ瓜、

又めづらしきは、橘諸兄卿とこよの國よりたちばなをとりてかへりし事、

たち花は身さへ花さへその葉さへ
霜はをくともましときはの木

二十、おもしろき物の品々

一、神代のむかし、日神天岩戸にたてこもり給ひしかば、とこやみの世となりぬ、八百萬神、岩戸のまへにてかぐらをそうし給へば、其時すこし戸をひらき給ぬれば、人のおもてしろ〳〵とみへ侍りければ、日神の御こゑにておもしろやとの給ひしより、おもしろき事を面白とは申とかや、月花のおもしろき事いへばさら也、上手の能付諸藝、初雪の朝數奇、付廻ずみ、廻ばな、夏は川せうよう、秋はもみぢの木のもとに、車をとゞめてすぎがて也、

停レ車坐愛楓林晩、霜葉紅ニ於二月花一、

冬はたくひのまにて、いり物などして、手づから、みづから、しやくしをとり、さながらこたつによりふして、まくらをそばだてゝ簾をまけば、香爐峯雪などうちずし、こゝろあひのともと物語りするもおもしろし、あひてによりて、ごしやうぎもおもしろし、鵜鷹そのほか一さいのせつしやうは、なをおもしろし、讀學のかうしやくもおもふやうに作事を

するもおもしろし、あし毛馬はかしらもしろしおもしろし、

二十一、まよふ物のしな〳〵

一、人のおやは子ゆへにまよふ、古歌に、

人のおやのこゝろはやみにあらね共
子をおもふみちにまよひぬる哉

れんぼの道、よくのみち、夜みち、雪みち、ひろ野のみち、おくなをふかき太山のみち、しのゝめの川ぎりふかきふねのみち、心きたなきさとりのみち、めくらの杖うしなひしみち、さればさとりのまへの是非は、ぜひ共に是也、迷のまへの是非は、是非共に非也、

二十二、あだなる物の品々

一、世間は、によむけんほうやう、によろやくによてん、くわいらいはうとう、

ゆめの世にまぼろしの身のむまれきて
なにをうつゝとさだむべきかは

風のまへの灯、日かげまつまの朝がほ、飛花落葉、

世の中はいちのかりやのたゞしばし
ひとりのこらぬゆふぐれの空

むかしあだくらべせしおとこおんなの歌、

鳥の子を十づゝとをはかさぬとも
おもはぬ人を思ふものかは

といへりければ、

朝露はきへのこりてもありぬべし
たれか此世をたのみはつべき

又おとこ返し、

吹風にこぞのさくらはちらずとも
あなたのみがた人のこゝろは

又女かへし、

行水にかずかくよりもはかなきは
おもはぬ人をおもふなりけり

又おとこ、

ゆく水とすぐるよはひとちる花と
いづれまでてふことのなからむ

二十三、のぼるものゝ品々

一、春はあがためし、秋はつかさめし、いなかよりの調物、龍門の鯉、衣川の鮭、古歌に、

きのふたちけふきて見れば衣川
すそのほころびさけのぼる也

又候哉こずゑの花を手折人、春の野のひばり、秋の木

のみをもとむるさる、だんぎの高座、二階座敷、心づくしの玉かづら、かづらき、高間、大峯をわけ〳〵て入山ぶし、淺間ようで、富士ようで、めでたくのぼるはくらゐ山、

すべらぎの位の山の小松ばら
ことしや千代のはじめ成らん

くらゐ山はなをまつこそ久しけれ
はるの都にとしはへしかば

こむらさきたなびく雲をしるべにて
くらゐの山のみねをたづねん

二十四、くだる物の品々

一、あづまへくだるは馬の上、つくしへくだるはふねのうへ、峯のつま木やさわらびを、とりてくだるは谷の庵、五月雨の雲はこりしきて、ふもとにくだる時もあり、秋の梁瀨の鮎うなぎは、ひとむら雨のにごり水にさそはれ下る時しも有、笛琴の音にせうじつゝ、天人くだりしためしもあり、雲路を渡るかりがねの、平沙に下る比もあり、谷にきりをく宮柱、水のながれにうきしづみ、ひかねどくだる事も有、巴豆大黄や、牽牛子はいづれも下る藥ぞかし、

二十五、とぶ物のしな〴〵

一、もろこし秦始皇をたばかり、けいかしんふやうといふ者、えんのさしづ井はんゑきがかうべをもちて、二人參内して始皇へちかづき奉りて、御門をいだきとりすでにさしころし奉らんとせし處に、くはやうふじんと申后の、琴の音に聞とれて、すこしゆだんをせし處に、みかど御衣の袖を引きつて、七尺の屏風をとび越給ひて御つゝがもましまさぬ也、又我朝だんのうらの船軍に、能登守敎經、源氏の大將よしつねをめにかけ、しきりにたゝかひすでにあやうくみへし處に、よしつねかなはじとやおぼしけん、三丈ばかりも隔てたる兵船にとびうつり給ひけり、敎經ちからなく、いまはかくよとおもひきり、安藝太郎次郎といへる兄弟の物を、兩のわきにさしばさみて海へとびいり侍りぬ、又紀州熊野の權現は、御すいでんの御なげきに、をとなし里に飛給ふ、跡よりちげんひぢりとびきたり、栗の宮とぞ申也、又つくしへ菅相丞のさすらへおはせし時、御別をしたひて飛梅、御跡よりやがて老松といへり、ぬけてとぶは蓮のみ、とんでひに入はなつむし、あふみ竹生島のは岩とび、あふみ井島の

さほとび、はしりとび、一そくとび、目にもみへずとぶはのみ、目にみへてとぶは人玉、

たまはみつぬしはたれ共しらね共
　むすびぞとむるしたかへのつま

又とぶとりのうたに、

くれぬめりねぐらもとめてとぶ鳥の
　あすかの寺のいりあひのかね

又あかりしやうじといふ題にて、

いにしへのいぬきがかひしすゞめの子
　とびあがりしやうしとおもひき

二十六、あぶなき物のしな〴〵

一、いけのはたのわらはべ、神なり、ぢしん、おほかぜ、あらなみにのる船、くせ馬の一さん、馬のうへのゐ寝(ねぶり)、丸木の一橋、かたそばの細みち、こいゐにおほびたく、少人のげいのふ、老人のかろわざ、くひ〴〵もふぐ汁、めづらしき草びらのれうり、かりそめにも傷寒の病、理をもちながらもくじのさた、しうのかげごと、虎のおをふみ、わにの口をのがれ、うす氷のうへをふむ、それよりもあぶなきは人の妻をぬすむ、

さなきだにおもきがうへのさよ衣
　我つまならぬつまなかさねそ

二十七、おさるゝ物のしな〴〵

一、ひはもとより理におさる、理は法度におさるゝ、むかし熊野のおく十津川の里にかり人あり、或時かりに出けるにふしぎの事ありて、くちなわのきじをとりてぶくしけり、又其くちなわを、しゝのきたりてぶくす、かり人これをみて、ゆみとやをつがひはなたんとしけるが、まてしばし、此しゝをころさん事はいとやすし、われを又いかなる物かかくころさんと、しあんしてわが屋にかへらんとす、其山のふもとにてよきふんべつ哉、てうへ〳〵におさるゝ物をと、大木のうへよりいひけり、もししゝをころさば、なんぢを又けころさんと、てんぐいへると也、それより此かり人獵をやめて、しゆぎやうじやとなりぬ、十津川のおく旃陁羅法師是也、惟喬の御位は惟仁におさる、六きうの顔色は楊貴妃におさる、祇王は佛におさる、女のはらは男におさる、せんべいは竹の筒におさる、うどんはめんぼうにおさる、そくいひはへらにおさる、腫物はすぐすりにおさる、外様者は出頭人におさる、一さ

いの藝のふは上手におさる、貴賤群集の見物は人におさる、千石萬石つむふねもろにおさる丶、

二十八、とらる丶物の品々

一、鳥は鷹にとらる、又犬ぼねおつて鷹にとらる丶、鼠はねこにとらる、狸はいぬにとらる、笛による鹿は獵師にとらる、年貢は地頭にとらる、百姓の子は人質にとらる、首は勇者にとらる丶、笠は風にとらる、くろふねはいぎりすにとらる、商人のから荷は山だちにとらる、馬の血ははくらくにとらる、早苗は五月男女にとらる、藥代は醫師にとらる、提子はしやくにとらる、わらはべの川水あびては龜にとらる、かつせんにまけてはくにをとらる、ごだちにびじんあればおとこをとらる、ばくちにまけては女をとらる、やくびやうの神にてもかたきはとるといへり、

二十九、あらはる丶物のしな〲

一、下﨟のわか草は雪間にあらはる丶、紅は園生にうへてもかくれなし、

み山木のそのこずゑともみへざりし
さくらは花にあらはれにけり

海にます神も、

西の海あをきかはらの浪間より
あらはれいでしすみよしの神

かのへさるの夜の盗人はかならずあらはる丶也、粉骨細身に心をくだきて、何事も精を入ば終にはあらはれずといふ事なし、是則陰徳陽報なるべし、

やしゆたらが福地のそのに種まきて
あらんかならずうゐの都に

しのぶる中も終にはあらはる丶也、業平二條の后へかよひ侍りけるも世にかくれなし、光源氏かゞやく日のみやときこへし藤つぼへ、御心の有し事も終にはかくれなし、又柏木衛門督女三の宮へ契りし事、又匂ふ兵部卿の宮うき船の君に忍びて契りおはせし宇治の里にて、

としふともかはらん物かたちばなの
小島がさきにちぎるこ丶ろは

かへし、

立花の小島は色もかはらじを
このうきふねによるべしられぬ

みなこれつゐにあらはれぬめり、

伊勢のうみあこぎが浦に引あみも

たびかさなればあらはれにけり

服衣を墨に染るにも、うすくこくそめわけて、そのゆかりのとをきちかきをあらはす也、此心をふるき連歌に、

おもひに何のいろをわくらむ
うすくこくそむるもおなじ藤衣

罪人のつみとがの輕重は、ぢやうはりの鏡のおもてにあらはる、實盛がびんひげを墨にそめしは、池水にてあらいてあらはる、又あらいてあらはれしは、むかし大やけに御歌合の有けるに、水邊の草といふ題にてをの〳〵よめり、

まかなくに何をたねとてうき草の
なみのうね〳〵おひしげるらむ

と小町がよみて、宵にことに合てたか〴〵とずしけるを、大伴の黒主が立聞て、此うたを萬葉集の中へかきくわへて、翌日御歌合の時、是は古歌なりと黒主がいひければ、小町かほうちあかめてはづかしくおもひ、いづれの集にありけるぞと問ければ、件の書たるをさし出す、小町是をみて文字のすみつきあやしく侍れば、御前にてあらいてみんといふ、さらばとてはんざうに水を入て出したりければ、小町則さうしをあらいてみれば、新筆のすみはおちて古筆のもじは殘れり、黒主がいかばかりうたはかゝで、はぢをかくなるべし、さけをのめばいろにあらはる、人にほるればめもとにてあらはる、

しのぶれどいろに出にけりわがこひは
物やおもふと人のとふまで

狐のばけたるははなをふすべてあらはる、きじうづらの床は犬をかけてあらはす、無學僧はもじざうたんにてあらはる、物のけはげんざのいのりにてあらはる、地神四代ほゝでみの尊は、たつの都へおはしまして、とよ玉ひめと契り給ひ、うのはふきあはせずのみことをうみ給ふ、とよ玉ひめ常にこそうつくしくもつくりなせ、りんざんのいたみに蛇身のすがたあらはれければ、はづかしくやありけん、其まゝ海中へいりて二たびまみへずと也、又紀州道成寺のつきがねをばおろして、山伏をかくしけるも終にあらはれぬめり、いまさるがくの能にして、あれみよ蛇體はあらはれたりとうたふ也、

三十、あらき物のしな〴〵

一、あらき物は野分の風、いそうつ浪、よこぎる雨、まどうつあられ、あら人神にあらゐびす、べんけいが軍物がたり、曾我時宗がぎやうぎ、すまうとり、まき出しの駒、うちおろしの鷹、今焼の道具、大つゞみうちの手のかわ、あかがりすねさめはだ、おつとにもまる女のはないき、ておひじゝ、せめ馬のいき、松の木のかわ、名は大あら木の杜、

大あらきのもりのした草おひぬれば
　　こまもすさめずかる人もなし

おほあらきのもりの木のまをもり兼て
　　人だのめなる秋の夜の月

おほあらきの森のもみぢばちりはてゝ
　　した草かるゝ冬はきにけり

三十一、さびしき物の品々

一、山でらの雨中、

蘭省花時錦帳下、　廬山雨夜草庵中、

山寺の春のゆふぐれきてみれば
　　いりあひのかねに花ぞちりける

山里はふゆぞさびしさまさりける
　　人めも草もかれぬと思へば

かけひの水のをと、日ぐらしのこゑ、猿のこゑ、斧音、

伐木丁々山更幽、

ひとりね、花のちる跡、都にうつすしほがまの跡、

いつもきく物とや人のおもふらん
　　こぬゆふぐれの松かせのこゑ

花ちればとふ人もなしあし引の
　　山もさびしく殘る春かな

君まさでけぶりたへにししほがまの
　　うらさびしくもなりまさるかな

三十二、身にしむ物の品々

一、秋風、いとゞしく身にしむ物は老が身に寒風、新島守に沖津しほ風、たき物のけぶり、はげしくしむはたんはん、なまうをにしほ、さしみにす、すきはらの酒、かたなのさび、知音のおもひよりてのいけん、からき世にすむ、

かくばかりへがたくみゆる世の中に
　　うら山しくもすめる月かな

三十三、はづかしき物の品々

一、むこもよめもまだいわけなき時の祝言、おや子きやうだいの中にてかの物がたり、人中にてとりはづ

してのおならは誰もはづかし、僞の顯もはづかし、

なき名こそ人にはいひてかくさまし
　こゝろのとはゞいかゞこたへむ

すいきやうしけるものは、ゑひさめてはづかし、いとけなき時、おやのいさめをきかで、いたづらにおひたちぬる者は、老てはづかし、やごとなき人の御中へ、おとろへたるものゝ、みざほにいろもかはらぬ、あかつきたるきなれ衣をちやくして出るはいとはづかし、夕霧の君と雲ゐのかり、いとけなくおはせし比、御おばの大みやのもとに二人まし〳〵けるが、たがひにさくしりおよすげて、いつとなくまろびあひ給ひけるを、めのと夕霧を六位すくせといひおとしめしかりしかば、おさな心にもいかにはづかしくや思ひ給けん、

あげまきやひろばかりへだてゝねしかども
　ころびあひにけるまろびあひにける

もろこしに王累(わうらい)といへるものゝ處へ、客の來りけるに、めづらしき初瓜を出したるに、客しづ心なく瓜のかわをあつくむきて食し侍りぬ、さてそのかわを地にすてければ、王累きやくの目を忍びて、此かわをとりてくう、客これをみてはづかしくおもひけるとぞ、昔つの國難波の里に、いとむつまじき夫婦のものあり、かくてあさゆふのけぶり絶々に、おとろへはてんよりはとて、二人が中を引わかれて出にけり、程經て女、身をとみてふるさとへ歸りきにければ、男たゞ一めみて、をのがすがたのびろうなるを、いとはづかしくやおもひけん、むばらからたちの中へはいかくれにけり、

あしからじよからじとてぞわかれにき
　いとゞ難波のうらはすみうき

もろこしにちんかうといふ者、みんきはくといふものあり、則となり也、民紀伯よるひそかに陳景が地をぬすみてかきをひろげてわがちになす、陳景是をみて、民紀伯が見ざりしまに、わが地を一丈計入て伯にあたへければ、大きにはづかしくおもひけるとぞ、其國の大守園府君これを聞て「陳景がぎをかんじて、その里の名をあらためて義里と名付侍りぬ、葛城のよるの契りといふ事、えんのうばそく、久米路橋をわたし給ひし時、かづらぎの神、みめわろくまし〳〵てければ、よるのみ出て岩橋をかけ侍りぬ、ひるははづか

しくてまみへ給はず、
いわはしのよるのちぎりもたへぬべし
あくるわびしきかづらぎの神
名ははづかしのもり、
いゑの風ふかぬ物ゆへはづかしの
もりのことの葉ちらしはてぬる

三十四、みぐるしき物の品々

一、まづしうしてへつらう人、ひいきのもの丶けが、おちこぼれたるやかた、さむさうにしてす丶ばなたらす人、ひげにいひつぶのつきたる、おなじく爪のさね、鼻毛のながき、かたなわきざしのさやのはげたる、ばうずのかみのながき、ざたうのそうめんくう、出家の女房とものがたりするもみぐるし、

三十五、きびのよき物のしなぐ

一、おやのかたきをうちたる、すまふにかちてなのる、とりかひて歸る鷹野、ひつぱりてゆく地道の馬、たちふろへ入たるもきびはよし、ためしものにだうのおちたる刀、こいちやのみたる口中、臺所の末那板の音、ひもじなる時くうめし、あつきじぶん水あびたる、又旅の門出に天氣のよき、じゆん風にほをあげたる船、新宅へうつりたる、よきゆめみたるもきびはよき也、

三十六、つよき物のしなぐ

一、項羽威をふるひ給へば、山をぬく力有と云、はんくわいいかれば、髮甲のはちをつらぬく、又鎭西の八郞爲朝の弓力は、八丈島にておきなる船腹をいわりて、兵船一艘しづめり、又能登守敎經の弓勢は、大國までもかくれなし、鬼には鬼神がつかふるとかや、義經のひざもとさらず、むさし坊辨慶、又和田軍にもんをやぶりしは淺日奈吉秀、かれにまされる曾我五郞時宗、又かれをくみふせしは御所の五郞丸、またのがちからわざ、さなだの與市が乘たるむま、車をひく牛の力、木曾殿の巴がうでさき、由井の濱にて人つぶてうちたる畠山六郞、いのちもしらぬかやの木ばしら、へいさくにつよきはくりの木ばしら、ぬれえんをか丶ばわらびなわ、しなの丶しろそ、たんごつむぎ、かわつゞら、しつくい、はんだ、むぎうるし、まむしのしやうね、うなぎのせい、かやせといへばかけもどる、ゐのし丶などにしくはなし、

三十七、まるき物のしなじな

一、日輪、月輪、車輪、九輪、禪家には一圓そう、天台には圓頓者、うちわにそふるけさのくわん、神には茅輪、九四天、童女のひたい、かゝみの餅、ゑんざや、まりに、さかずきや、さては中よき一もんのまじはり、

まろくてもなをまろかれやわがこゝろ

かどのあるには物のさはるに

丸はたからの玉ぞかし、干珠滿珠の二の玉、卞和夜光の玉、面向不背の玉、貝玉、牛玉、鐵砲玉、露玉、あられのしら玉、おもひの玉、眞如の玉や、衣玉、大こくのもつは如意寶珠、子共のもつはぎちやうの玉、ざたうのもたぬはまなこ玉、女のもたぬはへのこ玉也、

三十八、にたる物の品々

一、弟子は師匠ににたり、弟は兄ににたり、倣、かくのごとく書て、おもかげとよむもかやうの心か、子はおやににたる事めづらしからず、

子はおやににるなる物とおもはれて

こひしき時はかゝみをぞみる

物まねをよくにせて、さいわいになりたるためしには、かのもろこしの燕丹、又孟嘗君秦都を去て歸國をいそぎけるに、函谷の關におちきたる、あとよりてきちかづきけるに、此關法にて曉鷄鳴を聞てせきの戸をひらく、夜ふかければひらかず、いかがせんとわづらふ處に、下座の者によく鷄のこゑをにするものあり、かれに一こゑときをつくらせしかば、關の鷄みななきける、關守戸をひらきてとをしけるとぞ、此心を歌に、

夜をこめて鳥の空ねははかるとも

よにあふさかの關はゆるさじ

或連歌に、

いれんいれじの戸ざしくるしも

その人とまなびなしたる聲はして

此句はうき船のまきに、薫大將のうき舟の君を、宇治の里にかくしをき給ひしを、にほふ兵部卿の宮ほのきゝ給ひ、薫は禁中御とのゐの隙に、内記といへるものにあないさせて、かの宇治の里へ、さ夜ふけがたに宮おはしましたり、そう門よりはえ入給はで、かきをやぶりてしのび入、しんでんのもやの軒ぢかくたどりよりて、いよすのかゝれる隙より内をのぞき給へば、よひにはおりぬふわざして、をのがじゝみなおふとのごもりぬ、宮●まどをたゝき給へば、うちより右

近といへる女、たそとゝがめしに、薫の御こゑによくにせてこわづくり給へば、大將の御歸と心得てとをあけぬめり、うちへ入給ひて夜の事おもひやるべし、

よしは蘆ににたり、

物の名もところによりてかはりけり
なにはのあしは伊勢のはまおぎ

花あやめはかきつばたに似たり、芍藥はぼたんに似たり、水仙花はにんにくに似たり、あんずはむめににたり、あてはひの木に似たり、海棠はさくらににたり、せいねはにんじんに似たり、雪は鵞毛に似たり、鵄は鷹に似たり、狼は犬に似たり、かはほりは鳥に似たり、鹿は馬に似たり、かをさして馬といふ事は、秦始皇死て李斯趙高といふ二人の臣下有、始皇死る時、長子扶蘇に位をゆづるのよし、狀を書て李斯に給、李斯此狀をばかくして、扶蘇をばうつべきよし御遺言なりとて、兵をさしつかはす、扶蘇あらそはずして自害しぬ、扶蘇は器用ありける間、かくのごとくしけり、胡亥とて二番めの御子の幼少なるを用、これを二世といふ、李斯は趙高共に大臣として、秦國の政をつかさどらんとせし處に、趙高又李斯をほろぼさんとおもひて、李斯叛逆の心有よし二世王に讒しけり、しかる間李斯ほろぼさる、趙高いまはおもひ事もなくて、我威勢のほどをみん爲也、これは鹿也馬にてはなしとしれども、皆ゐせいにおそれて、鹿をさして馬といひける、拾遺集雜下に、能宣に車のかもをこひにつかはして侍りけるに、侍らずといひて侍りければ、

藤原仲文

かをさして馬といふ人ありければ
かもをもをしとおもふなるべし

かへし、

なしといへばおしむかもとやおもふらん
しかや馬ともいふべかるらん

已己己巳、樂樂樂、慕募暮慕墓、

三十九、名所誹諧發句しなぐ

一、春　うば竹の枝でとしこせ老の坂
やり梅のながえやつゞくみこし岡
ならづけはかすがまへりの用意哉

夏　ときは木のおちばもねるやひばり山
ほたるとぶ夜やくらまのひうちいし
きつね火はいなりまつりのかゞり哉

秋　めい月はをばすて山の名たてかな
　さびあゆやくれないくゞるたつた川
　露をこまけあげてゆくやまりこ宿
冬　すゝばなやたるひにひえてせきがはら
　松風に雪ひらめくやすまのうら
　けぶりにもすゝけずしろしふじのだけ

四十、目出度物のしなぐ

一、よめ入むことり、げんぶくやわたましの能、初知入に、元三のせち、いきみ玉、ながえのてうしのてふ花がた、正月のかゞみ、松かざり、二十日は具足のしうぎとかや、御産安穩、かみをき、はかまぎ、女のもぎ、子そんはんじやうのうばおふぢ、うけ振舞に、鶴かめや、松と竹とにやちよの椿、萬歳々萬々歳、
　よろづよとみかさの山によばふなる
　　あめのしたこそたのしかるらし

此尤草紙は、或人つれぐの餘りに、硯にむかひ筆にまかせて書集ける、其心あまれりやたらずや、然を忝無品親王御覽有て、事たらざるをくはへ、よろしきをたすけ、腹に味ひて筆の究とらせ給ふとぞ

尤の雙紙終

寛永甲戌六月吉日書舍中野氏道伴刊行

おちくぼ物語上

中むかしのことかとよ、ながをり□□はのゝちうなごんと申人おはしけり、世のなかゆたかにて、きみの御かんにあづかり、いみじくときめきたまふ、きたの御かたは大じんの御むすめにてぞおはしましける、やんごとなき御あたりにて、とし月をすぐしたまひしが、されどもいかなることにや有けん、いまだわかぎみにてもひめぎみにても一人の御子もましまさず、ちうなごんもきたのかたもあけくれおぼしなげきたまふ、あるときめのとのじゞう、きたのかたにかたり申やう、六かくだうのくはんおんは、れいぶつにておはします、あゆみをはこびてきせいをなしたてまつれば、しゆじやうのこゝろにしたがひて、ねがひをみて給ふとこそうけたまはれと申ければ、きたのかたうれしきことをもきかせつるかな、われもこのとしごろかくおもひよりし、さらばとてしのびやかにめのとばかりをぐしたまひて、六かくだうにぞまいらせ給ひける、御まへにてさま〴〵きせいましまして、ないぢんのかたはらにつぼねをしつらひ、七日つやしたまふに、まんずるよのあかつきのゆめに、みとしろのうちよりこがねのはこを給はりしを、きたのかたのみぎのたもとにおさめたまふと御らんじてゆめさめぬ、みだいどころこれはありがたき御つげとて、またらいはいをしたてまつり、御まへをげかうし給ひける、そのゝちいくほどなく、きたの御かたたゞならぬ身とならせ給ふ、やう〳〵日かずをふるほどに、いさゝかのなやみもなく、やす〳〵と御さんのひもをとき給ふ、とりあげて御らんずれば、ひかるほどのひめぎみにてぞおはしける、ちうなごんどの御よろこびかぎりなく、めのとかいしやくの女ばうあまたつけまいらせ、かしづき給ふこともまた世になくぞみえにける、かくて日かずをふるほどに、うつくしくおひたゝせたまふ、かくめでたきうちにもゐむじやうの世のならひ、かみ一人よりしもばんみんにいたるまで、のがるべきみちならず、ひめぎみ七さいの御とし、はゝきたのかたれいならずなやみ給ふ、かりそめのこゝちにおぼしめしけれども、日をへておもらせ給ふほどに、ちうなごんどのおどろき、てんや

くくすりをつくし、さま〴〵の御いのりあれ共、ちやうごうにやありけん、そのかひさらになし、いたはしやきたのかた、いまをかぎりとやおぼしけん、めのとにいだきおこされ、中なごんどのにむかひ、なく〳〵のたまひけるやうは、みづからはいまめいどにおもむくなり、われなからんあとにても、あひかまへてひめのためにあらくあたらせたまふなよ、これのみたまふなよ、これのみよみぢのさはりとなるとかきくどきつゝのたまひける、中なごんどの御身ひとりの子にてもなし、われもおなじおやなれば、いかでおろかに思ふべき、こゝろやすくおぼし召、たゞほとけの御なをとなへ給ふべしとぞおほせける、きたのかたも世にうれしげにうちゑませ給ひ、さてひめぎみのなにごゝろなきを御そばにめして、かみかきなでゝおとなしき人にいふごとく、なく〳〵おほせけるやうは、きみをば六かくだうのくはんおんにあゆみをはこびてまうけはんべりしなり、しかれどもあさきちぎりにやありけん、さかへたまはんゆくすゑをもみとゞけずして、うちすてむなしくならんことこそかなしけれ、わがなからんあとにても、われをこひしくおもはんには、此くはんおんの御まへにて、わがのちのよをいのりてたべと、いひもはてずなみだにむせびたまひしが、かくこそのたまひけれ、

すゑかものまだいでたゝぬをふりすてゝ
いかになりゆくわが身なるらん

とゑいじつゝ、なむあみだぶつ〳〵とゝなへて、つゐにむなしくなり給ふこそあはれなれ、ひめぎみに御しがいにいだきつき、われ〳〵をすておきいづくへゆかせたまふぞやと、りうていこがれ給ふぞいたはしき、ちうなごんはおなじみちにともだへこがれたまへどもかひなし、たゞひめぎみのゆくすゑのみおもひやられてあはれなり、かくてひめぎみはつゆのうき身をながらへ、とし月をすぐし給ふほどに、さてしもあらぬことなれば、またきたのかたをむかへたまへり、ひめぎみの御ことをば、かのはゝうへのこゝろくるしげにのたまひおきしを、わすれがたくおぼしめし、よろづにつけていとをしみ給ひ、あらきかせにもあてじとぞはごくみ給ひける、よのならひにやけいぼのわたらせたまひてのちは、御こゝろのまゝならず、さすが御あたりもとをくて、なにごともおろ

かにぞなりたまふ、まゝはゝなにごとにつけてつらくあたり給ふよしをきこしめしては、いつしかとしもゆきたまはぬ人に、かやうにものをおもはせたてまつるなど、くさのかげにてさこそつらくうらみ給ふらめ、わが御あたりにてそだてまいらせ、あさゆふかげをなりともみたくおぼしつれども、まゝはゝのわさんにてよろづへだつるやうにしたまふこそくちをしけれ、

ちうなごんどのは御こゝろにかなはぬありさまをみたまひ、人しれぬ御なげきに御そでのかはくまぞなかりける、かくてとし月うつりゆくほどに、いまのきたのかたの御はらに、ひめぎみ二人わかぎみ一人ぞいでき給ひける、きたのかたてうあひし給ふことかぎりなし、ちうなごんどのは此きんだちにつけても、大ひめぎみのすぐせのほどいとをしくて、人しれずなみだぐみ給へり、日にそへておひたちたまふほどに、大ひめぎみのうつくしくあひきやうづきて、かゞやくやうにおはしければ、まゝはゝはわが子をいとをしきにつけても、大ひめぎみをいとゞにくゝぞおぼしける、さるゆへにたつみのかたにひとまなるところの有けるを、いたじきを一だんさげてそこにすませ給ふほどに、人みなおちくぼのひめぎみとぞ申ける、ひめぎみはあさましきなをよばれ、はぢがましきめをみんよりは、とく具してわれをもはゝうへとおなじはちすのゑんにむかへさせ給へとぞなげきたまふ、いとふびんなりける、かくてひめぎみ、

日にそへてうさのみまさる世の中に
こゝろづくしの身をいかにせん

世の中のつらきおり〳〵は、はゝうへのいまはのときのたまひおきしことのはをおぼしいでゝ、くはんおんのみなをとなへたまひなどしてあかしくらさせたまへり、そのころてんがの御子に二ゐのちうじやうどのと申て、やんごとなきひとおはしけり、いろにふけりおはしつゝ、いまだみだいどころもむかへたまはねば、ちゝはゝ御こゝろぐるしくおぼしめすことかぎりなし、いかなるしづのめの子なりとも、御こころにだにいり給ふ人あらば とたづねたまへども、つゐに御めうつるかたもなし、

ちうなごんの大ひめぎみはかたちよにすぐれたるよし、くらんどのたゆふが女ばう、かのおちくぼの御か

たにまいり、めのとにちかづき御ふみをまいらせけり、ひめぎみひらきてみたまふに、うすやうのこがれたるにことばゝなくて、

きみありときくに心をつくばねの
　みねどこひしきなげきをぞする

ひめぎみは世の中のつらきことのみあじきなくおぼしけるに、またかゝるわざもれきこへなば、いかばかりのうきことかきくらんと、うつゝなくてひきかつぎふしたまふ、めのと申けるは、これはたゞうとにてもおはしまさねば、ちうなごんどのゝきこしめし候とも、くるしからぬ御ことぞかし、あまた人々おはします中に、おもはれさせ給ふこと、ひとへにくはんをんの御ひきあはせとたのもしく候へば、まづ一ふでの御かへしあれかしとて、すゞりがみをまいらすれば、ひめぎみいとはづかしげにて、

ほに出ていふかひあらば花すゝき
　そよともかぜにうちなびかまし

とあそばし給ひて、女ばうにぞわたし給ふ、いかにしてかはもれにけん、まゝはゝこのよしを聞つけ、ねたくおもひたまふことかぎりなし、あはれわがきんだちにはかやうのこともなくて、なんぞやあのおちくぼのあさましきていにておはしつる人にもと、いとどにくゝおもひて、ちうなごんどのにあしざまにいひて、やかたのうちをもおひいださばやとおもひつつ、まことやおちくぼのかたへは、いやしきものゝいりきてはぢがましき事ありとなり、まことならばせいしたまへ、わがいふことを聞たまはぬなれば申なり、よのきんだちのおもてふせなりとにくげにのたまへば、中なごんさは有まじけれども、われにうとませんためにこそ、いとゞあはれにてひめぎみのもとへたちより、めのとをよびいだして、しか〴〵のことを人のしらせつるは、よもさはあらじとおもへども、つゐに申いづるなり、まことにてはよもあらじ、よくよくかしづきまいらせ、人わらひにならぬやうにせらるべし、はゝのいひをきしこともわすれねば、ひめぎみの御こともいとをしく、あさゆふちかくてみまいらせたくおもへども、心にかなはぬよの中にてうちすぐれば、めのとをはじめてうとみまいらすることのやうにつらくこそおもふらめ、わするゝひまもなきぞとてふししづみ給ふ、

これはたゞまゝはゝ御ぜんの、いかにもしてうしなはせたくおぼしめし、あしざまにいひなさせ給ふなるべし、いかでかさやうの御ことのはんべらん、これにつけてもひめぎみの御すぐせのほどこそいとをしけれとて、なきしづみたまひけり、かくて六かくだうのくはんおんはあらたにおはしませば、ひめぎみをもいのりてまうけしなり、つれ〴〵にておはしまさんよりは、かのみだうへまいらせ給ひて、いのりをもしたまへかしと、なにぞのことまでこまやかにかたりつゝかへり、めのとひめぎみにかくとかたりければ、いとゞきへいる心ちして、ひきかつぎてぞふし給ふ、かくまう〴〵としておはせんより、かのみだうへまうで給へかし、御こゝろをもなぐさむにと申ければ、さらばとてうしぐるまさはやかにして、めのとゝたゞ二人ぞまうでたまひける、そのるすのおりふし、また二ゐのちうじやうどのより御ふみもちてまいり、おちくぼの御しよにてたづねまいらするを、まゝはゝきゝて、ひめぎみはしか〴〵の事有て、人にぬすまれゆきがたしらずなりたまふと、そらごとつくりていはせける、ちうじやうどの、これはゆめかやいかがせんと、そゞろにおもひみだれ、きやうらんのこゝろつきて、いづくともなくうせたまひぬ、まゝはゝはこれをきゝ、よくこそたばかりすましたれと、こゝちよげにおもひけるこそうたてけれ、

おちくぼ物語下

さてもひめぎみは六かくだうに詣でたまひつゝ、三七日こもりおはしまして、さま〴〵にいのりなどし給ふ、まんずる夜のあかつきうちまどろみたまふに、みちやうのうちよりけだかき御こゑにて、なんぢはわがあたへし子なれば、あらきかぜにもあてじとかげみにそふてまもるなり、おさなきよりみなし子となり、おもひをするこそふびんなれ、されどもかなはぬことなればちからなし、いまはやとく〳〵げかうせよ、これよりげかうせんみちにて、はじめにあはん人をなんぢがつまとするならば、すゑはめでたかるべしとのたまふとおぼへてゆめさめ、そばにふしたるめのとも、おなじくかやうのじげんをかうぶりぬるとかたりければ、ひめぎみ、わらはがみしにもたがはざれば、いかさまにも御りしやうたのもしくて、二人うちぐしげかうし給ふほどに、いまだ夜ふかなれば、ひともいまだ詣でざりしに、このごろこのみだうに、ものぐるひとてわらはのすみけるが、一ばんにぞゆきあひける、ひめぎみよく〳〵み給ふに、としははたちばかりにて、かみはそらざまにかきみだれ、かほくろくよごれ、みにはこもをきて、さながら人のかたちともみへず、いかにくはんおんの御りしやうなればとて、かゝるあさましきものをつまとさだむべきかと、あさましくうらめしくて、めのともろともになきしづみやりすごさせ給へば、ものぐるひ申やう、くるまのうちへ申たきことあり、われこのあかつきくはんおんの御じげんをかうぶりはんべりぬ、人々はさやうのことはなかりしかと申に、いとはづかしく、中々人のきくならば、いよ〳〵ものわらひならんとおぼしつゝ、やがてひとつくるまにうちのせて、しのびやかにおちくぼにぞいらせたまひける、ひめぎみはあさましとはおぼしけれども、くはんおんの御りしやうなれば、もしやとすゑをたのみつゝ、さま〴〵にいたはり、あさからぬちぎりをかはしたまひぬ、いつしかまゝは、きたのかたきゝつけ、よき事とよろこび、ちうなごんどのにのたまふことは、ひごろ申せしことをば、みな〳〵わんさんのやうにおぼしつゝ、うけひきたまはぬゆへに、あのごとくなるあさまし

きことをもしいだし給ふなれ、みたまへひめぎみのこのほど六かくだうへまいるとて、よづめをしたまふは、一もんのおもてぶせしたまふなれ、さらばよのつねの人にてもあらばこそ、ものぐるひとて人わらひになりしものをわがねやにひきこみ、こゝろうければうみへも川へもしづめたまへとうらみかこち給へば、ちうなごんどのこゝろのうちに、もしまことならばあさましき事にもあるかな、さればとていかでかつらきめみせん、かれがはゝのいまをかぎりの時、くれ〴〵といひおきたまひしこともわすれねば、いかならん人にもみせきこへばやとおもへども、まことならぬおやのなかはおもふまゝならねば、さてのみすぐすなり、つゆのみのきへうせなんとおもひしも、ひめぎみのゆへにこそおもひみだれて、いみじからぬさまにてかやうにははんべれ、ひめぎみの事とては、たとひいかなるふしぎありともこゝろうくはあたらじ、かさねても申させたまふべからずとのたまへば、まゝはゝおもひほかなれば、いよ〳〵ねたくくちをしくおぼして、いかにもしてちうなごんどのに、よそながらみせまいらせて、うとませばやとぞおもひ給ひける、

さるほどにものぐるひは、おちくぼの御かたにてあかしくらし給ひしが、まゝはゝのつらくあたりたまふことをあさましくおぼしめしければ、あるときのたまひける、かくていつまで人にしのびてすぐべきぞ、御みのちゝちうなごんどのにげんざん申べし、そのよしをのたまへとかたりたまへば、ひめぎみはさなきだに人のわらはるゝに、おもひのほかなることをのたまふものかな、いかにしてかやうのことをばおやこの中にいひいだすべきと、あさましくてあんじわづらひ給ひしかども、くはんおんの御ひきあはせのつまなれば、いづくまでもひとしだいとおぼしめし、ちうなごんどのへ御ふみまいらせらるゝ、はづかしき申ごとにて候へども、しか〴〵のことなんはんべりてとかゝれたり、中なごんどの御らんじて、さては人のひごろ申しもいつはりならざりけり、いかゞすべき、さればとてひめにはぢを見せんもこゝろうしとおぼしめして、やがてかへり事あり、たてゑぼしにあをかりぎぬをそへてをくらせ給ひければ、ものぐるひこれをみて、われはかやうのものきた

る事なし、これはいさゝかのしもべのきるものとこそきけとのたまひければ、ひめぎみいよ〳〵こゝろぐるしくおぼしめし、いかでさやうの事の申さるべしとはおぼしめしけれども、くはんおんのむさうにまかせてまたふみをとゝのへ、かやう〳〵のしさいはんべりといひやりたまへば、ちうなごんどの、さればこそとよ、きやうきなる人ときけば、いよ〳〵さやうのことを申につけてもびんなけれ、たゞいまのほどに、ものうきめを見ん事のうたてさよとぞおぼしめしける、ひめぎみにものおもはせんいたはしさに、またくろきしやうぞくにかぶりをそへてぞおくらせたまひにける、ものぐるひこれをみて、これこそとぞよろこびける、かくてまゝはゝはこれを聞、よにうれしげにおもひ、たゞいま人にはぢをあたへんと、わがきんだちをさもじんじやうにいでたゝせ、あたりもかがやくほどにざしきつきかまへて、いまや〳〵とまちたまふ、かくてひめぎみはかのものぐるひをいでたゝせんとて、てづからじゞうとゆどのをしつらひ、ゆをひかせかみなどあらはせたまへば、さすがよしあるみと見へて、まことによのつねならずみへたまへば、ひめぎみもたのもしくぞおぼしめしける、かくてしやうぞくをめしかぶりき給へば、たれにもおとるまじきほどのありさまなり、ひめぎみもこゝろぼそくいでたち給ふ、はだにはねりぬきのしろきをめし、うへにはやまぶき色のこそでに、はゝうへのこしおきたまふうすこうばいのうちきせをめして、たけなるかみをさはやかにさげ、じゞうをぐしていで給ふが、あたりもかゞやくほどにぞ見へ給ふ、かくてちうなごんどのはざしきしつらひ、わがみもじんじやうにいでたち、いかなる人ならんと心のうちにはひまもなくおぼしめして、しのびのなみだせきあへたまはず、さてかの物ぐるひは、いまははやたいめんせんとて、中なごんどののかたへうつり給ふ、したじたのものまでもむこどのをみんとて、おの〳〵おもひ〳〵にいでたちてなみゐたり、されどもものぐるひはあふぎにてかほをかざしとをりければ、さればこそ、よしなきものにてはづかしければこそ、かほをばかくすらめとつぶやきける、かくて物ぐるひはざしきにいたりてみれば、中なごんどのみだいどころきんだちにいたるまで、花をかざりいでたちたり、ち

うなごんどのひだりのかたにひとまなる所有、たがためにまうけたるざしきならんと、をくしたるけしきもなくゐなをりける、ひめぎみもまゝはゝのひだりのかたになをり給ふ、かの物ぐるひはざしきになをりても、かざしたるあふぎをとらず、いかなることといひあへり、その時中なごん殿おほせけるは、いかにまれ人、このほどひめがかたにはんべるよしはうけ給れども、つゐにげざんに入はんべらず、これまでの御出かへす〴〵もめでたくこそはんべれ、けふよりは心やすくすませ給ふべし、それ〳〵とのたまへば、うけたまはると申て、御まへにありし女ばう、もみぢのかはらけに、ながゑのてうしをそへてもちてきたり、中なごんどのゝまへにぞおきにけり、中なごんどのやがてとりあげ給ひ、あるじくはんばくと申せばとて、さしうけてきこしめし、まれ人へとおほせければ、いまははやのがれぬところなりと、あふぎをばとり給ふ、みればてんがの御子二ゐのちうじやうどのなり、中なごんゆめのこゝちしてたふれふし、せんごもさらにわきまへたまはず、御まへにかしこまりのたまふ、さてもこのごろてんがにはさみのうせさせ給ふと、世はとこやみとなりぬるとて、みかど御なげきいふばかりなし、このごろこれにましますことをかみならぬみのあさましさよ、ふぎのふるまひさぞおぼしめし給ふらん、ゆるさせ給へとてかうべをちにつけなみだをながし給ひける、まゝはゝひめぎみもあきれはてたるありさまにてぞおはしける、かくて中なごんどのは、やがてそれよりみかどへさんだいし給ひける、おりふしてんがはちうじやうのことをおぼし召いでゝ、世の中あぢきなく、なみだのゆかにふしてましますちうなごんどのまいり給へば、まくらをもたげ給ひ、めづらしや中なごん、われはかくおもひにしづむみとなるぞや、なぐさめてたべとのたまへば、中なごんなみだをながしのたまひしは、さればこそ、此ごろあさましきことのはんべりし、心をつくしてたづねさせ給ふ中じやうどのこそ、みづからがひめのかたにわたらせ給ふを、ゆめにもしらでやみ〳〵とくらし、たゞいまげんざんいたしはんべりしほどに、申あげんそのためにこれまでまいりて候と申給へば、てんが大きに御かんあり、これはまことにてありけるかや、ちうなごんいかにとの

たまへば、きたのまんどころもきこし召、何と中じやうがゆくゑをしりたるとや、はやとくつれてきたり給へとのたまへば、中なごんなみだをおさへて御まへをたち給ひ、中じやうどの御ゆくゑをそれがしたづねいだしたり、はや〳〵御むかひにまいれとのたまへば、百くはんけいしやうにいたるまで、こいり、こしくるまとひしめきて、中なごんのやかたにきたりけり、中じやうどのもやがてくるまにめされ、ひめぎみもろともうちつれて、みかどへうつらせ給ふ、すなはち中なごん殿も御とも申させ給ひける、かくててんがは中じやうどのを御らんじていだきつき給ふ、きたのまんどころも出給ひ、いかにやちうじやう、此ごろはいづくにありて、われ〳〵にかく物おもはせけるぞやとすがりつかせ給ひつゝ、まづさきだつはなみだなり、中じやうどのは御はづかしきことなれども、中なごんのひめをおもひ、かれがかたにしのびはんべりしなりとおほせありければ、きたのまんどころはきこしめし、たとひいかなるしづのむすめなりとも、御みのこゝろにいりたらんはちからなきに、ましてや中なごんはいゑたかなれば、さいはひなりとよろこび給ふて、中じやうどの大なごんになし給ふ、ひめぎみもこうゐのくらひになり給ふ、かくててんがはいまははやおもふことなしとて、大なごんに世をゆづり給ふ、大なごんどのくらひにつかせ給ひて、中なごんをも大なごんになし給ふ、ひめぎみはきたのまんどころとあふぎたてまつり、かくてまゝうもないしのくらゐをゑてさかへけり、じじはゝうとましかりしことゞもおもひいでゝ、中なごんどのふる御しよをしつらひてすませける、ときの人々もゆきかよひとふ人もなきことなれば、たゞつらにいきたるかひもなくぞすごし給ひける、さるほどにひめぎみおちくぼにましますときより、たゞならぬ御みにてわたらせ給ひけるが、月日かさなりなやませたまひける、諸寺諸山の貴僧高僧におほせつけられ、さまざまの御いのりどもありければ、まんずる月にやすやすと御さんあり、とりあげて御らんずれば、たまのごとくなるわかぎみなり、めでたきことはかぎりなし、やがて御かいしやくには、さきの大なごんどのゝきたのかた、御めのとには中なごんど

のゝひめぎみぞまいらせ給ひける、ひめぎみはかやうにゆくすゑめでたくさかゆくことも、ひとへに六かくだうのくはんおんの御りしやうなればとて、それよりも六かくだうのくはんおんにまうでさせ給ひける、

みだうのべつたうをめして、御だう御こんりうあるべきよしをぞおほせゐはされける、べつたうなのめによろこびける、さてそれよりもちよくしをたてさせ給ひ、こと〴〵くざうゑいあるこそありがたけれ、みかどよりかくのごとくもちゐたまへば、いはんやばんみんにいたるまで、ひとへにこのくはんおんはれいぶつにてましますとて、あがめたてまつることかぎりなし、さてそれよりも大なごんは、ばんみんのためにとてたかきところにだうをたて、ひくきところはやまをつき、大河にはふねをうかべ、こがはにははしをかけて、じひをもつぱらとして、しゆじやうのためによきことをのみたくみ給ふ、まことにむかしよりいまゝで、じひをふかくし人になさけあるものは、つゐにぶつじんのあはれみをかうぶる事うたがひなし、このさうしをみ給はん人々は、たとひいかなる人のあしきことを申とも、じひしんをさきとしてなさけをせんにし給ふべし、まことにしるべき物がたりなり、

萬治二年仲秋日

おちくぼ物語終

犬方丈記 困窮施行

今長明

おく質のながれは請ずして、しかも元も利もあげず、米屋そうりやるうちまきは、かつきれかつあがりて、久しくさがる事なし、世中にある人とすみかとたて枯のごとし、まづしきの都のうちに袖をならべ、家々をもらへる、たかきいやしき非人のすがたは、代々をへてつきせぬものなれど、是を眞乞食かとたづぬれば、むかし有し乞食はまれ也、あるは去年やぶりてことしいで、あるは在家ほろびて明屋となる、すむ人も是におなじ、そも河原に非人もおほかれど、いにしへ見し非人は、二三十人が中に、わづかにひとりふたり也、あしたに死し、ゆふべにかつゆる非人、たゞ道のはたに充たりける、しらずつかれしぬる人、いづかたより來りていづかたへかさる、又しらず、米のねだんあがるがために心を悩まし、さがるによりて目をよろこばしむる、そのあがるとさがると、相場をあらそひ買さま、いはゞいたしかゆしにことならず、あるは金なくて米さがれり、さがるといへども元手につかれぬ、あるは米はさがりて金なをたへずといへども、商をするほどはなし、およそ物の本をとりよせ、四冊あまりの年代記をくるあいだに、世の飢疫を見る事やゝたび〲也、去ぬる欽明天皇の即位二十八年丁亥の年かとよ、郡國洪水し天下饑饉して、人を殺して肉を食とせり、又推古天皇三十四年丙戌の年六月に、大雪ふりて天下大に饑饉し、老少おゝくかつへ死し、國に盗賊おこりて、しばらくも心をやすんずる事なし、又聖武天皇神龜四年壬申の年夏、大にひでりして五穀みのらず、諸民飢餲におよべり、又光孝天皇仁和元年七月に、天より砂石ふり下りて稼苗を損さし、天下饑饉せり、又宇多天皇寛平元己酉の年かとよ、六七月のあいだ霖雨ふり洪水して、五穀をさまたげ餓死おほし、又崇德院長承三甲寅の年、洪水炎上たび〲して、洛中饑饉におよべりとかや、又安德天皇養和元年辛丑の年、四五兩月があいだ大に飢餲せり、あるひは二とせが間ともいえり、或は春夏ひでり、あるひは秋冬大風大水など、よからぬ事ども打つゞき、五穀ことごとくみのらず、又後堀河院貞永元壬辰の年、又は

後圓融天授五年己未の年、又は後小松院明德元庚午の年、後花園院文安五年戊戌のとし、後土御門院文明四壬辰の年、又は後柏原院永正元甲子の年、いづれも天下饑饉して餓死の骸骨ちまたにみてり、その間あるひは兵革おこり客星いで、あるひは地震火災洪水疫癘、世のふしぎを見る事あげてかぞふべからず、ちかくは女帝寛永十九壬午の年、春より夏にいたりて諸國飢渇におよべり、なをもちかくは今上帝の寛文九己酉の年、一とせが間饑饉して、餓首道路に枕をならべしありさま、まことに目もあてられぬ事なりしを、かたじけなくも將軍家より詔をくだし給はりて、正月二十日より百日をかぎりて、諸國の貧人を北野七本松と、四條河原にあつめ、粥を烹てすくひ給ふ、この御施行におもむく人、洛中洛外片邊土より、われさきにとはせあつまる、白晝のはれなるに、みしれるがあるにもいとわず、人めをはづる事もなきは、身のかなしさのきわまりにやと、分野(ありさま)まことにあはれ也、是を見て京わらんべの、

粥場かり出がたく見ゆる晝中に
　うら屋町屋にすめるかゝまで

同延寶三己卯の年、春より夏にいたりて諸國饑饉せるときも、同じく北野四條の兩所に於て、三月より五月まで米錢をほどこし給ふ、此兩年の御すくひに、諸民ほつと息をつぎ、つたへきく堯舜の御代といふも、かほどの御惠にはよもまさじ、われ〱が餓死の餘命をたもつ事、ひとへに聖代の御下にすむしるしならずや、御代はかたかれ、さゞれ石いわほに苔のはゆるまで、萬々歲といわひつゝ、よろこばざるはなかりける、かゝりしかば今は世中たちなをりて、とんよのの糝石(こなつぎ)ずりの小麥團子も、はらにあきたりければ、非人よろこびて、

われがよは晝夜々々にすゝりみその
　石ずりとなりて小麥むすまで

爰に延寶八庚申の年神無月初つかたかとよ、毎夜ふしぎの客星あらはれて、諸人あやしみ見る事かぎりなし、その形扇をなかばひろげたるごとく、すへひろにて長さは十丈ばかりにして、布を引るがごとくに、西より東にさし月をこえてきゆる事なし、扇星あるひは御光星、又は彗星などいふ人もあれば、そのころある人の發句に、

扇とはげにそらごとよ彗星
と口々にとりさたし、あるひは吉事のためしにも取
なし、或は凶事の兆ともいひて、上下たゞ此星の事の
みいひやまず、又の年の疫癘飢饉をしめすにやと、後
にぞおもひしられ侍る、その外大風大水うちつゞき、
五穀損じてみのる事すくなく、むなしく春耕し夏う
ふるいとなみのみ有て、秋かり冬おさむる催はなし、
ことしかくのごとく辛くして暮ぬ、明る年は立なを
るべきかとおもふに、あくれば延寳九年、天和は元
年辛酉の年、あまさへ疫病うちそひて、年をこえてや
まず、あとかたなく世の人みな病死し、八木のあたひ
は日々にまさりければ、日をへつゝ困窮しゆくさま、
將棋だをしのたとへにかなへり、
抑疫病といふ事、疫病疫癘時疫、ともに異名同症にし
て、傷寒といふは別症なり、それ傷寒といふは、起居
節をうしなひ、飲食時にしたがわずして、霧露霜雪の
寒邪に感じ、すなはち病を傷寒といひ、寒邪肌肉のあ
いだにかくれて、春の温暖の氣によつておこるを名
づけて温病といひ、夏の暑熱の氣によつておこるを
名づけて熱病と云り、又疫病といふは、五運六氣の變
よりおこりて、春温なるべきにかへつて涼しく、夏熱
すべきにかへつて冷に、秋涼しかるべきにかへつて
熱し、冬さむかるべきにかへつて温なる、是を四時不
正の氣と云、およそ人辛苦房勞し、飢て食し、飽まで
食て心腎脾胃虚したるうへに、此不正の邪氣を感じ
てつゐに疫癘となる事也、時節病症なべておなじや
うにわづらふゆへに、時疫ともいひてはやり病とせ
り、つぶさに素問ならびに仲景が傷寒論に見へたり、
されば疫癘のはやる事は、天地運氣の不和よりおこ
る事にして、むかしも代々にそのためし多し、遠くは
崇神天皇即位五年戊子の年、國内に疫疾はやりて死
する者かずをしらず、そのゝち欽明天皇即位七年丙
寅の年、又光仁天皇寶龜五年甲寅の年、又淳和天皇天
長六己酉の年、又一條院長德四戊戌五月九日、紫野に
て疫神をまつりて是を御靈會と號し、御輿の社を今
宮と號す、又後一條院長元二己巳の年、京中腫疫病を
わづらひて、世にこれを福來病といえり、又後深草院
正元元己未の年、又後小松院明德元庚午の年、後花園
院文安五戊辰の年、同寛正二年辛酉の年、同四癸未の
年、又後土御門院明應元壬子の年、又後奈良院天文三

甲午の年、同九庚子の年、又正親町院天正八庚辰の年、すべて疫病はなはだしく諸人なかばは病死せり、近くは女帝寛永十七庚辰の年、牛の疫病はやりて、田舍在鄕、牛の死する事あげて計がたし、近鄕の百姓牛をひきて、祇園の社にもふで疫病をいのりし事、毎日數百疋に過たりけるとかや、爰に天和元年の秋つかた、帝土畿内の諸人疫癘をわづらひ、家ごとに枕をならべてふし、藥鍋をかまへて煎ずる事、いとらうがはしき事共也、そのうち病かるきは、四五日がほどにて癒るもあり、又しだいにおもりて熱氣はなはだしく、譫言妄語をいひ、踰レ墻上レ屋のありさまも有て、つゐには臨終のすゝめのこゑのみのこるもあり、かくしつゝ年をこえてやまざりければ、洛中の名をえたる大醫、そのほかかたへの藪藥師、安摩腹取針立まで、晝夜をわかたずあなたこなたとよびまねかれ、大醫はのり物よりころびおち、長羽織のすそをかいとるにあわたゞしく、藪藥師は雪踏の皮著物のすそをきらすにいとまなく、紙魚のくひたる藥袋、かびのつける陳皮甘草、此時をえて世に出たり、此たびの時疫人參ならではと、補藥になづむ醫者もあり、あるひは芥連ならではと、解毒の劑を用ゆるもあり、おのれ〳〵が醫術をつくすといへども、十に八九はいへがたく、おわりは獨參々附湯念ののこらぬためなどゝて、涙かたてにもちゆるもあり、百萬遍の珠數をくり大念佛を申もあり、かなしひときの神たゝき、諸寺諸社への代まいり、祈禱祈願、御封うつかた、資財をなげうちたのむもあれど、寺善尺魔の世のならひ、又は業病のがれがたきにや、諸寺諸山の墓所におくる日はおゝかれども、おくらぬ日とてはあらざりし、されば棺を鬻ものは、うちおくほどなくやがてうれ、寺々の僧達は、あなたこなたのしあげの齋非時に、食傷をしてわづらうもあり、むかしもかゝるやまひのはやればこそ、五條の天神は少彥名神にて、大己貴と天下を經營まし〳〵て、疫病をまもらせ給ふとかや、日本紀に見へたれど、勅かけられしためしもあり、此ごろまでは、諸人あけくれ飢渴困窮のうはさに、八木の高直をなげきしも、今は引かへ疫癘のとりさたに、人參のあたひをうれふることゝなりぬ、この物騷のおりからなれば、ちりげもとまりぞつとするか、鼻毛がのびて噓れば、はや疫癘がとりつくかと、われ人おどろきあ

へりける、爰にある人のいひけるは、飢渇の年はかならず疫癘打つゞく事、むかしよりさだまれる事なり、されば傷寒と疫癘とは、病症おなじやうなれども、すこしのたがひめある事也、よき人のわづらふをば傷寒と名づけ、貧人のわづらふは飼食とぼしくきれたれば疫癘といふ也と、さもありさうに沙汰しけるは、げにことわりかなと、おかしくもあはれ也、

八木のあがると人のわづらふと

これは疫癘かれはあきれい

されば去ぬる延寶の比は、五日の雨三日の風、えだをならさず四海おだやかに、民ゆたかに暮せしを、同八とせの秋、天地の氣運ひとしからぬにや、霖雨洪水大風うちつゞき、田畠大に荒損じ、五穀こと〴〵く不熟して、國々の民あるひは地をすてゝ境を出むと思ひ、或は家をわすれて山に住むとす、これぞ飢渇のはじめなり、明れば延寶九年の春、八木のあたひおびたゞしくまさりて、黄金一兩に米五斗餘を賣買せり、かゝりしかば、乞食みちのべにおほく、うれひかなしむこへ耳にみてり、たかきもいやしきも、女童はふくろをたづさへ、郊外の野邊にゆき、雜菜をつみて朝な夕なの糝のたすけとす、かゝるともことし熟田ならば、ながくからきめは見まじきものをと、ゆく年の秋をたのみて、諸人おひつくばかりに待うけゝるに、此年の七月二十日のころかとよ、大風いかめしく吹ける事侍き、三四町をかけてふきまくる間に、その中にこもれる家ども、大なるも小さきも、一としてやぶれざるはなし、さながらひらにたふれたるも有、けたはしらばかりのこれるもあり、又門のうへを吹はなちて、四五町がほどにおき、垣を吹はらいて隣とひとつになせり、檜皮ふき板のたぐひ、冬の木葉の風にみだるゝがごとし、おびたゞしくなりとよむおとに、物いふ聲もきこへず、地獄の業風なりとも、かくこそはとぞおぼへける、家の損亡するのみならず、つばなをぬけるごとく、穗に穗をそろへて熟しいでたる稻田、この惡風に吹たをされ、一時に荒損ずる事、まことに諸人の難義、このときにとゞまれり、さるほどに、帝土畿内の農人は、いよ〳〵八木のあたひをうれふ、とかくする工商は、いよ〳〵これに力をうしなひ、交易貨植のほどに、二とせがあいだの飢渇に、諸民こと〴〵くつかれはて、かねてたくわへたる金銀も、八木のあたひ

に出し盡し、今は念じわびつゝ、寶物かたはしよりすつるごとくすれども、さらに買とる人もなし、いわんやその外の諸道具、衣類疊までうりはらふといへども、久しく飢をすくふのあたひにだにたらず、されば古語に、獸窮則攫、人窮則盜といへり、諺にも、貧のぬすみに戀のうたといへば、さのみやは操もまもりあへむ、目のまへに親を餓し、妻子を渇やす事のかなしさに、おもわずながら、濁貧の志となれる人も有べき事なり、今は家内に住ふちからもなく、笠うちき、足ひきつゝみ、よろしきすがたしたるもの、子をつれ親の手をひきて、家ごとにこひありき、かくわびしれたる者どもありくかと見れば、すなはちたふれ死ぬ、ついひぢのつら、路頭にうへしぬるたぐひ數しらず、いかにいわんや諸國七道をや、宿所しれたる死人は、所より宿所におくり、宿所しれざる死人は、悲田院のものどものわざとして河原にすてぬ、河原などには馬車のゆきちがふ道だにもなし、その外洛外邊塞の堀のうち、畠の側に人しらずたふれ死し、犬狼のくひちらしたるありさま、目もあてられぬ事共也、親は子をすて子は親にはなれ、町々辻々になきさけぶこへ、地獄の罪人の呵嘖にあひて、なきかなしぶもかくやと、あわれにきこへける、あるひは父母がいのちつきてふせるをしらずして、いとけなき子のそのちぶさにすいつきつゝふせるなどもあり、又世にあるときは、おち乳母にいだかれて寵愛せられし子どもの、たがおしゆるとはなけれども、器をもち門々に立やすらいてこひもらひ、おのれと命をおくるもあり、又夫婦ある非人は、その心ざしまさりてふかきはかならず死す、そのゆへはわが身を次になして、男にもあれ女にもあれ、いたはしくおもふかたに、たま〳〵こひゑたる物を、まづゆづるによりて也、されば父子あるものはさだまれる事にて、親ぞさき立て死にける、恥をわすれて家をいでたる者は、足をはかりに門々を乞ありけども、いまだ家居せる貧人は、さながら人目をしのびかね、けふよりやいでん、あすよりはなどゝおもひ、あるひは物もふでの風情にもてなし宿を出、下京なるは上京、上京なるは下京にゆき、しのびて物をもらふもあり、此たぐひの人しらぬ非人際限も有べからず、爰におかしき事のありけるは、ある人の家に職人とも見へず、商をするともなく、毎日物引つゝみ

打かたげ、朝にはとくいで夕におそくかへり、妻子を心やすくすぐすものあり、所より不審（いぶかしく）おもひて、此ものをよびよせ吟味せしかども、何のすぎわひをするともいわず、たゞ御うたがわしきはことはりなれども、悪事をいたす者にても候はず、御吟味は御ゆるし給はれとばかりいひければ、所よりいよ〳〵不審おもひて、くだんのつゝみたる物をとりよせ吟味しければ、からの首に鬼の面と、太鼓ひとつとありければ、さては吟味に及ばずとて、どよみになりて立さりぬ、なか〳〵の困窮に、すべきかたのなければ、さながら面をさらして、袖ごひもはづかしくて、面をかぶり太鼓をうち、時疫のはやる折なれば、風の神をおくるといひて、洛中をもらひありきしとかや、まことに人めをしのぶ袖ごひには、よきはかりごとにやと、ことはり過ておかしくもあはれなりし事共也、

あくれば天和二壬戌のとし、正月なれども人の心もあらたまらず、舊年の困窮に心もふるび氣もいさまず、かるた方引の手すさびも、錢とぼしければおのづからやみ、親類一門の節振舞も、八木やすからねばもよほす事なし、元朝より上下たゞ米のあたひのたやすからぬ事のみをなげきて、いづれの日を正月かと、われ人心をなぐさむ事もなく、芝居操のおもしろきも、今は心まめならねば、ゆく人まれに、神佛の初まいりも、けふのいとなみの切なきにさへられて、宮ゐさびしうなりぬ、されば神依二人敬一增レ威とかやいへば、おのづから佛神の御威光までも、影くらくなるべきにやと、諸人いよ〳〵心ぼそくおぼへける、とかくするほどに、今ははや飢渇やう〳〵三とせにおよびなんとす、さるによつて、農人はたくわへたる麥稷もつき、工商おのれ〳〵が恒産なくなりて、去年にまさりて非人おほくなり、行かふみちも所せく、洛中所々數をならべて明屋となり、たま〳〵のこりすむ人の門には、五人十人づゝ非人立つどひて物をこふは、いかなる慈悲者も、今は不便もさめてうるさくなり、又門外にてそのまゝたふれて死ぬる非人もあれば、いかなる無慈悲の人も是を厭ひて、物をとらせてはやく去する事をなんしける、されば人木石にあらねば、物に感ずる事なきにあらず、なさけある有德人、此ありさまを見るにしのびかね、けふは人のうへ、あすはわが身のうへとおもひ、あるひは菩提の善果とおも

ひ、或は親屬妻子のとぶらひのためと、おもひ〳〵に毎夜かゆをにて、桶に入になひはこばせ、辻々河原にかつへふせる非人どもに、くみほどこしてやしなふもあり、又つくね食に香物をそへ、所々の非人にはこびてくわする人もあり、そのほか錢をとらせ紙子をきせ、おもひ〳〵の善根に、數萬の非人さながらさむき夜もすがら、餘命をつなぎよろこびをなす、心ざしいかでこの善果、現當來世にその報なからんや、未來においては、此善根のたねひらけて六道の罪障を滅し、ながく淨土にむまれて快樂をうけ、現世にては、慈愛の天理にかなふて、たちまち神明の冥慮にかなひ給はん事、うたがひ有べからず、されば春日の神託にも、雖レ曳二千日注連一不レ到二邪見之家一雖レ爲二重服深厚一可レ趣二慈悲之室一とかや、世は末世におよべども、日月はいまだ地におちず、今の世にもかゝる慈悲者もある事にこそと、見る人きく人感せざるはなかりける、爰に非人どもはあまりのかたじけなさに、來世の極樂世界までもなし、現世に於て、かやうの百匁の飲食を下され、ひさぐ搔器の御すくひにあづかるうへは、如來の御ちかひもふかし〳〵などつぶやきて、

極樂のせかいげはい楊しら粥を
なむあみだぶだぶすくひたまはる

爰に悲田院のほとりに、世をあぢきなくおもひとりてすむ人あり、人これを今長明と名づく、世にありしときは、糸竹花月に心をよせ、好色遊興に財をなげうちし人にて、その身父かたの家をつたへて、久しく町屋にすむ、そのゝちすり切身おとろへて、仕合さんざんあしかりしかば、つゐにあとゝむる事を得ずして、三十あまりにして、ぜひにおよばず悲田院にすむ、是をありしすまいになずらふるに、百分が一也、たゞ小屋ばかりをかまえて、はかぐ〳〵しくは屋根をふけるにおよばず、わづかに壁をつけりといへども、門たつるにたるきなし、竹を柱としてあみ戸をせり、雪ふり風ふくごとに、あやうからずしもあらず、所は川原ちかければ、水の難ふかく虱のおほきもさはがし、すてしむかしの全世をおもひ出しつゝ、心をなぐさむる事は三十餘年なり、そのあひだたび〳〵たをれしに、おのづから耳のびひをさとりぬ、則五十の春をむかえて、家をいで世をそむけり、もとより財寶な

ければ、すてがたきよすがもなし、身に外聞あらず、何につけてか執をとゞめむ、むなしく東山の雲にいくそばくの春秋をかへぬる、爰に六十の露きへがたに及びて、更に乞食の部屋をむすべる事あり、是を中ごろのすみかになずらふれば、又百分が一にだにもおよばず、とかくいふほどに、もらいは年々にかすけなく、住家はをり〳〵にせばし、その家のありさまよのつねならず、廣さはわづかに方丈、たかさは六尺がうち也、所をおもひさだめざるがゆへに、地をしめてつくらず、土座をくみ麥わらをふきて、すきまごとにふるむしろをかけたり、もし夏のあつき事あらば、やすくとりてすゞまんがため也、そのあらためつくるとき、いくばくのわづらひかある、になふ所わづかに二荷なり、肩のちからをむくふる外は、更に日傭いらず、今悲田院のおくに跡をかくして、南にかりの卑棚をさし出して、竹のすのこをしき、その西に板だなをつり、中には西の垣にそへて、追分の畫像を安置し奉りて、落日をうけて御あかしのひかりとす、門せどのとびらに、ふる草履ふる鞋をかけたり、北の障子の上に、ちいさきたなをかまへて、くろき麪筩三四合をおく、すなはち味噌米食汁ごときのくひ物をいれたり、かたはらに椀櫃をの〳〵一具を立、いわゆる古椀食櫃これ也、東にそへてわらの蒲團をしき、結衣(つゞれ)をしきて夜の床とす、東の垣に窓を明て、こゝに藁金剛をつくり出せり、枕のかたに土釜あり、これを柴おりくぶるよすがとす、いほりの北に少地をしめ、あはれなるひめがきをかこひて園とす、すなはちもろ〳〵の菜雜種をうへたり、乞食部屋のありさまかくのごとし、もし夜しづかなれば、窓の月にむかし仝世の古人をしのび、鳥のこゑにわかれの袖をうるほせし事をおもふ、草むらの螢は、とをく宮川町のとぼしびにまがひ、曉の雨はおのづから朱雀ふく嵐ににたり、山寺のごん〳〵となる鐘を聞て、八つか七つかとうたがひ、村の乞食のちかくなれたるにつけても、世になりさがるほどをしる、それ三界はたゞ心ひとつ也、心もし安からずば、牛馬七珍もよしなく、宮殿のぞみなし、今さびしき一間の小屋、みづから是をあいす、おのづから宮古にいでゝは、乞食となれる事をはづといへども、かへりて爰に居ときは、町の世體に著する人をあはれむ、そも〳〵佛の人をおしえ給ふおこりは、事

にふれて執心なかれと也、今この小屋をあいするもとがとす、安樂に著するもさわりなるべしといひて、しづかなるあかつき、此ことはりをおもひつゞけて、是より四國九州を行脚し、世のうき無常を悟らんとおもひたち、手のやつこ足ののり物にまかせ、はるかに古里を立出て、木はた山伏見の里鳥羽淀をすぎ難波のうらにつく、これより便船してはるかに海上にうかみこぎ、行舟のあとのしら波に世中を觀じ、順風に帆をあげてゆくほどに、尼崎西宮兵庫一の谷を過て、須磨明石にかゝり、人丸のあとをとぶらひ、紫女の筆のあとをおもひ、これより高砂室の湊、備中備後にいでゝ泉水山の景氣、書くともおよびがたきをうちながめ、はるかに安藝の宮島をふしおがみ、聞しにまさる景いとおもしろく殊勝にみゆ、これより南におきて、伊豫土佐阿波讃岐のくに〳〵、名所々々をたづねめぐり、なを九州の地にかゝりて、豐前の國小倉につく、是より陸地をあゆみてめぐるほどに、都を出て十餘日といふに、やう〳〵長崎の津にいたる、そも〳〵長崎の津は、西南のはて九州の端なれども、音に聞へし所なれば、さしもにひろき所かと思ふに、かねて思ひしにたがひて境地せばく、異朝の船つきなれば、所もにぎはしきかとおもひしに、當年異朝の商船累年におとりてすくなく、ことに西國まで、兩年の饑饉に八木のあたひやすからねば、貨物の商人、その外のはたらき人、上下ともに困窮におよびしさま、宮古にまさりてはなはだし、よのつねは、所の人衣服飲食に過差をこのめる風俗と聞へしも、今はあさましきありさまのみありて、乞食みちの邊におほく、朝にうへて夕に死するたぐひすくなからずしもあらず、爰に黄檗の宗派に崇福寺と云寺あり、異朝よりわたらせ給ふ曇瑞とて、たつとき和尚ありけるが、此分野（ありさま）を不便の事におぼしめし、寺用にたくはへありし金銀はいふにたらず、およばぬ所は袈裟衣をもぬぎうり、堂塔佛も代なして、諸人の饑死をすくはんとおもひ立給ひて、延寶九年仲秋の比よりも、世中立なをるまでとて、毎日粥をにて施行をなし給ひければ、この地の貧人力をえて、はせあつまる事際限もなし、はじめはわづかに二三千人なりしが、日にまして多く成、のちには五六千人におよべりとかや、されどもいづれをすつべき貧人もなし、ありさま見るにいよ

いよ不便もまさりければ、寺用の金銀も出しつくし、和尙みづから錫杖に一鉢をたづさへ、所々を執行し給ひて、その日の施入をみな〳〵粥にとゝのへて、每日貧人をすくひ給ふ、この地の有德人、和尙の心ざしに感じて、おもひ〳〵に金銀を施入するにぞ、一鉢にあまりければ、のちには大なる蒲簀をになはせて、めしつれらるゝ事になりぬ、又多分の金銀數俵の米を施入する人は、寺にもちはこばせておくるもあり、まことに未曾有の善根とこそ聞へける、これを施行の初として、さかい大坂京都までおひ〳〵施行はじまりける、今長明つく〴〵とおもひけるは、われ久しく都にすみわびて、いかなる國にもあとをとゞめむと、去ぬる比より都をいで國々を見めぐるに、こゝぞとおもふ所もなし、今數百里の海上をへて、この津まで來りしに、宮古にかわらぬうきめを見る事、げに世中をわたりくらべて、今ぞしると詠ぜしもおもひ出られ、たゞ世はもとしのびよと、都こひしうおぼへければ、それよりしきりに舟をもよほして、櫓櫂をおしたてこぎゆくほどに、いつしか又攝州堺のうらに付にける、

堺のうらより舟をあがり、まづ住吉にまふで、比しも神無月中旬、木の葉ふく嵐ものさびしきに、こゝかしこみありくに、この地も同じく困窮しけるにや、澤庵和尙の開基南宗寺といふ寺に施行ありて、非人三四千人もあつまりて米をもらふ、每日米五石づゝをほどこし給ふとかや、音に聞へし海部の具足、阿賀の帶とやらんの施入にやといふ人もあり、この地は有德人のみをゝくて、さまでひろからぬ所なるに、かほどまでの非人は、いづかたより來れるにやと、ふしぎにもおもはるゝ事也、それより大坂に出て見るに、さしもに爰は西國の船つきにて、繁華の地なれども、同じく困窮しけるにや、非人所々におほく、本願寺の御堂の庭をかりて、この地の有德人、數千の非人をあつめて、あるひは粥、あるひは錢を施行し、あるひは粥を入る曲物を數おほくこしらへて、是をほどこす人も有、又は相場の米をかいとりて、あたひやすくうりほどこす人も有、國分寺そのほか所々の寺々に、おもひおもひの施行あるは、まことに慈悲の善根かなと、いわぬ人こそなかりける、

あくれば天和二年正月四日といふに、今長明はなれ

し都にかへりぬ、ふるさとの人にあひてかたれば、當地もやがて所々に施行はじまると聞へしが、就レ中けふより寺町大雲院にありといふ、今長明たちこへて見るに、まことに用害おびたゞしく、堂の前に施餓鬼の供物をそなへ、位牌には爲二餓死亡魂一と書付たり、さて羅漢堂の前には、數千の非人未明よりつめかくるを、悲田院のもの、支配として、鉢もらひ非人薦かぶりと、三手にわかちてならべおくは、あたかも碁石をならべしごとく也、さて施餓鬼の法事も事をわり、念佛同音にはじまれば、行列たがわず非人一人づゝ細張のうちを、門外さしてならび出るを、左右に番所をたて、札をうけとり錢をわたす、はじめは三四千人、中ごろは六七千人、をわりには一萬人の上に出しとかや、あるひは二人にもあれ三人にもあれ、子をつれたる者は、親子のかずほど錢をもらふ、さるによりて、辻のすて子をいだき來りて、親子のせにをもらひ、かへさにすてゝかへるも有、又ある非人のふところに、子をいだきて綿ぼうしをきせ、親子のせにをもらひくるを、番所の者吟味して、綿ぼうしをとりて見れば、子にはあらで、ふところにわらをつぐねて入ゐければ、人々けふさめ、まことやせわにわらを出すといふは、此事なるにやと、大にどよみてをひかへす、その外あわれの事共は、いとわかき女ばうの、手足見ざまもあしからぬが、子をいだき手を引て、顏うちつつみもらふもあり、又年よりたる親の、杖にすがりてあゆみかぬるを、手をひき腰をかゝえてもらふも有、あるひはちいさき子どもの一つれに、あねはおとゝの手を引、妹は兄におわれてもらふもあり、ねずみならねど糠をくひ、牛馬ならねど麩糟にあかねば、いづれの非人も顏色蒼々として、杖にすがりてよろぼひゆくさま、目もあてられずあわれにて、涙をこぼさぬ人はなし、扨一人前に十二錢づゝの施行はいかにととへば、十二錢にては米一合五勺のあたひあれば、是をば粥にたきて、その日の餓をすくはせむとの心也といふ、かたへの人のいひけるは、尤さもこそ候はんなれども、十二錢にかぎる心は、此毎日の十二錢にていかやうともはからひて、晝夜十二時をおくれとの心かと云、又十二因縁の心といふ人も有、又ある人のいひけるは、此兩年の餓死亡魂の氣、疫癘となり人につき、藥劑も驗なく、病死も餓死におとらねば、諸

人疫癘の祈念ともなる施行なれば、藥師十二神の心なるにや、など丶口々に沙汰しければ、今長明とりあへず、

　ゆるりくわう如來のかげでみそがゆを
　　すくふしやくしの十二錢にて

かく有がたき善根の功力にて、世の中の疫癘も今はしづかになりける也、されば施行場の非人は、悲田院の與次郎が支配なれば、餓死亡魂の疫鬼も、與次郎を見てはおそれをなすといへば、ある眞言の僧のいひけるは、唵悲田院與次郎卒婆訶と、七遍となゆれば疫癘とりつかずといえり、又與次郎宿と門柱に書つくれば、疫癘きたらずともいへり、むかしもさ丶ら三助宿と書しためしもあれば、さも有べしといふ人もあり、扨その日の施行も事おわれば、老和尚慈悲の說法に、聽衆落涙歸服して、檀方その外の有德人、あるひは一萬人分二萬人分、ちからのおよばぬは二千人分三千人分、又は百人五十人乃至五人十人分、皆それぞれのほどにまかせて、金銀を施入あり、あるひは說法聽衆の女ばうだち、小袖をぬぎて施入もあり、あるひは刀脇指をぬぎて施入しかへるもあり、參詣の心ざしあるは、米錢をこのうちになげいる丶ためとて、本堂の前に大なる酒桶をすへたりしに、ある日の事かとよ、誰人の施入にか、此桶の中に金子百兩入てありしとかや、誠に無比の大旦那、前代未聞の善根發揮の老和尚と、ほめざる人はなかりける、

同じ比より、北野七本松泉福寺といふ寺にて、圓空和尙の發起にて、施主をかたらひ、つくね食に錢八文づつの施行をとりむすびたまふに、毎日六七千、のちには一萬人の非人なれば、和尙みづから御弟子をつれ、洛中へ託鉢にいで給ふに、諸人殊勝の心ざしに感じておもひ〳〵に金銀を鉢になげいるれば、正月八日より二月二十二日まで、毎日施行を引給ふ、又同じころより洛陽誓願寺にも、七日があいだ十二錢づ丶の施行ありて、非人まいにち一萬五六千人あつまりけるとかや、この寺には名におふ紅梅ありて、をりふしさかり也、この樹のもとにて施行ありければ、今長明筆をそめて、

　十二錢緡繫二苦貧一　腰間木札當二財珍一
　恠看一樹梅花下　千億化身寺內屯

この外洛中洛外、所々寺々にわづかの施行は數しら

ず、かく人の心もやわらぎ、天運も循環しけるにや、麥田思ひのまゝにはえいで、二月中ごろより、八木の價は日々に安くなり、疫癘しだいにしづまれば、上下萬民うるをい勇て、家を出たる非人はふたゝび住家に立かへり、飢つかれたるはおきあがり、やめるものは癒、すてられたる子はひろいもどされ、親は子にあひ、子は親をはごくみかへし、商賈は市にうたひ、農夫は里に抃てよろこぶさま、まことに涸魚の水にあひ、暗夜に燭を得たるがごとし、これひとへに、御代泰平のときにむまれて、かく有がたき御恵をうくる事よと、諸人萬歳をとなへて、いわひぞめくはかぎりなし、今長明も、かゝるめでたき折からに、ながらへあふもうれしくて、むかしの住家に立かへり、心やすく念佛して、百有餘歳のよわひをたもちぬ、時に天和の二とせ彌生の晦日の比、今長明悲田院の庵にしてこれをしるす、

つき米はあがる相場もつらかりき
　たへぬさがりをみるよしもがな

天和二年壬戌三月吉祥日
八幡町通ふ屋町角
山本七郎兵衛梓行

犬方丈記 終

寛濶平家物語目錄

小氣なる親仁冥途の日歸
㈡客も亭主も離物
付り後家たてし鴛鴦の契
北山は錦を湛ゆる海
㈢貧福さま〴〵の働
付り懷中萬病藥
一角にて蠟燭を掛
㈣微塵繪圖に違ぬ女
付り當流の大和繪師
㈤思ひもよらぬ化物づくし

卷之五

㈠轉變の凉み床
命は水上の泡
身はながれ次第の世
㈡葬這す金の蔓
升ではかりて豆板の俵
見ぬ傾城を居ながら買大盡
㈢世界にかはらぬもの一色
㈣ながれありく笘入の寶
㈤世には化したる生物

賀田の大よせに拾へば錢になる物がたり

卷之六

㈠吉原の寢覺盃
付り三日ふらるゝかさね蒲團
分別かはる金自慢の男
㈡涅槃床入の御影
付り五十二類の色女
好色一切經藏建立
㈢內藏の燈明あきらかなる告

寛濶平家物語卷一

㈠京の助色盛繁昌之事
珍しき生類かはりたる獻立
附り小松野滋左衛門敎訓事

祇園林の鐘の聲、諸各無興のひゞきあり、沙羅双林寺の春の花は、上戸必醉の色をあらはす、踊るもの久しからず、たゞ盃中の夢を見るに同じ、剛き物も終には弱る、ひとへに大木の獨活のごとし、遠くむかしを尋るに、園部の衛門葛の根之助、ちかく中比をかんがふるに、さつまの源五兵衞はりまの淸十郎、これらはただ好色をもつぱらとして、松保の浦に身を焦し、千賀のけぶりにうきなたてる者共にて、奢れる事もたけき心もさだかならざりしに、六角の捨坊主大狂大盡京之助泰羅の我孫色盛と申す人のありさま、つたへ承るこそ心もことばも及れね、その親父を尋れば、丹波の國入佐山の片陰一代男世の介とて、日本國中の色里をたなごゝろのうちにもてあそび、猶ことたらずや思はれけん、地黄丸年文月星逢の日、蘭の楫取て艶書を帆にあげ、女護の島にわたりて今に歸り給はず、是歳雞卯三年の秋の夕、初あらし身にしみわたり、前栽の女郞花糸萩さゞれ荻めはじき小ぐるまのさかりを見せ、白露のこぼれありき、糸瓜唐がらしの所せき、鉈まめに鎌きりのかゝりがましく、鬼とんぼうも秋津虫といへば艶しく、千早振鈴むし、たれ松むし、父戀しと鳴むしに落涙袖にあまり、まことやかの島と申すは、男といふもの昆布ぎれほどもなく、たゞ婚女集りて陽國の風を呑で孕むときく、父隨分の手利なりとも多勢に無勢、今は空穗の矢だねつき果なば、干鮭のやうになつて往生とげ給ふ外は、手だてあるまじと推量するに口をしく、幸けふはなき魂の來る夜なれば、聖靈棚に魂宿草枝さゝげをたてまつり、頓證菩提いまだ此世にましまさば、逆修の善根と鉦鼓うちしほれたる氣色、年ひさしく家につたはる婆婆見とがめていさめけるは、老少不定の世界なれば、無常の嵐は人を撰ばず、されども若き時は血氣いまださだまらず、物にうつりすゝむ事はやく、しりぞく事又すみやかなり、何時にても他力の本願あれば、ほとけにまかせをかれ、みじかきうき世に後生ごゝろ

をとりをゐて、仕たい事してたのしみ給ふべし、そもそも此御家は、三代さき無間の鐘をつかせられ、七代まではたしかにうごかぬ大黒柱、ゑびす三郎殿よりは、毎日鯛鱧(はも)、辨才天女よりはうなぎ鱠の腎食絶ず、布袋の宿直袋、毘沙門の枕鑓、福祿壽命をまもり給へば、家門に禍なく、金銀は泉のごとく、米錢は雨のふるに似たり、これ一分の智恵才覺にあらず、此家にうまれきたる人の宿善によつて、活計の身となり、花咲春のあしたより、雪の夕ぐれいつ寒いやら、あついやら、暮行歲霜つもつて廿五才になれども、父世之助にはうまれおとりて、色里は染物屋の有在所と覺え、治郎は藥師のつかひもの、白人は博奕打の名と合點して、今月今日まで巾女錢婦の閨莚をも踏ず、觀世流の諷を心がけ、楊弓に膝を屈し、堀川流の儒席をうかゞへ共、念佛講をかゝさず、むなしく月日を送る所に、今老婆が異見によつて、たちまちたましゐ入かはり、われ好色の家に生れながら、花すゝき穗に出る業もなく、一生をおくらん事不孝の第一なるべしと、先その名聞ゆる末社といふもの共を呼あつめて、日夜傾國遊里の艶談をぞ始ける、ひだりの座上には分知の女安心きくの四方八、手越の新七水練法師且過坊、右の座がしらには面黑の西雲ねざめ道才、虎若卯右衞門うかぶ瀨小八、天津乙女之丞、羽衣馴彌なんどといふ浪人まじりに伺公申して、素仙法師が我庵と名づけし好色大鑑、西鶴が諸艶大全を評論し、三ヶのつのしやれ物がたり、よし野野風夕ぎり荻野、たか尾かづらきよりはじめて、三五半太夫までが品定め、居ながら傾席を取よせて、耳眼をたのしむに異ならず、されば色道に携る類人、われも〳〵とはせあつまり、口あひ、もんさく、落し咄し、世にはやり出るほどの珍事を囀りならひて、京之助を國の守のごとく、高位にひとしく答拜すれば、虛熱におかされ酒興にうかれ、金藏のふたとつて、瓦石のごとく蒔ちらせば、貪欲無道の輕安、辨口舌劔の佞者ども、あまた出入渇仰の拜み倒し、あら佛と佘色すれば、色盛も今はしれもの共に採立られ、世にありふるゝ事わざ、一向面白からず、たゞかはりたる事をのみ好み出ぬ、夏水仙冬櫻猶めづらしげなし、足の一本ある黑猫、目の四つある鳰、狼の赤子かり首玉を入、あるひは天狗の巢立に錫杖もたせて祭文を敎へ、高野川に住し川太郎をいけど

りにして、袖なし羽をりをきせ、鉢卷させ、鮫鞘の大小さゝせて、嵐三右衞門が六方の振出し、これ賞翫かぎりなく、およそ奇怪の物とさへいへば、生類器物にかぎらず、色盛を目あてに持寄、賣買の利潤を得る沙汰あるによつて、これは大唐よりわたりし仙人の火うち袋、日親上人の鍋のふた、比翼の嘴、連理の梢、辨慶がくはんじん帳、師直が艶書などゝ披露して、金銀に代なしける、あるとき末社中間よりあひ、日比お出入致す恩賞冥加のため、色盛を請代つかまつりたき願ひにまかせ、日限すでにきはまりければ、獻立をしたゝめ、ひそかに色盛が料理人に内見させて、猶御さしづをうかゞひければ、迚の御馳走ならば、汁には龍門ののぼり鯉、鵺の炙物、平皿は頻伽鳥、吸物は孔雀の玉子に朝鮮の初茄子、菓子は天竺の甘蔗、肴は燕の子安貝を砂糖味噌にて和られ、其外玄宗皇帝と同腹中の鹽梅にてよしと、大鷹十八枚に書立たり、末社中間披見して、隨分の目口かはき思案に落ず、唐天竺の飛脚宿を穿鑿する所へ、虎若卯右衞門おくれ馳に來りて、いづれも倒惑の面色さすがの粹人に似合ず、その迦陵頻も孔雀も喰覺たる物、慮外ながら有べからず、爰は一智惠出して、たれも喰しらぬ鳶鳥猫鼬を料理せばやと、笑響になりて罷んでける、

あやしき食類、格外の遊興のみにあらず、屏風の塗緣引はなし、金物なしの木地ぶち、毎日切の灰吹たばこ盆、五日ぎりにあらたにとりかへ、膳折敷木具仕たてるに、疊の錦べり、伽羅骨の障子、衣服あふぎにいたるまで、異體を好ければ、世上に六はらやうとぞ申ける、今は駕籠にも乘物にも乘あきぬとて、たくましき牛に金覆輪の鞍、あつぶさのしりがい、乘馬のかざりして、角をば牡丹花流とて、金銀の箔を濃てぞ乘たりける、日を逐てかやうの花美、こと樣に耽りしかば、家臣小松野滋左衞門教訓せばやと、常々機嫌を見合せ、にがりきつたる髭づらをおし撫て、つゝしんで諫言申けるは、

およそ珍器奇物を賞翫して、人の目おどろかさんとするは、よき人のせざる事也と、左兵衞のすけかねよし入道も書殘し、そのうへもろこしにも、かはりたる草木鳥獸を愛するを妖孽といひ、異なる歌うたふを淫言といひ、異風なる衣裳着するを妖服と申し、かはりたる言辭をいひはやらすを妖言

といひて、人物一旦の變氣ながら、凶事なりとうけ給はる、其上雲のうへ人と申せども、衣冠馬車にいたるまで、美麗を求むべからずと、右大臣師輔公もいましめ給ふ、天子着御の御物さへおろそかなるを用ゆと、禁秘抄にはみへたり、いはんや民間卑俗の身として、分際不相應の美麗を盡す事、驕奢の惡名途に滿、萬口のそしりを招く所なり、巧言辨舌にのせられては自分に威勢ありと、無用の潤色に誇る、其費あげてはかりがたし、無道にして儉約をまもらずば、金銀にかぎりあり、所願にかぎりなし、たとへ黄金を須彌に隣すとも、家人の滅亡ちかきに有べしと、落涙して諫めければ、色盛もつての外氣色を損じ、萬寳はみな我有なり、仕官にあらざれば主人の恐れなく、農民にあらざれば、地頭に遠慮なし、誰にはゞかりて此遊觀をとゞまるべしと、更に承引色なかりければ、滋左衞門脛たかくかいまくつて、たゞ今此等野原と成て、無名の草ふかく、露霜に裳を濕ほすべしと罵て、鶉立にぞたつたりける、

㈢晝の猿市中の活鯨

市中は隣家に病人あれば、亂舞の遠慮あり、偏法華ありてたヽき鉦に使をたて、合壁の唐臼頭痛を踏に同じ、條目の外のこヽろづかひかしがましとて、俄に六波羅に方八町の下屋敷をかまへ、珠玉をちりばめ瓦龍雲に吟じ、金虎風に嘯き、諸人目をおどろかす經營なり、東嶺に大判の日輪輝き、西山に板銀の月を琢き、長生不老の殿閣を表して、春秋の草木亂漫たる萬花絶る事なく、近國遠境の奇樹怪石を求めて、南北につくり山を築く、夢想國師の嵯峨流、長安法印の四條流、瀧の漲り遠く、泉水數百間に滿へて、蛟龍を住しめ異鱗をあそばしむ、伊勢熊野の漁夫におほせて、鯢鯨をはなち、鰐鱶ををよがせける、築山には猪猿のはなし飼、狐鹿野にはしり、猿猴梢に飛、此峙をこゆれば、茅がや麥わらぶきの丸屋の里つゞき、江戸道中の風景を爰にうつして、五十三次の驛路の鈴音して渡し舟もあり、そも〳〵雲のあはたつ蹴あげより、御廟野やつこ茶屋、大津粟津の並木松、草津の姥が餅まいれと、赤まへだれの女出て袖を引、居ながらの旅ごヽろ、いかになり行とよめる、鈴鹿峠のおふりがふり袖、四十年このかたかはらぬ細眉姿、今おのぼりで御

ざんすかと、出ばなの煎じ茶をさしつける、坂の下のおたけ闇の小まん、泊りではないか、居風呂もあんすと、壱疋なけば蝉のつれ聲もいきのうつしなり、四日市を過て桑名蛤茶屋のおしゆん、道中第一の美形、こゝで一獻みな〳〵腰かけられ候へ、手をたゝけば辨當持参申す、晝逗留も一興なり、熱田なるみの景氣も目のまへに、岡崎女郎衆はよい女郎衆、いつもの比丘尼もうたひつれ、御油赤坂に笠をぬぐ、白菅の一夜妻、熱い所を賞翫の新坂の蕨もちは、本阿彌の陌より取よせ、うつの谷十團子、阿部川の黄粉餅は三條通の龜屋へ申つけ、府中の色町、品川の君達には、白人茶汲女數百人買きりて、役々をさだめ、芝肴の肉堤、稲寺の酒池、林間に羹鍋を釣てあたゝかなる遊樂、東叡山の一重櫻まで、爰にうつして歡活の別庄と名付たり、たとへばこれは費長房が地をしゞむる術に同じ、維摩居士の方丈に、東方數萬の佛土あらはす神通にひとしき珍事なりと、諸人不思儀をなさずといふ事なかりけり、

かゝりける所に、小松野滋左衛門先日の異見に無興ありしにも懲ず、無理非道の君にも強て諫めざるは、臣下の忠儀を失ふなりとおもひ定め、又這出て申けるは、およそ家居は其身分際相應あり、もろこしの聖代には茅茨不レ剪采椽不レ刮と尚書に見へ、我朝の神社に加棟木を置事、上古茅茨宵の餘風なりと、神社啓蒙に見えたり、公羊傳註には、天子の居城といへども方百雉とあり、雉はこれ三丈四方なり、この故に左傳に都城百雉に過れば國の害なりといふ、果して漢書に楚は章花の臺を起て黎民散じ、秦は阿房の殿を立て、天下みだると見へたり、しかれば公卿士大夫も天子の百雉に准へて分に隨ひ、工商の者の住宅差別あるべき所に、今これ無位無官の民俗として、莫大の居宅をかまへて耳目をおどろかさるゝ事、おそらくみづからをかへり見ざる、思慮なきいたりにあらずや、しかのみならず、作り山の結構泉水の遊鱗、むかし融公六條河原院に千賀の鹽竈を摸し、池放ニ鯢鯨ー山住ニ虎狼ーと本朝文粋に見へたれども、是は詩文の詞花言葉のみにて、いかなれば虎を放さんや、されば融公は嵯峨天皇第十二の源氏にて、母は大原の全子にてましませば、實にさありとても同日の雜談に並べ

奉るもおそれすくなからず、すべて民間の卑俗衣食住に乏しからぬ國恩をわすれずば、過奢格外をつゝしむべき所に、衣類には天服を好、食類には珍膳をもふけて、萬人儉約のたゞ中に獨步して、十目をさまさせ十手に指ざゝるゝ事、遠きおもんぱかりなき放逸の致す所ならずやと、詞もいまだおはらざるに、色盛輿をさまし、青天に雷轟くと、座を蹴立てぞ入にける、

亂舞洛外の屋敷にとぢこもり、世間の付屆け、町義の寄合にも名代申つけ、扨は虛病をかまへ、たま〳〵たづぬる賓客にも對面を止、玄關に禁制の條目を書て張らせける、

一童戲文作の外、何事によらず異見がましき儀申者、これより奥へ入べからざる事

二好色艷談の外、世上の五常儒佛の取沙汰、かたく停止の事、

三酒宴無禮の外、律義なる禮行義たゞしき振舞仕間敷事、

妙藥口にあまへ、金銀耳珠次第なれば、我身の榮花を極るのみならず、出入の遊民僧俗六十餘人、其外緣を求め傳をたづねて、輕薄僞禮をつくす事、吹風の草木をなびかすが如く、俄雨の國土をうるほすと同じ、六波羅風の男ぶりといへば、手代も草履取も誰肩をならべ、面をむかふ者なし、末社筆頭の白亂坊雛面をつくつて、當世色もり殿の門內へ出入せざるものは、人非人たるべしと申ければ、いかなる腹腫もお取なしをもつて、伺公申たしとぞ望みける、さればあたまつきより羽をりの仕たてやう、脇ざし扇の取まはしまで、六波羅やうといへば、浮氣酒熱の京中の町人、みなこれをまなんで見ぐるしきありさまとはなりにけり、むかしより目に見へぬ鬼神、雲の中の鳴神の事をも、さま〴〵に評判申せども、此大盡の世ざかりのほどは、いさゝか沙汰する者なし、そのゆへはおかしげなる坊主七八人、晝夜市中を往來して、いさゝか物申すものあれば、そのまゝ色盛の耳に口をよせて、毎日內外のある事ない事をさゝやきければ、いかなる謀計にあふべきと、心にそしり眼にさへぎれ共、詞にあらはして申す者なかりける、これによりて六波羅の坊主とさへいへば、往還の駄賃馬鳥羽の牛車まで、みなよきてぞ通しける、

㈢祇王は小蘭佛は小梅の色競

その比洛中に聞へたる舞子に、小蘭小れんとて兄弟あり、鉦と云肝煎婆々が娘なり、姉の小らんを色盛寵愛あさからず、母の鉦には三間半に裏行十五間の家を買てとらせ、毎月白米拾石耳白三十貫づゝ送られたりければ、家内榮花のさかりなる、妹の小れんも、世の人もてなす事なのめならず、そも〳〵我朝に舞子のはじまりけるは、鳥羽院の御時島のおせん、わかのまへ、おかめ、おきく、大磯のおとら、しづか、山吹、むかしは白無垢にしごき帶にて舞ければ、白拍子とは名付たり、去程に京中の舞子共、小らんが仕合をつたへ聞、うらやむ事かぎりなく、今は田舎大名の望みをやめて、色もり殿におもはれんとて、清水參り北野まふでして祈りける、いかさま小の字を名につゐて見ばやとて、小りん、小かん、小げん、小いち、小はつなんどつくものもあり、又猜むものははてわけもない、名にも文字にもよるべきか、仕合は前世の約束にて、鼻そげも靨にみゆるが果報のつき時と、おしなぐる者もおほかりけり、かくて半年あまり過ぎて、また奇妙なる舞子一人出來たる、難波よりのぼりて、名をば小梅と申しける、京中の上下これを見て、むかしよりおほくの舞子は見しかども、かゝる三味線小歌のしやれものはなしと、けふは東山あすは嵯峨、晩は土手町にて世の人のもてなすに隙なかりければ、小梅自慢心になりて、我このやうにはやれども、今の世にかくれなき京の介泰羅の色もりどのへ、めされぬ事こそほゐなけれ、遊びものゝならひ何かはくるしかるべき、推參して見ばやと、ある時六波羅へまいりければ、折ふし心きゝの四方介取次して、今の代のまれもの小梅が參りてさふらふと申ければ、色もり大きにいかつて、小梅はいふに及ばず、たとへ豊後梅にてもあれ、おしかけて參る事あまり仕こなしたる出しうなり、小蘭があらんかぎりは、小梅にうつるこゝろでなしといふ聲、次の間に聞へければ、小梅むつとして立歸らんとせし所に、小蘭色もりに申けるは、遊びものゝ推參は、つねのならひにてこそさふらへ、我身とてもたてし身なれば、人の身のうへとも覺えず、ちよつと盃ばかりして歸し給へと、氣を通しければ、色もりしからばともかくもと、居間に呼いれて酒事はじまり、例の西雲道才虎若小八まかり出、飛鳥川しづ山

なゞ申す座頭の坊まじりに、調子を合せて小梅に今やうを望しかば、舞扇とり直し、町は碁盤の形よや見よや、鑓梅たてよこ十文字、ずんとのばしやる、ずんずとのばせばいかのぼり、鮹の入道酢蛤、鰾さかゆる鯰しけると、おしかへし〳〵三返うたひすましければ、一座の末社耳目をおどろかし、色盛興に入て、まことに髮かたち世にすぐれ、聲よくふしも上手なれば、小梅に心をうつされ、涎は瀧の水、日はてるとも、地謡おさまり、しばしは鳴もしづまらず、まづまづ引出物とらせよと、香包によき木に黄なる物百きれ、墨繪もやうの縮緬五卷、臺につみて出され、小梅を膝ちかく引よせ、汝は壽命の毒魚なり、こよひはこゝろみの料理いたすべしと、たはぶれければ、小梅ひんとして、これはまあやくたいもない、わたくしは推參したる曲事とて、すでに追出されさふらふを、小らんどのゝ情にてこそめしかへられさふらふなり、はや御いとま給はるべしと立出ければ、色もり大きに機嫌そこね、さては小蘭が手前をはゞかるとおぼえたり、此うへは小らんを追出せと、惡八方の土鐵坊に急度いひつけたぞ、畏て小蘭を引ずり出しければ、

一樹のかげのやどりさへ、ましてーとせばかり住なれし、名殘もあだに立出る、涙を硯にうけて、押入のふすまに一首の歌をぞ殘しける、「咲出る小梅も蘭も一さかり、いづれか秋にあはではつべき、」辻駕籠にかきのせられ、宿に歸り屛風の內にたをれふし、泣より外の事ぞなき、母の鉦、妹の小れん肝をつぶし、どうしたわけぞと申せども、とかうの諸（いらへ）に及ばねば、めしつれたる小女郞に尋ねければ、色もりさまあつい茶一ぷくのまぬうちに、小梅どのに心がはりして、つい追出さんしたと、かたるにつけて淺はなだなる男めやと、酢でさいて飮やうに、修羅をもやしけるが、每月の白米烏目の沙汰なければ、小梅がゆかりのものはこれよりはじめてさかへける、去程に洛中の上下此よしを傳へ聞て、小蘭が六波羅よりいとま出たり、いざや見參してあそばんと、肝煎にあたまからうれしがる物を、はづみてたのみけれ共、今さら翫び物となりて、うきしづみある飛鳥風、たのみなき世にながらへ、きほひをくれを母にも見せて何かはせむ、たゞ身をなげんとおもふといへば、妹の小れんももろ共と云を、母やう〳〵にとゞめ、此世はかりのやどり、家

を持ても、町儀破損の世話もくるしければ、ながき世の住居こそ心うけれと、小蘭は十九小れんは十七母は四十三才、三人一所に尼になりて、岡崎といふ所に柴のいほりを引むすび、念佛してぞ居たりける、かくて夏過秋たけて、つゆ置あまる庭のけしきにも、消やすき身を觀じ、窓のあらしに熊笹のそよぐにも、燈の闇路をおもひ、山のはの月かすかに、心ぼそき夜半の比、竹のあみ戸をほと〳〵とおとづるゝ物あり、母ふしぎにおもひ、女ばかり居る所なれば、おしこみか化物かと、目まぜしてだまりければ、妹の小れんこざかしげに、盜人ならばわづかの竹垣ふみやぶつてもはいるべし、下戸と化物とは今の世にはなし、さだめて小きちが婆々、揚豆腐持て見まひに參りたるべしと、ひそかにあみ戸をあけたれば、思ひの外の小梅どの、これはまあお久しや、此體を見てくださんせと、さきだつ物は涙なり、小梅も顏をおしぬぐひ、唉そむる小梅もとよみ給ひしにちがはず、秋風はやくたち、此比は竹屋町の天狗婆々が、小傳と申す舞子をつれて來り、天にあらばひよ子を產せ、地にあらばれん木を握るともかはらじと、つゐにわらはも追出されしにつけて、蘭さまの御心底おしはかり、せめて今一度めぐりあひて、むねのほむらをかたりなぐさみ申べしと、あなたこなた尋ねしに、かゝる御ありさまと傳へ聞て、さいはゐわが身も此心ざし見給へと、被衣をとれば、まんまる坊主のうつくしさ、できたての地藏菩薩のごとくなり、三人これはとおどろき、わづか十八にこそなりし人の、それ程までの思ひ入、いざもろともにねがはんとて、四人一所にこもり居て、念佛おこたらず、みな往生の素懷をとげにけりと、大佛建立の奉加帳にも、小らん小れん鉦小梅とぞしるされける、

寛濶平家物語卷一　終

寛濶平家物語巻二

㊀吸物に褒美女

召て御座りませい、根本一家相傳の甘蘇丸、此東山八坂の外に、ふたつとは類の御座らぬ奇妙成名方、さて能毒にはむししやく、こわり腹、目まひ立ぐらみ、小兒かんかたるい、產前產後、うち疵切疵には嚙でつける、其外痰性のお衆には、あつゆにて即効を得ますると、むかしよりかはらず賣藥の名物にのせられたり、別して毎月十七八日、清水參詣のもろ袖、見せに群集して錢の山、音羽の峯につゞきぬ、爰に蟹のつくり物を土計(とけい)からくりにして、此藥買人の前にあゆませ、價を甲にのせて又跡へ歸り、さながら生てはたらく樣に、見なれたる都人も一興あり、田舍のぼりの順禮は、竹田がからくり芝居とは爰の事だんべいと不思儀がる世や、此蟹のおもひつきは、むかし島原の吉野といふ名君、長崎の大盞から送りし蟹盃、さゝんとおもふ方へあゆみ行しを聞つたへ、思案よき細工人たくみ出せしを、此甘蘇丸屋に傳えて、藥を賣媒とはなれり、かの吉野は灰屋三益といふ法師、銀とつりかへにして請出しける、吉野中肉にして姿たをやかに、杜秤(ちぎ)にかけてみれば拾貳貫七百九拾目あり、金子につもれば貳百拾參兩の相場の時分、古今無類、銀とつりかへの御太夫なりと世のとり沙汰かくれなし、當世身請高直なるにかけくらべては、さりとは安き世もありしむかしなり、其後の野風は大坂川關屋宗圓うけ出しけるが、野風肥肉にして拾五貫三百目、これもつりかへの太夫の名高し、そのゝち芝居のおどり歌に、吾妻うけ出す山崎與次兵衞よいこれ〳〵、三百兩杜秤にふるに及ばず銀拾八貫、これをこそ神代はじまりて、稀なる事にいひふらせし世もあるに、ちかき比はかりそめの身請沙汰なしこ七八百兩、細膩かくればうつくしう、千兩の外へ毛がはゆれども、小歌にもならず狂言にもめづらしげなき世の、いたり詮議となりぬ、色もりも今は揚屋遊びに夜があけて、日の暮て限りの門の鎰觸もせわしないとて、花垣、むらさき、しのゝめなど申す傾色を、千餘兩づゝにて根から引ぬき、上中下の屋數の外、景ある座敷見たてゝかりの住居、晝夜懈怠なくまはり喰、鐵でつくりたる身で

もたまらぬ筈の不審たがはず、三月下旬より所勞もつてのほかにて、一家鳴をしづめて、しんかん腎のつかれともいふ、卦體絕體羅睺星にあたりて、未申の方より女のみ入、臺所の逆柱まつりかゆるに壹貫貳百目、衣類を給はらば形代の祓をすべし、百味の飮食御造酒代鳥目拾二貫文、これでさらりと厄拂ひにはらひきよめ、神たゝきにたゝきたて奉らんといふに、いかほどかぢやりされけれども、さらに驗氣なく、ひたよはりによはりて、譫言申されける時分、每夜牛の刻ばかりに、たつみの方の湯殿のうへより、あやしき物のみゆると申す、小松野滋左衞門ふしぎに思ひ、祇園にて折ふし住りたる蘇枋打の楊弓に、熊野烏の羽にて剝たる矢二筋とりすへ、たんばの國園部より、今年這出たる久三郞めじぐし、三人前の吸筒夜食の燒食を負せ、味噌部屋の小陰に伺公して、時のいたるを待かけしに、六角の鐘につゞき、建仁寺のだらりも鳴おさまり、日比人の申すにたがはず、色もりおびゑあがりて熱氣そゞろ言の刻限におよんで、湯殿のうへに黑雲一むら立きたつて、化したる物のすがたあり、射そんずる程ならば、楊弓きり折て腹きらんとおもひさだめ、矢とつてつがひ、南無八まん大菩薩と心中に祈念して、よつぴきひやうとはなつ矢、手ごたへしてはたとあたる、久三郞つゝとより、落るところをとつてへしつけ、めつたやたらに突こくりける、その時てん手に紙燭してこれをみるに、かしらには踊の坊主面かけたるを引ちぎつて見れば、顏は竹風呂の小吟にいきうつしにて、胴は緋の布子、帶はくちなし染の河内羽二重、手あしは胼皹きれて、鳴聲喜悅するに似たり、おかしきとも中々いふばかりなし、その中に目ばやき男あつて、まさしくこれは御內の食たき栢にてこそあれ、まつすぐに白狀せよと申せば、料理人の喜助どのへ夜ごとにかよひし、あらはれ時と譫言申けるが、沙汰なしにてはおかれまじと、ひそかに色盛へうかゞひければ、一昨日の珍客に吸物を出かしたる褒美として、栢を汝が妻につかまつれと、包丁一振そへて喜助にこそは給はりけれ、

㊂世はつかみ取面白いか

時ならぬ煤拂、疊のおもてがへ百八拾疊、大半切に水をたゝへて、格子柱琢(みが)ぎたて、軒下たゝき土に晝夜かけて、俄に內普請、家內うへを下へとかへす、これ

はまづ何事ぞと不審すれば、かたじけなくも大狂大畫色盛、明後日御出のこしらへなり、此祇園町に軒をならべて旅籠屋數あれども、見事なる儀のあるは此方かと存ずる、先呼子共衆男女五十三人、魚類はあちから堺の地引をすぐづけにして五十荷、鱠は勢多の釣喰ひ千本、活鯉淀から今朝二百枚、酒は富田から拾五樽、ゆふべはや付臺にして、亭主へ銀貳拾枚、花奢の方へ拾五枚、娘に沙綾ちりめん三十卷、下男女子共中間へ壹歩百切れ、これはとんとの遺物にして、一日一夜の算用は何千兩でも現銀ばらひのさだめ、兎角かやうの客は門柱でしてとる、あやかり給へと血氣つよく咄すを聞て、同商賣の隣家うらやましがるはことはりぞかし、かくてその日になりしかば、あるじ正月以來の肩衣とつてうちかけ、大橋まで御むかひにかしこまる、おいでの道筋へ段々人をつけ置、たゞいまは堀川中立賣まで御越、たゞいまは一條柳の馬場まで例の牛にのりてと、櫛の齒を引て花奢も髮をけづり、娘も一丁臘をともしたて丶、くらがりから紅粉翠黛をよそほふ、表にもり砂五十間の間に並べたるは、町內よりとがめて內庭へ引て置、色盛上下九人太鼓二拾八人さゞめきわたつて入來る、その體たらくさながら國の守を請待するに異ならず、妻子目見相濟、三階藏より國土の菓子を持參、料理もお心よくめしあげられ、大悅のあまりに秘藏の娘お酌にたつて、亂舞はじまりければ、かねて手組やしたりけん、四芝居の立役子共みな一樣に裝束して、勝手口よりくり出し、大踊をぞ催しける、音頭は蔦山四郎兵衞、よしかわ多門、山田甚八、坂田兵七、三味線は大木扇徳次郎三郎、椽側に立並び、小野川宇源次、松本しげ卷、津川半太夫、山本かもんもとめ、龜之丞、難波小才三、玉柏長太夫、尾上を始として澤村長十郎、中村四郎五郎、甚左衞門、幸十郎たちまじはり、手拍子こそはそろふたり、蔦山扇をかざし、千代の始の一おどり、小松つる〲坂こへてさ、そも〲踊といふ事は、もろこしよりもはじまらず、我朝よりもはじまらず、とつと天竺摩羯陀國釋迦牟尼如來の御時、秋のゆふべのつれ〲に、靈鷲山のひろ庭に、金銀るりの床を出し、音頭は迦陵頻迦鳥、口說は富婁那の口拍子、文珠は三味を引給ふ、提婆は六方おどりなり、中にも觀世音菩薩三十三に身を變じ、一まはりは天人おどり、

二番に龍王夜叉踊り、三番にけんたつば、あしゆら、かるら、きんなら、まごらがおどりなり、さてこそは歡喜踊躍と說れたり、或は西方しまばらの、松梅鹿に身を現じ、花と櫻の入みだれ、段々めでたい鑓おどり、やりの權三もだて助も、きてみよかしの棒おどり、うつりにけりな花の色、小町おどりも一さかり、春は御ざれのいせおどり、坂はてる〳〵すゞか山、かがら踊が所望なり、居合おどりは合點か、そこらでしめろ、まかせてをけろのぬけびやうし、はねぞおどりははねちらす、題目おどりかけおどり、彥三おどりも大和屋の、甚兵衞が花の大芝居、おかしかろ又木ね藏に、臼をならべて島ざらし、晒おどりにたちそろふ、あのふり袖の君だちと、ねもせでまよふたゑ、おもひおもひの出たち、ありふれし座頭、虛無僧、比丘尼、禰宜、山伏、浮藏主、老女、幽靈たちならび、五百目がけの桶蠟燭、萬燈のごとくかゞやきわたり、男女兩色入みだれ、よしのたつ田の花もみぢ、勝手震動して酒宴活計の席には、祇園の末社連もお間に出給ふべし、東はじまりてかゝる大よせつたへきかずと、百三つになる豆腐屋の婆々も、手をうつて飲あかし、ねがはくは夜のあけぬ國あらばと、上下さゞめけば、庭鳥も遠慮して鳴ず、近所のかねも內證有て撞ず、樂變自在天のたのしみいまだなかばならざるに、須彌のからくりしそこなうて、あけわたる空の殘念千萬ながら、上下しどろに成てかへりけり、金銀もおもふ程にはつかはれず、宿屋の雜用疊のおもてがへ、茶碗わりたる失墜までかけて、一日一夜の高しめて、わづか三百八十九兩三歩二朱壹匁四分五りん、

㊂あふひの花駕籠は諍の種

三十三年に一たび御開帳ありがたき時に、あふ坂こへて石山寺まゐるより、おもき罪科も湖の泡と消ぬべく、みやこのうちはいふに及ず、遠境近在群集の參詣、夏引の布たへまなく、廣大無變の慈悲のひかり、やはらぐ空しづかなる日よりを見合せ、京の介色盛も戀慕の闇のくらがりより、例の牛にくれなゐの手綱をかけ、ゆらり〳〵とあゆませて、下向にかゝる長橋に、しばし休らひ見わたせば、かすかに島のよこたはるこそ、竹生島にてさふらふと申す、よきつゐでなれば、一見せばやとおもふはいかにとあれば、道才西雲乙女之丞卯右衞門笑悅小八馴彌、これ一興とかし

こまり、源五郎似鯉、大津諸白用意してお舟につませ、竹生島へぞまいられける、ころは卯月の十八日、みどりにみゆる梢には、春のなさけや殘るらん、むかし長等の谷の戸に、老のうぐひす聲かれて、初音ゆかしき郭公、折しりがほにつげわたる、松に藤なみ咲かかるは、蛸木にのぼる風情あり、月海上に浮んでは、盃はしる心地なり、金輪際より夜のうちに出現したると、土佐ぶしもつて參りたるけしき、されば妙音辨才天は、本地一體にして衆生濟度の福の神、只今急に千両ばかりならぬ事かと禮拜す、水にうつれる桂のひかり、いと面白く愛られしかば、住持三味線持參して、すゝめ申せば色もり取あげて、らん小屋、鬪ふね、淺黄、月見と申す秘曲をしらべ、一座すみわたり景氣かはりて、又のめるはと上下おもしろう醉ける所に、色もりの袖口へうつくしき口縄十五六足はゐると見えしが、あたまへのぼり肩にとまり、喰あひ卷あひかたまりて、膝のうへにぞ落たりける、むかし平のつねまさ、此社に參詣ありしに、白龍袖のうへに現じ給ふとかや、それは明神感應のしるし、これはあまたの妾ども、行さき／＼につきそひたがひに嫉妬の仇ごゝろ、一念化生の形をあらはせるかと、さゝやくものぞおほかりける、

これも石山まうでとみへて、女乘物金銀の鋲（べう）あきまなく、金糸眞紅の房つき窓、道中三里がうち百双倍を燒つゞけ、供女共五人、ひとつ模樣のうす紫繻、たつ田屋が御所すげ笠、六尺八人、さねもり二人、若男六人、供駕籠二丁、老女飼添、蒔繪の小長刀、茶風爐辨當持、縄を引てそろひおとこ、上下八拾餘人行列しづかにねり出たるさま、勿躰なくも神輿祭禮の儀式のごとし、參り下向の僧俗目を驚して見物す、木曾縄手を過る時、先月の大雨に岩間寺の瀧のながれ、湖に落込にはかに細川出來て、爰に幅七尺の板橋をかけ置たるに、これは下向の女乘物、供四五人めしつれたるが、此せばきかり橋に、両方よりわたりかゝり、その乘物あとへ返せ、其方のをもどされよと、棒のさきをつき合て、たがひに一寸もにじらず、參詣往來の道ふさげ、料簡あつて通されよと、大勢東西にたちやすらひてひかへたり、時に下向乘物の家來檜見七助すゝみ出、何人なればいかめしく往還のさまたげなり、こなたはしのびまうでの事なるゆへ、人數すくなきゆ

へかろ〳〵しく思はれけん、今の世にかくれなき京之介色もりどののおもひ人、戸灘瀬と申す御かたなり、いそゐで其乘物をもどされよと、切刄まはしてりきみければ、金鋲の乘物戸をさつとおしあけ、かゞやきわたる美面をさし出し、せきにせいたる氣色にて、何色もりどのゝ手かけもの戸灘瀬とや、われを誰とおもふらん、その京之介どのゝ御本妻、むかしは色里におゐて花垣といふ御太夫、その方は天神にて、緣日にもさびしげに茶を引てゐる不便さに、色にはあらで慈悲心より、苦患をすくひ給はりしを、ありがたいとは思はずして、そのおくさまにむかひてかゝる推參慮外のはたらき、身のほどしらぬ車あらそひなるべしと、顏くれなゐにほむらもえてぞのゝじりける、樽見七助肝をつぶし、南無三寶とばかりにて乘物を人たまへに引かへし、足よはぐるまのちからなくてぞ通しける、戸灘瀬なみだをはら〳〵と流し、あら口をしや腹立や、そらにたつ名のみ殘りてうき雲の、あとなき物は契なりけり、昨日まで我ならで下紐とくな朝がほの、今さく花にうつり氣の、ふるされし身の淺ましく、あまつさへけふの耻辱は何事ぞ、よし〳〵此うへは、鐵輪にともすむねの火を、宇治川に身をひたし、橋姫のためしとなり、一念の毒蛇に變じ、つもるうらみをしらすべしと、身もだへせしをやう〳〵に、いさめて都へ、

㊃目をさませし作藏

賀茂川の水、双六の簺、山法師、これぞ御心にかなはずと、白川の院も宣ひしとかや、民間有德の者も、金銀にてならぬ事天下に三つありと、近き世の理窟坊も申し殘せしなり、色盛今は浮世の遊興におゐて、心にまかせぬ事なく、晝夜美色好味にふけりけるが、榮耀にはいたゞきなく、八百兩にてうけ出せし高間も秋はやくたち、千二百兩の花垣も春より後の雨にうつろひ、今といふ今うつくしきものに退窟して、半季ゐのこしもとにはらませて、裏店をからせ、大名もどり月切かよひ、白人舞子もむねにつかへ、瞽女の手引をうすふして一きれ、物ぬひが裳に針をつけて小宿をしたはせ、若後家の寺をたづねて比丘尼に肝をいらせ、茶屋の娘を自由にし、花奢に腰をひねらせ、惣じて傾城白屋の外に手をふれし女拾三ヶ所、壹ヶ所にめしつかひ者男女六七人づゝあてがひ、人目を

しのぶ行かへりにも、相伴人太鼓十五六人ともなひ、只今信濃へ飛脚をたてゝ引ぬきをうたせ、半時のうちに堺へ早使をたてゝ、俎箸に喰つゝ、鱧鱸をとりよせ、嗅からぬ生臘を雪隱湯殿まで立ならべ、年中油火を見ず、よろづのいたりみな形のごとく、金銀は泡雪と消果て、末であふやらあはぬやら、世話にしていらぬもの也、これらは皆傾國のあそびにくらべてはしほからく、子を産だらば奥さまの望み、いやなる下心ことばのほかにあらはれ、兎角わすれがたきは、朱雀のあけぼのなつかしく、女熱といふ案内者をひそかにまねき、今の世の美形見たてまいるべしとの儀、畏り卯月の末つかた、西島に入てあまねく見聞にふる所、たれが眼もたがはず玉島と申すこそ、八千代陸奥をひとつにつぐねて、夕ぎりもろこしが再來と申せば、色もり心うきたつて、さいわゐ花垣が禿のきせ川こそ、當廿五日水あげと聞、これにことよせて、先花垣かたよりと披露して、きせ川に祝儀をつかはして氣をとつて出かけむと、その送り物には、一番に九尺四方の島臺、祇園の髭九郎八に手を盡せと申つけ、播州高砂はふるし、曾根の松に生うつしなる活木、大和國中を穿鑿して切出させ、いわ組面白う立させ、金子南鐐にて十六萬八千由旬の須彌山を内庭にとつて、山水洲崎の眞砂には罌粟銀三斗五升蒔ちらし、立石居石に丁銀を敷並たり、

二番には、青竹の衣桁に金銀のかなもの、たがやさんの繰足、越後小倉縮の浴衣をの〳〵五十かけわたし、淺黄ちりめんのひつしごき帶、さらし手ぬぐひ、男女の下帶をの〳〵百筋、

三番には、壹間半の木具臺に、洛中古今の仕出し宮菓子三百貳十七種、金銀の鉑(はく)をひらめかし、御所水引轆轤細のごとくなるをむすびあげ、熨斗百把五色の蝶の折居、

四番に、潮を湛たる大鱬に、活て働く丹後鰤、能登鯖、奥州鮭、明石鮹、鳴戸鯛、長島の鰹、小豆島の生海鼠、備前海月、下の關の烏賊、料理人八人打圍みて三十人に舁せたり、

五番に、長瓢を黑ぬりにして作藏と書付、金の立烏帽子を着せ、首玉いれて眞中にたてをき、延紙九百八十束ばつと取らして、雪なだれの山を動し、壹間五尺の臺に荷はせ、宰領には分知の女熱、芭蕉布の十德を

黐がへし、西雲は鼻自慢の獅子頭をかつぎ、寢覺道才德若伴助手越虎若も上下を着し、揃ひ六尺の行列警固して、三條大宮をねつて通りければ、諸人耳目をおどろかし、隨分目ひろき京中の有德人肝を冷して見物す、錢かねは升ではかつて此たびの入用次第にとて、俵にして馬でつけ込娑婆世界、開闢水上はじまりてよりこのかた、かゝるためしを聞ずと、さきだちし願西、指のまたから血の出るほどひろげて、冥途よりくれ〴〵の言傳、

寛濶平家物語卷二終

寛濶平家物語卷三

㈠庚申の樂遊

大狂大盞色盛の御前には、面白の子孫與三郎が跡目、ぬつたりの鉑庵、はげたりの輕安を始め、拜例佞舌の宮雀田舍六齋八十末社、膝頭を並べ社壇ゆたかにひかえたり、今夜は青面金剛を待夜とて、淨るりは和太夫理中清太夫、すゝすつきり助六、碁盤人形左近右衞門が三味線、五丁がけの大蠟燭たゞ萬燈會のごとくなり、松川木村といふ座頭、寛濶一休鑓おどり小野川流に彈たて、こちらには影人形うつるは船頭かみゆひ、住よしの茶釜、北の間をのぞけば獨相撲はだか舞、南の方には傳三郎が一節切にて祭文、林雪が剃刀撥、東の間には淸水の砂礬吹、眞草行の笑ひ、狸舞山崎がよひしのびの段、見物の腰もと中居物ぬひ食燒、下人六尺入みだれ、闇がりまぎれに何をするやらしれず、寢覺道才編笠提て一錢づゝ抛たり〳〵と童戯る、女熱入道は床几腰かけを並べて、水茶屋を仕かける、神樂兵左衞門どこから出たやら、坊主あたまを撫ま

はし長生すれば相もかはらぬ鳥さしをみさいな、二日の日は又ふかいおとこにあふ坂こえて、三日水海しがの櫻も心のよしの、五機嫌さまで、六つむこどの鈴口いはふた、七つないたり笑たかしれず、八つやかたの御首尾もようて、九つこゝろのそこゐはどうぞ、問に及ばぬいきぢのまくら、はづるゝ所をちよくとさいたを見さいな〳〵、いつ雞が鳴て夜があけて日の出るをもしらず、鯛鰻𩸽永觀堂所化鉢、

㈡難波海道くだり

生鯛が痞て、宇和相馬を好み、美妻鼻につきて磯せゝりの鰒の横飛を賞味申さるゝ世の人ごゝろ、たゞ意地わるきならはし也、色盛京の眞中にあそび、浮雲の榮耀にほこり、世上を直下に瞬り、傾席白蓮も秋たつ扇、舊冬の暦と見捨、今は廣いみやこに心にうつる艶景も盡果、さらば去來、難波の大湊にさそふ水、伊奈川與右といふ浮藏主にすゝめられ、雞卯七年さみだれ月の十一日首途す、ことしは乾入梅にて天氣はれつゞき、淀の與惣右が前濱より大艜五艘ならべて、一面に搦め敷板鎹(かすがひ)づけにして舞臺のごとく欄干をつけ、猩々皮の拾間續き、純子の日覆ひ、坊主兒小姓花をかざり、能役者手組して數十人、座頭河原役者野郎白人佐田の天神まで舟逕りす、酒菓の捧げ物山うごきて進上舟につませ、供舟二艘の外は淀鯉勢多鱣桂鮎生簀舟に濯々とおどれり、京の水百樽、早松茸花柚舟まで艤ひす、本舟に御用次第といふ幟吹貫を靡かし、楫とりには祇園の歌人、艪床には黑谷の老女、和田の原八十島かけて漕出よと舟歌をよませ、水子三百人五色のだんだら筋、廣袖一樣にきつね川、後は尾の出るも夢の勘介增補伴介、新七卯右衞門合點か、女熱道才あるかいやゐ、これにひかえさふらふなり、愛淀のわたりと申せ、ほとゝぎす美豆野御牧のまだ夜ふかきに、淺澤のよしはら、夏至々々と告る翅せはしく、笠あたらしき早乙女の、よごれぬ物は歌ばかり、都の腹はれ祝へとて、用捨なく艫舳に苗を抛かけ、一丁蟠を弓矢八幡、岩淸水横におがみ捨、山崎寶寺後世はしれぬ水のながれ、魚喰口に木食とは無分別坊主と誹る、舟につく犬も世のかせぎ、渡りにくき橋本の出女もそれ〳〵の泊り客、枚方の奈良茶も晝はをとづれず、世の中は喰て寝て起て、箱から何なり共自由のなる物をつかみ出し、扨その後は、つかひ捨てあそ

ぶより外に何かたのしみ有べき、命は露身は煙、つながざる舟の江口も名ばかり、神崎三島え今はさゝげ茄子ならでは、なるとならぬ目もとの鹽うる翁、馬沓草鞋を窓より抛出し、枕かはせし紅閨はうづらの床入、三味線といふ木綿綛、色も姿もむかしにあらぬ里娘、これにも子を產す男はあるぞかし、かの心中のさらし堤をおもひ出て、節つけてかたれ、畏て又酒になる、河舟にさへ醉奴ありてむさい事するは、さながら八百屋見世同前なり、前後友舟十餘艘、太皷つゞみもんさく謠、天滿橋を鳴わたれば、往來の者たちとまり、壹月待ば夏神樂に、世には氣のみじかい性よし共を見よと可笑がる、難波橋の方より八人水子の屋かた船、色里よりのさかむかひ、いばら木屋外天すみよしや榮心よし田井筒おまん淨清九間殘らず、色盛くだり給ふとの聞えはあまねく、京の方より舟だにみゆれば、すはやそれと口あひに、虎若寢覺揃て手を打て、無尻町にて約束のごとく、外天方に落つき、猿門堂でよい夢、見事に取持顏、のみこんだる蛇之介、さいた蜂兵衛、おさへた蟹右衛門、これはどふるい、新兵衛まかり出て御祝儀を申す、しのべ竹に折居の蜻蛉をつけて捧げたるは、心ありやと問ば、やあら目出たやこなたの御壽命中さば、鶴は千年龜は萬年、浦島太郎は八千歲、とんばうさすは九千歲、

㈢新町の大よせ

田鶴鳴わたる和歌の浦、ぬれにぞぬれし走島の百景は、よつてもつかぬ浪の音、聞たばかりで合點がまいるまひ、島原のあけぼの新町の夕ぐれを、心ある人にせみばや、分しりの四方助、色盛の前にかしこまりければ、我たま〳〵此里にわたり、目にたつほどのさはぎを分別するまでもなく、七日のうち三筋町大赦をこなふ外なしとて、色かえぬ松の君より和氣のよねにいたるまで、引舟太皷女郎やりてかぶろ、合て千五百九十八人、あげや茶屋七十軒、花車料理人下男女、東西の門番までうれしがらせて、總銀七十貫目五十七兩三步二朱、何よりもつて安き物なり、先手分の着到を記す、住吉屋には住の江八埵花さき江口柏木、よし田屋には金吾越前、井筒屋にみちのく小倉、京屋に若むらさき式部もろこし、川口屋にみちとせ、扇屋にあふよかほる御幸琴浦、梅には難波津在原八重霧桑女背山を始として、鹿小天神月影まで、積町の茶やに

爪もたゝず、香車が小宿、錢屋の二階もあきまなく、ありなしの日より住よしの御田、虎が泪も此にぎはひに降ず、御輿洗の後宴まで、おもひ出の身や、色盛はかねぐ〳〵今の世の半太夫、いばらぎやより矢の使、子細ありてならぬといはせてをく物かと、西黑西雲卯右衞門小八、是非つかみに參る、抑此半夫の君と申は、御年十五にて御出世あり、一切衆生の目の毒なり、風俗自然と太夫にそなはり、大氣にして情ふかく、威ありて猛からず、道中ゆたかに興顏座配にあまり、床のうちとけしめやかによき所ありて、一たび枕をかはすともがら忘れがたきかずぐ〳〵あるが中に、おもひ深草の松翠といふ男、淺からぬ中なりけり、爰に又四國の大臣鷗夕とて、戀の海を隔ながら、筆を柱に文を帆にあげて、まぼろしにも行かよふ魂、ふたび此地にわたり、逗留中は留風呂とて、けふも川口屋に掟をいれ、おかしい事にも愛宕白山弓八冥理腰の物、さては一膳さす男にて、太夫しばしも座をたてば、納戸の御支度かき込早く御出あられよ、長居の浦は御當地の名所なれども、久しう御座れば裙冷のいたす所と、惡口やる瀨なく、太鼓と見えしは阿波座の薪問屋、國方の船頭、宮島ぶしの轉び自慢、さる程に勝手には西雲小八相つめ、貰ひかけしに鷗樣も、あくれば歸國の浪の上、今宵ばかりの名殘に松翠樣も御料簡にて、別れをおしみ給ふ折なれば、いふてもならぬに極まり、手ぶりで歸るたからの山、たかふとまつた色盛不興して、今の世に我心にまかせぬ物、双六の簺、大井川の水、七里半の切ぬき、よし野の金山半太夫、

㈣直打酒の新淸水

きのふは祇園の御輿あらひ、けふは氷室の御調物、よろづに京の事おもひ出して、氷餅も齒骨つゞかず、生玉の松風とところてん見世凉しく、龍頭新平といふ男すゝめ申せば、四十末社いざなひ、池の蓮はいまだ開落なかばにて、筆の林にあそぶがごとし、大文字かいて貰乞食あり、いもりの黑燒、淨るり祭文、太平記、唐人笠着てこやつうまか物、長崎の痰きり、茄子膏藥、宮のうちをのぞけば賴光山入の段、只今西の方から鬼が出る、德若に御萬歲、正月から師走まで人立たえず、水茶屋のふり袖に目のつくは五十ようへの男、せめて煎じ茶に心をなぐさめける、此社境内晶地あ

りて、御縁日ならぬ日も両部習合の垂迹にならひて、かたはらに辨才天觀世音、地藏のかしら蓼すり小木、唐がらし味噌にて田樂も、よしのやの葛溜り、婆々が三つ串南禪寺の湯豆腐お望次第、さりとは錢は寶と不斷氣のつかぬこそおろかなれ、北國彌五平が六十にあまりて、七化の拍子まひに骨を折に、彥八がかなはぬ臑で酒の醉の物眞似、さいはゐうつると儥られける、渡世は草の種、葉末の露の命消るまでたゞは居られず、そも〳〵是は九州肥後の國あそのみやの神主、兎もかうもして人に見しられたる顏も、辻能にさらし、種のない品玉とりて、むかし戀しき高津の茶屋も、釜戸のにぎはひ引かへて、あらがねの土とり場、身を捨てこそ浮ぶ瀨もあれと、新清水の四郎右衞門方にて料理申つけ、聞およびし幾瀨より呑かけ、芝居過の役者を呼かけ、亂酒與左衞門が噂、何事も夢の世の中、加賀九といふ男、扇屋新七、元智蘆角まじりに、此庭の淺黃櫻、此春ばかり素海松茶に咲てくれよかしと、申せしもむかしがたり、理兵衞があとめ論、規明が彙平たゞこれ槿花一日の榮、さあ〳〵皆まいりさふらへと、色盛みづから筆とりて、直打酒はじまりぬ、浮ぶ瀨一盃金子一兩、幾瀨に二角、萩の重箱に三角、靑磁の鉢に銀壹枚、灰吹に金五兩、肴に灸のふた金二步、尻にはさんだ香の物三角、不嗜な口吸とおもへば、これ飲でつかみどり、天狗の吉兵衞俄に腹痛してそりかへり、延齡丹もしるしなく、駕籠かりて宿にをくる、これ灰吹に二盃、灸のふた、はさんだ香の物、あたるまじき物でなし、絕入して宿にかへるまで、かの拾壹兩壹步は握つて放さず、閻魔大王の門口まで參りごとは、參りて歸りし跡七八十日惱みて、人參代雜用さし引すれば鐚ものこらず、これをおもふにぬれ手でたからをつかむ事なかれ、

㊄津守の一醉

上筒男中筒男底筒男神功皇后、これ住吉四社と祝ひ申とかや、和歌三神とあがめ奉る事は、神秘の子細ありてたやすく相傳ありがたし、されば牡丹花老人、古今集の奧儀、封つけて堺の宮傳授と申し、大和の饅頭屋傳ふるを奈良傳授と秘置ける、色盛も連歌に心ざしあればとて、宵柏流の牛に乘たる所は、目のあきたる蟬丸、これやこの新築島より那吾の海みんと、安立町にさしかゝれば、只今爰許をすゝめて通る、紀州名

草の郡加田粟島大明神さまのゆらいを委しく尋ね奉るに、いざなぎいざなみの御子、天照大神第六番めの御いもふと、はりさい天女の姫宮にておはします、御とし十六才にて堺住よし大神さまの一の后にたゝせ給ふ、いたはしや神の身にも五衰三熱のくるしみとて、いろ〳〵むさきやまふあり、明神もこれにほうどこまり給ひ、桑の木のうつろ舟にのせ參らせ、あやのまきもの神樂の太鼓、さし櫛かうがい紅粉おしろい、三十二枚のお歯ぐろ壺を相そへ、堺七度がはまよりながさせたまふ、これによりて姫みや、川中に七日七夜たち行をなされ、腰よりしものやまふやくなんを、まもらせ給はんとの御誓願なり、男衆はせんきすんばくすじけかつけ、女中方にはしらち長血こしけの類、藥代いらずになをしてとらすべし、さりながらさん錢うちまきは心もち次第、一角づゝにては一代の根を切なり、あみだも錢ほどひかるとの御詫宣なり、これも當社の御ゆかりと、一角はづんでゆく、朝夕に見ればこそあれ、淡路島山穴師の風に吹はれ、惠比須島の二階のこらずかりの宿、一日の遊樂、たいはも生てはたらく地引の網より、夏鰒水鮧武島女郎、鯖釣舟も爰によりて、居ながら沖なます、入日をあらふ金柑、ちいさい目から錦の店も磯なり、こゝにも酌とる色女、あたまからおさへてぬりばしに色生姜、清水坂から海のみゆる座敷ぶり、青臭き畳のおもて替して、名月ながむる外心とゞまる君もあらず、高臺寺前にてたしかに見しれる顔、是ばかりはちがふまいといへば、鑰屋に三年つとめました、そのさきは繩手やぶの下、そのさきはかたじけなくも東石垣、清水風呂に四年、其さきは歳がしれるとていはね共、振袖の似合たは仕合、ながれの身の行衞はしれぬ世の中、清水へ月參今にさんすかと、大かたに拍子合せて、何につけてもみやこ戀しや、産土樣はいなりまつり、五條骨屋町、爺樣の手一本で年玉扇の要を削て五人口、この比はたよりもきかず、來年の九月きはめの年はあけ共、人しらぬ惜錢に又壹年も、我身ながらまゝならず、のぼらさんす時、文ひとつことづてましたいと、あはれなる問ずがたりに、存じよらざる泪をこぼさせける、道才虎若たつみあがりに鳴わたりて、又よきつゐでなれば、是より津守高洲袋町一見せばやとおぼしめし、泉屋方はさしあひ有て、

河内屋にての大よせとさはぎたつ、九兵衛は是めづらしき都の大盡とひしめく、およそ此里は、大天神小天神五十餘人、中にも小太夫かづさゝ山八重澤衞門かつ山宇治ゑにし野風むらさき、されども太夫といふ物は、薗生の君一人なり、末社のこらず活計、ねがはくは夜のあけぬ國に生れたし、

㊅無類の智惠袋

世にひとつも合點のゆく物なし、磁石は鐵を吸、琥珀塵をとる、蘇鐵枯れば釘を打て芽を出す、此故に鐵に蘇ると書事までは尤にて、その子細人に問てもしらず、蘇鐵にとへども物いはず、どうならまゝよ、さて瓢箪から駒の出るは張果郎がからくりなり、見ぬ事は咄しにならず、妙國寺の名木見に立よりぬ、これは唐にも有まじき詠め、繪圖にして家土産、曾根の松と氈厚蒲團しかせ、又呑かけて名物の吸物、蛤茶屋といふ所に關を居て、堺より下の浦々岡田鰈佐野鯛、惣じて京へのぼる魚荷、一人ものこらず買とれと申付るに、畏て銀高五貫八百九十三匁八分が鱗、かやうに一度にめされて、御料理はいかに仕るべしとうかゞひければ、阿部野が原へ持て參つて、皆捨よと申されけるに、寛濶なる末社中間もこれにはおどろきながら、誠に各別なる御分別、是程御腹中廣き御捌、前代の大盡も終に思ひつかぬ所也と、手練の頭をかたぶけて感じ入ける、かくて阿部野の百姓共、野も山も皆白妙の魚鱗の光に肝をつぶし、月海上に浮んでは鯛も木にのぼるとは、かやうの氣色を申べし、物の大將になる人の思案を、井のうちの蛙のしる所にあらずとて、畑うつ鍬をかたげて手をはなしける、

寛濶平家物語巻三　終

寛濶平家物語巻四

㈠空焼は比叡の雲霧

日本第一とある物、熊野權現の御禮と、鹽瀬が饅頭の簡板（かんばん）なり、富士は各別世界の飛切、皆までいはせず、近江の水海は、西湖の八景より白眼、那智の瀧は廬山の瀑布と威勢をあらそひける、日本第一の上戸は和田の義盛、唐天竺にもなしとて、陶淵明李大白も肝をひやしける、いでや此世に生れては、よろづ大氣に手をひろげたるこそよけれ、色盛も日夜の大さわぎ、折折は退屈して、けふは嵯峨野のおみなべし、黒木の鳥居引かへて、さびしき氣色又興ありとて、いさゝか鏽つきたる鮎を酢におどらせ、すがたにくげなる松茸のはしりに酒あたゝめて、霧たちのぼる槇の尾、手白山のむら雨もしめりわたりし時、水錬法師且過坊心をつけて、かゝる草ふかき御わたらひ雨濕の防ぎとて、竹の皮の香づゝみより一枌（へぎ）二枌燒しめたるやさしさよ、さらば繼べしとて、俄に二條通の藥種中間へ飛脚を立、名の木あらんかぎり取よせらる、白ぎく八重垣春日山夕がほ金花山を撰ぬき、火鉢に樵木のやうにつみあげ、木口より火を付たりければ、末社拍子とりて燒亡大盡とはやしける、目ふらぬうちに百九十八兩三歩、ちりも灰はのこりてよきにほひたなびき、折ふし西風ふき送り、叡山の大衆鐘をついておどろき、まさしくこれ赤栴檀のかほり也、清凉寺の釋迦おぼつかなしと、山法師千餘人火消道具をもつてかけくだりけるが、別條なしと聞て皆息をつぎける所を、今に安堵が橋とは申とかや、かやうに一山騷動に及びし事も、色もり元來寛濶に生れつき、露物のかずともおもはず、かへつてこれらの珍事をいみじき餘勢と存じければ、日々の奢侈古今の間に超過せることそおろかなれ、きのふはみやこの西に虫の音をともなひ、けふは又六波羅の下屋敷に白莚を開き、三筋に引たてられ、晝のまぼろし闇のうつゝとたのしみのあまりに、むかしより酒に酔ものはあれ共、菓子に酔狂する例なし、我こゝろみに酔て見せんとて、饅頭ひとつを銀五百目に申つけゝるに、さすがみやこの商人、二言とも申さず請合、翌日饅頭ひとつを八人して舁込ける、そのながめ富士山を臺にのせたるがごと

し、もろ〳〵の輕安口をそろえて、まことに天地はじまりしより、かゝる目出度まんぢうを聞ず、されば御親父世之助殿の御時、彌七が日本一のなりとてひとつ五匁づゝ、それさへめづらしき取さたありしぞかし、よろづの御物ずき、竹の子の世之介まさりとはかやうの御事とぞおがみける、此評判かくれなく、一代にかゝるあつらへふたつ三つあれば、寢ざめよき正月を仕る、觀音町の饅頭屋、こちのは貳文の親仁つたへ聞て肝をつぶし、横手をうたぬうちに目をまはし、やれ針たてよ道白老は、

㊂客も亭主もはなれ物

下野の國阿曾沼の何某、狩に出て鴦の雄鳥を射て歸りぬる夜の夢に、美女うらめしげに枕上にたちて、涙雨のごとく、「日暮ればさそひし物をあそぬまの、まこもかぐれひとりねぞうき、とよみおはりて、鴛の雌鳥とすがたをかへて飛さりぬ、なにがし夢さめ、まことに妹背のちぎりは畜類かへつて深しと聞つるに、かゝるあはれをみる事あさましく、日比殺生の業を悔みて遁世墨染の袖に罪障を雪し、浮世に花ももみぢも見捨ける、都は小山の冬げしき、毎年鴦のきたりあつまる池あり、貴賤鴛見とて雪霜をふみわけて、群居る水の面、色なる浪に錦を流し、金帆浮び玉沓並ぶ詠めぞかし、色もりいざさらばとて、例の三十末社行程めづらしく、乘物金牛をひかせ、美々敷うつて通るを麥藁男共見て、世には狂人こそおほけれ、あたゝかなる宿で杉燒串付、生てはたらく湯婆に足をもたせ、酒卵の腎藥に兵粮をつめ、ぬつくりとたのしむべき身を、此寒風に頬ふきゆがめられ、水鼻たれて氷れる水邊の鴛を見たればとて、腹はへりこそすれとふくれ顏してそしるこそ、世の中の悋氣なるべし、さる程に色もり池の汀に床几數をならべ、もたせたる長持のふたとりて金屛風をはしらせ、花氈をしかせ、火燵をしかけ、錦襴純子の夜着蒲團の山、雲一片の大幕うつて、酒肴芳飯の配膳、なべかまの數、物の自由自在竹にかけならべ、俄に新宅をみるがごとく、水のうへの所帶とは是なるべし、殊更けふは冬の日しづかに、鴛鴦面白ふ遊び、人に馴ていと興あり、あはれ舟もがな、浮べて竿とらば范蠡が五湖の遊樂と申されしかば、天津乙女之丞元來軍術長練の浪人、はさみ箱より三人乘の小舟、いくつもからくみ出し浮べければ、を

のをの乗出して東西に竿をさし、南北に楫をとり、翠袖を浸して白蘋を採、さかづきをとばして風にうそぶき、仙境時ならず曲水の宴をもうけたるに似て、夕陽のなゝめなる事をおしみける所に、此里の地頭の侍寺院の若もの四五十八、鑓長刀の鞘をはづし、殺生禁斷の池にみだりに舟を浮べ、鴛鴨を盜であきなふ奴原こそみゆれ、一人もあますなと一度に突でかゝるほどに、ことはりいふべき隙あらばこそ、命にかゆる物やあると、羽織ひとつを二人にて引かぶり、頭巾と取ちがへて羹鍋をいたゞき、あはてさはぎて我さきとにげたりけり、ひたおひに追かけらるゝと覺へて、皆息きれて北野の回廊にはしり込、毒蛇の口をのがれたる心地にて、寒天の大汗をぬぐひける、かの侍寺僧二三町ばかり追て取てかへし、取ちらしたる膳部引よせ、近所の土民に給仕させ、鯛の濱燒、二の汁は雁、小板に鱧越の鹽鱧、根深に藻魚、芹燒に青首、獻上鱈、蒸がれゐ、吸物に馬刀、肴に海羸、菓子は鯨餅龍眼肉これもよし、東山のかき餅それもよし、みじかう飲めと、あたまから重箱自身おさへてつゞき狂言、出かした百姓共、仕れかしこまつて近年にないお料理、かたじけなき活計、物の見事なる酒になりて、地頭も御機嫌扇を開き、面白や比良や横川やあたご山と、二三返おしかへし舞たまへば、ふしぎや俄に旋風吹落て、手に持さかづきかんなべ空に吹あげ、これはとおどろく枕の夢か、膳も杓子も長持屛風、秋の木の葉のみだるゝ空に、吹あげ／＼ちり／＼になれば、地頭寺僧の鼻壹尺七八寸、兩脇より翅生ひ、三國一千秋樂杉の梢にひゞきわたり、どつと笑聲木がらしに殘りける、さてはこれは、

㈢貧福さま／＼の働

衣類道具にかぎらず、麁相なる物の下直なるは、神代よりきはまりし世の中、今はよろづ念を入て、かつかうより安き物ならではやらず、されば都の商人よろづの仕出しめづらしく氣を取て、懷中小刀の鞘を物さしにし、此うちに耳かき爪楊枝、針に糸をつけ、痺の藥を入、惣側を南方毛ぬきに懷せ、物數七色を五寸より内に仕込、此代八分、あるひは急用寶の藥袋の中には、うち疵きりきづ、血どめ虫しやくくだり腹、田虫ひぜん虫喰歯の妙藥、敗毒散はやめ藥、五痔の藥萬能膏藥下疳のくすり女悦散、以上卅八色入、茶匙ま

で添て代壹匁五分、是等は元利手間賃も有まじとおもへば、亭主はいつの間にか撫付あたまに、きやらの油をもみつけ、ひかりわたるはみ出しを横たへ、女房は不斷憲法ちりめんにもみ裏、つまはづれもみづから飯匙とるとは見へず、店賃高き米を喰て、さりとは奇麗にみゆる世わたり也、さては奉公人の肝煎するか、巾着宿か、おろし藥を賣かとおもへば、いかな事、元來中國の浪人にて石部金吉と申す、その隣に六疊敷かりて、夫は駕籠を舁と見れば、或時ははかまをためつけて料理人にやとはれ、髮結の手間に出、糊細工の篦がきゝ、日用大工兩役をかね、五節句前にはそろばんこゝろへた、書出し合點じや、小借錢のあつかひ飲込だ、江戸への六日飛脚まで請合て、足もあし、手も手、八人藝程はたらき、女房は寺がたの洗濯物、綿も摘糸も繰、緣邊の取持、乖らぬ乳をも見出す、取あげ婆々こちへまかせ、たゞ一人の娘十七八、しぶり皮はむけたれ共、妾奉公をのぞまず、鹿の子の入目、け物ゆのしを習はせ、親子三人只居せず、晝夜かせぎて、際々いかほど延るとおもへば、ことしの盆前も、銀十九匁八分たらず米やと喧嘩、仕廻に夜にあけ、わたりにくき世をなげく娑婆世界に、色もりの身の上を見れば、さりとは過去のよき種、たゞいまはへ出て、餅は木になるものやら、銀は芋の葉に朝ごとたまるやら、錢は空から降物とおぼへ、冬の寒さもしらず、房つき團にあふぎたてられて、夏は涼しい物と斗覺えし身の果報は、寢てまつほとゝぎす、たゞありあけの月にむかひて、こよひも例の風の宮雨夜の太郎介、道才久安おの〳〵相つめ、南白といふづく人を呼出し、一角にぎらせて、諸人面前にて、急に手扁を仕れと申せば、これも身過とおもひつめ、六十にあまつて前後もしらず寢て居る小僧を、無理にひねり起し、肩骨のつゞくほど、水を削り出し、南無あみだぶつと申すがおいとまごひ、

㊃微塵も繪圖に違ぬ女

梅田千太郎は大坂生れにて、頓笛兵九郎が手より、はじめて伊勢の芝居へわたり、一枚簡板に花村初太夫とあらため、難波の顏はいせの白粉といふ狂言に大あたり、女形の骨長ともなるべき見たてにて、四條河原の舞臺をふみならし、舞すがた扇のとりまはし、大宮彌に自然と似て、ひとふしは彌四郎にまがひしか

ども、色すこし黒く齒並そろはず、藝する時と一座にては、見違ほどの事、我も合點首を鏡にむかふてうなづき、金剛の七兵衛に申けるは、都の板つきとなりて、壹枚二角のさだめ勿論なれども、つく／＼自分の羊羹無禮を觀ずるに、虫のよき客の身にして料簡するに、一角が物ならではおもひつく所なし。今年より身のまゝになるこそ幸なれ、向後は一角づゝに定むべしと、我ながら見たてけるに、なじみの客はいふにおよばず、これは掘出しごゝろに、ぬけ荷を買がごとくはやり出、そのゝち敦賀の大盡、越前につれてくだり、兄弟の披露して、世間をつくろひ、屋敷をわたし、兩替見世をまかせ、老の入知樂助と名をかへ、今繁昌の大商人かくれなし、惣じてその身一代に立身する程のものは、何れの道にも、一かはり手のかはる思案なくては、名をとり徳をとる事なりがたし、板行の浮世繪をみるにつけても、むかしの庄五郎が流を、吉田半兵衛まなびながら、一流つゞまやかに書出しければ、京大阪の草子は半兵衛一人にさだまりぬ、江戸には菱川、大和繪師の開山とて、坂東坂西此ふたりの圖を寫しけるに、近き比鳥羽繪といふ物、扇服沙にはやり出ぬるを見れば、貌形手足人間にあらず、化物づくしに似たり、宗達流又おかし、これらは皆一流を建立せし巧妙手にして、氣をかへたるいたり詮義なるべし、好色一代男の繪は何ものゝ筆なりけん、島原の初音もろこし、よしの夕ぎりあづまをはじめ、皆江藻髮の婆々の御影を見るがごとく、腰かゞまり袖ちいさく、鳩むね鑓おとがいにして、立すがたは大風にふかれて倒ありくに似たり、大坂の正甫は鶉一疋銀一枚にさだめて、かくれなき名をとりぬれ共、上手に二代なかりけり、されば泰羅の色盛、いまだ家の世繼誕生なしとて、京にて妾あまたかゝえられしに懷姙の沙汰なく、此たびは大坂にて見たて役人くだり、妾繪を繪師にあつらへけるに、内意ありて江戸にては三浦の小むらさき、京にては花崎、大坂にてはみちとせ、此三人の形をうつし繪に、似たる女をと肝煎中間人置に、圖を渡して尋ねさせ、來廿一日中の島の屋敷にて目見ある筈にふれわたしけるに、煎場の彌兵衛方より三十七人、上町の天狗婆々が手より廿九人、天滿五丁目笠屋與十郎が十七人、玉造の八内三十六人、合百二十人つれて參りけるをみれば、皆六十よりうへ

の世界みじかき婆々共なり、役人あきれて、かやうの古き化ぞこなひは、何の爲に來りけるぞと無興ある時、肝煎共罷り出、いづれもお望みの繪圖に合せましてと取出すをみれば、一代男の繪師がかける女姿也、

㊄おもひもよらぬ化物づくし

中比京女の風俗をみるに、幅廣の帶ゆるくむすび、風市三里までぬけますると讃しが、近年はかゝへ帶なしに胸に卷たて、又此比は三重まはりに幅せばく、臍どをりにしめつけ、はらりとむすびさげたり、されば女帶いにしへは五尺三寸に極まりしが、今は壹丈八尺五寸なくてはおもふまゝならずとは大分の相違、よろづこれにてうつりかはる世を御推量有べし、渡りこしもとの給分四十六匁の約束にて、お客の時垢つかぬきる物はあるが、乘物の供きる物はいくつあるぞ、同じ給銀出して見ぐるしい者つかふ事はならぬといへば、結構なる物と申てはかぎりなし、一とをりはありといはねば半季も置ず、扱帶は花色繻子、脚布は飛沙綾の大幅九尺、櫛は玳瑁の照ぬき、笄も同じ虎斑、南鐐のかんざし、御香具所の七度燒の白粉、梅花の油、小杉の鼻紙、寒の紅粉、にほひふしのこ花の露、匂ひの玉、かけ香、西洞院のしきれ、白なめしのもみぬき足袋、繩手のもとゆひ、ちゞみ丈長、爪楊枝、さねかづら、奉公人宿への付とゞけ、口つぎ一分一銀、洗濯賃、そろばんに置たてゝみるに、からす丸の三つ物、ひつときの取合せ物の直段にして、半季の雜用隨分內場に算用するに、三百九十七匁三分四りんのつかひに、四十六匁の給銀でつとむる事合點のゆかぬとは、大形の神ほとけも是ばかりは我を折給ふべし、今の世のせちがしこき人間、めしつかふ主人、あたまからのみこむで、月に六齋さだまつて隙をもらふて、朝もゆるりとかへり、まだその間には、在所の伯母がのぼりてちよつと逢に參るの、死なぬ親の年忌に寺へまうでたいの、六角の觀音さまへ願ほどきの、いつも今比灸をいたさねばわるい病がおこりまする、宵のうち宿へするゐにまいるの、所帶して居る姉が產をいたしたを見まふのと、三十日を十四五日はかならず隙をとる、その間には中戸から呼出す兄樣とやらいふて、一時づゝくらがりでさゝやくは、なにを泣やらしらず、主人も折ふしは料簡しかねて、三度に一度は隙をやらねば、むつとしたる貌にて、四十日や五十

目の給分取てお客の御供のと、百二十匁で仕たてたきる物の裙をきらし、宮づかへするも勝手づく、盗人の晝ねもあてがなければとつぶやく、天目を取落すともし油をこぼす、世はもとしのびとしらぬ古主をひとりごと、外へおもふまゝに出ぬと、半日も血の道をおこしければ、心ながき主もたまりかね、給銀やすうて見形よきものをつかふが德と、すこしの事は堪忍すれば方量なし、つまる所惣嫁の宿をするやうなものも、はや怺袋きれて根からいとまをやれば、畏てをのが手道具取まはし、少も迷惑なる貌なく、半季には七八間もかまどをかぞえて後、常躰のつとめなりがたく、つゐに巾着夜發の道に落入、辻にたゞずみ、川端に立、手あらき舟引馬かたに身をまかせ、炭髭に甜られ、夜番に上米をはねられ、根のふかき病を請取て、骨肉をいたみ、五體不具のかたちをあらはし、生ながら性をかえたるに同じ、去程に色もりあらゆる色道にあそぶといへども、いまだ夜發といふ物を手に取て見ずと、川ばたにちかき旅籠やをかりのやどにさだめ、廿八斗並べたり、ひとり／＼名を尋ねて聞に、妖ようが上手とて狐の小よし、白髪を染て出れば眞盛のはつ、一眼なれば浮木のお龜、腰のぬけたる夫を養ふとて心中のおたつ、なげ島田の如く頭巾をかぶりて出るが尼のさん、一座皆湯の山の道づれにて、大かた片輪の集り也、くらがりのあきなひなればこそ口過もあれ、火ともして見らるゝ物にはあらず、最前より片隅にさしうつぶきて居る君は、いかにと問に返事もせず、座中氣をつけて、いか計見苦しければ、此うちにて恥るほどの奇怪なる物ぞ、興あるべし、無理に引出せと立かゝり、棕櫚箒にて芥を掃やるやうに押出せば、一眼は紙に目の形を書て張つけ、半分かけたる鼻を壁土にてつくりつけ、下唇なければ笑ふが如く歯をむき出し、耳よりうへは兀山の額かかりて、雈のやうに髪生さがりたるが、色もりの顔を打ながめ、此すがたとなれば見忘れ給ふも恨とは思はね共、あまりどうよくなる御仕形、いふてなり共胸をはらさんと、側近くねぢよれば、色盛鍮赤色に成てにげられけり、其後いかやうに思ひ出してみれ共、かゝる奇異なる物に馴染たる覺えなしと、大小の神祇を誓文にてふしぎはれず、

寛濶平家物語卷四 終

寛濶平家物語物五

㊀轉變の涼み床

花の春過て紅葉の秋遠し、宗鑑法師が、都のうつけ今やまつらんとよめる、ほとゝぎすといふ鳥も、里近きおとづれ、心なき耳にはかしましく、草の扉のねざめがちに、水鷄のつれなく、門田にうゑわたす早乙女の尻をならべたるこそ、浮世の戀のつかみどりなれ、その程も過て、祇園會の山ほこたちわたるにぞ、暑さは堪がたき、休可三貼の香薷散にて、霍亂の惱よく、四條の涼み床にさそふ水、いづみ屋小源が出茶屋に腰かけて、しばし汗を取、隣は參河屋御手洗のながれに橋を蜘手にわたしたればとて、あてじまひなる家名とは、それも氣の付過たる見たてなるべし、東西の石垣二階の燈、水面にうつりて星林あやまつて地に落、銀河に足をあらふがごとし、物眞似賣買の篝火、榷燒田樂の煙は河霧ふかくたちこめ、鴈は櫓聲の中にあり、數千の床机百萬の群集、襖障子を取はなして、天井のなき廣間に一座するに同じ、色あひさだかならねど、琴を懷く艶女あり、三絃にうつる美童みゆ、尺八一節切、歌によつてやはらぐ、餘音嫋々として龍神も浮ぶべく、手まづさへぎるさかづきに、花奢娘まかり出、片々たる金、飛で袖に入ば、一際酒しみわたる比、丹波路に石臼轟き、桑原三左衛門も臍をかくし、耳を掩ひたればとて、鳴かゝつてからは、白雨桶をうちあけ、川上白浪うづまき、水嵩一丈ばかりたかく抑來る、目ふらぬ間に近年の洪水、諸人さはぎたち、かけわたしたる假小屋數百軒、たてならぶ床二三千、あるひは庖丁持ながら爼板に乘、茶汲女は柄杓をはなすひまなく、酌とりは巵に竿をさし、床に乘ながら九里八町を逆落し、まてこと問ん我おもふ、松屋の娘竹屋のこさんも形を見うしなひ、せはしない所で涙を溢す、色盛は無尻町そろまが浦に、かはりたる伽頭の數をならべ、外山戻りのしげ、越後のつや、鶉の吟、團栗の竹、宮川のとめ、花村辨之助、玉島千彌、六彌染之丞まじりに呑かけし所に、おもひよらずおしながされ、せめて五條の橋杭にながれかゝりて、ゆめのさめざるがごとし、御望次第料理仕候と書付たる、松菱屋の行燈ふしぎに消ず、たがひに顏を見合せて涙ぐみ

けゐ所に、橋のうへより細引に文をくゝりつけておろすをみれば、羽衣馴獺、手越新七、菊屋和六に御座候、これまではしたひ參り、何とぞ陸へ御あがり候やうにと、いろ〳〵智惠を出し候へども、此高水にて舟も人もちからにおよばず候、今しばしのうちには水も干落可レ申候間、ずいぶん橋杭に御しがみつき、命御ながらへ何にても御用候はゞ、此使に御くゝり付可レ被レ成候、これはきどくなる者どもかな、此體ならば何處へながれ行べきやらしれず、宵よりの酒にて、このましき物は水增水をあつうして、たまごの麩の燒、阿蘭陀漬の梨、羹はつたりとして、末期の水御手向とおぼしめし、早々細引殿へ御ことづてと、返事したゝめしうち、又一しきり北山降て牛馬もながれ來る、頂妙寺の二王、此たびはつなぎとめたれ共、橋杭たのみにせし色盛をはじめとして、數百人又おしながされ、泊りはしれぬうたかたの、あはれなるかな雖卯十一年閏六月十日の曉、

㈢葬這す金の蔓

死生富貴は天命にあり、二十八端といふ大船に、功者なる船頭水子三十五人乘て、大碇十七八に鎖をつけて要害せし江戸長崎がよひも、怪我のある時は、入海も油斷ならぬ世の中に、楫も帆柱もなき涼み床に、大盡末社六七人、ながれ次第に酒飮で、これはかはつた景氣、明石の鯛須磨鮹、いきてはたらくを目にみるはと、きのふの醉もさめぬうちに、町たちつゞく大湊にながれより、こゝは何と申す世界ぞと問ば、室の津といふ、さてははりまがた、都の賀茂も御同體まもらせたまふゆへなるべしと、掌を横にふしおがみ、まづ宿をとつて息をつげと申せば、ねざめ道才、聞およびたる橋風呂、むかしの人の袖岡香之助がたびねせし所をおもひ出て案内し、抑是は好色二代の嫡子色もりと、皆までいはせず槌で庭をたゝき、箒で座敷を掃て請じける、某事僉て罪なくして勘當にあひ、遠國波濤の色里を見ばやとねがひし甲斐有て、此度不慮に四條河原の涼みより流され、しかも此里に來る事、日比の大望達すべき時いたれり、親世之介二萬五千貫目を廿七年のうちにつかひ捨、殘る六千兩を東山に埋め、そのうへに葬を這せ、露命の身を油斷してつかひあませしは不覺悟なり、家財在銀の外に、たゞいま又大判八千枚、小判九萬九千兩、銀子天秤におよばず、

升ではかつて、五斗俵にして十石八斗、此三口の賃をばあだなる寺社の建立上葺の奉加についやすべからず、野傾兩色に油斷なく蒔ちらすべしと、常々申付たりといへ共、われ生れおとりて、中々女護の島にわたるべき器量にあらず、此たびよきついでなれば、此里を手始として、長崎まで好色島めぐり、いづれも其分相こゝろ得、京へ飛脚をもつて、海陸にてまづ一萬八千貫目とりよせ、虎若卯右衛門銀役に申付しかば、律儀な奴かな、手帳にしるすをみれば、天神二十八匁、鹿戀十七匁、端十匁、六月十三日室君三十五人の惣揚、宿屋の下女料理人、花奢までうれしがらせて、わづか三十九兩壹歩二朱、さりながら此里には、江戸の中むかし若山が、もろかづらといふ伽羅をきゝ、おぼへたる君ありし所とて、山口圓休もくれなゐの舌をまかれし里なり、油斷するなと下知して、非筒おだまきくれなゐいろは、うち込での大さはぎ、口あい文談、おかしき最中、輌へ渡海のかり切舟、順風よし、はやのり給へと申す、まだ肝心の事さへせぬ座を、いとまごひはならず、明日迄まてといへば、追風には舟頭さへ留て出ますると申す、それなら汝等ばかり乘て參れと干反れば、かしこまつた、約束の舟賃水子へ樽代、合金子七兩三歩申うけんとわめく、乘らぬ舟の運賃が出さるゝ物かと、理屈にまけておさらばゑ、

㊂世界にかはらぬ物一色

穿つて田となり、花樗わづかに四五本のこれり、誰か阿波手が森とやはいふべき、野路の玉川も、色なる浪の行水は、夏帶のちぎれて萩も見へず、されば讃岐にて圓座をしらず、伊豫にて簾の里を見るものなし、むかし西山宗因、よしのゝ花見に友とする人もむづかしく、書筒持僕ひとりを旅の伽として、西行が頓て出じとおもふ身の、歌かき捨たる里ちかきほとりにて、連歌師は此所になきかと尋ねしに、白樫赤樫はあれども、れんがしはしらずと申す、宗因かさねて、俳諧師は御存知かといへば、それは秋實のなるものにて、こゝらにはさいかしと申すと答えしに興さめて、をのづから花みる人になりにける里人には、似氣なきありさまかなとて、大坂に歸て花見の土産に語られしなり、去ほどに色盛輌の浦に纜かけて、むかし人のよみのこせし樫の木の梢は、いづかたに見ゆるぞとたづぬるに、麴屋がしるべしと申せしこそ、かの樫の

木のたぐひにおもひ合されけれ、その木がいまあればとて汁にも鱠にもならばこそ、舟あがりの宿を姫路屋にさだめて、美形はこゝにもありそ町の二階に、泉水といふ入江を受、景氣とりて飲かけ、若草胡蝶うき舟花鳥小太夫、折ふし伊豫の大盞わたり合せて大よせの最中、福山、三原の女郎柄入こみ、淨るりは美大夫ぶし、たるい峯からうしろとび、おつるやうなるゆめを見て、さてもその夜のおもひいれ、說經がゝりに七つゆり、九つゆりのこけ自慢、三味線は撥あたりかしましきを上手にさだめ、役者物眞似、惡人形、踊輕業をみづから仕る大盞を粹かなと覺え、女郎もあたまからいくつもおさゆるをしこなし酒と合點し、今に盃を飛し、箸にてまはすをおもしろがり、蜜柑で猿の手づまずれば、鮹生貝をはさみて火鉢にてあぶり、鹽や長次郎が錢の曲すれば、山椒にむせたる座頭のまねする事、此比最中なり、けふは六月十九日、爰にも祇園祭とて、遠境近在群集して、茶見世の床もならべたり、神事能ありて、毎年奈良より大夫くだるとや、これは諸國一見の咄のたねと、追こみに場をとつて、まづめづらしきは人の風俗なり、編笠に轆轤縄をつけ、鎌と輪とぬの字の染こみ、あるひは大脇指をよこたへ、相撲の一組三尺手拭の頰かぶり、はじめよ〳〵とわめきて、式三番祝言、高砂の尉を、親仁方お出やつた、荒木與次兵衞もはだし、姥は小勘太郎次もどきと讃たてけるを、さては上方の分しりが有よとつぶやく、よろづ各別世界の鄙とおもへ共、京の側なる矢背小原、麻にまじる蓬とは見へず、いづくもかはらぬ物ひとつ、飯くふて酒のんで、枕して帶とひて、さうしてたのしむのみぞ唐も天竺も、

四 流ありく宮入の寳

水無月二十日あまりふつかのあけぼの、傾顏うつくしまに渡海せんとて、戀風にまかせつゝ、沖のかたに出舟の、帆筒しめ縄こゝろよく、疊のうへを行がごとく、宮島ありの浦に碇を入て、陸路めづらしくあゆみけるに、案內申さんとて、當社は推古天皇の御草創、再興は平相國、御神體は沙竭羅龍王の姬宮と申すは、さだめて娘子の事なるべし、それを凡夫になして、よい夢をみる事がならばといひ捨にして、大坂屋にかりの舍り、囘廊は目前に咸陽宮の何虹亭を見るがごとく、景氣見おろしてこれは飮る所、荊藻よしの難

波、金太夫みふねなど、虎若道才おかし男共つくす所へ、廣島の李洞中間、かねて風雅のまじはり、此度きぎづたへのおたづね、一座面白うなり、此しまの君達、先年四季の發句して、櫻にいのちながらせし事、海山へだてし身の今こゝろにあらはれ、手にとりて美景ながむる水の月のかつら男、冥理とはすこしいひかけたるも、折々はおかしく扇のつま鼻紙のはしにかきつけて、あひあふ心せし人なりけりと、神祇釋教名所も戀もおもてからゆるして、興に入所に、京よりの飛脚舟、櫛の歯を引て、當月四日雷鳴わたり雨頻に降て、さしも はなやかなりし下屋敷をつかみ崩し、金牛を引裂、鐵壁を破り、廣庭に傘ほどの松茸時ならずまかり出、大釜山姥をうたひ、犬猫鳥帽子かりなにて踊をはじめ、しかのみならず、此炎天に家内の者の涎たちまち氷柱となり、そのうへ腰もと中居端下にいたるまで、丸裸になつて夜な〳〵男部屋にみだれ入て、命根を吸、證歌のしれぬ小歌をうたふ、これたゞ事にあらずと、陰陽師にうらかたをみすれば、まさしく主人たるもの、水損火動のたゝりと申す、急ぎ歸洛あそばし、自身信力の丹誠をぬきんで、神佛の冥助を祈られ候へと、かの小松野滋左衞門がさゝぐる書翰なり、隨分大膽の色盛、此怪異におどろき、西海の色修行しばらく延引すべし、しかれども一萬八千貫目の金銀、むなしく身にしたがへて歸京せん事ほゐなければ、そも〳〵當所をはじめ、これより筑紫がたの色里、柳町長崎はいふに及ばず、沖の野太舟浦々の漁女まで、三日づゝの揚錢に配分すべきなり、先下の關の遊里堺屋のあげまき、此たびの踊狂言、京にてはやりし嫁鏡三番つゞき、山下半左衞門が身ぶりをうつし、和國小源太萩野若むらさきも、別して出かすよし、これも三日、鞆屋大坂屋丸屋宮屋石見屋六軒の天神鹿戀七十八、惣揚屋のこらず花代雜用、蒔たつ樣な小判一千五百八十兩箱に入、與次兵衞が追門いる、內に金子書狀あり、かよふ神と書付、箱のふたつゝがなかれと祈念し、赤間が關いなり町、揚屋中まに油紙にて帆をしかけて、いつくしま大明神の前よりつきながしける、次に長崎丸山櫻町、霧浪やつはし金山かほる浮舟高橋をはじめとして、八十五人の松のきみ、紅毛の出島にあつまる傾色までの揚錢三千九百八十三兩、廓中の目鼻の付たるものには、殘らず

黄なる物をながめさせるつもりにして、これも箱に帆かけてながしやる、その外津々入江の色里、四十八ヶ所、分しりに間合せて、五百兩三百兩づゝながしやるといへども、いまだ三分一もつかはれず、一とせの野分に吹ながされし船頭まかり出、南京のかたはらに、耽沒羅のみなと傾城町ありと申す、これへも金子八千兩つめてながさせける、むかし平の重盛は、金三千兩を宋朝に渡し、一千兩は醫王山の佛照禪師を始て一山の僧に施し、二千兩は宋の王に奏聞とげ、五百町の田代として醫王山に寄進せられけり、これは重盛賢君にて、日本には我跡をとぶらふべきもの相續有べき父清盛のふるまひにあらず、家かならず斷絕すべしと兼ておもはれければ、遠くもろこしに善根の種を蒔て、後世とぶらはれんとて、かたのごとくはからひ申されければ、かの御寺におゐて、今に大日本の大臣平の朝臣重盛公の後生善所と祈る事五百年來絕ず、ありがたきためしなればとて、平家物語にも書のこせり、重盛は三公の御位、色盛は民俗、かれは後世のため、これは好色のため、かれは三千兩、是は三萬兩、かやうのふしぎなるなぐさみを好める色盛なれば、中々おろかなる凡人の分別には、およびがたき智惠者なりとて、聞人奇代の思ひをなさずといふ事なかりけり、

㊄世には化したる生物

六月二十三日宮島を出て、備前の國牛窓の沖まで、夜晝二日にはせたりけるが、俄に順風かはりておそろしき氣色、帆ばしらをれながらあやうき命をたすかり、賀田といふ所に流れよりぬ、爰も聞ふる名所なれば、浦中の小歌女を大よせして酒事はじまり、熊野横手をいそゐでのりやれといふ證歌、つれぶしおかしく、いづれもなげ島田にて朝日といふ象牙を蘇枋染のさし櫛、和泉木綿をはな色に、しろき綱の手のちらし形、茜うらの袷をうちかけ、空豆煎てしほをふりかけ、菓子にさだめて賞翫の手いとまなく、さかづきはあたまから紋つきの中椀、平折敷にのせ、五升鍋を自在といふ物にかけ、直に樽ありぎりうちあけて、柴折くべて酒のかん、よろづ肝煎かく五六盃つゞけて毒味してまはす、松の燈を石鉢にくはつとあかすは、夜宮に櫻飴をうる市見世のごとく、よきほどに引切枕を轉ばし、外に床を取といふ事もなく、燈消次第に

あまがゐるといふ小芝居のものひろひて、おびたゞしき繪簡板をかけ、此度朝鮮國よりわたりし露轉鬪蟹、濱拜拾文錢は戻り、鮹を吸込てなみだをながす所、只今二番つゞき、草臥の來ぬさきに見ねばはなしにならず、これや中々

おもひ〳〵の手組、矢背の雜喉寢に似たり、みやこ衆めづらしがりて、皆杖をつゐて閏より這出ければ、貝塚堺のつじ駕籠をとりよせ、これより陸をのぼる談合に極り、主從へだてなく、三枚肩にておさする筈に申つけ、さて土産物にはありふれし鯛鱧めづらしからず、かはりたる生類あらばと漁船を尋れば、前代未聞の鮹、網より引あげたり、ひきのばせば壹丈八尺、かうべは松茸のごとく、笠の眞中に口ありて、時々水をはく事、瀧をとばすがごとし、ある時は縮みある時はのびて兩眼を開き、赤筋ありて怒れるに似たり、これを露轉鮹と申すよし、是めづらしき物と見る所に、今一艘の網より九尺四方の蟹を持參申す、甲のうへに毛のはへたる事藪のごとく、細き眼ありて小高き鼻を動かし、立に口きれて、青くさき事鼻骨碎るがごとし、これを鬪蟹と申す、いづれも奇異のくせものなりとて、小判百兩に買とり、宮古の家土產これにしかずと悅ける、珍器奇物を翫べば、國にあやしき物を生ずると漢書に見へたり、かの二疋を伏見まで舟にてまはし、歸京の後、人々に披露申せしが、次第に臭き事堪がたく、與はやく盡て東河原に捨置けるを、四條

寛濶平家物語卷五　終

寛濶平家物語卷六

㊀よし原の寢覺盃

それ世界のひろき事、むさし野の月を飮で、富士を枕にせざる人間の、夢にもしる事あたはざるこそ淺ましけれ、されば心の水の行にまかせ、二挺だてに棹をさし、金龍山のひかりやはらぎ、淺草川の底意いさぎよく、萌出る春の野等かうばしきに、駒形堂日本堤三谷の行來これや此、大門口の茶屋に腰かけて、觀念の眼をひらくに、見る物聞事、九重難波のしこなしと、更に同じ手れんにはあらず、此道の世之介も石州が太鼓女郎にふられ、初音に踏れたる首尾もありしむかしぞかし、重兵衛が作藏成敗がけにはるぐ〵まかりくだり、あたまから拜み倒に叱づらして、腹のうへにはひあがり、約束の命をながらへたればとて、生たる甲斐はなし、さればとてふられたるは、軍に出て首をとらずに歸るに同じ、色盛は關西の遊色に心にくき方なく、此たびはよし原を掌に入れんとて、分しり女安、こゝろきゝの是助、面黑の西雲、ねざめ虎若小八に申ふくめ、桐屋が方に碇をいれて、兼て小むらさきにさだめける、むかしより大かた人々の下心、大切なる金銀にかへて心ざしを見するからは、初會より自由にしこなさんとするを、さばかりにしなされてはしれたるながれのふしぐ〵も、しなくだりなるかたになぞらへられまじとて、戀をふくみてあひあふやうにしかけぬるを、世にはふらるゝといふなるべし、されども世うつり時變じにければ、人の心すなほならねば、あらぬすじに引かけて、たがひにさがなき名をたつ事も、出くるやうにはなれるなるべし、これ根本をとりうしなへるによれるとて、かのかづらき三夕、かほる身請の後、しづかなる住居を嵯峨にたのしめるとき、しやれ物語にかきとゞめし意氣かたには、此比の風俗はたがふらんとぞおぼゆる、さる程に色もり市左衛門方に入、まづ虎若に申付、貴なる物二三斗大づかみにして、揚屋中の男女はいふにおよばず、犬猫までのこらずうれしがらせければ、分よき都の大盡と色めき噪ぐ、末社五人をのぐ〵格子の君、女安は三浦の琴浦、是助は車屋の小太夫、西雲は巴屋の大橋、道才はきつかうやの玉かづら、小八は藤屋の小

圭水、其外誰でも女郎買たき貌つきして通る者あらば、五十人でも百人でも呼こんでなぐさめよ、揚錢は何萬兩でも此方にもち合せたりと、はつとしたる詞をはなつて、さらにゆめうつゝのさかひなき所へ、富澤町韋陀天の六兵衞、石町友八馳參る、女郎が又ふたり入るは、それづんで參れといへば、六兵衞四角四面なる顏にて、京都より急なる飛脚到來の御狀とさし出す、披き見るに、例の小松野滋左衞門方より、當二十七日御親父世之助さま三十三年忌なる事、よもや御失念はさふらふまじ、しかれ共けふ二十一日まで御歸りなき事心得がたく候ゆへ、三十四時を以て申達し候、色盛いろを變じ、これを忘れたといふては一分たちがたし、けふは二十三日なれば、道中四日に上京すればゆるりと墓參りする事なりと、せかぬ分にして、こゝにひとつ氣がゝりなるは、上方の格をもつて位をとり、あちからもてくるやうにやりそこなふて、けふ四日大夫にふられて居る事無念なり、こよひは下から出なをして、是非しほふする首尾の所、邪魔なる事を申こしたりとは、南無三寶親の年忌、六兵衞友八がおもふ所もあれば、おもひきりてこれより早舟に乘、それから早追じたてに、人をはしらせ、色盛は駕籠に綱つけて七八十人に引せ、末社六人草履とり七助は、から尻にたゝきたてられ、二十六日の晝京着に極めて、金銀は道中の砂の數ほど蒔ちらして翔出せば、旅人あやしみてこれは何事と問ば、親の年忌をわすれて、よし原にあそんで居られましたを、京より急に參り、それで俄にのぼりまするのでござると、此いそがしい中で七助めが、べん／＼とたわけをつくしける、

㊁涅槃床入の御影

一代男世之助は、天和の始神無月二十七日女護の島へ渡り、ふたゝび歸國なければ、かの出船の日を命日にとり、今年三十三年忌あいあたるにより、魚肉山女犯寺婬亂上人を導師に賴み奉り、二夜三日の別時念佛を始め、戒名は玉門大莖禪定門と申す、作善佛事の結構牌前莊嚴の供物、申すも中々おろかなり、末社中間より納め奉る源氏狹衣伊勢物語おの／＼千部、うらみの介薄雪あきれ草、すてんきうの草子、しのびぐさ、こらゑ袋、にしき木、しなの梅、青梅、やりくり草、うるほひ草、旅まくら、好色一切經藏を建立あり、本

尊は歡喜天、脇立に業平源の至、ちぬ男、賴風、これを四菩薩になぞらへたり、幢天蓋は上林の高橋がうちつけ書の白輪子の寢卷、初音が帶、野分が合せ湯具、打敷は夕霧がかさね蒲團、盛物には山の薯蕷、堀川牛房、雞卵、龍眼肉、燈明には蜴の油、二十七日齋非時の獻立、汁は鯲、さし味は鯉鮒、引て鱣の樺燒、二の汁に泥龜、肴は鮒鰑、二十六日逮夜の說法あり、上人高座にあがり敬白の磬うちならし、捧奉る諷誦の文の事、それつら〳〵三界流轉の源をかんがふるに、男女婬樂の一滴かたまりて、六根あらはれ、母の不淨門這出しよりこのかた、眼に美景をみては戀慕の心ざしを起し、耳に一ふしを聞ては愛執のおもひを生じ、身には膓もちの雪の肌にふれては露命消んとす、鼻には袖のうつり香に心をときめかし、口にはつけざしのおさかづきをいたゞきて、無明の酒ながくさめがたし、或時は露霜にしほたれて所さだめずまどひありき、近所の譏をはゞかり、おやの勘當心もとなく、死一倍の鐘の聲は、朝ゆふべにひゞけども、傾國煩惱のねぶりいまださめず、あるひは野郎飛子のちまたにうかれ、紅閨に酒を流し、白人骨を碎くといへ共、宿の首尾を忘れてきぬ〴〵の別れををしみ、輕安銷亭を住家として、家職常住の家に歸る事遲し、花奢は口を萎め、末社は手をひろげていさめすゝむれば、わたりに舟、得手に帆をあげて戀風に乘出し、弘誓の楫をとつて涅槃の岸にいたるおもひをなせり、あゝかなしいかな、六道四條河原の狂言綺語を見ては、十方無性の夢幻泡影にうかされて、戀慕愛執の媒とす、こゝに今とぶらふところの靈魂は、施主の爲には父なり、一代男世之助とて、七才の春よりめしづかひのこしもとをちよこり初、およそ女人の數三千七百四十二人、少人七百二十五人の枕をならべ、日本に心ののこる色なしとて、五十四才の冬今月廿七日、上品上開の女護の島に往生の素懷をとげおはんぬ、今宵三十三年の逮夜にあひあたるをもつて、一座の法莚をひらき、佛果菩提の如來肌と涅槃の床入して、喜悅感淚のよだれを流さん事なにのうたがひかあらん、よつて諷誦文如件、

今月今日　施主泰羅の色盛敬白

談儀は金色女經說おはり、回向の鉦うちならし、さておことはり申すは、此度玉門大莖禪定門の涅槃像出

來いたし、方丈にかけて拜ましまする、此圖は釋尊入滅の相をうつし、五十二類の衆生のかはりに、一代ちぎりこめたる女人を書ならべ、一蓮託生又は罪障懺悔の爲に、繪説を申付ました程に、あれへお通りあられてゆるりと聽聞なさるべしとて、上人は高座よりをり給ふ、角の入たる道心者、油ぎりぬる貌をおしなで、掛物竿をとりのべて、皆ちかよつて御緣をむすび給へ、眞中に頭北面西して入滅のおすがたをおがまれさせられしが、一代男世之助禪定門の御影でござる、すでに臨終と聞えしかば、もろ／＼の天女もちからを落し、何とぞ此たびの命をつなぎとめたいとおぼしめし、天上界より不老不死の腎藥の袋を抛おろし給へば、定業のしるしにや、此多摩羅鉢香といふ樹の枝にかゝりける、故に追々に右歸丸左歸丸地黄丸をなげさせられしが、皆此四本の梢にとゞまり終に往生を遂給ふ、去程に存命のうち肌をふれたるほどの女五十二類、名殘をおしみはせあつまりける、西のかたに並びたるは、島原の大夫天神引舟鹿戀、南の方には大坂の傾色、東の方に江戸よし原の女郎、伏見撞木町の君たち、奈良木辻鳴川、柴屋町堺の津守高洲袋町、西の方に室の遊君鞆宮島下の關長崎の大夫達、兵庫うづら野のなげしまだ、須磨の蜑乙女、出雲崎の遊女坂田の酌女、ありまの湯女、歌比丘尼、竈掃、奥州大宮のうかれ女、碓井峠追分の色女、佐野嘉祥寺、賀田の小歌孃、博多小女郎、宮津の糸繰女、深川の築地、目黑の茶や女、品川のれんとび、白山のころり藏、板橋の底たゝき、小倉の多太、御油赤坂泊り／＼の出女、敦賀今庄のよるの物、藤の棚のすへ物、小谷の坂東、髮きり、比丘尼落、似せ後家、養ひ娘、愛染前のつゞれ物、寺方のしかけ物、大黑の横ぎり、かこはれ物の下ぬき、出羽の籾引、札の辻のお針、浮世小路の浪人、柳小路の奉公人、金入のうしろ帶、御所被衣の鰯髱、問屋のはす葉、三條宿の胸紐賣、風呂屋の喚子鳥、稻荷前の狐、鎌倉河岸の夜鷹、川口のぬけ參り、元舟の楊枝うり、出かはり藪入部屋まはり、扇折、針賣、堀江の釣舗、梅田橋の泥龜、闇の夜の門違ひ、つれなし女、雨やどりのぬれじかけ、瞽女、巾着、お乳、菩薩まはし、六齋隙の腰もと、大名もどり、目見娘、銀又壹角銀三二朱白、近江河内のまわしもの、百に三人がゝり、伽やろ舟、扇屋の戀風、水茶屋仕かけ、北野、東山、道頓

堀、名代株茶屋、漉紙茶や、ノ野郎飛子、小姓若僧、兒子達、二歳男、石垣町鯉屋の小まん、木挽吉助が娘のおはつ、次郎吉がかゝ、白髮たる老婆、杖に二重の腰ものびず、これこそ小原雜喉寢のやみのかづき物なり、內股の豚をうかゞふは、下強醫者の馬庵なり、いづれも佛のわかれをおしめるごとく泣わめく聲、百千の雷のごとく、五十里四方へひゞき渡るといへども、人間は一雫の露のかたまり、元來これ消やすき身、隨分の强藏なれども、下根末代河のほとりにて長枕をしながら、獨寢はんの床に無性をしめさせ給ふなり、

㊂內藏の燈明あきらかなる告

四夢五夢ありといへども、虛實のふたつを出ず、されば色もり、大法事をとりおこなひし後、ある夜のうつつまぼろしのごとく、八才にて別れし父世之助、枕上にたゞずみ、此度の追善滿足斜ならず、只今樂變化天に生を轉ずるなり、そも〳〵我前身は異國におゐては玄宗皇帝と生れ、國家の政をたゞしく惠む所に、楊貴妃に腰をうちぬかれ、樂みいまだなかばならざるに、馬嵬が原のうき別れ、骨髓にしみわたり、幽王と生れし時は褒姒にうつゝをぬかし、生々世々戀慕の緤につながれしが、かの魂日本の地に來り、玉藻の前と現じたると聞及びしにより、我も又この地に生をうけたりといへども、那須野の原の殺生石となり、剩玄翁禪師のしめしにより、野狐の身を脫して淨土に生ず、我は餘執つきざる迷路の巷にうかれ、此家に生れ來るといへ共、なまなか前生三千人の女子共を每夜十人づゝかたづけし身なれば、五人三人は一日の色食に喰たらず、日本國の女をかたはしよりなでどりにせんとおもひ立しかども、粟散の小國なれば人の心もせばく、悋氣つよき世の中、あまり堪忍しがたく、女護の島へわたりをせしに、夜每に四五十人ばかり入かはりてさいなまれしかば、隨分のそれがしも、一年半に䖝に吸れし二十日鼠のごとく、腹のうへにて終に息絕たり、しかるに前生法華大般若を納めたりし功力により、大蘇天台山に魂とんで、延壽といふ草の露を吸ふとおもへばたちまち仙人の形となり、好色おもひ出すもおそろしく、清淨潔白の體にかはるといへども、先年美面鳥を飛せし事は、仙術のからくり細工の手始也、汝あまたの妻妾に溺れ、遊里に水を汲み干す事、土佛の水練するに同じ、此後は身を

つゝしみ、世間をはゞかり、奢をしりぞけ名聞利養に耽るべからず、人間鐵石にあらず、病の外に生死事大なり、珍膳も口にかなふに過ず、玉殿も膝を容るに過る事なし、夢中の榮花幻化の安樂、おそるべきは冥途の苦患、刹利も首陀もかはらざりけりと、いふかとおもへばあけぼのゝ雲と形は消て、雞啼鐘鳴、たばこ手水、朝めしはまだか、

寶永七庚寅年新板
八文字屋當左衞門

寛濶平家物語卷六終

吉原徒然草卷之一

一段　つれ〴〵なるまゝに

つれ〴〵なるまゝに日暮し硯に向ひ、心にうつりゆく好色のよし惡を、そこはかとなく書つくれば、おかしうこそ物ほしけれ、いでや此世に生れては、傾國に至てこそたのしみ多からめ、太夫の御位はいとも賢こし、松の位のすへ葉迄、好色の種ならんぞやん事なき、格子女郎の道中はさら也、さん茶もふたりかぶろなどつれて、茶屋へ出たるきぞゆゝしと見ゆ、其禿水あげまでは、なじみの客を待と侚まだるし、夫より端女郎はほどにつけてふうにあひ、しだるき目もとするを、みづからはいみじと思ふらめど、いと口おし、尾不斗里こそ浦山しからぬ物はあらじ、人には木の端のやうに思はるゝよと、西鶴が書る也、實さる事ぞかし、半かの惡じやれたるにつけて、いみじとは見へず、わけよき大臣の云けんやうに、つにてほてくろしきは、すいのおしへにたがふとこそ覺ゆる、錢なしのぞめき衆は中々はかゆき事のみ有なん、人はか

たち有様の勝れたらんこそ、あらまほしかるべき、頓作ぢぐちいひたるきゝにくからず、愛敬あつく悪口多からぬこそあかずかわゆらしけれ、膵成と見る人の、心おとりせらるゝ内證見へんこそ口おしかるべき、品かたぎこそ生れつきたらめ、心はなどかすいよりも通りものに、うつさばうつらざらん、形ち心ざま能人も、金なくなりぬれば品くだり、顔にくさげなる人にたちまじわりて、かならずはをぬかるゝこそ本意なきわざなれ、有たき事はかげ色の文、はやり言葉、しやの道、またやり手に口あかせぬこそいみじかるべけれ、上るりつたなからず、小歌など聲おかしくて拍子取、いたましうする物から、妻もたぬこそおのこはよけれ、

二段　いにしへの聖の御代の政をも忘れ

古しへの女郎のしこなしを忘れ、ぱつとしたるふう、仇名立らるゝをもしらず、やつこ也といはるゝをいみじと思ふさましたるよねこそ、思ふ所なく見ゆれ、いせうより櫛かうがいに至るまで、人にかはりたる有様もちいなど、異風をもとむることなけれとぞ、三代先の高尾の遺誡にも侍る、藤屋の伊左衛門が夕霧にいひけるにも、女郎は有べきかゝりなるをよしとすとこそ侍れ、

三段　萬にいみじくとも

萬づにうとくなりとも、色好まざらん男は、いとそうぞうしく、花のちりしほれたる心地ぞすべき、露霜にしほたれて、二挺大三挺をおさせ、人のそしりをつゝむに心のいとまなく、あふ度々に鼻毛のばし、するゑは勘當にあふこそおかしけれ、さりとてたんと金つかはで、女郎に色であはれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ、

四段　後の世の事心に忘れず

かさねての約束心に忘れず、かへる道足かろく、こゝろ面白し、

五段　不幸に愁にしづめる人の

妻におくれ、うれへにしづめる人の、かしらおろしなど、ふつゝかにおもひ入、獨寝の床に月を友とせる有様、哀深し、一代おとこのいひけんは、月十五日夜の月、物日仕舞て見ん事、さも覺へぬべし、

六段　我身のやん事なからんにも

遊びずきのおのこ、野郎に深く逢んにも、まして女郎

にこよなふまじらはらんにも、子といふものなくてありなん、大和尚世之助椀久も、皆子なからん事を願り、新造出さんにも、つら見世の世話せんにも、比立るむす子の思わく、氣の毒と思ふほどわろき事なしと、或古き物語にいへる、惡性なる親父を、息子の勘當したりしも有けるとかや、

七段　あだし野の露消る時なく

あさぢが原の露きゆる時なく、まつち山の煙立さらでのみ住はつる習ひならば、いかに色の面白からん、女郎はまゝならぬいみじけれ、うはきなるものを見るに、大形久しきはなし、かり金の利足をまち、元金のすたるをしらぬもあるぞかし、ふら／＼と一つ買する程だに、こよなふうれしきや、深きなじみも曲輪を出れば、月夜に釜ぬかれたる心地こそせめ、金くれぬ世に、見にくきたいこ持して何かはせん、金なければ恥多し、有とも四十にたらぬほどにて、燒とまらんこそめやすかるべき、其程過ぬれば立合つゞけも叶わず、心はむかしに替らで人に出まじはらん事を思ひ、ゆふべの日には地黄を愛して達者たらん事をこのみ、ひたすら好色の心のみ深く、ぢん水のたゆる事しらずなり行なんあさまし、

八段　世の人の心まどわす事色欲には然ず

世の人の心まどわす事傾國には然ず、やぼの心は愚なるもの哉、能おうなの尻目づかひ、小袖のすそ少しかへりて、はぎの白ききよらかに肥へ油づきたるは、必らず心ときめきするもの也、世之助が女房の赤きを見て鼻つまみけん、誠にしよく過ては左もあらんかし、

九段　女は髮のめでたからんこそ

女郎は顏の愛あらんこそ、人も思ひ付べけれ、全盛の程心ばへ杯は逢たるにこそしらるれ、ことにふれてちよと逢たる品にも、笑顏こそ人の心をまどわし、すべて女郎の打とけたる、うれし物おしとも思ひたらず、うそつくべくもあらぬさまこそ、よくかけこまるるぞかし、誠にあいぎやうありて、情ふかくうはきなくば、いき過成客だち多しといふとも皆はまりぬべし、其中にたゞ眞實にて逢てくるゝのひとりは、いかふ有難きのみぞ、老たるも若きも、智あるも愚なるも、揚錢はかはる所なしと見ゆれ、さればとて色の座にて出合し人は、恐しき屋形衆ともしたしくなりに

ける、ゆくにもおさな子の小袖なん縫ひて着すれば、かならず子育てありとぞいひ傳へ侍る、道すがらいさみておもしろく、先いそぐは此さと也、

十段　家居のつき〴〵しく

さん茶も座敷つき〴〵しくあらまほしきこそ、ひと一夜のやどりとは思へど、座敷持のせんなれ、能よねののどやかに住なしたる所は、物干へさし入たる月の色も、ひときはしみ〴〵と見ゆるぞかし、いまめかしくきらゝかならねど、木だち物ふりてわざとならぬ石臺もあり、床の懸繪も心有様に、茶瓶などいとおかしく、うち調度のうちにも、琴など心にくしと見ゆれ、多くの客よりも心をつくして送りける品々、得ならぬ調度ども、ならべおく草雙紙双六盤迄、心のままならずおけるは、見る目もくるしくいとわびし、扨もや住はつべき、年うつれば又時の間に人の座敷共成なんとぞ、打見るより思わるゝ、大かたは物ずきにこそ其さまはおしはからるれ、

十一段　後徳大寺のおとゞの寢殿に

三浦の石珠、ことやうなるきせるをいかめしき袋に入て、禿のこしにさゝせ道中し給ふを、歌吹坊が見て、揚屋のきせる何かはくるしかるべき、此君の御心さばかりにこそとて、其後は其座へ出ざりけると聞侍るに、又外の揚屋にて江口に出合けるに、是もきせるもたれしかば、彼ためし思ひ出られ侍しに、誠や揚屋のきせるは人のむざとのめばひたと詰りて、客達の參るごとにかぶろの度々通しけるを御覽じて、悲しませ給ひてなんと人の語りしこそ、扨はいみじくこそかく覺へしか、さきの女郎衆もいかなる故か侍りけん、

十二段　神無月の頃栗栖野といふ所を

神無月の頃、田舍へ尋行事はべりしに、はるかなる苔の細道をふみわけて、心細く住なしたる庵に鼓打人あり、いなかにも師のあれば成べしと、垣よりさしのぞきて見るに、ひたひに角入たる美少年也、斯てもあられけるよと、あはれに一とふしかなでたきほどに思ひて見る程に、顏おかしげなる女のありて、愛したはぶれたるにこそ、少し事さめて、此女なからましかばと覺へしか、

十三段　おなじ心ならん人としめやかに

同じ心ならん客としめやかに物語して、おかしき事

も世のはかなき事も、うらなくいひ慰めん事も、うれしかるべきに、したるくいやらしき男の來り、もし居つゞけとやいはんかと思ふに、つゆたがわず、向ひてやかなしき身あかりのひとつある心地やせん、夫もまゝならんか、互にいふ程の事おかしげに成なん、男の心にはかくてもあふかいある物から、床の内はいさゝかたがふ所もあらんかし、やぼのくせとて人には左もあらん、我はさやおもふなど、あらそひにくみ、人來りなばさぞとも打語らいて、此うさ慰ん抔思へば、氣には少し思ひなおしつ、我と等しからざらん人には、大かたのよしなし事いはん程こそあらめ、まめやかの心の樂みには、遙かに隔たる所のありぬべきぞ、うれしさも又悲し、

十四段　ひとり燈の下に文をひろげて

ひとり燈火のもとに好色の文をひろげて、見ぬ人の色をすいしたるこそ、こよなふ慰むわざなれ、文は傾城武道櫻のあはれなる卷々、文ほうご、西鶴がことは一代女、此地の浪人衆のかけるも、古しへのはあはれなる事多かり、

十五段　和歌こそなをおかしき物なれ

小歌こそ實色めかしき物なれ、おやぢの實めきしも一ふし書出ればおかしく、おそろしき奴も又寐の床とうたへばやさしくなりぬ、賤の女の臼引歌は、ひときはおかしく笑ひもあへず、さはいへどをみなの一節は、生男のやうには覺へず、比丘尼の歌いかにぞや、片言ばかりにてせゝか覺ゆるはなし、小夜之助が歌は、したるふして、野良の中の歌くずとかやいひ傳へたれど、今のよのよねだちの歌きゝては、女郎にありぬべき一ふしとは見へず、其世の歌がらは皆此類ひのみ也、小夜之助に限りて、かくいひたてられたるもしりがたし、萬太夫になりては歌の風直しけるとぞ、出し玉川はよほど唄ひける、誠に少し心に入たる座敷にては、しめやかなる一ふしも出けり、されば玉川が歌は出し跡にても宜敷よし、いまもさだありて、貳朱判吉兵衞も殊更にかんじ申けるよし、長門が身ひいきにかいへり、はやり歌古へにかはらぬなんどいふ人もあれどいざや、今の歌ども、久太郎町みなげの松と、昔しの人の唄のおもかげはさらになし、同じ物はあらず、むかしの歌はやすくすなほにして、姿もしほらしく哀れも深く聞ゆ、かやつり草などの朝潮

が歌こそ、又あはれ成事はおほかんめれ、昔し人は又唄ひ捨たる一ふしも、皆せうありて聞こゆ、

十六段　いづくにもあれ暫し旅立たるこそ

いづくにもあれ、旅にて連にはぐれたるこそ悲しき心地すれ、其渡り爰かしこ見んにも、問かたらんわざもなし、山中などはいと心ぼそき事のみぞ多かんめる、兎角して追附求めぬるいと嬉し、其事かの事など云なぐさむる、いと興あり、關所の手形ありやなどいひやるこそいみじけれ、出女の有し宿もとめて泊りける、いとおかし、左様の所にてこそ必らず路銭のむだづかひせらるれ、しけるふとん斗にて夜着はなし、鼻聲の女はさら也、形よき女も江戸よりはおかしとこそ見ゆれ、獨旅人の寺社などの軒に忍びて、夜を明したるもおかし、

十七段　神樂こそなまめかしく

かぐらこそさはがしくおもしろけれ、三十に足らぬ乙女子の舞の袖には、信心なき人も必らず十二銅もなげぬべし、

十八段　やま寺にかきこもりて

砂利場のほとりに引込りて、折々かの里へまからんにこそ、心もすゞしくたのしむ心地すれ、

十九段　人はおのれをつゞまやかにし

傾城は其身をばつとせずして、うは氣をしりぞけ、始末の心を持す町の者にあはんぞいみじかるべき、むかしよりおろか成女郎の繁昌しけるは稀也、大坂に高間といへる太夫は、更に物たくはへる心なくて、繁昌は又似たる人もなし、或時古近江が打たる三味糸の、いと美しかりけるを人よりもらひけるを、むつびたるかこひ女郎の望みければ、ついやりつ、いか斗心の内勝れたりけん、越後高尾は道中の度毎に、着たる小袖を茶やの娘揚屋のかゝにやりける、人も是をいみじと思へばこそ、語りとゞめて世に傳へけめ、是等の女郎はなにしに語りもつたふべき、

二十段　折節の移り變るこそ物毎に哀れなれ

折ふしのうつりかはるこそ、物毎に哀れなれ、吉原の淋しきは、月より末なれと多くはいへど、又さにもあらず、人のけしきだつは、初午にこそあんめれ、正月の紋日紋日もことぐ〳〵過て、どこやら人あしもさびしきやうに、賣物の箱を溝ばたにおろし、見世者にへらつくものびく〳〵と隙らしきに、井戸がわのこけ

青々とする比より、やゝ白魚もぼていの手にわたり、よねもやう／＼門立するほどこそあれ、おりしもの死の煙りも見付ぬ人は、あわたゞしく宿に歸りぬ、草りのげじ／＼に成たる迄、四つ谷へ一かけに三里の灸をのみぞなやます、扨紙花わすれたるけしきの顔つきこそ多けれ、みのなき大臣こそいかめしくいふ斗にて、けちらしく思ひやらるゝ、山吹色のきしむは、ふところの覺束なきやうに見ゆる、すべてふせう成事おほし、かぶろの比新造の頃、わき明の袂すゝしげに、名代に行などこそ、まゝ親の恨も國里の戀しさもまされと、姉さま達の被レ仰しこそ實さる事なれ、五月夜更る頃やう／＼床は比、船宿が門たゝくなど心せかるゝは、水無月の比土手のたゝみ家かげに晝がほの我まゝに咲て、蚊やり火の跡哀なれ、六月朔日正月に附又おかし、七夕に白かたびらの客こそなまめかしけれ、やう／＼に禮を仕廻てあたふたと來る比、挾箱もかへさず色つくろいて、わざ／＼共せぬなど、取あつめたるひきずりもおかしけれ、云つゞくれば、一代男二代男の口まねなどは似たれど、同じ事知たどうしは今更いはずともしれたる事なれど、いはぬがまた腹ふくるゝわざなれ、筆にまかせつゝ、しどもなく書ちらして、あとはきせるのさうじに成ば、人の異見いましめになるにもあらず、扨冬がれのおかしき事、秋にはおさ／＼おとるまじけれ、五つ過より鉢開き餘多かけこみ、中の町に鰒の市立こそおかしけれ、年の暮果て、家毎に寒ひきする頃ぞ、またなくあはれにひもじそふな聲にて、聞人もなきすがゝきに手もこゞへ、正月の約束のなきこそ心ぼそき物はなし、呉服屋よりのたん物ども取よせ、見るまやん事なき、仕出しの模様縞共多く、春の爲にとり重ねて仕立らるゝやふいみじきや、煠はきよりこと／＼にとうをつくなど面白けれ、晦日の夜はいたふ闇きに、てうちん燈して局臺所にあがつて、何程のかけわがあぐ覽、てつこみぢんにいひ合ても、首をとりてもゆかれず、鳥に笑い出されてかけ取なく成ぬるこそ、氣もわつさりと心ひろけれ、家ごとに庭火たきて餅蛤燒など、此比江戸にはなき事を、吉原の內にはなをする事にしてありしこそ賑やか成しか、かくて明ゆき、大門よりのけしきしらぬ國とは見へねど、茶や／＼には數の子の音天地にひゞき、水道の尻迄松立わたし

て、やりてが入歯してつや〳〵したるも又哀れなれ、

廿一段　何がしとかやいひし世捨人の何がしとかや云しわけしりの、とこ夏とはいへど揚や町は、正月の名残のみぞおしきといひしこそ、誠にさも覺へぬべけれ、

廿二段

夜鷹の能は月夜に出る物なれ、或人の月夜斗よだかんど、あらそひしこそおかしけれ、折にふれば何かはの悲敷事はあらじといひしに、闇こそあはれなれな哀れならざらん、月闇さら也、凧のみぞ哀さはまされり、辻番の影にたゞずめば呵りてたゝせず、橋のうへにやすらへば番人時をもわかず廻り、夜のふしどにおさなごの母や尋ねてさぞやなくらん不便やと、信の田づまの上るりを思ひ出せしも又哀れなりし、化粧はねづみかべをあらそひて、てうちんを見れば心悲しく店下へ隱れ、人遠く行ばまた出て、所々にまどひありきたる斗、心のかなしき此外はあらじ、

廿三段　何事もふるき世のみぞしたはしき吉原も過し夜のみぞしたはしき、女郎も無下にはりもなく成行めれ、二丁目江戸町角町なんども、見世にての姿こそおかしきと見ゆれ、文の言葉などぞむかしの事のみぞいみじき、たゞいふ言葉も、口おしうこそ成ちて行なれ、いにしへは禿つよふしかりし事もなかりしに、今様の人はうぬめがきめがなど云、いさかいをもけんくわのありてといふべきを、けんかがあつてさなどゝいひ、螢といふをほたろといひ、馴なき客にも、はや茶屋迄送りけるは口おしとぞ、ふるき客衆は仰せられし、

廿四段　おとろへたる末の世とはいへどおとへたる傾國のさまとはいへども、なを揚屋町のしめやかなる有樣こそ、よろづにこのもしきわけなれ、さん茶の座敷には、ありなましき築山うへ木などの青葉なるさま、わきておもしろけれ、用事かなへんに障子明れば、ついそこなるなどいみじけれ、夜歸りにてうちんにておくるなんど又めでたし、ひやゝかなる時し、座敷へなべて火鉢出すさまはさら也、供の下人共のさばかり顏に食くふもおかし、かぶろ共もさばかり寒き夜もすがら、爰かしこに眠り居たるこそかわゆけれ、内義の腰のかきはめでたくゆふなる物成とぞ、よね達は仰られ侍る、

廿五段　齋宮の野の宮におわします有樣こそ

女郎達の茶やにおわします有樣こそ、外より見てもこのもしくおもしろき、二階にて猫ゑらべなどいとやさしう覺へしか、すだれなかばあがりたるに、紅のすそのちら〳〵とかい見ゆる、捨がたくてなまめかしき物なれや、物まね大神樂、かどの立とまりたるに、禿どもそう〳〵敷かけ出たるさまいとおかし、ごふくもの染ものなど見世にて取ちらし、茶やかゝ打まじりて見給へる、興さめて見ゆ、道中の景色は三浦こそたゞならぬに、禿二人つれたるいみじからぬかは、ことにはなやかなるは唐崎江口高尾石珠花むらさき、

廿六段　飛鳥川の淵瀬常ならぬ世に

淺草川のながれ常ならぬ世にしあれば、時うつり初みし松のもとも、燈爐つる頃になり、さかんなりし君達もすがるゝぞうきなんど、もし物いはねば誰と共にかむかし語らん、まして見ぬいにしへの口事なかりけん時ぞいと戀しき、桔梗やふぢやなどの跡見るこそ、心ざしとゞまり事變じにけり、花鳥たま川なん、右ての大かざり、揚屋町のかためにして、新造のせめてみそ立までとおぼしおきし時、つい跡先に里を出けり、いかならん世にかばかり流果んとおぼしてんや、小紫など近くまでありしかど、若狹やの客つれてゆきぬ、其後高尾何としたりけるやらんさたもなし、花紫斗ぞ其形見へてのこりける、二人禿ぞかし、采女小長門、誰取たつる客もなし、石珠暫らくはんせうしけるが、すがれけるぞ哀なる、常盤などいまだ侍るめり、是も又いつ迄かあらん、かばかりのよねだに、久しければおのづからさたもあれど、又さだかにしれる人もなし、さればよろづに見ざらん世迄を、思ひおきてんこそはかなけれ、

廿七段　風も吹あへずうつろふ人の心の

夜も揚やより歸らず、すぐに又揚屋へ行なんど、いみじき繁昌ぞかし、又殘りし年月を思へば哀成し、なをも日毎の道中はかゝさず、身あがりの苦しさはわすられぬ物から、爲に成客の切そうになるは、なき人のわかれよりまさりて悲しき物なれ、されば新見世へやられん事を悲しみ、内の部やを別れん事をなげく人もありなんかし、いづれやらん百首の歌の中に、

むかし見し妹がかき根はあれにけり

つばなまじりのすみれのみして
さびしき景氣いまにて侍りけん、

廿八段　御國ゆづりの節會おこなわれて

六日年越の節祝てより、門松しめかざりとらるゝ程こそ、限りなう殘り多けれ、梅も咲櫻の花も散るこそ春の名殘なれ、

とのもりのともの宮つこよそにして
はらはぬ庭に花ぞ散しく

卯の花軒々にさし、時鳥の聲きく比は、こよなふ夜のみじかけれ、ふぢ江は薄雲のおりし跡なれや、よもぎせうぶのうしろまへになれば、何となくさびしげなる、かゝる折にこそ人心もあらわれぬべき、

廿九段　諒闇の年ばかり哀なる事はあらじ

鳴物の法度に、さん茶ほど淋しき事はあらじ、見世にて新造どものうぶしもやみ、二丁目あたりにすがゝきたへ、よね達もねむそうなる顔つき、見世の人迄閑なるさま淺まし、

三十段　しづかにおもへば萬づに

しづかにをもへば、萬づに過にし事の惜しきのみぞ詮方なき、つかひ過しての後、永き世のすさびに、ふるきほうごなどかいやり捨る中に、口舌の文見出したるこそ、たゞ其折の心地すれ、此比有物は揚やの書出し也、いかなるおりやらむ、いつの年ならんと思ふは哀なるぞかし、手なれし頭巾よ、これ果替らず久しきいとかなし、

卅一段　人のなき跡斗り悲しきはなし

女郎の身請せしほど、うれしく又悲しき物はなし、揚や廣しと云共、便りあしければ、夜着部屋格子の間にかり寢して、少しの名殘りをおしむに、うたてくも禿のあはたゞしく、もし〳〵の聲と共に終友なへり、次の日は情なふも互に云送る事もなく、其客の我かしこげなる顔して、迎の乘物に乘、見送り人とよそほいぞよめき行わかれぬ、やう〳〵涙を袖にふくませ、おのがすみ家に歸りても、更に悲しみはとゞまらず、しか〳〵のよしにておくりしを見れば、殘多と泪こと葉をつがねしともなきりんきすへば、御縁もあらばと書とどめし文と、我方より送りし文の、枕ひとつにぞとゞまりぬ、ふり捨られし心根、なをもうたてしと覺ゆれど、年月いひかわせし事共をたよりに、其時は露わすれしとにはあらず、さる者日々に疎く成は、

いふまじきむつ事、何やらのよしあしまでも云て、笑ふも世の中ならんか、女郎の實僞は、その客の其女郎の心に在ぞかし、さはいへどそれのみにも限らず、大かたは僞りの勤としるべし、又かわゆき男は、すいきやうにもよらず、少しのはり合より成行もあり、やり手親方の目を忍び、花をかざる身のくづおるゝもしらぬほどの事、いづれ女郎にも一二度づゝは有物也、その折から行合し人こそ、誠ありと有難ふも見ゆべけれ、これ思ひ出て、曾我殿の御中こそ、尊ふとくも哀とや思ふ、是につけてかぶろの何心なく、町の子供と色遊びするも、心あらん人は哀と見るべき、とやかふ思ふ人も、器量じまんせし女郎も、果は隱居ぢいばばと呼れ、淋しき折の伽にせし文どもゝ、いつしか屛風の下張となりぬるぞ悲しき、

卅二段　雪のおもしろふ降りし朝た雪のおもしろう降りたりしあした、人は居つゞけとてさはぐに、土手を歸とて供したるおとこの、雪の事何ともいはざりけり、此雪いかゞ見るといへど、寒さに何ときゝいるべき、口をしき心也、茶碗酒もはやさめしかと、いひたりしこそおかしかりしか、今はほどへぬれど、かばかりの事も忘れ難し、

卅三段　九月廿日の比或人にさそはれ奉り九月半頃、或人にさそはれ奉りて、おかしきかたの月見し事侍りし、綿つみとかやの居ける所あり、案内させ入給ひぬ、あれたる二階のさまおかしげなるに、いやらしき匂ひしたるう打かほりて、忍びたる座附いと物哀也、よきほどにて出給ひぬべきを、床の内見まほしく覺て、屛風など引てより、しばし休らい居たるに、窓の月見る斗也、すぐに帶ときなば口おしからまし、また來ぬ人といかでかしらん、かばかりの遊び者さへ膳にはすはりたる斗也、其志しやさしくこそ覺へ侍りし、

卅四段　今の內裏作り出されて三浦の金山は、十五の初午より出せり、茶屋にて人々の見られけるに、いづくも難なし、美しとの取さた成しが、同じ年の後の月見に、袖留めにけるぞいみじかりけり、是はわか松が禿のまつ彌成しが、太夫に成けるこそめでたけれ、

卅五段　甲の面はほら貝の樣なるが小さくてしほといへる魚は、わらさに似てあざなし、武藏の國

吉原といふ里にして、いつも出し侍るとぞいひし、

卅六段　手のわろき人のはゞからず

つにてやぼの有體成はよし、しこなして口聞たるはうるさし、

卅七段　久しくおとづれぬ比いかばかり

久しく打絶し揚屋の、いかばかり噂せんと我ながら思ひぬれど、屋敷衆にいざなわれて心ならず行しかど、言葉なき心地するに、しめやかに打物語りなんどせしうれしさ、つれぬ女郎の方より、禿など言傳ていひおこせたるこそ有がたく嬉しけれ、斯心遣ひせしよねぞ繁昌しけると、茶や中侍し、さも有べき事也、

卅八段　朝夕隔てなく馴たる人の

朝夕おりめ高く、なれたる屋敷衆の色の一座にてそそらず、疊ざわりやさしう見ゆるこそいみじ、道すがら深あみ笠、こし卷、羽織など異風也といふ人も有ぬべけれど、なをげに〳〵敷よき姿かなとぞ覺ゆる、町奴の武士のまねしたる、又うしと思ひぬべし、

卅九段　名利につかわれて

名利につかわれて、心をたのしめる暇なくて、一生を苦しむるこそ愚かなれ、手かけ多ければばりん氣に隙なし、せわをかひ腎きよのなかだち也、水へりて瀉は地黄をのみ、太補湯をあふるといふ共せんなく、人の爲にかへへをくなるべし、おふちやくなるむす子手代を、よろこばしむるたのしみ又あじきなし、大き成暮らし、公義ばりたる人、身代を飾るを、心あらん人はうたてくやとぞ見るべき、貸し金せんは晦日々々に苦をもとめ、家やしき澤山に持んこと、辻風にも心を苦しむ、高利にまどふは勝れてをろかなる人也、無欲成名を、永き世に殘さんこそあらまほしかるべけれ、太夫格子なればとて、勝れたる斗はなし、おろかにつたなき女も、よき家にかわるれば高き位にのぼり、全盛をきわむもあり、いみじう美しかりし女も、かし傾城ばかり持たるくるわへうらるれば、みづからいやしき勤めして、時にあわずしてやみぬる又多し、偏に太夫格子をこのむも、次におろか也、心ざしといきばりにてこそ、人にしたわれんほまれものこさまほしきを、つら〳〵思へば、全盛の女郎に逢けるおのこは、人の夢を悦ぶ也、せける人、せかるゝ人、共に世にとゞまらず、遊女に深く契らん人、又々速かに切べし、誰をかはぢ、誰にかしられん事を願はん、ひ

とり客になりなん事、又そしりのもと也、切れての後の名殘て更に益なし、金つかふも次に愚か也、たゞしひてしやれをもとめ、とをり者にならんと願ふ人の爲にいはゞ、てれん斗にては僞り也、歌三味線はめん〳〵の備はる所也、傳へ聞まなびて知るは、誠の通り者にあらず、いかなるをか通り者とかいはん、可不可は一條也、いかなるをかわけしりといふ、誠の通り者はてれんもなく、しやれもなし、かげもなく、なじみもなし、誰かしり誰か傳へん、是しくはして金かはらにはあらず、もとよりどんちひんぶく、下戸上戸のたとへに同じ事也、まよひの心を以て名利の要をもとむるにかくのごとし、ゆく者は皆やぼ也、いかぬこそ通り者也、いふにたらず願ふに足らず、

四十段　或人法然上人に

或人すいなる人に、よし原にて酒におかされて、酔さむらふ事、いかゞしてさめ侍らんと申ければ、よわぬほどのみ給へと答られけり、いとたふとかりけり、又女郎は實とおもへばまこと、不實と思へば不實也といはれけり、これも尊し、又疑ひながらもたのもしければ、誠あり共いはれけり、又尊し、

四十一段　因幡國に何の入道とかや云者の娘武藏國に、かんはり入道とかやいふものゝむすこ、美男のほまれ有て、女あまた云わたりけれ共、此間若衆をのみ喰ひて、更によねの類ひをくはざりければ、かかる事かきたるもの、俗に有べからずとて親出家をさせける、

四十二段　五月五日加茂の競べ馬を見侍しに霜月朔日、顔見せを見物し侍りしに、舞臺の前に半疊うり立、へだても見へざりしかば、皆立て切をとしのきわに寄たれど、ことに見物多く入込で、わけ入ぬべきやうもなし、かゝる折に棧敷なる三階に、後家らしき女のらんかんにこしかけて、口開ながら酔て落ぬべき時、はしらに取つく事度々也、是を見る人あざけりあざみて、世のしれもの哉、斯人多き所にて酒によひ、とりみだしたるおふちやくさよといふに、我心にふと思ひしまゝに、我等も死をふみしが、ゑひたる時はあのごとならん、夫をしらで酒をふみし事よ、今よりして思ひとまるべしといひければ、前なる人ども、誠にさにこそ候つれ、尤をろかに候とて、みなうしろを見返りて、爰へいらせ給へとて所をさりて呼入侍

りにき、かほどの事わり誰かは思ひよらざらん、なれ共折からの思ひがけぬ心地して、胸にあたりけるにや、人木石にあらねば、時にとつて物に感ずる事なきにあらず、

四十三段　唐橋中將といふ人の子に

伏見町玉屋に、大隅とてよき女郎ありけり、人の思ひ有て煩らはしく臥たりけるに、大きなる蛙來りて、枕もとにつきそひければ、人々取捨けれど、なを跡より來て大すみがそばをはなれねば、藥も思らず、やせおとろへたるが、たゞおそろしううはごと云て、目を見だし、顏にあせしてくるしみける、後には坊主の一念かぶろに附、戀のうらみを口ばしりけり、斯てなを煩らはしく成て死にけり、かゝる病もある事にこそ、

四十四段　春の暮つかたのどやかに

ふかくむつびたる女郎の、しとやかに恨みつる、美しき顏のうすもみじして、いとふも腹たてず、打しほれたるさまあしからぬかは、物いひすこし打ふるひて悲しげなるに、うしろむきてつゝくりとしたる又うれし、ふすまのすき間より隣を見れば、かたち見よげなる男の、年三十あまりなる、ぐちなるさま見にく、したゝるきさましてよねのひざによりかゝりて顏見居たり、いかなる客也けん、たづねきかまほし、

四十五段　あやしの竹のあみ戸の內より

あやしの豆腐屋の裏より、いとわかき尼の弟子ならんか、其譯さだかならねど、ちいさき尼に、おかしげなる箱かゝへさせて出けり、つやゝかなる木綿の袷打かさねて、黑きはゞせばき帶なんどして、管笠ふたり共にきし、其すがた又一風有しさま也し、いとふしぎに覺へしまゝ、跡につきたる尼に問けるに、しかじかとも得いはざりし、其後人に尋ねしかば、それなんびくにといへる色にて、むかしは小者やつこなどの遊び物也し、今やうは人によりて、客ぎらひもすなると語れり、いづみ丁八くわん町など宿在て日毎に行也し、わけて桶町たゝみ丁へ行を上品とすといへり、見まほしく覺へて、知れる人もとめてしたひ行し、ほそき路次を過るに、其匂ひゑならず、吹すびたる風にしたがへり、さ迄來るべき人もあらじと思ふに、したしく見ゆる人多くして、物語などしける、我も若きかゝの有內に入ぬ、友なひし人も入たる、二階に見ゆる雜具の、常よりはおかしく、見しれる下人な

どの入まどふに、ひとしほ悲き心ぞする、法師共あがりたり、酒ごとなどそう〴〵して、仕廻てはやふとん敷せり、窓よりさそはれ來る風に、坊主臭き匂ひ身にしむ心地ぞする、頭巾に針させるは鉢卷にて留ける也とぞ、宿の女房の吸物の用意など、人なき裏店なれども心遣ひしたり、心のまゝにしたればとて、暮迄はさら也、しばしもおくれんか、酒屋の御用とやらんかしましくあるきわたり、たいこ〳〵の聲さわがしく、色のさめて覺へより、胸のあしき心地してはやくにげ歸る事、あしも定めがたし、

四十六段　公世の二位のせうとに

嫁しうとめは中のあしき物にや、息子夫婦合のよきを、しうとめ惡みてよめを惡む事はなはだし、金銀多く持たれど子にゆづらざれば、人々ねぢかねばゞとぞいひける、常にやきもちずきなれば、しよがひばゞ共いひけり、其後孫出來けるが、ほどなく孫死ければ、孫くひのばゞとぞいひける、

四十七段　柳原の邊に強盜法印と號する

よし原の内に、是はならぬせうてつ坊と號する針醫有けり、常にくせにて、是はならぬ〳〵といひけるゆへに、此名をつけられけるとぞ、

四十八段　或人清水へ參りけるに

或時中の町を通りけるに、さん茶女郎禿をつれたりけるが、道すがらこと〴〵しくしかりもて行ければ、つれ立たる女郎、何事をか斯は呵り給ふぞと、ひけれども、いらへもせず、なをいひやまざりけるを、度度とわれてうち腹立て、助樣晝より御こし侍し、さつきを見ていらへもせず、何方へか御越侍しと申せば、只今もやもどり給はんかと思へば、爰に待とらやうと云けり、おもしろきわけなんけんかし、

四十九段　光親卿院の最勝講奉行して

或大名の兒小姓御持にて侍らひけるが、奥方へ召れて御前にありしあゆのすしを下されて、食せられけり、尾首共に喰ひて酒のみ罷出にけり、女房だちあらさもしの若衆の參りやうやと申合れけれ、武士の振舞やん事なき事也と、返す〴〵感せさせ給ひけるとぞ、

五十段　老來りて始て道を行せんと

すがれかゝりて、初めてつい禿つれんと思ひたつ事なかれ、ふるき備金、多くは是うはきの人也、はから

ざるに悪しきさたをうけてより、忽ちに客はら〳〵と切んとする時にこそ、過るかたのあやまれる事はしらるれ、客のきるゝといふは、他の事にあらず、速にもらふ場をもらはず、ぬすんで逢ふべき時を、なりあひにして過にし事のくやしき也、其時くゆともかひあらんや、よねはたゞ正月より煤迄の、身にせまりぬる事を心にひしとかけて、つかのまも忘れまじき也、さらばなどか物日々々の苦勞うすく、つとむる心もまめやかにならざらん、むかし有ける女郎、旦那寺より人來りて奉加の事をいふ時、答へていはく、今盆を身あがりにせし折ふしにて、既に小遣につまれりとて、奉加につかざりけるとぞ、上林十兵衞が申侍りし、二丁目のしのぶといひける女郎は、餘りに節句より節句の近き事を思ひて、假初の物日ならんとは、約束せる事だになくて、常は見世にうづくまりてのみぞありける、

吉原徒然草卷之一　終

吉原徒然草卷之貳

五十一段　應長の頃伊勢の國より

寶永の頃、房州浦より十六七斗なる美しき女と、同じ年頃なる貌よき若衆と、うつぼ舟にのせ、深川の邊へ吹付られしといふ事在て、其比二十日斗り、日毎に江戸中の人彼うつぼ船見にとて出まどふ、昨日は永代橋へあがりたりし、けふは八幡に參るべし、只今はそこ〳〵など云あへり、まさしく見たりといふ人もなく、空言といふ人もなし、上下只うつぼ舟の事のみ云やまず、其頃上野より回向院の邊へまかり侍しに、神田よりかみ様の人、皆北をさして走りける、淺草川にうつぼぶねありとのゝじりあへり、兩國橋の邊より見やれば、見附の御番所のあたり立込たり、やはりあとなき事はあらざめりとて、人をやりて見するに、大形見たるものなし、暮る迄斯立さわぎ、果はどろぼう巾着切有て、あさましき事共有けり、其頃おしなべて二三日人の咳氣煩ふ事侍しをぞ、彼若衆女を見たがりける戀風也といふ人も侍りし、

五十二段　龜やま殿の御池に大井川の水を與大名の兒小姓に、顔かたちいみじくしてちゞみ髪有、國者に仰て髮ばかりいはせられけり、多くの油をついやし、一日なでゝもちゞみたる髮のびず、色々思案してなで廻しけれども終に延ず、いたづらに詠られける、ちゞみたる髮ものびて、つとながく前髮立てめでたかりけり、萬づに其道をしれるものはやん事なき物也、

五十三段　仁和寺にある法師

赤坂にあるおやぢ、年寄までよし原を見ざりければ、心うく覺へてある時思ひ立て、朝とく獨かちにていにけり、朝にて在しまゝ、まださんちやに見世も出ず、道中もなし、西がしさかい町など見めぐりて、かばかりと心得て歸りにけり、扨かたへの人にあいて、年頃思ひつる事果しはべりぬ、聞しに過て淋しくこそおわしけれ、そもはつち坊主の多くかけ込しは、何事か在けんとぞいふける、少しの事にも案内しやはあらまほしき事也、

五十四段　是も仁和寺の法師

是も赤坂の屋敷方より、傍輩の國に歸らんとする名殘とて、四五人新宿の茶やに行、各遊ぶ事在けるに、醉て輿に入餘り、傍なる砂鉢に沙魚の羮たるを肴に出したりけるに、頭より一口喰に、彼はせをひた／＼喰ひけり、酌を取し女共をはじめ、滿座興にいる事限りなし、しばし喰ひける内に、獨のをとこ五六寸も有ける沙魚を一口に喰ひけるに、針ありけるを咽にたてゝぎく／＼として物をもいわれず、酒宴事さめていかゞはせんとまどひけり、とかくすれば咽の内つまりて血なんどたり、只はれにはれみちて、息もつまりける、口よりかの針の糸少し出ける、引ぬかんずれどたやすくぬけず、響きて絕がたかりければ、叶わですべきやうなく、帷子打かけて三人して手をひきかかへて杖をつかせて、京よりくすしのがり居ければ、行ける道すがら人のあやしみ見る事限りなし、くすしのもとにさし入て、向ひ居たりけん有樣さこそをかしかりけん、かりそめの物をいふもくゝもりて、とくと得聞へず、かゝる事は文にも見へず、傳へたるおしへもなしといへば、又赤坂へ歸て、したしき者老たる母など枕がみにより居てなき悲しめ共、答へんとも覺へず、かゝるほどに或者のいふやう、數珠玉をと

きて、口より出たる糸につなぎ引給へ、痛ずぬけなんとおしへけるまゝ、斯してじゆず玉に合せ引しやくりければ、やがてぬけにける、からき命まふけて久しくやみ居たりけり、

五十五段　御室にいみじき兒の有けるを

室町にはいみじき大臣ありけり、二丁目あたりの人もしれる女郎に深く逢ける事、人をせきてひとり客になん成ける、申毎にかよひけるほどに、風流の遊與かたのごとく仕盡し、たよりよき折あらば、思ひよらぬ口舌してこまらせんはおもしろからんとて、無理の品々道々思案して、爰かしこの茶やなどあそびまわりて、有つるよねのもとに行けるに、はや晝顏もしぼみ、見世もやがてひけん頃也しに、いまだ宵の床の內に、いたう休み居けるかぶろなんど打をどろかし、かしましく夢を覺しければ、なをも目覺ざりけれ、よひにいかふさしの過ければ、よく休みけるまゝ、はじめよりの事共しらぬよしさま〴〵に佗けれど、つやつや物もいはせず、かへらんよしにてかけ出しけるを、若い者抔いか斗とめければ、言葉つきあら〳〵しくいひのゝじり、もがりの有ほど云ちらしかへりたるけしきにて、中の丁のしれる茶屋に來りて、こゝろにあたりつや〳〵ねいりけり、思ふほどねたりければ、黃昏時分にもあらんか目さめにけり、大あくびなどして湯づけなど喰て、きて今は二丁めへ行ておかしがらせんとて見世へ出けるに、隣にてきゝしれる聲して、しばらく開居けるに、程なくとなりより人人出て歸るを見れば、逢ける女郎見しらざる男とつれ立て出けり、晝口舌して歸りける間に盜めるの也、かの客いと腹あしく聞にくき言葉して、いさかひ腹立てかへりにけり、あまりに與あらんとする事は必ずあいなきものなり、

五十六段　家の造りやうは夏をむねとすべし

比丘尼宿は夏をむねとすべし、冬はせまきとても苦しからず、あつき時はかば燒、はきだめの近きは絕がたき事也、大どぶは水ありても涼しげなし、淺き手洗に石菖うへさせ、こまかなる石をまき、鑓持はさみ箱持の氣をなぐさむ、二階の高きはうけん桶さし出すもふる由也、酒醉のあがりおりもあぶなし、ふつゝかなるぬれを見るも面白く、横町行ぬけ、片長屋こそよしとぞ人も定めあひ侍し、

五十七段　久しくへだゝりて逢たる人の

久しくへだゝりて逢たる人の、居つゞけしつる事、數數の恨み哀也事共も、過し後は言葉もつきてあひなけれ、じよさいなくいひかわしたる人も、口舌の後見るはたがひにはづかし、すさまの客は門口より鳴わたり、息もつぎあへず語り興ずるぞかし、能大臣の座配は一坐ゐまた有こと、物毎しとやかにするを、おのづからよねも心置るゝ也、はんかの人は大勢の中へ打出て、おとしのしれた咄しを語りなせば、皆人笑ひぞたつる、いとろうがわし、ゑい口ひたゝれなどゝふるひ地口いひても、たいこやくに請取てやるにぞ、金つかひながら人につもらるゝ事など、己れがそだちのあしきに引かけて、いひ出たるいと侘し、

五十八段　人の語り出たる歌物語の

人のうた上るりなど一ふし云出たるに、ふしがいごのわろきこそ本意なけれ、其道の上手を聞たる人はいみじと思ふまじ、湯つぼ小やなどにて、云ならいたる人は、かたはらいたく聞にくし、

五十九段　道心あらば住所にしもよらじ

道をたつる女郎は、やどかゝにもよらず、たゞほれたる人斗り思わんにかたかるべしといふは、さらによねしらぬ人也、誠は此客をとりはなさず、かならず曲輪を出んと思わんに、何と興ありてか朝夕酒に長じ、身をかへり見ず、人なみに勤る心は、緣にしてとはいへど、うり物なればうわきならずして、此道は行難し、其貢物は太夫格子は申に及ばず、さんちや以下迄も主親のうへをたすくる爲に、さながらばさらなるつとめになれて、道なきしよさなれば、おのづから聖賢のおしへに背く事もなどかなからん、さればとてとられず、さばかり爲に成客を捨んは無下の事也、さすが一たびたが殿達なりと、たとへ心にいらず共、一言の情にてちりげもとをぞつとさせ、しんしよも命もむしる程になれば、紙小袖の一通りのくわん禿、仕着せもいくばくか人のつゐへをなさん、かたちにはよらぬ物か、さはいへど惡にはうとく、美なるにはたがひに近付く事多し、全盛に生れつきたるしるしには、いかにもして氣ゐとをりたる人と、二世も百世もそはん事こそあらまほしけれ、大臣にほだされ偏へに歎を先に立、おか樣にならんはよろづに畜類にかはる所有まじくや、

六十段　大事を思ひたゝむ人は

大事を守べき後家も、去がたきは色なんめれ、若年にわかれぬれば、しか〴〵の本意もとげず、さながら捨がたき道を、子ゆへにしばしかの事たへ果て、其事かの事と思ふ折から、さそふ水にうかれて、いな舟のいなにもあらず、人の嘲りもかへり見ず、行すへの難義も思わず、ひたすらに年頃の思ひもさぞと、其日待んほどいそがしく、何となく物さはがしきゆへ、後見の方へもしか〴〵のさた事のやふつくる者有、たびかさなればあらわに見ゆ、いひかわし候ことの葉も、いたづらにさそわれ人に身を任せ、思ひ立るをよしあしの沙汰にもあらず、一つ〳〵が斯なん、一生何ほどの事かあらん、身をたすけんとすれば恥をかへり見ず、家財を捨のがるゝぞかし、命は人を待ものかは、無常來らば嵐とも成なん、老たる時古への子を尋たらんとて、いかで便りあらんや、身を立んと思はゞ捨がたき情をも堪ざらんや、

六十一段　眞乘院に盛親僧都とて

京町の三浦に几帳とて、やん事なき全盛の女郎有けり、そば切を好みて多く喰けり、揚や歸り茶屋に客待、文かく片手間にも、まして煩はしき時にも、猶部屋に籠居てりやうじほどに覺へ、ひとりもくはず、折折やり手あひ部やの女郎、かぶろ下男迄も喰せける、客よりの附屆けは、小袖の外皆そば切と成ける、それのみか來汁は愚痴也と、江戸汁のみこのみ、其外人あつめしくわせける程に、出る時半分はすみのつるかや拂となりにけり、斯計らひける程に、茶やのごて様いしやさま、揚屋のおかさま髮ゆひどの迄、有難き女郎と皆人申ける、此女郎のまねして、いまも二三人、そば切ずきの女郎在けるとぞ、其女郎太夫にも限らずくせ者にて、萬自由して張つよく、大かた人に隨ふと云事なし、氣にいらぬ客をばひとりそばにおき、つい立て歸る事もあり、夜なり共晝成共、ねむければ客腹立るもかまわず、目さむる迄寐たると也、又氣に入たる男なれば、幾夜もいねず、よのつねならず我まゝ大やうなるしこなしに、折々ぞつとする程うまき事在ゆへに、客もいとはずよろづゆるされけり、德のいたれる女郎なりけるにや、

六十二段　御座の時こしきおとす事は

若き女の左の腕こよりにて結びくれよといひし、い

か成形にやと思ひし、そら手のをこる時のまじない也、わけしらずあしく心得、こゝろときめきてうれしがりしに、ふるき人に尋ければ、小うでのまじないとて、末に生れたる男の子に、左りの手を小よりにてむすばせぬれば、治するといひ侍りし、

六十三段　延政門院いときなくおわしましける時

山口の初ぎくかぶろせし時、客衆へいゝづてとていひやりし歌、

ふたつもじ牛の角文字すぐなもじ
ゆがみもじとぞ君はおぼゆる

こひしく思ひまいらするとなり、

六十四段　後七日の阿闍梨武者をあつむる事

芝居に通り者をあつむる事、狼藉けんくわの爲也、見廻の衆とて、一年中此者共に木戸をわたして、名題者を用む事おだやかならぬ事也、

六十五段　車の五緒はかならず人によらず

ふとん三つ重ねはかならず位によらず、全盛によりてきわむる、能客にあひぬれば成事也と、或人仰られし、

六十六段　此ごろの冠は

此頃の盃臺は、むかしよりははるかに高く成たる也、古代の臺持たる人は、內證の客に用る也、

六十七段　岡本關白殿盛なる紅梅の枝に

山口の小主水、盃に紅梅の折枝をしほらしく書てくれよと、田町のぬしやに仰られける、朱の盃に紅梅かく事、とり合あしからんと申ければ、傍輩の女郎衆と相談有て、又ぬしやに、さらば其方の思わんやふに書て給われと在しに、黒き盃に朱にてつぼみたると散たるとをかき、しべを金粉にて色どり參らせけり、青染にて五葉なん共書、枝のなかば小鳥なんどつけてもしほらしからん、松の枝に相生の枝も有、いとめでたからん、ふきはしゃらのよらぬやうに二重にぬひ、火のしをかけ、うづ高く包むべし、初雪の一座なんどに、白梅のもよう地白の小袖なんど、をもしろからず、雪に跡やくそくなし、あまたの者にはなを出さるれば、ひたひにあてゝはつ／＼と云て退く、初ゆきといへど、下駄のはの隠るゝほどはめでたし、數多にはなちらす事は、いつに限らぬ事なれば、鷹のおとし餌のやうにやる大臣こそ、いかなるゆへにかあらん、

はな時しもわかぬといへる事、伊勢物語に見へたり、紙ばなはくるしからず、

六十八段　加茂の岩本橋本は

めうがやの但馬は新丁角丁也、人の常にいひまがひ侍れば、或時雨町の女郎の事、茶屋の亭主に委しく尋ね侍しに、新丁の但馬は下樣より經上り給へば、しなし少いやしき所見へ侍る、すみ丁の但馬は格子也、座しき大やうに古へのかた殘りて、心やさしき女郎也と皆人申侍れど、我等より中々御存知などもこそさぶらはめと、いとこまかにいひたりしこそ、いみじく覺へしか、新丁の但馬も人々思ひつく風にて、能客あまた有ける、雨丁のめうがや共に家の立物也、誠に二人共にはやりて人々の取さたよし、文體手跡いみじき女郎也、

六十九段　筑紫に何がしの押領使

築地に浪人妻あつまりて居ける宿有し、女共四五人も浪人して有し事久し、或時亭主夫婦留守にて、館に人もなかりける隙をはかりて、盗人しのび入ける、館の內に水牛の甲胄を帶し數多の兵出來て、命もおしまず戦ひてみな追かへしてけり、いとふしぎに覺へて、女子共とひけるは、日頃愛に物し給ふとも見へぬ人々の、かく今の難義を救ひ給ふは、いかなる人ぞととひければ、日頃たのみて、ゆふな〳〵めし遣わるゝ物にて侍ふといひて失にける、ふかゞゝ愛しぬれば、かかる德もありけるにこそ、

七十段　書寫の上人は

長湖法師は、すいじやれの功つもりて、好色の道にかなへる人也けり、びくに宿の二階に立いられけるに、下に居ける比丘尼の申けるは、てんがいぢこはひかわではないかと聞へけるを、二階の客はわるひ客かと申と知り給ひけるに、二かいに居けるびくにの、いやあちばこちばじやきち申けるを、あちらよきとぞ申としり給ひける、

七十一段　元應の清暑堂御遊に

四ッ谷地照寺にて花みせし頃、かす都といふ座頭三味線を引けるに、座につきてまづ調子をあはせたりければ、三の糸切たりけり、若きおのこ懷より糸取出したりければ、皆どよみてかんじける、女房達あまた有けるが、さゝやきていひけん、いか樣色ある人とおぼしき、折もあらばいゝよるべきなど聞へけるとぞ、

七十二段　名を聞より頓て面影は

名をのみ聞て、其をもかげもしらであこがれ、まして風俗しなしなどよき女郎は、極て三ヶの色町にも限らず、當世にも有馬のふぢ、伊香保の江川など有とかや、むかし物語を聞ても戀にかわりはなけれど、家の風も全盛する女郎のしなしによる也、まして道中の出女などは、所々の國風あつておかしき事共あり、此頃も大磯の出女、砂のふりけるにつけて、十郎さまよき時からのかたき打との沙汰、見ぬむかしの虎が心中同前と、思われたきとおもふにや、

七十三段　いやしげなる者居たるあたりに

深く思ふよねのあたりに、したるき客のおほき、引込し禿の多き揚屋に、若ひ者のおゝき、夜るの物のふるふ成し物、前の文にことおほく書のせたる、多くてあしからぬ物、白小袖重ねたると、爲になる客、

七十四段　世に語り傳ふる事

女郎に久しく逢ふ事、誠にあぶなき事にや、多くはみなそらごと也、あふ人久しく物入たるに、少しの内に曲輪へのあゆみへだゝりけるに、約束の日を忍びて外の客にあひぬれば、やりてたいこのわけしり共集りて、いみじき手立などたくみ出して、はじめの深き客を出しぬかんとす、其事しりたる人はにくゝ思ひて、ヶ樣の事きゝ傳し何事も替るは常也、かつはさたあしき事詮義し給へなど云時、その客誠しからずば、おもひながら人のしらせしまゝに氣をつくれば、空事にもあらず、何とやら心におちぬ事のみ出來て、人の云しつまに合て俄に水くさく成事あり、わがため面目なき事に云なせば、いたくあらがはねど、皆人のあしき取さた、さほどにもあらず物をなどいへば、いさめたる人も詮なくて聞居たる程に、後にはたれ有ていふ人もなし、とにも角に僞り多き里也、たゞよねにある珍らしき事と、つねに心得たらん、萬にたがふべからず、惡がしこき人は友をたのまず、すいなるは人をたのみてよしあしを聞、かくはいへど女郎の心によりて、あい方の氣によりて誠なきにもあらず、かくいふも詮なければ、大かたは相應にあいしらいて偏に信せず、またあらそひ嘲るべからず、

七十五段　蟻のごとくに集りて

蟻のごとくぞめきて、大手をいそぎ左右にはしる大臣あり、かんざぶあり、すいあり、やぼあり、行もの

有歸る者あり、ゆふべにたのしんで朝にどゞ打、樂所何事ぞや、色になづみほだされてやむ時なし、よねをかけ込みて何の益かある、たのしむ所たゞ情と年の明るにあり、其間金つかふ事日々にとゞまらず、是をまつ間さぞまち久しからん、はまりたる者は前後わきまへず、色におぼれて借金の增事をかへり見ねば也、すいなる人は又これをかなしむ、おのれ一人にきはまりたると覺へて、外に色ある事をしらざれば也、

七十六段　つれ〴〵侘る人は

せかれたる人はいかなる心ならん、まぎるゝ方なくたゞ部屋にこもり有のみこそよけれ、世にしたがへば、心の外の客にもあはねばならず、爲になりがほにいふほどうるさく成て、座しきにある心地もせず、ことばじりをとり、まざ〳〵とした事をあらそひ、一度はなぶり、一度はかぶろを呵る客のおもしろき事なし、無分別度々をこりて、腹立やむ事なし、むせうに酒のみだれてねた内に、客のかへるを夢にしらず、ただひとりにほれて忘るゝ事なし、女郎の身持みな如ㇾ斯、後は狹き局におろされからき目にあはん、誠の道をいはゞ、やぼふ男也とも、緣にまかせてふげんばさつ請られ、西がしのあたりのおかさまとなる、心をやすくせんこそしばらくたのしむともいひつべけれ、大酒、ぶしまつ、短氣我まゝ、うはきをやめよとこそ、ばかしくわんにも侍れ、

七十七段　世の覺へ花やかなるあたりに

色の多くはなやかなる一座に、三味線も有小うたも有て、こよなふしめやかなる中へ、わかいものゝ玉子なんど鉢に入持出たる、さらずとも見ゆれ、さるべき故あり共、やり手は座しきへ出ずと有なんかし、

七十八段　世の中にもてあつかい草をいろふべき人ならぬ

世間に此頃人のうたひける小歌共、笑ふべきにはあらねども、色のあらん人の、またうたわんせうかにてもなし、さればはやり唄のはやく思る事、今宵二町目にて唄ひ出せしも、明日は角丁にてうたひまふに、片ほとりなる座頭法師などは、世の人よりはやく我ものゝごとく唄ひしれる、いかでかばかりはやくしりけんと、覺ゆる迄ぞいひちらすめり、

七十九段　今やうの事共の珍らしきを

よし原の珍らしき事ども云ひろめ、我しりがほなる

こそうるさけれ、江戸に事ふりたる迄、しらぬ人は心にくし、屋形衆のたま〳〵づにて見聞したる事、草屋敷へ歸りて、心得たるどちかたはし云ちらし、目見合せ笑などして、しらぬ人に心得ずおもわする事、きわめてやぼなる人のかならずある事なり、

八十段　何事も入たゝぬさましたるぞ

何事もしらぬさましたるぞよき、とふり者はいふべき事とて、さのみしり貌にやはいふらん、かのさし出たる人こそ、萬のみちに心得たるよしの貌付はすれ、されば世にはづかしき人のおもはくといふ事もあれど、みづからいみじと思へるけしき、かたくなゝるよくがてんしたる、すいは必らず口おほくうはつかず、出來口などもいはぬこそいみじけれ、

八十一段　人每に我身にうとき事を

人ごとに我身に相應せぬ事のみぞこのめる、法師は小歌をならい、女郎はそろばんをしり、揚屋の女房はきやしやに見られたがり、茶やのてい主は客あいしらいをしらず、佛法をのみしらんとす、されどおろかなるおのれが道より、なを人におもひあなづられぬべし、夫のみにもあらず、太夫格子かみさま迄おしなべて、間夫をこのむ女郎多かり、百度忍て百度かくすとも、いかでてれんの名を隱さまし、其ゆへ色と名づけて內證の世話さするは、よくらしきにあらずといふ人なし、つれ聞つけ客しりなばつゐにすがるべし、客計大事にして、後は身請など名を顯わすべき道也、つとめ出んほどは色にほこるべからず、よめ入に近くなり、ぢまひつとめんに、ちかきふるまひほむる事にあらず、このみて益なき事也、

八十二段　屛風障子などの繪も文字も

屛風懸物なども、うは繪かき又は菱川菓のうき世繪書たるが見にくし、亡八も女郎もつたなく覺る也、大かた持る調度は、床違ひ棚出格子に取ちらし、たんすつみかさねたるは、尼店に似たるなんど長潮も書たる也、萬の物すぎは、いき過たるやふに見へて人形はくぢ也、たゞ女郎は身の內の道具ふそくなく、床の內のよきのがよき也、

八十三段　うす物の表紙は

すゞしの羽織は、とく損するが侘しきと、しわひ人のいひしに、又通り者はかるくてよし、羅紗のはおりは雨に逢たる後もいみじきと申侍りしこそ、心まさり

て覺へしか、一むれに屋形女郎の行に同じやふにあらぬを、見にくしといへど、かうしや者が時服など、かならず一やうにそろへたるは、つたなき者のする事也、ふそろひなるこそ人々の物ずき方も見へてよけれといひしも、いみじく覺し也、もやうもしつこからずしのこしたるを、扨うちをきたるは、おもしろくいきのぶる業也、

八十四段

市村竹之丞かゝへの若女形坂田荻之丞、一枚かんばんにあがり給わんに、いかなるゆへんかおはせんなれ共、めづらしげなし、横かんばんにて居給ひけり、とをりものゝ評判師此事をきゝ、若ひがこうしやと、月みちてかけ、狂言當りては又替りに淋鋪、萬の事みなかくのごとし、さきのつまりたるきせるは、がん首のやぶれに近きみち也、

八十五段　法顯三藏の天竺にわたりて

龜やまに花の六藏といふまご、閨に思ふ者ありけり中仙道へゆかで叶わぬ事の有て、心ならず程經にければ、古郷の事を思ひてはかなしまず、かの女の事をしたひて病に臥にけり、割のかゆを願ひけるを聞て、さばかりのおのこの、無下こそ心よわきけしきを、よその國にて見せけると人のいひたりし、閨の小まんはいふに情有ける女にて、六藏にちぎりてより、山川をこへて龜山へかよひて、二度こと人にまみへざりしこそ、心ざしやさしく覺へし、

八十六段　人の心すなをならねば

よねの心すなをならねば、僞なきにしもあらず、されどおのづから色にうつる事などかなからん、隙なる女郎は、傍輩のはやるを見てうらやむはよねの常也、いたりて情しらぬ女郎は、たま／＼すなをなる女郎見て、是をにくむ、よき客と見ては、初會より且親方をだましてかはゆがられんとす、おのれが心にたがへるによりて、只わる口をいふにて知ぬ、かやう成女郎能客附べからず、ぎうやり手にもにくまれぬべし、かりにも情あり顏にせよ、奴の眞似とて道中を大またにありかば、則ちやつこ也、張りつよきとて、やぼをふるはどうよく也、つとめてこそうそつく斗にもあらず、まして能客斗はたのもしきにもよらず、僞ても情らしうするをよき女郎といふべし、

八十七段　惟繼中納言は風月の才に

玉屋新兵衛は好色をたのしむ人也、三國一のやさおのこにて、歌にも作りて世の人唄ひはべりける、或時めかけ密通の事ありけるを、いと腹立て髮をそりて追出しければ、皆人嘲りて、いまより比丘尼玉やとこそ申べけれといひけり、おかしき秀句なりけり、

八十八段　下部に酒のまする事は

下部に酒のまする事は心すべき事也、番丁へすみけるおのこ、京町へかよひ、みなとやのみなとに、常に申むつびけり、或時夜ふけて歸ること在しに、はるかなる程也、供のお人に先一度させよとて、酒を出したれば、さし請〳〵よいとのみぬ、脇ざし打はさみてかひ〳〵しげなれば、たのもしく覺へて相具して行程に、土手の取付にて、駕籠昇のあまた立て居たるにたち向ひて、夜更也あやしきと脇差拔ければ、人もみないきづへふり上げなどしけるを、主人手をすりて、うつゝ心なく醉たる者にて候、まげてゆるし給わらんといひければ、各嘲りて過ぬ、おのこ主に向ひて、さて〳〵口おしき事し給ひつるもの哉、おのれゑひたる事侍らず、高名仕らんとするを、ぬける脇ざし空しくなし給ひつる事と、いかりてひたと振廻して、扨どろぼうとのゝじりければ、人々おこりて出合、彼をこそ追はぎよといゝて、走りて切まわりけるを、數多して手をおゝせ打ふせてけり、扨みなとやへおのこ共數多はしらかしてければ、主人はみの輪にゑいふしたるを、求出てかきもてきつ、からき命いきたれど、やしきへをそく不首尾になり、どらを打にけり、

八十九段

或者酒のたはぶれに、お名をば得申まいらせぬとうたひ、是はりうたつが端唄より出たるなど、いと興じけるを、或人それは戀草と云うたひ、曲舞の留なるを、りうたつがうたわん事時代やたがひ侍らん、覺束なくこそといひければ、左候へばこそ、小歌上るりなどに、うたひの文句を取たる事多し、是も戀草のうたひを龍達取なしたるべし、めでたし〳〵とて愈唄ひけり、

九十段　奥山に猫またといふもの

二町目の萬字屋に、猫またといふ者ありて、人を喰ふなると人のいひけるに、本丁大黑やのわかいもの聞て、獨りゆく身は心すべき事と思ひける、二丁目のあたりにて、音に聞へし猫また、あやまたず足もとへふ

と寄來て、やがて飛つくまゝに、首のほどくわんとす、肝心もうせてふせがんとするに、力もなく足もたたず、見世の内へころび入て、たすけよや猫またよや〳〵とさけべば、家々よりぎうどもはしりよりて見れば、見知れるもの也、こはいかにとてだきおこしたれば、賣懸の帳、ごふくものゝ符帳抔、ふところに持たりけり、よごれぬ希有にしてたすかりたる樣にて、ほう〳〵曲輪を出にけり、俺相なるかぶろ、客衆を取ちがへて飛つきたりけるとぞ、

九十一段　大納言法印の召仕し

巴屋の矢橋が召仕し松彌といふ禿、扇やの茶やとむつまじくて、常に行通ひしに、有時出て歸り來るを、矢ばせいづくへ行つるぞと問しに、扇やほれん山さまの客のおわせしが、うつくしき若衆見候と云、其客は町人衆か屋形衆かと又とわれて、袖かき合せて、いかゞ候らん、其わけは見候わずと答へ申き、などか其風がらもしらざりけん、

九十二段　赤舌日といふ事陰陽道には

借錢日といふ事こよみにはあらず、物日大晦日の事を、此頃何者かいひ出しておそれけん、此日かかりたる物をなし、諸事を定る事也、誠に大三十日には、時ならぬ神參り年籠りなんどして夜明て歸りぬ、女郎なんどは、馴染ある客に無心いひかけて、其日と延ばされ、煩ひにして引込、醫師の藥でも祈念でも、なおらぬ物は物日也、此日に限らず萬事の淺ひ拂方あらば、有にまかせておくるべし、時ならぬに送りたるとて、腹立者有まじ、女郎は常に不器量に見ゆるとも、たのもしき方あらば、大切にしたるこそ本意ならめ、顏能に任せ、たま〳〵にもらひたる物迄、色にふけりおくりたわむるゝゆへ、外のなじみもなく、物日などはとりわけ常より勤なんどもみやすからず、さあればとてたのむべき方もなし、金銀は形よきにあらず、人によりてある也、心中も人がらにはよらず、まづしきにもあり、金は兩替屋の見世にあり、色町の夜見せにはあらず、

九十三段　或人弓ゐる事を

或女定まれる夫をきらふて、間夫を持事あり、間夫をいとをしみ、實の夫に氣をかへ、向ふ見る人の男女二人夫を持事なかれ、間夫をたのしみて誠の夫を失わんとす、定れる夫をたのまば、賢女ともいひつべけ

れ、間夫に節にする事、物事定らざるにもあらず、又色にもあらじ、いたづらに心うばわれて、終に其身を失ふ、假初のたはむれにもゆるさるゝは此常也、念比なる言葉さへ人の咎るぞかし、ゆうべに糸など取て、晝はぬいものして、萬事に心遣ひあらんこそ世帯の身持共いふべけれ、なんぞ實の夫を他になして、間夫を好は甚だふときこゝろ也、

九十四段　牛をうる者あり買ふ人

女郎を買ふ者あり、つとめなんど、揔て物せんとせしに、其夜なじみの客來てもろふ、買ふ人損有と腹立、ぎうの云、もろふ人は買ふ人よりも常に損あり、なじみ深きゆへに、物事に付て元のかねのついへいくばくぞや、一時のたのしみ萬歳のたのしみ有、女郎のあたひは野郎よりかろし、好色を學んで家を失なわん人、損有といふべからず、皆人遊興の床にて、おくせざるぞたのしからんや、また女郎にねたみあらば、物目などたがへたるこそ、存外のわるじやれおかし、約束のたがひたるにへだてられ、ぜひなくいもきかけ的勝負事なんどもつらなり、財を失ふ、又他の財をうらやむは、手の長き方にやはべらん、一生定をる事なければ子孫もなく、年のよはひに恐れて、他に家をゆづらんと斗れども、ざいなければ其義もあらず、近附の方に便り、家代をやす〳〵とせられて手を打てのく、人いよ〳〵あざける、

九十五段　常盤井の相國出仕し給ひけるに

下やしき守りの若き男、釜揔になじみ有けるが、旦那の來りて掃除抔いひ付居けるに、かのみこ、御やくそくに任せ、參りたるよしいひはべりければ、とかふの挨拶もなく、たゞうつぶき居たりぬ、又其後來れば、殊の外立腹して、鈴の音さへあらば來りぬとはしるべきに、色のいたらぬ者也とて、深き契りをやめけるとぞ、

九十六段　箱のくりかたに緒を付る事

羽織の胸ひぼつくる事、ぬい付たるがよきかと、たのもしの人に尋侍りしに、ちゝを付ていろ〳〵付るやう取かへて付る有、是しまつにあらず、ふんどしははゞ廣なるがよし、ゆくにひぼ付る事、色里にはあらず、

九十七段　めなもみといふ草有

女にろくろ首といふ有、ゑりに赤き筋三すじ有とい

ふ、見しりて置べし、

九十八段　其物に付て其物を

其物につきて、其物をついやしそこなふ、數をしらず有、身に色有、家に妾あり、國に遊女あり、やぼに鼻毛有、君子に腎張有、僧にお大黑あり、

九十九段　たふとき聖りの云おきける

たふとき比丘尼のいひおかれける事を書付て、一生有樂とかや名付たる草紙を見侍りしに、心に叶へる物あらば、かたりても求めたるがよし、女のいたづら事も、一人二人も心にかなへる方あらば、幾人も寐たるがよし、後世なんど思わん事、しんださき一人も見たる事なし、持佛堂の本尊も、作法などおかぬがよし、

上良も喰たき物あらば、しんこなどはいふにたらず、くはしくだ物に至る迄袂に入、夜はふとんの下に入置、下良の眞似したるがよし、

金物はめつたにつかひ捨、一生たのしみたるがよし、

一門の異見用ぬがよし、家財もなくして後には乞食の聟に成、三國一のとり打濟したなんどゝ唄ふも、色なればたのしからんや、此外の惡所をのがれ、高木にかけられぬやうにたしなみたるがよし、

百段　堀川相國は美男のたのしき人にて

巴屋の玉川は、全盛のたのしき女郎にて、其事となく過禮をこのみたりけり、かぶろ小鷹を風流に殊にしたてゝ、遣ひけるに、雨のふりけるおり、笠斗にては小袖ぬれ見ぐるしとて、いたいけなる木綿合羽を、めで度拵へ改めて着せられけるに、上古より禿の合羽を着たる事、其はじめをしらず、數十年を經たれ共聞ず、累代子共はこましやくれざる以てよしとす、新敷事たやすくさせられ難きよし、名主殿も申ければ、二三度きせけれど其事やみにけり、

吉原徒然草卷の貳　終

吉原徒然草卷之三

百一段　久我相國は殿上にて

山口の小夜衣は、桐屋の臺所にて朝酒をまいりけるに、かぶろ盃を奉りければ、茶碗まいらせよとて、ちやわんしてぞまいりける、

百二段　或人任大臣の節會の内辨を

或人新町巴屋闇の井に、初約束にて逢ける、歸りける途いかゞしけん、年比いとしと思ひける若衆の、よみて歌書ける扇子を取おとしける、きはまりなくおしけれど、立歸り取べきにもあらず、思ひ煩ひ玉鉾に立やすらひけるに、闇の井かぶろを語らひて、かの扇をもたせて忍びやかに奉らせけり、いみじかりけり、

百三段　尹大納言光忠入道

三浦のにし木々新丁へやられ給ひけるに、糸櫻殿に次第を申請られければ、おいわ女を師とするより外の才覺候わじとぞ宣ひける、かのお岩は老たるやり手の、能事になれたる者にてぞ有ける、或時揚屋丁にてあひたりける客來り給ひける時、にし木々たばこ入を忘れて座敷を立給ひければ、お岩はし子の際に候ひけるが、まづ湯づけを召るべくや候らんと、しのびやかにつぶやきける、いとおかしかりけり、

百四段　大覺寺殿にて近習の人共

揚屋にて女郎集り、なぞ〳〵を作りてとかれける所へ、たいこの與助參りたりけるに、闇といふ大臣、與助は此國のしよく人にあらずと、なぞ〳〵にせられけるを、から紙やとときて笑われければ、腹立てぞ歸りける、

百五段　荒たる宿の人目なきに

荒たる宿のさま哀なるに、親にはゞかる頃にて、つれづれとこもりたるに、なれにし若衆の訪らひ給はんとて、夕づく夜の覺束なき程に、忍びて尋おわしたるに、犬の事々しくとがむれば、宿のかゝの出ていづくよりぞととふに、しか〳〵と云て入給ひぬ、心細げなるあり樣、いかでか過すらんといと心ぐるし、あやしき上り口にしばし立給へるを、鹽たれたるけはひ哀らしき聲して、こなたへといへば、丸太はしごがたがたとしたるよりぞ上りぬ、二階のさまはいたくきれいならず、心かなしく火はきたなき火燈なれども、

物のあやなど見へて、俄にしもあらぬ匂ひ、いとしたるふ住なしたり、門戸よくさしてよ雨もそぼ降、よごれにしやくわんは窓の下に、御供のでつちはそこそこにといへば、今宵ぞ蚊にせゝられぬべかんめれと、打さゝやくも忍びがたし、味噌するも程なければほの聞ゆ、さて此ほどのかなしき事ども、こまやに聞へ給ふに、夜更鳥もなきぬ、あやしき夜の物うちかけて、まめやかに御物語に、此度は鳥もあわたゞしき聲に打しきれば、雨はのし萱の板間よりしたゝり、夜ふかく廻る拍子木の音しげく、ちとまどろみ給へるに、反古張の窓のひま白くうつり、豆引臼のひゞきにわすれ難き事なんど云て立出給ふに、紙張も珍らしく鳴渡る蚊のかしましく、時鳥のかよふ曙の艶におかしかりしをおぼし出して、かなしさも忘れ、門に豆腐桶の大きなるが隠るゝ迄、今も見送り給ふとぞ、

百六段　北の屋かげにきへ殘りたる雪

北八丁堀邊を通りけるに、夜更ぬれば往かふ人なく、こぎ寄たる舟の笘も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれ共、隈なくはあらぬに、積置たる炭薪の濱に、下部にはあらずと見ゆる男、女としめやかに物語する樣こそ、何事にかあらんと聞給ひにし、夜だかなりけれ、髮かたちいやしく見へて、得もいはれぬ匂ひの、青くさきこそおかしけれ、錢ばらひのおとかすかに聞へたるも笑止、

百七段　高野の證空上人

大名もどりの手かけ、用の事ありて本所邊へ行て、暮て兩國橋をわたりけるに、夜だかとかやに行合たりけり、夜鷹に附し男あしくよけて、手懸者をつき倒しけり、手懸者いと腹あしくとがめて、こは希有の狼藉かな、素人ではないわいな、妾者より傾城はおとり、傾城より茶屋者はおとり、茶屋者より綿つみはおとり、わたつみより比丘尼はおとり、びくにより夜鷹はおとれり、如レ斯の夜がたの身にて、未曾有の惡行成といゝければ、おとこ、いかに仰らるゝやらん、得こそしらぬといふに、なを息まきて、何といふぞ、非修非學の男めと、あらゝかに云て極りなき放言しつと思ひける氣色にて、濱町の方へにげられけり、おかしかりけるいさかひ成べし、

百八段　女の物いひかけたる事

よねの物云かけたる返事取合ず、能ほどにする男は

有難き物ぞとて、中の丁の茶やにて知られたる女郎共、客達の參らるゝごとに、喜世三に逢んしたかと聞て心みられけるに、何がしのさんとやらは、數ならぬ身は得逢も候はずと答へられけり、まへ小紫にあひける男は、忍びやにてちよと逢ひて候ひしやらんと申されたりけり、是はなんなし、數ならぬ身むづかしとの取さた也、すべておのこはよねに笑はれぬやうに心がくべしとぞ、伊勢やにて花紫に逢ける男は、おさなくよりよく誰人かおしへまいらせけるやらん、揚屋丁はじめてより太夫にぞかゝりけるとかや、屋形客は茶屋の下女の見侍しにも、いとはづかしく心づかひせらるゝとこそ、山口の音羽はかける、女郎のなき世なりせば、衣紋も髮もいかにもあれ、引つくろふ人もはべらじ、斯人におもはるゝ遊女いか斗いみじき物ぞとおもふに、傾城の性皆さもしく、貧なる親賤しき兄のかなしき暮しにて育ち、おかべのから買にありきけるにてそだち、父母はらからの爲に今の勤也、されば色はもと也人我の相ふかし、貪欲多くはふかきかち也、物の理をわきまへず、たゞうそをかざり詞もたくみに、苦しからぬ事もとふ時はいはず、用意あるかと見れば、又あさましき事迄とはず語りに云出す、ふかくだましかけん事、男の知恵に増りたるかと思へば、其事跡より顯るゝをしらず、すなをならずしてつたなきものは遊女也、其心に隨ひてよくおもはれんは心うかるべけれ共、又一筋にさにもあらず、されば何とかして恥かしき事も、人目外聞を捨て取みだしぬるも有、是等はうそも有まじ、たゞ色をあるじとして、物云内にもはづる内は、やさしくもしたわしくも恐ろしくも覺ゆべき事なり、

百九段　寸陰おしむ人なし

遊山金おしむ人なし、是欲をわするゝか愚か成か、おろかにしてむだづかひする人の爲にいはゞ、揚錢かろしといへども、是をかさぬればいとしき女郎を請出す業もなす、されば茶屋の一角を悦ぶこゝろ切也、せつなしといへ共此たのしみやまざれば、身體を失ふ期忽に至る、されば有德なる人しわく金銀をおしむべからず、只今の一念空しく過る事をおしむべし、若人來りて我あい方明日は必里を出べしと告しらせたらんに、けふのくるゝ間何事をか賴み、何事にて歟心を慰ん、我等かひけるけふの日、何ぞ其時節にこと

ならん、一日の內に食悅床入手れんこそ、たはけ止む事を得ずして多くの寳を失ふ、その餘りの餘情いくばくならぬ內には、無益の費へをなし、無やくのふりをして金をつかふのみならず、さたにあい、純にいはれてたはけを盡す尤愚か也、すいは人目につかいかくるやうなりしかども、常に心にしまりてむだづかひなし、野郎女郎の一座をせざりき、人はかたくな也とて、若き中のまじわりをゆるさゞりき、暫くもこれなき人は死人に同じ、あたら光陰何の爲にかたのしむとならば、內にりんきなく外に借錢なくして、やめん人は止め、修せん人は修せよと也、

百十段　高名の木のぼりといひしおのこ

高崎の旅人念比成人に異見しける、前揚屋へ行て太夫に逢ける時は、いふ事もなくて、いまさんちやへ逢けるにいき過すな、心して異見しはべりしを、以前金つかふ時はさもなく、今かばかり物もいらぬにかくいふぞと申侍りしかば、其事にも物むづかしき太夫にあふ時は、おのれが恐れ侍りし、什廻しはやすき所になりて必ず仕る事に候といふ、あやしき田舍人なれ共、すいのいましめにかなへり、

百十一段　双六の上手といひし人に

遊女をかけ込上手といひし人に、其わけをとひはべりしかば、かけんと逢べからず、かけられんと逢べし、一度成とも圖に來らんに、肩を入て逢べしといふ、情をしれるおしへ、よねにかはひがられん道も又しかるなり、

百十二段　圍碁双六好みてあかし暮す

横間夫このみてくどきあるく人は、四重五逆にもまされる惡事とぞ思ふと、或やり手の申し事耳にとゞまりて、いみじく覺へ侍る、

百十三段　明日は遠國へおもむくべしと

明日は遠國へをもむく客衆也と云は、もろふ時の言葉定まれるかく也、こゝろしづかにもらいなん時には、きやく／＼腹たつまじ、俄のやうにいとそう／＼しくなす事は、客も氣を持、他の事も聞入ず、女郎のふきげん悅びをもかまわず、問ずしてやと恨もせず、又まいるべしなどいひて、やう／＼歸りたるやうにして、行跡のさみしさ去れば、夜もやう／＼たけ臺所も鎮り、いはんやあたりの咄しの音も絕たらん比、又思ひ出すべし、獨座敷に寐て知らぬよるの物打きて、いづ

れの事、さり堅からぬ世間のもだし難にまかせて、淋しくあかせば、心も苦しくいとまもなく、寐ずの男をよび、わかしざましの酒にて心をたのしむ、我より深き客にさへられて、今宵過なんか夜明待遠し、曉すでにね入たる、諸事をがてんすべき時也、色をも思はゞ此里の義理守らじ、此心をも得ざらん人は物狂ひともいへ、うつゝなし情なしとも思へ、そしるともくるしまじ、ほむる共聞いれじ、

百十四段　四十にもあまりぬる人の

三十にも近からん女郎の、いまだじまひつとめんに、おのづから借金あらんはいかゞはせん、殊に茶やなどへ打出でず、かれを隱さんとせば、人の上猶たけはづむ程ならん、その身かはつるゝ禿など、心いつぱいとおもへど、いしやう付にげなく見苦しけれ、大形見ふるし、脇の目笑止、すがれし遊女の時、老人に交りてくろめんと氣せうはりたる、數ならぬ年間の世の覺へ、妹女郎をいやしみたる言葉つき、まづ敷女郎のうまひ物好み、數もなき客にひたと無心斗いひたる、

百十五段　今出川のおほゐ殿

菱屋の若紫殿揚屋町へおわしけるに、雨降にければ乘物にて出給ひぬ、禿のしやりん、茶や町の前やり給へといひければ、見世先を舁て行けるに、茶やよりあやしき水なん表へ捨けるとて、駕籠へかゝりけるを、お祝い跡より參けるが、希有の童かな、かゝる所へ御乘物やるものかと云たりければ、若紫殿御氣色あしく成て、おの〳〵賤しき禿の呵り樣かな、希有のやり手成とてあて〳〵しくとがめ給ひけり、此かぶろは若紫殿秘藏の禿ぞかし、此わか紫どの其比かぶろ三人侍りけるが、禿の名共一人はいろ香、一人はしやりん、一人はかせんとつけられけり、

百十六段　宿河原といふ所にて

源太郎といふ比丘尼、人々戀したひて逢たがりけるまゝ、全盛繁昌の女郎のごとしとぞ申けるに、外より入來る人々をばさもなく、米やのむすことかやと、行末は髮をもたて、ひよくの枕をもかわさんと深くいひむつびけるに、何院とかやいひける山伏の、ふかく思ひ妻とせんよし、かのびくにの師なる法印に度々いひ送りけるまゝ、わりなく思ひてやりてんよしを答へければ、比丘尼かなしく、彼男に逢奉りて、かうかうと語りて、此事申さばやと思ひて尋申也といふ、

色男、ゆかしくも尋おわしたり、去事侍りき、爰許にて思ふまゝになし奉らば、主じの恐れ侍るべし、便りよからん方へ參りあはん、あなかしこ脇指持給へ、何方へもさたし給ふな、餘多の耳へいらば、心中のさまたげに侍るべしといひ定めて、二人深川へ出合て、心ゆく斗につらぬき合て死にけり、びくに遊女のごとく成事、むかしはなかりけるにや、近き比に、小つる小りんなどいひける者共はじめ也、世を捨たるに似て色をかざり、佛道を願ふ事はなくてうかれ女の如くす、放逸無慚の有樣なれども、死をかろくして少もなづまざる方の、いさぎよく覺へて、人の語りし儘に書付はべる也、

百十七段　寺院の號さらぬ

女郎の名、さらぬかぶろに名づくる事、むかしの人は少しももとめず、たゞ有のまゝにやすくつける也、此比はふかく案事、才覺を顯はさんとしたるやうに聞ゆるは、いとむづかし、今むらさき、はつ櫻などめなれぬ名を付んとする、益なき事也、何事も珍らしきを求め、異說をこのむは、うは氣なる人の必ず有事也とぞ、

百十八段　友とするにわろき物七つあり

腎藥によき物七つあり、一つには地黃丸、二つには玉子、三つにはうなぎ、四つにはとぜう、五つにははまぐり、六つには山の芋、七つには午房、あしきもの三つ、一にはくわゐ、二にはさんせう、三つにはにんにく、

百十九段　鯉のあつ物喰たる日は

鯉のあつもの喰ひたる日は、髮そゝげずと、男色好む人はおこたらず喰べし、こいの指身こそ女中もまいる物なれ、やん事なき魚也、なまこ得て好む物也、松茸などは其形おかしく心うき事也、座敷持たる女郎の袋棚に松たけの有つるを、客見出して歸りて次の日文して、ヶ樣の物さながら其姿にて棚におかれし事、見ならはずさまあしき事也、はか〴〵しき姉女郎のさふくはぬゆへにこそと申送りける、

百二十段　鎌倉の海にかつほと云魚は

新場の肴店にふぐといふ魚は、河さかいには左右なき物にて、此比もてなす物也、夫も品川の年寄の申侍しは、此魚おのれらわかゝりし世までは、はか〴〵敷人の前へ出る事侍らざりき、おく病成は下部もくは

ず、ヶ様の物も世の末になれば、今は中の町の茶屋にて、よね達の口へも入たつわざにこそ侍れ、

百廿一段　唐の物は藥の外はなく共

揚屋の喰ひ物は玉子の外なく共腹立まじ、酒は下戸成共色の道引なれば、吟味して出してん、おあしのたやすからぬに、無用の物ども數多くこしらへ、所せくならべおくいと愚かなる、客衆はくわずとも又女郎はまいらず共、とりきみ出したるいとおかし、

百廿二段　やしないかふ物は

養ひかへおく物には、かぶろのいとけなくてつとめくるしむこそいたましけれど、斯せでは叶はぬ物なれば、いかゞはせん、やり手は守りふせぐのつとめ、おとこにもまさりたれば、必ず有べし、されど家毎にかしづくわざにぞすれ、こと更にもてなさずとも有なん、其外としま新造すべてむごく、いたまわりなき物也、太夫格子は揚屋にこめられ、さん茶は見世に入られて、客をこひ古郷を思ふ愁ひやむ時なし、其思ひ身にあたりて忍び難くば、心あらん人間夫をたのしまんや、生を苦しめて金をもふくるは亡八の心也、客の女郎を愛せし茶屋に出て遊ぶを見て、友として慰とらへ苦しめたるにあらず、凡大門より外へはかぶろならずして出さずとこそ申侍る也、

百廿三段　人の才能は文明らかにして

女郎の才能は、文すら〳〵として客の目によめるを第一とす、次には琴線事、むねとする事はなくとも是を習ふべし、客のなじみなきうちのけしきあらん爲也、次には小唄を覺ゆべし、客をかけ人を慰め、全盛のつとめも小歌、かり初にもなくては有べからず、次に三味せんひく事女郎の常也、かならず是を心がくべし、小歌さみせんの道、誠にかけては在べからず、まなばざらんを景のなきよねと人云べし、次にかけは女郎の情也、よく味ひを覺知れる人は、大きなる德とすべし、此和歌の道少し心がけたし、萬の助けになりなん、此外の事共かるたなんど、色かざる身の恥る所也、夫もつい待内なんどはくるしからまし、古歌多く覺へ、香きゝ、手跡つたなからざらんは、妙なる女郎の業、客も是をあなどらずといへども、いまの世には是を嗜みて全盛をきわむる事、漸愚か成に似たり、二挺立勝れたれど、駕籠の益き多きにしかざるが如し、

百廿四段

無益の事をなして金遣ふ人を、やぼなる人とも、あほふなる人とも云べし、樂しみの爲女郎の爲に、止事を得ずしてなすべき事多し、其むだ遣ひの金銀いくばくならずと思ふべし、色の爲止事を得ずしていかなむ所、第一に金子、第二に着物、第三に腎水也、好色の大事此三に過ぎず、懸られずそゝらず、たいこにだまされずして、しづかにたのしむ事すいとす、たゞし人みな腎虚あり、きよふんにおかされぬれば、其愁ひ忍びがたし、腎藥を着るべからず、是をかへて四つの大事求め得ざるをひん客とす、此四つかけざるを大臣とす、此四つの外色とらんとするをやぼとす、四つの事儉約ならば誰の人かしはむしならずとせん、

百廿五段　是法師は淨土宗に

彌法大師は若道の元祖也といへ共、衆道の法をたてず、ぼんのふをはらし出家を立らるゝ有様、いとやぼらし、

百廿六段　人におくれて四十九日の佛事

つまにおくれて一周忌の法事に、旦那寺を請じ侍りしに、ふじゆ文哀にして、皆人泪をながしけり、和尚歸りて、彼日行の人ども、いつより殊に殊勝に覺へ侍るとかんじあへりし返事に、或者の曰、何共候へ、あれ程跡經に似候なんうへはといひたりしに、哀もさめておかしかりけり、さる御寺のほめるやうやは有べき、又客をせきておのれひとり客に成なんとするは、下戸の酒をしゐんとするに似たる事也、のみもせざる身にて人をしゐる時は、先我ことふなふ醉て人をば得つぶさぬ也、おのれ先つかい懸て客共をきらすとも、人はよもほめまじと申き、大酒して醉くるひてもしたりけるにや、いとおかしかりき、

百廿七段　ばくちのまけきわまりて

節句前になつて、うれしき文來らば、あわてゝ行べからず、極めてせつくたのまるゝとしるべし、其時をはづす、かひずき買人といふ成と、或者申き、

百廿八段　改て益なき事は

金つかふて益なき時は、つかわぬをよしとする也、

百廿九段　雅房大納言は

山口の初いとは情深くよき女郎にて、若狹屋の客請出ばやとおぼしけるころ、わる口成女郎、只今淺ましき事を見侍りつと申されければ、何事ぞと問けるに、

初いとかぶろをせつかんし給ふに、しゆろ箒にて息もたゆる斗に、ちよふちやくし給ひしを、見侍りつと申されけるに、うとましくにくゝ思ひて、日比のかわゆさもたがひ、身請もし給わざりけり、さばかりの女郎禿をしかりたりけるは、思はずなれど、しゆろぼうきは跡なき事也、空言は不便なれども、かゝる事きゝてにくみ給へる客衆の心ざし、いととふとき事也、大かたいとけなきものをしかりつねりたゝきて、つよく呵らん人は、ちくせう殘害の類ひ也、すべて禿は、ちいさきより此里にうられ、多くの人にいじられ、親にすてられ、姉上郎にしかられ、ねむたきをこらへ、夜晝のわかちなくつかわるゝ事、偏に子共成ゆへにつかわるゝ事甚し、渠に苦しみをあたへて強くしからん事、いかでかいたましからざらん、すべて幼なきものを見て、慈悲のこゝろなからん人は人倫にあらず、

百卅段　顏回は志し人に

傾城は心ざし人に全盛をおとらじと也、物をもらいだます事、恐ろしき盜人の志しにもおとるべからず、又やぼなる人をかけ、てれんにはづませて身をうたする事有、すいなる人は心得たれば、はまる事にあらずと思へど、初心成心には、身にしみて面白くうれしく、いとふしく思ふ誠に切なるべし、是をだまして遣はする事慈悲心にあらず、すいなる人に笑かけ、しロたんかけ、身振かけ、おもはくかけ、皆空言なれども誰かしんじつのまことゝ思わざる、身をはこぶより心をいたましめるは、人をそこなふ事なを甚し、物日を請るも、多くは心よりうく、外より來るもの入りは少しもなし、盜みてあふをたゝ成と悦ぶ、げには揚錢なき事なれ共、一節句あてがわるれば必ずあて違ふ也、てれんのしかけ也といふ事をしるべし、地黃をのみて間もなく、かう物をくひて白頭の人となりしためしなきにしもあらず、

百卅一段　物にあらそわずおのれをまげて

人と爭わずおのれを枉ひて人をそだて、我身を後にして人を先にするにはしかず、好色の遊びにも、口舌を好む人は女にあやまらせんため也、おのれが通り者なるを爭わず、さればつよき女郎にふられて興なく覺ゆべき事、又しられたり、よはくかゝりて女郎を悅ばしめんとおもはゞ、更に遊びの興なかるべし、嗜

しのはをぬいて我が心を慰ん事誠に背けり、寐物語にはたはぶるゝも、女郎の心をはかり、さきくゞりして通り者也とじまんす、是又よねの心おく所也、さればはじめて口舌よりおこりて、大分金つかふ類ひ多し、是皆口舌を好む失也、人にしられん事を思はゞ、金つかふて人よりかき取んと思ふべし、わけ者とならばかさどらず、人にけなされていふ事をせんとすべし、目だゝぬ金をつかひ家をすつるは、たゞうはきなる事也、

百卅二段　まづしき者は財を持て

貧しき者は百そうを愛し、老たる者は女郎の一座を樂みとす、おのが分をしつておよばざる時は、速にやむをすいといふべし、跡先しらぬはやぼのする所也、金なくして吉原へ行はあやまり也、まづしくてやすきを好み川岸へ行ば病をうく、

百卅三段　鳥羽の作り道は

新吉原は、境町よりひけて後の名にはあらず、むかしよりの名也、明暦年中にかはれり、いにしへはあし生る原にて侍る、

百卅四段　よるのおとゞは東御枕也

三浦の太夫は二人禿也、さはいへど全盛なる女郎は、格子も二人禿也、大かたは皆禿一人也、若むらさき曽らく三人禿也けり、先はなき事也、金山は太夫なれども、かぶろ一人つれたる事いかゞと人申けり、たゞし新造にて自身の働きならざるゆへ、二人かぶろにはあらず、

百卅五段　高倉院の法花堂の

京町の白菊とかやいふ女郎、或時鏡に向ひ貌つくづくと見て、我顔のいとおとなしくすがりたる事を餘りに心うく覺て、鏡さへうとましく心地しければ、其後は客をせず、久しくなじみたる客一人にあひて、終に其方へ行侍りしこそ難有覺へしか、うは氣なる女郎は人の上をのみはかりて、我身の年のあくるをもしらざる也、我身のすがりをしらずば、借金濟す事成べからず、さればおのれをしるを利發成女郎と云べし、すがるれ共しらず、借金あるをもしらず、人の悪口いふをもしらず、新見世へやられん事をもしらず、客のよしあしをもしらず、禿の比立をもしらず、身のうへの悲をしらねば、まして客の切るをもしらず、たゞし顔は鏡に見ゆ、年はかぞへてしる、我身の

事しらぬにあらねど、おち付の了簡なければ、しらぬに似たりとぞいはまし、形をいろどり美しくせよとにはあらず、たのもしき客と思わゞ、なんぞ誠を盡さざる、ていしゆ腹立ばなんぞ色を止ざる、すべて女郎のはやらずしてお茶を引は恥也、年明れば自前に成て出見世につとめ、かしに出てぬにまじわり、年寄てはやり手になりて、雪のかしらをいたゞきて色なる座にまじわり、況や及ばざる色になづみて、叶わぬ事をなげき、切たる客をわび、亡八に呵られ、傍輩にわらはるゝ、人のあとふる恥にあらず、さもしき心にひかれて、自ら身を恥しむる也、さもしき心の止ざるは、らうすべき大事何爰に來れりと、慥かにしらざれば也、

百卅六段　資季大納言入道とかや

末廣大臣とかや聞へける者、揚屋にて若ひもの共をあつめ、和ぬしのとわれん程の事、何事成とも答へ申さゞらんやといはれければ、若いものいかゞ侍らんと申けるを、さらばあらがいて見よといはれて、ばかばか敷事は片はしもしり侍らねば、尋ね申迄もなし、何となきそゞろ事の中、覺束なき事をこそとい奉らめと申ければ、何として此里の淺き事は、何事成とも明らめたらんといはれければ、揚屋若きものよね達も、興あるあらがい也、同じくはかけ事であらそはるべし、まけたらん者は尻をふり然るべしと定めて、人人わらいあはれけるに、揚やの男、おさなきより能きき習ひはべれど、其譯しらぬ事はべり、かくれんぼうにまじらぬものは、ちつちや子持やかづらの葉と申事は、いかなる心にか侍らん、承らんと申けるに、大臣はたとつまりて、是は子共のいふことなれば、いふにたらずといはれけるを、もとより能事はしりも侍ず、そゞろ事を尋奉らんと定めつと申ければ、大臣まけに成て、せひなく尻をぞ振れけり、

百卅七段　くすしあつしげ

たいこの半七、揚屋町の茶屋にさぶらひて、大臣にいひけるは、今お通り侍る女郎達の名も紋所も御尋あれかし、一々申侍らでは、ていしゆに聞あはせられ侍れかし、ひとりも申あやまりはべらじと申ける、時しもかすい坊參りあいて、然らば某尋侍らんとて、まづ鼻の高き女郎はいづれの家にか侍るとひけるに、三浦の隱居の小衣こそと申たりければ、すいのほど

既に顯はれにけり、今はさばかりにて候へ、ゆかし所なしと申されけるに、笑になりて歸りけり、

吉原徒然草卷之三終

吉原徒然草卷之四

一段　花は盛に月は隈なきをのみ

女郎はとしまに、若衆は兄分なきをのみいふ物かは、親に向ひて若衆を乞、云かけてくれぬも哀に恨ふかし、袖とめて角入たる額の靑きこそ見所多けれ、書ちらしたる反古の内にも、いもがりけるに首尾惡しけれ共、障る事ありてまかしてなど書るは、逢見てといへるにおとれる事かは、女郎のすがり若衆の元服をおしむならひは去事なれど、ことに片くなる人ぞ、前髪おち袖とめにけり、今は見所なしといふめる、いきぢも是迄也とおもふ事こそおかしけれ、女郎の情も、茶屋にて橫ぎらせたるをのみいふ物かは、逢で歸しうさを思ひ、仇名の立を隱し、闇き夜をひとりかへり、おやじが宿におわすを忍ぶこそ、色好とは云はめ、若衆のくまひたるを二十五六迄前髪置てながめたるより、元服近く成ておしみたるがいと心ふかう、靑みたるやうなる二才の身、せば角袖細作りの大小さしこなしたるは、振袖にも増りて又なくたのもし

き物也、誓詞など取かわし、念者を力に思ひ心中立たるこそ、身にしみて心あらん若衆もがなと俄かに戀しう覺ゆれ、すべて女郎若衆をば、さのみ目にて見る物かは、女郎はすがりても若衆は前髮なく共、捨ぬこそいとたのもしうおかしけれ、睟なるは偏にすける樣も見へず、愛するやふもなをざり也、片田舍の人こそしつこく、兩道ともに見へず、愛ずる樣もなをざりなり、片田舍の人こそしつこくもて興ずれ、女郎のひざにわぢより取りつき、あから目もせず守りて酒のみ附さしをのみ、果は大き成こゑして唄うたひ、女郎の肌へつめたき手をさし入、庭には小間物見せを出し、人のさげすむをもしらざる也、左樣の人女郎の道中見しさまいと珍らか也き、道中いとゝ遲し、其程まち久しき成とて、中の町の裏にて酒のみ物喰ひ晝寐などして、揚屋丁には供の奴を置たれば、只今お敵のお通りといふ時、各肝つぶるゝ樣に爭ひ、腰の物さし違へて羽織をあたまにかぶり、りきみおし合つゝ、獨も見もらさじと守りて、やくやちよい／＼などいつて通り過ぬれば、錢多顏して歸りぬ、只顏をのみ見んとする成べし、睟のゆゝしげなるは、茶屋の二階へ上りていとも見ず、しどけなく髮など打あらひてなまめかしきに、白き汗拭なんど結びて八文字にふり出したる道中のしこなしを、夫か渠かなどおもひよすれば、牛遣手などの見しれるあり、おかしくもにくらしくもさま／＼に行かふ客衆も色かあり、暮る程につみかさねたる葛籠共の所せく揚屋に有て、客衆もいつ方へか行つらん、程なく稀に成て、禿共のさわがしきもやみぬれば、見世々の御簾たゝみ戶へさし込て、夜のけしきも思ひやられて哀也、さん茶見めぐるこそ、すがゝきの音に心うき立物なれ、格子の前をこゝら行かふ人の、見知れるがあまた有にて知ぬ、世の人律義なるは多からぬにこそ、買人皆女郎にだまされぬべきに定りたれば、ほどなくどら打べし、有德成大臣成とも、末社あまた召連大樣成貌付するを、ぎうやり手茶屋などとりはやして、五町の福の神さまと云共、おこたる間なく此里へかよわるゝ、やがて金盡ぬべし、江戶の中に身上よき人の此里へ來らざる日は在べからず、一日に一人のみならんや、堺町木挽町品川護國寺にもゆく人、かず多かる日はあれど、多からぬ日はなし、されば比丘尼夜だかの類ひ迄隙

なるはなし、若きにもよらず、つよきにもよらず、思ひの外なるは此までの也、今日迄瘡かゝざるは難有不思義也、少しも實有と思ひなんや、駒とりといふ事を子供の寄合てするに、尻〳〵に取附たるを取れん事、いづれの子ともしらねども、追廻し獨を取ぬれば其外はのがれぬと見れど、また〳〵追廻しぬれば、彼是まぬけ行ほどに、いづれものがれざるに似たり、屋鋪衆のやしきを出るは、目付のたはけをよくしつて歸る事を忘れ、首尾のよしあしをも忘れ、主をそむける人の浪人の身と成、子共をあつめて是を樂しみと思へるは、いとはかなし、讓り得し寶を失ひ、好色にのみほこらば、いかゞ天命に盡ざらんや、其色になづめる事、屋敷衆のやしきへ歸る事を忘るゝにおなじ、

二段　祭過ぬれば後の葵ふよう成とて

盛過ぬれば、まゆおく事ふよふ也とて、年ま達剃らせられ侍しが、色もなく覺へはべりしを、よき女郎のし給ふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、つとめの内眉おとす事、太夫格子はなき事也、比過ぬればとやかふし給ふ程、ふる〴〵しく見へ給ふぞかし、周防の内侍の歌に、

かくれどもかひなき物はもろともにみすの葵のかれ葉なりけり

嫁入もいひかはせし客うはの空なれば、はまりたるの也、年は何ほど、としはいくつなど、客のくせ寐物語の口切の詞也と、大黒屋藤野が手帳に書り、古きよねのぢまいをいまだ年〻の內のやうに見せかけ、雇ひ禿のまいらぬをも、氣立のよき顔してつかひけるとも侍れ、床談義にも、床の內はとしまこそしたはしき物、又は隙がちなる新造とかけるこそ、このもしうなつかしう思ひよりたれ、西鶴が遊色の物語にも、傾國は眉にてこそ顔のしほにもなり、愛有て見ゆるとぞかける、おのれとうすかりしは、墨さすだに在を、名殘なくいかで剃すつべき、道中の袷かたびらも、八月十五日より小袖に召かへらるゝといへば、禿の袖は菊の折までも有べきにこそ、三浦のみよし野隱れ給ひて後、古きたんすの內に、髮の爲とてたしなみけるか、びなんせきの葉の多くかれたるがはべりけるを見て、折ならぬ音をぞかけつると、白妙のいへる返事に、あやめの草は有ながらと、もと禿のたのもがふる事を思ひ出しける、しほらしきぞかし、

三段　家にありたき木は松櫻松は五葉もよし

家にありたきは、高尾うす雲小紫昔からよし、道中はすらりと中肉なるが見事也、かせやまは三浦ならではなきを、此比は川岸に迄多くなり侍る也、よしのは寛文の比の太夫也、近き比は格子の名となりぬ、いと櫻はのび過よりいと古びたり、出見せにぞ在なん、おそき家出にてしさひらし、虫が痛てなどうそらし、女郎はしづかにうづだかく、色深もはりのつよきが床の内のめでたきも皆おかし、永くつとめの女郎は、全盛のよねの一座にどこやらけしきのあしきも、顔にしぼみ附たるゆへと心うし、しとやか成が酒に醉わさ〳〵と成たるは、心よくおかしとて、京の旅人もしとやか成をなん約束ながく逢れたりける也、たて出しの屋口北むきにいまも門のそとに侍るめり、野郎又おかし、女道とはかわりて、輪ほうしのけはひ、棧鋪の醉よりすぐに寄など、左右にはない圖にてめでたき物也、野郎陰ま、いづれも大き成よし、ぬれは曾我小栗愛子、武道は志田、哀なるはしんとく隅田川、女郎とかわりふる由になきは、藝の間にちよとかるなど、夫だけの慰にあり、あたまからくづしていとつたなからず、何事もしやんとしてよし、此外名字いひかけて名聞にくし、花も聞なれぬなつかし、女郎の名など附たるを珍らしく難有がるは、やぼのもて興る物也、女子の名はなくても有なん、

四段　身死して殘れ財る事は

貰われて名代とする事は、睟のせざる所也、よからぬ新造呼たるも心惡し、能女郎はかわりにも呼れず、誰をとあてがわれたる、まして口おし、又大一座の初會、盃の間おかし、我こそ夫をなどいふ者どもあつて、身仕廻に立ける跡にて爭ひたるさまあし〳〵、又誰にと志すよねのあらば、ざしきへ出ざる内にぞ極むべき、つゞいてあひぬべきものこそあらめ、其外は何事も物このみせでぞあらまほしき、

五段　悲田院堯蓮上人は

さつま外記太夫は、いにしへは淨雲が弟子とかや、淨瑠理の上手也、故鄕の人來つて物語すと聞て、江戸よし原のよねこそ、云つる事はたのまるれ、都のよねは事請のみよくて誠なしといひしを、太夫、夫はさこそおほすらめども、おのれは都に暫くすみて馴て見侍るに、よねの心おとれるとは思ひ侍らず、なべて心

和らかに情ある故に、女郎のいふ程の事せやけくはりなくて、よろづ得いひはなたず、心よわく事請しつ、僞りせんとは思わねど、水がらにて和らかなれば、をのづから實とふらぬ事多かるべし、あづまのよねは我方なれど、げにははりつよく、活にして心すぐれ、偏にすくよか成物なれば、初會はよき客をもふり付、ひんなりとも氣に入たる客なれば、身を捨て逢成とことわられ侍りしこそ、此太夫聲高く荒々しくて、狂言に上るりの乘ことわり、いとわきまへずもやと思ひしに、此物語の後こゝろにくゝ成て、多かる中に芝居にて用ひらるゝは、斯和らき所あつて、其わけしらるゝとこそ覺へし、

六段　心なしと見ゆる者もよき一言はいふ物也

心なしと見ゆる者も、よき一言はいふ物也、あるおそろしげなる河岸に、局しつらひて住し女の、位の君達にあひて、おもわくはおわすやと問しに、いまだ持侍らずと答へしかば、さては物の哀は知り給わじ、情なき御心にこそ、いと恐ろし、おもわくと云たりしに、さも在ぬべき事也、道ならぬつとめの内、假にも妻といふ物のあればこそ、親里の戀しさも忘れ、人の情をさとり、物の哀も是よりぞ知るといひしもさる事也、たとへ萬づにするすみなる人成とも、一筋の心を無下に思ひ暮すはひが事也、其人の心になつて思へば、誠に悲しからん、主親の物を盗僞りて通ふも色ゆへ也、是をいまめかしく罪せんよりは、世の中の若き子共にはやく女房をもたせ、寢覺のさびしからぬやふにはからはゞ、家も納り子孫も續て、誠になさけしりとはいふべき、

七段　人の終焉の有樣のいみじかりし事也

初の床入の有樣かたるを聞に、ひたすら閑にしていきも亂れ、地よねと違ひ諸事いんぎん成といはゞ、心にくかるべきを、愚なる人はあやしき事也、同じ金出して氣の詰る事に、本意にもあらず、いつど、護國寺、品川がましならんと覺ゆれといひける、床入の事通り者も慥に定むべからず、おのれが作を以てしこなすか、又はなじみといふ物に惜からずうちとくる首尾もあり、床の有さまは人の目利にはよるべからず、

八段　栂尾の上人道を過給ひけるに

あみすき又兵衞、淺草の觀音へ詣でけるに、二人通りながら、さばほんと云ければ、又兵衞立とまりて、あ

な尊とや、幼けなふして普門品の唱ふるぞや、いかなる御娘ぞ、餘りに尊とく覺ゆるはと尋ければ、江口さまの禿衆と答へけり、こは難有事かな、普賢ぼさつにあなれ、まさしき佛を物しつるかな迚、感涙をのごはれけるとぞ、

九段　御隨身秦重躬北面の下野入道

御眼北母妙開出入の仕立や新兵衛の內義は、若衆の相有人也、よく〳〵つゝしみ給へといひければ、いと恥しそうにして歸りしが、程なくうせにけり、誠に老たる人の一言神のごとしと人思へり、扨いか成相ぞと人のとひければ、きわめて色わろく酒ずき也、色のわろきは、亭主の鼻の大きく曲りたるを思ひやり給へ、酒をすきたる女にきらいなるはなし、いづれか違ひ在まじとぞいひける、

十段　明雲座主相者に逢給ひて

妙月比丘尼相人に逢給ひて、自分きらせんすじや在、見て給へと有ければ、相人誠に其すじ有、いかなる事やらんと問ければ、先御身の器量常の人にあらず、定めていか成お上人さまもやはかゆるし給ふまじ、是災ひのもと也と申き、果して深川の御寺と不義して捕われ人となり、鑓先にかゝり失給ひけり、

十一段　灸治あまた所になりぬれば

女郎あまた所々にて逢ぬれば、能女郎にやくそくの時、さわりといふ事近く人のいひ出せる事也、わけよくだにしてけばかまひなきとぞ、

十二段　四十以後の人身に灸をくわへて

五十已後の人、よねの座にて色とればほてくゝし、大口きかば必いやがるべし、

十三段　鹿茸を鼻に當てかぐべからず

にんにくを喰ふて色の座へ出べからず、ゑならぬ匂ひ在て鼻をつまむといへり、

十四段　能をつかんとする人よくせざらん程は

醉にならんと思ふ人、よし原の事しらんほどは、なまじいに人と一座せじ、おゝかたわけ覺へてさし出たらんこそ心にくからめと、やぼのいふめれど、斯いふ人よき座配しる事なし、いまだ初心なるうちより、とふり者とまじりて笑わるゝにも恥ず、よねに度々なぶられたる人、天性其おしへはなけれど、色になづまずうわ氣をせずして年をおくれば、金つかふ屋形衆よりはついは醉の位にいたり、名有よね達にかわゆ

がられて、双なき名をうる事也、お江戸の通り者といへ共、始はやぼの聞へもあり、下戸のさゝ酔もありき、され共其人よきふうを見習、金なくなさで放埓にせざれば、人のそしりなく、女郎と一座する事平生と替るべからず、

十五段　或人曰年五十に成まで

或人の曰、年五十になるまで粋に至らざらん人は、色を止べき也、はげあたまを作りたるもうるさし、老人の事をば人も得笑わず、酒にまじわりたるもあいなく見苦し、大形萬の色を止て、談義まいりこそめやすくあらまほしけれ、好色にたづさわりて、年の寄たるをうらむは下愚の人也、ゆかしき事あらば咄しにて聞べし、其わけしりなば覺束ならずして止べし、もとより望む事なくしてやまんは第一の事也、

十六段　西大寺靜然上人腰かゞまり眉

廣德寺前の名高き盲女、其かたちうるわしく誠に色ある氣色にて琴彈きければ、金銀内大臣殿、あな尊しことのきんの音やとて、大錢十疋はづみければ、光次卿是を見て、目くらの琴ひくにて候と申されけり、後日に鎚市といふ座當をめして琴彈かせて、此氣色たゞとく見へ候とて、內大臣殿へ見せられけるとぞ、

十七段　爲兼大納言入道めしとられて

三浦の小紫請出されて、迎ひの人おほくつきて曲輪をつれ行ければ、光次卿中の丁にて是を見て、あなゆゆし、世にあらん思ひ出かくこそあらまほしけれとぞいはれける、

十八段　此人東寺の門に雨やどり

此人根津の茶屋に雨やどりせられたりけるに、女共集り居たるが、手も足もふとく目つきしだるうして、顏には白粉こと〴〵敷つけたるを見て、夫々にはしたなきは茶屋者かな、尤愛するに足れりと思ひて、守り居ける程に、やがて興つきて、見にくゝいやらしく覺へければ、たゞ傾國のよねにはしかずと思ひて、歸て後、年比目かけ者を望みて、はで成者をかゝへ置てたのしみと思ひつるは、根津の茶やものを愛するに似たりけりと、興なく覺へければ、年ごろかゝへ置ける目かけ者、皆いとま出しけり、左も有ぬべし、

十九段　世に隨はん人は先機嫌を知るべし

大臣にしたがわん太皷持は、まづきげんをしるべし、

ついであしき事也、女郎も耳にさかい、客衆の心にたがいて物もろふ事ならず、さやうの折ふしを心得べき也、但し大屋より斷を請、扨はせん義のおこりぬる事は、きげんをはからず席口あしとて止事なし、生住衰滅のうつりかわる誠の大事は淺草川のみなぎり流るゝがごとし、たゞ人よりくるゝ斗りを待、しばしも滯りぬればたゞちに氣のつくやふな惡じやれを云はざれば、もろう物あてにして、必ずもらわんと思ふ事は、わうちやくならずといふべからず、大晦日迄餅米の用意なく、まして店賃の心がけ在まじき也、春〳〵れし人は夏になり、夏もらいし物はまして秋くるゝにもあらず、春はやがて大臣達へおとりを懸て無盡を催し、夏より既に盆前迄は、帷子ゆへ心やすく出あるかるゝ、十月は最早冬がれの景氣、二の足なる大臣は、おのが下やしきへさへつれず、いはんや色らしき一座へはさたなし也、わる切にてまかるゝをしらぬにはあらねど、まかるゝをおしかけては、座敷の躰おかしく、鼻あいしらになり、さながら歸れがしの座つき、盃の廻り甚だはやし、こ新らしきぢ口言ても、座中にが笑にしてすゝまず、大臣ひたと座を立、來るまじき物をと後悔す、四季の衣服なをさだまらず、一生我紋ならぬ紋所を着て、夏は小袖をも我宿におかねば、盜人の心遣ひせざり、人皆みのなき事をしりて、少しの事然も才覺ならざる宿に、明日の八木なきも覺へずしてさわぎありく、思ひがけなく物もらひたらん時に、店ちん米屋も濟すべし、七草のかゆはるかなれど、はやせきぞろの來る事をしるべし、

二十段　大臣の大饗は

大臣の大さわぎは、さん茶を惣仕廻にして、かさ取常の事也、八町堀の大盡殿は、二丁目中松屋にて惣仕廻し給ひけるに、松風立ぬ物也ければ、ざしきへ出ざるまゝ興なし、他所にて遊ばんとて立給ひける、四つ過にて見世なければ、江戸町ゆふきやへおわして、井筒をもらひて遊び給ひける、

廿一段　筆をとれば物かゝれ

女郎を見れば逢たくなり、野郎を見れば心うかれ、三味糸をとれば桴をおもひ、廻る若者を見れば金やらん事を思ふ、心はかならず事にふれて來る、かりにもばさうのたはむれをなすべからず、冬枯になりて、さん茶の見世を見れば、何となく口きく女郎も見ゆ、思

わずして他年の望をはらしぬる事もあり、さむ空に今宵見物してあるかざらましかば、此女郎にあはざらんや、是則淋敷所のしるし也、こゝろ更におこたらず共、座敷持の見世にありてきせるなんど持、かりそめに遊ぶ風情して居たらんは、隙なると見て逢べし、つとめもとより二角ならず、外聞を思ひて身あがりすれば、内證かならずせつなし、恥也と思ふべからず、こゝろまちなりと云にて、初會をばくろむべし、

廿二段　盃の底をすつる事は

さん茶の見世くすぼる事は如何心得たると、或人の尋させ給ひしに、凝油をとぼし侍るゆへ、くすぼりてあしき匂ひの候らんと申侍りしかば、凝油にてはなし、魚油也、いわしをしぼりて其油をとぼしけるゆへとぞ仰られし、

廿三段　になひむすびと云は

吉彌むすびといふ事、吉彌といふかぶき子の、帶にむすびしよりいふ也、もとたまづさ繕ひ也、吉彌がむすび初しといふは誤り也、

廿四段　門に額かくるをうつと云は

門のはしらに行燈かくるはよからぬには、自身番の寄合に止たり、辻々のあんどふは常の事也、みぞにたの高あんどふは、今二ッ三ッも有なんと、元と名主隱居も仰られき、其外常に心附たき事のみ多し、

廿五段　花の盛りは冬至より

女郎のさかりは十七より十九二十とも、水あげより七年ともいへど、二十三四過れば、すがるゝ事おうたがわず、

廿六段

伏見町の蔦屋にて禿をころせし遊女に、其夜逢ける客は法師也しよし、綸旨をふところに持居ける、此法師とらへられけり、淺づまとひとつに禁獄せられにけり、山田や次郎左衛門名主せし時になん侍りける、

廿七段　太術の太の字

太田屋太の字、點打うたづといふ事、若き輩相論の事有けり、もりといふ男はしり見て來にけり、太田屋ののうれん點打たるを書たると申き、

廿八段　世の人あひあふ時

鉦者あつまる時、かりそめにも金言いふ事なし、必らずそら言有、其事を聞に多くはよねの事也、音羽町のひばん、よし原の是悲せい咄し多く、誠なる事少な

し、是を語る時たがひの心に無益の事也といふ事をしらず、

廿九段　あづまの人の都の人にまじわり　あづまの人都のよねになじみ、つれてあづまに下り身を立る、又もとの本妻わかれぬるを恨み、喧嘩我儘をふるまふ、有様都のことばと違ひ、物毎ぶこつなるも見苦し、

三十段　人間のいとなみあへる業を見るに　町人の傾國へ行を見るに、よねに能見られんとて、ゆるしなき紗綾ちりめんの衣服を着る事、武士におとらじとするに似たり、其ゆるしを得ずして、みだりに用る事なかれ、たとひ衣服にてかざるとも、屋形衆のしなしにはよもうつるまじ、夫を似する事甚だわろし、

卅一段　一道にたづさわる人　女道にたづさはる人、若道のたのもしきをにくみて、哀わが道ならましかば、斯よそに見侍らるゝ物をと云、若衆を好事非義成事なると、偏にわろく覺ゆるなり、しらぬ道のうたがわしく覺へば、あな浦山し、などかこのまざりといひてありなん、我すける事のみ

云出て人と爭ふは、あばれものゝけんくわを好み、世間の者のがさつに物いゝちらす類ひ也、武士としては女にほこらず、言葉のたがはざるを本とす、よねにたわぶるゝは大きなる失也、定れる妻女にても、後家のうつくしきも、女にほれられんとおもへる人は、たとひ詞に出てこそいはね共、心中にそこばくの咎あり、つゝしみて是を忘るべし、色にも見へ人にもゆびざゝれ、災ひをもまねくはたゞ此女難也、衆道を専らとする人は、心たのもしく武の道を知るゆへに、禮義常にみだらずしてさらに女にほこる事なし、

卅二段　年老たる人一事勝れたる才の在て　年まなる女郎、わけて勝れたる繁昌にて、此人の出し跡にては、誰かかほどなる全盛あらんなどいわるゝは、とてもうきふしの身なりせば、つとめもかなしからじ、さはあれど夫も身請する客もなきは、年ゝの内同じはり合にて過にけりと、つたなく見ゆ、今はもなかぞと思ひて、爲にならぬ客なんど麁末にせば、必ずかれなん、大形はよわ〳〵としたる客をば、こしにつけてすゞろに逢ちらすは、さばかり情のあらぬにや

と聞ゆ、おのづから屋形衆はすなほなれば、うちつけにいふ人もありなまし、てれんとさだかにもわきまへしらぬなど、わるじやれもいわざるは、猶誠に客の至りとも覺へぬべし、まして小姓あがりの色殘れる顏にて、あどなく萬もどきぬべくもあらぬ人を、功のいかぬよねははき違ひて、かげ口言きかするを、さもあらずと思ひながら聞居たる、いとやさし、

卅三段　何事の式といふ事

わかいがきどく能しつてといふ事は、寛永の始め迄は人每にいわざりけるを、近き頃よりよし原にて言詞也と人の申侍しに、天和の頃妙心高尾が、ふかき客の何方にか來居るを、禿に尋とひし時、新造の小紫が、いせやへ御出と其まゝ答へしを、若ひがきどく能しつてと、ほめしためしもあり、

卅四段　さしたる事なくて人のがりゆくは

べしての事なくば、人の約束に行はよからぬ事也、用有て行たりとも、ちよと逢たらばとく歸るべし、久しく居たるいと惡し、人のやくそくなれば事むづかし、せきもいで、腹もたち、心も靜ならず、萬の事さわりて互ひの爲益なし、いとしつこげにおらんもわろし、心のごとくなき事あらん折は、中々其よしにてはあらじ、同じ心にむかはゞ、逢つる客のおろそかならん、ふたかたを心よくしのがんには、女郎の心づかひ苦しさ限りはあらざるべし、人の約束にゆきて、思ふまゝに逢たらんは、誰も有たき事也、ことなるわざありなば、客の來らざらん間に、茶屋抔にてのどかに物語して歸りぬるいとよし、又かぶろなんど附ぬるに、歸らんなどいと久しければ、文にて又こま〴〵といひおこせたるいとうれし、

卅五段　貝をほふ人

性のわるき男の、我内なる女房をばおきて、よその内にして下女の袖をひき、鼻の下を永くして目をくばる、又近所なる人の小むすめ、かたち見よきは、うばかゝ迄わりなくくどくとは見へずして、とやかふしておうよう手に入、礙せゝり斗ならず、遊里の色酒に身をひたし、端々の色へもたづさわり、野良をかわゆがりて、又おどり子をかこひ、精進日には比丘尼とたはぶれ、宿の夜食ぶくす事は稀也、女房の心いかにぞや、胸の内くら〳〵とすれど、さながら走りてもゆかれず、爰に立たるこゝろせいもん、必ずほぐるまの惡

念、色め外に見ゆるもとむべからず、只爰元をたゞしくすべし、すぐなる心終に顯るべし、非筒の前の歌に、沖津白波たつたやま、夜ふけてひとり行、ふけてひとりゆく道のほどをあんじてよめり、さきにての事わざ思ふ事なかれといへり、身をかためん道もかくや侍らん、うちをつとめてたんのうさせて、うれしがらせ、心やすくほしひまゝにして、遊びたき物なれども、腎水必ず限有時、はじめて療治をもとむ、色にふけりきよにしづんで病を醫者にめづくるは、愚成人也と竹齋がいへるごとし、目の前なる妻の愁をやめがてんさせて、折々たのしまんは其悦久しくなからんや、伯父舅の來りてにがく〳〵しくせいするとも、かくほぐれかゝりたるは、長刀あいしらいにして歸し、直に其あしにてかけ出す、かゝる人には藥もなからん、

卅六段　若きときは血氣内にあまり

新造の時は、たんき内にあまり、心物がなしく、ひがみ多し、やり手を師匠さまのようにこはがり、身を姉女郎に任せて、部屋にては腰元のやうにつかわるゝ事、かぶろの時に替らず、わるさ止ずしてはな紙をついやし、名代の外の客は、おやぢ座頭さてはたこ持也、是等の人にいまだ盛りなき身を任せて、心に人をはぢ人をうらやみ、好む所日々に定らず、かぶろの時の色を心に込ておもへど、なまじいにはしたなく、かけあるかれもせず、いつまでもかくあらんかとおもへば、身をいたはらん事もなりあひにして、身の全くひさしからん事をば思わず、たまさかにすがる客に心ひきて、長き夜も客の歸る迄いねずしてつとむ、かかる客は二度と見へず、おのづから汲すつるひさくもなければ、心ならずいやなる男にも、まことの枕をかわす、老ぬる客はせいしんおとろへ、其くせ愚痴にしてしだるうして心うごく所なし、おのづから比たちしに袖とむる客なければ、無益の心をくるしむ、果は姉樣のせにゝて愁なく、人の笑わん事思ふうたぐりもなくなるめり、わきふさぎては、節句物日などの心づかいの悲しさ、又新造の時にまされり、茶屋揚屋にて樣つけられいでも、禿の打の心やすき、新造よりまされる也、

卅七段　小野小町が事きはめてさだかならず

西條高尾が行衛きわめてさだかならず、世高尾おと

ろへたる様を、近き頃い香保へまかりし人、あゆのいづる邊にして見たりといへり、全盛は躰は大蔦字やの小さつまが噺にて聞りと云說もあれど、小さつまは延寶のすへに懸川の客と里を出ぬ、高尾が盛り成事、其後の高尾がことにや覺束なし、

卅八段　小鷹によき犬大鷹につかひぬれば

小高はよきかぶろ、長門がつかひぬれば、小高わろくなるといふ、つかふ女郎の全盛によることはり、誠に然也、禿おふかる巾に、客をだましつれをかけ、唄うたふかぶろはなし、是小鷹斗也、ひとたび里を出て、又歸りて長門が禿となる、いづれの時か誠に出ぬらん、何事をいひけるもおとな恥しき程也、されどおろか成客といふ共、かしこきかぶろにおとらんや、

卅九段　世には心得ぬ事の多き也

世には心得ぬ事多き也、先女のりんきも、折ふしは興にも成なん、男の氣のどくそうににげ廻るを、面白く心得てりんきするも、さもなくして目のほそきを見ても、何方にか心を通し給らんなどゝてせくもあり、めのそほきも男のとがぞかし、斯氣をつくるに隨い、よろづにうとましく成て、狂人のごとくに成、息才なる人も病者となり、いはふべき日にも髮かたちをも作らず、食事をも喰ずして、腹立顏成も氣のどく、他の人來りても青女房のごとく也、折ふしの噺し抔男としすれば、何事歟身の噂を云合、わらひのゝじるなんどと腹あしく見ゆ、斯思ふから我身をたしなむ躰もなく、髮はおどろのごとく亂し、まゆひたいなど剃事もなく、歯は種茄子の雨におひしごとくしらばけて、手足の爪は猫のごとく、一日いがみ合、聲の限りに内外の者までしかり廻し、下女やはしたの老女迄引出し、しつとの妬みするは目も當られず、勿論若き女のけはひするも白目がちに見る、淺ましくもおそろしく、心のよこしま成ゆへに、おつとの日待ばなしなんどに行しにも、大形色里の通ひならんと、夜明まで軒の下にたゝずみ、老母の心ざまあしくうみ付給ひつらんなどゝて、得ならぬ方まで打うらみ、行先行先へ附そひてもゆかれず、歸りぬればまづ小者でつちをとらへ、何方へかゆきつらんとせめとふて、しつとの心深く持て、此の世も後の世もゑき有べき業なく、いかゞせん、斯くうとましけれど、女にはあやまち多く、寶をもうしなふ、病をもまふく、むつ事も

たのしみ也といへど、萬の病も災ひも此道よりこそおこれ、子供にはる子をわする丶といへり、別れぬればその過にし事ども思ひ出してなくめる、いか成智者も女子には智をうしない、善根をやく事火のごとく、悪心をまし、萬の戒めをもやぶりて地獄におつべし、女の手より物を取ば、五百生が間手なき物に生るとこそ、佛も説給ふなんめれ、斯いましめし女なれど、捨がたきは色也、月の夜は諸共に月よりなをながめ、初雪はやくそく在とて、寒きをもいとわず足ばやによねの方へはこび、花の盛成には打連立て、花よりも猶愛し、うさをもわする丶也、雨中の淋しきには起もあがらず、ひとつしとねに打ふし、心とけたるもよし、夜はせばき巨燵にてせ丶り燒などして、喰あひたるもいとおかし、旅のかり家野山にても、女子はしたしみ有、芝の上にも打とけて、さ丶への酒をしひまいらせ、折もがなとたはぶる丶もたのしみぞかし、上さま方へもの申度事ならんにも、男は遠々敷、色よき女はよき便りぞかし、斯女に心とけてしのびあひぬれ共、ゆるさる丶は此みち也、夫らの引あげたるにまどひ、ねばれたる顔つきにて物をきあへず、ちどり足してうろたへ廻るも、心のまよひ也と思ひながらも、又あやうし、

四十段　黒戸は小松御門位につかせ給ひて

爪戸とは、紫の君たゞ人におわしまし丶時、姉女郎の雛遊びに、まさな事せさせ給ひける時の間也、にくさげ成猫のより來て、調度をけがせし程に、手ぼそにておひ給へば、塀のかたへにげ丶り、其時猫のかけ上りたるあとあれば、いまも爪戸といふとぞ、

四十一段　鎌倉の中書王にて御鞠有けるに

いばらぎ屋にて、松の君達まわり花の在し時、河骨のしほれければ、さしでたる男の扇のほねをさしてまはせければ、少しの内其わづらいなかりけり、下々にはきて成事哉とて人感じ合りけり、此事を有者語り出たりしに、六條の僧の、かうほねは水をあげかぬる物なれば、さわら木杉のたぐひこそ、よく水をあぐる物也、すぎばしはなかりしかと宣ひしかば、はづかしがりき、いみじと思ひし扇子のほねむげに成し、花の手つだひする人、さわらはり金などたしなむ事故實也とぞ、

四十二段　或所のさぶらひども

屋敷方の女中達、つれだちて道中見物し給ひけるに、かぶろ二人つれしこそ、みな太夫也といふを聞て、供がましき女房、かぶろ二人つれてでも、格子もこそあれと忍びやかにいひたりし、こゝろにくし、其人ふるき女郎のはてなりけるとかや、

四十三段　入宋の沙門道眼上人

念佛の沙門道鐵上人、常念佛發起して、土手のほとり聖天町のうちにおはしき、かの岸々に談義を催して、庵室を取立て西仕寺と號す、此ひじりの申されしは、吉原の大門は北むき也と、かの翁が說とていひ傳へたれど、細見の圖などにも見へず、更に所見なし、かの翁はいかなる才覺にてか申けん覺束なし、上方のしま原の北むきは寒き事勿論也と申き、

四十四段　さぎちやうは

三浦の几帳はいづみやよりぞ身請しける、几帳を京町より淺草邊へ出して、かみさまにたる也、願成就したればとてくわん音さまの繪馬おろしける也、

四十五段　ふれ〳〵小雪たんばの小雪といふ事

たねんねやおころ〳〵と、御子樣がたをすかすも、上ンつかたのうば達のむつ事ぞかし、夫を下つかたにては、ねろ〳〵此子よといふ也、ねん〳〵ぼうしや小ぼうしとすかし給へと有者申き、むかしよりもいひける事にや、厩どの王子いとけなくまし〳〵し時、后達のかく被ゝ仰けるとて、太子傳記にも見へたり、

四十六段　四條大納言隆親卿からさけといふ物を

揚屋町いせや惣三郎、初ての客衆へ鹽がつをを焼物に出しければ、かくあやしき物まいるやうあらじと人の申けるを聞て、夏かつほと申魚まいらぬ事にてあらんにこそあれ、鮭の鹽引何條まいらぬ事あらんかわと申けり、

四十七段　人つく牛は角をきり

物もらいたがる野郎をば、欲のふかきといひ、ひたと無心いふ女郎をば、熊手性也と名をつけてしるしとす、それをしらせずして、やぼをはまらせぬるはつれの咎也、つかみづらのはりたる牛をば、養ひかふべからず、是皆とが有すひのいましめ也、

四十八段　相摸守時賴の母は松下禪尼とぞ申ける

山口の太夫初菊の姉は、しら糸とぞ申ける、初ぎくを

はじめて新造に出されける時、尾張屋にふかき客ありて、初菊をつれてけるに、酒宴こと興じて、禿白いとが上着にきける小袖のつまへ酒こぼしける、白糸禿をしかりもせず、其小袖其まゝぬぎけるが、おはるにやらんけしきにて呼けるを、太鼓の與左衛門さゝやきて、何某其儘よふしてまいらすべし、さやうの事に心得たる者の候と申ければ、其人よも元のやうになし侍らじ、おはるにとらすべきと答へければ、與左衛門又さゝやきて、餘り大氣にこそおわしませ、少斗のしみ物あらんは、夜る召たるもよく候と重て申ければ、わしもさのみうわき也、女郎は人中にてしまつらしき事を見せず、さもしき心もたぬやふにと、若女郎に見ならはせて、心づけん爲也と申されける、いとやさしかりけり、色をかざるつとめいやしからぬを本とす、繁昌也しもことわり、全盛の心かなへり、すへながくさかんに太夫つとむる程の人を、新造にもたれける、誠によのつねの遊女にはあらざりけるとぞ、

四十九段　城陸奥守泰盛はさうなき馬乘也けり

世之助椀久は、そうなき好色の人也けり、めかけをかかゆるに、物言つかへすくわのなき女を見ては、是は助べい也と歸しけり、又顏の色青くしてよは〳〵としたる女を見て、是は白血か長血あるべしとてかゝへざりけり、道をしらざらん人、かばかりおそれなんや、

五十段　吉田と申馬乘の申侍しは

ゆうぜんと申法師の申はべりしは、道中の出女こわき物なり、かならずやまひ有と知るべし、かうべき女をばまづよく見て、髮の毛うすきかあつきかをしるべし、次に目のいろわるきか、顏に吹出物やあると見て、心にかゝる事あらば其女をよぶべからず、此用心をわすれざるを第一とするなり、これ秘藏の事なりと申き、

吉原徒然草卷之四　終

吉原徒然草卷之五

五十一段　萬の道の人たとひ不堪なりといへ共

よろづの道の者、たとひ茶屋女也といふ共、性とくてれんの女になじむ時は、かならずつかい過る事甚し、たゆみなくかけこまるゝに、心附なく人より自由に廻ると計思ふゆへとく打也、遊女のみに限らず野良也とも、おふかたの振まひ立居にも氣をつけたしなめるは德の本也、たがひに心易くつくろいもなきやうなるは失のもと也、

五十二段　或者子を法師になして

或者子を唄うたひになして、世わたるたづきにもせよといひければ、おしへのまゝに作右衛門が弟子と成、うたうたひにならん爲に、先兵法をならひけり、供あまたつれぬ身は、下谷番町のすへにて、猥藉もの酒ゑひに逢たらんにせびらかされん、迯はしるも心うしと思ひける、次にくがひする身の、座敷にて茶など出る時、呑やうしらぬも人々のふつゞかに思ふべしとて、茶の湯をならいけり、ゆるし印可も取たし、立花かざりて迄もいよ〳〵よくしたく覺へて、たしなみけるほどに、うたならふべき隙なくて年よりにけり、此男のみにあらず、女郎のうへに此事あり、若きうちはいかほどばさらに身を持ても、色といふ物にて大臣大名どもしたひ戀しがられ、世をのどかに思ひ、萬年も若いものゝやふに心得て打過ぬ、次第におとろへ、終には八九月の澁あゆのやふに、かさ〳〵と成て手足も靑すじふとく肉脫して、鏡に向へば我身ながらぞつとして、むつとする顏は、丸寐にしたやうにしわだらけに、目は落くぼみ借錢はふへ、名代には出られず、見世に日をくらす、後には遣手のぬり下地とはなりぬ、身をもだへ悔れども、取かへさるゝよはひならねば、衣紋坂を下る大八のごとくにおとろへ、おわり賄とはなりぬ、永くつとめの間に、むねと思ふ客あまたのうちに、色を捨ていづれか實うわきをよく思ひくらべて、一時もはやく身を片付事を第一とすべき也、たとへば俳諧する人、一句もいたづらにせず、人より先に仕舞丸をすてゝ長をと句つくるが如し、又三點より十點物を取はやすし、十點をこへて十一點につくは難し、一點也ともまさらんとこそ

あんじつくべき也、やり句せん事をおたと覺へて、此趣向あの句作になづみ、かれも得ず是をも定めず、其内に人にとられて句はおくるゝ也、京丁の女郎やりての方へ用在て、既にゆきつきたりとも、西がしのあたりにてきげんのあしき客を見附ば、門より取てかへし、其客をとらへ、晝夜を逢て機嫌を直し、末々深くして逢べき也、みち中にて聲高に云出んもはづかしければ、朝の歸を大門にてとらへんなどゝ思ふゆへに、夜の内にかへりぬれば死る迄の損、是を恐るべしとせり、あわんと思ふ客ならば、小袖羽折の破るゝをもいとふべからず、人のつもりもはづべからず、人のあまた在ける中にて、土佐流の三味糸にかしはいでと云手あり、庄右衛門こそつたへてしりつるといひければ、此道のすきなる男其座に在けるが聞て、雨のふりけるに、合羽からかさや有、貸給へ、かの手を習ひに庄右衛門方へまからんといひけるを、餘りに物さわがし、雨やみてこそと人のいひければ、無下の事を仰らるゝ物哉、人の命は雨の晴間をも待物かは、我も死庄右衛門もうせなば、尋てんやとてかけだしけり、行つゝ習ひ侍にけるとこそ申つたへたるこそ、ゆゝしくきどくに覺ゆれ、死て又來はてぬめる身かと、多門もうたひし也、此かしはいでいぶかしく思ひけるやうに、一大事因緣をぞ思ふべかりける、

五十三段　歸婦は其事をなさんと思へど

今日ばかりは酒を飲ぬやうになさんと思へば、見捨かたき口說をとり持、せびなき大酒にのみ暮し、心待の人はさわり在て、いやなる人は來たり、賴たる紋日は斷、差合在方よりは約束しげく、きげんあしかるべき人はさわなくて、少しの事を氣にかけて切るの歸るのとわめく、日々に過行さま、兼て思ひつるには似ず、一年の內もかくのごとし、よその女郎衆も又然也、新造の時より兼ていひかわしたる事も、たがひゆくかと思ふに、おのづからたがわずしてつれ行人もあれば、いよ／＼物は定めがたし、不定と心得ぬるのみまことたがわず、

五十四段　妻といふ物こそおの子の持まじき物なれ

野良といふ物こそなしとて逢まじき物なれ、いづれ紫ぼうしのひたい附、大ふり袖の氣色なんどこそ心にくけれ、誰がしが身請して所帶するなど、又手懸物

をかこひて相住など聞つれば、無下にこゝろおとりせらるゝわざなり、とし若き野良は色にまよひて、もしはわりなきわけにて隱居たらめど、若衆心も手前かせぎの心のほどおしはかられて、增し年ふけたる野良ならば、ふり袖着て茶屋なんどより歸り女房を守り居たらんは、さばかりにこそと覺へぬべし、まして家の內しまつさせん爲にむかへたらんは、なをはづかしからん、扨ふり袖の盛なくなりて後、他者方に成てまゝ母役などをつとむる、むかしの物いひのこりたる迄あさまし、いかなるうつくしき子共なりとも、なじみかさ成てひそりの靑きあと見んには、いと心つきなく見にてかりなん、女狂ひすとも女郎などはひた物こそなからん、時々かよひあわんは、年月經ても人もゆるさゞらめ、ゐからさまにとまり居つゞけなどせんは、判形の時はくろむとも、內證しりたる人はうとみぬべし、

五十五段　夜に入て物のはへなしといふ人口をし

夜見世の景氣こそ賑はしく面白に、鳥の寐に行比すたゝ〳〵歸る人は、六つ切の門を恐れて也、萬の遊び酒ごとのしむも、夜のみぞめでたけれ、晝は物ごとはげはげしう、中の町過るにも編笠きずしては、ばつとしたる姿にぞ在なん、夜は少しふるめなる羽折、じみ物したる小袖にてもいとよし、見世の氣色はあんどうのほかげにても、よきは能ものゝいひたる聲は、くらやみにても知たるは心にくし、大一座などはたゞ夜ぞ一きわしみ〴〵しき、さしてやくそくにてもなきに、夜うち更て來る人の、きよげならぬ夜着の內に客の歸たる待居たるいとにくし、心合たるとぢ心實にて逢人は、時をもわかぬ物なれど、ことに夜こそうちとけぬべき、晝は道中見侍らんこそ折ふしは面白からん、茶屋などへ出る人も遣はれなくひきつくろはまほしき、よき女郎のてうちんとぼさせて茶屋にいて、新造も夜食の膳とるゝ程に、身仕廻にすべりていづるぞいとしけれ、

五十六段　神佛にも人のまふでぬ日

さん茶にも、客の大勢ある日、夜はくひ物よし、

五十七段　くらき人のひとをはかりて

位なき女の奥さまとなりて、歷々なる物の顏せんはさらにうつるべからず、百姓の娘御前さまとなりて、

青草を見て何といふ草ぞと、つきの女中にたづねければ、茶せん草と答へしを、よき青ざし比と申せし事、ためしなきにあらず、文字も覺へざれども、文など取ちらし、腰元などによませ、やういろはも見へわかたぬさまにて、そこのよみくせにひなんを打、おのれが境界にあらざる物を本妻になすべからず、家納るべからず、

五十八段　達人の人を見る眼は

とうり者のやぼを見る眼は、少しもあやまる所在べからず、たとへば能女郎のてれんかけ口を言て、客をはかる事あらん、初心ゆへ誠と思ひて、いふまゝにかけこまるゝ人あり、餘りに色深くして世に有がたく、てれんをくう人あり、又何ともおもわで心をつけぬ人あり、又少しかしこ立して、誠にやあらんうそにやあらんと、案じ居たる人あり、又誠にはあらねど、よねのいふ事なればうれしと思ふ人もあり、又さまざまにさきくゞりしてすいなる顏つきすれど、つやつやしらぬ人あり、又少ししりた顏に、さにはあらぬなど爭ふ人もあり、又よねのいふほどの事ゝ打込てあざけり笑ふ人あり、又よくしりけれど、しらぬ顏はやぼなる風情にて、よねにうれしがらせんとする人あり、又此かけ口の本意を、はじめよりがてんして、少しもあざむかず、いつわりをも誠にしなす人有、好色の中のたはぶれだにしりたる人の前にて、此さまざまの得たる所、詞にてもしなしにても、かくれなくしられぬべし、ましてすいならざらん人の、まどへるやぼを見ん事、虫目がねにてのみのひげを見るがごとし、但ヶ樣のおしはかりにて、聖賢のみちをおしはかりいふべきにはあらず、

五十九段　或人久我繩手を通りけるに

或人本丁河岸を通りけるに、小袖より髮かたちまでいみじき女郎、梯のうれんの內へぞ入ける、心得がたく見るほどに、鑓手と男二三人出きて、爰におわしましけりとてぐしていにけり、三浦の高尾どのにてぞおわしける、よの常におわしましける時は、全盛にやん事なき女郎にて、二代目にもおとらぬはんせう也ける由、戀といふ物には人目もおもわぬ物にや、

六十段　東大寺の神輿東

新町の九郎助稻荷初午の神事とて、三浦の女郎達參られけるに、此君新造の時にて先にたゝれけるが、髮

をとし衆のやうにつくろい、けもなくかい結びて出給ひければ、隱居の津川、新造の髮ぶりにはいかゞ侍るべからずと申ければ、太夫の振廻は其女郎の知ることに候と計答へ給ひけり、さて後に仰られけるは、此津川古風の情を覺へて、當世の說をこそしらざりけれ、おいなりさまへの恐れあるゆへに、髮を洗ひけるがひざりしまゝ、ついむすびてぞ出ける、物は其おのがなりなるこそつくろはで能とぞ仰られける、

六十一段　諸寺の僧のみにもあらず

千壽品川の出女のみにもあらず、八まんの茶屋のよね衆といふ事、古き小歌に聞えけり、洲崎の茶屋にあるよし、すべて一軒に食もりと名づけて、ふたりづゝ數さだまりてのおきてにこそ、

六十二段　揚名助に限らず

傾城茶屋者に限らず、くふものといふ勤女あり、西鶴が一代女にかけり、

六十三段　横川の行宣法師が申侍りしは

ふとの吉左法師が申侍りしは、野郎は片歎也、悅の氣味なし、女郎は和合の道理にて愁の氣味なし、

六十四段　吳竹は葉細く河竹は葉ひろし

勘三郎は間口挾く、竹之丞は廣し、大芝居と云は竹之丞、上覽に入たるは勘三郎也、

六十五段　退凡下乘のそとばは

三破品の古都婆、さばは名代、品はその品なり、

六十六段　十月を神無月といひて

十月を神無月といひて、萬事にいめども、物日よの月に違ひなし、たゞし夷講は當月をおもとする也、此月の上のいのこより、正月事の初也といふ說あれども、此頃はおさめの時分迄、正月のきわまらぬも在よしなれば、其格もなし、十月いのこゑびすこう、べちべちの客に逢ける人其例多し、但多くはふはんせうの人也、

六十七段　勅勘の所に紐かくる作法

ほれたる女の家に錦木たつる事、今は絕てする人なし、いにしへ陸奥歸婦の里にて、女にほれたる時は其家のそとに錦木をたつる、けふの細布といふも戀に添たる事也、あふべきおつとの立たる木はとりいれ、あふまじきをば取いれず、此事絕て後、今は金銀にてはやく心なびくといへり、

六十八段　狂人をしもとにてうつ時は

すいな女郎を手に入んとする時は、手くだにかけて逢かくる也、手くだのしなしも逢方のふりも、いまはがてんして、あふかたのわけにてははまるよねなしとぞ、

六十九段　比叡山に大師勸請の

色ざとに女郎僞の起請といふ事、つとめ計の客にむかし上林の葛城書はじめける、女郎の起請文にまじないあり、むかしはよほどがてんしたる客も、起請ほしがるよし、近代はさもなし、又心中に髮をきりゆびをきりて、錫の香箱に入て送る、貰う人穢をたてず、入物にはけがれあらず、

七十段　徳大寺右大臣殿檢非違使別當の時

八丁堀大臣殿、回向院にて開帳の時、手代共出して靈寶の世話やきをせさせけるに、何某の女狂ひ來りて、小屋の內へ入て靈寶の口したる棚の上にのぼりて、髮打さばきてふしたりけり、おそろしき事也とて、女をとらへ暫く休み所へ入ておくべきよし各申ける、父禪門聞て、氣違に分別なし、足あれば何國へか上らざらん、女物狂ひをしばらくの內も、お寺のうちに置るべきやうなしとて、女をばぬしにかへして、臥たりける棚をばなをされけり、あへてそんじたる所なかりけるとなん、おつとにはなれてあまりなげきつよく、心亂れたるといへり、

七十一段　龜山殿建られんとて

屋敷がたの女中密通の事ありけるに、つひはらみたりけり、三月四月は袖にてかくしたれども、はや七月顯れ月になれば、女心うく覺へて、男にかくとつげけるに、おろし藥なんど用ひけれ共、つひにおりず、尤いのこつちやうの療治もあれど、人躰をやぶりたるつみの程もおそろしきと申に、中篠流の醫師申は、小の虫を殺し大の虫助るに、なにのとがゝあるべしと申ければ、たのみてさふなくおろしてけり、更に主人へはしれざりけり、

七十二段　經文などの紐をゆふに

新造などの髮をゆふに、下より上へ在平とうのやふにまげて、かうがいを横さまにさし出す事は常の事也、さやうにしたるをば、三浦太夫小紫ぬしの新造をば、ときてなをさせけり、是はいにしへの勝山といふ女郎ゆひはじめけると也、今はいと見にくし、うるわしくはたゞくる〱と結ひて、うへよりちよとかう

がいさしたるぞよからんと申されけり、全盛の女郎にてかやうの事いひける人になん侍ける、

七十三段　人の田を論ずるもの

人の客を論ずるよね、なじみへかへられてねたさに、其客をつけとらへてこよとて、禿新造まじり大門へ遣わしけるに、よひたふれてたはひもなく、ぶら〴〵歸る客をひきずり來る、是はつけさする客にはあらず、いかにかくはと云ければ、つける子供其つける客とても、とくゆくべき事ならねば、ひが事せんとてまかるものなれば、いづくの客をかとらへざらんといひける、ことわりいとおかしかりけり、

七十四段　呼子鳥は春の物也とばかりいひて

かんこ鳥はさびしき物也と計いひて、いか成鳥ともさだかにしるせる物なし、或説に、おさな子の小袖を外面におかずと、夜あやしき鳥の來て、おのが血を付けるとなん、是は鵺ならんか、俗に云ける夜鳥とかならん、色女集の中の歌に、宵々に川原のはしにたち君の五條あたりの月ひとり見るなど書り、かの夜鷹鳥の名はきけ、たち君の名にうばわれしと聞ゆ、

七十五段　萬事は賴むべからず

萬の事たのむべからず、女子はことにおろかなれば、ふかく物をたのむゆへに恨みいかる事あり、勢ひ有とてたのむべからず、ふけん問屋とてたのむべからず、德政さかりに合てたおれ安し、景色者とて賴べからず、朝湖も時に合ず、いたり者とて賴べからず、椀久も不幸也き、御前奥樣になるもたのもしからず、氣がつまりてつひ死やすし、かぶろより仕立たるとて賴むべからず、繁昌につれてぞんきいぶり成事あり、人の志をも賴べからず、かけちらしてついとびたがる、身をも人をも賴まざれば、ぜいゆふてもかゝらず、貧なるはけくかわゆし、右手もめでもうそのかたまり、國が遠ければしんだもいきたも知れず、近ければちよろ〳〵と無心をいひたがる、せめてねいりたるうち、昔を忘るゝ事少しきにして、氣がみじかければ諸事けちらしく客を追だし、ゆるくすれば内甲を見て一時も寐せず、つとめは旦那への禮也、親方の欲限る所なし、女郎の姓なんぞ鐵石にてもなし、くわんたい慮外をすればきげんあしく、是にさはらずしてどこもかもゑいやうにどうなる物じや、

七十六段　秋の月は限りなくめでたきもの也

月見ほど限りなくめでたき物はなし、いつの紋日より女郎のかたにいかふ心付の在事也、夫をうか〳〵と思ひわかざらんは、心うつける事也、

七十七段　御前の火爐に火を置時は

婚禮の規式にのしめ著る時は、腰かわりを用ゆる事なし、かちんか花色の無地なるべし、さればかわるかへるといふ事をきらいて言葉をもいむ也、地下の婚禮にとり持人、子持すぢの上下にて罷出られければ、ある有職の人、地下の人は小紋の上下にてもくるしからずと申されけり、

七十八段　想夫戀といふ樂は

さばほんといふことばは、餞別の詞に非ず、相破品文字のかよへる也、相違ひに色になづみて、身をも家をもうしなふ義也、是よりして相破品といふ、てれんも天連也、ばてれん宗とてゑびすのこわき宗旨あり、其こわき宗旨に引いれんとするがごとく、だます事をてれんといふ也、

七十九段　平の信時朝臣

佛師の民部わる口に語りし、淺草院あんらく或宵の間よばる事有しに、やがてと申ながら、袴のなくてとかくせしほどに、又使來てはかまなどのさふらはぬにや、夜なればことやうなりとも疾と在しかば、やぶれたる紙子はおりに、寐まきのまゝにてまかりたりしに、かんなべにわかしざましの尾もて出て、此酒を獨りたべんがさう〳〵しければ申つる也、肴こそなけれ、人は靜まりぬらん、あまりぬべき物やあると、いづく迄も尋給へと在しかば、しそくさしてくまぐまをもとめしほどに、臺所の隅に蛸の足一本ありけるを見出て、是ぞ求へてさふらふと申しかば、事たりなんとて、數獻に及て興にいられ侍りき、出家にもかくのごとく成もの侍りしと申されき、

八十段　最明寺入道

淺草院あん樂、八幡しやさんのついでに鹿の武左衞門がもとへ先使を遣わして立入られたりけるに、一獻にどぜうの吸物、二こんにうなぎのかば燒、三獻にかすてらにて止ぬ、其座には亭主夫婦多賀長湖あるじ方の人にて座せられけり、扨おとしのよき珍敷はなし聞たきと申されければ、おかしき咄し色々かたりて笑わせければ、女房子共迄紙ばなにて請させ、後に遣はされけり、其時見たる人の、ちかく迄侍りし

が語り侍りし也、

八十一段　或人大福長者のいはく

或大ぢんばりのいわく、人はよろづをさしおきて、ひたぶるにぢん藥をたくわへべき也、きよ性にしてはいける甲斐なし、つよきをのみ樂しみとす、達者ならんと思ず、すべからく先其心持を修すべし、其心といふは他の事に非ず、人間常住のしやう山ほどの事ありとも、かりにも氣をうつ事なかれ、是第一の心がけとすべし、はあ〳〵と思ふたびにぢんのへる事速か也、次にいせい見ざるやうに心づかひすべし、人の夜いぬる、自他につけて所願おこると也、くよ〳〵と思ひて心をいため、つや〳〵とねいりたらんは、心つかれ氣おとろふゆへに、いせい見るなり、ぢん水はつくる期有、限りあるらん水を持て、限りなきたのしみにむざと腎水を失ふ事なげかしゝ、ひよと心にきざす事あらば、我をほろぼすべき惡念きたれりと、歯をくひしばりてかたくつゝしみおそれて、つまみ喰などなすべからず、次に腎水を手洗水などのごとく覺へて、つかい捨る物としらば、わかく共ぢん居をまぬかるべからず、臍くり金のごとく、人參のやふに大切にたうとみて、むざとつかひすつる事なかれ、次にすき成女の耻しむるとも、其言葉にのりいかりてつゞけなどする事なかれ、次に息才なるをたのみにして、立合事堅くすべからず、此義をまもりてぢん藥をもとめん人は、せいつよからん事、大錢二百文をも持あげ、張たての障子をも突破るべし、腎水つもりてかさなる時は、大酒ぼう食を事ともせず、女房に限らず男色をもすてざれども、心とこしなへにしてやすくたのしと申き、抑人は此たのしみをなさん爲に、寶をも願ふは、身のまつたく堅固にしてたのしまんが爲也、財寶有て何不足成事なし共、此一つのたのしみかけたらんは、まつたく貧者の腎張よりおとりたり、何をかたのしみとせん、此おきてはたゞいたづらに腎を失ふ事をたちて、末永く樂しまん爲と聞へたり、間男をなしてたのしみとせんよりは、しかしきよせうにしてかゝる事なからんには、たばこのまざるやぼの、女郎のさし出す吸付を呑てせつながらんよりは、のまざらんにはしかじ、こゝに至りてはきよせうも息才なるもわく所なし、畢竟はよわき方久しからんか、柳の枝に雪をれなきにひとし、つよきはよわきに似

たり、

八十二段　狐は人に喰つく物也

小僧は人に喰つく物也、傳通院にて小法師共寐たる所へ、さかんなる同宿者忍びて行けるに、小僧三人飛おきて喰付ければ、しかりて是をふせぐ間、二人はにげぬ、法師はあまた所くわれながら、一人はとらへてがてんさせけり、

八十三段　四條黃門命せられていはく

四郎左衞門殿語られて曰、かうがいさふはたいこ道にとつてはやん事なき者也、先日來りて曰、短慮のいたりきわめて荒凉の事なれども、いま格子持五間はいかゞいぶかしき所侍るかと、密かに是をぞんせず、其故は、三うらに高尾うす雲小紫、さん茶などにて名を附る事無下の義也、其内にも初きく若紫など苦しかるまじき也、いにしへ山本の小主水、長崎やのちとせ、山口の初音、巴屋にこゝく山ぶき、是なん今時のよねにくらぶるにも足らず、先内をふみ出すより、世界を我ものにして、天地を一のみにのみ込、あひかたをたなごゝろにおさめ、道中端手にしてしほらしかりし、其頃はろの袷かたびらと云もなく、勿論二人かぶろといふ事もなかりしかど、道中なかく賑かなりし、今はつい禿にて氣を取といへど、風情律義にして、隣へ茶をのみに行やう也、むかしは帶のはゞもせまし、胸高成しゆへ、おいどちいさく殊にむすびめもなく、ついはさみたるゆへ、取なりもほそく丸く、尻のひらたきよね一人もなし、當世は帶もしゆすの一はゞを、ふじ三里のあたりまで引下げ、むすびめは大き成まないたのごとし、それ故すそびろにあづちなどを立たるやう也、せいのひくきよねは、一しほあし、あいかたは律義に後世大事と見へたりと申き、他日與太夫が申侍りしは、むかしにかわらぬは間夫のぬすみあひ也、惣じて女郎五間の家に限らず、さん茶むめ茶局共に内には實をつくすとも、表には端手を專らにさせたし、ことわりかなや、今時はれきくやん事なき衆中も見へ給はねば、おのづから文盲愚癡にもなる也、女郎のとがには非ず、買人のしつ也、

八十四段　何事も邊土はいやしく

何事も東は物事いやしくふつゝかなれども、近江が三味線は耻ずといへば、江都のしやみせん屋の申侍し、近江に限らずいづれの細工人も、外より勝れた

り、故は江戸のはんゑいに付、れき／＼の簾中奥方より、高直にかまわずあまた打出ゆへ、しせんと其妙を得たり、殊に近江は古作名人の、つゞみの筒のうちのかんなめなどよく考へ、しやみせんのどうの内に一つのかんなめを工夫したり、是秘藏のもと也、此かんなめにていづれの音をも調へ侍と申き、凡しやみせんは、わづか三つの緒を以て何れの調子にも叶ふ也、西國がたのやん事なききみ、京都にて打せらるべしとて、あまた度々うたせかへられけれど、調子かなはざりける、遠國より江都にてうたせられけり、近江が三味せん又くるわずよき調子也、

八十五段　建治弘安の頃は

源氏物語にはあふひ祭の事あり、七月七夕まつりとて、屋形女中は色々の衣類などかけならべ祭とす、町方にてまねたきとても、衣類の美々敷事は、屋形女中には成まじとて、町方には竹の葉に色紙短尺に、ゑならぬ歌おのがさま／＼書付、家の軒にさし祭とす、屋形女中の縁付したるは、いにしへを學び衣類かけならべけれど、古びぬれば、いかにも／＼古著見世を見る心地こそすれ、百姓は麥俵にて馬人形を作りて、高き木のうへにかけならべまつりとす、いづれか祭る志しにうへしたや有べき、

八十六段　竹谷乘願坊

ふとの喜入坊、やん事なき方へ參りたりけるに、女郎への送り物は、何事が爲になるべきかと尋させ給ひければ、金銀あまたつかわされてかしと申たりけるを、近習の若きもの共、いかに斯は申給ひけるぞ、調戸卷物に增る事侍らまじとは、など申給わぬぞと申ければ、やぼのしり給はぬ事也、手道具たんものは客よりも送り、内よりも仕著せ、買がへりもやすし、金は内からはくれず、茶屋もたやすくはかさず、物前に客より送る遣ひ金も、心あてとはちがふ也、部屋にての出錢、又は大切成子を道ならぬ勤に賣ほどの親、一つなればさやうのやつばら、大かたちよろ／＼と小無心をいふ、さすがに女子なればこゝろよわく、少づつも送りたき志しあれば、其時まげずと埒明に、金子とは申上つるとぞ申たりけり、

八十七段　たつのおほいどのは

山口の初ぎくのかぶろは、松彌とおとづれ也、おとづると申はひが事なり、

八十八段　陰陽師有宗入道

からくりし彌三五郎、大阪より下りて江戸の女郎見まほしく、先吉原にさし入て、此さとのさびし事あじきなく、聞しほどにもなき事也、道をしるものはこふる事をつとむ、格子三四人のこして、皆さんちやにおろし給へと亡八共にいさめ侍りき、誠にひとりの女をも、いたづらにおかん事は益なき事也、食物仕著せもさる成べし、

八十九段　多久資が申けるは

ちんば新助が申けるは、中村勘之丞扇の手に、舞のうちにて振のよき事をゑらびて、笑顔のおかつと云ける女におしへてまわせけり、器量勝れ風俗目だつほどなりけり、なるやうにてならず、ならぬやうにて又なりけり、後に袖留けれど、人皆おどり子とぞいひけり、おかつが妹松野といひけるこの藝をつげり、是舞子の開山なり、折ふしのはやりうたをわけて唄ふ、其後かめやの小三郎多くのおどり子共を取立たり、釜はらいお梅がすゝのふりもあり、水木おはるにおしへけるとぞ、

九十段　後鳥羽院の御時

京四條おやま瀬川竹之丞、藝子のほまれ江戸へ聞へける程に、市村竹之丞芝居へかゝへ、竹之助と改めて顔見世より出けるが、ひよと心おくれしけるか、折あしく心地なやみけるが、其さま見にくゝ、物いふも聞ぐるしかりけり、氣の違ひけるとあしくさたしける、心うき事にして、役者を捨て遁世せんとて引込居たりけるを、神明の定芝居七太夫といふ座本、不便に思ひければ、此竹之助をかゝへたりけり、此竹之助上方にて立物なりけるゆへ、わけて此所にてははやりける、されば角太夫ふじの道行を歌上るりに作りて、我も語り、小三郎といへる野郎におしへて語らせける、さて都の名所をことにゆゝしくかたれり、ぶんやぶしは江戸にて知らざるゆへにや、多く人も語らず、上方女郎の風は、竹之助京者なればよくうつしけり、かの竹之助がふりを、今の七太夫が座の子共はまなびけると也、

九十一段　六時禮讃は法然上人の弟子

小舞のふりは、京四條大和屋傳助が弟子右近源左衛門海道下りを作り、赤手ぬぐひをかつぎ小舞にしけり、其後澤之丞といふ野郎、帽子の左右をたれてかつ

ぎけり、小娘おどり子などのぼうしの最初也、元祿始の比より廣まれり、女形のおゝひしてげいに出る事も、同じく澤之丞初めたるなり、

九十二段　手本釋迦念佛は

三浦にて全盛の女郎、惣男共にしきせしける事、元祿の頃出し花鳥是をはじめられけり、

九十三段　能き細工は

よききやらの油は、香具に念を入つかふといふ、せむしが油はいたく松やにを遣わず、

九十四段　五條の内裏には

五條の河原には、そうかといふ物あり、鹿の武左衛門語しは、ある夜川原を通りけるに、胡座をかゝへて行者あり、誰と見むきたれば、そうか男と物いつて、ついねたるを、あれはそうかといはれてまどひにけり、みれんのそうかうり損じけるにこそ、

九十五段　園の別當入道は

石川の何がしは、そうなきこきうの達人也、或人の許にて日待の有しに、いみじきこきうといつたか持たるを出したりければ、皆人石川が曲をきゝみたくと思へども、たやすくのぞまんもいかゞとためらいけるを、石川さすがの者にて、此ほど宵彈をつとめ侍る、今夕よひ彈きかき侍るべきに非ず、まげて申請んとてひかれける、いみじくつき〴〵し、興ありて、人とも思へりける、ある人やん事なき方に語り申たりければ、かやうの事ひきつりうるさく覺る也、彈べき人なくばたべひかんと云たらん、おもたく覺へしと人の云給ひける、いとおかし、大かた知たる事を興有よりも、おもひげもなくてやすく成がとうり者の樣也、まれ人の饗應なども、けいはくがましく馳走したるも、誠によけれ共、たゞ其事ならでたいてい有べきかゝり成いとよし、ぎうやり手に物とらせたるもついでなくて、是をとらせんといひたる、まことに心ざし也、しさいらしく盃などさし、無理おさへにことづけなどしたるむづかし、

九十六段　すべて人は無智無能

すべて子共は、こしやくになきやうにそだてたき也、或人の子の見さまなどあしからぬが、父の前にて人と物いふとて、おとしの咄しぢ口などいひたりし、さかしくは聞へしかども、尊者の前にてはさらずともと覺へし也、

九十七段　又ある人の許にて

また或人、よし原にて女郎をあつめ香を聞んとて、よき名香をたきければ、よね達も段々につぎけるに、ある男の中に、あしからずと見ゆる名香を、口に入しめしてたきける、うつり香の香を水に附て、あしき匂ひをとるといふ事こそあれ、其道に心得たるにやと片腹いたかりき、香を口に入しめす事たへてなき事也とぞ、能き人の仰られし、若き人は少しの事もよく見へわろく見ゆるなり、

九十八段　萬のとがあらじと思はゞ

よねにかわゆがられんと思はゞ、いかにもむつくりとして人をそだて、うわきになく、詞少からんには、然し牛遣手みなしづかなる客よけれといふ、ことに若くかたちよき人のしとやかなるは、女郎も思ひつく物也、大形は事しりたるさまにすいめきて、しこなしたる氣色して、人をないがしろにするたぐひ多し、

九十九段　人の物をとひたるに

人の物ずきを見たるにいくすじも在し、ありのまゝならんはすいらしきにや、心の見へたるやうなる風俗、前へ後かへり見たるよからぬ事也、色どりたるあるきつきも、なをよき事にやと思ひてするらん、かたまにすいなる人は、など物つくろへるさません、又誠へさがり、帯さへねじれずば、其まゝの姿ならんはおとなしく見へなまし、とりてのやぼなる人は、おびをも大事にかけてむすび、あゆむ足付も仕舞などするやうに見ゆ、扨も其人の風俗はよきぞとうり者ぞといふさたすれば、其まゝ其形に氣を付、うつし似するこそ心根のほど愚ちなれ、屋形衆の風こそいみじ、しまちりめんの羽をり、しゆすの帯も、おのづから目に立ず、黒茶うの袴おぼつかならず著なし、紫さげ緒のながく刀のさやへうち懸たる、はなやかならぬかは、かやうの客にはほれる新造も有ものなり、

百段　主ある家には

ぬしある座敷には、客の外に心のまゝに入來る事なし、主なき座敷は、あたり合の客みだりに立入、のら猫きうやうのものも、人げに構ねば所得がほに晝寐し、禿のかくれんぼうの隱れ所也、又から紙には何のかたちもなきむだがき、萬の人の手かゞみとなりて見苦し、かゝるざしきにて遊びたらんは、得てきせるそろわず、牛どもは鶯にてもほしきまゝに、かわり

がわり來り伺ふも、やる客のなきにやあらん、禿もまわし禿なれば、座敷の內に足を入ず、廊下の內にてかしましく狂ひさわぎ、床へいるよりいなや呼でも來らざらまし、

百一段　丹波に出雲といふ所有

本庄に見めぐりと云所有、稲荷山をうつし目出度つくれり、使者のみやうぶに飯をあたふる老女あり、是はいにしへの風呂屋者、太夫迄に成し丹前勝山がすがれたるの由、橘屋佐兵衛近所しる所なれば、秋の頃いせやのせん、扇屋のばゞ、三浦のまん、其外古きやつばらあまた誘ひて、萬日のついでにいざ立寄給へ、かれを訪わんとて竿さし寄ていきけるに、かの老女狐をよび出し飯をあたふる、佐兵衛いみじくかんじて、いかに人々此老女の有様御覧じ咎めずや、無下也と泪ぐみていへず、各あやしみて、いかさまにも思ひなしにや、ちよのばゞとは違ひ、どこやらいにしへ床しくおもかげのかわらで、年のほど丶思ひいとゞあわれにかんるいを催しけり、佐兵衛なをゆかしがりて、おとなしく物知ぬべき顔したる神官を呼で、此老女いかさま由緒あるべき人なり、何の苦しう候わん、子細かたり給へといひければ、其事にて候、此寺の譜代門番の妻にて候が、血の道にや心そゞろになり、何の役に立ぬやつにて候を、慈悲の爲に狐のゑかいをいたさせ候、左樣の名も有者にてはさら〳〵なく候といへば、各舟ちん損にして、佐兵衛がかん涙もいたづらに成けり、

百二段　やない箱にすゆる物は

三味せん箱おきやうは、竪ざま横ざまによるべきにや、舟などには横ざまに置て、ふなばりのあわひへ通しゆひつくべき竿はいかやうにもおきたる、箱みじかくひらたきゆへころばぬよし、遊臣だちの仰られき、かんとふふねばかりにものすべからず、ゆれていと卷くつろぐよし仰られ侍りき、

百三段　御隨身近友が自讃とて

そのかみたいこ休慶が通り者じまんに、口をまげて大臣の品七ヶ條在といひたりし、皆遊女白拍子等があいかたなりなんぞ、金つかい捨る事を、聖賢のおしへのやうにこと〳〵敷云たり、其ためしを思ひて自讃の事七つあり、

百四段　人あまたつれて

人あまたつれて見物にありきし、上林の邊にておのこの酒きげんに、禿を押てみぞばたをひたとはしらしむるを見て、さきの井戸がわ行當りすべりたをれて、かぶろを落べし、しばし見給へとて立とまりたるに、まだ禿を追てはず、果して行あたり酒よひもたをれ、禿もどぶの中へころび入、思慮なき事と皆人我身をかんず、

百五段　當代未だ坊におわしまし丶頃

右衛門いまだ部屋ごもりしてましまし丶頃、元祖かせやまの部屋なりしときわの君の水に歸りて、たんすの四五六の引出しをぬきひろげ給ひて、むらさきときれさんした時、わけあしく客をうばふと書しにくひ文を、かせやまさま御覽ぜられたきこと在て、ひたとたんすを御覽ずれ共、御覽じ出されぬ也、何とぞよく尋見よと仰ごとにて求るなりと仰らる丶に、九つの引出しのそこ〴〵に侍りしと申されたりしかば、あなうれしやとて參らせ給ひき、これ程の事は禿共も常の事なれど、むかしのよね達は、おろかにも悦び給ひし也、越後高尾ひな形の注文に、袖と袂と一所に書候事あしきやと、うす雲の君へ仰られたるに、秋の野の草のたもとか花す丶きほに出てまねく袖と見ゆらんと侍れば、何事か候べきと申されたる事も、其時の女郎は情をもと丶し、歌の道にかしこくましまし、みやうが也理り也などこと〴〵敷云侍りし也、

百六段　當在院のつき鐘の銘は

古文前集のうち長恨歌は、白樂天の作也、佐々木玄龍にか丶せて掛物にせんとせしに、こしやくなるおのこ彼歌を見侍しに、後宮佳麗三千人、三千寵愛在二一身一といふ句あり、一しんのしん一の臣と書たる誤りならんと申たりしを、ようぞ見せ奉りける、おのれが高名也とて、筆者の許へいひやりたるに、あやまり侍りけり、一心と書なをして返し侍りき、一心もいかなるべきか、もし一人の心か覺束なし、誰に一心なを不審、心は三千の內何にかとゞまらん、たゞ貴妃一身にとゞまる心也、

百七段　人あまた伴なひて

若き者あまた伴なひ野遊せし事侍りしに、道鐵の念佛堂の左に妙信院とかける古き石塔あり、うす雲高尾の間うたがひ在ていまだ決せずと申傳へたりと、堂僧こと〴〵しく申侍しを、女郎野郎の印しなれば、

大形は裏書有物也といひたりしに、裏はこけむしてさだかならざりしを、よく洗て各見侍しに、三浦内高尾と記し年號さだかに見へ侍しかば、人皆興に入る、

百八段　那蘭陀寺にて道眼聖り談議せしに

なん大臣よし原へ忍びて出しに、頭巾忘れて道より取に歸りしを、人皆心づかざりしに、女房氣を附是々にやと云て出したれば、いみじくかんじ侍りき、

百九段　賢助僧正に伴なひて

宿おりの女中をともなひて埒丁を見侍しに、いまだ果ぬ内にかの女中歸りけるが、ざしきに侍らざりしまヽ、用事にや立ぬらんとしばしまてど見へず、表迄出て見けれ共見へざりけり、茶屋の男をたのみ求めさするに、同じさまなる屋形女中多くて、得求めあわずといふて程久しくて歸りたりしを、あな心うや、いかゞせんと思ひける内に、かの女中の下女歸りぬ、夫もとめておわせよとしかりければ、何屋とかやいひける茶屋の二階より、やがてぐして出ぬ、

百十段　二月十五日月あかき夜

三月十五日、隅田川あさちが原など見めぐり、端場の草淺寺へ詣て、友もなくひとりふらめき、觀音の茶屋を心ざし侍しに、したるき女の顏、花のつゆにて光らせたるが、あとさきになりて側へよりそへば、かけ香の匂ひうつる計りなれば、いやらしく思ひてすりのきたるに、猶居よりて同じさまなればはづしぬ、其後若者度々だまされけると咄し合れけるに、さればこそ心得侍らねと思ひて止ぬ、此事後に聞侍りしは、筒持せとて、男がてんにて女房をむまくこしらへ、すみよりなるものを引込、首尾よき時分、夫出合ひ見出したる體にもてなし、ねだりて金銀を取ける事度々也けるとぞ、

百十一段　八月十五日九月十三日は

八月十五日九月十三日は、名月とて大物日也、しかし此ごろは約束ばかりにてゆかぬ人多し、

百十二段　しのぶの浦のあまの見る目も

有馬の湯女のしなしもおもしろく、伊香保の山の食もりも、情かはらん心の色こそ、淺からず戀しと思ふ折々の忘れがたき事も多からめ、おやはらからゆるして二世迄も迎へたらん、いとまばゆかりぬべし、ながれを立る女なれば、知らぬ國の人也とも、初より心打とけて、かわるな替らじなどいふを、女のくせとて

心輕きさまにいひなしてかくれば、しらぬ人を賴母敷思ひつめたるあひなさよ、何事をか寐物語にせん、所の事共いひ、古郷の事など語らわんこそ、つきせぬ言の葉にてもあらめ、すべてよその人の珍ら敷咄したらん、面白き事多かるべし、よき女ならんにつけても、愛著の心深くなりなん、男は斯あやしき女の爲に、あたら身をいたづらになさんやはと、さりとは心おとりせらるれ、わきがの匂ひも名香のごとく覺へなん、胸こそわるからめ、ごまの油かうばしき、夜の寐顏にきは墨まだらにはげ、髮もみだれ、あばたづらもあらはにしのばるべくもなからん人は、たゞ色このまざらんにはしかじ、

百十三段　望月のまどかなることは

望月のまどかなることは暫らくも住せず、やがてかけぬ、一夜の勤めの內に、さまでかわるさまも見へぬにやあらん、ふさはいの事あれば、客住する隙もなくして、きるゝ事既に近し、ちよろくおもひ、常住平生の念にひかれてあふ中に、多くの我まゝをなして後、床にてしつぽりとかけんと思ふ內に、客に欠出されて大門へ附にのぞむ時、日ごろのてれん一事も成就せず、いふかひなくて年月の惡性をくゐて、此度もし腹だち直りてあふ事あらば、夜もいねず晝も立さはがす、此しづかの事おこたらずなしてんと、はやく出る願ひをおこして、けやけく無生にまわり、いひ次第に酒のみぬれば、我にもあらで取みだしあかれ果ぬ、此類ひこそあらめ、此事まづよね達よく〳〵心得置べし、年ゝあけて後悔とりてかへらず、しかりてもなき身と思はゞ、借錢つくべからず、勤めの內はみなもうぞう也、よき男に逢たき心來らば、亡八の釜ふだいに成としりて、うわきをなすべからず、實體なる客に心實をつくさば、曲輪を出る時障のなく、たゝりもなくて、身上永くしづかなり、

百十四段　とこしなへに

とこしなへに全盛せんと思ふには、ひとへに苦樂あり、樂といふは、つかへぬ町衆を愛する事也、これをせくほど止時なし、全盛する所一つにはあいきやう、あいきやうに二種あり、酒ふり藝能也、其外顏の少し不道具はけくして物ずきにも成べし、兎角氣隨よりをこりて、そこばくの借錢ともなる也、しかしくわほうはいふにおよばず、

百十五段　八つなりし年

八つに成し年、父に向て曰、辟とはいかなる者に候らんと云、父が曰、すいは人の成たる也と、又とふ、人は何として辟にはなり候やらんと、父又すいのおしへによりてなる也と答ふ、又問、おしへけるすいをば、何がおしへはじめ候けると、又答ふ、夫も又先の辟のおしへによりて成也と、又問、其おしへはじめ候ひける第一の辟は、いかなるすいにか候けるといふ時、父金つかふてやなりけん、たはけつくしたるうへにてやなりけんといひて笑ふ、とひつめられて得答へずなり侍りつと、諸人に語りて興じき、

此一書、元祿末寶永の始歟、北椰江戸町結城屋來示述作也、此節者晋子色邑に晝夜夢を結びて加筆を加ふといひ傳ふ、其眞僞は知らず、往んじ年柴山東雲より此部かりもとめ、愚筆に寫しぬ、其後何方へか貸し紛失に及ぶ、今年白に至て如レ斯の戲書に筆を勞することおかしき業ながら、長逼よく本文をかりたる事を愛して、後のそしりを不レ耻書留ぬ、

吉原徒然草卷五　大尾

新つれ〴〵草

徒然翁手叙

䐜言竹東籬邈矣、而伊勢語、而源氏談、而枕草藁、而榮花語、毫を競新を弄、其辭故々たり、其文奇たり、足利王の時に、沙門吉氏出て徒草藁成ぬ、其辭稍俗に近、其文當時を感せしむ、相如が唇あたゝかに、左太仲がしたあまし、猶いまだ漢宮妃怨の雅々と、靑樓妓館の艶雅嬌情、寡婦宗女、炊婢怨妬、浮屑歲少の遊戲、見べからず、人の好尙は人々の面の異が如し、聖者も多欲多情、妨ぐことならず者の見て歌發の階梯ならん、述て作せざるは道の常なり、吉氏ふたゝび出とも、余解をかへじ、

文華盛隆の載閏月望

如意山下宵不如山人識

新つれ〴〵草

○徒然なるまゝに、うつかりとも暮しかね、心にうかぶことをかきならべし、此段よりさま〴〵のよしなし事を、筆につゞけ侍りぬ、

逸民には、伯夷しゆくせいなどゝ、名にうてし中華のすねもの、此日本にも、はるかむかしはしらず、西行頓阿けん好の輩、臍くり銀を利口にまはし、浮世をあぢにのがれ、逸民の數にいり來る人もなし、山寺も庵にかしやふだおほし、喰ものさへ在ば、いまも世をおもしろくわたり、腰折の一首もよみかねぬ人もあらんかし、干要の金なく、山中の庵もかるには、請判ことやかましく、居士衣を服にしても、宗旨改は出ねばならずして、彼是さしつかへおほし、西行の修行等も、江口のときやらふがざれごと、鳴たつ澤の無常、兼好は師直がちわ文のしたがきよりも、思ひつゞけし此草紙を、ならびのおかの草庵にて、編笠かぶりし浪人も、北野の森、または座敷に毎夜わき錢もとうかうだんずれども、こと〴〵くすかたん、つれ〴〵とは徒にきよろりが味噌もねぶりて暮すも退屈也、借錢もなく苦もなく、腹ふくらかして念佛計もあくびの種にて、おとがひのかけがね心もとなく、かのちわ文かきしついでに、心にうつりゆくせかいのことを書つけたれば、我身のうへも人の事も、ひとつゞきになりてあやしく、いでや此世をむまれて、ねがはしき事おほきうちに、かねほどほしいものはなけれども、それにもかへぬは色の道、たれ人おしき銀金と、壽命とを捨て、じんきよするこそおゝかめれ、王樣は申に及ばず、竹の園のそのむかしより、こうやずまひの鼻たれ迄、木のまたからも出ず穩婆が手にかゝり、生し人げんのたねならんとは、その種まきのさとへ、持てゆくありさまを、硯にむかひかきつゞくるに、不夜城は中の町上の町下の町、にしのとういん中堂う寺新柳町、東には祇園ぼんと、東西の石がけ、宮川の上下、繩手八軒、新地こつ堀、高臺寺八坂、五條坂ほたる、頂妙寺しらみのづし、北野に上下七軒、ばくらうしんせい、うち野、あり合ひら野、南に七條、平安の地をはなれしふしみ十丁め、墨染どろ町、中せうじま、その外風呂やかこひもの、出合比丘尼に野郎中居、つとめ娘

月切まひこゝ、され子後家間男、かれこれかぞふるにいとまなし、およそ皆銀のいらぬはなし、抑此みち計は天下の老若公家きんぴら迄も、とれやすきものにして、いかなる人もみかけとはちがひて、色にはいかふとろきことぞかし、つり髭さかさまに生しげり、鍾馗もどきのおとこが、茶やの色をだいてねしそのむつごとは、身共をかはひがつてくれぬせといふときは、女の心にさぞかしおかしいやら、ばかなやら、ことばにはのべ紙にてはねをつけこと小い、御寺様はひとに木のはしのやうにおもはれと、清少納言がわるくちもことわり、女にはどれやらがほんそくよりはかくべつ人間の種ならず、和尚さまのあとゝり、身もちはらもちかまひなし、當時わかひ娘や女房などが、お寺まいりに夜だんぎをきゝこみ、ごじう相傳を授かると、腹が大きうなり、亭主がひまをやるとが一度なり、二度わかひ時はないものにて、下戸ならぬこそおのこはよけれとは、きびしい粋かな、一盃機嫌にて、一日銀をつかひ覺へては、後悔することおゝし、下戸のあそびはいつも素面にて、たとひ一夜に五百め壹〆目をつかふても、よくおぼへ、いつも本氣なれば中々以てやむときなし、あくせうとあそびずきとは、似たるものにて大きにかはり在、それ遊びずきは、祇園先斗町に行、素人牽頭をよび、座おもしろくもたせ、酒などのみあかし、一月には一度か二度ほど宿坊をきはめ、外へは行ずして、茶やより寒暑の見まひ、鶏卵まつわ瓜、玉水了郭がかうせんも、けんぺいにとれること也、あくせうものは、素人をきはめておいてかい、扨つれのよぶはく人をわきの宿にてせゝりさがし、中居娘をもやつかし、祇園先斗町家なみに行かとおもへば、新地に尼のはく人が出る盤の如く、よこになつてはい入、圖子のおくへかいにゆく、かみ切をやくそくする、うちのめしたきをかぢる、東どなりの女房に手みそつける、これらが酒にも酔ず、あくせうものゝ所作ならんかし、町かたの女も、あく性ものと又のらものとちがひ在、のらといふは、襦袢の袖口をたんご島にてふくりんとり、穐花染のうらを見せかけ、子供の小手袖見るように、五寸計も長して、むらさきがのこのくびたま入、志賀から崎を黒の引かへしの、しどけなくつまをあはせかゝへ、帯もせず淺黄ぼうしをおとがひにてくゝりつけ、成程しつか

りと男でも持た風俗にみゆれども、さやうな色ごとはせず、はんきの奉公も身にしまず、せつ〳〵ひまをもらひて、北野から堂あたりをのらつきて、小やどをこしらへ、おなじともだちとだしやい、けんどんくひ、ひるねをして、すこし主人の内へはつかへがおこりし、またはおぢきがせんきのかんびやうのと斷をいふ、主人も二度三度はりやうけんもすれども、さうさうは聞入れず、時ならぬひまをもらい、うろつきまわりてすそもきれ、うら付のせみかわもぬけがらにて、げぢ〳〵のやうにほつき、たかのしれたせいをいふて、出かわり時ぶん、人より壹番に口入の所へゆき帳面にのり、難波の十文ぞうかつれだつやうにして目見してすわり、三月の月中は得ありつかず、五月雨ふりしくころ、かびたる菅笠手に持、きも入がかたのからかささして在つくにぞ、あく性ものはさやうな計にてはなく、あく性しながらも、ないせうのためになるやうに立まわる事ぞかし、これもあく性から、いろ〳〵の物のとれることを覺し、まことに獵は鳥がおしえるといふことわざ也、身のまわりもおとなしくこしらへ、ことばもしん妙に、奉公もよくつとめ、わかきもの、でつちあがりがうわ〳〵と、しくつくにかまはず、年がましく少はちえも有おとこをこまづけて、小錢のまわる男を目にてつかひ、こむすこに手をにぎらせ、勝手むき揃かうがいも、時々のはやり物をかわせ、もちよりにて小せにの切めもなく、後室の寺參りも、よひほどにりつぱにこしらへ供もつとめ、折々小女郎があひにくる、おとなしく隙をもらいやどへ行、よく聞合すに、ねんごろすると名をついた男が、五六人も在て身のまわりをかくめ、いかなこと主人の切米は半季に三百文くれてもかまいなし、かのかんじんの宿をもつときは、やとばいりもせず、よほど身代居くろめし男か、又はとしより男の後よびか、きぬの壹たんも納幣をとりてゆくつもり、すべてあく性ものは、後に身代持はよろしきものとや、けつくはき娘が、外をみならひと十四五より奉公させて、あく性にもあらず、誠ののらになりてのちは、うち野五ばん町邊へ、我と我てに身をうりに行こと也、詞おゝからぬに、あかずむかはゞおしからず、女のもの數いわぬがよいとて、ぶつてふづらしてつらくせわるきを女房はびんぼうの種也、手なんどつたなからずとて、

わかひ女房がすこし筆がまわれば、となりへひやめしかりにやるにも、ながくと文かいてやるもいやし、かならずすこしにじりがきもすると、うすひ紙は狀もかくこともなし、わかひ男の、人の女房といふゑんりよもなし、三尺手ぬぐひかりにやるにも、いとこまぐヽとかきつゞけ、どこぞは不埒は出來ごとおし、男は小歌ひとつうとふも聲おかしく、二の音をはづれ、酒も口から出る程のみ、毎度こまもの店を出せば、女の思ひつくさまもすくなく、おのづから色どるていもみだれて、すこしわがおもひつきし女が在ても、醉てわすれはたす也、若男の三味せんをならひて、我がたのしみにはあらず、娘や人の女房をせヽるおとし道具にて、その男が三味せんを終夜ひき、淨るりをかたりて、茶やであそびし事をきかず、かならず行からもどる迄、女郎とゆけもせぬさヽやき計にて、つれのきやう迄をさます事也、都にて茗長などいふおとここそ、誠に三味せんのすきたれ、淨るりにも立花河内は眞實にすきて、そのげいに名をとりぬ、〔頭注〕茗荷屋長左衛門とて三味せんの妙手なり、素人野崎といふ、河内は都にて日野や某といふ有德人也、いまの男は、わがすいたる女房を持と、ゆふげいはやむもの也、おやの申つけか、わけ在て是非なくいけぬ女房をだかへると、ゆふげいはいかい病氣か、常々のいヽ立に成こと、あたらずとも遠からず、あくせう成る遊女が果は、尼になりて道心堅固也、大酒を飲、たわひなく、きぬぐヽろくにおぼへず、酒のさめてかしこひ男が、大事の娘をちよろまかし、またはかのまおとこはせぬもの也、兼好これをよくさとりて、聲おかしく拍子とり、下戸ならぬこそおのこはよけれと、此草紙の卷頭にかきつゞけぬ、よく味てしたうちすべし、

自程曰、木のまたから生たらば、色欲も知るまじ、世界の若後家尼は、和尙のとぎをするにきわまり、るいをもつてあつまるならひ、はく人は野郎とねんごろして、せたひをもつことしかぐヽ、御所方の文庫持は、夏冬なしに津戻子の次上下きたるおとここそ夫婦になるならひ、わが寺こそたふとしといふもことわりかな、こしもとなどもせうたひなく、のらはさのみせにももふけず、さわるものに何心なくぜんをすへて、はてはけんあく國に身をうる風俗、かの惡性ものは、我からくれといはねど、おとこがくれるに味ひて、錢をもふけるすべをお

ぼへる、都にても、乙女榊三なし、てんぐかなめなどいふ婢は、名代ものにて、能身のとり廻しをおぼへ、けいせいはく人が、客をだますをとろふ見て、いかまけんかいよひ程に、やどを持て身をかためる始、奉公するに、一ケ月にいとまをいく度と極め、給銀にかまひなくつとめること也、前廣にやくそくすれば、三本木邊にもよき婢をこんたんする事在り、〔頭注〕三本木邊にては、こしもとで、おくさまで、はいでもあり、折々尋て知るべし、日本は色國なれば、おもひもよらぬかたも、おもしろきこともあり、うか〳〵と月日をおくるべからず、つれづれの初段も、大かたに男の女になれよるさまを、何となく書つゞけたり、よみて知るべし、

〇よろづのこと、始終こそおかしき段、おこがましく見ゆれ共、いたりて粋はないもの、扨其すいがはじめより粋もなし、はじこの段にてけいこせし事の、はじめより其おもわくを、此一段にのべたり、

花に醉月にうたふ、年々歳々花相似たり、歳々年々人は不同と唱しは、しらがのおやぢにかはりて、代さくせし人は、いかなる粋やらん、わかい時の心もちは、大かた似よかしもの也、十六七にて前髪おとせしまんぢう、さかやきのひあたりのあとさへ、まだなおらぬに、すみをぬき、朝暮のすりみがき、ぬか袋の木綿も河内からとゝのへ、はきだめは米糟とあらひ粉のあかをなし、はみがきは小店のおろしなみにとゝのへ、さくら楊子もさりとははやくへるとつぶやき、ひげは江戸ねりぎん出し、炎天にはながるゝ計にぬる、さかやきは隔日にそりて、眉はかゞみに向ひおもしろくつくりて、我とわが男ぶりになづみて、いまのせかいにおれほどよひ男は在まじ、たとひは雲の上人、小町もどきの娘にても、殘花にてもなづみたりと、みだりになびかじと心におもひ、古伯の帶をも、腰より三里のやいとのきわ迄巻たて、延紙もはんぞく計貳つ折にして、掛香など匂はせ、石だゝみ小紋の手拭、手のうちににぎり堅めて、たまごいろのたび、八幡黒のはなおの跡をつけ、羽織のひも足にて踏あるき、草鞋も三がいめははきやぶり、二かいめをはき出し、開帳萬日、みこしあらひ、神社佛閣殘かたなくめぐれ共、いづくの娘よりとて文も見ず、なにがしの後家からとてくどきもせず、雲のうへから戀もふらね

ば、よき價をもとめてとりおきて、町々門々へよび、男に御用はないかとふれても廻られず、町内に少ししぶりかわむけたる、こめろ上りの娵にざれをませて見る、あのこしもとぐわひにほれられるとは、ホンニ御茶のこなれどとおもひしに、守する子を手を引ながら、婢はげびたる目もとにて、おまへは美男じやけれども、うわきそふな御人じや、きのふけふまへがみおとしてこしやくな、わたしらとねんごろなさして、もし身持はら持になりまして、そのときくめんが在かへ、てう妙寺の新地で、なんぼうねぎつても六拾匁はとる、自程曰、てう妙寺新地にて、鶴の丸などは月よとみ療治也 おまへにいふてしらぬといはれると、私ひとりのなんぎ、ひとつある小袖でも賣やうなことはいや、些と小遣錢でもくれる人と、ねんごろせねばならぬわいな、きり米は高のしれたこと、油もとゆひは高し、それは〳〵あわぬもの、わたしがわるひ事はいわぬ、おまへもしりはらやまずのてんやものをおかひなさせ、お徳でござすと、戀も色もねからはなれたる口上、さて〳〵むさひ女郎かな、戀といふ事は夢にも見ぬやつさふな、おれがやうな男とねんごろせずば、男めうがにつきおろうとおもへども、婢がいふにちがいはなし、下の町のふる道具やの娘も、この比みがき入れてよほどきれいな、おれがとふれば、さみせんを引さして、障子のすかしからのぞく、さらばしかけてくれんと、やくにもたゝぬ鍔や小刀を、付札のとおりにかいつけこみ、三味せんをならひ、有栖川のばちぶくろをはづみ、銀目かろきかんざしを、はな紙のあいだよりわざと出しかけ、もろふてくれがしに、何ごとぞいふてみたい折もなく、むねにせまりし數々と、かわのたるみし仲のいしをならひて、母おやがとなりへせんたく物打にゆくあいだに、しびいて見れば、娘はつぼ〳〵口にて、わたしはきりやうは人並よりはよほどよいげな、それで三味せんをならひ、御大名へ御奉公に出るつもり、もし御手がかゝり若殿でもうむと、ふたりのおやだちらくにやしなふ、いまのうち、すこしがしんぼうじやげな、おまへもねんごろにいふておくれるほどに、此月の宿代五匁かしておくれ、錢で三百四十文ほどじやげな、月並の三味せんのいと代で、さし引しておくれと、紅ぬりたる唇をひらつかしかたり出す、戀もいろもとりおき、ことしも來年もさめたるせん

さく、(自程曰、近年下々に少し目はなまんろく成娘をもてば、こと三味せん舞をしこみて、大名がたの御茶小姓にいだし、すて銀何十枚、給銀何ほど、野菜銀何匁、下女一人四度の御仕ぎせなどゝ約束してさし上、ふと御氣にいると、御部屋樣御前樣ともてはやす事あり、其御かげにて、親々が俄に汁わんをうつむけに、ひもにてぶりつかせしのりかんばんもさげおけ、もふくろうのつにむせたるやうなかたもしさいらしく、しほたれし前だれもざうきんにするは、大かた西國すじの大名がたの、舞子をかゝへるなぐさみにやなり、此まとがはずれると、かの宮川新地、手かけ月切、その外三本木瀧の下あたりに、あみをかけて待身となりゆくならしとや、)二三年はいろ〳〵とすりみがき色どれ共、中々とふ人もなし、よほどおとこぶりみがきにもたいくつせし折ふし、町内のむすこにさそわれ、二軒茶やあたりに行かへり、もはやそろそろ火ともし時、かのむすこにむりにすゝめられ、わたりに船と縄手に立より見れば、つれは折々かよふ所と見へて、助さん御出なさんせ、あなたはどなた、よふこそ御出なさんしたと、すいつけたばこ、ふたせか茶をもつ花車ともおぼしきものが、御上りなされとすゝむる、つれははしごの段半分上れど、さすがははづかしくうぢ〳〵するを、むりに引上られ、酒さかな色もありたけ出す、誠に見せつきのきわまりにて、あなたはさても八様によふ似た、ちよとみたればとりちがへた、これはマアうれしいものじやと、むかしより極の口上、耳にとまりこゝぞいろのとりちがへ、かちつたへ聞、お花は半七、かみや治兵衛は小はる、けつく小町の女こそみづくさしと、心に念じ床へ入ば、さだまりしことゞも、中居が屏風ごしにかりにくる、おきわかれし上り口にて、どふやら女郎がなづみしことばのはし、耳にのこりておもしろく、四五日もすぎて、此方から助をささふもおもてぶせ、芝居と出かけ助を誘ひ、かへりにさしづめながれこむしあんにて、いそ〳〵と木戸を出て件のかど口、近所になれば助は、サア立よりて一ぱい飲でかえらんと、とものふはうれしくも、はやちかづきなればうゐ〳〵しく、さながらによほどあいさつも、間に合したいけもなく、一二座遊びてかへり、よく日助とはなしあいつゝ、二三日もすぎてまた、助をささふて見る、けふは

きう用ありて得ゆかぬとことわり、ぜひなく七つ過に、かみ月代ねんに念を入、衣紋つくろい、藏おろしの扇をならし、たばこ入日に無用のめせき笠を手に持、寺町より四條へまわり、縄手を上へいろがおもてをとふり見つけて、くれ時なればおもひ〳〵に、衣服をかざり店先にこぞる折に、わざと東がわへうつろひて、みじまいはやう仕廻し、傍輩のいろが見付、小女郎に言付る、仰によつて快童丸見るやうなちよつぽりが、袖口もはをりもかまひなく鷲づかみに、蟻どもが蚯を穴へ引こむやうに、のうれんの内へ引入ると、ほうばいの女郎が、ゆかたにしごき帯、立ひざにてたばこすいつけあてがい、けふはどこへ御出なさんした、ちよと御寄なさんしてもとがにもなるまひ、氣のわるひ、マアおあがりなさんせ、などゝあいさつに、サテけふはおやぢのめう代に、深草の法憧寺へはかまいりしてかえりじや、助へことづけはないかへと、あがり口へこしかけ、二かいの上り口ばかりしりめにかけ、とびたつ程上りたひをじつとこらへ、はりつよく傍輩ふたせが手を取て引ずるにつれ、はしご半分ほど上ると、はや袖もなひこと、うたひかけしめて名古やのふたへの帶がと引かける、いかにくたびれたとねころび、盃も二三べん廻り、露うちと硯ぶたの梅干、かまぼこ二つ三つへる比にも、色が出ぬ内へ、すこしムツト氣になり、はやういぬるとそばへる所へおときはふろ上り、身仕廻の始るところへ、青豆ときの客なれば、おしろいを鹿子まだらに、ふじのさん、扨も〳〵きがせいた、おはやさんに、すじたてゝもろふたれど、半ぶんでやめてきた、ア、あつやとはな紙で扇づかひ、おなじ家の狸ども、おまへのすいた御方には、きついきのせきよう、ひがしのとういんのかの權兵衛さんへ、その半ぶん心があらばとて、こをかへば、またわる口をと、あいずりのごまのはいども、つまみせににてもむしる仕かけ、おまへの所の文は何所へやると、はやふ届へ、うちかたへ飛きやくでやつても、いかゞととわれて嬉しさ、やまと橋から半町ほど下に、さかいやといふ芝居茶やが在ば、そこへ出せばさつそくとゞけると、名殘おしくも、内の首尾も氣づかひ、狀を出すならば、おれがかへ名は三木といふはと、ねんごろにおしへ、よく日あさの間に手紙をしたゝめ、かのさかいやへ遣し。三木サマトいふ

か、助さまといふ文が來たらば、うけとつておいてくれ〳〵頼、また明の日わざ〳〵芝居茶やへゆくに、何のけもなし、すご〳〵かへり、さう〳〵毎日行れもするわけもなし、文はほし、助にあひ、この中おときが何やら貴樣に用がある、狀をやりたいといふゆへ、さかいやまで出せといふた、もはや出てあろふ、貴樣下へついでがあらばよつてみやと、わが狀のほしい計につれをつかふちえ袋、つれの助はうなづき、さいわい寺町の四條までゆく、よつてみんといへば、忝し助がかへるをまち、たいくつくれ時に、かの狀を持てかへる、ふうじめにかよふ神、むすれて三四年といろどれども、生物より文をもらひしことは、けふがはじめなり、文をひらけば、

文とはなれ〳〵しく、御らんもいかゞとおもひ候へども、筆染まいらせ候、まことにえにしはおかしきものにて、淺からぬ御こゝろがけ、いまに〳〵そのうつりにくらしまいらせ候、いよ〳〵もらしま樣に御入下されまじやきゝましたく、わが身しも御げんのふしにたがひなふしのぎまいらせ候、中度事はやまやまながら、御らんもむもじと筆留まいらせ候、夕方助樣御どう〳〵にて、御あゆませ下され候ほど、なを助樣へ文ましにあしからず御つたへさせ頼まいらせ候、時ぶんがらに御さつられのふたのみまいらせ候、中度事御ざ候まゝ、この中に御あゆませ下され候べし、

かしこ

などゝにぢり、返す〳〵はおかしうひきずりて、かゞみに向ひて、はへ際のしらがをぬく女郎でも、返す書はいまだわかきこなたなれば、あしき事は御しかり、いつ迄も御心御かわりなふたのむと、文づらうれしいやらおもしろく、何となく心もいさみ、鬼かいがしまの流人が、しやめん狀をよむやうの心地にて、いただきおがみ、なでさすり、まことにしんせいの比丘尼が、ふるふんどしをひらいしとやらん、餘りに持なやみて、うすき杉はらも、わたけてちぎれやぶれもゝけてさけてうら打して懷へいれ、また色どるもうしうのよれかね、くだんの狀を、かの大名をねろふまと娘が方へ持てゆき、たからかによみかへし、もしやまた、すこしはほうかいりんきでもするかと思ひて、かの色がめつたにほれたやうに、はなしをすれば、かの娘は象牙のかんざしにて、ひたひのあたりをかいて、

あつたら金をわしにくだんせいで、米を一度に五斗程かふて、こちのからとはじまつてからなひめづらしい事して見るものと、ねからかふばいのあわぬてうしのもどる三味せんひくともおかしからず、大名をねろふ娘がかたへ、しだひにそゑんになり、ひくじやとひとりゆるせしおとこも、縄手のつなわたりよほど覺へ、石垣ぐるひたばこ入に、女郎の紋を縫にして持ても、おかしからぬ樣子をすこししりて、宮川邊へ垢離を素人のひとつがひ、又座もせあしからず、後迄あそびてかえれば、よほど素人に喰おけも在、はじめ戀しかりし縄手も、いまは其門をさし足して東側へかたよつてとふる、惣高拾四兩もつかひて、はや粋の顔の思入、おなじ友達に出合、遊所咄しになると、きせるを糸切歯にてくわへ、あそびも女郎の狀のうれしいうちが、はなじやの耳じやのと仰、未一門家ぞくの異見もうけぬに、ずんとわけしり顔、わがおりおりはゆく石がき京屋が本の誰はよほどなじみ、いまでは一向に、つとめ氣をはなれて居るゆへやめられぬ、それに湊やから出るかしわがりんき、さて〳〵つとめするものは、けつくりんきふかしと、おり〳〵はかの持病のおとこ自慢がおこつて、町内のめしたき兒婢迄に、まゆげをよまれ、いまだ親父のまなこにかゝるほどはいたらぬとも、よほど咄をたらし、もらひし銀の緒も、しばしとふざかり、人がさそへばこちの首尾のなをる迄は、陳をひくなどゝ中々いふ首尾の段へはゆかず、銀のまわりしばらくあしく、うちの銀をくらます事はいまだおそろしく、さはさりながら一念のすりみがきはやまず、當時よひおとこじやとてほれる女と、むらさきぼうしきた女はなひものぞ、遊びにゆくに、ひんそうけふたんの衣ふくにて行やうになれば、銀遣ひにはかのゆく事おびたゞし、すこしとしもより、東西の郭の味を覺れば、むかしすりみがきせし事をおもひ出てかほが赤なり平、よくよく思慮すべし、

自程曰、祝陁が公義あひ、宋朝の尻毛までぬき立て、すりみがきも、よる年はみがゝれず、よいおとこじやとてほれるは、いまにても大内の地うこんか地白かため口たる尻大きな女中のたのしみも、其外の女は目のつけ所かわり在、前がみおとしてわかづめをかうはすくなし、大かたとしまを悦も

のにて、五十よりうへの男隱居禪門がしゝは、ふり袖をねぶりまわし樂ことじや、
○あわでやみにしうさを思ひ、あだなる勢をかこつもあそびによほど油をのせかけ、むかしかよひし繩手石がけの事、人がいへばきえ度ほどに思ふ段をかきたり、
我にひとしき人しなければとは、いつ歌人の口說ぞや、宮川あたりの水せゝりも、中居娘の伽なれば、祇園先斗町の夕げしき、華頂山よりきしり上る、月のゑがほ我ひとり見る心地、はるはさくらのしよげたる、二けん茶やにまくうたせ、花見とて娘中居にかしづかれ、竹本大津鶴澤などがほしがるをあしらひ、めしひと箸ほど喰て居る素人をよび、料理人が金杓子を持てはしり廻るがおもしろく、明日はまるやまのさのやのと、くれにおよべば芝居のやぐらまく、夕陽に色そひ一ぱい機嫌にわなり遊、小女郎がづしへきゝにゆくへんじいかにとまつに、ほどなく追付御出難有と、はや待氣になり、娘中居のやりくり聲、おかしくもげら〳〵わらひ、川原のいかのぼりもたゝむ川ばた、井俊藤代がほとりも日覆をかゝぐる折、らうそくのこしらへに、扨々是はおそひと、ばんとう中居がせきごゝろ、これもはや出にはおそし、くれからか、いや〳〵中はんのと評ばんとり〴〵、(自程曰、むかしはくれといへば、きつしりとくれにおくる、今はくれといふを、初夜過におくり、大かた女郎が辻子新地またけをかけ居、兩方はたしき、扨はじまひのはく人のうりがさをきめごまかにするゆへなり、おゝく新地をはたらく女にて、おりにひるをうるゆへかくおくりもおそし、ぎおんゑみこしあらいには、七ツ向も後のならぬうちにとることしかり、すべて東素人のならわしあしく、おのづから錢かんせうつよく、それゆへ小判せにしかけおゝくして、少しもくるしからざることか、)十四匁の長かけも貳寸ばかりなだれるころ、お傳樣御出と下にはまわしおとこ、中はんなりとつけ屆け、はながみたばこ入持かへ、ひぢりめんのしたぎのすそふみひろげ、はやりいしやがはをりをさばくか、鷄が翅のすやうに、すはらぬ内に夕べの醉たはなし、おとひの芝居うわさ、さきおとゝひの山ゆき、二軒茶や北野まいり、主夜神まいり、心中かけ落、はしり坊とりませ、

盃をおかしう三味せんはきものごしにさする、吸物はふたをもとらず、中居がつきあいといふてく丶めてやれば、汁少し吸ふて梅干をねぶり、膳どきは座をたちて、はしごのそばにて花車をとらへ、こよひは中はんとくれと二つにしてくれと、花車をいじりて客をそしり、膳がすむと沖の石に石橋獅々がはたらく時分に屏風をひく、ちと御やすみなされとたばこぼんに火を入る、こ丶へも茶をと小女郎上りの中居をつかひ、吸付のけぶり新田のかほりも、御さだまりのとほり、油じみたる木枕に延紙を打しき、これも唇にてかみをさばき、うつむけにね、はらばひし、からだをたひていにては横にはせず、かんざしでくびすじあたりをかきまわし、おかしいにおひのねまきの袖をかほにあて、目ばかり出して、文治松兵衛鯉長がとりざた、北側の初日ばなしするうちに、中居があとをとひにくる、干要の事はすまず、返答さだかならぬに今やう〳〵初夜すぎ、せめて後迄と丶める、こ丶にて中はんといふ事を言外へあらはす、うちの首尾も心元なく殘多く、はく衆もきせるくわへながら、御とまりなさんせと、けぶりを口からとはなからと一度に吹出すに、中居はおとなしく、内かたのかたひはよふしつている、しかしきつふよひなれば、まづしばし御やすみと、中居がはしごの段一つ二つおりる比に、茶一服のむ間を、十年もねるやうに身ぶり、帶をときうちとけし御けん、おかしうもじや〳〵するも、あそびの手品、さして物語するともなく御むかいと、中居ゑんりよなく屏風引まくる、ゑんばなにみづつかひ、細手にかんばりな義太夫、われにはかまわぬいやらしいかたもつな、おもしろそふにうたひくさると打ながめ、茶をのみ、白衆は立膝に延紙持そへ、きせるもいとまごひの一ぷくすいつけ、ちかいうちに御出、介様へよふこ丶ろへてをくれ、おさよとのいのへと、馬奴のあるきながら小便する樣につれへの傳語、中居へのいとまごひをたれもつてはしごをおり、跡にひとり二かいにもいられず、庭からかごへのりのこわひふとん打しき、ちかひうちにおこし遊ばせと、中居が棒のさきへ家のもんのてうちんく丶りつけ、紋日やくそくのあしろ、門口より半町計中居がかごのたれへとりつき、まへだれのしりへぬけるをか丶えながら、涼のうちに外聞でござります、二日は御やく

そくいたしますと、ふるがねかいに見せても、金二兩ほどがものをかごのうちへ言入れば、どふなりともはなしやくそくをあひごしにのせて、内の首尾あんじて、親父がおきていたらばかふいふてと、かごのものにときをとへば、もはや八つでもござりませふに、南無ざんまださうは在まひと、ねぎつてみても八ッ時にあまり違もなく、わが家にちかきところになれば、かごのいき杖のおとも、おやぢの耳にはいらんとあんじ、一町ほど手前にており、そろりと内に、よく日しぶひかほを見て、味なひ朝めしを口をふさぎかきこみ、下の町の煙草入屋へ行て咄する所へ、おなじ友達も入來る、さて〳〵夕べは大づくしと咄の席ひらき、助はすましがほ、日暮に店へいたれば、松がいふに、こよひは木戸番いたしますといふた、おれもあとから行とおもふた所、にはかに大坂へくだしもので、ヱ、殘念と舌打、ホンニさよが御やくそくのものをはやふ下されと傳言した、何をやるぞといふに、すゞみのまへだれそろへやるはづじやと、咄の所へ狀くばりがさし出す一からげ、とるまおそしと符をひらけば、花舍が一通にキ雨子が文、御定もの文言に、追分繪のふちの花みるやうな、かへす書に中居がそへ狀、夕べ御たのみ申上候涼の事は、いよ〳〵さやうにいたし候と、かすがひうち、助がかたへたのみの狀、まづよほど間も有と、しかしふつかの内一日は、是もやくそくせずばなるまじ、いまだ素人の文十通許ならでもたねば、うわ紙によくつゝみ、羅紗の三徳の間に納め、花舍が狀は紙入やの女房がすき紙にやる、めぐるひかげの十日も過ぬに、鴨川の漣千鳥の音ゆかしく、助をさそひたそがれ時より出かける、鳥又が家鳧(あひる)もよほど見知有、河ばたに舞鳶からすもゑしやくする心地、何となし面白、助がつきあひにいざなわれて、祇園町いづゝが方へよるもうゐ〳〵、さながらかのれい落なるけいも見たし、大ぜいの中居がまへだれ、らうそくにひるがへり、娘が三味せんに、何となく爪をくわへそふな勢も、つれのかいほうにて、盃もよひかげんに間が廻りて、娘中居があなたは御なじみが有かといふに、助がキ雨子といふに、りやんともゆびも出サず、のみこみさゝやきて聞にやる、追付御出といふに、素乗も御來光、それ〴〵のあいさつ物ごと、又ほんとより花れいにておもしろく、夜半に

歸るとおもひし後もとひこず、屛風ふとん引たて、さしもやかましきだいどころも、おきばん中居が棚もとしまふ音して、しばしまどろむに、御迎と鐘は七ツどきなれば、キ雨子もしみ〴〵と、目やにをば繻絆の袖口にてむしり〳〵、この中おさよがいふ通、涼には出るぞへと、とれることはしみ〴〵とめひさのして、つれの素衆も屛風ごしに、おちかひうちにへと、だゝびろき二階ものすごし、中居がさゆを諸々の屛風のうちへはこび廻る、臺所は中居めしたきがねごと、小女郎がはぎり、八方の火かげも心ぼそく、うちも首尾心本なく、水ぞうすい喰氣なく、駕籠へのり中居がいんぎんにあいさつも、いきづへの間もまたるゝ、飛でかえりたき心持、うどんうりもねぶり、繩手の駕籠の會所(よりどころ)もたかいびき、三條のはし河風すごく、かの千鳥の聲も耳へはいらず、おい出し鐘計耳たぶをつきぬき、中島あたり旅人がわらんづのしめく〳〵りよき、うちの門をはいりぬ、明の日かのさよが狀は何事やらむとひらくに、

わざとふみにて申遣まいらせ候、あつさの折から御さかん樣御めでたくぞんじまいらせ候、さやうに候へば、ゆふはよき御なぐさみ、井筒のもとはかくべつ御たのしみあそばし候、わたくしかたは、いつも〳〵さう〳〵の御事にて、御さうにゆる〳〵御しかうあそばし候よし、夕にうけ給りまいらせ候て、わたくしなどなりとも、さんじまし候ものを、御しらせも下されず、よく御出あそばし候ても、御ひけにもなり申まじく候、きうし樣こそきこへぬ御事とぞんじまいらせ候、けさ湊やのおとこ衆にあい申候へば、きうし樣より御ことづてにて御ざ候、御しらせ下され候へば、御じやまになりまいらせ候御事御ざ候や、さて〳〵きこへぬ御事と、みな〳〵申まいらせ候、なを助樣へよく〳〵御つたへ可レ被レ下候、ばんほど御出可レ被レ下候、申上たき事も御ざ候かしこ、返す書には、すゞみもいよ〳〵御やくそく申まいらせ候、

お傳樣の御文もとゞけると、夕べの井筒がしこくのく〳〵りかせになりて、いやともいはれぬやうになり、助がかたへも恨のたら〳〵、お傳よりもさよにねだられ、めいわくらしき文のかきやう、涼までは少し間もあり、この中に御出とせつ〳〵出られぬ事はよふしつている、助と相だんするに、どふでもやくそくせ

ずば成まいと、あつき日のほどなく祇おん會になりぬ、かねてくゝられしやくそくの日なれば、前日よりもあたご參りと内をつくろひ、朝めし時より出かけ、小者は芝居へやり、こしづけの行厨もかたづけさせ、井筒の言わけやら、内の不首尾ばなし、床のらんかんによりかゝり、となりに助がおてきかくるすだれごしに咄をして、ゆかの下をながるゝ西瓜の皮うなぎのくしをかぞへ、河原のこやもそろ〳〵見せものごしらへ、鳥やがあひるもやどへかへる時分に助もくる、宿やのゆかたをきても、かえりあしの時分になれば、面白さもうすく、やう〳〵らうそく出す比に屏風をひく、十町そこらは極らくのてい、泣わめく、歌ふおどる、石垣のまんどう、麒麟はやくこへ松のけぶり星をてらし、まことにこれぞ日本一のはんくわとも言べし、かゝるおもしろき最中にいぬる此身は、いかなる先世にわるひ事をして、ろくにあそぶこともならぬぞと、心もあぢ氣なく、中居がたゝみつけておいたかたびらをきかへ、まじめにつくばへば、助は中居を逢手にけん酒、コレよいわいの、さりとは正氣な、それほどにおやぢがこわひかと、わらひわめく、涼のうちは三昧せんはならず、花火せんかうもおかしからぬ、河のはたへ床几を出させ、となりへきた小市豊七をまねき、和尚がほんひんふき吹もつてつれありく治郎をかり、井筒の中居が付合にくる、其心よき事をさしをき、みすぼらしく歸こそむざんなれ、わざとしりきれざうりをはき、粽をとゝのへ、道すがら小者にせんめうをふくめてもどれども、うそはあとからはげて、小者がはなしとふにおちずかたるにおつる、しれたもんくの狀もしだいにたまる、正月はつ午、御忌、三月せつく、五月の粽、大かた紋日をかづきつゝ、あまちや〳〵な遊も、少は尾ひれが付合に、外の女郎も帶てみる、後からむりにもらひにやる、その間に中居のちよがすへよし町のやどばいり、鉋目の雜器に仙人を一疋そへてやりしが、さらばこよひいへ見にゆかんと、中居むすめをつれ、鳴ごめはこれは忝と、俄に新ばしにて鯛をかたみとゝのへ、吸物ざかなを引張、外聞に藝子さまをよびませふとすゝめられて、いやともいはれず、勝の樣御いでと、くすり箱のごときをもちて、年比三十歳計の女性のずんと色くろき、黴毒跡まだらにおしろいをぬり、いくよおりの八つ

過なる帶を、うしろとまへとのさかいにむすび、さてしやきり聲にて、小栗の道行はた〱てう〱かひ、かた〱ことまじりに、ふしおかしくもわなるうちに、むかひにくるさよが、何やらん私語(さゝやく)、アノ子は内證をつとめて、てこずりますと、きうし樣へさたなしに、私がところのふとんびらき、ちと御やすみあそばせとしいられ、新地の女中も御つきあひと、せんかう三四本ほどねてみる、酒小賣やの鍚の衾たよりは味なく、後すぎにかへりて見れば、夜中のかねも半分すぎ、らうそくなだれ、きうしも來たと見えて目おぼへの有かゞみ袋とりちらし、ゑふた顏にて、二かいの口からじたひ、おすみはさいかく者にて、よいやさ〱とたゝけば、えの吸物うどん豆腐はお傳がしやうばん、こよひも辨慶どう〱じやといえば、中居が何事じやとゝへば、ハテ七つ道具じやと屏風のうち、少はおだやかならず、よひの新地のもちこみて、口ぜつのやうなれども、とうふにかすがへこたへなく、キ雨子も快ね入、うちへもどつてみる、さしてりんゑもなく初戀しかりし事は、少はわれながらおかしく、櫛笄貰てやつたがおしいきみ、到來の文もしはすの月はうるさく、くる〱卷にしておしこむ、しからば少粹にもなりしかとおもふに、中々以その段へは及なし、あそびに少し目はなの付たおもむき、伊藤玉忠が印かのものはすくなし、金(かね)口春は二軒茶や、丸山にてはく人やらうの輦にのり、芝居は貳軒つゞき、娘中居を御簾にして、其身は中居牽頭と飲つゞけ、逸風がよいやら、慶子が面白やら、月は三本木安井、雪は湊屋さのやのさわぎ、はてはきうしもおやかたの手をはなれてしまひばたらき、はゝ親とふたりぐらし、内には女郎の二三枚もかゝえ、せたひじみて面白こともなく、のちは役者の女房きはまる、エヽ、あたら金をすてゝ、その金をもつて柳が下に立よらば、むまひめに大木のかけかぶとやら、まぶとやら、よひ事のあるとおもふはふかくのいたり、そも〱柳陰(しまばら)色のすいとりやうは、また〱東郭(ひがし)などのごとくこまひになく、鼬のはつかねづみよりはむごひ仕合、むかしの西色女(けいせい)はわけしなもよかりしが、當世のよねは隨分ひすらこふして、先以て時節がら不相應に高直なり、南香(きやら)のとまりし打かけ姿は、よく〱しあんしてかのさとにおもむくべし、

自称いはく、當時じまひの素人は、まはしのおとこをとらへ、中はんの大はやのと、自身づめをせわしくいゝおしゆる事なり、或沙門いはく、此一巻はまへがみよりあそび出し、素人をかひ覺るまでをかく、その文字やう〳〵としてひろく、故々としてゑりくりのゑりくりまでをさらえ、建長寺のとりほうき客を言外にほめて、わけなき中になづむを毀る勢有り、

○人の心はおろかなる者、匂ひなどはかりの物なるに、しばらく衣しやうにたきものすとしりながら、えならぬにほひに心ときめきするとは、吉田の法師も粋なれば、此だんこまかなる所に、心をつけてかきつゞけたり、

柳陰城は、柳下が惠が親里かもいさしらず、中華は青樓妓樓といふ、古より九條の三筋町とて、九郎判官のふかくなれし大文字屋の静より、色脈綿々として絶ず、吉野野風金太夫花ざし小太夫杯いふ名花ひらき、客の心を和らげぬ、東武の高雄、浪花の夕霧はこれをしらず、君子は不レ知ことは闕如スと、仲尼といふ粋のおしえ、都に住ば及ばぬまでも、其地のことをしるが干要ならんかし、海に臨みて渡りをとふことはなりもせん、西色はそのしる人のなければうかみがたし、東郭のあそびも何となくうつろい、助がさそひもさしておもしろからぬ折から、おもひよらぬが風のさそひて、柳が本(もと)に立よらんといふつれこそたのもしく、こよひ夜みせを見ばやとさそはれ、放参時よりもゑもんつくろひ、かのひがし風をもつて、うへにはつたんかけの羽織衣ふくそろへ、下着はふる手染の小紋、はちくのうら付、きびすをぐれつかせ、二條の番場をすじかひに、さながら衣紋坂へはおもいゆく、入日もまだかゞやかぬに、朱雀を西口へまはり、いまだ女郎出る時分にもあらず、麥の浪のどかに、平郊の菜花うこん色の如くたつ氣しきは、四條河原のよそほひとは、はるかにことかわり、水茶屋のかゝが黒木をたきつける比、人らしきものとふることもなく、新柳の大木戸こそ氣味わろく、つれの源がゆく揚屋はみなみのはしなり、兩側ののうれんみぞ石をねぶり、のきにならべし大つゞら、ふぎんもどきの日がらかさをたてかけ、大ぶろしきづゝみを、いくつともなく棒にさして荷ひ行、いかなる事ぞと源にとへば、され

ばこそ、天神以上は夜具つゝらへ入、はし女郎のともがらは夜具をふろしきに包、口の茶屋北の茶屋にては、はし女郎をよびてあそぶ、これもたいこきりとて夜四ツどき迄、それすぎては揚屋にてとまりあそぶ事、よく覺へおしえられ、さてかのあげやとやらんへゆくに、何のけいきもなく、中居らしきもの、ふるきまえだれをつゞり、花舍は臺所に座頭とさよ衣をさらへ、いとこま〴〵ときこへ、花舍は三味せんをさしをき、よふこそ御出あそばせ、あなたはどなた、御上りあそばせ、コレ此きやく人は、かねてうはさをした三木といふわろ、まいどすゝむれども東鳥にて中々うごかず、けふはやう〳〵夜みせ見たひと、御意がおりたゆえ御來迎、何とぞ此さとの本尊になりたまふやうに、花舍がきねんたのむと、くわんたをいふに、よふこそ忝、いまからひがしの御かへりに御より下されませと、中居茶だひにてはこぶ、花舍が吸つけ金孫草(たばこ)もだゞびろき臺所にくんじ、ひがしの新田とはちがひ、服部のまひとめとて、一ぷくにてよふこたへ、人はすくなしすみ〴〵はくらし、何とやら物すごくおもへども、二かいへあがるに、替らぬものは梅ぼし、しばらく有て禿ならんと思もの、油にて殊外ひかる小袖を着し文を持、花舍がそばへより、アノ此文を明日までに、茂七のかたへとゞけておくれなさと、口上いゝすて廻る比に、大ふり袖のかぶろ源がそばへより、太夫さんのよふ御出なされました、追付さんじませうと口上いひてかえる、禿に花舍がアノ子いんでならば大夫スにはやふ御出なされと花舍が傳語、扨是からよねサマがたかりませうとせめかける、源がとりさばき、太夫をかりにやれといふに、程ありて表に數ある下駄のおと、たゞいままで郭公鳥のなきし臺所やかましく、梯子のあたりにゑもんつくろいゆるぎいづるよそほひ、引ふねが付そひて、よふ御出あそばせとあいさつ、御上人樣座に付たまひ、引ふねが吸付ぎせる、花舍が盃を奉るはおもわくらしき幽靈のごとく、中と計聲をかけ盃をさし、こなたも太夫の盃をいたゞくこととなれば、何となくかど〳〵しく、盃をとればゆるりと御遊びと立しな、花舍スのちほどへと、あいさつの色をのこし座をたつに、花舍はふでをもち、地ごくのめう官を見るやうに名をとめ、今のはわか紫樣と、それよりだん〳〵おなじやうなるあひ

さつ、しよていめくろほしき來る程に、まなこもちろつき、顏も形ちもどぎまぎしてしれがたく、源が逢ふ松の位も來り、あなたかねておうはさのかた樣かと、あいさつしほらしく、花舍は筆を下におき、大夫樣みなかりました、御物數奇いかゞとうかゞへば、しからば是といふもおもはゆく、こよひはかえらふときはまりし口上有圖なれば、花舍は心得、こよひはまづ始て御出下され候事、せびにおとめ申ます、もし御氣に入らずばかさねてかへて上ませう、太夫さまも、ひとつ御あひなされてはかえることはなります、二つ御逢なされてはなりませぬ、重ねてともかうも、はじめてなれば御もの好と源も中居もせがむ、こゝにひとつのぼんのうは、三番めにかしにきた、ひぢりめんの帶付に、くろ羽二重のうちかけせし太夫とあれば、高橋サマとてかどやの太夫樣、それをとおもひの外なる注文と、さつそくよびにやる、いまだくれぬうちからふけたる御物好、むべなるかな此里にては、二番とさがらぬ年まのけんかひなれば、外々の太夫よりは、そばへよりてかしにきた時の盃もしつぼりと、さて名物のにほひに氣も上り、御門跡樣の佛だんの心持、はしごをおりしなに、あとを見返り心ありげに見えしが、初段のやみつき、日もくれかゝり、しよくだいも二ッ三ッならべ、橋サマ御出といふより、しつぼりとそばへよりて面白イめもと、しかれども素妓とはちがい、太夫が三絃持ことなく、座もめりかゝるを、花舍が源にそうだん、太鼓女郎をよびませうといふに、又別にあげせんかゝれども、せひなく藤波といふ三絃の手だれを招、ていしゆはまかり出、はじめての御かた樣、御ゆう引下され候難有とさんたし、晝時よりいなりへ參詣仕り只今罷歸り候、御盃ちやうだいといんぎんに相のぶれば、かねて源がいひふくめしことなれば、盃にそへて一角をはづむ、おしいたゞき座敷を退出し、神の棚の鈴がら〳〵、扨こそいまの一角が鳴とほどなく夜食、ひがしとは違て、その料理の見事さ、節のやうなる獻立にて、六月比までも鰤のかわらけ燒をつかひ、五月比に正月の鹽小鯛を用て、夜しよくにても夕はんにても、くはれぬやうなものが此里の格式とて、自まんは何ぞに旨味の有事ぞかし、膳のうちは、女郎もうちかけぬぎ座敷におき、勝手へ立ば引ふねがきうじ、太鼓女郎がめしをしいるが

花舍が平ざらのふたをとる、夜みせけんぶつはわきへなり杉原折のたばこ入のかほりにふすべられ、初夜とおぼしき比、門前しきりにさはがしく、何事ぞと尋れば、今よみせがすみました、此中に御出あそばし候時ぶん、御らんなされませいといふうちに、かぶろがみゝもとへさゝやきにくる、ハヤ氣がゝり、むかひへかしにやるかへりがおそひと待かねる、その顏はしれたはなうた、東ではやるは沖のいしの手をつけかへ、鯉長がおしえてくれたといふに、花舍が心得、三味せんとつてあてがひ、藤浪スとちと御つれ引あそばせに、藤浪がおしへてくれとのせる、ひがしとちがひ、御性がつきませうともたせぶりに、しどけすがたにてもどる橋が顏付までも、まさ都スの盃のむりにはこまると、おそかりしいゝわけせぬばかりにそばへより、源がおてきも神妙にはなしするうちに、アラふしぎやあら男一人料理人くる、女にどたぐと二かいへ上り、何事やらんとおもへば、かの大つぅらの中の夜具なるべし、一間を引まわし有明をしかへ、太夫さんめしかへませと、盃を花舍が取入、かさねぶとんに二ツよぎ、引ふねが心得にて太夫がねまきをきせ、ねん比にたゝみ付、引船が伽に吸付たばこ、さして咄す事もなく、もはやくるかとまてども足おともせず、(自程にいはく、わかき太夫にはふねをば置て、客の楫をとる、高橋ごときのざれたる太夫には、わかき引ふね故、此場所にてさして客の氣をとる事も入ぬものならし)こよひこそ太夫とだかれてねる、兼々けいせいはふるとこそきけ、一生のいろとる時節此時にあり、東にてよほどわけをしると、橋をなづませおもはれんものと、東とはまた一風かわつた里であろがと咄し、七つ時分にはいぬるべしと約束かため、源は手をうち、七つ時分にはかえると、駕籠を云付る、源が御てきは二かいへあがり、三木サマ御やすみ、のち程とあいさつ、こちのはなせにおそひ、またとこぞへかしにいたかと氣にかゝり、あくびやらのびやらませる折から、難有御來迎、隣へことばをかけ、太夫ス御やすみと打かけをぬぎ、ねまきにしごき帶、かのけつかうなる匂ひにむねもどきつき、ふとんのうへにつくまひ、緋ぢりめんの小袖をば、おしげもなくして着こなし、かぶろが吸付眠に煙をふきませ、手道具のぶんこ、次の間にとのひする引ふねが枕も

とに引よせねるに、まくらならべしよそほひ、素衆とはかわり、髮のすがたもいやらしげなく、銀出し花の露はおもひもよらず、十日もはつかも髮をもつことはせず、毎日々々ゆふとみへてねばりけなく、小袖はえならぬにほひ、なるほど南香(きやら)とはおもひながら、橋が身から、此やうなよいにほひが出る樣におもはれ、さて駕籠がまわれど出くすみ、やう〳〵と源にせつかれ、名殘おしげにふとん立出、むかし坂田某といふ役しやが藝言葉に、ホンニ太夫とねたときは、ほねがなくばひとつになりたひといゝしは確言哉、あかぬ別の駕籠はものかは、臺所にてきぬ〴〵をおしみ、引舟花舍がおくり、源は太夫に引そひ大門口へおくるに、うらやましく、此中にえとことばを殘し歸り、源が太夫が道すがらねんごろに、かならず〳〵ちかきうちに、源スをつれて來てとたのむに、東のしらむ比に、柳の招木陰もさびしく、本國寺のかね御堂の大鼓、耳めづらしく思る、あし六本にてとぶがごとくにかへりし、是大病のはじめならんかし、

自程曰、西郭(しまばら)は、およそ初客ついはなづむ地にはあらねども、屛風のうちのからくりよくしかけたるが、あとを引ことしかり、すべて人げんのたねなれば、其味をおぼへば、此さとをはなれて外色(よのさと)になし、東になづみし男が、思ひきつて西色にいたらば、そのむねをしるべし、近き比、京師におとこ自慢のきやく、はじめて郭にいりぬ、花むらさきにあひしが、そのさまおかしくおもひしが、屛風の中おだやかならず、そののち人のさそひしに、西郭は五月雨の比へたなる座頭の三味せんをきくに同じといふは、かのふるといふ事にあひしゆゑぞかし、

○風も吹あへず、うつろふ人の心の花に、なれにし段は、東の色も今はうつりかわり、西かぜにうつゝをぬかし、家もくらものしをつけて、かの色にやるほどのいきほひをかきぬ、

よをうつせみのから衣、此身はいろにうつゝなきと、淨るりの道行がゝりのやうなれども、夫にちがひもなく、いつもよりあつまる紙入屋へ來てみれば、きう子が文を大事そふに出してあてがへば、むかしにかはり狀の符じめ、あら〳〵しくきりほどき、まばらによみおはり、何やらたらぬ顏付、まことに繩手石垣の女中のねごと口上にちがひなく、かも河の瀨と男の

心は、一夜にかはるといひしもこれにや、ホンニきのふまでは、キ雨子が文はてんにんの筆とおもひしが、けふはひがしのなつかしき事もなく、狀をねぢて袂におし入のすみに鼠のうぶやとなる、いつもかはらぬ助がきたり、きのふ八百清にてキ雨子につきあふた、十九日御身拭をやくそくたのむとことづて、きいてもおかしからず、はや馬の耳に風をひかぬにはなし、しまばらのしだひ口へ出し、はなしがしたふてならねども齒をくひしめ、おのれちかきうちに、柳がもとへつかみゆかんものと心に念じ、いつもとかはり、只せけんのうはさに助もてうしのらねば、紙入屋にてしかみがほ、ふうつの狀をあけもせず、折から源が忝と一れい、助はいづくへ御出ととはれて、蛸藥師のうたひきゝにと間に合、源はしほりとさぞ御たいくつとあいさつ、これはめいはく、近々又うけ給たしといふ袖へ、源が手から一通を入ぬ、表を見れば花舍が文なり、そのことばにいはく、

口ながら一ふで申上まいらせ候、まづとやきのふははじめて御出下され忝存上まいらせ候、何の御なぐさみもなく、御せいつき候はんと、けふしもたゆふ樣とつきぬ御うはさ申まいらせ候、この中に御しゆかうあそばし、御出下され候やうにねがひまいらせ候、まづは御禮御とはせまでに、あらあらかしこ、

何事もない文なれども、太夫とうはさがきうびへこたへ、茶わんわつたやうなかほにて、文をくわい中すれば、源はさすがにくるはの正月にも逢ふたものなれば、さゝやき、コレ太夫の一ツかひと、鼬のひとこゑは火にたゝるぞや、きん日まいちど御出なされ、そのあとは勝手しだひとすゝめの忝く、しからばこの中に、御影どうへいなかからたのまれし扇子をかひにゆくほどに、貴樣御手すきのせつしらせ下されと、わかれてより、けふや源がさそふことか、あすかと待に、助がかたより先斗町へさそひの文、何の面白もなひめんどうなりと、よぎなき障入、殘念とへらをつかひ、キ雨子のきの字もおもはず、袖に殘りしうつり香こひしく、鮒のごみにゑふたる心地するおりふし、源が手紙に花舍が文、御出下され候へとの事、今日は用事に付松原堀川邊までまいる、花舍が文も御ゑい堂いかゞとたづねに來、御出候はゞ七ツ時分に、壬生の

南の門の内に茶や有、御まち合といひ來る、難有と返答して、七ッ時分迄は待たひくつ、その間に親父が用事にてもいひつくれば、難波と思案し、かみさかやきはさいはいと今朝すむ、北野參詣とうそをいふきの小袖に、郡内じまの下ぎ、黑羽織、はや東風もすこしは替り、未申の風がさそひて紙入屋へ立寄、助が見へたらば、今日はざんねん一家ともに、七十の賀の振舞が有參ると、よふ心得て下され、仕出し煙草入調へ、壬生の地藏と出かけ、かの茶やへ行て見るに、源もいまだみへず、此茶やも並々ならぬ茶見せとみへ、いまづやいせや大龍寺のつじとの間のものとみへ、ちやみせよりは盆やが本職とおぼしく、おくにすだれおろして、奉公人の出合かぼい〳〵とはなしするおと、何やらこのもしくおもはれ、たばこにも醉ほど待合すに、壬生と會式のこしらへ、小屋かけする東の堀へ參會のものがざはつく、もしやしる人が有ばいかゞと奥へ引こみ、茶やの荊婦に何時ぞと問ば、もはや八ツ時でもござりませふといふに、コレハ七ツ時迄はよほどあひだが有、さて〳〵このはるは、いつもの春よりは日がながひとつぶやく、かの簾の中には田樂酒などにてたのしむ、少は美太夫をかふては、町のものはむさひとひとり心にたかぶり、帶などしかへて待に、源は足ばやに來りて荊婦に近付とみえ、おそふ御出あそばし、あなたは晝時分から御待、是は御待遠、道にておもひの外ひま入と、こゝから小ものをいなす、貴宅へ用事はないかといへば、コレ庄吉、もしうちからそちへ尋に行ば、北野からすぐにすみやへ、うたひを聞にいたといふてたもとたのみて、味ない茶を一二はいのみかゝる、折ふし戀無常の世のならひ、三十斗の女がとりあげ髮に珠數もちそへ、見せをかりて涙ながら風呂敷包よりしほ〳〵とはこ入の人ぎやうとり出し、袋も赤地の男の子、守り袋をもちそへて出せば、荊婦がおいとしや、御子樣を御いなしなされましたなととぶらへば、アイとなみだに、下がにめも泣はらし聲くもり、六ッになるひとり子、はやりものにていなしまして、けふはゑんまサマへ人ぎやう上に參りましたと、あはれをもつも人間のならひ、ふたりはさゝやき、何とやらんむねしほらしく、とかく女房は持ぬがよひ、もし子でも出來、アノやうな事に逢てはいぢらしい事、知たことぬかあきないがまし

じやと、つへにすがつてもあそびに行しあん、千本通を一もんじに、いし橋も三ッ四ッこへ、西口の木戸も此中とをりしよりはよほど心よく、はきだめ山田樂やのさびしさも、けふはわびておもしろくみへ、大坂やの軒には日がさ立かけ、揚屋町もすぎし比とは違て、太夫天神の道中、しかも寄べき下駄のおとに、東の方より駕籠にておし來る、呉服所の手代らしきもの付そひ、田舍のさぶらひを連て來りし體、南無ざんけふはいかふにぎやかなり、もしや橋をどこぞへ揚はせぬか、それではいかふ氣のどくと、宿坊へゆけば、この中は御出下され難有、さてまづけふよふこそ御越あそばせと、ていしゆ夫婦があいさつ、けふは下京へまつり立よりしと、すぎしよりは梯子のはゞもよほどせまくおぼへ、花舍、源に何やらんさゝやく、これは橋がひまが入といふかと、はやむねもふさがりあんずるに、源は耳のそばへよりて、なんと色をかえるか、橋スにやはり渡るかととはれて、案堵の心地、イヤ一度でもなじみしがよひと、半分花しやがき、はつれの有小女郎が格子へ啄にゆく、程なく引ふねが口上使、花舍が傳語、いらたぬ氣をいらちて見せる、見せ先へ御出なされて道中を御らんと、これはよかろうと、のうれんをへだて、おもてをながめ、此中よびし太こ女郎が、又も付こみ、花舍は見せ先へ出て女郎をかる、のう〳〵と甲を干に出、天神又は頭きんふか〴〵とかぶり、揚屋町をうさんらしくあゆむ侍も有に、北の辻より家の紋の日がさ高くさしかけ、夕日も照そふ紅スおかしなさと、ニットゑみて盃とり上て、申上ませふに、花舍は紅樣と申、橋サマのいもと樣といへば、紅は御うはさはきゝました、三木スカへ、今から御心やすふと、かわひらしい言葉をのべ、座を立花屋へゆくも、田舍客のやくそくじやと、扨々けつかうなるものを、呵者にだかすはおしいことゝおもへども、うり物なればぜひなく見送るほどに、はしはしとやかに、禿にきり花もたせ入來るを、角やからかりませうと聲かけられ、てきにうしろも見せ先から、三木へゑしやくしてかしにゆく、すみやからかわりに萬太夫をかす、せわしくよび立るこゝろ、人間かいにはきゝなれぬ聲、三枚がたにてぶち又へかきこむ、松と梅とゆきちがひ、引ふねかぶろが使あるき、遠國の順禮のもさが、ゆかた短くきなし、赤もめんの

ふんどしのたれたぶやかに、揚屋の軒をのぞき廻り、そのなりかたち見るにつけても、かはいや田舎に生れて、此けつかうなたゆふのあんばいしらぬなど心に觀念し、ほどなくらうそくも立、かはらぬ夜食も見せに賞くわん、家の犬尾をふるもかはひらしく、櫻つつじ冬ぐさなど、ひきびやう風のうち廻し、御げんよりはかく別むつまじく、ちとねやふとすれば、せゝりおこして膳をすへる、抑愚母が胎内を出しより此かた、かやうにしいられしことはなく、ホンニおもへば、はくじんは味なきものと、獨したうちして、いきやすめにはたばこ吸付、橋はさもおもはゆげに、おまへ東によしみもあれば、何をいふてもはづかしいやうなれども、初て御げんなりしよりよしみをかさねし心と申さば、おまへは粹なれば、何をだますと思召かもしらねども、さら〳〵さやうの心底にてはなし、あそびの事をよく御合點ゆへ、けつく打とけて物が申よい、此里もむかしとちがひ、今はことの外さびしく、私共もおやかたの手前心ぐろう、紋日はおゝし、ことに私を新造よりせわになされ下されし殿達も、去年御はてなされ、便にする殿達はなし、あぢきなき身のうへとおぼしめし、御心替りなふおり〳〵は、文にてなりともおとひ下されかし、あそびのわけ御知なされぬかたへは、はなしのならぬ品々と、未妙の所より持込に、左も有そうな事かな、此くるはとてゐようには身はうらぬ、親のためぜひない事にて此つとめと、しかつべらしき口上に、橋はしほ〳〵として、くがひほどよにつらひものはなし、中々にも此さとは、外へ出る事はかたし、東のつとめは方々〳〵へなぐさみにゆく、せめてもたのしみ有、何にもしらぬ殿達は、女郎は間夫ぐるひするとは、それはむかしの事、その時分は此里はことの外繁昌ゆへ、おほくのとのだちにもまれしうへ、遠鄙のかたむくろなる客にいぢられ、氣もつきる故、粹なる男となれ合たのしみしが、いまはとのだちもおもしろくあそび、殊におまへのやうなすなほな粹も有もの、ナンノ間夫が入ものぞと、又だきつきて、こちから心中を立てもとゞかぬ時はつみかさなる、よく〳〵たび〳〵逢れぬとて、心の替るはまことにてはなく、またせき〳〵あふが嬉しひものにもあらず、たとひ一年に一度の逢瀬であはふとも、心中をたてとをす氣でござるとしめつ

け、しかしかやうにいはせて、東で御わらひかもしらず、されども女はおろかなもの、ほんに心便のなひわたし、それはまだ〳〵ふかひ咄、言出す所へ源がのさのさおきてくる、さて〳〵邪魔なおとこ、ことにこよひきつひ夜のみじかさと思へば、はらはもゝにてしめつけて動かさず、うぢ〳〵するうちに、七ッかねやら駕籠やら、よひゆめみさひてめの覺たる心地、なごりおしさは海山なれども、源にせりたてられ、柳がもと迄つれだち、大門口にても橋がさゝやき、此中に鳥度御出下されと耳へなげこむは、それをきかひでもくる氣なり、はや東がしらみて、丹波口に東寺あたりの小便かへが、はなうた遙にきこへ、雲雀が金次郎金次郎と駕籠の名を呼をきくも、ひとしほうらめし、

自程曰、此一段は身毒の段となづく、橋が打とけし風情は、中々わかき女郎のおよぶべき事にあらず、たとひ朱買臣なりとも、此段にはおよくべき餘情あり、柳がもとにさゝやきばなしの殘を結ぶ手段、よく〳〵味て、親の折檻一門の異見をきくことなかれ、

○名をきくよりやがておもかげ懐し、ひとり燈の下に文よむとぞ、なぐさむわざのだん、浦しまが玉手箱にはあらねども、あけてくやしききのふのけふ、いかゞしてすぐさんともおもはれず、おもてのひとまにとりこもらんもしんきのたね、紙入屋へ行とてもおかしからず、助にあふがうるさく、いかゞと思ひわづらふ折ふし、源がせきばらひにて見せへ來る、橋に逢心地してうれしく、かのひとまにいざなひ、たがひにねぶたそふなめもとにて、夕べはとあいさつに、源はわりひざもとへ、いかさま三度飛脚もよほど見事なる狀、ちん取べき文のかさ、ふうをひらけば源がてき催馬樂が消息、橋よりも源への文も有、まづ〳〵源がてきの文を見れば、

まわらぬ水くきのやう、御らんもいかゞながら、きのふのうつりにとはせまいらせ候、いよ〳〵御き嫌よく御首尾もよろしく候やいぶかしく、ゆる〳〵御一座嬉しく、けふしも太夫スと御うはさ申まいらせ候、太夫スにもそのよはに御入候、御しんやすくおぼしめしまいらせ候、ちが〴〵に御一座こそねがふ、かしこ、

これは忝し、さて〳〵見事よひふうの手跡と、ねんを

入てたゝみ、さて橋が文は曲尺にて四寸計のあつさ、封じにかけて五大力菩薩とかきすへたり、何とやらんふうじをきるもいた〳〵しく、このまゝ守りにして、首にかけてねたひ物なれども、つばにてぬらしひらけば、三よし杉はらおしげなく、伊せ音頭かゝりの文句なる文、

あひみての後の心にくらぶれば、むかしはものをおもはざりしことの葉、けふこそ心にこたへ、むねひとつにたどるは逢坂の道かや、われにひとしき人もなく、御心のそまぬをひとりこふるも、ぐちかに候へども、別てけさのつらさ、いつそむすばぬ帯ならば、とけし心のおくふかくしらせたく、末たのむも水にゑをかくならひ、かはるふちせの人心、よく〳〵我はかくおもひこめし心なれば、むげにえこそすぐさまじと、おろかなる心にこめ、筆のあゆみもしどろながら、きぬ〴〵のつらさ、袂にのこるうつり香をおしみ、いつのつらさになきそめしとりをうらみ、かねをかこち、のこる月影のうらめしく、又逢事のいつといふ事もおぼろげなれば、ゆびをおりてかぞへん日もなく、御なつかしさは御さつしにもおよぶまじく候、まづとや夕べはよくぞや御心がけ下され、殊にみちぬる御げんにむかい、とし月かさねし枕のやうに、あやなき事どもはづかしく、しかし殘はことの葉、心ももだ〳〵しく筆にていはんもつゝみかね、其儘に御入あそばし、御かえりはおそくはなかりしかや、御首尾のほどもあんじ、けふしもさう〳〵此もとへまいり、うわさもつきぬひとつと、源様へよく〳〵御つたへ御たのみ申たふ候、主計も引ふれの名也よく申たきよしに候、

かへす書もいやしからず、ちかきにしばしのうちは心がけたのみ上ると、源は背をたゝき、貴様はどふしこなしたれば、二會めに貴札到來せしめしや、天神がやう〳〵二會めに短文をとばす、ましていはんや太夫においてをや、何ぞよひくすりをふりかけることか、きびしい事じやとそやされ、にた〳〵とわらひ、心のうちの難有さ、結ぶの神をおがみ、又はみちのくの金勢大明神のかごをいのる、かやうの事は露しらず、これ迄むだにくらせし二十年來、源もいとま乞してかへれば、またいつ行ともしれず、めねぶたく、で

つちの岩吉が夜食時分に、箸箱のぎんみ、箸と橋と音同ければむねにこたへ、夕べ今比は橋と盃のとりやり、こよひいかゞしているなどむねにつまり、めはねぶたく心はさへ、夕べのうつりがはなのあたりにのこりし延紙に、はしが口紅のつきしをそばにおきあり、明をちかくよせ、かのふみをよぎの袖から首を出して、よみかへしくりかえし、布ざらしの人形見るやうにたぐり、この中きてくれと有が、一寸いてすぐにもどらんか、どふいふてかふいふてと、心ひとつにたらふくしあん、煙草も夕べとはちがひ、舌もさゝけて味なく、文を枕の下へ入て、せめてゆめになりともみまほしく、二更にもならざるに丸ねするこそ、

自程曰、二會めにはしがもちこみは、かはりし所よりよくつなぎ得たり、若年のよねが工夫のおよぶことにあらず、此文の文段は、むかし此くるわ慶長年中にひらけし時に、元祖上林又左衛門といふもの、女郎のために文の書やうをおほくつゞりぬ、その文の作者は、北山の邊に貞德の弟子有、出家して隱とんせし僧の作なり、其文をよせて錦木といふ書あり、四十年前火災のとき燒、間々有レ之、もとめみるべし、名をきゝてもおもかげのなつかしさは、はし箱のはしがむねにひゞくならひ、此一段は人人心にて意味をしるべし、

○飛鳥川のふち瀨、づねならぬ世にし有ば、色々にかはりゆくがならひ、四條がわらすつぽん泥鰌汁のさきしきを、夕べの夕だちにて、けさは三文づゝにて川ごしをやとふも、ことはりなり、わすらるゝ身をばおもわずちかひてしと讀しは、右こんがいらぬ貞女だて、きのふのさまけふは定なく、よこ槌も海棠々々といはれしが、この比は東ふく風もよほど面白からず、毎日々々行紙入屋も、うと／＼して、下の町によをむつまじく夫婦くらす、これもむかしは梅位にてもあると見ゆるかゝが風俗、夫婦あしうち、店にはうたひ本など少し出して、源が郭の文を取次所と近付になりて、日ごとに橋が便を待身をなりしさま／＼、紙入屋にはいかゞとあんじ、助とうはさすじより東の狀三四通もたまり、ことに昨日到來の一ぷうは、喜雨子が用事の文、なか／＼その分にさしおきがたく、助をたのみよびにやる、ぶせうながらも立よれば、かゝが片顏をゆがめて、きつひ御み

かぎりなされやう、せめて一月に一度は此みせへも御出下されませ、キ雨子さまの文ども、ねからとゞけぬかとしかられ、いかふ氣のどく、用事の文とさしいだす、ちかひ比はなせにやら、外へは出ともなくうちばかりに居ますといひつゝ、此文見たい事はなけれども、紙入屋が手まへも有、ゆびにさかむけの出來るほど、むごたらしうふうじめをきれば、

御らんも有まじ〴〵と思へども、文にてとわせまいらせ候、そのゝちは御うと〴〵しくぞんしまいらせ候、いよ〳〵御機嫌よくまん〳〵めでたく、この比は八百淸にて助様へちよと御めにかゝり候、御ことづて申まいらせ候、届きまいらせ候や、きつひ御みかぎりなされやうにて御座候、まづ〳〵夕べは助様御出あそばし、こなたも御客にておりまいらせ候、もしや御出も御座候やと、後までも見合申候、御出なくかえりまいらせ候、きつい御みかぎりやうと存まいらせ候、さては十九日は日がらにて御座候、こゝもとへいで申たく候、はや〴〵御出下されまいらせ候、かしこ、かへす〴〵御出まち入まいらせ候と花舍がそへ狀、十九日には御やくそくいたしまいらせ候まゝ、御出下され候、キ雨子もひまか、さて〳〵きつひおしつけうりとはおもへど、まだ助がたき付る、中居どもがせがみし事が約束ひとつのかづき、十九日にいたとて、おさだまりの事もおかしうないが、助が手まへいかゞなればまづうけ取、かの源が中やどへ立寄みれば、源はおくに文をみる折から、コレハマアよひ所へ御出、今貴宅へ行ところじや、とゞけものとさしいだす、文のかた書にきう用じと有、是は何事ぞとむねもとゞろきのはしが文に、花しやがそへ狀、

わざ〳〵文にて申上まいらせ候、いよ〳〵御機嫌よく御嬉しくぞんじまいらせ候、さては此十九日は道ならぬ日がらに御座候、太夫様が事きうにまちがい御座候、御やくそくの事は御だんがうあそばし御頼申上まいらせ候、何とぞ御りやうけん進られ下されまいらせ候、太夫様御ふみもたせ上まいらせ候、御わもし御入口下されかしこ、

橋が文をみれば、貫之の長哥見るやうなる文章、十九日の事少ばかりかき、たゞ逢たひと計也、これはめいわくともおもはず、約束がまちがひたらばさぞ難義と小鼻をうごかせば、源はしさいらしく、いかさま約

束も一度はせずば成まじと、尤らしき口上、さいわい十九日は御身ぬぐひ、嵯峨かよひ鰹じや、源がてきは花びしやへ出るげな、なぐさみに行べしと相談きわめぬ、此やくそくがはじめよりもくさんの事、約束まちがひのまの字はひまのまの字にて、客のすくなきゆへなり、さらば返事をかいてもたせてやらん、横町の七助こそ折々駕籠にもゆくげな、さとへやる文は俗筆のかな文、花しや引ふねに嘲哢せられては一分たゝず、滕ともだんがうの太郎左衛門は居ず、(自程曰、大搭宮三段めをのせたり)高直の紋奉書二三枚相とゝのへ、筆も玉氣流を壹本かひ、かの藥研のごとくなる硯に、橋柱を見るやうな墨をすりながし、かきそこないまわる下手の長文、橋へやり手が見るもいかがと、いらぬ日事にゑんりよして、七助をつかひ、そしてもたせつかはし、扨これはよし、こゝにきのどくは、キ雨子も十九日やくそくいかゞすべし、東へ行たいことは、ホンニ小人島の鼻くそほどもなけれども、助がおもわくもきのどくとつぶやくに、源はよろこび、それこそさいわいのなぐさみ、七つ時分より東へゆき、暮時よりはしをわたるべし、これはいかふよかろふと、十九日をけふやあすと待かね、日かげもいとどながく、やう／＼その日にむかへば、晝時より二軒茶やへ出かけ、中村やにてなまやけなる田樂をくひ、八つ時分に行てみれば、中居どもがまだ大はだぬぎにて、たがひにかみのすじをいれあふ時分なれば、みな／＼川のはたへ出て油手をあらひ、まへだれをあて盃を持てくる、辻子へ人をやる、中居がとり／＼きつい御見かぎり、何が御氣にいらぬぞい、つじなどへ御出か、ほんに文もたび／＼上ました、き雨子サマもせつ／＼御出ては御たづね、姉川新之助さんは、座敷へ出しては女のやうな、大吉樣が子をうまんした、其(き)靜(せい)樣は御引なされまして御隱居樣同前、ほんにいつ御出たまゝじやぞい、むかし噺がいかいこと有、楠がおもしろい御客と見にいた中松のよしが、此季からこゝへみへた、さつは非後へ行ました、河原の馬のかるわざ、あなた樣はどなた樣じや、よふ御こしあそばした、きうし樣はやふといふてせがみにいたか、御肴もておじや、御てうしのかえをと、そのとりませし物語、乞食のめんつうに入ておくはなし、申あなたへ御盃あげませふ、こゝな御かたは源樣とて、かたい

御人、日外よりうちのしゆびがあしい、それゆへあの人を頼で、けふ嵯峨へ參といふてやう〳〵出た、暮切にかえると匂はせ、それはせわしい、たま〳〵御出、外ではゆる〳〵あそばすであろ、それ御吸物と、鯛にさんせうのめやら鯛のめやら、いきづへのおときこへ、程なくキ雨子樣御出と、高聲によぶとひとしく、ゆるり〳〵と座につき、さて〳〵こゝなおはつが、せわしういふて見えた爲、三さんにけいこをして居た、ひとつもおぼへまい、めづらしい御出、市あなたもよふ御出と、さして間へぬらしき顏色もなく、いつかどうらみをいふいきほひも見えずして、さらりとした風景、縄手の女郎ども、ゆかたをかたにかけ、湯あがりに二上りのけいこ、芝居もはて太鼓をうつとひとしく、四條のはしは蟻の熊野へ參ほど行あひ、かつはやの油くさきも、大かたにかた付て、もはや此座鋪に居る心もなく、もし橋が外へかしにゆかねばよひがと、ひとり心にあせり、上り口からうらんのあたりへうそ〳〵するに、中居どもはもし何をうは〳〵なさるゝ、あなたは御せいがつきませう、さしこみにたれぞよびにやりませうと、すゝむるくどくとも成佛する西方へ行たい色目、源は見てとり、もはやかえりたらよかろふといふに、中居どもはくち〴〵に、雲をつきぬく調子にて、何の事じやいなア、けふこつな、イヤ〳〵けふ親父の手まへから預つてきたむすこ、嵯峨にひま入ともいわれまじ、よふござります、せめて後までと留てもとまらぬ草ずりあひ、すりあふたをいがめて膳を出す、せつかく物ずきした料理もせゝりさがし、しばし御やすみと屏風を引て入日をかくし、源ははしらによりかゝり、中居二三人相手に酒をのみ、むかしのきつ岩扇忠一力がはなし、牧野清野が俤をはなし、花靜をり三ぶがたていりをかたり出す、屏風のうちは八百清にて、助にことづての言をのべ、いわのが文字へ嫁入、おとゝひにはかに山喜から北野へまいり、こゝがおまへの上のつゝじやと、おしえた芝居もおもしろひ、瀧のしたうかむせはいくよのうらみ、けいけしじ粒ほどもなく、なつかしさふなよそほひもなし、程なくおきてくる、源は駕をいゝつけ、キ雨子サマさぞつもる御もの語なされつらんと、中居はおくる、是はきつひさう〳〵、あなたは噺おせいがつきません、駕籠の衆はやうたのみますと、

ことばをかけつゝわかれ、三條河原町からすぐに郭へとばす、大宮松原邊にてはや初更の時をつぐ、大門口はどこへと與左衞門が鳥のこへ、かんこくはとほるとも此關はやらじ候、引ふね中居が、さて〳〵おそひと駕籠につき添て行ちがふ、さすが御身ぬぐひとて、よく垢はさらにぬけぬ、たいこまつしやのさわぐうへを、風の吹ぬにおどり場の柳そよめき、ふみならす下駄のおと、かしかりのよねのゆきちがひ、大坂やの格子をたゝくはしごの下に、申太夫サイサイサイと叫ぶごへ、こと三絃尺八どらたいこ、誠に極樂の紋日かほどには有まじと、心もそゞろ臺所にかきこむ、花しやは待兼ました、たゆふ樣もけふははやふ御出なされ、にし口東口へたび〳〵御出、たゞ今となりへかしに御出なされしと、程なく橋は顏に待かね、山のほとゝぎす鳴程まちかねしそのふぜい、おもて座敷は天神職の客うたひわめく、さすが松位客とておくの座敷になほす、はしは座につき、もしや御出がなければいやな事じやとおもひましたと、心をこめしことも極上々吉の場所、袮子が仕うちしろ告てはゆかぬげい、源スけふはいかいおせわ、かたじけなし

といふうちに、禿が源へ口上言にくる、引ふねがはをりをたゝむ、源がよほど醉もまはり、今日はこゝのせうわるにさそはれ、あづまの色につき合、朝めしどきより罷出、ことの外せり立、やう〳〵たゞいまになりひら、三とせもこゝにとめてぞなれまつとするでは有まひか、たひていせついた事かいなときくに、橋はけふさめがほ、そんな事とは露しらず、やかたの御首尾をあんじ、もし又きう用が有かとくれすぎまで、花しやスとうわさ、ホンニ入らぬ心づかひをした、あんまりおそさに、臺所酒にしんきをはらす折から、松やへとのだちがみえてかしに行、家太夫の酒のむりみえたと聞て氣が落つき、醉が出てあつひと水をのむ、ひざの水はゆとなりしが、これは茶わん酒の御かげにて、五郎八で水をのむ、東とかわり毎もかわらぬ後くえぬ料理、十夜かうのごときものずきも、茶に漬てゑかうし、箸をねぶる時分に幸原がかしにくる、下からよぶ、何やら引ふね花しやが、もしや〳〵といふとひとしく、四拾四匁の利づけにてもらいにやる、さつ速御意にかけらるゝ、いかなさばけし客やらんとおもひしが、おもへば身揚にて有しよな、そのへんぽう

に酒をすけさす、おさへる時分も夜半の太鼓のころ、客せんにいたると見えてしだひにさびしく、郭中しづかになり、はるかに壬生の時ばやしのしやてんでもきこへて、臺所もゆめ見るこしらへ、門口に錠おろし、はやいびきもよふす比に、源にさそはれ、紙そくをこしらへ棚さがし、揚やも常々心得有て、よひほどにあてがひ、たまなり二ッ三ッたこの足、酒もたるにすこし殘、かんてらの邪魔にならぬほど、めしも二人まへあてがひ、よいさかなは料理場の生ぶねに入錠をおろし、ねこよりもきやくの用心、茶がまなどたくかひせうになき女衆が香物鹽のせい、誠に帯下病(こしけやまひ)がやけだされし同前、かまもしやくしも屏風の外へおしやり、延紙に油をしたし酒をあたゝめ、また咄も一入油がのり、橋はしごき帯のはしをひねり、東のキ雨子スとやらはよしみなれば、なるほど御出なされたがよひが、こよひでも東からすぐときけば、どふやら心がひがみ、おかしいもの、サアサ心と申ものはあぢきないが、すぎし夜心おかず御はなし申せしあとにて、ひとり床のうちにておもひますに、二度御めにかゝりしおまへには、そこひのふいふて下さりますゆへ、つらひこともはなす、もつともよしみのとのだちもあれども、けふの日がら、俄にたのむほどの心いきは見えず、おまへにはたのみよい、けふの事はきうな事ならぬとて、きこへぬことも思はず、きのふけふの御まへを便にするわたしが心は、われながらもがてんゆかず、ほれもせず、いまだ年月かさねたるよしみもなけれ、御いとしうもなけれども、何となし御たいせつにぞんじます、このほどはうき世もあぢきのふなり、やさしういふて下さる人も有に、ちいさひからなじみし親方は、むごひものじやとおもひ、もの日はおゝし、もしやまたまちがふたらばどふせふぞ、すかん御客へたのむはいやなりとかたるに、心も忽にしほ〳〵として、石のからとから鬼の手も出して見せる氣にて、朝がほをにえゆへ入たるすがたになり、いまから紋日がちがふたらいふておこしたまへ、大事ないことじやと、ぐにや〳〵とほんに石花菜(ところてん)のゆうれいを、こんにやくの馬にのせたるさまに、イヱイヱいかに私が逢たいとて、御やかたの首尾が大事、ほんに女ほどぐちなものはないと、梅がえがゝりの口上いふて、またしいる、一膳はくひてはらがふく

れ、ねいるともかもわず、西六條のかち〳〵、駕籠せり立、煙草に名殘おしく、まだい〻たい事が有、この中に文にて申べしと、鬢をなでわげをなをしてくれると、いましばらくあた〻かな床に居たけれども、うちの事おもひてかへるつらさはたれにかたらむ、

自程曰、此段東の風味うすくかきなして、西の風味をあつくかくゆふなれども、其人の氣邪氣故格別におもふ其風色(ていたらく)、さしてかわりはなし、橋が心のほどをあかし語しやうにみえしが、大水をのむ下地、これ大病のはじめなり、

歌翁曰、江南の橘も江北のしぶがきも、其土地による、此段其人を見るが如し、文章のぐわひよく氣をそへたり、ちよい〳〵が品玉、よこ槌をゐのころにかゆるよりも、はしが其しな玉見所お〻し、

〇下部には酒のますまじき段、下部は酒をすぐせばけんくわか、またりかうばなしをこわだかにやるか、旦那の恥のかきあきの段をのぶ、

うかぶ瀨は江南の名酒器、ゑんまわうでも一盃のめば娑婆の帳につく、般若水とのみかけしは、沙羅双樹のはな見、難波の伊曾羅といふ大臣は、氣違水と之をもてはやせり、橋のわたりもしげく、女郎揚やへ付屆、持おもりしてよほどかんでうもあわぬやうなれども、いたはりふかきは母の親、むかしつくりし親父の手まへ云なをし、勘の一字にもいたらねども、うちの首尾あしく、北野まいりもならず、ものあしらいにてとなりの事はさてをき、よる夜半圊(せつちん)へ行も小奴がてうちんをともし、圊の戸口から旦那様はやふ出なされとせがむ、これは扨おもふやふに用事もさせぬ、此やうな事とは露しらず、わが心がかわりしかと、橋がうらみてわたりもたへしかど、おもひわづらひはせぬかとあんじるに、橋は百ばいの心なるにや、千束の文はかよはせども、返り事さへなきあかぬ便をきひて、もし氣でもつまろかとあふかかちんにはあらず、六條寺内のかめやみちのく、菓子にそへし文に曰、

今ははや、おもひたへなんとばかり、けふやかえり事、あすは御げんにむかふかと、待し心にうちおどろかる〻は、やかたの御首尾ぞや、まかせぬことのしんきといふにおろかに候、我身こともも便ときくも、すぐにつかえにてふしう〳〵、心ひとつにあん

じ、もう〳〵御わづらひも出ばや、たがひに逢ことはかたしとも、すへはほんもうものと、心にこめてかわらぬたがひのむねにこめしうへは、我身ことは御あんじなく、かならず〳〵御やまひの出ぬことのみいのり〳〵、

あとはかくにおよばず、來てさへくれゝば、橋が病はなほるといふか、いしんてんしひやうにて町内の宿老の娘が相はて、ほんこく寺やまは八ッの葬禮、うちからも名代もたてがたく、むすこひとりはこわもの、ふだひの一助御供にて、母がかたく云は、一助はやふつれて歸れと有ば、かしこまり、西堀河もとほさぬくせものゆへ、道々思案をめぐらし、さう禮いんどうもすむ時分に、俄にむなさきをおさへ作病と出かけ、どふもあるかれぬと顔をしかむれば、一助はまことゝ思ひめいはく顔、寺へ御よりなされといふ、いやさいわいうら門前にちかづきが有と、おろせがかたへやう〳〵にはい入て、さゆにて黑丸子をのみうつむく、瓢德はヨク心得、三木サマ是は御難義きのどく、千場立安と言はり立を呼ませふかと露情もどきの口上をのべ、揚やへ人をやり手にしらす、一助は作病人のせなかをもむ、イヤもむほどいたむ、我はやすめと、亭主は一助をば、章魚の足で茶わんを二つばかりあけさせ、こなサマいかひくろうじや、おもひがけなく途中でナア旦那樣の御病氣、おもつた時は御難儀、よい所であつたと新酒でいたみ付られ、さすが武剛の一助も、新酒に急所をあてられて、大事の手なればたんだよわりによわりて、中旦那樣、いかふはらが痛できやひかわるか、うちではよひやふにいふほどに、とつくりとよふしてもどらんせと、否もなへたる折から、駕のものに、揚屋のおとこやりてがつきそひ、ゆきだをれつれにゆくやふに、御氣そくがわるひとや、橋サマ殊の外御あんじと、やり手はそばへより、太夫サマもいきたひと仰なれども、とめましておいた、御ひえあそばしてはいかゞと、はや〳〵駕籠にめしませ、瓢德どのいかひ〳〵御せわとあいさつ、作病のしぶしぶがほのみぶりをして、心のうちはヲット心得のりうつる、ゐいくわやまひもあげやをさしてかきこむ、橋はあんじ顔、二かいへはふとん針たて、くすりなべとてうし盃一所に持出て、きつう御顔がわるひと、引ふねがさする高金がもむ、花しやがひねる、もつたひ

なくも橋がうつくしいうちまたへ、雨足をさしこみてあたゝめる、やりてが手をなでる、さとのあんまとりが、いたふもないはらをもむ、よほど飯椀こひしく、うつ〳〵すや〳〵と狸ね入、みな〳〵ことばそろへ、ちと御ね入じや、ひけ〳〵と勝手へ入に、御めがあいたらあがり物のこしらへと、側に引ふねとかぶろとが、たほれもの、番にやとわれし心持で、絲とりなどするはせうし、かの一助はめしをしたゝかにくひ、一貫町の茶わんのうへに、吸ものわんのふたにてのむところへ、橋はそばへより、コレ一助殿いかい太義じやノウとせなかをなで、御かえりなされて首尾のよひやふに、こな樣たのむより外はない、どれ盃せふとまた二三ばいのみかけ、くるしきいきの下より、サモあわれなる聲をして、おこる病はせうことがない、うちはわしがよひやうに云なすと、聞て家内がほめそやし、一助殿はさて〳〵のみこみのよい人じやとのせられて座をしめ、じたひ若旦那のが道理じや、おく樣はなしかねは有、おや旦那はしわひけれども、すみ〴〵までぎんみはなひ、店のわろ達もよふ出あるくけれども、わしがせわする故うちへしれぬ、じたひこちのうちにふるひうばが有、これがやかましいおく樣の御姥であつたげな、まかなひして居ます、これにわしがよひやうにいへば、慮外ながらすみます、もし道で死でも、おこるやまひはせうことがない、御前はやふこちきて夫婦にならしやませ、いつそおく樣へ、わしがさふいふてみましよ、わしも十二の年から居てナ、旦那のところで疱さうもする、手代にしてやろふといふことじやあつたけれど、わしが母じや人がいはるゝには、イヱ〳〵御手代になり、わかひものがだいまいの銀を預り、わる氣がつくと在所の名おれ、やはり一助がよいとの頼み、わしは近江に代々田地も有、庄屋の處へ養子にゆく筈で有たけれども、娘がわしが氣にいらなんだ、となり在所の五郎兵衛といふわろの娘は、ホンニ京にもないよい娘デナ、水口の酒屋へよめ入して、子を持ごもりて死れた、ほんにこちのむらのかめしよの御藥師樣、それはよふ願がきかしやる、京からも參がある、寺の坊樣が京の御所樣へねがふて堂をたてなほされ、奉加して地つき、それはおもしろい事でわしらも出ましたと、酒につれてたわいなくはなし、枕にころりと高いびき、作病

も御快氣、やきみそに茶づけ五六ぱい、かき込し駕籠のはなし、瓢とくが御機げんうかゞひ、晝はいかいせわとて、紙花をやりて下男までにまき、盃もよほどまはり、橋はめになみだをもたせ、うちの不首尾ばなし、とかくわたしが事は御あんじなく、御前のわづらひの出ぬやうに、何年逢ひでもといゝたひものじやが、それではわしが心がおかしうまわると俯ぶきて、しごき帶のはしをひねり〳〵て、しんきな顔もち、さて〳〵ふびんやかわひやと、不首尾の事もうちわすれ、これからはよるはやめ、くれかぎりにいぬるくめん、用があらば狀でいふたがよし、紋日でもきうなときは、ことわりいらぬ、出たがよしと、味噌のあめでとろゝ汁こねたやうになり、いふほどの事をうけずといふことなし、ホンノそれが御眞實、はじめて御げんなりしより、わたしがわけしりとみこんだにちがいない、うちでもほうばいの女郎が、わたしはよいとのだちが有と、つね〴〵うらやましがるわいなと、ことばの花もさかりに、そんなら折に晝のうちこゝへ御出、これからは上の町に丹波やといふ茶みせがある、そこへ來て下されませ、かならず〳〵こゝへはさ

たなし、見付られまいぞと忝し、これぞおとにきくたかしのはまで間夫になると心に悦、なるほど、よひのうちこゝへくればひまが入、それがてふどよかろと、はしがはかりごとの圖に入ぬ、(評おくにあり)もはや歸ろふ何時じや、はやよなかにおよべども、一助は蝶になるいづかたへ飛ゆきしか目もさめず、ゆすりおこせどねごとばかり、おうばどのへ昨日のもちを、茶がゆへいれたらよからふと外分あしく、三木が一助とよぶ聲に少しめもさめ、申旦那樣、うちで何といふのじやヱ、本國寺の上人樣がしやくがおこり、それで四條の權右衛門樣の所でひまが入たといふのか、いかふねむたい、ひらに明朝御かえりなされませ、じたひ御まへがせうきなで、月に十度や十五度あそばひでは女房に持たか、申おや旦那樣へ申じや、扨もいかふのどかわく、かごの衆太義じや、此脇ざしもそこへ付てもらひたひ、上下はわがし持と首にわひかけ、いとびんの西行法師を見るやうに、皆樣いかい御せわ、ちかひうちに逢ませふ、こちの方へござつたらよらしやませ、さつきにもいふたやうに、おいせ樣へまいつてなら、草津のもちやから二町ほどに、ひだりへ

ゆくほそ道が有、それを一里半ほど行とこりき村、御地頭は膳所の殿樣、うぶすな八幡の宮の前で、六左衞門といふてとわしやりませ、しれます、よひのさけがまださめず、三木にせり立れ、ぶく〳〵ひよろ〳〵、てうちんを引ずりうちへかえれば、もはや七ッ過、親旦那が大白星のごとき眼をむき、一助めにくひやつ、どこにいままで何してけつかつた、請人をよびよせ預ると、子息より殊外不首尾、やう〳〵姥がわびごとに、こそ〳〵と部やへはいり、半季五十めのきう銀も過錢にとられさふないきほひ、まだくらひうちからせど口にてきりわらこしらへ、めしたきをとらえてさゝやき、それは〳〵けいせんが、かわいがつた色ゆへじや、ぜひにおよばぬとはやさし、

あるひと問ていわく、文段のうちはしが圖に入ぬとはいかに、〔頭注〕空帘道人曰、がく如先客は金自由なれども、首尾あしければしかなの客も同前、これを公界の工夫の間夫と名づく、

自程曰、此段は、不夜城年ふけし女郎の極意の方便なり、わかき子息は、此はかりごとにはおつること必せり、晝のうちばかりおり〳〵揚屋にてあそび、夜かならずよひのうち茶みせとは、此をわかき客は間夫と心得たるこそおかし、すがたをやつし、かの茶見せへゆくに、かぶろが待合て、上の町あたりの中やどへつれゆくばゞにあづけ、太夫さんへしらせませふ、おくにしやほどに待て、ヱヽと程なく太夫がさし足、よふ來て下されしと落間をかけて五六疊敷、煙草入のふたを枕におもしろくちぎり、露計の情をやどのばゞにはづみ、またあさてのばんとやくそくして、すもどりの夜も有、しかれども間夫とおもふ心からおもしろく、此せつくまへに金が入といふに少も引きなし、五六兩出してやる、揚やがふしんたてる、此廿一日は御やくそくなされ、尤じややり手へのはな薬、かぶろが芝居、引ふねが小遣、いやともあふともいわれぬ入用ども、これを女郎はこまげた客と名をつけておく、勝手でもはく、表へもはくといふ義なり、太夫の老功ならざれば此工面なりがたし、わかき女郎はよしくめんはなりとも、もしややりてなどしれば、やかましう事むづかし、それゆへに、わかき女衆のなぐさみ半分にするは、おふくは揚やのむすこなり、老功の太夫の此しよさは、やりてをはじめ人もかまはず、

此ときには内せうにて、女郎と揚やとあいたい有かもしらず、眞の間夫といふは、中比雲鞁といふ誹人が、

いとしいとおもふ男は金がない

とつぶやきし、尤成かな、揚やも近比はおひまはしのをとこをどうすじへ出し、風來客をおだてさすこと有、これを客をつるといふこと、ほのかにきゝ侍る、

〔頭注〕空帒道人曰、五十年來郭荒敗、故揚屋窮然引不レ頼、客亦不レ宜哉、

またいわく、およそ老功の太夫には、禿もちいさく引ふねもわかし、年わかき太夫に、かぶろも十四五ひきふねも三十に過たるをつかふ、それゆへわかき太夫にあふきやくは、かならず新艘を出す重荷有、今代は造用ぐるめ十五はいより二十ぱい計にて、これにてわたしきりにするとや、老功の太夫は、そのせわはなし、其かわりにかの内せうのせわあり、年もくるはを出る時分は、杓をふるとてなじみの客へがうりよくたのみ、郭のしやくせんを割歩して出ることなり、

〔頭注〕又曰、老功松位、年來新總五三輩出之、其功已章也、故禿幼引舟亦弱冠也、與レ客戰ニ疑情ニ不レ能レ爲レ之、引舟節之故傳レ之、以ニ年功ニ禿年長、令ニ其松位出ニ新造ニ立功也、凡出艘之貴今營レ之、郭之荒敗徴也、出還千歳波平

又いわく、此段は一助が酒はむめうには非ず、道祖神のすゝむるところ也、しかしまだへどをつかず、なかにすつぱぬきせぬこそ重寶なれ、さぞかし此ざい所、はなしはきゝづらきことなるべし、

〔頭注〕瓢得曰、一助が酒は維摺戸隱山之奥趣也、しかれども風流にいへるは、道祖神の賜なり

○手のわろき人、先はゞからず文かきちらす段、

よめかねても、用事があればかゝねばならず、たとひはしごにやいとすべき繪でも書に、それも文とみれば文なり、たとひ一兩度代筆をたのむも、あとからはげることひつせり、

衛夫人は王右蘭にいろはをおしえ、〳〵かしこは、誰そめし水ぐきとやらん、策くきとやらん、いかな鍾馗づくりの男でも、こひの文はおもひ〳〵とはかかねばかなわぬ、筆もよめるほどにかくは重寶也、まことにまかせぬは首尾、まゝならぬは御げんとかひて、文もたび〳〵なれども、一助已來はいかう不首尾、いかな〳〵返事もならず、かのよひのうち茶やの趣向も、當ぶんなりがたく、何となく源もうちの親父がすみ付あしく、繩とりがうらめしきたとへ、壹年ば

かりもさとのたよりもきかぬやうにおもひしが、ようよう一月ばかりふしぎに文の到來、橋が手にあらず、いはらかきみる文づゝ、すぎし比よりきぶんあしく引ており、心むづかしく代筆とよみて、むねうちさわぎ、さこそとあんじ、今ははや宿にもいられず、世の中の月花をむなしく露となしては、此世にすみてもおもしろからずと、内をぬけ出、わざくれ時分より出かけて見れば、珍らしい娑婆で見た三木サマかと、とり〴〵もてはやす、太夫サマもぶら〳〵御煩なされてござと、人をやる引ふねかくる、なんと橋さまをなぐさみがてら、御出なされませぬかと相談きわめ、一町にたらぬ所をかごにのり、きむづかしきかほつき、夕ぎりの出ぞこなひかとおもわれ、いつそ不首尾のはなしもなく、三木サマもまじめきのどく、花しやは、太夫サマはもしやつわりではないかへ、それならば三木サマのあとゝりと、かづけ物する口上、うれしいやうできみわるく、又あれかやうにおもふては、懐胎になるまいものでもなし、いつそそれなれば母親へいふて、親父にうけ出してくれまいものでもなしと、いろ〳〵もくさん、橋は茶漬をせゝりさがし、冷物の梨や桃ばかりかぶり、いかさまつわりのきみかや、やりては親かたからのつかひに來り、御情もつきぬがとふぞと見廻、ほうばいがみまいやら、橋はせんどの文はよめにくからふ、あふよがかいてくれたのじや、橋が文じや、わか紫が狀じやとおもふ心てい、はしがきもからやうめいたやうでおもしろく、もと様申いるはわが朝の風流、こしもとはすはましたきまでも先にぢりがきは大かたする物にて、それなればこそ其日すぎのひようとりも、娘の子を持てば手習やへ遣し、おれが目めくらで不自由な娘は目をあける、目をほるのとその御かげて、めしたき奉公してぢやらくらのゆきさつも、手のうらはなべずみかきめへしみこみ、節用集の世界の圖を見るやうな手に、筆を持心のたけをかいてやる、二藏はこれを小町迹染の文よりもおもしろく覺、かとこととまじりもいそがわし、ひうちにかくゆへさて〳〵よめにくひと、おもひは色ゆへなればさしてあく筆とも見へず、きめうきたひの文言なれども、それとも銀をしてやることは見事よめるやうにかく、中々にも大がい婢(こしもと)いげめし炊迄は、その文古代にておかしく、少しうへなる

おものしなどは、やす茶やの文などを見おぼへ、御げんなしたくなどゝほのめかし、金の入ことは母びやうきゆへ、人參のませたくとよそへ事をかきちらす、かわいゝといふこせうぶくろかぶりては何にも見へず、かぢやの娘が釘のおれがせわしてやる氣になり、やぶ入出替に、よる〳〵しりから付てあるく、主人の門まで送りてやる、また年ぱい三十ぢかく、もつたいある奉公人の、かしや札やう〳〵よめれども、わがかたへきた書出しはよめず、心の覺のとをりよめたかほして、おとこのかたからきた文は、やどの娘によませ、返事は主人のかたへ常々はり仕事にくる尼にかひてもらひ、扨男に逢ふた時に、そなたちと手ならひしや、文がよめにくひといわれて、つぼ〳〵口にて、わたしも親たちが三年程、政野様へやられました、手ほんも六七百本程上ましたれど、ねがきらひ、ぬひ事はすきでしましたと、しからば縫かと思へば手づゝの子にて、口がよふきゝぬのこもひまのなひはゝ親にいゝ付、ちいさい時からせなかに子をおひて、一文ぜにをぬすみ、切砂糖豆藏のかいぐらい、人はしらじな不破の關やに月のもるほど、うすぐきぬを面かしよりすそつぎ迄黑にひきかへし、おくはさらしのちくらもの、盆も正月も此小袖一つで仕舞て、わしが小袖はみなきに入らぬ、これがいつちきよひと、そよ〳〵風にもとびさふなつゞら、鼠くひの紙のおふひ、輪違か八重梅のもん所、小袖だんすとりよせたいが部屋せまひ、親の内は火打箱程な米がらともなひ住居せんせうへをいくまんせう、それもおとこはしらず、この油つかふて見やとひげが梅花、この比服部から直がいの煙草じや、今兩替やからかうたぬく〳〵の小遣ぜに、あげくには腹に一滴がやどりやかましく、覺が有のなひのと父なし子をうみ、首は久助、手足は太郎兵衞、なくこゑは仁ひやうへに似たりけり、鵜のごとき小悴をうみおく丹波へかゝり、六貫文つけふつうにやり、あとはふたせの姥奉公、わしもでつち女つかふ兩身代をもつたけれども、ぬしが市ごとにまけ、其うへ角ざいくとさけとで裸にていとまの狀とつて出たと、まだぜいたくをやめず、かぶろ立から晝夜太夫につかわれ、何をひとつかくまもなく、やう〳〵すこしのひまになれば、やりてにしかられ、まくらはづしてね入ば、引ふね太夫にしから

れ、そのひまに火ばしに灰に手習、その家々の風をしり覺、うたのすみつきをならひ、公がひのうちいろ、東妻などにおめずおくせずかきちらし、此さとのくる客は、これを細川三齋が長明の古今のやうにおもひ、にしき純子の風袋ひやうしを拵、助これをみやさい、ばゝが手は見事、花むらさきはたつしやなど、こよはいやみがあると、橋は卷軸におもわく、ひらき文をかきて三木サマ喬木と留て、家の帳面はやくとも此一卷は持てのく心なり、心ある人の目からわ、まわり書はびんぼう神一味連判帳と見ゆるべし、さとにても上林は女郎の手ぶりはよく、大一文字やこれに次、大坂やまたこれにつゞく、小一文じやは甚手ぶりあしく、近比小太夫といふ名花有、筆ふとくおり誠に似合ぬやうにおもひ、その人がらもそこねるやうにおもはる、揚やにて楓川などゝいふゑせもの、これをせうしがり、小太夫も自身心にかゝらずおもひ、楓川におり〳〵まわり書の代筆をたのむ事おゝし、しかし小太夫が代筆をさすはおもしろからず、兼好是をさとり、手わろしとて代筆をたのむはいやなりとそしりぬ、さすがかくに上るとやらん、毎日々々けつかうなる紙をつぶしにじるきとくに、おのづから狀つうもよく、さて内せうの手狀などのみぐるしさ、弘法大師のねぼれがき、ねんもあきないやへでも、みな相應々々にかたづいて帳面でもつける段は、さぞかしかよふかみさま申いるはこみをにこすとおもへども、客の目がちらつきうつくしうみゆる事ならんかし、ことに若き客は我手も鍛治やりうなれば、人の手のよしあし中々以てみへず、こんど夢もさめなば、ものしらがみならばと、しら地を戀してあたまをかくもおかし、

自程曰、此段は手のよしあしにはあらず、かくにもだん〳〵あり、ゐしき手にもかたことばかりにじるもおかし、よんべはのきんによはなどゝ、うつくしいかほに何とやらん似合ぬものぞかし、

〔頭注〕里雀曰、凡廻文多遠國之客、美之揚舍里之多悪客令二代筆一、

○世にかたりつたふる、まことにあいなきにや、おゝくはみなそらごと、此段は文言にうそのよそほひはみえねども、たねをまきて其木をしげくす段、味べし、

〔頭注〕空希曰、此段は卷二一卷め有べし、古書内へ次第入ちがひと見ゆれ、後は考べし、

文章は實學に妨有とは、誰人がたわことぞや、仲尼もぶんがくには子ゆう子夏とほめたり、秦漢ののち二千餘年を過て、于鱗元美出て文辭をおさむ、かよひなれしほど戀しく、それゆへいとゞ文のおとづれあらんものと、かの日ごとにゆくやどへ行て、すみけしつぼを柹油張にせし火桶、かたずみ入よくいけたるをせゝりさがし、煙草をくすべ、とせいに暇なき夫婦は、仕事しながら相手になるを、郭ばなしげに結の神の引合か、おひまはしの男、つゝしんでひとかゝげさし上る、心のうちに三度ほどいたゞき、うわ書は源樣と、たとひ親父の名當にも、橋より文のこぬことは有まじと、ふうをひらけばすみ黑にて、三木樣喬木と、其狀のかさは、御門跡樣の御臺所のひやうし木見る程に、逢ときはかたりつくすとおもへども、わかれになればのこることの葉などとかきつたへ、しばしは心がけ下されかし、源樣御さそひなく、御ひとり御こしと在こそ物よ、此狀源ス見えたらば屆て下されと賴はら、もはや未の下刻やどへかえり、錠のきびしき引出しへ入、小遣銀は出しておくとも、橋がふみはいかなこと、あらひ風にもあてず、過し比までうら打して大事にかけしキ雨子が狀は、内のこしもとにやり、手ぶりいやしく面白からずと、明暮はしが俤のみ戀しくおもひくらすは、此さとの寄さく、たとひいかなる道學先生にても此郭に入ときは、鄒魯の道はわすれいではならぬ事、いまははや源もいらばこそ、くれ過からすそつまみからげて、とぶがごとくしゆく坊へゆく、よふこそ御出あそばしと、ねぶりつくやうにもてはやし、こよひよみせ番にて、やがてしまわれますといふに、間もなく石原を蛤貝かきまわすおとたかく、橋はにかいへあがるとすきを見合、耳にさゝやき、こよひはこゝもとにとめうとも御歸りといふ所へ、年比五十計の女性一人、まへだれに目をきよろつかせ座敷へすわるを、花舍はとりあへず、これは太夫樣の御姥おみやと申ますと引合せては、きゝおよびしやりてなりと盃をさし、かねてきゝし一かくはづむ、おしいたゞき、いるりとおあそびあそばやと下へおりると、花舍は中太夫樣、とめませうといふに、橋はひとり、いやこよひははやうかえるといな、ちよとこちへと一間のかげ、しゆく坊のもめんぶとん高直なるものを、たゞで進上仕る、さて〳〵有難けれど

も、根がかりものゆへ身にならずして、禿がそばへ來て、うちがもはやしまるとてむかひがきたといふに、いにともながる橋はひいたり、酒はつめたし、あとにひとりもいられず、らうそくのしんながれ、誰がきるものもなければものすごく、よそのさはぎわらひの聲、ことにうらやましくおもひながら、花舍にわかれ駕籠にのりてかへりし、あんずるに何の用もないによびにくすは、逢たいかたゞし咄ことがあるかもしらねども、せわしうて間がなひと、かくゆる〳〵ゆかねば橋が爲にもならぬと、ねて見ても、くるわからはやふもどつたときは、ぬるひ湯にてぎよふ水した心地してきみあしく、せめて橋がたばこ成とも、うつりと吸付々々ね入ば、子供が乳豆くわへたやうに、おかしくもまたいぢらし、

小子進　此段は、我よりも年まきにて、此遊事のことを合てんせざる人のふしんを、こと〴〵く答しゆへ、箒號を小子進とおくものなり、よく意味ずべし、

小子進でいわく、此一段はみなそらごとの段と在ども、そらごとみへず、何を以篇名をおくや、

答曰、此段は、信玄はこれをすてかぎりといひ、獵師は是を醉がいと言、秦漢にはこれを柱といふ、此段をさとらば七百貫めの銀もへらず、財布に疋を入ず、しぶひ親父がかんどうはせぬことなり、

答曰、かざりとは戰場に伏勢をする事也、一兩度逢し客に、この中にしばし御出とよびよせ、あげやすゝめふとも御歸なされとすゝめ、一間におゐてちぎりをよせたるが、これてきにはにぐるやうに見せて、さきに軍せいをふせてうつのことわりもおなじ、かならずかくのごとくしてその義理をもたせ、ながく此客をとらゆるしかたなり、すべて凡夫のあさましさは、色にまよふはそのつね也、心得べし、

小子進で曰、しからば橋はかつて此客をしたふ事はなきかや、

答曰、橋が如きかうしやなる女郎の、何ゆへにかくの如き青郎になづむべきや、たとひは在中將源氏にもせよ、ふか〳〵としたふは女郎不明なり、まして青郎の徒にちぎりをふかくする道理なし、

小子進曰、先生ねがはくはおしえてよ、我くらふして不レ知、

答曰、おれわれ汝につげん、およそ人には得手といふもの在、はかくといふ角力は、鐵砲ざしといふことを答て谷風に勝ぬ、醫者にも傷寒をよくなをし、中風をよくりやうじする在、日雇にも井戸をよくほる、又は庭をよくつくるその得てあり、女郎にも面々に得て在て、西てかすときに引かけくふうあり、しほらしく色どる在、むせうにもつたいらしくする在、此橋はわかきの心得をよくしりぬ、さだめて東風にてその様いろどるなるべし、橋はかしにくるより、そばへよりて、かの一兩にて五六匁の客、薫にて客のはなのけんをとり、扨座をたちしなにあとをしりめにかけて見て、心の殘していにみす、おゝくわかひ客は年のふけし女郎をすくものなり、橋此場所に得て在て、客はそのわなにかゝる、今かりし太夫こそ心をのこしかえると氣がつく、橋がなすこと客のこゝろにかなわずといふことなし、ことにわかき客は、我とわが男ぶりになづむよりふかくはまるの失あり、

答曰、方便とは大ごとなり、得手は女郎の心の自然とそなわりしものにて、わが妹女郎におしへたいとて、おしへらるゝものにあらず、方便はすべて此さとにそだつと覺ゆることなり、天竺にて釋迦無尼和尙初て說法在て、三界唯一心心外無別法心佛と說たまひしかば、わるざれなる五百羅漢、甚以無尼和尙をさみし、わが心佛ならば別に法をきく事なしと無常遍をそしる、夫故和尙これはならぬと分別しかえ方便をとく、方便はてだて也、その道をすゝめてすゝまぬものをまねく事なり、其かみ女郎の方便は、今とはことかわり、むかしは客おゝく金をつかいて、金をついやすことをいとはずして、女郎の心いきをたゞさず、それゆへ女郎わが心をそしらるゝことを憤りて、かみ爪おしげもなく切てわが心をみす、これらにてもしるべし、いまの客は金をつかふことせちがしこく、先第一直段の高直にめをつけ、太夫をかひながら、やすふつけるしあん計、それゆへくるはのはらひも、むかしは每月ばらいなりしが、今は五節句になる、女郎もいまの風はかくべつかわり、客にだまされぬことを專一にす、今の女郎の方便といふは、先客に初くわひより內證をしつぽりとつきあひ、きやくをずいぶんわけしりぎりこがしにして紋日をくゝりつけ、狀なども古代は、太夫は三度めはやう〳〵引ふねに狀を

かゝせ客へ出ス、今は二會めは大方が太夫自筆にて出ス、いかふよひきやくと見れば、初會よりもおくる、古代は三公の御出にても、初會には揚やの上り口迄おくる、いまも初會よりおくるとはいわれず、なぐさみに行とて出口迄おくる、大紋日なればおよそ三ケ月もかよひしきやくは、きせうをおくりやる、それも我血もしぼることはあらず、端女郎などに小遣錢につまり、ゆびをつき血を出して四五十銅にてうること也、右のきせうをおとりにして紋日をたのむは、女郎の當世の方便也、ことに田舍客へは猶さら、四五十日なじむ内に、ゆびをきりかみをきり、其かわりにおきみやげに正月か七月かの大紋日をしまひてつかわすことおゝし、方便の指の切やう口傳、

成程やがて年もあき時分、しやくせんをしまひ、郭をも出しくれさふな客へは、ゆびの少計短なるをいとわず切事也、

小子進曰、女郎をうけ出し我なぐさみとするには、昔の野風吉野金太夫の類にまさるはなし、香もよくきき、茶道つたなからず、手もよくうごきて、うたもはづかしからずよみぬ、そのかわり臺所へ出して一向に役にたゝぬ風、金銀の事かつて以是をしらず、いまの女郎は、香ははなあたりへよせても、甘いか酸かめつぽうかい、茶道は宗旦と瓢旦のあいのもの、和歌文字はいくつ在やら知ず、やう〳〵すみ次覺て廻書をくろめ、一に逢事はよしかたくとも、一にひとよのふしのさゝ枕、一に萩の葉なくば、かやうなうたより外はしらず、此方から外の古歌を好と、そのうたのすみ次はまぎれて、たゞ明くれむなざん用、此月はいくつうれたると手帳をこしらへ、親かたからほうびをとるしあん、五節句前には、先やりてが方の仕送り帳をぎんみして、くろまめにてそろばんおく事也、女房にもつた時は、なる程若むらさきでもあか紫でも、すぐにまへだれがけにて身代もつのはよろしく、今の女郎はむかしの女郎よりは甚以誠あり、とかく一日にてもはやくさとを出るしあんし、それゆへよほど銀をつかひ、たいがい心いき客には、女郎もそこからまことをたてるも我身がかわゆき、凡一ケ年の内二百十日が紋日にあらず、おやかた年忌まで紋日なり、さびしければ身あがりにしやくせんつもり、しきせも七ツやへ入る、それゆへきなる物をつかひて、わけら

しき客には成程誠あり、むかしは大名も破ゐみがさも、おとことおもふとは格別の沙汰也、

小子進曰、間夫とはいかに、今もあるや、

答曰、むかしの女郎は、われゆへ身をうち、冬のひひとへ物にてふるふ男を、めをしのび逢ては、親かたにせつかんせらるゝともいとはず、又はわれをふかくおもふ男の、揚やへ行ちからなく、夜ごとに格子迄くる男を、嬉しいとおもひ心中たてる、これ間夫也、吾妻かなん與平、金太夫に友八といふるい也、今の間夫は、小間物や絹布やの手代、煙草やのむすこ、六條邊のくわしや、又は揚やの亭主か、我身のために少しにてもなるを間夫となす、これは眞實にはあらず、絹布や手代は切はしをはづし、内せうにてうるにひとし、

小子進曰、しからば此段はいかに、

答曰、橋ともいはるゝ松位が、たとひ眞實からなづみし客にもせよ、初會から打とけ咄べきや、逢たい事もとよびしは、市町の熊膽丸反魂丹の試一粒ふるまふ道理、すみやにても藤又にても、揚やにてもかくのおそれゆへ、わかき全盛の太夫とあまりおとらず、紋日をうるも此しかけにて、義理をくゝる事也、およそ郭は東しとちがひ、一寸と御げんはなれども、年わかき太夫てんじんはそのげいうつらず、此類をいくつもこしらへ紋日をうる足代也、うけ出客があらば、赤鬼の出る在所へもゆく事必せり、そとしれて知りやすし、うそともじつともおもわず、程よくあそびたのしむこそわけしり也、女郎のしら内證もといふことあり、下部には酒のますまじき段の傍に在り、ことばおおきはごもくが出るゆへ筆をとめず、

小子進曰、太夫とは何を以名づくるや、むかし舞をかなでしゆへ太夫といふといひつたふ、しかりや、請これをきかん、

答曰、昔より多説あり、今考るに太夫天神は中華にての雅名異名也、太夫古説昔平氏の盛とき、妓王妓女佛の輩舞をかなでし故、其流とて太夫の號在といふ、考に太夫は太優也、太は甚の義也、優は美稱とてきれいにやさしき形也、天神は古説考ず、俚説に言、其あたひ二十五匁故とはとるにたらず、太夫は松ゆへ、松に對して梅といふ義を以天神と、其説ちかし、考に天神は字の誤也、轉進也、其女郎繁昌にしたがふて太夫の位に轉じすゝむ也、端女郎は考に伴婌なり、端はくち

の茶やにて遊ぶものなれ共、客の座によりて太夫と一座する故、伴はとものふ、姒は美女の通稱也、

鹿戀は其名あり、其物囚、局女郎の長也、其襖局を圍とするなり、太鼓女郎は則端女郎也、凡出口の茶やは晝より夜四つ時の太鼓まで也、其時をすぐれば揚やにてあそぶ、夫故太鼓女郎といふ、太夫を迎る客は、これを招き三絃をひかすゆへ、いまに牽頭を太鼓といふ、凡其客の伽をするものを太鼓末者といふ、揚舍は楊家のあやまり、楊と揚と字よく似たり、楊は貴妃がさとなり、むかしは女郎みな揚やに出て居ゆへ、其美なるをほめて楊家々々といふ、今揚の字とあやまりとのふ、

引舟は對二新艘一云なり、

新艘は深窓なり、楊家の深窓にやしなわれ、初て出るゆへなり、禿は召總に歌舞侶と通ず、考に迦傅僂(かぶろ)なり、西方に對し二十五のぼさつに對するか、迦舞侶は天竺にてぼさつによ來の侍者なり、なを後の考をまつなり、

自程曰、此だんよく符說するなり、問にくわし、しいて贅せず、

〇そのものにつきて、ものをついやすだん、あそびもおかしきと心にりきみを出す事おかし、

富貴にして故鄉に歸ざるは、にしきをきて夜ゆくとは、いかなるわけしらずぞや、たとひばかりぎきてなりとも柳色へゆくは、四つ夜半でも、ゑもんうつくしくかざりて行べし、今はかよひなれし戀のはし、六月すみよしのまつりもかぶろがねりものに出も、あれが誰が禿、これは某が禿とよく見しり、盆もやくそくうけとり、七夕も梶のはのいわひにゆく、盆のかたびらは入らず、橋は四季ともに打かけ姿のことなれば、黑繻子に素縫、うらはひぢりめんを付、物ずき二三十兩の入用少もおしいとも覺ず、七月柳の下のおどりも、穴のあくほどヨイサアと大またにおどるを見ぬき、秋の最中も里の月見と斗口にいゝて、橋とふたりねてあかす、來年の月見はどふぞ三木樣のところで、御ふたり御らんあそばすやうにしたひといへば、橋はニットゑみ、そのやうなことならア、しんきと、嬉といわぬ計おそろしくもまたおもはゆげ、神無月ふりみふらずみ、さだめなき淋しきさとげしきに、寺寺の十夜講のかねのおと無常をつぐ、アラゑんぶ戀

しや、あきひまなき身のくるしみは、うき川たけのながれのみ、おひくる紋日はあてもなく、人こそしらね乾くまもなき、袖のなみだながるゝ月の影、おしき年の名殘もはや程なく、霜月の御火たき時分とて、中堂寺の涎くりどもが、紙袋以てみかん萬頭餡やおこしに戀する比、松明殿の火かげも、むねにこげつき、アラよひ客ほしやノゥ正月をたのまんものとおもへども、さとのけしき物すごく、洞すじの茶見せのむしろに霜をきそへ、かごの寄場のあんどうかげ、寒さまさりて心うき、女郎の夜見せに暮のむなざん用もあいがたし、やかたのすゝはらい事はじめもちかづけば、す、いづくへいづるあてもなく、俄に梅職(てんじん)に下第せふおやかたは仕きせの物ずきせよとて、やり手にとわとも、おやかたがてんはせまじ、よし揚手をさいかくして身あがりはすべきなれど、庭せんにこまり入、いかなるすぐ世のつたなきや、そのかみ柳色のさかんなる時は、春二月三月比に遠國の客が來て、此さとにちぎりをおしみ、おきみやげとて、來年の正月などをやくそくし、または新ぞうを出しかえりぬ、當時はいなかもわけしりになつたか、中々がてんせず、それゆへにいろ〴〵心をくだけども、何分相手仕ごとなればせんかたなく、七月も何事なく賴しうへ、また正月もいかゞながら、せひなくかのたしなみの血をしぼり、あしきやまふをうけんと、おそろしきそらごと、土佐坊がいとこぐらひ、いつそ今にては御前よりほかの殿達に、あふことがいやになつたとさし出せば、まづ〳〵難有、ちくせうのあさましや、もはや源にかくす心になり、景清が觀音の像を首にかけしやうに、俄に赤地の錦の袋をこしらへ、紅の紐たうとく、何の無益なることに金をついやし、晝夜はだをはなさず、五七日が間は、よろ〳〵これをどく誦するこそ難有けれ、程なく正月の事をたのむ、口上はいつも正月は廣しまの客と加賀の殿達と、たがひに出してもらへども、かふ御前に逢てから、夕かたあそびに出ても、こゝへばかり來て、外々の揚やへはゆかず、かげでは橋はふかひきやくが出來て、こゝらへは見へぬといふげな、たま〳〵ゆけばいなかほつきする、正月の事毎のとほりよひやふにいふてやつて下されとたのむ、いや御ざうさな事かけるもきのどくなれども、正月はやかたにもいにくひと、引にひかれぬ所

へ、時分はよしと亭主花舍まかり出、旦那樣へ御願有、此正月は何とぞ太夫樣を私かたへ出しましたひ、尤かし盆もなされて進ぜられしに、また御願もきのどくながら、わたくしかた外に正月御やくそくの御客もなし、外分かた〴〵と、花舍もろとももみ手を、やりてもはしり來り、いまさら外へ御賴もいやと仰、ほうばい女郎サマがた、親かた、此町内にも正月は太夫サマはこゝへ御出とおもふている、殊に太夫樣も外へは身にして御いやそふな、アノやふな御客にすききらひの出來れば親かたのめいわくと、きやうとひことをいゝ出ス、しからばいかやうともせいにざつと物入、そのうへに橋がたちしあとに、やり手はそばへより、盆にしんぜられた小袖を、御物ずきがよひとて、みな〳〵ほめもの、また此正月にもとは御せわな事を御まへにさしますはいやとて、橋サマの內せうにて出來ますが、おもては唐どんす、うらは緋ぬめにかくし、紋に御まへの御紋がつきますといふに、これもきいてはいられず、それも少しいはねばならず、我紋を付てくれるそのうれしさ、金の入ことはかまいなし、揚やのもちつきからだん〳〵と續て、庭せん揚代やりて引ふね禿門番までの祝儀、まことにはりを藏でもやしきでもうるに程ちかく、元日は旦那寺へ禮に行て、それからすぐに上下は道にあづけ、二日は大谷參がよひ首尾、三日にはうたい初、四海波しづかなるより、二階の衣かうに衣服をかざり、歌かまた橫づちまでかざりしをみて、高直なる人形、寶びき、手まりを禿にかふては、やり手が京へ正月に遣る糸入じまのおもてまでも、こと〴〵く調るはいかなる柳色の妙術ぞや、たゞまゝならぬわうちの首尾のみなり、

自程曰、此ものをついやすとは、あそびの事はみなわかきときは遊ぶならひ、上下の別なく、二十の錢を北野の松の陰にかぞへ、六十四文の錢を床を出て扇の地紙なりにおき、又天秤でかけてやるも身ぶん相應なれば、さのみぎよふさんにもなし、おひぼれが妾宅めしたきにはらますもしかり、そのついへとは、やくにもたゝぬものに、錦の袋をこしらへ、わづかなれども大なるあまみ有、わがなじみの女郎の紋をきせるに付、または煙草入に付るは、おかしくもまたせうしなり、女郎の身にならばさぞ

とおもひやる、或沙門云、治郎をもてあそぶもの有、かならず顔みせの衣服をこしらへつかわすことあり、しやく門においてしいて笑ことなし、答曰、かほみせの衣ふくは、女郎に盆正月の仕きせとおなじ、沙門のあそびに、ひげのあと蒼々としたる治郎に、四條の夜みせにて、人形などを調てやるは甚以馬鹿なり、治郎素人たがひに客にかわせ、よく日またそのみせへかへし、代銀をわけどりにするとも、ほのかに是をきゝぬ、

新つれづれ草 終

茶人つれづれ草

此記は、はじめ如心齋の門人何某の隱士の述られしとかや聞へし、むかしの兼好法師のつれづれ草のふみになぞらへて、茶人の茶の風流の雅俗を、いとおかしき筆のすさみにかゝれしゆへ、本のまゝにちりばめしなり、

省吾庵主人

茶人徒然草

○つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし茶の湯にむかひて、よしなし道具を、そこはかとなくかきあつむれば、あやしうこそ物ぐるをしけれ、いでや茶の湯にかゝりては、ねがはしかるべき物こそおほかんめれ、古せとの御位はいともかしこし、破風の茶入のそこ迄も、國やきの土ならぬぞやんごとなき、一代目の樂のありさま、いふもさらなり、二代目の内の取かた、高だひきはゝゆゝしと見ゆ、のんこ其子までは、はふれにたれど、猶はたらきたるだけいやし、夫よりしもつかたは、程にふれつゝ時にあひ、持主はいみじと思ふらめどいとくちをし、宗味ほどそんなる物はあらじ、人にはわき釜のやうに思はるゝよと、或人の言けんもさることぞかし、常夢ひじりの言けんやう、名聞ばかりにて、眞のおしがたにたがふたるなり、あかりの人は中々あらまほしきかたにもありなん、樂はかたち土ぐすりのすぐれたらんこそあらまほしけれ、目出たしと見る樂の、本性しれぬこそ口惜かるべけれ、品かたちこそつくり侍らん、土性などうつしてもうるべきや、よき人に立まじりて釜かけ、似せものにて見をとさるゝこそ本意なきことなれ、ありたきものは眞の道具、眞蹟、又由緒ある道具こそいみじかるべけれ、手などつたなからず、はなし面白く、下卑ならぬこそ茶人はよけれ、

○いにしへ宗旦のわびをもわすれ、家のそこなわるるをもしらず、萬にきよらを盡して、いみじと思ふ人こそうたてけれ、茶入より水こぼしにいたるまで、あるにまかせて用ひよ、美麗を求る事なかれとぞ、藪の内の流には申侍る、

○萬にいみじくとも、茶しらぬ人は、いとさう〴〵しく、名物の茶碗のそこなきがごとし、

○花いけの露かわく時なく、釜の湯氣立さらで住はつるならひならば、いかに道具の味もしらざらん、定めなき世に、久しき物は道具なるものなり、茶巾の早くよごれ、ひしやくの春秋をしらぬもあれど、あかずをしと思はゞ、千金を出してもひとつの名物にはかへじ、佳人多き中に、見にくき道具にて茶を敎へ、間違ひたる手前を習ひて何にかはせん、永くならへば

耻多し、餘所へも出さぬ指南こそめいわくなるべけれ、

○世の人の心まどはする事、ほり出しにしかず、人の心は愚なるものにて、しめ切などは唐ものなるに、このごろ八幡ににせものすとしりながら、えならぬかたちには、必こゝろどぎまぎする物なり、金字仙人の萩の志野に似たるを見て、目をうしなはれけんは、誠に藥あぢ赤みありて白く、かうだひのあたり和らかにして、白藥たまりたらんは、外の色ならねばさもあらんかし、懸物は紙のめでたからんこそ人の目のつく事なれ、墨色は心より出る物なれば、うち見るにもしらるれ、ことにふるき紙の贋たる人をまどはし、敷寫しの似せも厭離しつべし、其中に彼ほり出しの一つやめがたきのみにぞ、老たるも若きも、目利もきかぬも、かはる所なしとみゆる、されば名人の拵し虫入には、大庄もくわされ、上手の寫せる三筆には、宗仁もはまられ侍る、愼むべきはほり出しのまどひなり、

○周防殿の釜日には、他の人を見させまじと、弟子も他へは出さず、繩ばりせられけるを、或人が見て、客の至らん何か苦しかるべき、この人の心もさばかりにこそとて、其後は參らざりけり、後に聞ければ、幾の弟子を他へ取られん事をかなしまれけるとなん、

○神無月のころ、堀川のあたりを過ぎ侍りしに、はるかなる露路のほそ道をつけ、心きよく住なしたるかこひあり、茶の湯につかはるゝ八百屋ならでは、餘の商人も音なふ事なし、奥の庭には菊紅葉抔折ちらしたる、さすがに心ある人と見へたり、かなたの庭に大なる手水鉢の前に、東呉と文字居れり、少し事さめて、此手水鉢なからましかばと覺ゆ、

○一つの燈のかげに書を置き、見ぬ書の箱を並べたて、文は文選徂徠文集、老子のことば南華經、此國の博學どもの書けるがくなどかけならべて、ひとつも物のよめざるは、あはれなる事多し、

○茶の湯ほどおかしきものはなし、あやしのさゝゐ籠も、さいろうといへば面白く、おそろしき牛も香合にあればとうとく成ぬ、此ごろのさいろうは、一ふしづゝ組直したりと見ゆるはあれど、古き唐ものどものさま〴〵手のいらぬはなし、常夢が糸を撰り物にまぎるゝ古金襴と似せしは、古金の中の屑にも及ばずといへど、今の世の織出しに及ぶべきは見へず、其

余の贋はすがた下地にも大きにものを入たり、

○御菓子こそよろしからまほしけれ、大かたの所の釜日には、松葉、金米糖、唐松、しんせん豆、かきもち、常に用ひたきは羊かん、かすてら、

○薮の内は、をのれをつゞまやかにし、をごりをしりぞけるといゝたて、道具を持たず、世をむさぼりてかた意地なり、昔よりよき茶人に薮の内にはなきなり、六條に法光といへる人は、さらに道具もなくて茶の湯したり、或人あまりにむさきを見て、ひさごなりの水さしをあたへければ、ある時の夜市にかけたり、餘程の直に成けるを嬉しとて賣りつ、もとの道具にて茶を點じられける、紹億は冬の月に人參りしに、助炭を向ふへ押のけ、炭斗をも又其際に突やり、手水も遣はず茶をたてられける、是をいみじと思へばこそ人にも敎へけめ、是等の人はかたりもはべらず、

○折ふしの時の花かはるこそ、物ごとにあはれなれ、ものゝ面白きは、さびこそまされと人ごとにいふめれど、夫もさるものにて、一と際心もうきやかなるは春のごとく染付物にこそあれ、雲堂のあいのしぼりたるに、月に人ありて紀三井寺とよぶもおかし、すゞめの啄のあき甲悉とびぐすりある、むき蜜柑の葉の多き、茄子たつ瓜色こく、玉堂の佳器ははるかをとりたれどもうつくしき、はりこふ牛菱牛嘉清金襴手萬暦、虫喰の中にも名物あり、屏風箱橋杭呉洲は染色もおぼろにて、周茂叔もみぢ柴かり、其外は皿鉢の手の數々、中渡りに至るまで萬に唯心のみぞ付べし、橘は名にこそをへれ、山吹の名にをとらめや、老僧滿月雪の下は吾妻に名あり、喜左講落金地院其外名物はいふもさら也、青井戸の若葉の茂る如き、そばかす脇井戸までもかう臺に藥かゝらぬなきこそ井戸のしるしなれ、皐月ならで眞熊川の土を見せたる、枇杷の色に白露のごとき藥きらめき、河潤道の上品なる薄墨色の及ぶ所にあらず、泥や鬼熊川後熊川のならぶべくもあらねど、何れもはたぞりにて茶たまり有て、香臺の土を見せてりゝしきこそつねならね、水無月の水の色、青磁の藥をあらはし、礎の淺き辿へんかたなく、天龍寺の風流さゝげづる、鯉耳八卦錫杖形にてはわからぬと、浮牡丹の花清らかに、人形手の下葉色づくがごとく、ひしほのあかき土の見へたる、福州のしら土までも野分けのあしたの如し、云つゞくれば皆

商賣往來入札の帳面に似たれど、又いはじとにもあらず、冬枯の氣色ふしぎのさびたるありさま、落葉のしるし有こそ、縄すだれいと淋しく、しめ切の寳珠は梢にあらはるゝ塔の如く、南蠻頭巾に寒さを防ぎ、澁薬の枯葉の如き色をなし、瓶のふたの氷とけもやらず、はんねらの土うごもてり、芋頭世にをこなはれ、木枯の氣色さびわたり、果は松たてわたしたる中の海老手も、只この名の物こそほしきと云しも、さもおぼへぬべけれ、

○萬の器は判見るこそ面白けれ、或人の〆ばかり見やすきはあらじといひしに、又一人露ほどもちがひある物なれば、筆法すくなき程却て見るべしと、あらそひしこそおかしけれ、形は華押藪にも出侍れど、筆には盡しがたし、只山のみこそ人は心付めれ、されば原叟日夜に東流し去る、京人の爲にとゞまる事一つもなしといへるにて、吾妻にこそ多く賣れ侍れ、其外諸の書付ふんだめはうつし多く、漆がき油斷ならず、利休石州正眞少し、漆書判さへ墨がきのかすり多き、こゝろよかるべし、

○咄齋の不審庵に おましませし時こそ ゆかしけれ、正傳の有樂の圍、腰ばりさびたり、高臺の遠州利休の亭は後作のよし、妙喜庵の妙なる道安座敷、宗貞の奇なる宗全の兩面座敷、織部殿の圍の刀かけ高きも、故ある事のよし、八つ窓のまどの目にたゝざる、すべて圍こそふりたるを尊しとするにや、今日庵又隱またしめでたし、

○靈山の入札の年ばかり哀れなる事はあらじ、いろいろのたから板敷にさげ、よしの簾にて棧敷をしつらひ、布の風呂敷あらく敷御調度もとゝのへて、皆人はこぶありさまぞゆゝしき、

○船久の數寄家造り出されて、有職の人らに見せられけるに、永元院殿御覽じて、何條客の中を通り水屋へ通ふたてやうやある、勝手なきにこそ、しかも廣きにと仰られける、豊田殿刀かけの竹五つくりたるを御覽じて、侍三人は呼がたくと仰られける、

○村德が大もふけすれども、口の程やかましく出過たるもの也、武藏國江戸あたりにては、所の者下手賣と申侍るとぞいひし、

○手前わろき人の憚らず釜かけちらすは、よし見とりなればとて、人にばかりかけさするはちからなし、

○或人天然上人に、夜市の時、直打におどされてものをかぶり侍る事、箇條の事いかゞ侍らんと申ければ、目のあきたらむ時、求め給へと答られける、いとたうとかりけり、又直段は一定と思へば一定、不定と思へば不定なりといはれけり、是もたうとし、又うたがひながらも、ひたとかひかゝれば、後には目のあくといはれける、是もたうとし、

○田舎のうちに、中の入道とかやいふ人の、茶の湯規矩よしと云て、近所の何もしらぬ人、あまた入來たりけれども、此茶人只規矩のみ言て、よね鉢に杓子を入る入れぬなどばかりの事言て、更に外の茶の湯をしらず、かゝる此ごろの茶人何しるべきにもあらずとて、人ゆるさざりけり、

○唐橋の邊りの武士の子に、雪舟僧都といふ僧ありけり、鼻の落る病にて、年の漸くたくる程に顔中はれふさがりたり、夫もかまはず方々茶席へ行れける、人人さしむきて言ねどもうるさがりけり、後には目眉などはれふさがり、二の舞の面のやうに見へけるが、たゞおそろしく鬼の顔の如くなりて、後は坊の内の人にも見へず、茶席へも出られずとなり、僧にもかゝる病も有事にや、

○東寺の末下に、神泉僧正と聞へしは、きはめて口あしき人なり、むかしは坊の前に柳の木ありければ、人柳の坊といひあへり、此柳いつしかなくなりければ、其ほとりの池の有けるにぞ、人々いけぬ僧正と申けれ、

○上京邊に、庭をつくりてこのむ常印といふ茶人あり、度々庭を造られしゆへ、皆人庭造りとばかり申ける、

○或人横山へ參りけるに、出たる物くさひ〳〵と申ければ、何事をかくはの給ふぞと問けれども、猶言やまざりければ、あるじ腹を立けるにぞ、かく申さねばあまりかづき給ふと申せば、藪の下に薩摩屋殿、只今法師にておはしますが、今や鼻の下ひあがり候はんと申されし、

○まけ來りて賣んとするものを買事なかれ、古しといふもの多くは是わかきものなり、はからざるにあき起りて賣んとする時にこそ、初てあやまる事としらるゝなり、あやまるとは他のことにあらず、高く買ふべきものを、安くかふゆへに、過にし事のくやしき

なり、

○凪も吹あえずちらしやすきは道具なり、花となれにし重寶を、人にわたさん事本意なかるべし、されば大宮院百種の道具の中に、

むかし見し井戸も唐津もなかりけり
百目ばかりのとゝやのみして

殘り多きけしき、さる事侍りけん、

○家屋敷ゆづりの節會おこなはれて、九穗の內儀所かへし奉るゝ程こそ、かぎりなふ心ぼそけれ、身上おろさせ給ひてよませ給ひける、

道具かひ道具のしろは餘所にして
はらはぬゆへにかけぞちりしく

今の世の人心、東洞院へは參る人もなきぞ淋しき、かかる折にぞ人の心もあらはれぬべき、

○寶曆のころ、島原より禿の茶人なるを見せると云事ありて、其比二十日ばかり、京近邊の人彼茶人見んとて出まどふ、上の町棧敷のあたり、更に通りうべうもあらず立こみたり、かく立さはぎては、はては闘論おこりてやかましき事どもありけり、そのころをしなべて、若きもの二三日みへざる事あり、彼茶人につられ居つゞけしたるにぞといふ人侍りし、

○疇田寺に、或法師年よるまで茶の湯しらざりければ、心うく覺へて、ある時思ひ立て唯ひとり六條よりかよはれける、竹臺子高麗卓、をの〳〵覺へて、扨かたへの人に逢ひて、年比思ひつる事はたし侍りぬと、炭取より茶を點るまで見せらるゝに、年老たる法師の、角前髮のごとくひぢをはり、きく〳〵とやらるるりつぱなる茶人なり、先生はあるべきものなり、

○是も疇田寺の法師各あそぶ事ありけるに、師匠、とかく釜あぐるに、五德のはなれ心よくいかぬものなり、心得あるべしといわれしより、或釜日に大勢の中にて茶たつるに、炭取持出、扨釜のあげやうこゝぞと、鼻をひかめ顏をしかめあげんとするに、思ふよりはあがらす、頭に筋いだし、いきもつまり、一座の氣もつきたり、いりほか成よりかゝる事もあるにや、からきめにて漸五とくはなれけり、

○人の語り出たる茶の湯話しの、道具のあしきこそ、ほゐなけれ、少しにても茶の合點ゆきたらん人は、いみじと思ひてはかたらじ、梅田とかやの茶の湯、近衛殿懷紙小丸釜を釣り、宗全手造の香合に、井戸筒茶わ

ん、利休とも筒の茶杓、時代のなつめ、かくしまらぬもなし、
○獻立の後は、家具をむねとすべし、飯はいかなるものにももらる、あつきもの皿にはわろし、深きもの燒ものわろし、あさくて長きかたよし、こまかなる鱠、染付によし、内の黒きはすましにわろく、内の赤きはねり味噌あしく、用ひにくきなりを用ひたるは、見るも面白し、菓子椀はよろづの用にも達てよしとぞ人の定め侍りし、
○武者小路に、宗哲僧都とてやんごとなき茶人ありけり、さねがしらといふものをこのみて、若きときより多く喰らひけり、不斷の茶席にても、膝本に置てくひけり、煩ふ事ありて三年療治とてこもり居て、思ふやうにさねがしらをくらひ、漸病いやしけり、きはめて貧しかりけるに、師匠死ざまに坊の柱一本ゆづりたるを、柱を四貫五百目にうり、彼是とくひあるきけり、又棗七百を拵へ、京なる人にさづけて東西ともにくひける程に、其銀みなに成にけり、七百の棗をこしらへてかくはからひける、眞に欲どしき道心者なりと人申ける、この僧都ある誹諧の師の見て、黒ぬるりと申侍りしに、とは何者ぞと人の問ひければ、はげるものを我もしらず、もしあらましかば、彼ひかりが顔に似んとぞ云ける、此僧辨說人にすぐれて、少し歌學あり、誹諧に名あり、千家の法燈なれば家にてもおもく思はれたりけり、世の人を輕んじ、いき過ものにてわる口を上手に言なし、大かた人に隨ふといふ事なし、午時夜話しにも定めてゆかず、才智を以てうそつきありく、幸にして人にゆるされけり、惡のいたれるにや、
○大會の時こぼしこぼす事は、定れる事にもあらず、建水たまるゆへなり、たまらねば此事なし、多くは大勢寄合事、常にしも下京に度々なり、百ぷくだての事いかゞ仕り侍しにや、
○交趾門院のわかくおましまし候は、紫ぐすり、柘榴黄欒の類なりと仰ける、御歌に

ふたのうへ牛と布袋とせに龜と　菊牡丹より鴨はわかきぞ

たぬきも古くはましまさずとや申き、
○五德目の五つばかりは何にもよらずよし、物によりて三つ四つもよし、餘り多きはわるきとあるべきと

仰られし、此比のさはり、昔よりはるかに高く成たるなり、こぼし棒のさき、紫銅白銅又よし、古代の抱揃持たる人いまはまれなり、

○市の會本講本は、平久六彦なり、人の常に言立る事なり、一年茶の湯出されしに、買たる道具ども過ると、其まゝ賣られしとなり、六彦はみだりに賣買する人と聞しに會本なり、猶限りの近ければと申侍る、ある和尚のうたに、

月をめで花とながめし道具ども
　　買ふかとすればどこにありはら

をのれらよりは中々よき茶の湯はあるまじと、うやうや敷き體なれども、茶人にてはあらず、道具のひずみにて人の口にもある事多し、

○加賀に宮の越しと言もの有けるが、道具を萬にいみじき物と思ひ、年ごとに多くめしける事年久敷なりぬ、或時浪花北濱の戰ひに敗北して、敵をそひかこみ責けるに、館の内兵どもあまた命をおしまず戰ひて、ついに敗北を取かへしけり、いかなる人ぞと問ひければ、年ごろ折々召つる士道具等にてさふらふと云て、道具は殘らず失にけり、ふかく好めばかゝる德もある事なり、

○慶長のころ、名物の井戸破れし折から、小堀遠州むぐらのもやうをかゝせて、われを付られければ、其後家具どもの葎のもやうはじまりけるとなん、

○名に聞へて、係までをしはかられ、茶の湯に行て思ひ出るまゝの人こそなけれ、昔の茶人も、この比の誰誰ほどにかあらん、今見る人の中にも、宗左宗室などは今の人のむかし忍ばしく思ふごとく、後々の人も思ふらめ、只今の人目に見るうちは、さほどにもおぼえず、いつとは思ひ出ねども、正しくむかしの人を思へば、いまもまた後にはかく思ふらめ、

○いやしげなる道具の多きは、菜籠の炭の多き、三重棚に道具の多き、二客三客の詞の多き、文の懸物に茶の事多き、多くて見ぐるしからぬは、水指の水、砲烙の灰、

○蟻のごとくにたかりて、表へ行裏へゆき、高きあり賤しきあり、老たるあり若きあり、行ものあれば歸るもあり、上の稽古日に行きて何事するにや、名をひけらかし傳授を求めて止む時なし、左やうにして何事をかまち、期する所はたゞ茶の湯に有り、其稽古に來

る事は度々なれども、念の間にとゞまらず、手前ばかり覺へて何の樂かあらん、まどえる人是をしらず、名利僣上ばかりなり、規矩手前ばかり覺へたる愚人は、夫を樂と覺へて變くわの理をしらず、世の覺へはなやかなるあたりに釜かけ樂に、人多く行き訪ふ中に、聖り法師のまじりて、規矩手前のよしあしいひたらんは見ぐるしくこそあれ、違ひたる事ありとも、法師は茶にうとき顏にてこそ有度事なれ、

○世の中に、頃日もてあつかふ且座花月など、よく案內しりて人に語るこそうるさけれ、僧法師の茶あるものを、世の人と同じやうに手前をそしり、規矩の噂さするは、いかに茶は疎きにや、いかでかくはしりけんと、人の思ふ程にいひちらすめる、箇樣の人はいかに事知りたりとも、まことの茶の湯はならずと覺ゆめり、

○法師の身にもあらず、上京下京に茶を好むひと多かり、百度亭主して百度客をせずんば、茶人の部へは入がたし、其故は變に乘じて茶の湯を出す事、手前ばかりにては成がたし、茶の湯を心安くして始て名をあらはすべきなし、いけらん程は茶に誇るべからず、我流にあらずんば非を言て益なき事なり、

○屏風襖の物ずき圍の建やうにも、物ずきにて主の拙きはしるゝ物なり、大かた出だす程のうつわにても、心おとりせらるゝなり、さのみよきもの出すべしとにはあらず、珍らしがらせんと客へあてがふは僣上なり、わるふすればきたなし、こと〴〵しからぬやうに、心より出たるがよきなり、

○茶入の袋損じたるが、上品なりと覺へしは、侘しき人の言葉なりと笑へども、和久田の切ち金ぬけてこそ見安けれ、鴻池宗智が茶の湯にも、物の位を一樣に調ふたるはつたなきとて、新燒の類取合せたるはいみじ、垣なども悉く新しきよりは、古竹青竹打交りて、仕殘したる所あるこそ面白けれ、

○鍵庄といふ人、初代寒雉作の、松花堂と文字すはりたる釜とて見せられけるに、或人初代寒雉に松花堂の釜はなきものと申しゝかば、左候へばこそ世に珍らしき物とて、いよ〳〵秘藏せられけり、

○道具屋に猫またといふ者ありて人をくはせ、方々に丁稚のへあがりて猫またになりて、人くはするもの有けり、何寺とかや云僧の、壬生の會に行しに、吾

に聞へし猫またども、堅手の茶碗とて何かしらぬ物をくはせける、段々はたより直を付上るに、欲心に肝心もくらみて、やれまけてくれ、にや〳〵とさけべば、終にかの茶碗手もとへこけ込けり、内へ歸りてあたりの人に見すれば、こは何の役にたゝぬもの成けりとぞ、

○箱に緒つけること、底の内外に見へぬやうに付たるを遠州箱と申、又箱の上を黑柹黑檀などにてはぎたるも申と、有職の人申侍りし、井戸茶碗の箱に、木地の箱なきものと又申侍る、

○出雲やきといふものあり、伊良保などにまがふもの、彼やきを持たる人に尋ぬれば、則しるゝ事なり、見しりて置べし、

○其物につきて其物をそこなふもの多し、釜にさびあり、茶巾に茶澁あり、初心に安買あり、上手に伊達あり、福者に借上あり、伊賀に耳あり、三しまに疵あり、

○尊き茶人の言置ける事、一言法談と名付て書付侍る、

一買ふか買ふまいかと思ふ道具は、大方買ぬがよし、

一茶の湯を思はん人、甚兵衞やきにても持まじき也、茶碗水さしにいたるまで、脇寵持はよしなき事也、

一數奇者は、道具なくて事かけぬやうにはからひて、とりあわすを最上とす、

一上客になるは、目利者は不目利になり、辯舌者は不辯に成り、學ある人は不學になるべし、

一茶意をねがふ人は別のことなし、いとまある身になりて、餘の藝は心がけぬを第一とす、

一亭主ぶりは、客の心よくさはかず、立端も忘るゝ程の居心よくて、主はじだらくならず、心ゆるみなきこそ茶の湯の上手なれ、

この外にもあれども盡がたし、

○堀川の常幽は、道具屋のたのしみ人也、其事となく過差を好みし、少し借上なる人なり、御子何某は病身にして、帳合めされけるに、此唐櫃見ぐるしとて、改ためらるべきよし申されけるに、この唐櫃はむかしより傳りて、其元直をしらず、累代の店に置、古きを以て規矩とす、たやすく改めがたきよし申されけり、

○遠藤殿茶席にて飯めしけるに、かよひ三人前の飯持出ければ、不足なりとて山盛してぞめしける、

○佛橋寺殿にて、近所の人々目利して解れけるに、藥者の何某參られけるに、白き大壺の何の用にもたゝぬものに、花を生て何ぞと尋ねられしに、我朝の物とも見へぬ白壺かなと申されければ、價ひ二百五十文を直打して笑はれけり、

○開容上人、茶器の大ぶたを向ふへ取やうに敎へられけるを、口きける男、あしく上人の規矩を云ひなどしけり、上人いと腹あしくて、こは稀有の一言かな、上の弟子めよな、宗搦より宗拙はおとり、宗拙より宗眞はおとり、宗眞より揚甫はおとれり、其弟子の弟子たる身にて、かゝる直弟子をそしるは如何と仰られければ、口きく男、いかに仰らるゝとも、直弟子にも下手多くと申せば、上人猶いきまきて、何といふぞ、茶杓ひさくの持やうもしらぬ男と、あらゝかにいふて、きはまりなき規矩者なりと思ひける氣色にて、こぼしを持て立れけり、

○高名の茶人といふものあり、或人に言けるは、茶の湯過て和らぐ時にこそ上手下手あれ、茶たつるうちは大切に思ひ、道具仕舞取入て後、心誤り有ものなりと申されけり、

○大佛の洞雪殿茶をせられけるに、後の人に花生に椿を入て、旣に茶點せんとせられける時に、花生の底ぬけて、入子の筒落て爐のあたりへざつと流れける、こは稀有の事かなとて、立んとせられし時、勝手より下男雜巾持出ければ、をのれ座敷へゆかん事茶人にまさりて得しらじと、自身ごて〳〵とふかれけり、此洞雪殿へまかりし客ども、一人は膝口、一人は悉くぬれ、一人はごう服、一人はうとましと申されけり、

○花入茶杓の銘、よろづの物にも名を付る事、昔の人にはなし、此ごろは見たてのやうになり、銘あさましく殊の外拙きなり、目馴ぬ文字を付んとするも益なき事ながら、餘り此比は拙く覺へ侍る、宗匠あさまゆへにや、

○茶の友とする人に、面白からぬもの七つ有、一つには高き道具のはなしばかりする人、二つには脇寵ものつかふ人、三つには何もしらぬ氣强き人、四つには變好む人、五つにはせんじやうなる道具屋、六つには吝き人、七つには自慢する人、よき友三つあり、一つには物數奇いはぬ人、二つには好事なる人、三つには學文ある人、

○鯉のさし味、茶にはあはぬ物となん、二の膳に專ら付るものなればつかひにくし、鳥には雉は鴨より面白し、大鳥は茶の湯に拙し、殘りを二三度にも遣ふやうにて悪し、小鳥の類よし、松茸などはつかひやうあらめ、今の茶の料理、大方けし菜、かひわり、はたけ、な汁、吸物にちよろぎ、松茶、菓子碗、蓴さい、なめ茸、香のもの、鉢にさかなと取合せたる、八寸にからすみ、木の葉鰈、しぐれ蛤、はか〴〵敷人さふらはぬゆへにこそと、さる人申されたりけり、

○鎌倉彫に辨藏と云ふ者、左右なきものにて、此比かぶるなり、獨樂のちひさきに、きんま甚だまぎらはし、是もさる人の申せしは、かやうの贋ものむかしは仕出さず、世の末になれば、いづかたまでも入わたりけるにこそ、

○唐物は藥種の外は新渡いらぬものなり、昔より多く入わたりたり、又得がたきを尊むも愚かなり、

○初心なるものは規矩を以て茶とし、功者なるものは茶の湯を以て茶とす、そのが分をしりて及ばざる時は、やむを智といふべし、分もしらで自慢する人多し、初心にして分をしらざる人は、人の言し事を盗み、功者の分をしらざるは、そしりをうくべし、

○室町の澄心律師とかやいふ人、ある時鏡を取て顏をつく〴〵と見て、餘りに我顏の見にくきとて、太夫買を思ひとゞまりけり、難有覺へしか、其後茶室にばかり籠り居て、世間の茶を嘲り居たり、されば顏は鏡にうつれども、茶は何にかうつらん、數奇家圍の茶の湯、なるほど茶じみたる茶人なれども、廣座敷の伊達なる茶の湯は、一向ならぬ人なり、我をしらずして外しるといふ理りはあるべからず、そのれを知るを物しる人と云べし、道具ども拙からず、手跡も心掛よく、茶の道もなみ〳〵ならねども、鹽からくじみたると言事、かゞみにうつらねばしらざるにや、されどもかほどの數奇者も今はまたまれなるにや、

○或茶人朋友にむかひ、わぬしの問れん程の事、我何事成とも答へ申さんといはれければ、彼人答いふやう、我いまだはか〴〵敷事はしらねば尋がたし、はしりまはりのそゞろごとの中に、いぶかしき事の候、尋ね申さんといひければ、ましてあまた事は何事も申さむと云はれける、こは興あるあらがひなりとて、人人息をつめたりしに、彼人きんまのまといふ字と、い

らぼのいらぼ如何かきはべるやと尋ければ、其人はたとつまり、是は何の用にたゝぬ事なりと申されければ、さればこそ、深き事は存じまさずとはじめより申せしと申されければ、其人まけにどよみあはれけり、

○山田雪明、茶席にて柳坊と話せられし中に、辨才天の財の字もあり、才の字もあるといふ話しに成たるに、柳坊申されけるは、先辨の字も、第一に中を言此字にかき候、又リの字はあしく候と申されたり、才の程まであらはれたり、今はさばかりにて候へば、ゆかしき所なしと申されけり、

○茶かけて後、遊金ありて道具につかはんとせば、所願はつくべからず、わづかの身代にて何事をかなさん、すべて皆妄想なり、所願心にきたらば、妄心迷亂すと知りて一品をも買ふべからず、直に萬事を放下して茶道に向ふ時、さはりなく所作なくて心身ながくしづかなり、

○八つに成し年、人に問て言、茶人はいかなる者にか候はんといふ、人のいはく、茶人には功者のなりたるなりと、又ふ問功者とは何としてなり候やらん、人又茶人の敎へによりてなる也と答ふ、又問ふ、敎候ひける茶人は何か敎候ひけると、又答ふ、それも又先の茶人の敎に依てなり給ふなりと、又問ふ、其敎はじめける第一の茶人は、いかなる茶人にか候ひけるといふ時、其人は家よりや賣けん土藏よりやうりけん、野郎の増長して成給ふなるべしとかたりて興じき、

茶人つれ〴〵草終

難波常雄
田口重男　校
文傳正興

近世文藝叢書第七　終

明治四十四年八月廿五日印刷
明治四十四年八月三十日發行

（近世文藝叢書第七與附）

非賣品



編輯兼發行者　東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會代表者
早川純三郎

印刷者　東京市京橋區新榮町四丁目三番地
高橋赤次郎

印刷所　東京市京橋區新榮町四丁目三番地
國書刊行會第一工場

